# 新群書類從

第五

# 例言

一義太夫節の流行を極むるや、世人これを當流と稱し、其れより以前行はれたる諸派の淨瑠璃を目するに古流を以てせり。蓋し當時にありては、義太夫節は最も現代趣味に適し、他は既に時代後れとなりたればなるべし。而して義太夫節の斯く現代的に發達したるは、一に近松といふ作者を得たるにあれば、近松はさながら淨瑠璃の今古を分劃すべき境界線なりしなり。されば古淨瑠璃といへば、近松以前のものを數ふ。本卷また此の意義によりて、材料を選擇せり。然れども義太夫の正本のうちにも古淨瑠璃數多あり、又近松が未だ名をなさゞる間、加賀掾の爲に作りしものにて、古淨瑠璃中に混入せるものあり、これらは例外として本卷中に蒐集したるもあるべし。

一排列の順序は成べく年代に從はんと欲したれども、年號のなきもの十中七八、多少前後の相違は免れざる所也。又流派の不明なる正本もあり、唯版式體裁等より區別を立つれば概ね次の如し。

『四天王高名物語』寛文二壬寅年七月吉日
『賴義金剛山合戰』同　三癸卯年正月吉日
『釋迦八相記』同　九己酉年七月吉日
『善導記』同　十庚戌年彌生下旬
『日本王代記』（延寶二甲寅年正月中旬　井上播磨少掾藤原要榮正本）
『玉津島の御本地』延寶五丁巳年正月吉日
『四天王大田合戰』（寛文二三年頃の版）
『舟いこん』同
『賴光跡目論』同

右のうち『王代記』の外八種は、何れの正本なるかを詳にせず、又『聲

曲類纂』等にも外題の見えざるものありて、其所屬分明ならざるも、『王代記』と同じく細字の繪入本にして版式、挿繪、體裁等共に相似たる點より考ふれば、恐らく井上播磨掾の正本なるべし。播磨掾は虎屋源太夫の門人にして、寛文より貞享の間大阪に盛名を走せたる太夫なり。有名の義太夫(後に筑後掾)は實に其の流れを汲めるものなり。

『津戸三郎』　宇治加賀掾正本
『義經追善女舞』　同
『愛染明王影向松』　同
『酒天童子』

以上四種のうち『酒天童子』は署名なきも、他三種と共に加賀掾の正本なるべし。加賀掾の正本は概ね八行本なり。(加賀掾に至りはじめて八行本の板行あり)年號は記されざれども貞享頃ならん。加

賀掾は紀州の産にして、井上播磨の全盛を見て別に一流を語り出し、京都に赴き宇治嘉太夫と稱し、延寶五年加賀掾と改む。所謂宇治淨瑠璃の祖にして貞享、元祿を盛時とせり。

『隅田川』　山本土佐掾正本
『善光寺』　同
『清水觀音利生物語』　松本治太夫正本
『出世太平記』　薩摩外記正本
『念佛往生記』　竹本筑後掾正本
『をぐりの判官』　未詳

山本土佐掾は虎屋源太夫の門人（或は伊藤出羽の門人又伊勢島宮内が門人ともにして、始め角太夫と稱す。（角太夫節とは此人の淨瑠璃なり）大阪より京都に移り、延寶五年大和掾と改む。松本治太夫は初名菅野傳彌、貞享、元祿の間行はれたる太夫にして、山本土佐が門人なりといふ。薩摩

外記は二代目薩摩治郎左衞門が門人にて、初名小太夫、貞享、元祿頃江戸に榮えし太夫なり。竹本筑後掾の事は世洽く知るところなれば略す。『をぐりの判官』のみは何人の正本なるかを詳にせず、されど文詞の古雅なる點より推すに、本卷中最も古き淨瑠璃の一なること疑ひなし。恐らく明暦、萬治頃のものなるべし。但し原本は貞享、元祿頃復刻の八行本を用ひたり。

『名古屋山三郎』　土佐少掾正勝正本
『京四條阿國歌舞妓』　同
『土佐日記』　同
『對面曾我』　同
『芳野の內裡』　同
『源氏六條通』　同
『定家』　同

『三世二河白道』　同
『源氏花鳥大全』　同
『賴政』　同
『和國女眉間尺』　同
『傾城三國志』　同
『博多露左衞門色傳授』同、

一以上十三種は土佐少掾正勝が正本なり、土佐少掾はこれも二代目薩摩治郎左衞門の門人にして、寛文、延寶頃の江戸の淨瑠璃なり。世に土佐節と稱するはこれなり。原本には寶永五年『小傳馬町三丁目木下甚左衞門』版行の八行本を採用せり。

以上の古淨瑠璃は、正本の所屬を知るのみにして、何人の手にありしものか其の傳を得ず、されど文辭の蕪雜なるもの多き點より考ふるに、當時は別に作者といふものなく、淨瑠璃太夫が必要

上、古き物語又は繪巻物等にある話の筋を正本に綴り、語り傳へしを版行せしものなるべし。これを熟讀玩味するに及び、江戸浄瑠璃と京攝のものとの對照を得、其趣味の東西濃淡あるを發見する時は、更に一層の興味深きを覺ゆ。

一節附(フシヅケ)を嚴密に傳へんとするは、雕刻上極めて困難なる業にして、原本の儘を木版に刻するか、寫眞縮刷を以てするか、此の二途に出づるの外なし、今日の活版印刷の業においては、未だ斯の如き精密なる技工は、望むべきにあらざるが如し。強ひて之を試みんとするも勞多く、たま〳〵誤りを後に傳ふる恐れありて、益する所は甚だ少なかるべし。或は符號の部分だけを省き、活字に應用の出來得る範圍において、文字の節附のみを存すべしとの說もあれど、既に符號の一部を除く以上、節附其ものゝ不具なる點においては、到底五十歩百歩の憾みあり。依て訂正者は最初之を全廢

するの方針なりしも、事情は之れを許さず、たとへ節附としては何等益する所なきも、讀者の便宜上地、詞等二三文字に屬する節附を存することゝせり。『清水觀音』の如き寫本によりたるものは、時として誤字脫字なきを保せず、又シラミ本には節附といふものなし、されば本卷も一小部分の節附を存したるものと、全く無きものと二種ありて、體裁の一定せざるは蓋し止を得ざる所なり。

一淨瑠璃の文辭は普通の文法を以て律すべからず。否、淨瑠璃には寧ろ淨瑠璃の語格あり、讀癖あり、假名遣ひ、字遣ひ等凡て法則以外、別に法則ありともいふを得べし。たとへば義經とありて、或場合にはギケイと音にて讀ませ、或場合にはヨシツネと訓にて讀ますが如き、敢て傍訓を施さゞるも、少しく淨瑠璃を解する者には、文勢にてギケイ、ヨシツネ、口をついて出るが如きは、たしかに

無法中の有法といふべきなり。又渡邊武綱といふべき所に竹綱、卜部の季武に末武等はあて字とするも、自からといふべき場合に水からとあるが如き、あて字といはんよりは寧ろ判じ物、謎字といはん方適當ならん。斯の如き類枚擧に遑あらず、此の外廢れたる俗語、方言、國訛りなど、普通の讀者には解し難き節も多かるべし。されどこれらを一々訂正せんとすれば却て原文を害し、角を矯めて牛を殺すの譏を免れざるべし。比較的近代趣味の近松の淨瑠璃にして、既に註釋を要すとすれば、それより以前、むしろ古典とも目すべき、これらの淨瑠璃には多少不解の點ありしとするも、そは十分研究の餘地あるべきものと信じ、慥ひなる改訂を施さず、誤字、あて字、假名違ひあるもなほ原文の儘に存したり。一句點も亦然り、原文によりて濫りに校訂者の意を加へず、就中細字本には句點を施さゞるものあり、『高名物語』の如きは、開卷二三

葉の所には句點を附したるも他には之を附せず、これ又原本の儘を存したり。但し本によりて、●を用ゆるもの、○を用ゆるもの區々なるは、體裁上一定の句點を使用することゝせり。

明治三十九年十二月

水谷不倒識

# 新群書類從第五目次

## 歌曲


四天王高名物語 きんぴらぐんほうやぶり……一
賴義金剛山合戰 幷ひやうぶ物語……一八
をやか八さう記 附佛母まや婦人……三四
善どう記……五五
日本王代記 幷神武天王のゆらひ……七二
玉津しまの御本地……九〇
四天王大田合戰 すけたけろうやぶり……一〇六
なすの與市竹生島詣 附舟いこんの事……一二一
賴光あとめろん……一三八

津戸三郎……一五五
義經追善女舞……一七八
愛染明王影向松……一九八
酒天童子……二二九
念佛往生記……二四八
清水觀音利生物語……二六九
をぐりの判官……二九一
隅田川……三一九
善光寺……三三六
あこぎの平次……三五九
（薩摩外記正本の序文）……三八六
出世太平記……三八七

（土佐淨瑠璃總目錄及序文）……四〇八
名古屋山三郎……四一〇
京四條おくに歌舞妓……四二八
土佐日記……四四九
對面曾我……四七二
芳野の內裡……四九五
源氏六條通……五一五
定家……五三七
三世二河白道……五五七
源氏花鳥大全……五七七
艷色萬歲賴政……五九五
和國女眉間尺……六一二

通俗傾城三國志……六三一
博多露左衞門色傳授……六五三



目次終

# 新群書類從第五

## 歌曲

## 四天王高名物語

きんぴらぐんほうやぶり

### 第一

さてもその〳〵ち、それけんしやけんをうしなふ時は、ねいじんいあり、ねいじんい有ときは、國かならずみだる云々、こゝにせいわ天わう五代のそん、たゞのまんぢうの御まご、ちんじゆふのしやうぐん、源のよりよし公とぞ申ける、然るによりよし、はくふらいくわうの御ながれをくませ給ひ、そのみなかみたゞしくましませば、四かいやしまの外までもなびかざるはなかりけり、さて御家人には、わたなべむさしのかみ竹つな、外には五じやうをもつぱらとし、內にはちじんゆうの三どくをかね、はかりごとをいやくのうちにめぐらしもろこしのちやうりやうをもさみする程のゆうしたり、次はさかたひやうごのかみ公ひら、まことに人をも人とをもはねば、ついにをくれを取ことなし、其けしきやしやらせつにことならず、さて三ばんには、とを〳〵みのかみさだかげ、四ばんにするがの守すへむね、いづれもち〳〵にをとらぬわかものども也、こゝに又平井のほうしやうの一子、ひとりむしや、打物のたつしや、ことにはやわざてうとりのごとし、其外とざまの大名小名、ぎゝたう〳〵とあひつむる、かの頼吉の御いせい、めでたかりける次第也、さればにや國々のさうどう、しづまらずしなの〵國の住人きそのしやうじ、はや高打てはせ上り、うま門ぐわにのりはなち、あはたゞしく御前にかしこまり、偖もろつちうの國の住人じやうの兵衛國うぢ、かゞのちせん三が國のせいをもよほし、ほんぎやくのくわだてしきりに候と、大いきついで打たへける、かゝる所に、又下つけの國よりひきやくとうらいしてつげけるは、ではのは

んぐわんかつさしもをさのせいをあひしたがへ、時日をかへずくわらくへ打て上り候と、ことをきうにぞ申上、大將をどろき給ひ、偖もかれらは賴吉がちうをんを得たる物成が、あつぱれ天ばつしらぬやつばらかな、いそぎ打てを下すべし、則北國へは公平、すへむね、ひとりむしやを大將としてげんへいのせいをあひぐし、はつかういたすべし、偖又とう國へは、竹つなさだかげ、をの〳〵兩人を大將として、五きないのせいを付らるゝと有ければ、何もはつとおうけを申ける、中にも公平は御前ちかくつゝしんでかしこまり、近此おそれおゝき申ごとにて候へ共、それがしは此たびの打て、御ゆるされをかふむるべきとぞ申上る賴吉聞召、もくねんとしてしばし上いはなかりけり、時に竹つな申やう、いかに公平御へんな、れいにかはりたる、そせうを申さるゝ物かな、いくさとだにいへば、ゑにかきたるをみても、よろこび給ふに、此たびぢたいいたさるゝは、いかさましよぞん有げにおぼゆる間、しさいくわしく承らんとぞ申ける、きんぴらきいてあふ御ぶん共おぼへぬ、公平が所存さつし給はぬこそおろか也、竹つな聞てあふいかにも、御へんのしんていさつしたり、此たびの打てわづかのせうてきに、四天王ひとりむしや、五人までに仰付らるゝとのこと成べし、しかしながら一國一じやうにこもる、てきにてもあらばこそ、東國と北國す百里をへだて、又は所々にではりをかまへたゞ一どほうきするかたきを、御へん一人がほこさきにて打しづめんとの、しよぞん也是せんだいみもんの大き成はたらきにてやあらん、去ながらめいじんのことばにも、ふかくはかりてあさくわたれといへば、御へんのしよぞんけつきたんちにして、ふかきおもんばかりなきゆへ也、公ぴら大きにりつぷくし、あふ竹つなのいけん尤さこそ有べけれ、ぢたいそれがしは生れつきたるをこの物にて、ちゑもふんべつもなければ、もとより御へんのやうにぐんぽう、おもんぱかりもいざしらず、とらはちくるいのかしらとして、ちゑなけれ共、む二む三にいきをいたけき物なれば、とらにたてあふけた物なし、又ちくるいの中にも、うさぎは少ちゑあつて、りやうしあひたらば、とやせんかくやあらんと、かねてたくめども、そのごにのぞめばかならずりやうしにとら

るゝとかや、是をうさぎひやうほうかけのまひと、げれつのことばに、申ならはしたり、まづそのごとくそれがしもとらのうまれつきかして、ちゑはなけれどたとはゞてきはいこくほんてうの間へたて山かあらふ共うみがあらふ共む二む三にたゞひとをしにせめほすことこそよつくならひへて候へとあくまでくはごんをぞ申ける竹つなかさねて申さるゝはいかに公平御へんはたゞ今のそれがしがことばを大きにりつぷくとみへて有いさゝか心にかくることなかれ御へんあまりにはうばいをあなどりそのうへ上いをかすむるにより一たん申てありとかく上いをそむくことなかれとことばをにうはにぞ申けるされば にやさしもにたけき公ぴらも竹つながさいわうのことばにふくしとかうのきなくおもてやはらげさしうつむいてぞいたりける時に頼吉仰らるゝにはいかにかたがたとかくのせんぎむやく也則北國へは公平一人大將としてげんぺいのせいをあひぐしてはつかういたすべし偖東國へは竹つなさだかげすへむねをの〳〵三人大將としてむかふべしひとりむしやは都をしゆごすべしとの御でう也人々御うけりやうじやうをぞ申けるかさねて頼吉仰らるゝはそれいにしへのかうそのかうう國をあらそひし事八か年いくさをいどむ事七十よどかうそわづか十萬ぎのせいをもつてかううか百まんぎに打かちついにかううをほろぼしかんそ合八百よしうを一とうにおさめしも是ひとへにはんくわいちやうりやうしほうほうゑつをの〳〵四人のしんかゝぶりやくによつてなりなかんづくそれがしも天下のぶ將たることひとへにかた〳〵が有ゆへ也と御かんはなはだうるはし竹つな公平に打向ひ此度北國へこされなばずいぶんけいりやくめぐらし給へ公平聞て何程の事や有べき我等が父きん時よりかたかはやぶりのむふんべつ物にてきとだにいへばむ二む三にかけこみしやうぶをけつするより外のことしらず又此きんぴらはかたかはやぶりももろかはやぶりも存ぜずてきとだにいへばかいつかみ五里も三里もとつてなぐるこそうきよの中のおもひでなれと御ぜんともはゞからず此たびのうつて東國も北國もをしなめてそれがしたゞ一人おほせつけられぬこそなによりもつて口をしけれとざしきをけたてゝ我がやをさしてぞかへりけるかの公平が有様かたか

はやぶりのくせ物やとをぢぬものこそなかりけれ

## 第二

### 公平北國へむかふ并出羽國へこへ判官を打取事

さるほどにすでにそのよもあけゝればきんぴらがはたしたの物共思ひ思ひによろひをちやくしきんぴらのやかたをさしてぞまはりけるきん平やがて出あひけふは日がらあしければ明日たつの一天に打たつべき何れも其むね相心得とく〳〵かへりてよういせよ人々誠と心得かしこまつたりとてしゆく所〳〵に歸りけるかくて公平人々をたばかりかへしつゝよろひもちやくせず取物も取あへず大力のおのこ只二人あひぐししう〳〵三ぎくわらくを打立北國さしてぞ下りけるいそぐにほどなく三日と申にはかゞの國にぞつきにけるかゝる所にゑちぜんの國のぢう人ぬまたきやうだいてせい二千いんぞつしゑつちうへかせいせんとていそぎけるきんぴらあやしくきつとみてきやつはかたきよりきの物とおぼへたりまてしばしてきかみかたか心をそとひきみんともたせたるはたをそれ〳〵とかたはらにすてをかせとあるかやはらにかくれいてことのやうをぞうかゞいみるされば にやぬまたかさきてのものども此はたをあやしみ取あげみればいだてんをかきたるにうらにはさかたのひやうごのかみきんぴらと大もんじにかきつけけるさてはゑつちうのうつてにきんぴらのむかはれけるよとみな〳〵名をきくだにもをぢおそれふるひ〳〵たち歸り大將へよしをかくと申ける二人の物共みてなにきんぴらなればとておにかみにてもあらばこそあはれきやつにあひなばいくさのかどいでにくびとつてゑつちうへみやげにせん物をとこともなげにぞ申けるきんぴらこかげよりをどりいで大將を二人ながらかいつかみやあをのれはたゞ今のくわごんはなにごとぞきみの御をんのわすれぎやくしんにくみせんとやにつくきやつかなとかういわせず二人がくびふつつとねぢきればらうどうどもこはらうぜき也とましぐらに打てかゝる公平みて手の物はなきかといへば承り候と四方へぱつとをつちらす公平みてしばししばし公平とみて打てかゝるものけなげなりつみつくりにとがなき物をころするなとせいしてそれよりも

ゑつちうへくわゝるせい共をみち〳〵にてうちすて打捨とをりければ是をみるものきく物ごとにおのがざいしよ〳〵へぞかへりけるかくてきんぴらゑつちうへいそがんととぶがごとくにいそぎけるさるあひだゑつちうには大しやうじやうのひやうへはとう國うち神しら山ごんげんのまへにてせいをそろへしんせんにむかひなむきめうちやうらいしら山ごんげん我このたびの一大じほんいをとげさせ給へと心中にふかくきせいをかけ其後都のかたへむかはせやを三すぢいさせさてらうどう共ばいくわをおり來り是すなはちよりよしの四天わうと名付さん〳〵に切ちらしいくさのかどいでよしとよろこぶ所へきん平はせ付あんないなしにざちうにずんといで兵衞がそばへつつとより兵へ大きにおどろきこはめづらしの公平どのといへばさればこそとよ承れは御へんなぎやくしんのおもひたちしきりのよし其聞へ是有により公平に罷下りことのしつふをきはめよとの上い也いかに〳〵といへば兵衞ふるひ〳〵ちんずるやうこそおろかなれこはもつたいなき上いかなにたる天ばつをかふむり我らがかうをんのきみにむかつてやしんのおこし候はんや是いかさまそれがしにいしゆ有物のざんげんにて候はんとさらぬていにぞ申ける公平聞て尤々誠に北野の天神だにもむじつのざんにあひ給ふいわんや御ふんは人げんなればさもあらん去ながらしやとうをみればかつちうをいたしたるらうどう共のあまた有はけふは此神のまつり成かあやしやといふよりはやく大將がくび水もたまらず打をとしのこりしたうさのやつばらを四かく八ばうへをつちらしかち時どつとあげにけるかくて公平申さるゝはいかになんぢら是よりではの國へうちこへぢまんがほ成たけつながはたらきをみてなぐさまんとではをさしてぞいそぎけるこれはさておきではの國のうつて竹つなすへむねさだかげ三人の人々はでじろ三つありしをやう〳〵二つせめやぶりをの〳〵いくさひやうでうしてぞいたりけるかゝる所にきんぴらしうしう三人はせ來る竹つなみてこはいかに〳〵と申けるきん平きいてさればこそとよ北國のてきつよくしてせいみな〳〵うたせてたゞ三ぎに也候へばかせいをこい申さんためめんぼくなくも是までまいりたり竹つなきいていや〳〵御ぶんの申さるゝだんきよ

ごんにて有べしきんぴらきいていやきよごんにあらずして〳〵當國のいくさはいかにとたづねける竹つなかやう〳〵の次第にてはりの城二つをやぶり本城いまだらくじやうせずと申せば公平つく〳〵打聞何れもれき〳〵むかはれたるかひ有ことかんじいつてゐたりける時にさだかげ公平に打むかひして北國のいくさのじつふはいかに〳〵とたづねける公平聞ていや北國の合戰じつせつといつはてきつよくしてみかたせいこと〳〵く打れいまだ城はおとしへすとにがりきつてぞ申ける三人の人々きゝて僭は此をのこは北國のてきことゆへなくうつしづめわれ〳〵いまだじやうをおとし得ぬこともどかしげにおもひとかう物をいわざるとおぼへたりとをの〳〵たがいにすいりやうし竹つな公平にうちむかつて申さるゝはいかに公平御へんのてぬるくをもはるゝもことはり也去ながら本城は明日あさかげにのりやぶらんとのひやうでう也御へんごつめのうへはいよ〳〵もつて本城はやす〳〵とふみやぶらんとぞ申さるゝ公平聞ていやとよそれがしは北國のかつせんにしくたびれ身もつかれて有ければ明日の合戰それがしはゆるしてたべとぞ申ける人々きいてげに尤しごくせりひとまづきうそくいたされよとひやうでうすでにおはりけるあくるよはをぞまちゐたりさる程にかたきの城あんなかのしろと申は三方はひらち一方はけはしき大山さかをとしかたけと申てとりけだ物もかよはぬ山也さればにやそのよもやはんばかりのこと成に公平はねてねられぬよはのそらこよひうしろの山よりしのび入かたきの心をひきみんとた〻一人ぬけ出でさしもけはしき大山をつたかつらに取付〳〵上りける程なく城に付ければあんのごとく山の手はけはしきをたよりにしてさのみようじんするていもなくいやしげ成下べ共四五人ばんをしてぞいたりける公平やがてきやつばらを一々にそば成たにへ取てはなげなげたゝ一人のこしをきいかにおのがしうの大將はいづくに有けるぞ有のまゝに申べし少もいつはる物ならばくだんの如くおこなはんするぞとだいのまなこにかどをたててぞ申ける時にをのこふるひ〳〵大將つねは本丸こよひはいくさひやうでうの其ために二の丸に有とぞ申ける公平大きに打うなづきあふよくこそいふたりをのことてすでにたすけんと思ひし

かいやもしきやつにさきをせられてはあしかりなんと思ひなむあみだ佛もろ共にやがてたにへ取てぞなげにけりかくて公平それより城のこかげにしのびいてきの有さまうかゞひける聞くにたがはずらうどう共をめしあつめいくさひやうでう取々也くつきやうのをりからとつつと入大將はんぐわんがくびちうに打をとすざちうの人々こはへんげの物かと太刀のさやはつしあはてふためきける時に公平大をん上是は坂田の公平と云ばけ物よ我とおもわん物あらばかゝれや〳〵とよはゝつてのこりしくんびやうとうざいへをつちらしさしもにかまへたるじやうくわくをたゝ一人か手にかけて一ぢが内にせめやぶりけるあつぱれ天下ぶさうのゆうしやとかんせぬ者こそなかりけれ

## 第三

みちのりていとをせむる井四天王しほがまだち

去間其よもあけゝれば竹つなのまへに參たれ〳〵くび二つ又かれくび三つなとと思ひ〳〵にぶん取かう名しけると申ける竹つなみてこはふしぎの次第也と云に公平がみへぬはいかさま是は公平がしよぎやう成べしといふ所へ公平大將のくび其外らうどうのくび三つ太刀につらぬき來りいかに方々夕べはねるもねられず候ゆへよ打に入て大將其外らうどう共を打取て候此たびぐんほうをやぶり候ことまつぴら御めん候へと心よげにぞ申ける竹つなきいて侍の一ごんをちがへ給ふゆへはおき成ふねのみなとにつかぬあひだはよしともわろき共さだめられず候去ながら御ぶんのぬけがけ今にはじめぬことない〳〵それがしせいふん申せしごとくもし〳〵けかなとし給ひなば我々いきてはかへられぬ也かやうにいくさのほうをやぶり給ふうへはすへ〳〵までもたのもしからずとりつふくしてぞ申さるゝかゝる所へひきやくとうらいしてみちのくのしほがまの一ぞく共きやくしんをくわたてしきりのよしをうつたへける人々もくねんとうち聞竹つな申さるゝは是ぞぐんほうの一大じたりかやうに國々にぎやくとおこるは何さまむほんちやうぼんの大將は都ちかき所に有べしかやうに我々をおんこくにくだし都をぶせいのいろにのつてつぶ

さんとのはかりごとおぼへたりとかくみちのくのいくさはさしをき一時もきうにいざ〳〵上らくせんとぞ申さるゝ公平きいていかに竹つなたとへていとにむほんのあればとてひとりむしやわだ左衛門のこつて罷有うへはさのみきづかいもなきことなれとても是までげちやくのついでにみちのくのきやくとをもすきと打しづめいそいできらくいたすべしをの〳〵いかにと申けるさだかげすへむね兩人も公平がぎにどうず竹つなさいわうのいけんなくさあらばをのおのきにまかせんとみちのくさしてぞいそぎける是は儲をきらくやうにはさわらのう大將みちのりとてくぎやう一人おはしますぐわんらい其家くげといへ共きうばうち物取てはぶけにまされるりやうしやうたりされば頼吉のいせいをそねみいかにもして頼吉をほろぼさんとてかねて國々の大名をかたらひはうばうにてはたを上げさせ四天王の物共こと〳〵くをん國へ下していとぶせいのついゑにぜうし今は心やすしぢぶんはよきぞはや打たてとてつかう其せい七千よきあやのかうじへぞをしよせけるやかたになれば二ゑ三ゑにをつ取まはしときのこゑをそあげにけるされ共御所には思ひよらざる事なれば上を下へとかへしける時によせてのぢんよりもみちのりらうどうこまかけ出し只今よせたる大將をいか成ものとや思ふらん頼吉みかどのちよくかんかうむるゆへちよくしとしてさはらの右大將みちのり打てにむかいたり侍はわたりものかふとをぬいでかうさんし命をつげとの〳〵しりける時に城の内よりみうらのわた左衛門ためむねをけがはどうの大よろひをちやくし三人ばりの大弓のまん中にぎりやぐらにつつとかけあがり何わが君みがどのちよくかんにてさはらの右大將かむかふたりと申かかんきとは心得すあふよし〳〵やがて心得たりをのれらはらくぢうあらゆるとうそくかとうにてやありつらんうけてみよといふまゝに三人ばりに十三ぞく取てからりと打つがひきり〳〵と引しほりかなぐりはなしにかつきといた一ぢんにすすみたるみちのりのらうどうがむないたをはつしといるうしろにひかへたる川村兵へか馬のふとばらにすはつと立是をいくさのはじめとして兩ぢんたがひに入みだれいくさは花をぞちらしけるかゝる所にひとりむしやは折ふしびやうきにおかされへいぐわの

ていにていたりしが長刀をつ取よろほい〳〵出けるがかたききびしくよせくれば四方へばつとをつちらしもんのから井しきゐにこしをかけしばらくいきをぞつきにけるみうらわた左衞門是をみて御くたひれとみへて有いで一いくさはけまんとかたきの大せいにわつて入おもてもふらずをつつまくつつたゝかひけるかゝる所よせてのぢんよりもくろかはおどしのよろひきたる九尺あまりの大のおのこ物々しやといふまゝに太刀をからとなげすてわた左衞門とひくんたもとよりたかいにおとらぬ大力をしかへしつをしもどしうしのたけるがごとくくみあいけるされ共たゞめむね物共せず取てをつふせやかてくひをかゝんとする所に又かたき一人をりかさなつてため宗がたふさを取て引かへさんとすでにあやうくみへける時にひとりむしやはせ來上成てきの細首水もたまらず打をとすため宗は下成てきのくびかき切てたがいに手とてを取くみ引かへすかの人々のはたらきせん上下をしなへみなかんせぬものこそなかりけれ

## 第四

賴吉都おち并わだ左衞門てがらの事

去間ひとりむしやはわた左衞門にかいしやくせられ君の御まへに出候も此たびよせての大將たれ成らんと存しにさはらの右大將みちのりにて候とつつしんでぞ申上る賴吉聞召なにこよひのよ打はみちのりと申かかれは日比いしゆ有物なれば此たび四天わうの物共かるすの折からねかふ所のさいわいとをしよせてや有つらんゑゝわつかのしゆくいをさしはさみゑいりよをかすめ天めいしらぬあふれ物なにはか〳〵しきことが有つらんとしばらくあきれはてゝぞおはしまします時にひとりむしや申上やうさても日こそおほきに今それがしかやうのしよらうにおかされぎやうぶ心にまかせずかい〳〵しきはたらき仕らぬこそ何よりもつて口をしけれ其うへ其たのしそつも大かた打たれて候へば此所に御ざあつてはしじうかなふべき共おぼへ候ねはひとまつかたきちづかぬ其さきに御ひらき有いづかたにもしばらく御しのひ候て東國北國へむかはれし人々きらくをまちて御ほんいをとけらるべし然ばそれがしはか程のちうびやうにおかされとてものかるべき共ぞんせねばすみやかに御あ

とにとゝまつて御所にひをかけ同けふりと也申さんとなみだと共にぞ申ける頼吉聞召こはおろか也きようち三がいのあるじしやくそんだにもやまふの道はまぬかれ給はずいわんや人間にをいておややまふはつねのならひ也御へんそれ程わづかのしよらうにかかわつてじがいをせんと云はいひかいなきしよぞんかなをちば一所にこそと仰けるひとりむしや承り君の仰はさる御ことにて候へ共我かやうにびやうきにおかされやみ〳〵とかたきにうしろをみせ都をはいぼくせんことぢよのはぢはともあれかつうは四天王の人々がおもわんする所いかばかりいひかいなく口をしう候へば君はてきちかづきぬ其さきに何事もふりすてわだ左衛門をめしぐしてはやとく〳〵とをちさせ給へと申上る頼吉御きしよくかはりいかにひとりむしやなんじが申だん頼吉かつてしこくせずびやうきにおかされ打じにせんといふはたゞやまふのくつうをへんしものがれとの事にや是は頼吉がためのさゝかちうぎにはあらずそうしてなんじにかきらす四天王の物共しなば一所にとちぎりし身なればなんじをこゝにすてをき我なんのめんぼくあつてかをちゆかんやゆめ〳〵もつてかなふまじと御ぐそくのうはおびしつかとしめさせ給ひおちさせたまはん御きしよくさらになかりけりひとりむしや有難き上いのむねかんるいきもにめいじ両がんになんだをうかめこはもつたいなき次第かな此うへはともかくも上いにしたがひ奉らんとぞ申あぐ頼吉聞召尤しんびやう也と御ゑつきかぎりなくあけなばかたきかこまんとよはにまぎれおち給ふいそがせ給へば程もなく堺のうらに付給ふかくて日すでにくれければあれたるしほやのかきまばらにのきかたぶきてしぐれも月もさこそもるらめとみへたるにいざ爰にて一やをあかさんとてをの〳〵内にぞ入給ふ去程にあはれ成かな人人はたびねのとこのくさまくら露も泪にあらそひていとゞかなしさはまさりける比しも秋のなかばのことなればはま風はげしくふきたててなぎさによするなみのをとそでにやどる月のかげちぐさにすだくむしのこゑゑめにみみゝにふるゝ物ごとにひとつとしてあはれをもよほし心をいたますといふことなし頼吉仰らるゝはいかにかたぐ〳〵ねるもねられぬよはなればいざやはまべにをりてなぐさまんと人々をめしぐ

してかいへんさしてぞいでらるゝ折しも月さやけかりければ水にうつれる月のかげうら〳〵のけしきなどを打ながめいとおもしろくおぼしめしをのおのふるきうたなどをゑいじよも山の物がたりをぞ申さるる中にも頼吉おほせらるゝはいかにかた〴〵此うらは國だい一のめいしよ也いにしへならのみかどの御時□□たうの舟のみなとにて此所を則なんばのつといへる也中比は石づかうらともいへり又は七日あまの川ともいへるとかや其ゆへは有ふるくに㊟くも井にてながむるをりもあまの川ほしあひのそらもはるけかりけりとよめり又有歌にも㊟七夕は思ひしらなんあまの川いそぐわたりに舟をかしつると有かやうのふるくをおもふにつけてもげにみよしの明神はれいげんあらたにおはしますと有歌に㊟すみよしのきしのひめ待人ならばいくとせかへしととはまし物をとよみはんべればいざや明神へまふでゝ我身のうへをもいのらんとしんせんさしてぞ參らるゝやしろになればをの〳〵しやとうをめぐりてみ給ふに誠に月すみてなみにうつる松かげろう〳〵としていとしゆせうさはかぎりなし偖人々しんせんに參りよもすがらきせいをぞかけらるゝ頼吉仰らるゝはそも〳〵我四かいのまつりごとをつかさ取てばんみんの心にかんきよくなきことを存といへ共今ねいじんにをかされてんちひろしといへ共一しんをおくに所なしわくわうどうじんの月あきらかならば此本いをとげさしめ給へとふかくせい〳〵をつくしてぞいのらるゝかくて人々しやだんのうへにひぢをまげてまくらとしばらくまどろみ給ひける時に八しゆんばかり成おきなふうふまくらもとにこつせんとあらわれいかに人々かた〳〵かいのり申だんしんもかんをういたしたる間おうごの力をそへてゑさすべし此しやとういですしばらく時いたらんをまつべしすへかならずめでたかるべきとさもけだかき御こゑにてたからかに御ぢけん有人々はつとまくらを上てらいはいす時にみときり〳〵ひらけてらうをうふうふかきけすやうにいりたまふ頼吉あらた成御ぢけんをかふむり給ひ御ゑつきかぎりなくいよ〳〵しん〳〵をこらしめてぞおはしますかゝる所にたうしやのかんぬし國しげあはたゞしくしんせんへ參り頼吉にたいめんしかたかたの御事にてやありつらん我ふしぎのれいむをか

ふむる間よのあくるをまち得ずして參りて候こよひつうやの人々は天下のまつりごとをつかさどる人なるが今ねいしんのためにるらうの身と成なんぢゆいてちからをあはせよとの御ことなりいそぎこなたへいらせ給へと申さるゝよりよし聞召まことにしんたくのありがたさかんるいきもにめいじおなじくぢけんのあらましをかたらるゝかんぬしきいて尤明神はりしやうあらたにましませばすへたのもしくおぼしめさるべしまづ〳〵こなたへと我かやにいざないまいらせけるしたくにいり給へばさま〴〵にそもてなしける人々かくてあるべきにあらざればかたきをほろぼすべきないだんをぞしめさるゝ時にかんぬしゝばらくうちあんじそれがしくつきやうのけいりやくをおもひつけて候へすなわちそのてだてといつはきみの御こしの物はさだめてげんじぢうだいのたちかたなにてや候はんしからばひとまづそれがしあづかりもうし此たひ都のかせんにうたれし物のくびを取したゝめあひそへてきのかたへぢさん仕りもつたいなき事ながらもかつうはけいりやくのためなれば君の御くびとひろうしてまつかたきの心をゆるさせもうし心しづかに御ほんいとけさせまいらせんとぞ申さるゝよりよし聞召尤御へんは明神のしんたくにてたのみ申うへは御ぶんわたくしのけいりやくとはぞんぜずとかく身をなげ打て明神のしんちよくにまかするより外なしと有ければ尤さこそ有べければさあらばへんじもきうに上らんそれ〳〵たち刀こなたへとげんじぢう代のくも切をうけ取はや馬に打のつて都をさしてぞ上らるゝかの國しげの心中たのもしき共中々申斗はなかりけれ

## 第五

### みちのり四天王に打るゝ幷賴吉御歸京の事

去間さはらの右大將みちのりはおもふまゝにほんいをとげ天下のけんへい取おこなひ給へば國々の大名小名日々にしゆつしはひまもなくうへみぬわしとぞさかへけるかゝる所にすみよしのかんぬし國しげあはたゞしく御まへに參り侍も今月五日に源のよりよし同らうどうのひとりむしや同わだ左衞門しう〳〵三ぎにてそれがしたちへをちくだりひたすらたのむ

と申間一たんたのまれ申それがしはかりことをもつて三人ながらうちとつて候とくび三つにたち一ふりそへてさし上る大将やがてくびをじつけんしよくこそちうしんいたしたりくびはそんじてたゞしからざるといへ共太刀は源氏ぢうだいのくも切にまがひなししやうは後日にゑさすべしまづ〳〵かへれと有ければかんぬしはたばかりすましたりとゑみをふくみをいとま申てかへりけるみちのりゑつきのまゆをひらき僭も天下にゐをふるいし物なれどうんつきぬればやみ〳〵と打れぬあゝしなしたり〳〵それ〳〵いそぎあはた口にさらすべしと有ければ人々承りやがて三つのくびをごくもんの木にぞかける去程にらくちうのしよ人此よしを聞よりも僭もあくぎやくぶだうのみちのりかなゆくすへよろしかるまじと頼吉御をんをしのばざるはなかりけりせめてかはらせ給ふ御すがた也共おがみ申さんとて我も〳〵とはせまいりごくもんのまへにたをれふしなきかなしまざるはなかりける中にも年比卅ばかりのおのこ頼吉の御くびのまへくさむらにひざまづき涙だをながし申けるは僭もあさましの御事や此たびの御かせんゆめ〳〵ぞんぜず御せんどにあひたてまつらぬことまつぴら御しやめんあれとひれふしてこそなげきけるやゝあつてなみだをおさへしよ人にむかつて申けるはかくするそれがしをいかなる物とかおぼすらんがうしうしがのさとにあさ木の源太と申ものなるがひとゝせ頼吉のをきてをそむき御かんきをかふむりしにより吉御なさけふかくまし〳〵て程なく御しやめんありしよりやうあんどにつきしがのさとにきよぢうしてかくやみ〳〵となり給ふもぞんぜずうきよにあつてなんのめんぼくかあらんせめてくわうせんのたびの御ともとやがてはらをきらんとす時にみちのりのらうどうぬまざは源五折ふし此へんをしよやうあつてとをりしが此よしをみるよりもこはらうぜきや何物なればいか成しさいあつてかくはするぞとをしとむる源太きいてそれかしはかやう〳〵の物なりさふらひはたがいごとじがいとけさせてたまわれとしさいありまゝにぞ申けるぬまさはきいていや〳〵かやうのぎはわたくしにてはかなふまじぶしやう大将のまへに來りて申されよとりふじんにひつたてゆかんとす源太大きにはらを立さふらひはたがいごと御へ

んはぶしのほうをしらさるかといひもあへすぬまざはかくひ水もたまらず打をとすぬまさはからうどう共こはらうぜき物よと大せい一どにをりかさなりたかてこてにいましめける源太大きにはかみしてさても〳〵むねんのしだいかな三だいさうをんのしうの御せんどのやくにはたゝずしてあまつさへなわめのはぢにおよぶことかへす〳〵もくちをしけれどいかれるおもてよりなみだをはら〳〵とぞながしけるかかる所になにものとはしらずあみがさまぶかにひつかふで大のおの子一人きたりかのめしうとのうへによりかゝりいかにかた〳〵ちか比申かねては候へ共けふはおやのきにちにあたりて候へば御ほうしにわれにたまわれといふけいごの物共きいてこはそつじなることをいふをのこが有物かな是は大事のめしうとにて將くんう大將殿へひいてまいる也あたりへよるなといかりけるおのこきいてにつこと打わらひやあ將ぐんう大將とはきゝなれすぜひしよもうとたちひんぬきけいごのやつはら四方へをつちらしさていましめのなはをときしさいをいかにととへば源太あらましをかくとかたりける公平よしを聞よりも是は是はとごくもんのもとにたちより偖も〳〵しなしたりやよの中とをにをあざむく公平もとうざいさらにわきまへす泪にくれてぞゐたりけるやゝあつてをつるなみたの下よりもひとりむしやわた左衞門がくびをしたにおろしをきひとりむしやがくひに打むかひいかにひとりむしやなにとてかやうにやみ〳〵とは也けるぞ偖もあさましの次第やと又わだ左衞門かくびをとり上いかにわとのは物にしも成べきとおもひ公平かたちまでゐさせしに君をかやうにやみ〳〵なし申わとのまでかくあさましくなりはつるみるも中中はら立と二つのくびをそば成いしに打あてみちんになしてすてにけるかゝる所へ竹つなさだかげすへむねをの〳〵いそぎはせ來る公平竹つなに打むかひかた〳〵は何をたのみにみちをはいそぎ給ふぞや是是しなしたる有さまをみ給へと君の御くびをぞみせにける竹つなをはしめ人々是はゆめかうつゝかと御くびにすがりつき泪にくれてぞいたりけりさしもにたけき公平もかの人々の有さまをみるに付ても今ひとしほの泪也やゝあつて公平泪をおさへあゝよしなし〳〵大事のかたきまのまへにをきながらよそにみ

て有はいひかいなしととんで出るを竹つなをしとゝめ思ひはたれも同ことあはてゝことなしそんじなばこうくわいさきに立ましきしばしといへば公平きいて君御ざあつてこそは命もをしからめとりふじんにかけ出る竹つないよ〳〵をしとゞめいかに公平此くび君の御くびとはいひつれど其せうれつたゝしからざればもしかたきはかりことにて我々に身をもだへさせじがいさせんとのけいりやくにて候はんひとまつすみよしのかんぬしか本に立こへきやつをおさへてことのしつふをとふべきと有ければ公平聞てあふよくこそふしんなおもしろしさあらばすみよしへゆかんとてをの〳〵とぶがごとくにぞはせにけるかのちになれば公平つつと入かんぬしをりふじんにひつとらへとかうのぎなく只君のゆくゑを申せ〳〵とせめにける竹つなさだかけおくればせに來りやれ公平りやうじをいたすなところ〳〵によはゝりける時にかんぬしやあかた〳〵あらきにし給ふなことをしづめて聞給へ我は賴吉にちうふかき物成ぞと有ければ公平ことはをやはらげして君の行へはいかにとたづねける國しげ聞て君はをくにまし〳〵候とやがてをくへそせうじける賴吉をはしめひとりむしやわだ左衞門是は〳〵とばかりにてしばし泪はせきあへすややあつて賴吉わたなべか手をとらせ給ひ此たび都の合戰に打まけるらうと成しあらまし又は此たびすみよしの明神りせうたのもしき次第かたらせ給へばひとりむしやとわだ左衞門と公平さだかげすへ宗に打むかひ思ひ〳〵にうきつらさをかたり今のうれしきにもつきせぬものは泪也かくて有べきにあらされば國重立出此上はひとへに御なげきやめられかたきたいぢの御けいりやくをしめさるべしと申さるゝ人々聞召此ぎ尤とやがていくさひやうでうをぞ被成ける偖都への打てには竹つな公平さだかけすへ宗をのをの四人大將にてむかふべしとの御でうにてせんぎすでにきはまりける時に公平はいくさのひやうでうをも聞かぬかほにてかたはらへ立より大いびきかきてふしにける竹つなそばによりいかに公平御へんはなどいくさのひやうぎは出されぬぞと有ければ公平聞ていやそれがしは東國北國のかせんにせいきつからしてあれば此たびはゆるしてたべといふ竹つな聞ていやひやうてうすでにきはまつて我々四人にむかふ

べしとの君よりの上い也はや〳〵よういといへば公平ふせうけにてやがてしたくをそせられける去間さはらの右大將みちのり此たび四天王の人々東國より上りたるよし又はすみよしのかんぬしはかりのあらましこと〳〵く都にろけんしてふじつに四天王が打てにむかふよし聞給ひ大きにをとろきいへの子らうとうもよほしてよせくるてきをそまちゐたりさればにや打てのせいあひもすかさすをしよせ時のこゑをぞ上にけり本より城の内にもかねてこしたることなれば同こゑをぞ合ける時のこゑもしづまれば兩ぢんたがいに入みだれひ花をちらしてたゝかいけるいくさもいまだなかばのこと成に城の内よりも一ようにいでたつたるむしや四人かけ出是へすゝみ出たる我我をいか成物とかおぼすらん右大將のみ内にきのもとの太郎二郎三郎四郎とてをの〳〵四人共に一きとうせんと頼れたる物共也此たびは我々が身のあんひのいくさ也然ば打物わざはむやく此四人の物共と四天王の人々と一きつゝのゑらみ打せんとよはゝりける其かたちよのつねの人りんにかはりせいは一丈餘おもへにひげをひてひとへに鬼のごとく也かれらはぐはんらい其しゆつしをう母は人間父はもとゝぞなのりけるさだ景太刀ひつさげかけ出る公平しばしと引とゝめいかに方々此四人のやつはらをそれがしに給れ一どにて取にせんと有ければ竹つなせいしいやいやきやつら一人つゝと云共さはあらし四人一どにをりかさなつてくみとめんとの計事にてやあらんそつしに出てしそんし給いなと云時に四人の物共云様はやあ方々かたきにことばをかけられて出あはぬは我々をあはぬかたきとあな取ゆへか又は四天王の人人もかたきによつて口は聞るれど我々にはしんしやくかいかに〳〵とばうじやくぶしんにくはうけんは公平大きにいかつてゑゝ竹つなのいはれさるせいしらるゝによつてあれていのやつはらに口をたゝかせつるよといひもあへずとんで出參さうと云よりはやくまつさきにすゝんだる太郎をかいつかんでまへ成堀へからとなぐるあんにたかはず三人一どにとひかゝる公平物共せずゆんでめてにひつつかみ一しめしめて同堀へどうどなげいきをもつかす城内にかけ入ば大將道のりも頼切たる四人の郎等打せかなはしとうらの門よりをつる所をかいつかみ思ふ本いはと

げたりと本ぢんさして引かへす竹つな定景末宗三人の人々思ふ望は公平にほこられたりと大きにりつふくし城中へみたれ入殘し軍兵共東西南北のつまりつまりにをつめ切てすて今は思ふしさいなしと城にひをかけかち時上て引かへしそれよりもすみよしをしやをたてかたきぼつらくのよし申上れば賴吉御かんかぎりなくいそぎ御きらくあつて都せいひつにぞおさまりけるめでたさよ共中々申計はなかりけれ

寛文二年壬寅七月吉日

二條通正本屋喜右衞門開元

四天王高名物語終

# 賴義金剛山合戰

井ひやうぶ物語

## 第一

いつけひらけてちよのはるのどかにめぐるおぐるまのときめきわたるよものそらふくかぜゑだをならさすあめつちくれをうごかさねば四かいなみしづかにておさまる御代こそめでたけれこゝにせいわ天わう五代のそんみなもとのよりよし公は御たいめんじよに御いでありいかゞおぼしめされけんなんでんのひろゑんに御太刀ものゝぐをならべさせざ上になをらせましませば三人の御きんだちはなをりむすぶ御しやうぞくにてしだい〳〵になほらせ給へば御家のかうけんさかたひやうごのかみきんひらみうらのわだ左衛門ためむねわたなべ武藏のかみたけはる同源次たけみつかまくらの權五郎かげまさちゝぶの十郎よりひらをはしめとしてその外のしよ侍ぎゝどう〳〵と出こうあるそののちよりよし抑けるはさてもあさひしやうぐんもりずみがぎやくどおもひのまゝに出づむる事天りにかなふといゝながらかた〳〵がゆうりきなり此うへはいよ〳〵めいとくのりあきらかにしたまへつきてはかた〴〵もよき太刀物のぐは有べけれ共われおもふしさいのあれば家につたわるぢうもつをごぶんらにゑさするぞまづ一ばんにくりからふどうをさうがんにてほりたるいか物づくりははくしうのやすつながうち物なりなをばおに丸と付て有則公平にとらするなり扱あかきのさやにどうがね入しはびせんのやすたゞが打物なりなをりうすいとつけて有則ためむねにゑさするぞうのはなおどしのよろいにほしかふとそへたるはみたの源次たけみつなりまたくろかはおどしのどう丸にくわがた打たるかぶとはちゝぶの平田より平にとらするなり其後めいば二ひき出させそも此馬と申はつねに心はゆうにしていさむ時には五七けんのほりあり共やす〳〵ととびこへさゞなみのたつなさゆうを一方ひきければそのまゝとびかへるによつてゑんひと是をな付て有たけはるかげまさにゑさすると仰出されたりければひと〳〵承りこは有がたきしだいとて一どにあつとぞかんじける時に公平は人〳〵に打むかいか程におゝ

き其中にかやうの御おんにあづかること身にとつてのめんぼくたれかいさみをなさざらん是につけてもたけちの源太はくわほうすくなき人にて有かた〴〵はいまだひのでのさかり也ずいぶんちうこういたされよ我は年もよりければ心ばかりで手はたゝず候去ながらまづしうぎは申おさめて有しぜんごにちにちんけきしゆつけいたしなば此おに丸をひつさげてまつかふこびたいさうのこてあたる所をさいはいにうんにまかせて切ひしがんとおどりあがつてよろこびける御心ざしの有がたさをいはねどおもてにあらわれて泪をはらりとながし又つつしんでぞいたりける頼吉御らんして方〴〵のしんていいくちよかけてたのもしやと御かんはなはだかぎりなく御ざを立せ給ひけるよりよし公のいせいの程三重うらやまざるこそなかりけれ是は扨おき爰に又すがはらのえんわうとて二の宮にてわたらせ給ふがあさひの将軍もりずみのそく女やよいのまへと申てこゝんぶそうのびじんにてことひはにいみしくていとなさけふかきよそおいをかりそめに御らんじていつの比よりれんりのちぎりあさからず程なく太子一人出きさせ給ふされどもりずみか天りうすくしてよりよしにほろぼされむねんといふもあまり有いかにもしてほろぼさんと心をくだき給へ共さらにしんていにたつせずげに誠それがしかはくふおゝいの大じんと申て其いくわうよにたかくたいこうぼうがひせし所のぐんほうたな心におさめしゆうしなりよびよせないだんせばやとてやがてつかいをたて給ふ大じん何事やらんとつかひと打つれまいられたりしんわううちしほれさせ給ふみこゑにて其方もかねてぞんじのとおりもりずみをよりよしにかたせむねんいまにたへやらずかたがた其もんようとしてかれをほろぼさざらんにおいてはまつだいのきろくのおもても口をしやいかにもしてよりよしをたいぢしてもりずみがきやうようにほうじ御身も天下のふ将にあおがれ給へやとなみだと共にぞ仰ける大じん承はりない〳〵それがしもさやうにぞんじいかにもして頼義をほろぼしんわうの御いきどをりをやすんせ奉らんしよ存にてかねてないだんのともがら有さらばよびよせ申さんとやがてつかいを立らるゝ一みの人〴〵承りしんわうのやかたにぞ出らるゝ大じんたいめんしてみぎのあらまし

をぞかたらるゝ人々聞てみもつ共とどうじおの〳〵ひやうぢやう取〳〵なり其中にすかぬまたんごのかみすゝみ出かのよりよしはぶゆうなだかきものなればこぜいにてはかなふまじたゝ〳〵ちりやくにしくはなしそれがしあんじ出せるちりやくの候きたる十五日にもみぢのくわいあるべきなりよりよしいそぎさんだいつかまつれとちよくしをたてさせたまひなばそのまゝさんだいつかまつらんその時かくしせいをふせおき一どにどつとかけあはせやす〳〵とうちとらんとこともなげにぞたくみけるしんわううちゑませたまひける時に大じん申さるゝはくつきやう一のけいりやく是にすきたる事あらじさあらばそれがしが家の子にはやしの六郎と申てべんぜつたつせしものありとやがて御まへにめされくだんのあらましを申ふくめたりければうけたまはり候と御まへをまかりたち三重やがてよういを玄たりけりさるほとに六郎はちよくしのごとくにいでたちてよりよしさしてぞいそぎけるやかたにもなりぬればあんないかうて内に入よりよしたいめんまし〳〵てちよくしを座上になをさしおきつつしんでおはします六郎はふるなのべんぜつおもあざむくほどのものなれどもしやうぐんのいにやおされきまたらうどう共がいせいにやおされけんせんじのおもむきたるよしを申わぢわぢとふるうてはいもんしてのべけるをきん平きつとみてやあらふしぎや此おのこがていたらくは御所かたの玄よれいとはばつくんにちがふたりとりわけ人そうもふつゝかなりげにやおもひ内にあればいろほかにあらわるゝいかさま此ちよくしはしさいなくてはかなふまじまかり出てたづねんとおもふがいやいやそつじのいたりしてあしかりなんとちやくとしあんしさてそろりとたつておもてへまはりまづ下人どもを取てふせしてあのちよくしはいづくよりさまよいきたるぞまつすぐに申せすこしもいつわる物ならばいち〳〵くびをねぢきらんとにらみつけて申ければ下人ども大さにおどろきふるいわなゝき申けるはあれはおゝいの大じんどのゝ御内なるはやしの六郎と申人にて候がしんわうの御むほんにつききんちうにてうつべきたくみにてかくのごとくにて候かやうにはくぢやう申せしちうせつにいのちをたすけくたされ候へと申心得たりとなげすてゝやがてざしき

につつといでちよくしを取ておさへさて〳〵おのれめはめうがもしらぬぐ玄んかないかにちりやくなればとてぼんげの身としてちよくしのすがたになることはあまりにもつてもつたいなしことにしやうぐんの座上にいでくわんだいなるべんぜつかなやれならはぬきやうはよまれぬものにてはなきかさてもみごとのちよくしのふせいやいかにかたぐ〳〵かほどてあしのあれたるおくげはよの中のけんぶつ物にてはなきかおのれらがぶんとしてわれ〳〵をたばからん事とうろうしやてつにむかふににたり此よのくげをさらりとやめてらいせのくげんをうけよとて御玄らすにひき出しくびをねぢきりすてたりけるかのきんぴらがていたらくげんじのみたからは是なりたゞ是なるわとさてほめぬものこそなかりけれ

## 第二

玄んわう御むほん并よりよしうつての事

この事なをもかくれなく玄んわうをはじめたてまつりいづれも大きにおどろかせたまひたくみしちりやくのあらわれしうへはいかゞはせんかたぐ〳〵としんいをくだきてひやうぢやうあるおゝいの大じん申さるゝはもはや此うへはとかふ申におよぶまじ大ぐんのもよふしてかわちの國こんがうざんにきみをうつしきんべん口のちくほくを切入れらうまいをようひして一両年も御ろうじやうましまさばよりよしにいしゆぶかきしよ大みめうめさず共まいるべししからばよりよしおのれとじめついたすべしもしおしよせきたる共所はなん所やまん〳〵たにぐ〳〵にとをめをつけ一方よりかけ出〳〵むにむ三にたゝかはゞりをゑん事はうたがいなしいさめやいさめかたぐ〳〵とせんぎ一づにさだめしのひ〳〵にせいぞろへ三重うへをしたへとかへしけるかくてしんわうはおくの御てんに入らせ給ひ太子ささをちかつけてかやう〳〵の次第にてかはちの國へおもむくなりおもひのまゝに打かたばめでたく御めにかゝるべしもしまたいしかに打まけなばちぎりおきにしかね事をおもひ出したまひなばごせをとぶらひたまはれやなどりおしやとの給ひてなみだにくれさせ給ひけるやよひのうへはきこしめしこはうつゝなの仰やなかいらうのちぎりあさからず一日へんじもいかではなれまいらせんい

づくまでも御ともにめしつれゆかせたまへやとかきくどきてぞなげかるゝしんわうつく〳〵御らんじていたはしきありさまや誠きんごくせんじゆの花のよそおいとあらそふすがたもかはりはてたりあゝさてふびんの事共やいかゞはあらんとむすぼれさせ給ひしが御心つよくも御なみだをおさへげにことはりなりさりながらいくほどなくもきうくしてまたこそまみへ申べしその内ふみのおとづれいたさんいとま申との給へばその時わかみや御たもとにとりつきみづからなんしとむまれをなしことさらおゝちのかたきなりたゝみづからも御ともにめしぐせられ候へとなみだながらにの給へばしんわう聞召おゝいとやさしくも申たりさりながらはゝをのこしおくなれば御身も共にとゞむるぞはゝにかう〳〵有ならばちゝがともにはまさりなんとひこゐるたもとをひきわかれはや御こしにめさるればちからおよばずみやきさき御あとをみおくりてさらば〳〵とのなみだのわかれぞあはれなるわかれ〳〵になりにけりさるほどにしよぐんぜい御こしのせんごをしゆごしつがふそのせい五まんよきらくやうをうつたつてかはちの國にぞいそぎしがほどなくこんかうせんにもなりぬればほりをほりへいをぬりやぐらかいたてさしあげてろうじやうのよういしてよするかたきを三重今や〳〵と待いたり此事なをもかくれなくよりよしは聞召いかにかた〳〵二のみや御いきどをりやまずしてざいきやうのぶしをかたらい大ぐんにてかわち成こんがうせんに立ごもり給ふなりまづ〳〵さんだいしてみぎのしだいをそうもんせんとやがてきんりにあがらるゝ御所にもなればはじめおはりをいち〳〵そうもんありとかく大ぐんにてこんがうせんにひきこもらせ給ふ事さだめてそれがしを御てきになさるゝと存候いかにもしてみやの御いきどをりをなだめらるべきとそうもんあるみかどゑいぶんまし〳〵てされば二のみやはもりずみがゑんるいたりもりずみたいじの後はちんにも心をへだてしなりさればとてそつじのうつてはかなふまじまづ〳〵ちよくしをくだしものしだいをゑいぶんにたつせんと三條のもろいへに仰付らるゝうけ給はり候と御まへをまかり立三重かはちをさしてぞいそがるゝこんがうせんにもなりしかば三條のもり家ちよくしにさんじたるよし申入るゝば

んの侍承はりやがて此よしを申上る二の宮聞召もろいへめせと仰けるかしこまつて候とおもてに立出こう〳〵御とをりと申上るもろ家御まへにかしこまりさても此たびの御むほん天子にたいして御うらみは有まじく候しせん御うらみも御ざ候はゞ此もろ家につぶさに仰入れられ候へ其だんゑいりよにたつし申べく候いはんやれんしの御中なれば御しつくわいは有べからずといさいこまやかにあいのぶるしんわう聞召天子にうらみはなけれ共たゞ御まつり事せいめいならずぶけより天子のけんへいをとりおこないくげ日々におとろいはんべければ天下のめつぼうとほきにあらずさるによつてわれ天道にかわつてあくぎやくぶだうのよりよしをたいじいたさんそのためにかくはおこない候なりいそぎうつてをむけられ候へとぞ仰ける時に大じんすゝみ出いかにもろ家今このきはにおよびてせんじもちよくしももちゆべきにあらずいまに此きみを天子とあおぎ奉らん事あんの内なりはやかへりて此よしを申せとちよくしをかいつかんでもんより外へなげいだせばもろ家はきもをけしいきたる心ちはあらずしてやう〳〵としておきあがりみればたてゑぼしおも打をとされてうしなへばかりきぬのそでをうちかざして人のみるめもおもわくもいかでかもつておもはれんほう〳〵みやこへにげのぼるかの大じんのあくぎやくもろ家きやうのていたらくしやうしせんばんなか〳〵さてにが〳〵しくこそみへにけれ

## 第三

三條のもろ家はあやうき命をたすかりていそぎていとにげのぼり二の宮の御所存のとほりおほいの大じんがあくぎやく一々そうもん有ければみかどげきりんやすからずいかによりよし二のみやがむほんにおいてうたがいなしいそぎなんじはせむかいすつとうつさずついとうし天下いつとうにおさめよとのせんじなりかしこまつて候とりやうぢやう申御まへを立三重やかたにかへらせたまひつゝ諸ぐんぜいを引ぐして河内の國へといそがるゝこんがうせんにもなりしかば大手からめてもみ合時のこゑをぞ三重上にける城の内にもかねてごしたる事なれば同じく時を

合せつゝ我さきにと切て出火花をちらして三重たゝかいけるされ共せうぶは見へざりけり其時城の内よりもむしや三人すゝみ出大おん上で申やうとをからぬものはよりて見よちかきはかねて云つつらんおほいの大じんの良等に杉山だんのすけいつなのてつしん坊あたいの八郎といふ者なりよりよしの御内なる四天王は出ぬかやはなぐ〳〵しく太刀打して諸人のねふりを覚さすべし出よ〳〵とのゝしれば其時げんじのごぢんよりむしや五人すゝみ出我は是げんじふだいの侍にたけべほそかはとだ大田むらやまとて何れもおとらぬゆうしなり四天わうにてなければ太刀打はならぬ事か我々がうでさきをそつと心み給へといふ三人のもの共うちわらつてやあなんぢらごときのぐ人らはありのたけともおもわぬぞあしもとのよき時にとう〳〵ひいて四天王をいだせといふ竹べの平六はらをたてあまりひろうのことばやと太刀ふりかざしゑしやくもなくうつてかゝるすぎやまきつとみてあゝ心みぢかきおのこやとまさかりを取のべみぢんになれと打ればかぶとのまつかうむないたまでわりつけられしりへにどうとふしたりけるほそかは藤太つゝと出おゝ口ほどなるむしやぶりやとおもてもふらずかゝりしをてつしんわらつて出ごへんもしやばのうきすまひもはやあきかぜ立たるかとかなぼうをとりのべ打ればらつくわとちつてぞしゝたりけるとたの小太郎うんは天にありとはしりかゝるをてつしんちうにつかんで大ぢへ入れよとなげればうんとばかりをさいごにてくさばのつゆとぞきへにけるのこる二人ははがみをなしむ二む三にかゝりしをあらいの八郎心得たりととびちがへ二人をさうのこはきにはさみかうべと〳〵を打合らつくわのごとくにしてぞすてにけるよせてのぐんびやう膽をけしゝりまいしてぞひかへけれわだ左衛門きつとみて出きやうようにほうぜんと太刀ひつさげためむねとは我がことなり人ませもせずかゝりしを八郎おつ取なをしちやうど打をはつしと合いれみだれてしばしかほどたゝかいしが八郎がぼうをさそくにかけてかつとなげすておさへてくびをとつたるは時にとつてのめいやうかなすぎやまだんのすけ是をみてげに四天王にありけるよと一もんじにかゝりしをむさしのかみたけはるはしりいで打くるまさかりむずと

とりゐいといふてとらんとせしをいかでごへんにとられんゐい〳〵こゑを出しねちあいしかすぢがねわたせし大まさかり中よりふつゝとねぢきつたりすきやまいかつて太刀をぬかんとする所をまさかり取のべちやうどうてばちしほにそみてかつはとふすてつしん是をみていさぎよきふるまいやそこをひくなとかゝりしを公平一もんじにかけ出ておしならべてむんずとくむ両方のふむあしはぢしんのゆるにことならすされ共公平大ぢから大こしにひつかけてかしこへどうとなげおさへてくびを打をとすまた大のおのこ一人はせ來りのがさじときつてかゝるをひつぱづしかいつかみやあさきほどのごぼうとはばつくんにちがふたりからだばかりでちからはなしひとへにあさがらをもつてあつかふにことならずとくびをふつつとねぢ切て其後大せいを四方へばつとおつちらし身かたのぢんへしんづ〳〵とひいて入つたる此人々のていたらくとうはつびしやうもんはくわうもいかでこれにはまさるべきあつぱれゆうしのあつまりやとさてほめぬものこそなかりけれ

## 第四

八まんあらはれ出竹みつをたすけ給ふ

其後むざんやな竹みつは俄にきやへいに取つめられ今をさいごとみへしかば皆々袖をぞ𤏋ぼらるゝされ共あにの竹はるは泪をおさへ立よりていかに竹みつ忝もしゆくん頼義公の御まへ成ぞか程の少病にてさやうにみへけるが心を取なをせ竹みつとすゝめながらもかなしくてしのび泪はせきあへずむざん成かな竹みつは竹はるのこゑと聞くるしげ成いきをつぎああ忝次第かなさいごに君をはいし奉る事是人々のおなさけゆへなり誠に御せんどをみとゞけ申さずやみやみとしせん事かへす〳〵も口をしやいかに竹はる殿ふるさとの母うへにさいごの有さまをかたりて給はれ公平殿はいづくにましますしやきやう竹はるをよきにめがけてたび給へなごりおしのはうばい達あにうへ頼奉ると是をさいごのことばにてついにむなしくなりける是は〳〵とばかりにておの〳〵泪をながさるゝかゝるあはれの折ふしいづく共なくにくはんたゞしきらう人來ていかに方々それ成ておいおひごうの𤏋にして有ければ心やすく思ふべしいで〳〵

くすりをゑさせんとくわいちより取出し立より口に入給へばふしぎやにわかにいき出であらくるしやとこゑをあぐれば人々よろこびいさみをなす其時頼義らう人にむかいして其方はいか成人ぞと仰ければこたへていはく我は此國のこんだの八まんなりやがて天より力をそへさせ給ふべしそれまではあいまてとてくもいはるかにあからるゝはつとかんして頼義はこくうを三どらいはいし扨はふつしん三ほうもいまだすてさせ給はぬと御よろこびはかぎりなし扨又三田の竹みつも次第〳〵に本ふくいたしければおのおのきゑつのまゆをひらきさあらばおしへにまかせんとひろおかに御ぢんの取三重しばらくひかへていたりける是は扨おき物のあはれをとゞめしは都にのこされおはしますしんわうのたいしきさきにてしよしのあはれをとゝめたり扨もつまのしんわうは川ちへしゆつぎよなされしよりかせのそとふくにだに今や歸らせたまふかやおとづれもましますかとあくがれ待わひ給へ共其かいかくもたいしましますことなればゑいりよをくだかせ給ふべしつれなかりけるうきずまいやとりうていこがれなげかるゝわかみや御泪のひまよりもいたわしや父うへのしつ山がつの御すまいさぞや物うくおほすらんあらうらめしのうきよやとおもひまさらせ給ひける母うへあまりやる方なさにいざやわかみやなんでんに出文ごのつね〳〵御心を入れ給ひしめい所づくしのびやうぶをせめてはうきをわすれんとわかみやの御てを引女ぼう達をめしぐしてさしきに出さて給ひつゝ立より是をみ給へば國々に聞へたるめいしよ〳〵のうら山を四きによそへてうつさるゝまづひがしのびやうぶにはおもしろや花の都のはつはるやおとわの山のうすがすみけふたちそめしとしなみのかものかは風のどかにてこほりとけ行きよたきやたにのと出るうぐひすのこゑやたかおに聞ゆらんとばたのおもの衞つゝくよとのゝさはのまこもぐさつのくみわたるおりしもは水のみまきのはなれこまけにおとに聞つの國のなにわのはるのうら風にたかしのはまや住よしの松のみどりもひとしほにさきてかゝれるふぢなみはなつのはじめと打みへてくもいのよそのほとゝぎすたかまの山をやすぎぬらん立田のかわのうのはなや十一の里のなつよつもかけてやさらすさほかわのきしのやなぎの

下すゝみいつのまにかは神風のいせのはまおぎ打そよき今こそあきにあふみぢやきへ行月のかゝみ山光りをみがく水うみのなみやこほりとみへぬらんあれてやさしきふわのせきたびゆく人の立わかれいなばの山や宮ぢ山みねのもみぢの色々はたれかはそめしからまつも二村山の村さめぬれてさはたるかりかねのおつるへいさはびやう〳〵としほのひかたの今みロはまなのはしはあとたへてさよのなか山是かとよ打こへみればおゝい川みなぎる水のなみまくらはやくも袗にきよみがたせきのとさゝぬ君が代のひさしかるべきためしにはちもとのまつこそめでたけれふじのたかねの白たへにつもれるゆきをみるからにふゆのけしきはおもしろやいづのみしまのみやだちもいくよへぬらん神さびてかまくら山のほし月よ大いそこいそこゆるぎのおきにつりするあまをぶねこがれてかへる夕ぐれはゑんぼのきはん是ならんあきのちぐさのいつとなくふゆがれはてゝむさしのはこのいけみづこほり川かもめおし鳥都どりむれいでゐそぶよそおいはふでのかぎりやつくすらんしもうさにはかとりのうらかづさの國にゑたのはまひたちにかしまの宮しろやふりさけみればつくばねのみねよりおつるみなの川いまだはるにはあらね共なみのはなさくさくら川かのつらゆきのことばにかけしむかしのおもかげもげにことはりとみちのくのちがのしほがままつしまやおしまのあまのとまやかたふきあらしたるうら風はそとのはまにやかよふらんすへのまつ山よつも川あこやのまつのこのまよりおきにみへたるつがるのしまち烏共よぶそてしまやゑぞがしまの有さままでのこるかたなきふでのあとくりかへしみ給ひて少心をはらさせ給ひわかみやの御てを引女ぼうたちもろ共におくの御てんにいり給ふとにもかくにも此人々の御有さまたゞよのなかのものゝあはれはこれなるはとみなかんぜぬものこそなかりけれ

## 第五

明神しんたく并頼義ようちの事

それせうしきはいのらぬとても神はやどるよのならい頼義公の御ぶうん口さにつきざるしるしにや竹みちもしにをのがれければ御ゑつきはなだかぎりなく扨人々を御まへにめされいかに方々所こそおゝきに

八まんみやちかくちんの取こめでたけれかつうはたうしきたうのためいざやさんけい申さんと人々をめしぐして三重神前さしてぞ參らるゝおまへになればわに口てうと打ならしなむきみやうちやうらいこんだ八まん大ぼさつ口口ちやうていのほん主累世りせしめ給へとふかくきせいをかけ給ひそのゝちねぎかんなきをめしあつめかぐらをそうしみゆをあげ三重しんりよをすゝしめたまひけるしゆしやうなりける次第なりあら有がたや有がたし神ものうじうましましてかんなみにより給ひ御たくせんこそあらたなれふしておもんれみればしんはひれいをうけずまさにしやうしきのかうべにやどるいかに頼義がつうはれつざのかしんら其外ていしやうの方々心をしづめけいしゆしてわがたくせんをたしかに聞それ我がてうはしんこくにて神代より此かたよゝをつたへしすべらぎの竹のそのほのすへばまでたれか是おあをがざらん然るにしんりよをないがしろにしわういをもおそれずおのがけんいをふるはんためばんみんをのうらんしてうかをかたむくる共がらをてうてきぎやくしんと是をいふあゝちう成かなしんなるかな爰に頼義はたを上げせんぢやうにおもむく事身のため家のためにあらずひとへにてうかたいへい國どふねうのちうしんなればいかでかんなうなからんやあたか一だいふんしんしがうまのりけんに身をへんじてきちんにいりて打やぶり又はこんがうてつとうのたてとなつては身方をまもらんしかのみならずやれまつしやのほこらもたいちやう〳〵しんりきをはげまし天をかけりちをうごかし爰にとびかしこにひぎやうし四方四ゆいをはいくわいしてきをそくじにたいぢせんことなをたな心をかへすごとけんなんたちてうかのしゆごとしてたんせいをぬきんでまるをいさむる心ざしかへす〳〵もしゆせうなりいはんやじひをむねとするしんめいにおいておやせいやくいかでむなしからんなほ〳〵しんりよをすゞしめやあ方々との給ひてしばしたゝずみおはします其時ねぎはいさみをなしまたみかぐらをくりかへしうたには神ものふじうをたれ玉らゆのはなをさゝげていざやじんかをうたはん神おどりしていざやしんりよをすゞしめんちよをたのしむひなづるのよはいを君にさゝげんそうよや〳〵よろづよわいをまもらんとみなもろ共

にいさみをなしきつ〳〵のこゐたへにして三重神はあがらせ給ひけり人々きゐつのまゆをひらき有がたきすいそうやとふかくかんしてそれよりも君の御とも仕り三重やくへ所をさしてぞ歸らるゝやく所になれば御大將頼義公人々をめしあつめ城中のぐんせいいまだ三萬きにおよぶと聞然共てきより更に打て出ず此上はみかたにもくらいをはかりあいしらいばかりによせかけてひやうろうづめにするならば我とじがいをいたすか又はかう人に出るより外は有まじきぞまづ方々はせめ口をまもり爰かしこにとをめを付城中へ出入のやつばらを一々に打取べしてきたいくつに及打て出る其時は一どにどつとかけ合中に取こめ打べきと其りあきらかに仰ければ公平承り上いのだんせうち仕候へ共天下むそうの我々が有ながら左様にゆふ〳〵とひかへてはたもんのさみする所も有あく所なん所をおゝ申にあらずいでそれがし一人かけ入て大將大じんかくびをぢさん申かそれがしかくびをてきにとらるゝかいきすきたりや我が命うむの二つは爰なりいとま申て方々と一もんじにとび出るをため宗取ておさへ誠にもつて申さるゝごとくたとへばかたきてつべきをつみかさねたり共御ぶんをさき立我々おなじく打て出ばふみやぶらんはあんの内なり玄かれ共只今君の仰いだされしごとく所はなん所ことにてきも大ぐんなれば一人としてはおぼつかなしことさら此頃は大あめ打つゞき馬のあしばもあしかるべしまづ五三日も相待てせんぢんごぢんのさだめおき只一どにかゝるべしまづ玄づまり給へとせいしければしきりにいさむ公平もためむねが其一りにきをのまれ心をほつきとおりて玄ゝのいかりをやめにけるかゝりける所へ都よりちよくし立頼義に近付此たびのたゝかいすじつとへだゝり君もゐいりよをくだかせ給いまづそれがしをつかはされ候きん日ざいきやうのしよぶしをさしこさるべしずいぶんはげみ給へとせんじのおもむきあいのべ給へば頼義承りこは忝次第やとつつしんでちよくとあればちよくしは都へ歸らるゝ其時公平又申やういかに方々此上はたがいのたんかうなり扨都せいくわゝりなみ〳〵のはたらきしては天下になをゐし人々ちじよくとはおもはれぬかとかく都せいのつかざる内にいざ取かけて打べきと思ふはいなやためむね聞ておふ申さるゝ

所しごくせり此うへはじこくうつさず取かけ申さん去ながらもはやこよいは日もくれぬ明日さうてうにおしよせんといへば此ぎ尤然べしとおの〳〵せんぎひやうぢやうして三重いまの内へぞ入にける去程に城中の大将うたの大じん諸ぐんせいをまねきよせいかに方々扨も頼義はらうどうの竹みつが大病をうけ其うれいに沈み諸ぐんせいもうしやうすると聞て有此たくみこそくつきやう一のさいはいたりことに此頃の大雨にいよ〳〵てきはゆだんせんこよひよ打におしよせて皆こと〴〵く打取て其後都へせめ上らんとさも大ようにぞ申さるゝ一身の人々是を聞此ぎ尤しかるべしと扨よ打の大将には平のむねひろまかいの左衛門つがう其せい三千よきにてくさすりやくつわあぶみをきぬでつゝませ玄のびやかに城を出三重かたきのぢんへぞおしよせけるかゝる所にわたなべむさしのかみ竹はるはてせいをひきぐしぢんばのけんみに出けるが此よしをみるよりもすはやかたきがよ打に來れりゑゝおのれらあんおんにはかへさじとやがて侍一人近付やあなんぢはいそぎ公平の方へ參りて申さうは只今かたきよ打におしよせて候其だんを玄よぐんせいへふれさせ給ふべし少もおどろくふせいなく大てへかけ出給へそれがしはからめてへまはりうしろより取まき申べしことさら此中の大雨にてこんた川へばつこみ申さんと手立こまやかに申付たかしこまつてそれよりも公平やく所へいそぎけるかくとは玄らでかたきのせいこんた川を打わたしひろおか川原におしよせて三重時のこへをぞ上にけるかくて公平は竹はるがあいづのごとく大てへかけ出同じく時をぞ合けるかたきのぐんびやう共あんにさういしてあきれはてゝいたる所へわたなべのたけはるからめてよりおしつゝみたいまつにひを付させあますまじきと打て出ればかたきのぐんせいきもをけし我も〳〵とこんた川へとびいりて水のあはとうせけるはげに心ちよくこそみへにけれわづかにのこる物共も皆こと〴〵く打たつればよ打の大将こはむねんと一もんじに切てかゝるおふ玄たりやと公平はとびちがへてむんずとくむ左衛門すかさず公平がみだれがみをひつつかみ引ふせんとせしを竹はるはしりかゝつてかいつかみゆんでへどうとおしふせた時に公平申やういかに竹はる此二人のやつばらはさすが

に聞へし大將なればいざ君へのみやげにせんおふ尤の次第やとめい〳〵にひつさげてやく所をさしてぞ歸りける二人のもののていたらくあつぱれぶそうのゆうしやと扨ほめぬものこそなかりけれ

## 第六

### 去んわういけどられ給ふ幷頼義かいちんの事

かくて公平たけはるはよ打の大將をいけ取ていそぎやく所へ立歸り君の御まへに參り有し次第を申上る頼義聞召方々がはたらきははんくわい長郎にもこへつべし扨あのまかいの左衞門はせんぞ代々げんじにちう有物にて有其うへ思ふしさいあればかれは其まゝたすけをけ又平のつねひろはかたきのすへにて有間いそぎかうべをはねよ承候とやがてかはらに引出し其まゝかうべをはねにける左衞門つく〳〵思ふやうそれおんのみておんを去らざるはぼくせきにことならず此上はすいぶんちうをつくさんとおもい御前にかしこまり泪をながし誠にもつて御たすけにあづかるのみならず有がたき上いのおもむきかんるいきもにめいじて忝し此ちうかうに城中のやうすを申上べし然にこんごうせんと申はたとい五萬十萬のせいにてせむる共たやすくはおち申さじされ共爰に一つのなんぎこそ御ざ候へ山の南にあたつていわたけせいすいがたきとて二所のたきあり此みづを城中へ取申候が大じんも此方を一大じと思ひそれがしをつけおかれ候此みづを切候へば城中へは水少も來らずしからばぐんびやう共水にうへていくさせん事思ひもよらず皆ちり〳〵におち申さんそれがしはしんわうをいけ取奉り御身かたへはせさんじ申さんかの水上にはそれがしがはたを立おき申べしあしがる共をさしつかはされ水上を切おとさせ給へとてだてこまやかに申上る頼義聞召少のせんごんにて大とくをもとむるとはかやうの事をいふべきと御悦はあさからね扨左衞門は御いとまを給はりて城中さしてぞ歸りける其後ため宗を召れ右の次第を仰付らるれば承候と御前を罷立三重やがてしたくをしたりける去程にかくてわた左衞門てきぢんにはせ行て城のていをみ上るにまつ北にあたつてもへぎのはたにくきぬき松かはひめ小松のさし物と四つめゆいにまいづる花わち

がいをさしたるはしらいたうと打みへたり大ての方にあかぢのはたにみづ車たつなみきつかう三かいかさ一やうにねざゝのさし物はよこ山たうとみへにけり南にあたつて白はたにもみぢに玄か花すゝき打たるこそまかいの左衛門がちんばなりとみ付つゝぐんせい共を引くしてしづかに山くさし上りくだんのたにを其まゝにざんしに切ておとしつゝ三重本ぢんさしてぞかへりける去程にうたの大臣はしん王の御まへにかしこまりてきあんないを存つゝ此城の水上を切候へば城中のぐん兵共水につかれどろによへるうをのごとくに罷成候へばもはや此城たもちかたしきみはいそぎ大和の方へ御しのび有かさねてぎへいを上させ給へはやとく〳〵といひもあへず御こしにのせ奉りよしのの方へぞおとしけるぐんぜい共是をみてさあしん王のおちさせ給ふは我も人も命有てこそおんしやうのさたにもあらめ只おちよといふこそあれ三重皆ちり〳〵になりにけるかくて其後みやこよりかせいのともがら三萬きにてはせ來り頼義なゝめに思召いそぎ取かけ一時にふみやぶらんと大てからめてもみ合三重ときのこへおぞ上にける大じん大きにおどろきて此上は力なし只む二む三に打て出てかうみやうせよ承候と我も〳〵と打て出れば公平ためいわかむしや共ゑたりやあふと立かゝりあたる所をきらいなく三重はらり〳〵と切にけるすさましかりける次第なり城の内のつわ物共皆こと〴〵く打れければ大臣今はかなはじと家につたはるらうどうにさなたむろしまいざはかつまたとて一きたうせんの物共をせんごさうに相ぐして一ぢんにかけ大おん上此度の大将うたの大臣とは我事なり天下わけめのいくさなれば頼義にたいめんしうむのせうふをけつせんとぞ申さるゝ公平聞てやあなんぢかやう成あくぎやくふたうのぐにんめをいでけころさんといふまゝに一文しにかけ出るさきにすすむこなたの次郎心へたりとおしならべてひつくんだり公平こと共せず上おひをかいつかんで力にまかせてなげければあけそみてぞ玄玄たりけるむろしま太郎はがみをなしてとんでかゝるをため宗ゑたりとひつくんでやがてくびを打おとす大臣いかりをなしいざはかつまたをさゆうに立只一打にとかゝりしを公平心へむすとくめば二人もさうより取かけつかんとする所を竹はるげ心か

け來り三人をかしこへどうとなげ一々くびを打おとす扨公平かさにかゝつてひしぎ付んとしたりしが大臣聞ゆるゆうしにてかくればはづしなくればとびしばしが程こそもみあいけれ公平ほうどあぐみはてゝいたりしかげに思ひ出したりりんごの玉とて竹つなさづかりしひしゆつは爰なりとやはらにほくれて取てふせおのれにほねをおりたりとくびをふつつとねち切て君の御めにかくる時にまかいの左衛門はしん王をいけ取奉れば頼義なゝめに思召悦の時を上都をさしてかいちん有やがてきんりさにんだいし一々次第にさうもん有君ゑいかんかぎりなくゑんわうをおきのしまへながすべしとせんじにてやがてゑまへぞながしけるさて頼義はおんしやあつくかうむり給ふなを〳〵けんしの御はんじやうせんしうばんざいめでたき共中〳〵申はかりはなかりけれ

寛文三亥卯年正月吉日

## 頼義金剛山合戦終

# おやか八さう記

付佛母まや婦人

## 第一

それきやうにいはくあんじゆ一さいくどくおほうゆぶ十ほうきやうごんほうへんにう佛ほうぞう上きやうひがんとうんぬんこゝに五てんちくの其一つ中てんちくまかたこくのあるじをば上ほん大わうと申たてまつるおひ第一のけんわうにてばんみんをあはれみ給へば國もゆたかにおさまりて上おろしたみのとざしもおづか也偖またさうのおんかにはぐわつくわつ大じんまか大じんとておんぎたゞしきちしん國のせいたうれいあつくきみをおゆごし奉るおかるに上ぼん大わう御代をつがせ給ふべきわうじいまだましまさずさうの大じんけいしやううんかくあけくれ此ことひやうでう有其頃せんじやう國のあるじせんかくわうのひめみやあねにきやうどんみいもうとにまやぶにんと申てよにならびなきびじん有しをむかへとらせ給ひ兄弟共に後にそなへ給ふ誠にやさしき御すがた月にねたむかほばせはくものうへにもならびなし花にあらそう其すがたやううようよりもたをやかにひすいのかんざしあをふして　たけにあまりてふし色ふかくるりをのべたるよそをひはたゞ天人にことならず大王ゑいりよに入せ給ひあねきやうどんみは月のかたばおやうぐんをあひそへげつけいでんにうつし給ふいもうとのまやぶ人は花のかたうおやうぐんをあひそへせいりやうおやうへうつし給ふ兄弟共にいつくしく花とやいはん月とやいわんおもいはものうへなれやあまつおとめのはごろも袖のひかりやまさるらんぎよくたいにおたしみ給ひ御みやづかひ給ふこそ國もゆたかにたみさかへ御代長久の御すいそう三重めでたかりける上次第なりかくて其後御いもうとのまやぶにんは君のゑいりよあさからずせいりやうおやうの玉のとこけんのまゝらにかたぶき給ひ少まとろみ給ひけるかゝりける所にこくうにをんがく聞へおうんたな引おりからこんおきたへなるほうとうの十六丈にそびへこんおきのはた七ながれおつほうおゆ八本ぶさうの花ぶさにほひふかく三望心もことばも上およばれずぶにんふしぎにおぼし召ま

くらさし上み給へばほうとうの内にたつとき御佛ひかりをはなちかとくゑやうどうくをんごうひやうとうゑゆゑやういつゑちぐはんにむぞくこんげんざいとうらいけちゑんゑよぶつちととなへ給へばふしきやなびやくさうゑやうれんげをいたゞきふづぜんに來る其時御佛ほうとうを出給ひれんげのうへにざし給ひぶにんにむかつてのまたふやういかにぶにん御身にけちゑんふかきゆへ今爰にらいげんす上ぼんわうをちゝとたのみぶにんをはゝとたのみてゑゆゑやうのぐはんをみてんなりぶにんのたいないをかしゑさせ給へとの給へばぶにん聞召あらおそれ有おこがまゑやごしやうさんゑうのわが身にていかでたつとき御佛にかしまいらせんこと共もつたいなしとの給へば佛かさねていやとよぶにんすでにゑんいのむかしをかたつてきかせん御みくはこのむかしはとうゑやう國のほうゑやわうのひめみや也るりによと申せし人ありゑがけいぼのざんにてせつたらせんといふ山中にすてられ給ふ其時御身はゑやうくはうぼさつのとかれたるげだつけつぼんぎやうを一まんぶどくゑゆし日月とうみやうぶつをくやうし給ふそのくりきによつて今すでにまやぶにんとむまれ上ぼんわうにゑたしみ給ふ其時の日月とうみやう佛は則われなりかゝるけちゑんふかき御身のたいなひをかるぞと御こゑあらたにのたまへばぶにん御てをあはせ此事わびんとゑたまふがふしぎやぶにんの御てより二十八本の正れんげあざやかにひらき出る其時み佛れんだいにうつらせ給ひさしもたへなる御こゑにてがとくゑやうどうこんげんざいいこんとうらいゑよぶつちととなへさせ給ひ三五のちぶさをかきわけかげのうつるがごとくはやたいなひにやどらせ給へば其後ほう爰ゆの花ぶさ一どにひらけもろ〳〵の御佛あらわれ出させ給ひくはうみやう十方せかいみぢもゑよなん爰ゆごしよ佛しやう〳〵ととなへ給ひてぶにんをらいはいまし〳〵て三重こくうにあからせ給ひけるぶにん大きにおどろき給ひゆめさめわが身をみたまへば五たい六こんきよやかにくはうみやう御てんをてらし給ふこはもつたいなき御ことやとこくうを爰ばらくらいはひありそれよりもまやぶにんくはいたいの御身とならせ給へば君をはじめ奉りげつけいうんかく天上人みんかんあやしのすへ〳〵迄おも

ひ〳〵の御よろこび三重たとへんかたこそ上なかりけれ是は偖をき世の中の月にむらくも花に風つらき事こそ出きたれげつけいでんにおはしますあねきやうどんみの御まへにば玄やうぐんをめされ偖もまやぶにんはわうじくわいたい仕り君のあはれみもてはやしよのはゞかりもなきときくわうじたん玄やうあるならばまやがいせいみのひかりうへみぬわしのふるまひをおもひやられてうらめしや兄弟のもの共がおなし大りにすまひして君の身ひとつにみやづかひまみへ申事共はよにもためしのなきことかなたとへゑいりよにうつゝなきおもきおほせのあるとてもまやぶにんはそしなればみづからが心をはぢ君へおいとま申上ふるさとへかへらんことこそみちならん又ふるさとのちゝうへも兄弟が中一人は御かへし給はれとたつてさうもんあるならばいかでかなはであるべきやいまよりのちはおや有共おもふまし又ぶにんが有さまよそのみるめもかへりみずわがありがほのふるまひ返す〳〵もきつくわいなり玄よせんみずからはかゝるじせつにながらへてせんなきことをおもはんより玄がいをとぐなる又はいか成ふちへも身を玄づめ一ねんのあつきと成まやもわうしも取ころし今のゑんいをはらさんといろをかへての給ひしはふしげにすさまじくみへにける將軍承りばに御どうり玄ごく仕り候仰のごとくまやぶにんはわうじたん玄やうましまさばちうぐうにようごとあふがれ給ひよのはゞかりは候ましあれ君の御身にていもうとのいせいにおしまけ給ふは口をしき次第此上はまやぶ人をてうぶく仕りくはいたいわうじもろ共取ころし申さん玄からば君にうへこす御かたなし此だん御しゐんなさるべしとさま〴〵あくじをすゝめけるきやうどんみ聞召うれしき人のたくみかなさあらば其だんよきやうにはからひ申せとのたまへば將軍承はり其ぎにて候はゞさいはひ爰にぎばくせん人と申てめいよのぎやう玄や候かれを頼てうぶくいたし申さんとおくりひそかに便を立にける かくてぎばく使と打つれ參上すきやうどんなのめに思召それこなたへといめんありさま〴〵の引出物を給はりいかに仙人まやぶにんをてうぶくし取ころして給はゞんじはたのみ奉る行者承り仰そむきがたく候へばたちまちいのりころし申さん去乍てうぶくの法と申は七だんの

次第候中にもくわいたいのてうぶくは其たいをよくみとめ申さではかなひがたく候きやうどんみ聞召それこそやすき次第なれまやぶにんをたばかりよせみせ申さんとふみこまぐ〳〵とかきしたゝめせいりやうでんへさしつかはし行者をこかげに玄のばせまやぶにんの御出をおくり今や〳〵と待給ふあらいたはしやまやぶにんはかくすさましきたくみとは夢にも玄ろしめされずあね君よりの御ふみ世にもなゝめに思召女房たちを御供にてげつけいでんへうつらせ給ふふし心の内こそわはれなれきやうとんみは出給ひあらめつらしのまやぶにんいざこなたへとのたまひてをくのでんへ玄やうじ給ひめでたき御身のよそをひや家のおぼへよの聞へ何事か是にまさらんとさまざまもてなし給ひけるすでに玄ゆゑんもおはりて後いかにぶにん心しづかにあふ事はよろこびの中のよろこびなり玄ばしとこそはおもへ共又こそむかへ申べし君の仰もいかゞあればなごりはつきぬことながら歸らせ給へとのたまひて御泪こもろ共にわかれ〳〵になり給ふおくり心の内こそあはれなれかくて其後ぎばくせんにんこかげに玄のびまやぶにんのおもかげをおもひのまゝにみすましきやうどんみに打むかひさらばいのり申さん御心やすくおほし召せとことなげにぞ申けるあね君なゝめにおほし召へんしもはやくいのりてたべばんじは賴との給へば畏り候とやがてよういを玄たゝしは三重すさましかりける上次第なりかくて行者はひつちのよねを取よせ月の水をむかへ取七どあらひてこにくだきまやぶにんのかほばせをおもひのまゝにつくり立ひつちのわらにてかたちをつくり五ぎやうのくしにてつき合せ五玄きのきぬにてみをつゝみはなたのをびを引まはしみつばのそやをぞさゝせけるたけのかもしをさげさせかうべにしめをきりかけぢぎやう七尺其下にさかさまにほりうづみ四方四めんにだんをかざるそも〳〵玄ゆそのだんと申はそくさいぞうやくけいやいてうふくとて以上だんは四だんなりまづそくさいはひがしむきぞうやくは冇けいやいは西さててうぶくは北むきなりくもつのやうこそおそろしけれひつほのいひをこく玄きにそめかへし百八十本のくぎをさしへいはくをきりかけまんにはぼけの花玄やすいにはく玄やの水をたれとうみやうにはいもりのあぶらしや

うめうにはこらうのほねひかけのたすきにみをひちへいはくをふり上のつとうをこそ上げにけれふしそも天ゑんち〻ん五りう〻んばんぎのゑやうれうあつきじんうじやうむじやうそうべう〻んみやうどうをうごかしさいはひする殊には今のてうふく人てんけつもふちけのもうこうもう〻つとく五ぎやう五い七ゑやうないばく下ばくゑやへいのほうこうばくばん〻やくむみやうのゐんあんみやうほんなふむゑやうをんとせめにせめてぞいのりけるあまりにつよくせめられば百八十本のへいはくが一つにみだれてゑんどうせりぎやう〻や是に力をゑむみやうぢやうやのせばからんにいでよ〳〵とのゝしつたり其時ふしぎやぢのそこよりもく〻んたちまちをどり出たけのかもじでかほかくしだん上につつ立どうの内にこゑあつていかにあね君わがわたくしのあらざればばんじはゆるゑ給はれと泪をながしの給ひけるあね君此由御らんじいかにまやぶにんわれをうらむることなかれ父うへをうらむべしゑやう〳〵せゝもへだつるぞおやあり共おもはぬなりまして兄弟なんどとはおもひもよらぬことにてあり今こそゑんのきれはなれそれはからへとの給へば行者立よりだん上より引おろしへいはくにをしまきさむしろに引つゝみでん中よりもなけ出しふし其まゝだんをぞやぶりけるきやうとんみは御らんして今こそほんもふ[相]とけたりと心にゑみをふくませ給ふ其時ふしぎやにはかに天ちゑんどうしらいでんいなづま〻きりにて三重ごてんもくづるゝ上ばかりなり人々是におどろきかなたこなたににげちつたり行者こくうをきつとみ何ものの〻よい成ぞ〻やうたいをあらはせと大をん上にてのゝ〻つたり其時うんちうより〻やくびやくのき〻んあらはれせつなが間にかけくだり行者のへつそくひつつかみはるかこくうにとびさり忝も三がいのけう〻ゆ〻ゆつせのもんをとぢふさぎてうぶくいたす天ばついかでもつてのかさしと二つにひきさきこくうにとんでうせにたりしはすさましかりける次第なり誠にたへなる御佛をくわいたいなされしまやぶにんをてうぶくいたせし天ばつもくぜんにあらわれ〻はまつせまでのためしなりとて皆かんせぬ物こそなかりけれ

# 第二

きやうどんみのねたみゆへまやぶにんの御なやみもつての外にましませば君をはしめ奉りおよきやう大ぎんせんぎとり〳〵ひまもなし然る所に月光大ぎんまか大じんをひそかにちか付侍もまやぶにんの御なやみいか成ことぞとぞんせしに馬將軍がすゝめにてなさけなくもきやうどんみぶにんをてうぶくあるとかや侍もにつくひ將ぐんがしはざかな此事君にそうもんせばきやうとんみ諸共にうしなひ給ふはひつでう然る時はまやぶにんあね君の御事をふかくかなしみまし〳〵て御ぐわいたいのおりからいよ〳〵なやませ給ふべし此おこりのこんげんはみな將ぐんがわざなればとか〳〵きやつめを打取せひはおつてきわめんとぞんずるが侍いかゞあらんと申さるゝまか大ぎん聞給ひあつはれこれは大事のさた仰のごとく后の御事はのちのせんぎにいたすべしまづ其あくぎやくをたくむ將軍めをさしのばしおかんはわれ〳〵ぎんたるみちにてなしそれがし將ぐんがたちへおしよせそくじにかれを打取せひはかさねてきはむべしばんじ其ほうとそれがし心を合はからはんにたれかいぎにおよふべきうつてのようにはそれがしに御まかせ候へとひそかにせいをもよふしてつがふ一千二百余きまか大じん大將にてあくぎやくぶだうの將ぐんをたいぢにこそはよせにけれ此ことなをもかくれなく馬將軍聞付むねとたのむらうどうせきゆふといつぎがうりきむ二のくせものその外げくはんのやからことぐ〳〵くめしあつめ侍も此たびのあくじたれぎるましとおもふ所にまか大じんせいをもよふしよするとや今此せつにいたつてちんずるともかなふまじかたきよせなばいさぎよくきりちらし大將まか大じんをうち取わが身にとがなきよしいつわつてさうもんせんゑいりよさらにわきまへなくげきりんふかくましまさばきんちうを打やぶり天下にらんをおこし一せのみやうもんきはむへしまづ大づゝいぎゆみなどをよういせよとある所へあひもすかさずみかたのぐんせいなんぼくよりをつ取まはし時をどつとぞあげにける時のこゑも志づまれはみかたのちんよりはなやかによろふたるむぎや一きこまかけ出しいかに將軍御へんはきやうどんみをいさめ忝も一天のわうじ

をくわいた　なされしまやぶにんをてうふくせしは
何事ぞかゝる大きやくごんごにものべかたし天ばつ
いかでのかるべきすみやかにかうべをはねられ十あ
くのつみをまぬかれよみやうがをゑらぬ大あくにん
とことばせはしくのゝゑつたり將軍とかふのへんと
うなくことやかましきにあればつちらせとげぢすれ
ばかたきのぐんひやうどつとかけ出いれみだれ三重
てつくはをふらしてたゝかひけるさしもよせては大
せい馬將ぐんがらうどう其かずあまた打れける爰に
かたきのらうどうせきゆふは馬將ぐんにちか付何と
たけくはけむ共此ていにてはかなふまじゑかしなが
らよせての大將まか大じんをうつ取なばさうもんい
たすたね共ならんそのはかりことといつはまづそれ
がしうらがへりたるていにもてなしかたきにかうさ
んいたすべしもしかたき心をゆるさずはふた心なき
ていにて此もんへむかひ申さんときにそれがし打ま
けたるていにてよせてのぢんへにげ入べし其時つゞ
いておひ給へゑからば大將まか大しんかけ出んはひ
つでうところを御身と我せんごよりひつつゝんで打
申さんもし又申たき事候はゞきほうとそれがしひつ
くんでひそかにだんかう申べきとぐんほうかたくあ
ひきはめよせてのちんへぞいそきけるぐんもんにな
りぬればはるかにへだてまか大じんにたいめんしそ
れがしは馬將ぐんが一のらうどうせきゆふと申もの
にて候此たび將ぐんあくじをたくみ申だん一ゐに天
まのわざならんとおそろしくそんし身のとがをのが
れんためゑう〳〵のよしみをすてかうにんに參り候
とことばをつくしてたばかりける大じん聞てやあき
やつがつらたましゐはまさしくわれをたばかる所ま
がひなしかへつてをのれをたばからんものをとおも
ひせきゆふにむかつて誠にわうめいをおもんじかう
さんせらるゝだんちか頃ゑんびやうのいたり左から
ばふた心なきゑやうこに御へんのてせひばかりにて
將ぐんがたちへをしよせいさぎよくはげませよとあ
れば力およばすせきゆふはせひわづか五十よきゑゆ
くんのもんにおしよせ誠しがほにもてなしもみにも
ふでぞたゝかふたりいかがはゑけんせきゆふ馬將ぐ
んとひつくんてふしけるがみゝにくちをおしあてな
ふいかにわが君しばらく御待候へゑぶんをはかつて
にげ入申さんあれにみゆるこんしのはたこそまか大

じんがぢんしよなれそれがしにげこむと一しく大しんとひつくまんかまひておくれ給ふなといへば將ぐん聞て其たんいさい心へたさりながらなんぢとそれがしくんだるうへはくびをきるまねをしてとく〳〵ひつかへし申されよかまいてうでをまはしはかたにて打申なはや〳〵と申所へ大ぜん此よしみるよりも脩こそそれがしがすいりやうせしにまがひなしにくきかたきのありさまやとはしりかゝつて二人共にくび一々に打をとしちかづくかたきをむら〳〵はつとぼつちらしいさみにいさんできんりをさしてひつかへす大じんのちうせつあくにんのなれのはてちうとふちうのふんみやうなるきどく千萬是成とてみなかんせぬものこそなかりけれ

## 第三

かくて二人の大じんはあくきやくぶたうの將ぐんをおもひのまゝに打ほろぼしいそぎさんだい仕り一々次第にさうもんす君はるいぶんまし〳〵てたゝ何事もまろをおもふちうきんいかでおろかに有べきとるいかんはなはだかぎりなくかさねてぶにんの御めのとうだいふうふをめされとかくぶにんが身のうへはくわいたいとはおもはれずてんやく共もびやうきのみたてなりいそぎぶにんへまいりたゝてんやく共かはからひにまかせくすりをもちひ然るべしとことねん頃にせんしあるうだいふうふ承はりこはありがたきりんげんやと御まへを罷立三重せいりやうでんへぞ上かへりけるあらいたはしや御后まやぶにんはあねきやうどんみのそねみふかくてうふくましますそ其ゑるし御身にまさしくあらはれて御なやみもつての外にみへ給ひ御枕もたへ〳〵にてんやくいれうをめしよせさま〳〵あつかひ申せ共ふし何のゑるしもあらずしてはや二とせにならせ給ふ儕たいないにはわうじましますそおもはれずたゝかけろうのごとくおとろへ給ひ御命も今ははやあやうくみへさせ給ひけるいたはしやまやぶにんうだいふうふをめされこのていならば程もなくはかなくならんはぢでうありいかなればみづからはわうじくわいたいいたせしとはいかで思ひよりたるぞたゝわづらいの事成にもてはやされたるうらめしや只はづかしきはあね君のきや

うがる事をまやぶにんはもてあつかひしはかなやとおほしめされんはづかしやいか成むくひの身につもり天まはゑゆんのみいれぞやあらなさけなのわがみやとふしゑはし涙にむせばるゝうだいふうふをはしめとしつきそひたりし女房たちふしをの〳〵そでをゑほらるゝうだい泪ともろ共に御なけきはさる事なれ共心かなはぬよのならひさのみなげかせ給ふましき君も御いたはりのりんげんたび〳〵あればおろそかにおぼしめさず共たゝやうゑやうまし〳〵て一度御ほんぶくましませとさま〳〵いさめ奉るいたはしやまやぶにん今は御身もつかれはて御枕をかたふけつやつやまどろみ給ひけるかんびやう申せし人〳〵もよもゑんかうにふけ行ばをの〳〵まどろみ申さるゝふしぎ成かなぶにんのたいないにやどらせ給ふ御佛ひかりをはなつて御后の三五のちぶさをわけあらはれ出させ給ひたちまち卅二さうの御すがた玉をのべたる御ちごとぶにんの御枕に立よらせ給ひさしもたへなる御聲にていかに申さん母みだい御身くるしみましますゆへまろをうらみ給ふこと御ことはりとはぞんずれ共天まは衣ゆんとの給ひしはうらめしき御ことなりすぎにし年のやよひのすへ夢ながら申せしことわすれさせ給ふかやおばつかなやこのたまへばぶにんゆめの御内にあら御なづかしのよそをひやくはしき事をかたらせ給ひうつゝなきはゝが心をなぐさめ給へとの給へば御ちごかさねての給ふやう誠に思ふこといはじとすれば君がため心をやぶるにわたるべし然共衆生のくはんをみてんため正覚いたす我なれば御物語仕らん一時のせんいにくていごうのせんこんをやきすつることうたがひなし其上天地に三つの悦びあり語申さん聞召せまつもろ〳〵のゑやうをうくるに人とむまるゝ是一つ人と生るゝ其中に萬のだうりをゑる身と成事是一つだうりをゑる身と成内によくいたはる事是一つ是を三つの生れと申也それのみならずせかいに十でうのおきて候一つには其身たつとくしていやしきをすつることなかれ二つには其身あきらかにしてくらきをすつる事なかれ三つには其身至てぐ成をすつる事なかれ四つには其身せんとうをゑゆするに悪人をそこなふことなかれ五つには其身とみてまづゑきをすつる事なかれ六つには其身さかつておとろふるをすつる事なかれ七つには

其身をさまつてかなはざるをすつることなかれ八つには其身誠有ていつはりをすつる事なかれ九つには其身まとかにゑてかけたるをすつる事なかれ偖第十にはねんぐはのいんゑんをゑつて外をうむることなかれ是のみせかいのおきてにて候是をせかいの十ねんと申なりかゝる事をゑらすしてほしきまゝ成心こそにんひにんとは申なりつゝゑみてもつゝゑみ給へされはあねきやうとんみと御母ぶにん御兄弟の八々が此きうちうにましますゆへきやうどんみの御ねたみやすからぬ御事なりあさましや人間のゑつとのゑやねんたへがたき其もうねんのみなもとは七百ゑやうの其間くらきやみぢにまよひゑやゑんとゑやうをうけかげのかたちにそふごとくゑやう〳〵せゝにつきそひてくはゑんのいきをふきかけゑゝむらをくらいさきたがひにねたみねたむ事あさましきかなしみとく共つきは候はしすてに御母我をくわいにん有しよりなさけなやきやうとんみのそねみ給ふ悪心十六丈のゑやぎやうとなりこくうにへんまん仕る天ちのあつきをまねきよせ日月のひかりをおしうづみ母上みづからをすでにてうぶくなされゑなりされはてうぶくのほうと申はもろ〳〵のみやうどうむりやうのたましいをうごかし天けつもふちけつもふとて人間のゑゆせのもんを七ゑにとぢないばくてばくがうはくとておそろしきほうどうふもよりわくる三百六十よりうのちすしきるにきれぬ大つなにて御母うへのほね〳〵にみづからが五たいをからみ付はんじやくむみやうの法にて月日のひかりをうづみぬれば生れ出るべきやうもなしかくおそろしきてうぶくにていのられ申此上は母上さまもみづからも何とて命有べく候や然共みづからがゑんりきゑざいのふゑぎにてべつにゑさいは候はずかゝるふしきの我なれば心やすく身もやすく生るゝことはいとやすくはんべれ共やすくたん生いたしなばきやうとんみのうらみの数くらきよりくらきにまよひそねみ給ふ悪心生々せゝに付そひてむくひのうらみをなすならばともにまよはせたまふべし其悪心をゑづめんため偖こそたんゑやう申さぬなりされ共爰に一つうれゑきこと候母上てうぶく有しよりあねきやうとんみは兄弟のゑんをふつつと切七百生のうらみのねんすみやかにはれ給ふ是一つの悦びにて候偖又はゝをちやうぶくいたせ

しぎやう〻やはたちまちならくに〻つみ申なりわれ〻やうかくの其時はこれをもゐんだうつかまつりさてぶつくはをとけさせ申さんいかにちやうぶくあるとても〻んりき〻ざいのわれなればはゝうへさまもみづからもすこしも〻さひは候はずかまひてかまひてなにごともよろづの事かならず〳〵やしんにおもひたまふまじとかくむ〻やうをくはんじたまへくものうへの御すまひたゝはるの日のひとゝきぎよくゑんのゆふらんもなつのよのゆめ目のまへのかくとてもたゝ一すいのうちぞかし〻うゑんのきずなをはなれてこのたびはかならずさとりをひらきいちぶつ〻やうどのうてなのゑんかならず〻やうだう〻たまへおやとたのみ子とむまれてはゝうへさまともろともにちゝ大わうにたいめんししゆ〻やうのねがひをみて申さんこゝろやすくまことのときをまちたまへおいとま申てはゝうへさまとさうのみてにてちぶさをにぎりてむねのあひだをおしひらかせ給ひやがてたひないにいりたまはんと〻たまふときにぶにんおとろきいたきつかんと〻たへはそのまゝゆめはさめてたゝわがみをだひてぞおはしますあゝさて是はゆめじやよなうれしきいまのゆめこゝろやすぎにしむかしのみほとけのたひなひよりいでさせたまひてふたとせあまりがそのあひだになげきかなしむうき事をかたらせたまひてまたゝいないにいりたまふはゆめとやいはんまことゝやせんわが子とやいはんさてはほとけとやおがまんふしきの中のふしきとはかゝる事をや申らんとみつからはたへをみたまへはあゝありかたやみほとけはたひなひよりもくわうみやうあきらかにてらしたまひてまやふにんの御身はくぎよくにすきとをりてそのまゝたひなひあきらかにおがまれさせたまふぞふしふしぎなりける〻だいなりぶにんつく〳〵みたまふにまことにゆめのつげのごとくなりあらあさましやとがもなきさしもたへなるみほとけをちすじのなはにてからみつけちぶさをくわへておはしますあら御いとをしのありさまやと我とわが身をいたきつゝふしたへいるやうにぞなげかるゝ人〳〵これにおどろきてわれも〳〵とたちよりてさていかなる御事にてさふらふとさまざまたづね申ときぶにん御なみだともろともにはしめおはりをくはしくかたらせたまひもしうたがひもあ

らばはらさせたまへとやかてそのまゝ御はだへを見せさせたまへばあらありがたやみほとけまやぶにんのたひなひにくはうみやうかゝやき五たひをてらさせもくせんにおがまれさせたまひしはふしありがたかりける玄だひなり人〳〵きゐのおもひをなしかんたんくたきらいはひすそのゝちよりもまやぶにん御身もゆたかにうるはしくふしたちゐもかろくましましてやがて御さんのときをまちたまふまやぶにんの御身のうへふしぎせんばんこれなりまことたへなる御事ぶつちふしきのはうべんかなとみなかんせぬものこそなかりけれ

## 第四

いたはしやまやぶにんさしもたへなるみほとけのあらたに御つげましますゆへ心つよく平さんのじせつをまたせ給ひける然りとは申せ共あねきやうとんみのねたみにてちやうふくふかくありしゆへすでにふたとせすきゆけ共わうじたんじやうましまさす御身も次第におとろひはてたのみすくのふみへ給ふ御めのとのう大将くんふうふもろ共御まくらに立より御心は何とわたらせ給ふぞや君よりのせんしにもとかく御くすりをもちひ給ひて然るべしとのりんげんたび〳〵くだされはたとひいか成みちにても御薬をすすませ給ひ然るべしとぞ申けるぶにん此由聞召をもき枕をやう〳〵あげさせ給ひ誠に玄たしきりんげんかへす〳〵もありがたき次第なりさりながらみづからはわうじくわいたひ申せしことは少もうたがふ所なしそれをびやうきとみたつるてんやくりやうのくすりをはいかでもちい申べきせんしをそむくはおそれなれ共なか〳〵思ひもよらすそれに付てかた〳〵に物語いたしたくおもへ共我か身の心にへだてられへだてまじきかた〳〵に心をへだてかたりへぬみづからか身の上をおもひやりて給はれとしふくどきなげかせ給ひけるふうふ承はりこはおぼつかなき御ことばたとへはいか成事なりとも我等ふうふに何をかつゝませ給ふべきとく〳〵かたらせ給へたとひ命の御やう成共かなへ申さてをくべきかはや御物語あそはせとさもたのもしくそいさめけるぶにん聞召うれ玄き人のことばかなみづからちぶさの内よりも御身

ふうふにそだてられへんじもはなれぬ中なればたとへいか成こと成共つゝむべきにはあらね共ことばにつきぬことあればふかくつゝみかたりへず月日の立に玄たがひて心くるしく身もつかれ物うきことのかず〳〵はのふよむ共かく共つきせましたゝうらめしきはさきの世のおんぐはの程のあさましやとふし玄はしたへ入給ひけるふうふ承はり御ことばのしな何共玄あんにあたはすたとへ御父母御兄弟につゝませ給ふことなり共我等ふうふにしらせ給はぬ事なし仰は少もそむくまし御物語候へふにん御涙ともろ共に其儀にて有ならばくはしくかたり申べしかならずよそへもらし給ふなゑいりよにもふかくつゝみ給へべつの事にてさらになしわうじたんじやうましまさぬ其ことはりのはんべるなりなき跡までも此ことをふかくつゝみて給はれすでにみづからわうしくわひたい申せしことあねきやうどんみのそねみ給ひみづからが身のうへをてうぶくなされしゆへぞかし然共たひなひにやどらせ給ふわうしはたつとき如來にてましませは何とてうぶく有とてもたんじやうなされ候事少もしさいあらね共やすくたんじやうましまさばあね君の御そねみいよ〳〵かさなり申さんことたへがたく思召あくしん少しづめんためたいなひにやどらせ給ふたとへはせんがうまんがうふるとてもじんりき玄ざいの佛なればつゐに一度はたんじやう有べしわうしたんじやうまし〳〵なばみづからが命つゆちり程もをしからずたゝあね君の身の上にも玄も佛の御とかめ請させ給はんこと何よりもつてかなしやと御身の玄んくをおほしめさでそねみ給ふあねきやうどんみの御事をかなしみ給ふまやぶにんのふし心の内こそあはれなれふうふ大きにおどろき扨も〳〵おそろしやまさしく御兄弟の御中いか程うらみ給ふ共かくなさけなき御にくみ又もためしはよもあらじかゝるどうよくせんばん成そねみをうけさせ給ひ御身をくるしめ給へ共うらみ給ふ事もなくまだとやかくとあね君をいたはり給ふ御事は一ふく一しやうへだてなき御兄弟にてましませ共御しんていのかはりしはうんていばんりのちがひかなはづかしき君の御玄んていあら御いとをしの有さまかなとふしこゑをあげてぞなきにけるぶにんも玄う玄やういやましてふかくなげかせ給ひけるうだひ泪ともろ共によし此

ことを今更にあらためさうもん申なば歸つてふにんの御心にそむき申さんとかく天りはくもりあるましく其上しんりきじざいの御佛にてましませば御さんへいさんうたがひなしとかくじこくをまち給へと涙ながらもいさめをなしよきにいたはり奉る三重心の内こそ上たのもしけれ是は扨置大王の御前には兩しんをはじめげつけいうんかくことくめされ扨もまやぶにんくはいたひせしと聞しよりすでにふたとせにあまれ共いまだたんじやうのさたもなし何れか人間のくわいたひに二とせ三とせたいないにやとるといふこと有べきや又てんやく共が申にもくわいたひにては少もなし只病きなりとさうもんす然共まやぶにんは一すぢにくわいたひの由を申いつれか誠にてあるべきやさはさりながらくわいぶくの玄やうとて女によりて有といへ共かゝるためしはふしき也とかくはかせをめしよせうらかたの次第ゑいらん有べき間國中をあらため然べきさうにんを百人めしよせよとの御でう畏て御せんを罷立國々さと〳〵殘りなく三重一々次第にふれらるゝかくてちよくいの事なれば程なく百人のさう人を調やがて御前にさんだいす君ゑいぶんまし〳〵てまか大臣をもつて扨もまやぶにんの身の上くわいたいにて有か又病きのわざかうらなへとのちよくてうなりはや〳〵かゝぶんのおもむきそう〳〵申されよとの給へは畏候と百人のそうにん共一々かんぶんをひらき心しつかにうらなひ九十九人一どに御うらかたを申上るまやぶにんの御身の上まつたく御くわいにんにては御ざなく候是は御わつらひにうたがひなくしかも人のそねみふかく候とすみやかにさうもんす君をはしめ奉り臣下大臣尤かうこそ有べけれいかなればくわいたひにてましますし身が二とせ三とせたんじやうなくなやませ給ふいわれなし只御病きにまがひなしとをの〳〵せんぎ一とうなり然所に百人なみいたるさうにんの其中にはくはつたるらうわうの心をつくしかんげんし何共物はいわずえてさめ〳〵なひてぞいたりけるみかどゑいぶんまし〳〵て百人のそうにん九十九人は一とうにうらなひ申所に今一人のおきながさうのむねは申さず涙をながすは何事ぞえさいをくはしくさうし申せとせんし有おきな承はり九十九人のさうのむねさだめて誠にても御ざ有べきがそれがしのうらかたに

は御病さの御事は夢いさゝかも御ざなく候玉をのべたるごとく成御太子にてましますとさもすみやかにぞさうもんす御門ゑいぶんあつていかにらうわう申所にふしぎ有くわいにんと申さへめでたきに殊に玉をのべたるごとく成太子ありとかんげんしたる身がよろこびても悦ぶべきに涙をながすは何事ぞおきな承はり此上はうらかたの次第くはしくそうもん申上べしされば天もんつうと申てせんほうの一つにて候九よう七よう二十八しゆく三十六きんのほしを立ては天ちの二もんをかんげんいたし五りう七どう五をん七ぎしつとく五いをわけて日初相應のにうりをさたし六みやうたいゆふ三しつ十二うんをかんげんしてゐんやう男女の位をさたし申上ることにて候然るに今まやぶにんの御くわいたい被成候王子はいかなる火の中水のそこけんげきばんじやくのうへにうみをとし給ふ共御命におひてはいさゝかさはりは御ざなく候然共十ぜんの御位をのぞませたまふ御太子にてはましまさずめうがくむいの御位にとうとくむ上ぼだいの大ぎひふかく五百の大こく三千のちうごくむりやうのそくさんごくの衆生をのこらずさいどまし〳〵ほうわう如來となり給ふ王子にてましますなりされば此おきなが身のうへをかんげんいたし候にすでに八しゆんにあまりつたなくも命つゝまりあすの事をもたのまれ申さす候しする命はまつたくをしみ申さね共あはれとしわかくせばこの如來の御けちゑんにあひ奉りみらひ成佛いたすべきにかやうにとしのよはひなく此御佛の御法にあひ奉らずはかなくならんかなしさに我身の上をあはれみ扨こそ泪をながし候ぶれいは御めん候へとさもあきらかにぞさうもんしける御門ゑいぶんまし〳〵て扨もきたひの事共かなきん中の取さたにもてんやくりやういもことことく病きなりと申せしにまやぶにん一人こそくわいたひと申今めしよするさうにん九十九人は一とうに病きなりと申所に一人くわい人とは申一人が誠か又ばんみんが誠なるかせひさらにきはまりかたしねがはくは ぎんりきじざいのきどくせうこたゞしくゑいぶんにたつしたきとのせんしなりおきな承り誠に三界のきやうしゆとしやうがくあるべきみ佛にふしきなくてはかなふましと天にむかひてかつしやうしせいぐはんたがはせ給はずば一つのきずゝをみせし

め給ひ人々のうたがひをはらさせ給へとかんたんく
だきらいはいす其時ふしぎやこくうにおんがく聞へ
花ふり下る春のよのまだよいのまのくもまよりあま
たのほしのあまくだり三重こてんのてらさせ上給ひ
ける然所にもろもろのほしの中にさしもたへなるみ
やうじやうのていぜんのこずへやとらせ給ひぬばし
ひかりをはなち給ふ君を始め奉りけいしやううんか
く一どうにあつはれきたひのずいさうやとかんたん
くだきらいはい有其時おきなしやう〳〵の心をげん
にあらはし南無十方のさいしよ佛日月しやう〳〵し
とのてんせんじんけん王子せひのたう代に佛のしゆ
つせあきらかに御なうじうましませと五たいをちに
うちかんたんすふしきや其時くだんのみやうじやう
つぼみし花のひらくるごとくみへ給ふがさしもたへ
成天女一人こつぜんとあらわれこずへをつたひぎよ
くざちかくあゆみよりことばをかはしての給ふやう
いかに大王聞しめせまやぶにんのくわいたひおろか
におもひ給ふまし忝も三かいのきやしゆ大ぢ大ひの
如來まさにくわいにんましませ共しんいぐちあく人
のじやとんの物におそわれ給ふ是ぞ佛の御身にもゐ
んぐはのいんゑんのがれぬ事まつせのしゆじやうに
ゑらしめんと其法べんにて渡らせ給ふみみやうじん
じんぎざい王佛ゑゆつせまします事さら〳〵うたが
ふ事なかれ是ぞ則大ぼん天のちよくによりはくよう
しやうのせいこん今爰にらいげんすぶつりきたへ成
ゆへによりもくぜんにあらわれたり是までなりとの
給ひてあまたのほしともろ共にこくうにあがらせ給
ひける君をはじめ奉りげつけいうんかく一どうにあ
らありがたの御事やかゝるきどくをおかむうへまや
ぶにんの御くはいにん少もうたがふ所なし扨も〳〵
うらのうたりこころんふさうのめいじんやとかずのほ
うびをくださるゝふしはくよう我やにかへりけるさ
しもたへ成み佛のしゆつせまします御めぐみ天下太
平こくとあんをんめでたかり共中〳〵申斗はなかり
けれ

## 第五

きんちうまつりごとささらぎやよひもすぎわたぬき
の御くわいさま〳〵のぎしき取〳〵なり御きさきま

やぶにん今は御心もかろくしていさませ給ふ所へみやうぶといへるくはんぢよ君よりの御使ひとしてせいりやうでんに來りまやぶにんの御まへに畏君よりのせんしには御きしよくおもくわたらせ給ふゆへ花のゑんむなしくすごし給ふ此度はふにん御きゑよくすみやかに心もはれさせ給ふよし君聞召御よろこびのため御きしよくにさはちせ給はぬ物ならばはるのなごりの花のゑんきうちうの人々を召つれ給ひこなたへみゆきまし〳〵てらんびにゑんの花ぞのにて御くわいなさるべきとのせんしにて候ぶにんきこしめされこは有がたきりんげんかな三とせが間ぎよくたひをおがみ申事もなく打たへひとりかなしむ事つきせぬおもひなりふしぎのみゆきをおがみなば我みのきたうとなりぬべし是にましたるよろこびなしせんしのかはらぬ其さきにはんしはたのみ申なりと打ゑみいさみの給へばみやうぶ此由承はり其ぎにて候はゝ君へ此だん申上みゆきをいさめ申さんとおいとま申おくりこてんをさしてぞ歸りける御てんになればば御へんじの由そうもんすみかとゑいらんかぎりなくいそぎみゆきをなすべきなりきやうどんみをはじめつぼねの人々殘らず此むねあひふれよ扨さしきのていかみ下のへだてなくきやうとんみのゑとねをは右の座上に備へまやぶにんのしとねをはひだりのかたにさたむべし扨其外はつき〳〵にさだむべしみやうぶちよくいを承はりくはんにん共に申付三重一々次第にふれにけりかくて其日に成ぬれば忝も上ぼん大王はらんびにほんのにしのたいせいりやうでんにきよしゆつ有玉座になをらせ給へばあまたの諸きやう大臣は南のかくにざし給ふ扨御后きやうどんみはあさましやまやぶにんをうき世の中のみはてなり兄弟のゑんを切上は心にかゝる事なしとちよくいにまかせ出給ひ右のかみにざし給ふ其外の女房連次第次第になをらせ給ふいくんわたゝしき其あり様是ぞ誠にをとに聞ぼん天王の御くはほうも是にはすぎしと聞へける然所にまやぶにん玉のようらくむすびさけらりやうのにしきらんかんのじやうへけんもんきんしゆの十二ひとへのつゆを結びてあざやかにすがたは卅二さうにして八十しゆごうの御よそをひあだかも十五まん目のくもまをわくるごとくにて女房連にいさなはれ玉のひさしを出給ひ左の方に付給ふゑと

ねにうつらせ給ふていたとへていはん方もなし君をはしめ奉り各〳〵はん女天上人げつけいうんかくもろ共にやさしき人のよそほひやとさんこをしづめてかんじける大王ゑいらんまし〳〵てめづらしのぶにん三とせが間みなれずけふたまさかのたいめんはよにもうれしく思ふ也とせんし有こそ有がたけれかくてきやうとんみはつね〳〵まやぶにんをふかくねたみましませしが今のすがたを御らんしてじやけんの心をやわらげまやぶにんのすがたをみ上みおろし扨々やさしきすがたかなかゝるゆふ成兄弟をうとみねたみしみづからが心の内のじやけんやなはづかしのみのとかやと心の内に懺悔してふし玄ばし涙にむせばるゝをつる泪ともろ共にまやぶにんによりそひあらめつらしのぶにんやな今は何をかつゝむべきあさましやみづからは御身をふかくうらみて有兄弟共に君につかへせんしおもき其中にまさりそねむ心のいやましてにくしと思ひくらせしかあひみて今は中〳〵ににくみそねみし我心扨も〳〵あさまし〳〵今更さんけ申なり日比のねたみしみのとがをゆるし給へやまやぶにんさぞ久々のくわいたいにて心くるしくおはすらん皆みづからが悪心ゆへとがなき御身にくろうを懸ゑいりよをなやませ申せし事扨も〳〵勿体なやあらあさましの我心いとをしの姫の有様やばんしのとがはゆるし給へとたがひにめとめをみ合てしばしふし涙にむせばるゝたがひの心ぞあはれなり君をはしめ奉り一ざに有あふ人〳〵是はふしぎの物語外にはだれも玄らざりしに扨は今迄兄弟にへだての有けるかとをの〳〵ふしぎをなし給ふいたはしやまやぶにんあね君のさんけよそに聞ん事共を一しほかなしくおぼし召こはもつたいなき御事やみづからうらみ申事つゆ斗も侍らず兎角病きにおかされながら〳〵くわいたい仕りゑいりよをなやませ申といひひとりましますあね君のとやかくあんし給ふこそみづからがとかならんさはさりながら此後は太子たんじやうましますことさだめて程は候ましめでたく身をも二つになりつもる事のみゆる〳〵と御物語申べしとうらみ給ふ御けしきつゆ程もあらずしてあね君の御かほばせをさもやさしく打詠めさしもうちゑみ給ふていふしたとへがたなきふぜいなり是や如來のしん力にて一時のさんげにおつごうのざいしやうめつしむ

いむろのきゑんと成ふへんしんによのきをあらはし一佛じやうどのけちゑんとは今あきらかにゑられたりかくてさゆふの上らう連ぶにんのかざしをつやつやながめあらいつくしのかほばせやとしのぶ心のあらわれて君の御まへを立さはぎぶにんのさゆふにうちかこみめづらしのまやぶにん御身なやませ給ふと聞ゑのびなげきて有けるが今は心もはれやかにけふの御くはいの花のゑんあふこそめでたかりけるとよろこびいさみたまひつゝそでやたもとにてをそへてふしたはふれ給ふぞやさしけれみかどゑいらんましましてぶにんはきやうの花のあるしなになり共花ぶさを一えだたをり一きよくかなでぶにんがこゝろをなぐさめ給へいかにぶにんだいばらじゆの花ぶさは一えだたをりちんがかざしとなし給へはやとく〳〵とのせんしなりまやぶにんはきこしめしありがたきりんげんやとたいばらじゆのもとに立よらせ給ひてひだりの御手をさし上給ひたをらんとゑたまふ時にはかにたいないさはかしく成て心もそらに成しかばすははやゆめの御つけぞいまなるかやをりもよしところは花のうてなり扨はぎよくたいのゑんも是まで成りと心をしづめたまふ所にふしぎやなみあしのゑたよりも十六ぢやうのほうとうあらわれたちまちまやぶにんをすくひたてまつりこくうはるかに三重あがりけり君をはじめたてまつりあまたのささきてんじやう人是はいか成御事ぞとみな〳〵きいのおもひをなし給ふそのときぶにんこくうよりかれうびんがのこはねにてあらありがたやいまこそはゑやうかくのみほとけ御たんじやうましますとみづからはたちまちゑやばのきづなをはなれじやうぶつとくだつの身となりかのどにわうじやう仕り是いつわりにやどらせ給ふみほとけの御たすけなり是ぞきみの御をんしやばのゑんうすくして御をんはおくり申さずともみらいはかならずしも一れんたくしやうのはんざをわけてまちたてまつるこんじやうの御いとまはたたいまなりとさもすゝしくはのたまゝどもとしごろの御なさけ身にしみ〴〵とありがたくさすがなごりのをしまれてふししばしなみだにむせばるゝかたじけなくも大わうはたまのかふりをかたむけさせ給ひてきよいをしぼらせ給ひしがいかにぶにんたとへほとけのちかひにてみらいはいか成くはをうるとも

三とせがあひだはまみへずしてけふたまさかのたいめんにやさうにもろき事やあるいましばらくとの給ひてれうがんに御なみだをうかめ給ふぞありがたきことにあねきやうとんみいま一ぢほの御なげきいかにぶにんうらやましや御身はおなし兄弟とはいひながらたつときほとけのけちゑんにてみらいまでもたのもしやかまひてみづからがぢんいぐちのあくしんのつみをゆるしてみらいはおなしはちすのうてなにむかへ取て給はれかくありかたき佛成を ぢらぬこととてはかなくもうとみし事のくやしやと我とあくしんをざんげしてふしころをおしまずなげかるゝまやぶにんもきやうとんみのなげき御いとをしくおほしめしあらもつたひなやあね君さまなにを御うらみ申べきさはさりながら一時のざんげにはむりやうのつみのきゆると候へば御心やすくおぼしめせ扨又たいし御たんじやましまさばよきにもりたてゑいりよをいさめてたび給へいかにうだひふうふの人々ばんしはたのみ申なりさとりひらきし身となりてみらいじやうぶつとぐれどもおことになごりがをしまれてすこし心のみだるゝはとふしぢばしなげかせ給ひけるしかる所にこくうよりこんじきのはたふたながれあまくだりだひばらじゆのこずへにとまりいきやうよもにくんじてしよほうじつさうのじやうどとげんずふにん あまりの たつとさにこくうにむかつてがつしやうある其時十二ひとへのもすそをわけみぎの御わきをひらかせ給ひ太子たんじやうましますなりをりふしずいじんりうじんりうとうをさゝげまやぶにんのしゆごしける はふしき成ける三重次第なりあらありがたやほうどうの 上に立たる 四方のとびらをしひらきいわうせんざいるりくはう如來五ちゑんまんのほつしん如來日月くはう佛もろ共にみやうふしぎのひかりをはなち佛もせんざいとしゆごし給ふ折ふしくじやくほうわうかれうびんもろ〳〵のめいてうこくうにとひさりまひあそぶ天人もやうがうぼさつも爰にあまくだりますけしきふしき成ける次第なりあまたの后女房連かく有がたきしせつにあひ五しやう三じうのつみたちまちにめつする事ひとへにぶにんの御をんなりせめて一しの 花をさゝげ申さんとてんでに花をたをりぶにんに是をさし上給ふ今のよに至るまで卯月八日にさゝぐる花此時よりの

おこりなり左ばらくあつてほうとうのとびらをひらき御たんじやうめでたくまやぶにんはたちまち佛たいをゑ給ひりうによも共にじやう佛すふし有がたがりける次第なりかくて太子くはうみやうあきらかにてらさせ給ひ左のゆびにて天をさしみぎのゆびにてちをさし給ひ三せれうだつ四ぐせいぐはんしよほうちんるい天上天げゆいがどくそんととなへ給ひまへに三あしうしろに四あしあゆませ給ひぶにんの御ひざを立さり給へはふしぎやなほうとうのとびらをおし立太子ぶにんもろ共御すがたはみへさせ給はず君をはじめ奉りげつけいうんかくこはそもいか成御事ぞとをの〳〵ふしぎをなし給ふ其時うだいほうとうにむかつて御すがたあきらかにこなたへうつらせ給はれとかんたんくだきらいすれば其時太子ほうとうを出給ひはくうんをはこばせ給ひうたひにひしといだかれ給ふ大王をはじめ奉り人々の御悦たとへていわん方もなしかくてぶにんはまさに佛果をゑたまひをんがくの聲もろ共にたちまち天上被成ける其後太子御せいゑんめでたく十九出家三十成道まし〳〵てさいらい生さいとなさるしやかむに佛の御ほうべん有がたし共中〳〵申斗はなかりけれ

寛文九己酉年七月吉日　八文字屋八左衞門板

釋迦八相記終

# 善だう記

## 第一

そも〳〵西方極樂世界のきやうしゆ阿彌陀如來の御けしん念佛の元祖せんどう大しの由來をくわしくたづねたてまつるにこゝに本朝三十四代推古天皇の御宇にあたつてもろこし四百よしうのあるじをばずいようていと申奉る然るに煬帝御心せいにまし〳〵一天の萬民をようしの如くなつけ給へば民もまたぶも父母の思ひをなしてまつりひほうほくも朽果てかんこも今はをのづから苦ふかくこそなりにけれさて第一の后にはせいやうぶにんと號したてまつり御形嬋妍とたをやかにしてりつきうのふんたい顏色なきかと疑はるさるによつて煬帝の御寵愛はかぎりなしさて又國を守る三臣には左將軍たんかう右將軍まんけい副將軍めいきやうとていづれも智仁勇の三つを兼呉氏孫氏が肺肝よりりうしゆつしたる名將たり其外月卿雲客はしゆつしのよそをひ引きつくろひぎゝとうとうと列座して君を敬ひ奉ればうら吹く風ものどかにてめぐる月日も久かたの治る御代こそめでたけれ扨その後に頃は彌生の事成に庭の櫻も咲き亂れいと面白く見へければ御后せいりやうぶにん女房達を召具してせいりやうでんに出給ひよもをはるかに見給へばあら面白の景色やなにはものきゝもおのづから春のきどくに櫻花げにも詠めは楊貴妃やいとゞ焦るる鹽釜の煙かあらんかきりかやつ九重十重の櫻花木木のふゝきんとひこうは雪にまがひの糸櫻青葉交りの遲櫻はつはなよりも珍らしく一入興に入たまひ御遊覽はいとまなし然る所に俄に空かき曇り物凄じく風吹きて御殿の花はこと〴〵く落花するこそ物うけれ后をはじめ女房達さもおもしろき御ゆふもさめかなたこなたに逃げ給ふその中にせいりやうぶにんとある木蔭にふしまろび御息もたへ〴〵に成給へば人々驚き立寄りて后を抱き奉り御殿のさしてぞ入給ふあらいたはしやせいりやうふにんばんしの床にぞふし給ふみかどをはじめ奉り左右の大臣月卿雲客是はいかなる御事やと日やの詮議ひまもなし扨てんやくの守をめされつゝ今日のきえよくはいかゞあるやとの宣旨也さん候御后の御病氣につきいづれも吟味

を遂げ醫術のせい〳〵を盡し候へ共更に御元氣も御座なく候兎角御いたはりは冷氣に襲はれさせ給ふにや以の外疲れさせ給ひその上御脈けんたいをおひていのきなく候へばわれ〳〵いと〳〵しん仕りかね候よしを奏聞す君ゑいぶんまし〳〵て此上はいかゞはせんと案じ惑はせ給ひける時に左將軍すゝみ出爰に泊洲長安のかたはらにかいせうこじと申てめいよのりやうい御座候也かれを召して御りやうけんの聞召されれ然るべう候と謹んで奏聞申せば君ゑいかんあつてその儀ならば急ぎ召せとの宣旨也畏り候とやがて勅使を立らるゝ件の所になりしかばかいせうに對面し宣旨の趣のべらるゝかいせう承り誠に以てわれら如きの大ほんげにかやうの勅を蒙ること生々世々までありがたしかなはぬ迄も參內し天恩の奉じ奉らんと勅使と打つれそれよりも內裏をさしてぞあがらるゝ御殿にも成しかばかいせうこじ參內のよしを申あぐる君ゑいぶんまし〳〵てかたじけなくも對面ましましいそぎ療治を加へ病氣平ゆうのてだてをめぐらすべしとの勅諚也かいせう餘りのありがさにとかうに及ばず勅答申御前を立左將軍の案內にて后の御殿にあがらるゝやがて立より御氣色をうかゞひ御脈を取り奉りとつくと工夫し其後御前に立歸り謹んで申上るは御いたはりは別儀はござるまじく存じ奉り候へ共日の內には必ず御快氣ましまさんさりながら只今とゝのへしんじさし上申たく候へ共ひしの妙藥一しゆ不足仕候へばあはれ一日の御いとまを申あげたく候と申上れば君をはじめ奉りくげ大じん一同に奇異の思ひをなし給ふみかど御感の餘りに仰せけるはあまたのてんゐ共かいじゆつもたへて朕もゑいりよを惱ます所に命にさはりあるまじきとゑいぶんに達する事是に過ぎたるよろこびなしいそぎしたくに歸りつゝ靈藥をとゝのへてへんしも早く參內仕れとの宣旨也畏つて御前をたち我やをさしてぞ歸りける我家になればあまたのしよでんを取出しつく〳〵と考へて扨其後にみでしたちを近付てわれかやう〳〵の勅ゐを蒙り大事の御煩ひを受取てかへりし也それにつき仔細あつて后の御藥を拵ゆるにはいかにも玄やう玄やうなるれい水を寅の刻に結びあけてかくる也然れ共此邊の池にはせう〳〵なる水更になしまことや長安の瀧の流れは西方極樂の九品れんだいの下より

流れいでゝ清淨なる水と聞くいざ此水をむすびあげ御藥を捧へんと供人あまた引具して長安さしてぞ急がるゝ瀧にもなればかう〳〵たる山のてい白雲ころもに似て巖のかたにかゝり青苔帶に似て山の腰を卷き落ち來る瀧の有樣は恰も龍門三きうの如くとうとうとしてすさまじく流れさつ〳〵と落ちていさぎよくいと心もすみわたり暫しながめておはしますに不思議や瀧の響きせんたう〳〵とぞ響きけるかいしやう不思議の思ひをなし心をすまし聞く所に虛空に音樂きこへ旗二ながれ降り下りそば成こぼくの枝にぞかゝりけるかいせう立より是を見る其時瀧の内よりも佛名を唱へ給ふ其もんに曰く末法出世めうせんだう卽是彌陀けしんぶつちよくせまつ代だうあく人一切衆生いわうぎやうどゝ唱へたまへば不思議や二流の旗に此もん明かにぞ移りけるかいせういよいよ不思議はれやらず晝夜まどろむ事もなくしんいを濟してあかしける既に虎の刻にも也しかば自ら瀧の下に行き水を汲んとせし所に落ち來る瀧の水の上に金色の文字すはる其けもんに曰く西方極樂彌陀佛しゆつぎやうしんだんみやうせんだうれんげ口萬せん惡人一切衆生いわう淨土とぞうかみけるかいぎやう大きに驚きやゝかた〳〵是々拜めと有ければ何れも奇異の思ひをなし肝膽くだきて禮拜す其時瀧の内よりも五六歳ばかり成童子一人水中より忽然として浮み給ふかいせうなをも怪しみて扨御身はいかなる方にてましませば今爰に出現あるぞと答むれば童子答へての給ふは昔しは西方に有て六八の願の起し今滿足して唐土にけげんす天を以て父とす地をさしては母とし水を以て胎内とす我は是西方極樂のきやう主阿彌陀佛の化身也結緣の衆生すぐに佛心を得せしめんため今爰に來れり汝我をはごくむべしと高らかにの給へばかいせう奇異の思ひをなしこは忝き仰せやと合掌さんぱいし奉りやがて立より御稚兒をいたき申望みの水を汲もたせ我やをさして歸らるゝ頃は隋の煬帝泰業九年みづのへ酉扨我朝にあつては人皇三十四代推古天皇二十一年是ぜんだうの御ぎやうきたいせんばんありがたしともなか〳〵申はかりはなかりけれ

## 第二

さる程にかいせう居士御ちごをいざなひしたくに歸り悦び愛し給ふことひとへゑつし一子よりなを淺からぬ思ひ也扨御ちごに打むかひ我がやう〳〵の勅を蒙り只今參內申也留守のつれ〴〵には管絃なり共もてあそび心をなぐさみ給ふべしやがて歸り申さんとかの靈藥をとゝのへて內裏をさしてぞあがらるゝ御殿になれば左將軍を以て御藥を奉る去程に御后件の靈藥聞召すより不思議やな今まで御心うと〳〵しくましませしが俄に快氣を得たまひて本復あるこそめでたけれ君をはじめ奉り卿相雲客に至る迄憂ひの色を引替へて皆々悦びにぎあへり君ゑいかんのあまりにかいせうに仰せけるは此たびぶにんが病氣いまだしごならずして本復するとはいひながら是汝が良藥良醫の德にあらずんばいかで助かる事をえんとてもの事に其療養の手たてを聞せよかしとの宣旨也かいせう畏つて申上るは此度后の御平癒全くそれがしが醫術にては候はず是君のせいぶんゑんぶの德によつて諸天のふじゆあらずんば愚臣が藥力いかでか叶ひ申べきそれにつき爰に不思議なる御ことの御ざ候それがし御藥を捧へ申さんため長安の靈水の水を求めかの瀧へ罷り越し候所に瀧の中より四句の偈を唱へすいゑやうに文句有其中に六七歳成ちご一人忽然とあらはれそれがしを父と頼まんとの給ひし間幸ひそれがし妻子不通の爲にて候により諸天の與へ給ふと有がたくいそぎ伴ひ罷歸り候とはじめ終りを奏聞仕れば君をはじめ奉り諸卿おの〳〵一同に是ぞ稀代の不思議やと感にたへさせ給ひける其後の宣旨にはかゝる奇妙の其ちごに對面せではかなうまじ具して參れとの勅諚也畏て候と御前を罷立いそぎ我やに立歸り御ちごを近付て宣旨のよしを語りつゝ時の裝束ひきつくろひやがて參內申さるゝかくて御ちご上座にあんざまし〳〵てさもゆふ〳〵たる御姿たとへていはん方もなし君はゑいらんまし〳〵て最前かいせうが申せしよりもいやまさり更に人間とは思はれずいかさま不思議はれやらず但しは大六天の魔王が王法を妨げんとのはかりことかいかに〳〵と宣旨ある其時御兒何共返答はましまさでゑよくに有ける硯を取て筆を染めあんよう極樂世界に至らんと願はんには此もんにしくはなしと虛空に筆をなげ給へば不

思議や此筆そば成障子にひつしと立光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨とさも明かにすわりしは稀代なりける次第なり君をはじめ月卿雲客かうべを垂れて御ちごをいねうかつこふなされけるみかど餘りのたつとさに疑ひもなき此ちごは佛の再誕にきはまれりと忝くも大王は玉座に立せ給ひつゝちごの御ぐしをかきなでさせ給ひ誠に朕がまつりごとおろそかならぬゆへやらん佛の出世ましますよと御衣をしぼらせ給ひけるかくて大王かいせうを召され汝日頃せいじんの道を學び聖人たるが故かゝるたつとき御ちごを天より與へ給ふなりいよ〳〵かしつき奉れと當座に官佐をゆるされかずの御褒美下されければかいこやう面目身に餘りこは忝しとて謹んで頂戴し扨御いとまを下され御ちごを誘ひて悦び御前を罷立やかたをさしてぞ歸りけるこたくになればかくてそれよりかいせう居士あけくれちごを愛しつゝよきにもりたて給ひけるさる程に御ちごはたゝあけくれは卓(しょく)によりそひ佛學儒書に御心を入日やの學問いとまなし又ある時は西方に打むかひ佛名をくわんねんあり一ゑに後生のつとめより更に餘念はましまさず既に御年十一歳の春の頃かいせう居士に打むかひ自らは出家になり菩提の道をあきらめたく候へばいとまたべとぞ申さるゝかいせう聞召出家の望は尤なれ共さりながら我此年に至るまで妻子をも持ざればおことをそだてそれがしがなきあとまでも頼む身が御身出家に成給はゝ我身は何と成べきと不覺の涙はせきあへず御兒は聞し召仰にては候へ共それ人界は火宅のすみか誰が一人のこるべき此たひこやうじをいとはずば來世はあくしゆに墮在せんそれ一子出家すれば九族天に生ずると如來のきんげんあきらか也此世の縁はうすくとも來世は必ず一つはちすの蓮臺に半座を分けて座し申さんとたゝおいとまとぞ申さるゝかいこやういつちの道理にふしげにあやまつたりことわりや其儀にてあるならば御身の心にまかせ給へ此上は隨分學問きはめ給ひ衆生を濟度こ給ふべしかへすゞ〳〵も出離の道よく〳〵勤學おはしませとてもいとまの此上は早とく〳〵と口ゝるゝこは有がたき仰やな山に登り學問とげ一山のせき學どもかなはぬまでも然申さん其内折々山下仕り見申見へられ奉らんたゝただご世の御いとなみ忘れさせ給ふなよおいとま申と

の給へばかいせう名殘は惜しけれ共おさあひ人にすすめられ弱き心を取なをしとても山上あるうへは里の事をも打忘れよきに學問とけ給へ見申見へたき折ふしは是より人を登すべしそれまでは文のたよりもいたすまじとすゝむ涙を押かくし諫め給ふかいぇやうの心の内こそあはれなれ御兒も今は早親子とむすび給ひしよりかたちにかげのそふ如くはなれ給はぬ恩愛の別れとなれば一入にいたいけ成御かほばせしほ〳〵と成給ふいとゞ殊勝ぞまさりけるされ共かいせう名殘の心を取直し幸ひけふは吉日なりさらば山上し給へと供人あまたあひそへてかくぇやう山へぞおくらるゝ名殘は盡ぬ親子中いはねどうへにあらはれてわかれ〳〵になりにけり互ひの心ぞあはれなるかくて其後御ちごはかくぇやう山に成しかば其頃ぇうののふけひんぇやのほまれを取給ふとんらん大しの御弟子どうしやくぜんしに對面まし〳〵師弟の契約なされける則御年十三にて御くしをろさせ給ひける扨其後にどうぇやくぜんじの給ふやうまことや長安の瀧より出生の時ぜんだうとひゞきし事有がたきめいもんかなまつぜんだうと響きしことよくみちびくと見へたりぜんはぇしやうのぜんなりだうはねんにうのだう爰を以て案ずるに一切衆生こと〴〵く極樂淨土へ導びかんとの誓願出生いせんにとなへ給へは如來の化身に疑ひなし則瀧のめいもんに違はず御身の法名をぜんだうとかいみやうせんと則ぜんだう大しと付給ふ扨それよりも學問いよ〳〵怠らず誠に佛の化身なれば一字を學びて十字をさとり聰明ゑいち中々にたとへていはんかたもなしはや十五歲と申には佛道修行の心深く極寒にも汗を流しくわんそうにつかれを忘れ炎暑にも衣をかむり念佛三昧に怠らず一切の經こと〴〵く御覽じてつく〴〵思召すやうはもろ共上こん上ちのともがらはくわんぼうぇゆぎやうしてごとう發明に成佛をいたさんか末世しよくせに至て下こん下ち凡夫はくわんぼうくわんねん難行苦行はかなふまし然らば來世は必ず地獄に墮ちん悲しさよいかにもして下こん下ちの衆生を成佛いたさせずんばあるべからず西方に打むかひあはれ願くは末世の衆生なんさなふさの修行なくたゞ一念の發願にて往生極樂の素懷を遂げん誓願を授け給へと合掌し御目をふさぎ觀念ある時に不思議や經藏のと

びら開き金色の御經一卷せんだう大しの御手にわたり給ふはありがたかりける次第なりせんだう新たにおぼしめし三度頂きみ給へば忝くもくはん無量壽經なりいよ〳〵ゑん〳〵きもに銘し則拜しみたもふに有難や一かうせんねん無量壽佛のめいもんより光をはなつて明かに拜まれ給ふぞ不思議なる大師ずい喜まし〳〵て誠に末世愚痴の衆生に授くべきは彌陀のひぐわんに如はなしと此もんの下よりも此度の出離ゑやうじ頓生佛化の道彌陀の名號に限れりとゑゝうし給ひ万せん万ぎやうを振捨て只一かうにじやうどもんに入給ひ末代あくせのしゆじやうごくちうざいげの凡夫の得道は彌陀の名號におさまれりといよいよ堅固の信心にまかせて南無阿彌陀佛〳〵と高聲に唱へ給へば其時虛空に音樂聞へ花降り異香四方に薫じぼさつしやうじゆ來迎あり極樂淨土を今爰にうつしけるかと有難く肝膽くだき禮拜有其時虛空に御聲有衆生利益のひくわん末世にるつう疑ひなしとの給ふみこゑの下よりも數々の佛は虛空にあがらせ給ふ善導なを〳〵ありがたく信心堅固に念佛をちうやに申させ給ひける衆生千万なか〳〵に申はかりはなかりけれ

## 第三

あら有がたや善だう大しはかくしやう山に登り給ひ既に十三年の春秋をおくり給ふ學問へんじも怠り給はず殊に一向せん念無量壽佛のめいもん一心不亂に得道有いよ〳〵しん〳〵堅固にて毎日の御ゑよさたんしんせうみやう一向せんじゆのぎをたて給ふ其外は更に餘念はましまさず誠に如來の大ひのひぐはん明かにて知るも知らぬもをしなべて皆念佛に歸依をなしだうざ一ゑやうのかくゑやうたちもゑやうだうもんをふりすて善導の御弟子と也淨土もんに入給ひ念佛しゆ行なされしは有がたかりける次第也或時大しは一七日のべつじ念佛をとりおこなはせ給ふ既に六日にあたる日の夜に入ていづく共なくはたちはかりの女性たけ成髮をおしみだきさもたへがたき風情にて大しの御前に參り何共物はいはずしてさめ〴〵泣てぞいたりける善導御らんじてふびんの物の有樣やたうまでもなし汝まよひて今爰に來るにうたがひ

なし浮めてゐさせんさりながら懺悔ゐしんの爲なれば有し事共具に語れ其時女性顔ふり上げさて〳〵有がたの御事やみづからは此國のかた原にかなんと申所にさる者の妻にて候女の身としてあさましや一子を懐胎仕り七日以前に難産にて悲しきかなやみづからはあらちのうへにて空しくなりし其罪がうの重くしてちの池におとされて苛責のせめのひまなきを助け給へや御僧となげき叫ぶ有様は目もあてられぬ風情なり大しふびんにおぼしめしあふやさしくも來るものかな汝過去の宿縁にあらずんばいかで此だうじやうに來るべきまさに卅五ばんの願もん今汝らがためならんごくぢう惡人むたほうべんゆいしやうみだとくしやう極樂南無阿彌陀佛〳〵と十念授け給ひければ女ゑやうめんたんずいきして南無阿彌陀佛の聲もろ共にあさましき姿を引かへ靈魂忽ち佛體となり西の空に飛び去りしは有難かりける次第なり是善導の御結縁本願名號のたへなるゑるし是なりとていよいよ念佛繁昌して菩提の道をぞ願ひけるかくてべつ行の御ゐかうロロおはりし所へ御父かいせうこじの御方より使たゝしく走ひ參し御文を奉る大し拜見ましますに御いたはり以ての外にましますし間へんしも早く御越しあり御臨終の御すゝめ御尤に御ざ有べしと又かいしやうこじの弟子しやうじゆん方よりの文なり大し大きに驚かせ給ひ扨も〳〵みやうかなや此頃は佛道ゑゆ行に心ひかされ父上の御方へおとづれだにもたへはてゝ暮せし事の勿體なやへんじも急がんかた々とみでしせう〳〵召具して故郷へ歸らせ給ひけるげにや誠に世の中の有爲無常こそはかなけれいたはしやかいせう居士過し秋の中ばより重病を引うけ給ひばんしの床にぞ臥し給ふあまた醫道の御弟子たち一家の人々集りてさま〴〵看病申せ共ゑやうごうのやまふに次第に衰へ給ひつゝ今を限りと見へ給ふいたはしやかいせう居士御弟子たちにかいゑやくせられやう〳〵枕を上げ給ひ苦しげなる息をつぎ我既に娑婆の縁盡き冥途に赴き申なり忝くも一代きやう主のゑやくそんロにもゑやうじの掟をのがれ給はずそうりんじゆの入滅はさばがれい藥も益なし生者必滅のことはりを誰かのがれん唯惡念にいとまあらず次第にきしよく衰へたりかねて死期をしるならば善導を呼下し今一たび面談し最期の名殘を惜まん物を

神ならぬ身のあさましやかく老體となりはてしもながろふ事もあるべきかと口口なるが故に明暮と娑婆の執心離れ得ず一大事の未來まで取失はんあさましやと付けかくに付けても扨も戀しき善導やとくして山より下れかし最期に一目あひ見たやさても是非なき我身やとの給ふ聲もたへ〳〵に泪にむせばせ給ひける看病申人々もさすが親子の中といひ日頃の教化ふかければ一しほ焦れ給ふ事げに御道理ことはりやとをの〳〵袖をぞ絞らるゝその中にゑやうじゆん涙を押へさて〳〵かひなく見へさせ給ふ物かな御心づよく持せ給へ善導の御方へ一昨日人を以て御臨終のよし火急に申つかはし候定めて御油斷有まじければろじをもいそがせ給ふべし明朝は必ず善導御越しなさるべし御心結ばをれ必ずなげかせ給ふなとさまざま諫め申さるゝかいゑやう聞召扨も〳〵おことは心のつきたるものかな扨は人をつかはしたるとやあふあふ嬉しく候然らば善導にあひみんことの嬉しやとにつこゑみを含み六十八歳を一期として遂に空しくなり給ふ人々驚きすがりつき是は〳〵とばかりにて暫し泪を流さるゝしてい七世の親しき中いづれも途方にくれ果しあまりにもろき御命是につけても善導の今にも來らせ給ひなばさぞや本意なく思すらんと重ねて袖をぞ絞らるゝ然る所へ善導は夜を日についで急がせ給ひ父の館に入給ふのふ唯今御臨終遊ばしたりと申もあへず倒れふし善後もしらず泣きいたり善だう夢とも辨へ給はずそれは誠かあさましやと御死骸に取付てゑばし消入泣き給ふやう〳〵としてて御心を取なをさせ給ひつゝ空しき居士の御顔を拜し扨てあさましや我は素より父母とてもあらざれば天とも地とも二親とも御みをこそは賴みしにはや先き立せ給ふかやかくあるべき事か此頃は故郷の空の戀しくてけふは歸りてあべふきかあすは故郷へ歸らんかと飛たつ程に思ひしかどつね〳〵居士ののたまはく此方よりゆるさずば里へ歸ることなかれ唯學問の修業せよと深く制し給ふにより御ゆるしなき內にはばかりいかゞと存じ此度の御りんゑうにあはざる事の悲しさやと深く歎かせ給ひける善導御泪のひまよりもいかに方々それ人かいの習ひ生して滅するはひとへに東山にかゞやく日の忽ち西の空に隱れ給ふにひとし哀別離苦をなげくにあらずかくて有ながら御

臨終の其砌り御目にかゝらぬ事共は生々世々の不幸なりぎやうかぎりの上の命をねがふ事はなし只臨終の一大事をすゝめ申さんためなれば南無法王あみだ佛願くば慈悲の御眼じりあざやかにぎやうごうのかいせうなればなど彌陀大悲の本願によらば正念往生なからんと御そつこんを觀念し十念絶えぬ其内にいきたへ空しきかいせう居士忽ちよみがへらせ給ひける善導餘りの嬉しさにひし〳〵と縋り付悦び泪はせきあへず付添ひたりし人々も皆々奇異の思ひをなす其時にかいせう居士は善導大しを拜し給ひ扨て有難き我片時が間に閻魔王宮にいたりぬ大王もいけんして曰く震旦善導そくあみだ佛一切衆生利益の爲め今漢土に出現あるかいせうが悦び是に過ぎじ二たびかへつてしやうぎんの彌陀の一くを授り上品に至るべしとの示しによりて蘇生したり未來佛化の引導して給はれと三拜あるこそ奇妙なれ善導斜めんに思召頼しき御本願やたのませ給へ南無あみだ佛〳〵と十念のみこえもろ共に誠に一天のどかにてあまたの星天降りかいせうの五體よりしんじうの玉あらはれみやうぎやう天子と現じ光りを十方に照し給ふ音樂虚空に聞へ花降り異香四方に薫じさながら淨土もかくやらんそれめうじやう天子の本地あみだたう一たいの御斷かいせう成佛疑ひなし是と申も善導のちやうせの本願曇りなく衆生利益の深きゆへかゝる奇特もあらはれたりそれよりも御死骸を西明寺に送りよきに葬り給ひけるかいせう居士の御臨終善導大しの御法力有難しとも中々扨何にたとへぬかたもなし

## 第四

善導大師はかいせう居士の御死骸をさいみやうじへ送り給ひちうゐんの御念佛怠らず四十九日と申には御丈一尺七寸の三尊の阿彌陀佛を一とう三ぐいに手づから刻ませ給ひつゝさま〴〵の御弔ひたとへていはん方もなし卽ち此如來今日本山城國宇治の里平等院の什物善導の作の阿彌陀されなりいよ〳〵善導の御すゝめ普く一かうせんぎやうの御念佛ありがたかりける次第なり是は扨置きその頃又けごん宗のかうそうこんがう法師とてあなん文珠しやりほつにも劣らぬ程の碩學なりその相形人に變り色黑く口廣く眼は

水晶の如くにて見る人膽をぞ冷しける並びにこんさんじのふにんばう南山のみやうけん法師その外山々院々谷々の學者都合五百余人一ッ所に集りて内儀評諚取々なり中にもこんがうの給はく善だうがすゝむる所さら〳〵以てゑやうばうならず是ひとへにかたかたの心をくれし故たび〳〵大りへ訴たゆるといへ共御ゑやうゐんましまさず然りとはいへどもかれ其儘をくならばゑよゑうこと〳〵く滅亡し萬民地獄に墮ちん事こそふびんなれこゝを以て案ずるに公の爲め法の爲めかつうは末代までの衆生の爲なれば是非此度に於ては我々が一命にかけて善導を申うけ心の儘に行なはん此ぎ尤然るべしとてをの〳〵打つれ内裏をさしてぞ上らるゝ御殿になれば一めんに畏りこんがう進み出で度々奏聞申せ共ついに叡聞にも達せず候かの善導がすゝむる所一々邪法まぎれなし斯く奏聞申す段全くわれ〳〵がまんへんしうにてござなく候君の御ためかつうは濁世の衆生の爲にて候へばあはれ善導を召し出され正法邪法を聞し召し分けられ下され候へ此上に御承引ましまさずばきうせきの寺々を悉く燒拂ひ我々が一命を疾く〳〵召され候へと恐れ入てぞ奏聞す君叡聞まし〳〵てかた〳〵度々奏すと雖善導の勅正法疑ひなしと思ひし故今までは打過ぎぬめん〳〵左程にてんをんと思ふ上はりやうはうの佛法邪正をたゝすべし來る十五日さいみやうじに於て兩方の問答けんりやくあるべきの宣旨なりいづれも忝しと御前をたち三重本所〳〵へ歸られけるかくてさいみやうじには法問の日限にも成しかばぶつだんがうざあざやかに無量の限り旗を樹てとうみやうかうけとりそへ人々をぞ待ちいたり既に其日に也しかば忝くも帝王は臣家大臣めし具してさいみやうじへぞ出御ある扨諸山諸寺がくしやうたちこんがうほつしを先きん立て同寺に伺候ある其外國中の萬民有かろき佛法を聽聞し後生を助り申さんと我も我もと群集するさしもに廣きさいみやうじの門前は雲霞の如くみち〳〵て貴賤色めきわたりけり扨刻限にもなりしかば御まへより時の太皷を打けれ共善導あへて出たまはずこんがう方のがくゑやう達さればこそ善導は我等が威勢に恐れ出かねたるとみへたり其心にて人の敎化にかなはじと一どにどつとぞ笑ひける暫く有て善導はみ弟子わづか召具し客殿に出給

ふ既に座敷も定まれば中にもこんさん寺のふにん坊すゝみ出誠や御身のすゝむる所諸宗のほうもんは出離得道空しく淨土宗ばかり容易く出離けつぢやうとくはんけするでういかん善導答へて曰く釋尊出世の本懐はみな是彌陀の本願しん〳〵みめやうをあらはさんが爲なり其ゆへは秘密ざう經に曰く三世の諸佛出世の本懐は阿彌陀佛のみやうがうを說かん爲なりと云々然れば出離のけつせうはみだ一だいにきはまつたりふしんはなきかふにんいふべき所なくへいこうしてざをさりぬ時になん山のみやうけんすゝみ出いや〳〵なんぢいふは一ぎりやうしこんなりさしたるせうこもなくて一ゑうこんりうしあまつさへしよしうをさみするあくこんぶつぼさつのきやうろん又はそしたうのゑやくにもそむけり何れのほうにかたいのぼるにゑやうどをもとめ心のほかに佛あるや然るにいまなんぢがたつる所のじやうどもんの一かうせんじゆのをしへには佛をみだ一たいとくはんねんし淨土をはるかの西にさだめざいかうふかき此身をばいぎやういしゆのねんぶつにてたやすくゑゆつりをゑんとやおゝかのそうのをしへやとたゝみかけてぞ申されけるあふなんぢしらずやくはんきやうにいはくいちねんにてもさいほうゑやうどをねがひあみだぶつをとなへんものは八十をくこうのゑやうじのちうざいをめつしてかの國にむかへんととき給ふ其うへ第十八ねんぶつわうじやうのぐはんにいはくせつがとくぶつ十方じゆゑやうしゝんしんぎやうよくゑやう口こくないし十ねんにやくふしやうゑやふしゆゑやうがくとこん〳〵この心は我みやうかうをとなふるものをば我國へむかへずんばゑやうがくをとらじとの御せいくはんなりまさにあみだぶつゑやうたうゑやうかくうたがひなし其外ねんぶつわうゑやうのめいもんかぞふるにいとまあらずたふことあらば申されよとべんせつあざやかにへんたうあるみやうけんもことばなくぎゃしてひかへし有さまをわらはぬものこそなかりけれ其時こんかうほうしすかさずつゝといでいわくりやうのしんてい三ぞうのしやくする所せうだいせうねん第六のぐはんに佛のとかせ給ふいつさいのほうを四つのいしゆにわけてあかし給ふ一にはびやうどうい二にはへつしい三にはぎい四つにはゑゆじやうぎよくいとわけ給ふ其中にべ

つしいとはによらいびやうどういのしんりをすゝめ給ふといへ共がまんむざんのしゆぎやうのきにわかなはざるがゆへに佛いかにもしてかのしゆじやうをすくはんと思召ほうべんをめぐらしての給はくなんぢらたほゐ佛のみなをとなへよ必ずごくらくにわうぎやうせんとをしへ給ふしんりにはあらずたとへばたうを立るあししろのごとしいかんと云に如來ぢひるゐんまんの其心にてむゐんのしゆぎやうにびやうどういのしんりをさづけ佛道修行におもむかせんためのあししろなり是則成佛のへついじなりなんぢが今すゝむる所はたとへばごくちうのあく人にても一念にほつぐはんしなむあみだ佛にてわうじやうすといへり是大き成あやまりなり是は是佛ゐんのしゆじやうをぶつくはにいたらせんためのほうべんなり是かりにをしへ給ふべついしにおなじなんぞせんけんのろん玄やくにそむきひとへに玄やほうをひろめふかくなむあみだぶつのみやうがうをすゝめばんみんをあくしよにおとさんつみいかでかもつてのがるべきへんたうあらば申てみよいかに〳〵と口を打てぞ申ける時にせんだうの給ふやうかた〳〵はやうやくぼさつのろんしやくをもつてほうもんにおよびぬいで〳〵ふつせつのめいもん諸佛のせいげんを以てせうことしてきかせんぶつせつあみだきやうにいわくもしせんなんしせんによにんあつてあみだぶつのせつを聞て一心ふらんに是をとなへば其人命をはる時にのぞんでむりやうのしやうじゆとげんにらいかうしごくらくへむかへんとの御心なり十方がうかの諸佛あみだぶつのみやうかうふかしぎの功德誠なくんばしよ佛の御した大ちにをちてくちはつべしまづせのしゆじやうみやうがうをうたがはずしてとなふべしねんずべしとちかはせ給ふせうこあみだきやうにあきらかなりがゝるたつときみやうがうをしゆするしゆ行しやをへつしいにひとしきとはうんでいけんがくのあやまりかなとあらゆるきやうろんしやくもんをちじやうたゞしくの給へばいや〳〵すでにしやかのしよせつをほうべんとみるからはすゝむる所の念佛へつじいにうたがひなしいで其せうこをみせんと天にむかつてしゆもんしばらくとなへければ俄に天ちしんどうしてくろくも一村まひさがるたちまちあつきあらはれてせんだうにむかつてほのほをふく

その時せんだうなむあみだぶつとくはんねんあれば六じのみやうがうこくうんにうつるとひとしくめうがうたちまちりけんと也くだんのあつきにわたり三重あひみだれあひてぞたゝかひけるさしもひぎやうのあつきぶつりきにきりたてられこくうにとびさりうせにけりりけんはもとの六じとなりひかりをはなつておがまれ給ふぞありがたき其時せんだうりけんそくせみだぶついつせうしやうねんざいかいじよととなへ給へばくもりしそらもたちまちにきよきそらとぞなりにければせんだう大じのりけんのみやうごう是なりかさねてせんだう手を合せなむ西方のあみだ佛六萬がうかの諸佛ねんぶつわうじやうのすゝめわしやくそんの諸せつにまかせ本願にもとづいてしゆぎやうをりやくす若我すゝむる所あやまりあらば此ざをさらずたちまちむけんぢごくにをとし給へ又あやまりなくば諸佛しよぼさつかんのふあつて一つのきずいをみせしめ給へなむあみだ佛とねんじ給へばふしぎや玉たうにこめをき給ふにしやりはるかこくうにとびさり給ひたちまちによらいのすがたをげんじひかりをはなつておがまれ給ふ中にもぶつだんのもくざうはくはうみやうかくやくとてらし給へばいきやうくんじて花ふりこくうにみこゑあつてせんだうのすゝめまもるべし〳〵せんざい〳〵うたがふ事なかれとあらたに御つげまし〳〵てぶつしやうはたちまちにもとのごとくに玉たうに入給ふ此時の有さまを今日本願寺のかいさんしんらん上人せんだうとくみやうぶつしやういと玄やうしんげに玄やう口し給ふ是なりこんがう法師をはじめとして五百よにんのがくしやうたち皆々ずいきのなみだをながしけるかゝるきどくをおがむうへはなにしにうたがひ申べきさいせんよりのふぎすいさんまつぴらゆるさせ給ふべしと玄やうじんのあみたによらいにあひたてまつる心ちしてみなこと〴〵くでしとなり御十念をてうだいしせんだう大しの御ともしてがく玄やうさんへぞ歸らるゝしよくせまつ代たうあくにん一さいしゆ玄やういわう玄やうぜんだう大しの御ほうりきありがたしともなか〳〵さて申ばかりはなかりけれ

# 第五

せんだう大しのおすゝめあまねく天下にひろまりてゑんかばんりのはてまでも老やうどもんにきぶくしてらうにやくなんによきせんとひみなねんぶつをぞ申けるすでにとし月をしつりてせんだう大し御年六十九歳におよばせ給ふある時御でしたちをことごとくめされ我すゝむる所のほうもんあみだによらいの御ないせうにかない念佛はんじやういたしゝ事よろこびてもなをあまりあり然れば此國に念佛もつはらなれば衆生しやうふつうたがひなしされば我世めい七しゆんにおよべりりんじうの程ちかゝらん我すかたをもくさうにうつしまつせの衆生をりやくせんとしやくせんだんのみそぎをもつてみづから御かげを作り給ふは有がたかりける次第なりかくて御かげざうりう有てせんだうなゝめに思召かうざにうつしかうけをそなへ我めつごには必一さいしゆじやうを我に替てりやくあれなむあみだ佛〳〵と十念まします其時ふしぎ成かな此御かけせんだうもろともがつしやう有あひ十念をふそく有きたひなりける次第なり其後此御かけかんとより日ほんに渡らせ給ひ今つくしのせんだう寺のごゑいは是なり誠にせんだう大しあみだのけしんたるによつてさま〴〵のきみやうはかそゑんかたはなかりけり御年卅五のはるよりも六十九歳の御としまでちうやまどろみ給ふ事なく出入るいきにもせうみやう念佛しあみだきやうをかき給ふ事十萬ぐはんにおよべり極樂のていさうあみだのゑざうを書あらわし給ふ事三百六十ふく毎日の御しよさにはみだきやう一萬ぐわん幷に念佛十萬べんへんしもけだいましまさず其後せんだうおまたのみでしたち其外の長じゆにむかつての給はく先りんじうゑかうほつぐはんのきをあらはし三じん四しゆのゑかうおきらかにしめさんと仰ければ其時ちやうしゆはつとこたへかうべをかたむけちやうもんす扨其文にいわくぐはんでしとう此ぎは一さい衆生は皆是あみだ如來の弟子なれば今よりはしゝやうのしゝやうと頼みせうみやう念佛せばりんじうのせつは必らいかうましますなり其せんとししゑやうの其人心てんたうせずあやまりみだるゝ事もなくかのみやうがうのしつねんもなくもろ〳〵のくつうもなく心よくたのしみてせんぢやうに入かたとし此こゝろをもつ

てしん〳〵けら〳〵によにうせんぢやうとは申なり有かたやあみだ如來くはんをんせしいもろ共に十方の諸佛しよぼさつまでこと〴〵くらいかう有念佛わうじやう有人をせんにんかなとかつかう有此ぎをもつて此きやうにしやうしゆげんせんじやうぶつ本願とはあらはすなり上ぼんわうじやうあみだぶつこくたうひ必いとくろくじんづうあゝかたじけなやかのどにいたりては十方せかいをめのまへにみる事みな是によらいの大じ大ひのゆへなり爰をもつて此きやうをにう十方かいくうしやう〳〵しゆ爰やうとしやくし給ふこくうむへんなればせかいもむへんなりしゆじやうことにむへんなりかゝのごとく一さいしゆじやうかたじけなくもあみだ如來の大せいぐはんをおこし給ひこと〴〵くたすけ給ふせかいこくどのあらんかぎりはなむあみだぶつのみやうかうはよもつきじたしうのおきてはちゑをみがきて爰やうぶつす今爰やうどしうのありがたさはぐちにかへつて念佛しごくらく國どにわうじやうすたのもしやなむあみだぶつこくうほうかいじんがぐはんやくによせほつぐわんいしゝんきみやうあみだ佛ととかせ給へば人々は皆一たうになむあみだ佛ととなへける猶それよりもせんだうは三心四しゆのゑかうのぎをくはしくしめし給ひける此三心四しゆのゑかうは我てう念佛のぐはんそほうねん上人とくだう有しきしつくんほつおうさうげんさう此四しゆを二つにわけわうさうげんさう二しゆのゑかうを念佛一かうもつはらしゆしましますゆへ則しんらん上人に御ふぞくあるさるによつてじやうどしうのじきしつくんほつ一かうしうのわうさうげんさう是を合て四しゆのゑかうと申て今まつ代にいたるまで是をたつとみけつじやうわうじやうをとぐる事ひとへに如來の御せいくわんじんじんみめうふかしきのくどくはなむあみだ佛にきはまれりとけうけ有こそ有がたけれさてごゑかう御せつほうをわつてのち大し仰けるやうは我きたる十四日にはごくらくわうじやうとぐるなり一七日のへちじねんぶつをはじめんと則ほつくはん經をどくじゆあり御念佛をかいびやく有すでに一七日にあたる日はたうのかうそうゑいりう二年かのどのみの三月十四日の事なるに一天に花ふりいきやうこくうにぢうまんし極樂せかいは其まゝに今此所にうつすかとい

よいよしん〳〵あざやかに御ねんぶつをとなへ給ふ然所にこくうにをんがく聞へぼさつしやうじゆことごとくせんだう大しをむかへんと三重らいかう有こそありがたけれかくてせんだうていせんにざぐをのべ西方にむかひがつしやうし御念佛を申させ給ふふしぎや其時ていせんの柳の木よりしうんたなびき大しのみあしのもとに來る善だうかんたんまし〳〵て件の雲にぜうじ給ひかの木の上に上らせ給ふはきたいなりける次第なりかくて其後善だう大しこぼくのうへにあんざまし〳〵なむしゝんきみやうらいさいはうごくらくせかいけうしゆあみだぶつ幷にくはんをんせいしむりやうのしよぶつしよぼさつ一さいしゆじやうびやうどうわうじやう一れんたくしやうなむあみだ佛のみ天ともろ共に有がたや善だうのにくしんたちまちへんじてわうごんの御姿とあらはれ給ひ光明かくやくとてらし給ひ十念さうぞくましませば有がたや御いきの內よりもけぶつ三ぞんあらわれひかりをはなつておがまれ給ふ扨其後にむりやうの諸佛諸ぼさつが善だう大しもろ共にざんじが間にあんぜう有くはんいしくどくべうどうせ一さいどうほつぼだいしん往生あんらくこくなむあみだ佛の御ほうぐはんきたい千萬有がたし共中々申計はなかりけれ

寛文拾庚戌年彌生下旬　山本九兵衛板

善導記終

# 日本王代記

井上播磨掾藤原要榮正本

## 井神武天王のゆらひ

## 第一

さてもその〳〵ちそも〳〵天しん七代ちじん五代は神の御代さて人代にうつり日本大わうしんむてんわうのゆらいをくはしくたつねたてまつるにてんせう大しんくうに四代のそんうかやふきあはせずのみことにたいしあまたおはします第一はひこいつせのみこと〳〵申たてまるは御心たけく高力ふさうの御うまれつきはんみんこそつておそれをなす次はいな〳〵みのみこと第三はみけいりのみこと第四ばんにあたらせ給ふはやまと岩彦のみ事とて御さうかうにうわにして御せいとく天にかない事にふけいのみちにきよくじんきをもつてしよみんをなでさせ給ふ日本みかとのはしめじんむ天わうは是成つくしひうかの國にたいりをたて おろし ゆたかにすませ給ひけり扨またしたかふしんかにはわけのみちをみのしんとてこくうむへんの大力かるきことはとりにひとしくていねをしゆこしたてまつる國おだやかになみもなく三重おさまるみよこそめでたけれ是はさてをき其頃又つくしより東南にあたつてやまと〳〵いふ國ありこの國の大將川くしのじんみやうといふものあり家ゆたかにけんぞくおほく天ちの間にはゝかりなく心のまゝにおくりしがつくしの天わうのいせいつよくしたいになびきしたがふときくよりやしんをきしはさみある時けんそくともをちか付扨もつくしにあるみことゝやらんがいせいつのつて國々かれにしたふとや今まで心にまかせはびこつたるそれがしがかれがしたてにつかんことおもひもよらぬ事にてありさりながらきやつばらめはてんの神のしそんとてしよにんおもひつけはちからなしあはれさて天のあくじんしゆつげんあれかしそれかしかしゆくんとあかめあめがしたのこくわうとあをかん物をらいげんあれ〳〵としぜうしんにぞちかひける其時そらのけしきにはかにかはり大きなるほし一ツていぜんにおちくるり〳〵とまはりけりしんみやうきつとみて天にすむべきほしちにくだるべきいわれなしほんしやうをあらはせととつておさへつかんとすれば二ツにわれ中よりく

せものあらはれしんみやうとひつくみうへをしたへとかべしける本よりしんみやう大力つゐにしたてにくみふせけんをくびにおしあつれはやあやまりすな我は是なんぢかこひねがふ天のあくしんのけんぞく成が御身がしんていを心みよとのおほせによつてきたつてありしんみやう聞てさてはさやうに候かととつてひつたていきつく所にくもゐにひゞきしきりにしてあまのいわふねにうちのりふしぎのものこそあまくたれそのしやくは一ぢやう四五しやく成かまん中に立ければあひもおとらぬけんぞく二人ほとひつさげゆんでめてにかしこまる時に大将天もひゝかすこゑをあげ我は是天のあくしん荒雲にきばやといふものなりそれがし此國にのそみをかくるといへ共時をへずしてうかゞふ所になんぢふかくこひねがふこゑにおうしてらいけんせり其つくしのみこと共神のそんならば我もおとらぬ神のそんなりそくしにつくしをうちつぶさんまづ下かいのこくわうとあをかれん我にしたかへなんちらとこともなげにぞ申けるしんみやう大きによろこび扨はさやうに候かはやくねがひのかなひたり此うへは何事も御下ぢにしたがひ天下たい平にきりたいらげ國わうとあをぎ奉らんといさみすゝんで申けるおふ〳〵いさぎよししんみやう我にてきたう物あらばかたはしよりつかみさき下かいのやつはらにそれがしがいせいをしらせんいかに立齊やつむねなんぢらいそぎつくしへ立こへまつそのみことゝやらんをひつさげて參るべしいそげいそげと有ければ二人のけんぞく承はり御心やすく思召そくじにひつたて參らんとしんつうじざいをあらわしてこくうにとんてぞあがりけりそれよりもにぎばやはやまとの國にしやうをかまへ三重下かいのせいをぞあつめける扨そのゝちにつくしにはなをおさまれるよものそらけしきのもりのもみぢがり頃まちかねて尊立其ほかきんじゆの人々御ともにてまく打まはしさま〳〵の御ゆふきやうとぞみへにけるいつせ仰けるはいかにかたゞ〳〵それ人間のまなこほどまよひやすきものはなしくれなゐまかふもみぢはもめなれぬればせんもなしいざおく山にわけ入てこすゑこかげにかくれいる鳥けだ物をおい出しきりとめいとめくみとめていさやうつきをはらさんとの給ふ所にたれとはしらず大をんあげ是ははゝさい國より

わたりたるじんべんきいのさう人也さうし申べき事ありとたからかによばゝりけるみけいり聞召ふしぎの事を申ものかなそれこなたへめせ承はり候とやがて御せんに出しける二人のもの御まへにかしこまりかゝるぎよゆふのおりからなれば我々がしんつうにてめをおとろかせ申さんとこくうをしばらくまねきければがんぜんにかすみかゝつて一ッのしまとなり山のこしよりさつ〳〵とおつるたきのはやきせをのほれるこひのいきをいは三重すさまじかりけるしだいなり人々此よしみ給ひてわれも〳〵と立よらせ給へばかすみとなりてぞはれにけるいつせ仰せけるは扨々きめうをへたるものかなきやうこふちしをくべきぞ此所にとゞまるべし扨まつそうし申さんとはいか成事ぞ二人の物承はりさん候君の御まつりことせいしんにあらすばんみんいきどをりふかしさるによつてやまとの國にひやうらんおこりじざい天のまもせうにぎばやといふあくしん下かいにくたつてこの國をたいらくるなりおろかに心へ給ふなとことばをはなつて申けるいなゝみ聞召おろかのものゝいひことやそもきやつばらがぶんざいして此しん國をうばはんとはとうらうがをの成べしとあざわふつての給へばいや〳〵さやうにあなどり給はゞひつでう國をうばゝれ給はんあゝうれしやな天つみそらのきみがなを此國にひろめんとことばをきんしていたりけるそのときみちをみきしよくをへんじやあきつくわいなりなんぢらあまつみそらのきみがなとは何事を申ぞみけいり御らんしていや〳〵さなしみちをみ扨はきやつばらはくだんのあくしんかけんそく成べしわれ〳〵をたばからんとへんげてきたるとみへたりさあこなたのみるめはちかふまじまつすぐに申せやとしきりにつめかけ給ひけるいや〳〵さも候はずしづまり給へ人々我々はものゝたゝりをかんぜんにみるゆへにかやうには申也國をうばはれ給ふとの是は是はせうこをみせ申さんとたな心をあはせ御そばへ立よりとみへしがたちまちすがたを引かへみことを引立こくうにこそはあがりけれ今一人のくせ物いかれるこゑをさし上げそも我々はくだんのあくじんのけんぞくやその立齊きたうやつむねといふものなりなんぢらこと〳〵くわがしゆ君にしたかふべしまつおのれら一人もあまさしと岩彦のみことをひき立ゆか

んとすみちをみすかさずむずとくむいなゝみうしろよりたぶさを取て引たをさんとし給へどもこと共せず三人を引立とんで出るをいつせはしりかゝつてむないたをつよくおさへうはおびをかいつかんでこんがう力を出しゑいやつと引とめ給へば人々とうをんを合ゑいや〳〵と引すへさて〳〵おのれはくせ物かなふびんやなみけいりはかいなくませうにとらはれてあへなくしにゝおよばんことのむねんやといふもあまりありきやつにしたがふけんぞくさへかやうのいきをいなれは大将あらくもがけいりやくじんつうさつするにふかし一しやうのふちんいまなりときうしう九かこくのせいをあつめ給ふそれまづはからひ候へかしこまつて兩方よりひつはりやがてくびをぞうつたりけるさてみちをみらいしんにさふらひ大将を仰付られ三人のみことをはしめぎよけんにちをぬりいくさがみをまつりやまとの國に打立給ふいくさがみのちまつりといふ事此時よりもはじまれり此人人のはやわさいた天もかくやらんとさてかんせぬものこそなかりけれ

## 第二

扨其後かくて立齊はみことをひつたててたかてこてにいましめあらくもの御まへに參るやつむねがさいごのていはじめをはりを申あぐるにぎばやきいて扨々やつむねはしそんじて有けるよなさりながら其物をいけとる事ひとへになんぢがはたらきなりいかにみことそれがしがいせいを今こそよつくしつゝらんきやうこう我にしたがふならば命をたすけゑさすべし何と命やをしきかといひければさん候さして命をおしむにはあらね共きこうのいせいをみるからは敵たいすべきにあらず御たすけ候はゝかたしけなく候はんと誠やかにの給へばおふ〳〵さもあらんそれ〳〵りうさいまづそのさうのかいなをきつてをとせかしこまつてやがてかいなをうつたりけりあらくもきつとみて何とそれにてもたすかりたくおもふかや其時みことといたけたかにのびあがつてあらくもをはつたとにらんでゑゝおのれはちくるいにもおとる物かなたとへ五たいはふんだんする共うでたにあらばおのれと引くみうむのせうぶをけつせんとおもひさいぜ

んよりたばかりしになんぞやかやうになりはてなに
の望のあるべきぞとくしてかうべをはねよおのれそ
れがしが一ねんなよそへはゆかし今に思ひしらせん
とそのゝち物をもの給はずにぎばや聞ておゝいさぎ
よき心ねやそれすみやかにかうべをはねよいくさか
みにたむけんとあへなくくびをぞうつたりけりふし
ぎやむくろうごくとみへしがたちまちてつたうのか
らすとへんしこくうにとひさりうせにけりあらくも
是みてゑゝあさましやしんいふかくしやうをへんせ
しふびんさよ此うへはゆだんすべにあらずおつ付是
へおしよすべしさりながらなまぬるうつたる下かい
のせいなん十萬きあればとてありのたけ共おもはれ
ず只ひともみのせうふならんいきをもつかせずうち
つぶさんうちとけいるななんぢらとそれ〳〵にそな
へをたてよせくるかたきを三重今や〳〵と待いたり
さる程にかくてつくしのみことたち大せいをゐんそ
つしやまとの國ちはらのさとにつかせ給ひしばらく
ちんをぞ取給ひあく所なんしよのちはんをめぐらし
せめ口の御よういとぞ聞へける是よりてきのじやう
くはくへはおさかめざかとて二ッの口ありまづめざ
かへはやまといわひこのみことみちをみのらいしん
三せんよきにてむかはせ給ふ扨おざかへはいつせの
みこと同いなゝみのみことしよぐんせいを引ぐしむ
かはせ給ふ扨おざか口を大手となづけめざかくちを
からめてとなつけ給ふ是わがてうのおふてからめて
のばしめなりかくて兩大將こまをはやめてうつたち
くさかべのじやうにおしよせ時をどつとぞあげにけ
るしろにてごしたることなればおなじく時をぞ合け
る其時御大將いつせのみことしんつうくろといふめ
らばにきんふくりんのくらをかせ御身かろげに召れ
しんたうにあゆませそも〳〵是へよせたるは天せう
太神に六代のはつそんいつせのみこと也かたじけな
くも此國はてんせう大じんにゆづりをうけてにちり
んをかたとつて大日本と名付しんたうをもつて國家
をおさめふつほうわうどうしんたう三ッかなはにあ
ひつら也五々まつだいにいたるまでおさまりなびく
しんこくをなんぢら如きのあくしんのぶんざいにて
けがさんとはもつたいなし五たいたちまちそんぞう
しこなたをうらむなとこうせうによばわり給へば川
串のしんみやうたかき所にかけあかつてやあおろか

なりみことなんぢくちはきく共うではたゝしされば
にぎばやない〳〵この國をのぞみ給ふによつてそれ
かしに心を合せらいけんし有し此うへは何とおしむ
とかいあらじ只すみやかにかぶとをぬぎにぎはやこ
うにしたが〳〵とさもにくさげにぞ申けるみことはら
にすへかね給ひ物ないわせそ打とれとしきつて下ぢ
をなし給へば本よりいさむつゞしせい我おとらじと
きつと出三重ひばなをちらしてたゝかいけるさるほ
どに兩ぢんたがいにうたるゝもの山のごとしされ共
せうぶはみへざりけるくん中ばのこと成に大將にき
ばやこましづ〳〵とのり出しなまぬるきいくさかな
いで物みせんといふまゝにてんにむかつていきをく
わつとふきければにはかにこくかんよもにたなびき
けんをふらし天ちをくづるゝばかりなりされば つく
しせい此いきをいにおそれをなしおばしたゆんでみ
へにけるその時あらくもほこふりたてむらがるてき
にめかけつゝこまをさつとのり入てさんをみたして
切にけり馬人のきらいなくにぎばやか一せんにくつ
きやうの兵物二百よきあまりうつたりけりのこりし
やつばら四方へみつとおつちらし扨も下かいのやつ
ばらはにげあしのはやさよそれがしぢまんの此馬も
よもきやつばらにはおいつかしあらものくさきいく
さやとこましつ〳〵とひつかへすはふしこやまのう
ごくがごとくなりいなゝみはるかに御覽してそこを
引なにぎばやけんさんとおつかけ給へばふたういし
竹是をみてをゝよきかたきまいりさふとはしりかゝ
つてうつたちをひつはつしちうにてくびをうちおと
しにつことわらつて立給ふやそのりうさい是をみて
やあかゝりあるはたらきや御みがしやていみけいり
をもそれがしかてにかけたり御身もわがてにかゝつ
ておなし道におもむかれよとあゆみいでたるありさ
まは人けんとはみへざりけりみこと御らんしておゝ
ちんもなんぢをこそ待つれよれくまんもつ共とおし
ならべてむんずとくむ本よりりうさいがうりきぶさ
うのがうの物たゝ一ひしぎにとはげみけるされども
みことふぢのまとふがことくにて打からみをしめ付
おのれみけいりのかたきなればほねはみじんにくだ
く共あんをんにおくべきかと心はたけくいさめ共ち
からまさりのりうさいにてうはおひをかいつかんで
めてへかつぱとはねたをしのりかゝつてくびをふつ

つときつてすてけるがふしぎや此くびおどり出りうさいがふるのくさりにひつしとくひ付ふつゝとくひきりてふしこくうにとんでぞあがりけるねんりきこそおそろしけれいつせ御らんしてきくすいのぎよけんをひつさげいつせのみこと是にありあまさしかへせとよばゝつてたせいの中へわつて入三重ばらりばらりときり給ふぎよけんのさきにむかふものいきてかへるはなかりけり川串是をみてかしの丸きの大弓になかさし取て打つかへやつほをしほつてひやうといるされ共やつほはちかいけり御そは成大ほくにとをなりしてすつはと立やあきやつめはせいひやうやなたゝなかをとをされてあしかりなんとすこし立のき給へばたにのおかはにわたしたるはしいたありさいわいとひつたていかくるやをいたにてうけとめ給へばしんみやうきつとゑてやさしきものゝはかりごとやとゆんでのそばにをりたつてかなくりはなしにかつきといたあやまたすみことのふへのくさりにはつしとたつ大事のてなればうけもあへずいぬいにとうとまろひ給ふすはいとめたりとくひをとらんとかけよるをうしろをきにかつはとをきかいつかんでひきよせゑゝくちをしやはらたちやとちつ共はたらかせずくひふつとねちきり立あからんとし給ふ所にきたうやくりきあまのいちのや大將なりあまさしと我さきにうつてかゝるすでにあやうくみへし所に岩彦のみこと同らいしんかけきたりてむらがるてきをおつはらひさて〳〵あやうきせんやとみことをいたはりまつかたはらに入給ふ此人々の心の内むねんなり共なか〳〵さてなにゝたとへんかたもなし

## 第三

さるほどに三日三やのたゝかいにてきみかたうたる物かずおほくたがいにしやしれつなきといへ共つくしかたにはいつせのみこと大じの御手をおい給へばかわちの國あしのといふ所に御ぢんをとらせ給ひつゝさま〳〵いたはりたてまつれど御きすしたいにをもりつゝすでにかきりとみへ給ふいたはしやみことはくるしげ成御いきをつきいかに岩彦きゝ給へ我むなしく成ならばさそたよりなくおはすらんかまへてちからをおとさすしあくしん共をはろぼして大し

んくうよりゆつりゐたる此國を外道のすみかとなし給ふなちんが五たいはやぶるゝ共たましゐはれいれいとこくうをかけつてまもるべしあゝさりとては口をしやといたけ高にをきなをりぎよけんに御手をかけ給ひおのれあくしんどもしやうをかへてもあんをんにをくべきかと御まなこをくわつとみいだしいかれる御きしよくその儘につゐにおはらせ給ひけるみことをはじめ人々はふし是は〳〵とばかりにてこゐをあげてぞなげかるゝつきそひたりしよぐんぜいたたあんやにとほしひきへたるごとくにてふしなげかぬものこそなかりけりさてあるべきにあらざればとある山中に御しがいをうつみ人々はなみだにくれてぞましますが其時とちうにこゐありてわれあまてるかみのしそんとしてこの國をゐるされ共天めいうすくさうせいすといへ共たましゐは此國にとゝまつてあくまをはらいばんみんをけとせんとの給ふこゐの内よりもかたちははくしやとあらはれにしをさしてぞとひ給ふひうがの國にとゝまつてたてのみやとあらはれゆみやのしゆごじんといはゝれ給ふぞありがたきされば よの中のたのみなきは人心いつせのみことほうぎよをみて我も〳〵とおちゆきて御てにしたがふものとてはくもわけのみちをみ一人ばかりなりあらあさましのことゞもや此まゝにてつくしへとてはかへるまじいづくへなりとも身をかくしほねをみぢんにくだくともあくじんどもをほろぼしあにみことの御いきとをりをやすんせたてまつらんといかれる御まなこになみだをうかべ給ひけりみちをみもしこくしてりんげんのごとくきやつばらいかなるひしゆつをなすとてもしんばつみやうばつたちところにあたつていかでまつたうござあるべきやまつ人さとへ御出なされつかれを御はらし給へやとみことの御ともつかまつり三重人家をさしてぞいそがれける是はさてをきこのやまのふもとに八ツぐらのおきなとてふうふのものあり本はなをへしちやうじやにて家ゆたかにけんぞくおゝく八ツのくらにかずのさいほうみち〳〵てふそく成こともなしされどもふうふともにじひ深く人のひんくをあはれみてひゞにほどこすたからのかずあたかもやまのごとくなりさるによつてみち〳〵たりしざいほういつとなゝつきはてけんぞくもちり〳〵に今はふうふ二人さへくらしかね

たるふせいなりされどもふうふたのしみにはてるひのまいと申て十六才になり給ふひめを一人もたれたりはなのかほばせあざやかにやうりうのかせになびける御よそをひすいのかんさしたをやかにことに心のやさしくて三こく一のびじんなりされればふうふの人おくりかねたるよの中にも此ひめきみになくさみのひゝにかはらぬいとなみにわかなつまぎを御らんのためふうふもろ共うちつれておくるのべをさしてぞいてらるゝしかる所へみことはうちこへたまひやあ人家のみゆるにやどをかれかしこまつてたちよりみれば家をびたゝしくつくりたれども人すむていどもみへずされ共こゑをあげあんないとよばゝれはてるひのまへたち出いつくよりとの給ふさん候ゆきくれたるりよじんにて候一やのやどを御かし候へなにたび人かややすき御事にて候へ共はづかしながらうへをやすめ申さんたよりもなし今すこしすぎさせ給ひ候やとめさせ候へとよにやさしげにの給へばみをこと御らんしてなふなさけなしひめぎみ色をもかをもしる人ぞしるともにうへに望むともいかでからみ申べきたちよるかげもゑんなればふしひらに〳〵との給へば身はうもれ木の人しれぬみやまかくれのかりのやといかでかをしみ申さんとさあらはこなたへとぞせうしけるかゝりける所にふうふともないたちかへればありしゝだいをかたらるゝふうふきいてをゝよくこそおやどを參らせたりとよにまめやかにもてなしけり頃はきのとのみ正月朔日はつはるとてよそはいろめけともおきながいへには一はんもたへたりふうふあまりにせんかたなくかしいをもとめこにはたき是をねりて月日のことくまろめ二ッかさねてたいにすへこめすこしありけるをわきにまきみつかんと一中へくりかやさま〳〵のこうるいをそへふし二人のまいにぞすへにけるみことあまりなれざるものなれどもあるじが心ざしをかんしふしみ〳〵きこしめされける是きつきやうとなり御代にいでさせ給ひてのち正月はじめにはかくのごとくとりおこない給ふ是をまなんでするゑ〳〵まで正月のかゝみはうらいをいわふこと此ときよりのきちれいなりかくてふうふはまつけさのほとはしたゝめたりさてくれのくごをばなにとかまかなひ申さんとおもひわびたる所にてんじやうよりものおとしてさがりけりなに

やらんとよくみればまつさきなるはしろきねづみそのをにくいつき〳〵いくらもつゞきくらの内へぞ入にけるおきなふしぎにおもひくらをひらいてみてあればきん〴〵こめぜにさま〴〵のざいほうありこはいかにたからこそわき出たりうばごぜ〴〵とよはればなふめでたし〳〵いづくにかと扨八ツのくらをひらきみれば色々のたから物のきをしきつてありしむかしにばいしけりとしのはじめのくらひらきまたねまつりといふ事このときよりはじまれりふうふ大きによろこびわれ〳〵二たびかやうに富にほこりし事ゆゝしき人にやどまいらせしゆへなりといつきもてなしたてまつればみことも御心ゆるやかに月日を送らせ給ひけるあるひ大そらのとやかにはるめきわたる折からうんちうよりふしぎのけしんあらはれ是は天せう大しんのしんちよくなりかのあくじんはひとかたならぬくせものなりおろそかにてはほんすまし是はこんにてかみをまつるあまのひらかといふものなりすなはちあらくもかすむくにのつちにてつくりたりと丸きうつはものをあまた給はりこれにくもつをもりしよてんをまかせ給へとのしんちよく也いそがせ給へとく〳〵とくもひはるかにあからるゝ我てうの今のかはら是なりみことありかたくおほし召さあらばしんちよくにまかせしよてんをくはんしやう申さんとくもわけに仰付られにはかにやういをなされける扨そのゝちにかくていわひこのみことはあくじんめつばうのそのため御身をきよめしよてんをくはんしやうなされける是わがてうのきねんまたちやうふくのはしめとかやながきかづらにしろきゝぬをきりかけ四方に是をひきまはすゝゑのよのみしめなわといふ事是をまなひてひろまれりさてくだし給はるかねらけにしゆ〳〵のくごをもりならべそのほかあまたのそなへものかずをつくしてみへにける扨くもわけも身をきよめたんじやうにさしかゝつてそれ日本はしんだん國よりひがしにあたり候よしじつぎにてござ候やおゝひがしにあたつて國のかたちあきつむしまにいたりまことにそくさんへんちの小國なれども天しん七代ちじん五代あひつゞきたるしんこく三國一のめいこく也さればわがてうはかたじけなくも天せう大じんぐうよりゆつりゑてわれ〳〵までは六代などかかんのふなからんやしかるに天のあら

くも日本をうばゝんためにわしういるまにあまくだりさま〳〵のあくぎやくたみのわづらいたるによつてめつばうさせんとたせいをそつしむかふといへ共かたきのやいば四かいにはびこり天をひゝかしちをうごかしみかたのぐんりき日々によはくちゑのやさきぢんべんのほこもつくちり〳〵にはいぼくせしむるによつてしよ天を申おろし奉るまつたう力を合せかつ事をいやくのうちにゑせしめ給へばまづとうばうにはぢこくてんわうごんせんにすみ給ふさいはうにはくわうもく天はくきんせんにおはしますなんばうにはさうぢやうてんなりせんに立給ふ北方にはたもん天すいせうせんをまもらせらるゝさてわうしきてんにはしやく大わう是ぢうわうのしゆごじんたりとうりきん天とそつ天せうくはうむしきこうくわてん四わうでんには日月口しの三くわうあまのかく天みやうわう天むりやうむへんふくしやう天うきも辛さもはらひすてたゝ何事もよの中は心まかせにじざい天くものうきはしたへ〳〵にしぼめる花の色をうしなひ力なき折柄も引かへすなかあづさゆみやたけ心やものゝふのいさむ心はしくとうてんあるかとみればたちまちにふしたのしみかはるらくへんげ上ひさうひゝさうほんしゆ天そらにもこひがあればこそよもにうきなは立くものはだてに物やおもふ成ふしあゝ人めのせきをこひわびて色にひかるゝ四きよく天上中あるひはさんごにはくるりめのふこん〳〵だうをたからとすこれみなりよくのたねなれやとんよくしんいまうくわ天なをも心はいさぎよくさつ〳〵と引取三重あめをふらすはりうさひ天こずへ〳〵をさらり〳〵とふきはらふかせにたつるはふくわう天をんせいみめう様々の五しきをいろどるはうじゆ天ふしはなのうてなもかゝやきたはうせかいをめのまへにうつすや玉のひかりさすひりやうぜう天せいしやう天ふしあめのはらふりさけみればりもりなきゆきあり月のみやうしやう天あくまがうりき五大力こんがうひやく天みろく天ひやくしき天にはいだてんわうよくかいの六天わうしきかひの十七天しゆみの三十三天ことにはさうわうほん天大しゆくのこらずくはんじやうせしめ奉るねがはくはあくしんはやくもをこくうばんりにきりはらひ天下たい平にちんごしたまへゑい〳〵〳〵しよ天せんじんとかんたん

くだき御きせいある十せんかうゐの御いのりしよ天もなふしうさぞあらんとかんせぬものはなかりけりまことにめでたききしきやときせん上下をしのべてさてよろこばざるこそなかりけれ

## 第四

かくて其後さしもまふいのまわう共みことのゐ力にくだかれけん國ようやくしづまれり去程にてるひのまへみことの花の御よそをひ一めみしよりやるかたもなき思ひくさとても人にまみゆるならばかゝる人になれそめてこそうき世にすめるかいもあれと思へ共さすがげに色に出んもおもはゆくやるかたなさにひめ君は女ばうたちを近付ていつよりけふはしみしみと物さびしく思ふなり花ぞのやまにともなひて心をはらさせて給はれやふし女ばうたちとぞ仰けるこはけしからぬ仰やなさあらばいさなひ申さんとにはのませかき押ひらきおくり花ぞのさしてぞ出らるゝ折ふしみことはつれ〳〵にやおはしけんことを引よせ給ひつゝ時のてうしをうかゞひて三重せいがいはをぞあそばしけるひめ君此より聞召めつらしのことのねやないまだ下かいにはつたはらじと思ひしにことにたへなるしらべにぞ思ひはなをもまさりぐさあきのすゝきにあらね共ひたすらほにやあらはれてなにとなきてすさみに思ひの色をかきしるしにはにおちたるとりのはのもくげんじゆのみに玉づさをゆいそへわらはがねんりきとをれやとなげあげいたにて打給へばあなたへこそはとをりけるそれよりして是をなぞらへこいのはねのこまたはごいた共な付すへのよまでももてあそぶみこと取上み給へばこいのおもにのことのは色〳〵につくして有是は女のわざみるもなか〳〵けがれなれとすてんいや〳〵女はぐちにてねんふかし思ひきらせんと思召只一ふてあそはしくだんのことくむすび付てなげ給ふ姫君よろこびたもとに入三重つねの所に歸られける其後に心しづかにかの御返事をひけん有あゝはづかしやとせきめんしさてまゝならぬ人心きへよ露の身はきみがなさけの有にまかせんとふけゆくよいに姫君はこづまをたかくかい取てつまどのわきに立しのびほと〳〵とおとつれてふるへるこはねをさし上げて思ひかはせ

し玉づさのぬしてるひのまへにて候そやあけさせ給へとの給へばみことはつとおぼしめしとほしひさしあげみ給へばあたりもかゝやくそのすがた此よの人共おもはれずとび立ほどにおぼしめすがいや〳〵まてしばしわが心一大事を引うけ是はなすべきことにあらずと我と心を引とゞめふかくつゝしむしだいあり何とかこち給ふ共かいなき事にて候へばはや〳〵かへり給へやとあひそふなげにぞ仰けるてるひのまへは聞召こは心へぬ仰かな女はけがれし物なればあいみる事のかなはしとやつたへきくいさなきいざなみのみことのふうふなん女のかみときくそのなかれの御身として女をきらはせ給ふこと神のとがめもはんへらん是までまいる此うへは身はいたづくにきゆる共ふつゝとかへり候まじみことききこしめされあらむづかしやとおくにいらんとしたまへば姫君あまりにあこがれてなふしのひなわとはいかにあゝおろかなり〳〵しのびて思ひきれといふ事よとつまとをふかくおしたてゝふしむにんしやうとておともせずひめ君いまはせんかたなくなさけは人のためならすむくはん君がためぞかなしきとしほ〳〵として歸らるゝおくり心の内こそあはれなれかゝりける所にいくはんたゝしきらうわうこつぜんとあらはれ只今のてるひのまへは三ごくでんらいのごとくあつて日の本まもりのため下かいにしやうをうけられたりふさいのゑんあるにおひては天下たい平成べきとあらたにつげてそのまゝにけすがごとくにうせ給ふみこうれしく思召我もいわきにあらね共天のせうらんをはばかりしにこはありがたき御つげやと扱ひめ君の仰をしたいおくり物のひまよりみ給へばいたはしやなひめ君は物わびしき御ふぜいにて泪にくれておはします思はずしらずも立より給ひはなのたもとに取付て扱々ふかき心さしかんにたへいり候もし空にこともあらんと君が心をうたがいてなさけなかりしことばのすへゆるさせ給へと有ければ姫君は聞召れなふやん事なき御身にてみづからごときのいやしきみのあたりへよらせ給ひなば御身もけがれ候べしふしそなたへよらせ給へやと怨みありげにみへ給ふみこと聞召思ひよりなやてるひのまへふかくつゝしむことはりは申さずとてさつし給へ君がまことのある上は心におくに所なしてるひかさねて申さるゝはあゝう

とましやさりとてはうらみあるやきこしめせなさけなかりしことばのすへいへかはすれん我心それよの中に〳〵つらき物のかず〳〵はしのぶにさゆる月のかけたま〳〵もとめしまれ人とたがいにまくらかはしまの夢もむすばぬみしかよにあくるをつくるかねのねやおのがつばさをかさねつゝ人のわかれをかなしまてよやしらふるとつげわたる八こゑのとりを心なしといとすてにしこひのみちそもや女の心にて御へやまでしのびしにつれなくかへし給ひしはのちのよまでもわするまし歸られ給へとの給へばみことしごくにつめられておゝそれがしがあやまりとかふ申におよばず只とにかくに此うへはぢひとなさけにしくはなしそれたにのうぐひすもむめをやとりにねをぞなくかの天ぢくのほしあひめはひかるたいしのみにかはりやまふをうけたるためしもあるひめ君いかにと仰けりひかるたいしほしあひはふうふのちぎりありこのうへいもせの後はたれとても何か命のおしからんむめかなさけもうぐひすの心によりてやとをつぐつらき人に何とてかこなたに心あるべきやいわじやきかじむつかしやときめ引かつぎおともせずみことおもひにたへかね給ひ心づよやきゝ給へさるはどになさけなきならばうき身をいかでながらゑん此ましにこひしなば君もろ共にまよひをうけ六道四しやうか其内をいきかはりしにかはりたかいにごうくわにみをこがさんうさもつらさも後の世に思ひしらせ申さんとぎよけんに御手をかけ給へばひめ君あはてゝすがり付なふ扨々たんきにましますぞや御じがいとは何事ぞまたせ給へとありければこは心へぬ仰かなつらきうきよにながらへておもひあまれるかず〳〵をだれにかたらんうらめしやはなさせ給へとの給へは御うらみはことはりふかきこひぢにより竹の君がなさけはそむかじとてかをうちあかめの給へばみことうれしくおぼし召るゝにくかりし心やとたがいにうらみうらまれてかはらぬいもせとちぎらせ給ふ此人々の心のうちうれしきともなか〳〵さてかんせぬものこそなかりけれ

## 第五

扨そのゝちかくてあらくもにきばやはさんぬるいく

さにうちかつて後ふるさとたけじざいてんよりけんぞくともをめしあつめ其ほか下かいのあくじんどもはせ付いきをい天にはびこりけりしかる折ふしいわひこのみこといくさの用意し給ふよしをつたへきゝせん日のたゝかいにのこらずほろぼしぬると思ひしにいまだながらへありけるかやだれかあるそれ引さげて參れあまの藥力承はり仰にては候へ共かのみことは武勇すぐれしものと承はり候へばそこつにはとられまじそれがしはかり事をもつてそくしにひつたて參るべしそのぎにてあるならばともかくもなんちにまかするといひもはてぬに八ツめのからすてい上におり立て藥力がかうべをくだけてのけとはつしけるこはいかにとおどろきけんをぬいてはらへどもとひぬけかいくゞり難なくおつふせかうべみぢんにつつきくだかれ終にむなしく成にけりあらくも大きにおどろき扨もけふかるあくてうかなあれあますないおとせかしこまつて候とさし取引つめいたりけるされ共此鳥事共せずはかいにてたゝきおとし三重ひぎやうじざいをあらはして又はくちにてくわへつゝ一やも身にはたゝざりけりにぎばや大きにいかつてこくうをねんしまねきければこんじきのとび一ツもくぜんにとひ來りてからすをめがけかゝりし所へみこと方よりまたこんじきのわしきたつてくだんのとびをはつしとけて三重さま〴〵ひしゆつをつくしけるはしにひつかけ大ぢに其まゝふみなどしみぢんになして大おんあげ我はしよ天のかみちよくにてあくまをばつするわしにて有あらくもがめつばうとをきにあらずとくもねはるかにあかりけり時にからすも大おんあげ我は是なんぢにせつかいせられ第二のわうしいなゝみかせこんなりおのれいかにたけく共あんをんにてをくべきか其上第四のわうしいわはりのみことしよしんしよ天の口口によつておつ付是へ取かかるおのれみぢんにつかみさきわがそんねんをはらさんとこくうにとひさりうせにけるあらくも大きにとうてんし扨々おもひよらざるかふてきしんたいこゝにきはまりたりしかしながらはいほくのぐんぜいをあつめおしよするといふ共さまでの事はあるまじきぞ誠は本よりくつきやうのあくしよなりうしろはけはしき大山まへの大川ははつせのなみ山水ひやうひやうとしこずいにとしなん万きにてよする共あき

のきのはとおつちらさんとしたい〳〵に下ちをなし三重きびしくようゐをしたりけりさるほどにいわゝりのみことはしよじんしよ大の御かりにて思召事共をかいりやうまんぞくなされ候はゞあくじんめつぼうの御ひやうぢやう取々なりかゝりける所に玉のかふりにいくはんたゞしくそんがんけたかくあらはれいかにみことけふよりしては位をあらためじんむ天わうとなのり給へしかれはあくしんめつばうのじせつたうらいせり扨てきぢんにむかふには是をふりたてしよくんのけちせよ此さいにおふじしよしんらいりんあつてしゆごし給はん我は是たい一のわうじいつせのみこと也しよしんかんおふの時至てしんれいまさにあらはれたりなをゆくすへをまもらんとこくうにあがらせ給ひけるみことかんるいきもにめいじ此うへはたとへみかたこぜい成共はかりごとをめぐらしたちまちがふてきをしりぞけんさつする所かたきは大ぜいみかたはわづか八百よきおよぶべき所もなしまづみかた大ぜいあるやうにはかりごとをもつてぢんを取よに入てあのうへのやまにしのびあがつてしやうの内へ命をかぎりにおとしつゝいきたへたらばそれまでのかうもしそくさいならばねをひれたるやつばらなん萬ぎありてもうでをかぎりにきつてすて大將を引くみいつし一しやうのしやうぶをけつせんとおもふはいかにと仰けるらいしん承はりこはいさぎよき仰かなわれ〳〵日頃かるわざのちやうれん此也する丈の谷成ともやす〳〵ととんでをりんといさみすゝんで申けり天わう大ゐつきまし〳〵てさあらば此きにとうせよとあるひはかぶとこてすねあてをめい〳〵にいしやうをぬきほこ長刀にゆいつけてぢんしよに是をたてならべしだい〳〵にかざりけり是我がてうのはた馬じるしのはじまりなり扨御ともにはみちのおみのらいしんしう〳〵二人ないたん三重其日のくるゝを待給ふすてにやはんに成しかばみことはやまへわけのぼりいかにらいしんかほうすきやつに物ないわせそさしころせとたがひに心をあはせつゝまつさきかけてとんでをりあしふみなをしまつはりのやつばらをかたぱしよりさしころし一二のきどをうちやぶつてつめのしやうまでつめかけ給ふ爰にあらくもが郎等きふね一のや二人のものはなにとやらんさはがしやとたいまつふりたてほこひつ

さげ立いづるを物がけに立しのびやりすごしうしろより心もとをさしとをせばこはいかに〳〵すいさんなりとくび一々にうちおとしいかにらいしん扨きみちよきようちかないざこのいきをひにのりとらんいや〳〵おほせにては候へどもさきんずる時んばせいするにりありといへ共まづひきとらせ給ふべしひつぢやうしやうりをゑ給はんゑゝなまぬるしらいしんなんなふかつてかどとのおをしめ給へとすゝませ給ふを引立さてもんのくはんぬき引はなしいかににぎはやおのれましやうのぶんざいにてこのしんこくをうばゝんとはひとへに水の月をのぞみさるのごとしじんむ天わうみちおみのらいしんしう〳〵二人のはたらきみよとこうせうによばゝつてほんぢんさしてぞ引給ふあらくもきいてすはようちのいつてみたるるはとあはてふためきかけ出このありさまをみて大にどうてんし扨々ふしぎのしだいかなきふねいちのやをはじめくつきやうのつわもの二百きばかりうたれいかさまぼん人のなすわざとはみへずいかになんぢらそれがしつら〳〵天のうんきをかんがふるにとてもかつべきいくさにあらずかみのいりきにせめられ五たいもぢゆふにはたらかねばまづこのたびはこうさんしかさねてじせつを待べきとけんぞく共をめしつれ三重みことの陣所に参りつゝあんないをもつてらいしんにちかくみぎのあらましをつぶさにあひのべともかくもきてんをたのみ候といんぎんにあいのぶる扨はさやうに候かさらはまつかみへうかゞひ申さんと天わうの御まへにかしこまりあらくもにぎばやきみの御いせいにおそれかう人に参り候いかゞはからひ候はん天わう聞召それこそ望所なれまづ召出したいめんせん畏て立出仰の通り申上御たいめん有べきとの御事なりまづ其けんをあづかり申さんとやがてけんを請取らいしんに奉る天王御らんじてかう人に参るでうしんひやうなり其方が心ざしに依て命をたすけゑさせん然上はかさねて此國にたいししやうげをなさじとのせうこをのこし置べしにぎはや承はりこは有がたき仰かなかくかうさんいたすうへはいかでてきたい申さんとさうのうでにすみを付手のいんをぞ付にける是わがてうのてがたのはじめこれなりてんわう大ゑつまし〳〵て此うへはべちぎなしとふ〳〵すみかにかへるべしありがたしと御ま

へをまかり立けんぞく共を引つれじざいてんへぞかへりけるそれよりもてんわうはやまとの國にたいりをたて天下たい平におさめ給ふせんしうばんせいめでたきともなか〳〵申はかりはなかりけれ

延寶二年甲寅正月中旬　八文字屋八左衛門板

日本王代記終

# 玉津しまの御本地

## 第一

さても其後、それおもんみれば神はゑやうてんのせいにあらはれ、天地の間に垂跡し、わくわう、どうぢんのいをかゝやかし、人は神の德によつてそうめいゑいちのきしつをうけ繁榮子孫に傳ふとかや、こゝに和歌のぐはんじん紀州玉津島の大明神の由來をくはしくたづぬるに、人皇廿一代安康天皇の御宇にあまつこやねのみことより十六代の後胤、鎭西將軍、まつとう大連の長男、とよらの大臣中臣のくにたかとて公卿、一人おはします、西海道のせいむを蒙り、紀州牟婁の郡にすみ給ふ、御子一人おはします、とよらの中將くにしげとてしやうねん廿一さいになり給ふ、其身智惠深く忠孝に私なく、武にも文にもすぐれ、天下にほまれかくれなし、さてまた家の後見には田邊のせうじともなり、茨木別當としひらとて、古今無双のつはものなり、日々にゑゆつしひまもなく、君を守護し奉れば、國も豐に民さかへたうとくらさせ給ひけり、あるとき國たか公御臺所に近付給ひ、我熊野權現を信じ、毎年參詣おこたらず、御身國しげ諸共に參詣せんと仰ける、御臺所は聞し召、みづからもかね〳〵諸願の候なり、頃しも秋の中ばにて皆山々は色付て道すがらの興あらん、いざや打つれ參らんと、親子三人もろともに、供人あまためしぐして熊野へ參詣三重なされける、御まへになれば、鰐口てうと打ならし、なむきみやうてうらい熊野權現、年頃あゆみをはこぶこと子孫の榮花を祈るなり、もはや齡も傾きて、國しげ一子のみにてはたよりすくなくなるなり、あはれ神の御めぐみ姫を一人授けたまへとて其夜は、つやをぞなされける、夜半ばかりのことなるに、內陣よりも御聲あつて、いかに夫婦のもの、年ごとに怠らずあゆみをはこぶ心ざし、などか感應なかるべき、子孫ながく玉殿にましはるべしゑるしの寶珠を得させんと、北の方くわいちうへ、玉一ッなげ入れ給ふと見へぬる、か夢はのさめにけり、國たか夫婦の人々は、あらありがたの御夢想やと、神前を伏し拜み、さてそれよりもみてかんぬしを召されつゝ御よろこびのみかづらに神慮

をすゝしめ三重給ひけり、神靈おとめにのりうつり、御聲あらたに神託ある、われ既に、あんやうむいの都を出で、垂跡わかうの光をあらはし、この音無ざとの、三ッの山にちをえめて、法界無縁の衆生をばまさに一子の如くけとすなり、然るに汝、女子を一人もうけんと、神前に座をかさね、骨髄をなげ打ゆへ、夢中に玉子を授くるなり、必ず疑ふことなかれと、あらたに御示現まし〳〵て、神はあがらせ給ひけり、かゝりける所にいづくともなく白斑の鷹一もと飛び來り、國しげの御手にこそはとまりけり、國高このよし御覽じて、鷹は八幡のえてうなり、鳥類とは申せ共國しげが手にのること、神慮にかなふゆへなるべし、かゝるきたいの其鷹を、わたくしにてはかなふまじ、御邊はいそぎ都にのぼり、禁裏へ鷹をさしあげよ、はやとく〳〵と有ければ、畏り候と、急ぎ御前を罷り立、田邊の庄司御供にて、都をさしてぞのぼらるゝ、國たか夫婦はそれよりも屋形をさしてぞ三重下向あるはや程もなく、北の御方やがてくわいたいまし〳〵て、きのふけふすぎとゞまらぬ月日の數も重なりて、あたる十月と申にはめでたふ平産なされける、御子とりあげ見給ふに、さもうつくしきかいごなり、ふしぎといふもあまりあり、國たか大きに驚き給ひ、我ゆやごんげんに頼みをかけ、かなはぬことをいのりぬる、神の咎めのゆへやらん見るもなか〳〵忌はしや、いそぎ熊野山に捨置べしとしひらいかにと怒るゝ、茨木承り、やがて玉子を取持て、いそぎ御前を罷り立、くまの山へ捨たりしはことはりせめてぞ三重きこへけるふしぎなるかな、熊野あたりの山とは、草木五色に變じつゝ、紫雲たなびき音樂聞へ、天人やがてあま下り、かいごをあらため給ひしはありがたかりける次第なり、五七日と申にはかいご二ッにさつと破れ、かゝやくばかりの姫君なり、天女はかんろの露をふくめ、晝夜養育したまひける、もとより姫君天のなせる麗質にて、日々に成長したまふは、前代未聞のためしなり、爰に一ッの難儀あり、熊野の山に年久しき大さづちといふ山の神、此姫をほのかに見て、奪ひ取ゝ養育し、最愛せんと思ひいれ、てつちやうをふりかたげ、惡風を吹き立、山河を響し來りしは物すさまじくぞみへにけり、天女此よりみ給ひて、姫君をいだきつ

つ、麓をさして逃げ給ふ、山神これを見て、いつくまでかはのがさんと、跡をしたふて追かくる、天女は姫を取られじと、谷峯へだてやう〳〵逃げのび給へば、不思議や山の神のわざならん、大河俄に流れ出、漲るれば瀧の如く、渡るべきやうなかりけり、跡よりは大さづち勢ひかゝつて走せ來る、天女忽ちかれうびんしなり、羽がいに姫をおしかくし雲井はるかに三重飛び給ふ、山神大きに怒つて、鬼面飛行の驚となり、つゝいて空に舞ひ上り、くるり〳〵とおひめぐる恐ろしかり三重ける、怨念なりかくて國高の屋形の上までのき給ふ、折ふし國高ひろゐんに立出、四方をながめておはせしが、空をきつと見給ひ、是はきたいのけしきやと、いよ〳〵空を打ながめ、是は〳〵とばかりなり、かゝる所にゆやごんげん、雲の内より現はれ給ひ、利劔を抜き持ち山神をきり立切立蹴落し給へば、さんじん通を失ひて、大地にこゝび落ちけるが、もとの姿をあらはしてゆき方、しらず失せにけり、其時權現天女もろ共底前に飛び下り、いかに國高夫婦のもの、授けし玉は是なりと、姫君をわたし給ひ、天女は雲井に上り給へば、扨其後に權現は消すが、ごとくにうせ給ふ、こはかたじけなき次第やと、やがて取入れ見給へば、御衣すきとをりかゝやくばかりの美人なり、夫婦悦び給ひつゝ、そとをり姫と名付つゝ、御寵愛限りなし、夫婦の人の御悦び、めでたしともなか〳〵に申はかりはなかりけれ

## 第二

かくて其後、其頃のみかとをば、允恭天皇第二の太子安康天皇と申奉り、いそのかみのふるのこほりに都を立、百官しゐれうぎゝとして天下太平國土安全におさまりける、然れども皇子一人もましませねば、つね〳〵叡慮をなやまし給ふ、こゝにみかどのこのかみかるの太子の御子に、いちべのみやびりんわうと申は生年十七歳、御眼ざし人にかはりせいの高さ七尺五寸、心あくまで不敵にしてかりすなどりをこととゝし、武藝わやわざを好み力の程はりしがたしつね〳〵思召けるは、我は允恭天皇の嫡流の御孫なれば、位をつぐべきものをと色に出てぞみへ給ふ、扨

又はつせの宮わかたけの皇子と申奉るは、允恭天皇第五の宮、安康天皇の御弟御子にて御年は十六歳になり給ふ、御心おだやかに聖徳身にそなはり、仁義忠侫の私なく、公卿大臣にいたるまで、この宮こそ太子に立せ給はんと重くもてなし奉る、ゑかれどもいづれを申出す人もなし、かゝる所にとよらの中將國重參内有て、白斑の鷹を奉り、ありし次第を申あぐる、みかど叡感淺からず、げに天はかゞみの如し、朕が心をあはれみ給ひ、諸神のゑめし是なり、幸ひ位を譲るべきをりなれば其鷹を放ち、ひりんわかたけ二人が中にて、此たかをすへ上たらんをば太子に定めんとの宣旨にてやがて鷹をぞ放されける、二人の宮は拾ひさしの方へずんと立、我すへあげんと爭はせ給へば、鷹は雲井に飛びあがり、ひらりひらりと舞ひ下り、若竹の宮の御手にすはりしは不思議、なりける次第なり、みかど叡覽まし〳〵て、此上は神慮にまかせ、若竹を東宮に立せよとの宣旨なり、ひりん王大きに氣色變り、禁裏をもはゞからず其座を蹴たてゝ出らるゝ、山田のありぬし蘇我のあら島ひりん王と一みなれば、同じくつゞいて立かゝるはおこがまし(此間十五六字缺く)大伴の竹丸大臣とよらの中將をめされ、ひりん王が振舞逆心と覺へたり用意せよとの宣旨なり、竹丸大臣承り、ひりん王謀叛を企て給ふとも何程のことの候べし、誠に私なき王位をそむかせ給ふ天罰、一たん利を得たまふとも遂には亡び給ふべし、國重すゝみ出竹丸の仰尤なり、ゑかしながらいくさの勝負はかりがたし、先づ若竹のみことは紀州へ忍ばせ奉り、心やすく一戰を勵むべし此儀尤然るべしと、國重の良等、田邊の庄司御供にてひそかに都を落ち給ふ、さてそれよりも竹丸國重兩大將にて、官軍合せて三千餘騎禁裏を守護しての三重まちいたり是は扨置、ひりん王蘇我のあら島山田の有ぬしを近付、我天孫のちやく〳〵なれ共、若竹を太子に立ること無念といふも餘りあり、所詮いくさを催ふしみかどを押込め若竹を亡しわれ天子とあふがれん、用意せよと仰せければ、兩人畏り、此うへはいかで時節を待べしと、やがて勢をぞ揃へける、かねて從ふ惡黨共、時を得たりと與力して既に其勢五萬餘騎、皆々心を合せつゝ朱雀門へと三重押寄する屋形になれば、東西よりも取圍み閧をどつとぞ

上にけり、こなたにもかねて用意の官軍、同じく関を合せける、関の聲も靜まれば、いしゆを名乗ることもなく、敵味方入亂れいくさは花をぞ三重散しける、是は扨置き、こゝに若竹の御方より、とよらの國重一陣に駒かけ出し、そも〳〵是は紀伊の國の住人とよらの中將國重なり、我と思ふ人あらばはなち合て勝負をせよ、いかに〳〵と呼つたり、あら島是を見てきやつは聞へし馬上の達者、大かたにてはかなふまじと、味方の備へを立なをし、きつ先を並べ待ちかけたり、國重もとより剛の者、大勢のつわものを、駈破り〳〵四方へはつと追散し、それよりも引返し、手綱かいくりしと〳〵〳〵〳〵とのりまはり〳〵、秘術を盡して乘たりけり、其時敵の方よりも山田の有主が舍弟、山田の有廣かけ合、駒を並べて切り結びうけつひらいつ半時が間戰ひしが、國重もとより早業なれば、山田が馬にむかふさまに乘移り敵の上帶かい摑み、中にずんとさし上げ、二ふり三ふりまはし、前なる谷へ投げければ底のみくづとなりにけり、其後又我馬に乘移り、大勢のやつばらを東西へばつと駈散しゑづ〳〵と引きけるは、今日の戰の花なりと敵も味方も感じける、爰に寄手の方よりも、たて山將監みつさだ、大さと源五郎たゞなを二人共に長刀を傾け、ゆらり〳〵と出けるが、器量骨柄人にこへ、あつぱれ武者やと見へにける、國重見給ひ何者なるぞと問ひ給ふ、將監きつと見て、名乘るまでもなし勝負の後はしれ申さふ、參りぞふといふまゝに、長刀ひらめかしてかゝる、國重もとより剛の武者、長刀を切落し、おし並べてむんずと組む、大ちからのやうに見ゆれ共、やす〳〵と取て押へ、首ふつとねぢきり、あつぱれからだたをしや（ママ）となげすて給へば、大さと源五つゞいて組む、是をも引よせ輕々とさし上、ゑいやつとなげ給へば、みぢんとなつてうせにけり、蘇我のあら島是を見て走りかゝつてむずと組む、兩方めいよの大ちから上を下へ、下を上へとかへしける、山田のありしげかけ合、國重の上にのりかゝる、國重これをも取て引よせ、まへゝおしまはさんとし給ふ所に、びりん王又駈來り、國重を取て引伏せ、首を取らんとし給へば、びりん王のかいなを取、わが首打たるものに喰付んとはつたと睨み給へば、有主やがて立上り、國重の

首打落し立のきける爰に又、いふきの判官高峰、荒馬乗つての大ぢから、駒かけ出し打てかゝる、びりん王見給ひ何物なれば我に向つて太刀を取ると、はつたと睨み給へば、おゝその人こそあらめ、心なき馬までも、ふるいわなゝきすゝみえず、駒の手綱を引かへす、竹丸跡より是を見て、忽ちおくしたり高峰、味方のおくれをなすものかな、と馬より取て引おろし、いで物みせてくれんとて、かうべみぢんに蹈みくだき、扨びりん王にきつてかゝる、びりん王見給ひ、いさきよし竹丸と、をしならべ引組み、取て押へ首ふつと切てすて殘るやつばらむら〳〵はつと追散し、其儘内裏に亂れ入、みかどをおしこめ奉り、天子の御座にうつらるゝ、かのびりん王の舞振貴賤上下をしなべて憎まぬものこそなかりけれ

## 第三

かくて其後、ひりん王合戰に打勝ちみかどをいけ取奉り、おのゝ奥黒木の御所におしこめ、みづから天子と仰がれ、蘇我の荒島山田の有ぬしを左右の大臣と定め惡逆無道限りなし、さて道主を召しよせ、こんど打取首共を獄門にさらすべし、畏り候と、撿非使に申付はや獄門に三重そかけさせける、有ぬしやがて立出、一々實けんする所に、竹丸國重二人の首、眼をきつと見開き有主をはつたと睨む、有ぬしもさる物にて少もさはがす、汝らかくかばねをさらすこと、邪をさしはさみ、天の罰する所なりと、からん〳〵とそわらひける、其時二ッの首口より火焔を吹き出し、有ぬし飛かゝる、心得たりと太刀抜き持切り拂へば竹丸の首、切り立られて見へければ、國重が首つとより有主が首の骨に喰ひ付、口惜しやと切り落さんとしけれ共、遂に首ふつゝと喰切り虚空を三重さしてぞ上りける、扨其後に、竹丸が首も今は一念はれたりと、虚空に呼はり失せんけるはおそろしかりける三重念力なり、是は扨置いたはしや若竹は田邊の庄司只一人めしつれさせ給ひつゝ紀の路におもむき給ひける心の内こそあはれなり、治る御代に我ひとり我慢ぞうまんしんの貪慾愚痴の雲あつく、嗔恚の雲のはれやらず心の鬼に身を狹めかゝる姿となりけるよと涙にくれさせ給ひける、春雨しげく降

りければ草を結んで味方にかけうきみのかさを召れける、是や誠に我朝の簑笠なりと承る、大和の國住なれ給ひし宮居を出、心細さ限りなしいつ立皈る身ならねば名殘り惜さに三笠山ゆくすゑとても頼まれず、この身は何となら阪や、うきをことたふ人もなく、今ぞはつせの山越に、降來る雨も晴れやかに、咲きぬる花を打ちながめ、はつせ山雲井に花の咲きぬれば、あまの川なみたつかとそみると、くちすさみつゝ過ぎ給へば、是ぞなたかきみよしのゝ雪かと見れば雪ではあらで、やあ是の花の吹雪はおもしろや、かゝるうきめに大峯も雲のあなたと、思ひやりゆんでに見へし山々はたへまにつゞく金剛山、見わたせば、立田の川の春ならば、錦織りしく紅葉葉を春にも秋を思ひ出て、あはれ世にある身にしあらば、數の臣家を召し集めみねとも名所の歌枕さぞおかしくや有るらんと、つらき內にもなくさみて、やう〳〵今は紀伊の國、牟婁の郡に着き給ふ、田邊の庄司いそぎ屋形に參り、かやう〳〵の次第にてみかどの御供仕り、罷下りけると申上る、國高急ぎ立出、奥に請じ奉り、かゝる亂れの折ならで、何とて渡らせ給ふべき、それがしかくて候へば、ついにはかたきを退治仕り、御位につけ奉り候べし、御心やすく思し召れ候へと、世に頼もしく申上、ゑんぞうに御所を立いつきもてなし三重奉る、頃はのどけき春の空、彌生中ばのことなるに、みことあまりの淋しさに、花ぞの山に立出て、木々の梢の花盛り、雪かと紛ふ春風に、吹き散る景色を打ながめ心をくわんしておはします、かゝりける所に衣通姫、女房をともなひて、花見のていに出給ひ、あらおもしろの花盛り散りもはじめずさきも又、殘らぬ花の枝々に八重九重は一重にもおとらぬ物ときくざくら、花のかほばせ楊貴妃や、是ならば稚兒櫻、げにあいらしく咲く花に戯れ遊ぶ春のよの、只一時と申せ共、其あたい千金と、たれか限りしうつゝなやと、詠めにあかぬ折ふしに、花を散らすは鶯のはかせか憎や心なや、追拂はんと思へ共、いやまてしばし鶯も、花に戯れ囀るを、情けなしとや思ふらんと、かしこを見れば若竹の皇子花に嘯き立給ふ、姫君一目御覽じて、扨も美しき少人かな、いかにめのとたれ人なるぞと問ひ給ふ、めのと承り、あれこそ都より來らせ給ふ若竹の尊に

て侍らせ給ふと答へける、姫君聞し召、あら羞しや都人のはしたなくもや覺すらん、木蔭に忍ばせ給へば、宮このよしを御覽して、さもあれかゝる田舎にもかやうの美女の有けるよな、是ぞ國高が衣通姫にて有らんと、はや面影にたつなみの、夜とはいはし晝となく、忘れはすまじお車のめぐりあふせのいわまくら、かはしてこそとおほし召、そなたの方を打ながめ玄はし、たゝずみ給ひけり、姫も心はうはのそら、そら定めなきおもはゝにやめのとを近付、のふ都の君と聞くなればをくゆかしくも思ふなり、はづかしながらこしをれの歌をかけて、御心を引みんと、短冊を取出し、一首はかふぞかゝれける、玄づや玄づ玄づがふせやの、いたまにも、くもの上なる、月をこそ見れと遊ばして、めのとにわたし給ひけり、めのと是を取持て、みことにこそは奉る、宮は此歌を御覽じて玄はし感歎なされしか、うらおしかへしかき付て、めのとにわたし給ひけり、めのと急ぎ立かへり、姫君に奉る、姫取上て讀給ふ、あまつかせ雲井はるかにふきをちてわかのうらみの、そでぞわびしき、姫君あつと感じつゝ、あらうつくしの御筆や、又御かたのおさ〳〵しさ、わくかたならぬ御心、いとをしさよとの給ひて、まきかへし〳〵うちもをかれぬ風情なり、みこと此よし御覽じてするるとたち寄りて、はづかしながらそれがしは、八重のしほぢをはる〳〵と、都かたよりおちうとなり、たゞ今花ともろともにほのみそめしより是を見に、そふおもかけも忘れかね、忍ぶ文字ずり君ゆへに、亂れぞそむる紫の、色とはいづれ爭はん、いまぞしる、うきむさしのゝゆかりとは、思ひそめにしむらさきの色とあそはしければ、姫君聞し召、あらなにともなや都人、ことさらいともかしこき御身にしあれば、數ならぬ身のわれ〳〵が御ことばをかはし參らすること御はゞかりなりやおもはゆしと顔うちあかめておはします、みことも今はたへかねて、我をちうどの身として、世をも人をもはゞからす、よしなの今の戯れと思しめされさふらふかや、人のなさけはくみてしる袖になみこす田子の浦、思ひ入るのたまかしは、舟さすさほのしたにこがれ參らせて、かくまで物を思ふみに、さてもつれなき御ふりやと、かこち顔にての給へば姫君聞し召、おしかへし〳〵

仰せは重く候へ共、いかに御言の葉の有かたきとて、中々になき名取りてはいともくるしき名取川の、せゝの埋れ木あらはれて、みづからよりも君の御うへも、いかゞと悲しく候へばたゞいくたびも〳〵、我身つれなき御事と、怨みかこたせ給ふべし、さはさりながら、物のあはれのかすゞ〳〵に、こなたの袖はぬれ參らせ、玄のふにたへぬいろもはや、あらはれ參いらせはづかしや、なふあれにみへたるにしのたい、みづからが月見の亭にて候なり、人めもる關屋と思し召、心はへだてぬ中川の、あふせのかすは、すくなくとも、なかれたへせぬ御心ならはのふ、頼み參らせ候はん、かならず〳〵暮方には、あれへ渡らせ給ふべし、玄つか身の〳〵、あはれをかたり參らせんのふ都の君とぞ仰せける、みことなゝめに思し召、かくまでなさけ深りしをうらみしことのはかなさよ、必ずたがへ給ふなと、いとねんころにの給ひて、おの〳〵かへらせ三重給ひける、こゝに一ッのさはりあり、熊野の山の神大さづちは、衣通姫に心をかけ、かなたこなたとうかゞいひしが、通力自在の身なれば此よしを聞よりも、何とぞせうげをなさんと、小蔭にしのびいたりけり、かくて姫君たそかれ時にめのとをつれ、月みのていに出給ひ、月やおそしきみやおそしとまち給ふ、不思議や俄にむなさはぎし、御心たへ入やうに見へ給へば、めのとかいしやく仕り奥にいらせ給ひける、かくてみことはくるゝをおそしと待ちわびて、ひそかに忍び給ひけり、山神此よしみるよりも、やがてめのとと變じつゝ宮に向ひて申やう、姫君只今まで是にて君おそしと待ち給ひしが、母上の御方に俄にさはり候ひて奥へいらせ給ふなり、今宵はかへらせ給ひ、あすのよ御出候へとまことしやかに申ける、みこと聞し召、おぼつかなく思し召、うらみながらに歸らせ給ふ、さん神しすましたりと悦び、その儘また宮の姿となり、月見のていに來りつゝ、かなたこなたと尋ぬれば、衣通姫あひの玄やうじをするりとあけ、いとはづかしげに立給ふ、さん神悦び立よりたもとをひかへ、つれなき人の風情やな、いざこなたへといざなへば、姫君聞し召、君とかはせしことばの末、たかへしと思ひつゝ是まで參り候へ共、身につゝしみの候へば是より歸らせ給ふべし、さん神聞て思ひよらずや姫君、

きみゆへ深きおもひをなし、いかて空しく歸らんこと、姫君に取付は、のふおそろしや其方は變化の物と覺へたり、女なり共汝が力におとらんやと、やがて取て伏せ給ふ、其時さん神申やう、我はこれ紛れなき若竹なり、そこつばして給ふなと、おきん〳〵としかゝれ共、姫君つよくおさへ給ふ、みことおぼつかなく思し召、月見のていに入給ひ、此よし御覽じて興さめ顔にておはします、かゝる所に姫君も出給ひ、是はいかなる事やらんと、たがいにめとめを見合せておきれ、果たるばかりなり、山神今はこらへかね、有し姿をあらはせば、姫君と見へしは熊野の權現とあらはれ、さん神をかいつかんで、かしこへどうとなげ給へば、姿は見へずなりにけり、權現はみこと衣通姫に打向ひ、いよ〳〵行末守るべしと、消すが如くに失せ給ふ、みこと姫君もろ共に、虛空を三度ふし拜み、忝き次第やと、打つれ奥へにぞ入給ふ、ゆくすへかけて變らじと、御ちぎり淺からず、此人々の心の内、うれしき共なか〳〵申ばかりはなかりけれ、

## 第四

かくて其後、若竹の宮衣通姫になれそめて、水もらさじとの御ちぎり淺からずとこそ聞へける、包むとすれども國高夫婦は聞召、我々つねに願ひしは姫を内裏へみやづかへ、又ゑんわう方へ奉りたく思ひしに、若竹の御心にかなひぬるこそ嬉しけれ、いざや月見のていに參りゑゆをすゝめ奉らん、尤此ぎ然るべしと、國高夫婦打つれて、月見のていに參らるゝ、御前になりしかば、種々のちんくわをとゝのへしゆをさま〳〵に奉る、上から下に至るまで、まふつうたふつさゝめいて、酒宴中ばのことなるに、黒雲一村まひさがり、何とはしらずていせんへ物こそどうと落ちにけり、田邊の店司走りかゝつて取て押へ、何やらんとみれば、人の首が人の首をくわへきり、ともなりひつさげ御まへに持來る、是は不思議の次第とて、立より是をみ給ふに、國重の首有ぬしがかうべをくわへ、いまだ御目もあさやかに、ゑみを含めるかほはせなり、人々驚き、是は〳〵とばかりにてみな〳〵涙をながさるゝ、中にあはれをとらめし

は、母上や姫君なり、國重殿と聞からに、夢ともさらにわきまへすもだへこがれてなげかるゝ、むさんやな國重の、熊野山にてわかれの時、君の御まへめてたふし、やがて下らんさらばといひしいとまこひいまだみゝをもはなれぬと消入やうになげかるゝ、よその見るめもあはれなり、落る涙のひまよりも、なふ國高殿、今よりは誰をたよりに思ふべき、思ひ出れば國重と、姫と二人の子を持て、世にたのもしく嬉しくて、ひと木の松のかた枝を、つれなき風に吹き折られ、峰にさびしき老の身の、有にあられぬうき世やと涙は更にとゞまらず、ゑよしあはれと聞へける、いたはしや國高も、涙ながらに立よりて、いかに國重死しても所存をしらせんと、是まで來る心さし、父も嬉しく思ふなり、やがて朝敵退治して、君を位に立參らせ、汝がうらみをはらすべしと、さもいさぎよくの給へ共しきりに涙ぞすゝみける、其時國重の首につこと笑ふ、若竹御覽じて、扨もふびんの有樣や、我ゆへ命をうしなひし、心さしのせつなさを、いつのよにかはわするべきと、の給ふ聲の下よりも、此首其儘目をふさぎ、きんぶせんの方に飛び行、よしのゝ藏王權現とあらはれ給ふぞ有がたき、扨それよりも國高、みことに申けるは、中國九州の勢をもつて、朝敵退治仕り候へし、まづ〳〵當國和歌の浦はもろこしの八景をうつしたる名所なり、御歸國の後またとみゆきも定めなし、此折からを幸ひに、御舟にめされ、御遊覽なされ、ひなのうきを御はらし候へと、衣通姫をはじめ、あまたの供人召ぐして、和歌の浦へと出給ふ、あら面白の浦の景、東は山たかく、せいかいはるかにそばだちて、せいなん雲のきはもなし、てうていきよくほの雨の音、げにゑやう〳〵のよるの雨とやいつゝべし、風は波浪にひるがへり、あしべをさしてみつしほに、ともよびあさるへいさの雁、紀の路のとを山、かすかにて遠寺の鐘やひゞくらん、一やうせんぢうばんりの身、せいてんくもをさしはさみ、ゑんゑん遠くつらなりて、かすみがくれの淡路島、みやいはるかにみへわたり、さも有かたく伏し拜み、おちの海原あをふして、ゑかんの月をうがちつゝ、つりせでかへるは、あまをぶね、ゑんほのきはんもかくやらん、そうしふけいのうらづたひ、ゑじまが磯の、なみの

うね〳〵ゑろたへに、げにかうてんのくれつかた、雪かと見へてゑならずや、わかふき上の月かけは、とうていの秋のそらかと、疑かはれ、漁村の夕べにてうすらん、すいそんさんくわくゑゆぎの風、たかかみねにふきおちて、かへるさいそぐいち人は、さんしのせいらん是なるべし、きよふのばんせんなみをわけ、夕陽のかげのどかなり、みぎはによする白浪の、とうど打てはさつと引、さつ〳〵と引ぬる浪の音高く、龍宮世界のがくのつゞみひやうしもかくはあらじとて、いよ〳〵興をぞなし給ふ、其時姫君かくばかり㊃よの中は、わかのうらわの朝ぼらけ、などうらめしく、うちてひくらんと、くちずさみ給ひければ、とうど打たるその浪のひくしほさらになかりける、此時よりも和歌の浦のかたをなみはうつとかや、かくて日もせいさんにかたむけば、田邊の庄司御迎ひの爲に舟に取乗り參りつゝ、君のみふねにのりうつり、上下さゞめき、こぎもどす、かゝる折ふし、れいの大さづち、雲の上にあらはれいかに衣通姫、まんごうはふる共、我ゑうしんはよもはれじ、いでいで思ひしらせんと、惡風を吹きかけ、其儘海に飛入しが、さもすさまじき毒蛇となり、大雨をふらしつゝ、舟を下かいに沈めんと、しほゝふひてぞ狂ひける、水手かんどり立さはぎ、おもかぢ取かぢとり合揉(ママ)にもふでぞをしたりける、中にも田邊の庄司、水練の達者にて太刀引抜き海中に飛込み、おつかけおつゝめ討んとす、すさまじかりける次第なり、毒蛇は更に事ともせず、浪をまくつて走せ來り、むざんやなともなりを、たゞ一口に呑みてんけり、みこと御劔のひつさげて、ふなばりに立あがり、汝しらずや天てる御かみより四十八世、允恭天皇第五の皇子、若竹のみことなり、日月いまだ地におちず、其天罰をしらせんと、大おん上にてのたへば、毒蛇はいよ〳〵怒りをなし浪をけたてゝかゝりける、みこと御劔のふり上げ、切らん〳〵とし給へば、さすが天子に恐れをなし、浪をくゞつて近付ず、姫君いそぎおしとゞめ、打ものにてはかなふまじと一首の歌にかくばかり㊃日のもとはあまつひつぎのみことのり、我が大きみの國としらずやと、詠み給へば、きじんにわうどうなしとかや、此歌の德により、毒蛇は浪に打たてられ、しほにひかれて失せにけり、人々よ

ろこびそれよりも、御ふねをはやめこぎ戻す、とにもかくにも衣通姫の御えいか、まことにわかの御神に、祝はれ給ふもことわりやと、貴賤上下おしなべて、感ぜぬものこそなかりけれ

## 第五

かくてそのゝち、若竹の親王は、國高を御まへに召され、いかにもしてびりん王を亡しみかどのげきりんのやすめ奉り、身の本望を達せんと思ふはいかにと仰ける、國高承り、それがしもかねて左やうに存ぜしより、中國九國へくわい文をまはし候所に、皆皆御咏方仕り申べきよし申來り候と、いひも果ぬに播磨の國の住人、飾磨の大六むらおかのゑん六千餘騎にてはせ來り、御まへに畏り、君御發向の回文いたたくとひとしく走せさんじ候、九州中國の勢は播磨攝津和泉まで參りあふ約束ござ候、いそぎ御馬を出させられ候へ、あれにて御勢揃へ然るべしと申上る、みことげにもと思し召、國高むらおか先陣にて、三萬よきを引卒し、紀伊の國を打ち立て、中國さしてぞ下らるゝ、このことなをもかくれなく、びりん王はそが蘇我のあらしまを近付、扨も若竹の宮、國高しかまの大六を先陣として、中國九こくの勢をもよふし、急に都へ責めのぼるよし大かたにてはかなふまし、東國北國の勢を揃へ、ざんじに退治いたすべし、あらしま仰を承り、いそぎ御まへを罷立、さふらひ共に申付、一々ふれをそなしにけるさるほどに、東國北國の諸軍勢、家々の旗をさし、われも〳〵と走せまゐる、然るにびりん王、みづから天子となり給へども、からにしきのひたゝれにてこがねざねの鎧を着し、村雲の御劔にこがねざやのうちかたな、きんりうのかぶとの緒をしめ、柄も五尺刀も五尺の大手鉾をひつさげ、床几に腰をかけ給へば、蘇我の大臣あらしまは、思ひ〳〵の腹巻に、ちうだいの太刀をはき、兜をぬぎ御前に畏り、集る所の軍兵をはやちやくたうにぞゑるしける、まづ一ばんにたけい將軍六千よき、あひ從ふ東國勢、常陸の大將みちむらせんし八萬よき、安房上總二ヶ國の大將、はくまのぐんし五百よき、武藏の藤太三萬よき、相模のてるもと二萬餘騎、甲斐信濃にはうんのもち月なんぶ下山

諏訪八代すべて五萬七千餘騎、上野には群馬の大夫かんらの三郎三千よき下野にはまかべの太郎鹽のやゑやうげん六千餘騎、駿河の國にはふぢ太郎五千よきにて走せ參る、遠江にかつまたたう、三河にあすけの權のかみ、兩勢つがう一萬よき、美濃尾張近江せいからめての大將には、いそら將軍きよとら、若狹越前佐渡越後、加賀能登越中七ヶ國のつは物二十一萬五千餘騎、都合其勢五十三萬六十千よきとしるされしは、げにおびたゞしく見へにけり、かゝる所に其たけ一丈ばかりのくせ物、頭に角をいたゝき、ひとへに夜叉の如くなるが、鉾ひつさげ走せ來り、御まへに畏り、我は是天竺ゑゝさんより日本にとひ來り、熊野の山にすむこと三百年、飛行自在のさん神、大さづちとは我ことなり、このたび若竹の宮御退治のよし承り、御みかた申さんため是まで參り候、たとへは百千萬の大軍なりとも、落花みぢんに打ひしぎ、みかどの勝利になし奉らんと、手に取るやうにぞ申ける、びりん王聞し召、我日の本の主として、ぎやくとを退治せしむるに、汝が力をかるまでもなしさりながら、心ざしといひ、飛行自在のものならば、其術をたゞ今みせよ、畏り候と申もあへず美女とへんげ、或は敵陣へ忍び入、かたきに近付しとやかに、よるべもしらぬ浪枕、さよのころもをしほ〳〵と、打したたしみてたばかりなば、色には迷ふならひにて、いかなる猛將がうてきも、心よはくて引く袖に、こよなふみへん其をりは、取てはひきふせ〳〵おりかさなるものならばかいつかみ〳〵つぶてに打てひしぎつけん、是にもひるまぬものならば、忽ち惡鬼と變しつゝ虛空にずんと飛びあがり、惡風を吹きかけて、火の雨つるぎの雨をふらしつゝ、いち〳〵敵を打殺し、きみの御世になし申さんと、大身の鉾をふりまはし、勢ひかゝつて申せしは、身のけもよだつばかりなり、びりん王采ふりあげ、奇妙なり〳〵汝に先手をまかすべし、其ぶんこゝろへ候へと、かどいでの祝ひなされつゝ、既に都を打立てさいこくさしてそ下さるゝ、かくて其後若竹の親王は、津の國の尼ヶ崎に陣取してましますが、びりん王大勢にて下らせ給ふと聞し召され、せいを集めたまへ共、筑紫勢はいまだ參らず、中國の勢いまだ五萬よきには過ぎざりけり、國高むらおかを御まへにめされ此

せいにてはかなふまし、筑紫せいをまつべしと、にしきの御はたをさしあげさせ給ふ所へ老人二人來りしが、一人は弓矢をたいし、いま一人は金剛杖をよこたへ、陣中を見わたして、あつぱれ陣の取りやうかな、北に錦の御はたはせんごの大ぢやう東西の兩陣、三軍のぢやうをかまへられしは、天子の南面の德を表し、一陣二陣の武者ぞなへ、さて又後陣のせいくばり、一つとしてあやまりなし、ころはやよひの上旬にて、やうに向ふいくさだち、天の時にかなふたり、後は高山めては海、右手はぬま大河をひかへしは地の理なり、惡人を亡し給ふゆへ、萬民勇みよろこびて、集りたる勢なれば、人の心のくわするゆへ、天地の三歲にかなふうへは、勝利を得んことは疑ひなし、われ〳〵も後づめしてまいらせんと、鷹となり鴉と變じ、虛空に揚らせ給ひけり、みこと軍勢もろともに、扨は熊野の權現、正八幡此陣守護し給ふと皆一同に伏し拜み、悅ぶことは限りなし、かくて其後びりん王、大勢を引卒し、大地にむらがる勢ひにて、哄をどつとぞ揚げにける、こゝに若竹の方よりも、飾摩の大六すゝみ出、是は播州の忠人しかまの大六村おかのぢんなり、身ぢやうなれども此度味方の先陣を給はり、いで物みせんさらばとて、とうまちくいの如くなる、多勢が中へ破つて入、はらり〳〵と薙いだりける、もとより村おかてきゝの勇士、くつきやうのつはものを、其かずあまた切り伏せ、殘りし奴原東西へおつちらし、さも大やうに引いたりしをほめぬ、ものこそなかりける、びりん王采ふりあげ、きやつめ餘すなかゝれ〳〵と下知し給ふ、いそらの將軍二十萬、一どにどつとかゝりける、正八幡うしろの山に現はれ給ひ、白羽のそやをなげ給へば、たちまち此矢むらくもとなり、うんちうより數千の矢さきまくりたて〳〵とをなりしてこそ出にけれ、さしもに勇む大軍も、右往左往に敗軍す、其時大さづち虛空に向つて鉾を振れば、不思儀やあまそら震動し、火の雨しきりに降りけるは、すさましかりける次第なり、其時に權現は、天に向ひて合掌し、持ちたる榊を投げ給へば、則ち數萬の劒となり、亂れあひてぞ戰ひける、勢ひかゝる都せいかなひがたくぞ見へにける、びりん王大きに怒つてする〳〵と駈出、いかに若竹、此亂は御ぶんと我と

天下を爭ふゆへぞかし、あまた人を殺さんより、一き打の勝負せんいかに〳〵と申さるゝ、みこと聞し召れ、あゝおろかのいひことや、昔より天皇として惡逆無道のゑせものと組打したる其例なしと、さも大やうにの給へば、びりん王こらへかね、大手を廣げ飛んでかゝる、村おか茨木おしへだてゆんでめてよりむづと組む、びりん王こととももせず、取て引よせゑいやつて投げ給へば、とよらの國たかかけあはせびりん王の亂れ髪を引つかみ、ゑいやつと引き倒し、首をかゝんとせしを、びりん王強力にて、下よりもはねかへし、すでにあやうくみへし所に、ふた神あらはれ給ひ、びりん王の左右のかいなをひつはり給へば、有がたや神力にからめられ、五體少しもはたらかず、時に若竹走りより、やがて首を打ち給ふ、さん神今はかなはじと、向ふの山へにげのぼるを、八幡宮は山上にたちたまふ、又虚空にのぼらんとすれば熊野の權現空よりおつゝめ給へば、今はせん方つきゆみの、飛行自在もかなはずて、大地にどうと落ちけるを、やがておつふせからめ取、みことに參らせ給ひつゝ神は跡なくなり給ふ、ありかたし〳〵と、御あとを伏し拜み、それよりも都に、上り御位につかせ給ひ、雄略天皇是なり、衣通姫御后にそなへ給ふ、みことはにふの大明神、衣通姫は玉津島の大明神とあらはれ給ひ、和歌の道を守らせ給ふ、扨さづちがかうべをはね、ちまたにさらし給ひける、そのゝち天下治り民も豐にさかへける、千秋萬歲めでたしともなか〳〵、申ばかりはなかりけれ

延寶五丁巳年正月吉日　　山本九兵衞板

玉津しまの御本地終

# 四天王大田合戦

すへたけろうやぶり

## 第一

それゆうあつてたけしといへども、ふんとうをしらざれば、しやしよくをまもることかたく、ゑんのちやうこうかんのわうもうらが、ほろびしむかしにことならず、されば其頃源のせつ〳〵のかみらいくわう、天下のぶしやうにましますとき、たいしよくわんのこうゐんうらべのくらんどすへたけとて、めいたいのゆうし有ゑかれば、せんねん大ゐ山のきじんたいじのちうこうに、ゑもふさをたまはりひかし八ケ國のむしや所にて、あふたのせうにぞすみ給ふ、ことにくわほうのあまりにや御子二人おはします一はためよのひめとて、十三成たまふが、かたちといひ心さますへいかならんよそをひと、すゝはゝめやすくおぼしめす、次は小次郎とのとて、九ツに成たまふがよみかきわざのさとき事、かんしやうぜうのさいたんかと、みな人かんじ奉る、すへたけのせいとうの、すなを成にゑたがいて國たみいよ〳〵なびきつつ、あけくれはたゞたのしみのめでたくおくらせ給ひける、かゝる折ふし爰に又げきゑんちかたのはつようにむれのべつたうなをすみとてあくぎやぶとうの者一人かづさの國にぞすまひける、かれいか成むまれにや、ようぎこつがらよにかわり、力はやわざひやうほうはせうおよそぼんふのわざならず、たゞ天魔ゑよぎやうにしてらうどうひくわんの物までもるいをもつてあつむれば、あぶれ者のだいなり、すきからとうの源内たゞはるいわやかくれのほら次郎かげもとなどゝいふ一人とうせんのくせ者家のしんとぞゑたがいける、なをすみあるひの事成に、かれらをまねき近付、いかになんぢら物を聞、それ弓取の名をおもんじ命をかろく思ふ事一たび望を達せんため、我ばつかのみなれ共天下のあくぎを思ひ立らいくわうをほろぼし、名を後の世にとゞめんと思ふはたゞしふてきか、やあ汝らいかにとたづねける、すきがらどうの源内兵衛、御でうにては候へ共いにしへ今に至るまで、朝敵の名を得し物運を開くためしなし、時節と御待候べし、まづ暫くとぞとゞめけ

る、なをすはたゞにらみつけ、おくれたるかたへはる昔より此かた大りへまをなすやから口ぞのをほしといへ共、つら〳〵かれらを案するに大石の小丸は武勇つよきばかりにて計畧をしらざるゆへひせんのうたれぬそがのいるかの大臣はまわしけれんの身といへ共、ゆだんがうてきのもといにて大職冠にほろぼされ、うぢの大じん共たへふぢはらの純友其外に清原はのこうぐうゑみの押勝何れも皆智謀は有といへ共、武畧に達せんゆへなり、代々の朝敵かくの如くの仔細にてみな本意を失ひし、今なをすみはおそらく武勇をたとへて勇ならばはんくわい項羽もなか〳〵もつて及ぶべからず智謀は張良周勃もこうせいを恐るべしいづれか足らぬことあつて頼光にはまくべきぞ早打立とゞ申されける、いわやがくれのほら次郎いさぎよく仰かな頼光がみうちにこそ綱公時などゝいふ鬼も神にもまさりたる大かう一のくせ者とみな人さたし申せば人によつての功名ならめかたはらいたく候へばあはれかれらと出合、をしならべてひつ組み腕の骨をためさんこそ武勇の家の望なり、はやうつたゝせ給へやめでたきさたとぞよろこびける、かゝりける所に俄にしんどうらいでんして、天地もかへすが如く也去程にやゝあつて虚空より鬼神二ひき忽然とひろゑんさして飛來る、御前なりし物ともあはてふためき氣を失ふ、され共二人の郎等はたとへ天下が變ずる共のがさじものをと太刀ひんぬき飛かゝらんとする所をなをすみ二人を取ておさへ、やあさなせそ物共いかさま仔細あるべきぞはたらかば物々しや、ちうにつかんで微塵にせんまづ暫くとおしとゝめ二ひきの鬼をまねかるればひろゑん近くかしこまりつゝしんで申やうそも〳〵我らと申はいにしへちかたの大じんに申鬼共にふうきくわきにて候なりしかればこくんちかたの大じん打れ給ひて候よりきのともをか草も木も我が大君の國とよむかたの心のはづかしさに四匹ながらぼん天へ歸り申といへ共思へば又口惜しくよからん大將ましまさばちかたの怨みを散せんと虚空をめぐる所に今なをすみの武勇はそも凡夫の所爲とは思はれず、殊にちかたの大ゑんの御子孫にてましませばつかへ申さん其爲に是まで參り候なり思し召立給ひ逆しんあるべく候なりゑかれば又此國のいさわの社の寶殿へこくんちかた

の大ゑんうぢがみかすがの明神口ふしけへ傳はる御はたを納め申させ給へば取いださせ給ひつゝ今度の御陣の先がけに此旗さゝせ給ふべしとかうべを地に付申けるなをずみ聞て悦びする〳〵と走りより二ひきの鬼の髪かきなであら嬉しやな汝等が思ひよりぬる心さしいかでか盡し報ずべきやがて怨みを晴さんにいざやいさわのやしろへ行先祖の旗を求めん者共との給ひて人々を引つれいさわの社にいそぎけるいそげば程なくやしろにも成ぬればかんなぎに案内かうてかやう〳〵のことなれば先祖のはたにて有あひたくれよかしとぞ申されける神主は承り仰にて候へば參らせ上たく候へ共いにしへちかたの大じんの納め給ふときよりも此社のぢう物にて我等如きの社人までおがみ申こともなし、殊更謀叛の企にておぼしたゝれんはじめに此旗を參らせば都のきこゑもはゞかりあり勿體なき御事や御免あれとぞ申けるなをずみ聞て怒りをなしわれ此國の守護として國民をあはれめば、たとへ王位にそむきてもわれかとうどたるべき身の今のことばの憎さよいで物見せんといふまゝに走りかゝつてかいつかみ、首ねぢ切て社壇へすて社のかうしを打破り、奥の院にこめ置きし、件の旗をとり出し、此旗を求むるより首を見るこそ嬉しけれおそらく此旗をさし上げ東國より打て出中國はさておき四國西海山陽道北陸道に至るまでこと〴〵く打取り日本國を從へんはゑばしが程にて有ぞとてのゝめき叫び歸りしはあつぱれ惡鬼のはじめかなと上下萬民おしなべみなおぢぬ物こそなかりけれ

## 第二

なをずみ謀叛并ほら次郎すへ竹に打るゝ事

其後むれいの別當なをすみは郎等共を近付て今ははや關東勢ことぐ〳〵く從へば心にかゝることもなし、東國勢をひきつれをして上洛すべきなりされども爰にすへ竹は東國のおさへとして賴光がけらいなり、何とぞきやつをすかしよせ、かれを味方になすべき、異議いふ物にて有ならばいくさ神の血祭に打てすてたつべし、先づたばかり使を立よとある、承り候とてよこへの兵衞を使としてすへ竹方へぞつかはしける、いそげば程なく下總に成ぬれば、すへ竹に對

面しかやう〳〵とのべければ、すへ竹聞いて驚きなにと候それがしに來つて内段申せとや、我武將の身なれ共、關東のおさへとてときのつかさを給はれば公事についてもひまもなし、やうあらばなを純に來られよとて入にけり、使は面なきふせいにて本國に立歸り一々かやうと申ける、なをずみは是を聞すいさんのいひ事や、此上は是非もなしをやをつこんてすへ竹を打て本望を達すべし、いかに〳〵と申ける、ほら次郎承りをばしまたせ給ふべし、それもろこしの玄んぶようはけいがと共にはからひて始皇帝だにとりこにす、さらばそれがし打こへてすへ竹に對面し、たばかり召連れ參るべし、もしいはいに及びなばをしならべてむずと組み、刀を首にをしあてひつたて是に來らん時數萬の下人候とも主を殺さん悲しさに是は〳〵とふためきて、よも諸共にそれかしを打んと申物あらし、我君いかにと申けるなをずみは打うなづき、是は誠に然るべしともかくもほらはからへ畏つて候と御まへを罷たち下總さしてぞいそぎける、すへ竹館にも成ぬれば案内こうて對面し、かうべを地に付け申やう、われらの主君なをずみは俄に病氣に胃され存命しられず候ゆへおそれ多く候へ共京都への御ひらうをも口をせうこに仕り申置たく候へば、是へと仰ぎ奉る程へては候へ共、ひごろのよしみの御なけに御いであつて給はるべしと打しほれてぞのべにける、すへ竹つく〳〵思案していや〳〵病氣とは覺束なし是はいかさまなをずみが、われを打んしはかるらん愚なりと心へほら次郎にいふやうは、參りたくは候へ共國を隔てゝ行き通ひ、都の聞へも候へば御めんあれとそ申さるゝ、ほら次郎是を聞もとより期することなれば、あひ近くたちよりこは情なやすへたけかげもとなとの侍を本意なくかへす法やある、ぜひ參られずばそれがし引立ゆかんといふ、すへたけは打笑ひまことに愚人夏の虫おのれと飛んで入るをのこかな、たゝ一人來つてわれを引立ゆかんとは、鷲と雀がすね押するに似たるべし命をしくばとつくかへれ罷り立とぞ怒られける、次郎は腹をすへかね鷲か雀か物見せんと、飛かゝつてむずと組む家の子郎等是を見てのがすまじとぞせり合ひたり、すへ竹きつと睨みつけ進參なり、己れらわれに任せて見物せよといふより早くおつふせ上に乘

りかゝり何と候雀どのわしはそつと手ごわき物今が最期ぞ觀念せよと、首捻じ切てぞすてにけるかげもとが侍ども此沙汰を聞より早く切て入らんと犇めくを、すへ竹が郎等共ゑゝすいさんなり己れらと東西へおつちらせば逃げて國にぞかへりける、國にもなればかげもとがさふらいどもあはたゞしく走せ歸り、右の次第かやう〳〵と申ける、なをすみ大きに色そんじやあ己れらほら次第を打せいきて是まで參るだん、さても未練の奴原かな、風鬼火鬼それはからへ、承り候とつゝとよつとかいつかみ、首ねじ切てぞすてにける、へつとう見ていさぎよし〳〵、いかに物共すへ竹と見るならば、打な殺すな手どりにせよ時刻移りてかなふまじ、はや打たてやめん〳〵と都合其勢六千餘騎下總さしてぞおしよする、其後すへ竹家のかうけんさわむらへいた其外近習とざまの侍を召され、いかにかた〳〵さても別當なをずみは音に聞へし大ぢから、器量こつがら人にすぐれ、おのが武勇に高慢し世になしものを取立家臣となづけてうあいし、巖づたい谷をとび其身をむげに碎きつゝ、外道の法を行へば、ちかたにつかへしにふうきくわき、いづくともなく飛來り、此程專らなをずみに逆心のすゝむるよし、つゝめど四方にかくれなし、かく朝敵となる程の大惡無道の奴原ども、殊にはそれがしこなたにて使を誅せし事なれば、末の難儀もかへり見ず、望む所といでたつすじつとうつさすよせ手たらん、こゝに一ッの難儀あり、かのなをすみはぐんしやなり神通異力の風鬼火鬼かれが手に從へばなか〳〵以て此たびは勝べきいくさし思はれず、されども三ぼうはせきがんかくとして、なかなかに寄せかたし、一ほうの細道あり、寄せ來らん奴原を選み打のかうみやうせよ、親打るゝとも子かへりみず、乘りこへ〳〵とき聲かゝひ敵と組め、なをずみと見るならば、遠矢に引詰め射て落せ、かまいて〳〵汝等不覺の働き仕り、うらべの名をば下すなと、いさみすゝんで下知し給ふ、かのすへ竹の御有さまあつはれ猛き勇士やと、みな感せぬ者こそなかりけれ

## 第三

### すへ竹勇力井城中へいけどらるゝ事

扨其後むれいの別當なをすみは六千餘騎を引卒して竹ぞやうにもなりぬれば二ゐ三ゐにをつ取巻供の聲をぞあげにける、城の内にも豫て用意の事なれば大將すへ竹大手の櫓にかけ上り人數くばりの手分けして普天の下に住みながらくわんかをおかすくせものどもあれをつはらへとありければ所々に出合て火花を散して戰ひける寄手は大軍ことに又つうりき自在の風鬼火鬼が駈けまわりて取ては引裂き又はねぢくび人つぶてはたゝ降る雨の如くなり爰に寄手の其中にすきからどうの源内兵衞たゝはるは心あくまで剛にして力は人にすぐれたりつら〳〵思ひけるやうは、我今度のいくさにすへ竹とくまずして風鬼火鬼にくまでは日頃の廣言いたづらに人のおもはん所もありとひそかに陣中を忍び出爰かしことぞねらひけるかゝる所にすへ竹の後見澤村平太ぞげともよき敵と見るよりも向ひはたそすぎからとうのたゝはる我ぞ澤村ぞげともなりいで見參とつゝとよりうけつひらいつぞばしが程は戰ひける運のきわめ悲しさはぞげとも太刀を打はづしゆんでのたかもゝ打落されのつけにかへす所を首ちうに打落しきつ先に貫きすへ竹が後見に澤山平太ぞげともをば源内兵衞たゝはるが打取たりと口上にぞ罵りけるうらべの藏人是を聞きあつぱれおのれはおこの者すへ竹是にひかへたりかへし合て勝負をせよたゝはる願ふ幸ひと取てかへしをしならべてむずと組む源内兵衞も大力一期の安否爰なりと矢聲を出しもみけれ共ばつくんかわかすへ竹なればやす〳〵と組伏せ首ふつゝとかきおとしいかに寄手の奴原なをすみが一世と頼むすぎからはすへ竹が手にかゝりぬけからとなりたり見よや〳〵と呼はりけるまつゐの新五是を聞あゝ仕たりすへ竹と走りかゝつてむずと組む物々しやとたぶさを取て前へかつぱと打倒し肩骨を蹈へつゝ口してぞすてにける、かゝる所に風鬼はやがて飛來りすへ竹かめづらしや我はちかたの大じんに仕へし風鬼といふおになり今なをすみを取立て國土の主となさん爲め家臣と成て仕ゆるなりあはれ此風鬼が手にむかはん物こそふうんなれ日本國の人だねは絶ん物と申ける、すへ竹は聞給ひ汝等二匹の鬼共が取たてがほにかとうどしてむざんやななをすみかさねて首を打れんときかた〳〵かとうどをよにうらめしくや思ふべき我

じやく年のいせんより大江山此方かたのことくもおになれたり寄れ組まん尤とて互ひに牙をかみならし組めばはつれなぐればひらき秘術を盡しねぢあひしが風鬼が力やまさりけんすへ竹を組んでふせ既に引裂んとする所をやつといふてはね返し上になつてすへ竹首をかゝんとすれば又ゑいとばかりふてけかへされ上になり下になり二三度四五度くれ共互ひに助る身方なく勝負は更になかりけり、すへ竹運のきわめにや搦手にいたりける火魚はかけ付是を見てあさましの有様やと走りかゝつてかいつかみ息をもいはせず末武を両方へひつぱりちん中さして入にける其後寄手の物共我先にと亂れ入り勝鬨を作り立のゝめき叫んで歸りけるかのすへ竹の心の内無念なりともなかなかに申はかりはなかりけれ

## 第四

### みだいきんだちをち給ふ事

扨も其後無念なるかなすへ竹はふうきくわきにいけどられいましめの繩つよくかけなをずみ前に引いだす大將みたまひいかにすへ竹汝らは頼光が内にして四天王とがうしつゝ人もなげなるふるまひだに世にはにくしと思ひしに使の物を誅せしこと、彼れといひ是といひ何とかおのれをさいなまん、因果は早くも運る物おゝつけかふなる有様鬼にも神にもまさりたるすへ竹殿の繩付るふりのみことやとから〳〵とぞ笑ひけり、すへ竹聞もあへず汝ごときの愚人にいふべきにはあらね共さらば語つて聞すべし異國にはゐんのちう王周の西伯かたいゆうりきに取られ、ついに天下の主となる我朝にてはこうちの大じんとし人將軍敵の手に渡りても二たび世には出たまふ異國本朝かくの如し今我かやうの身となりてもさらさら以て恥ぢならずもとより命は君のため骨は微塵に碎かれ身をずだ〳〵にせられても勇士の悲しむ所はなし、かゝる差別をしらざるゆへ勿體なくもてうてきしなり、今に天罰身にうけんあさましさよとぞ申けるなをすみ大きに怒りをなし己れのがれぬものゆへに死狂ひに狂ひてあくこんはむやくなりきやつをば獄屋にいましめをけ四天王のやつばらみな一々にからめ取引ならべて誅すべし、かまいて油斷仕な承り候とてすへ竹をひつたて嚴しく獄屋にこめ置きし

はあはれなりける次第なり是は扨置いたわしやすへ竹のみだい所や公達はらうどうが情により大田の城を忍び出いづくをそこ共しらね共やう〳〵今は落ちのびて武藏の國に付給ふ余りにつかれ給へばとある所に宿をかり一夜を明し給ひける、折ふし宿の主をば太郎太夫と沙汰しける人賣にて有けるが人々をつく〴〵見てよきさかてぞと悦び、立寄つて申やう是にまします上ろうは見ればおさない人を連れいづくより何方へ御通りましますぞ一樹のかげにたちより同じ流れを汲むこともたゞならぬ契り也くはしく語らせ給ふべし、おぼしめさん所まで送り届けて參らすべし上ろうさまとぞ語りける、御臺は此由聞し召あゝさて御身はやさしくも問せ給ふ物かな、何をか包み參らせんみづからは是よりもをくかたにて候が去年の夏の頃成に夫にわかれことしまでをさない物を養育しつまの在所につや〳〵おくりてさふらひしが、都の方に賴むべきよしみの物の候へばいとけなき物共をひきつれのぼり候也一村雨の宿りさへ朽せぬ緣とぞ承る、たよりなき物共をあはれみ給へあるじとて泪にくれての給へば、亭主が聞いて打なづき、心やすかれ人々よ、見る目もあはれに候へば、いづくまでもそれがしが送りとゞけて參らせん、のぼらせ給へとみだい餘りの嬉しさに、さらばつれゆきたび給へ、たゞなに事も〳〵うき世の中は情けぞと、五更の天もひらくれば太郎太夫をたのみにてうちつれ上らせ給ひける、いそげは程なく今ははや駿河の國に付給ふ、爰に越後の人買こたか次郎に行あふたていしゆ次郎を招きよせ、是々ぞといひふくめ人々を賣り渡しかくれて國にぞ歸りける、其時次郎人々を船に乘せ越後の國にゆかんといふ、みだいは此由聞召なに我々は是よりも都方へ行ぞかし、越後とやらんへいかにして參るべきとの給へば、こたか次郎は聞よりもなにと申ぞ女房、我はあたへ十くわんに三人を買取れば越後の國へつれてゆきあたいよければ先々へ又こそ賣て渡すなり、船に乘れ女房とあいそうなげに申ける、人々は聞たまひきもたましいも身にそはず、次郎が袂にひし〳〵と取付、なふいかに今まではあるじが情けに我々を都へ送ると思ひしに、扨は親子のもの共をあたいをきわめ賣りけるかや、とて

も賣る物ならば都の方へ賣りてたべ、たとひ命はとらるゝ、其越後へは行くまじと三人手に手を取くみ天にあこがれ地にふして聲あげてぞなき給ふ、情けもしらぬ次郎にて、かしましのやつ原や、いで物見せんと杖ふりあげて打んとす姫君若君すがり付、あらなさけなや船頭どの打てはらだにいるならば此兄弟の物共を心のゆく程打たまへ、其上賣らでかなはずば母をゆるし我々を鬼すむ島へも賣てたべ、あゝ扨木竹も物はしるぞかしあはれみ給へとのたまひて、御手をあはせてなげかるゝ、され共耳にも聞入れず、あゝ面倒なり已れらと棒ふりあげて命も失せよとさん〳〵に打ければいたはしやみだい所次郎にひしと取付、こはなさけなや船頭どの、我もよし有物ぞかし、氷から(自ら也)がつまは頼光のみうちなるすへ竹と申人の妻や子にてありけるぞ、わどの我々を都へ送りとゞけなばあたいはのぞみにまかせんなふ船頭とてすがり付てぞ泣き給ふ、こたか次郎是を聞はつと驚き、遙の末座にたち下り、さては君にてましますかや、それがしをいかなるものとかおぼしめす、すへたけ公の御内に次郎むねざげと申物の御ざ候べしか幼少の時不慮に御かんき蒙り身の置所なき儘に、かやうのわざを仕り世を渡り候所に、三世のきるん盡きざるゆへ是にてたゝ今若君を拝し申事の有難さよ、さりながら相傳の御主を打奉るそれがし天めいの程こそ悲しけれと泪を流し申しけり、御臺公達今は早物うき事も打忘れ、扨は汝むねざげかや、かやう〳〵のしさいなり、わらは親子の者共をいそぎ都へつれ參れ、承り候とかたはらに御供申たびのせうぞくなされけり、物うき世にも今は又うれしきたびを駿河なる、富士のけぶりといひけんもうわの空にやたつなれば思ひくらべていさゝらば、さらにたへせぬ我胸のくゆる思ひの悲しみにかくしつみても後のよは、またはちす葉にうきしまがはら、二人公達のお手をたづさへたどり〳〵と清見潟かすみにかへりみをがさき、まつとしきかばわかみもかへんものをなか〳〵にながらへて、憂き命ぞとなみだにくれてゆふはらのくさばの露に身もぬれて、形もやつれ淺間しくざづはた山の鶯は聲もかすみて鐘の音のひとつ二つとうつの山みちうつゝにも夢にもきかぬふるさとのいなせいかにとすぎやうしやにとう

とうみのはまなのはしわたりくらべて三河の國八つはしのさわべにもきゝつなれにしつまの身はなにとなるみとなつかしくなげくわがみのをはりをばたゞたのめ〳〵玄めじが原のさしもぐささしも熱田の御かみはそのかみ日本武のみことにてあづまのつまをこひ給ふ、なぞらへ給へわれも又今一たびすへ竹にめぐりあはせて給はれといのり〳〵もすぎゆけば、今は願ひのかない來てこいしき人にあふみぢと聞けば共むねの雲きりに鏡の山も見へばこそなにとか玄かのうらやましくもなみはよせてやかへるらん、思ひもよらぬうきたびをせたのからはしうちわたり、大津のうらに入ぬれば、なをも思ひの大さかのせきもなみだはとゞめすやとりのそらねもかも川を打こへゆけば今はゝやけふ九へにつきたまふ、とにもかくにも人々の御有樣あはれとも中々に申ばかりもなかりけれ

## 第五

### すへたけろうをやぶり出都へ上る事

其後攝津の守賴光四海にみちし逆徒ことゞ〳〵く追伐有、洛陽に御所を建て君を敬ひ民を憐み、ぢんしやまつりごと正しくめでたくおくらせ給ひける、頃は八月十五夜のめい月なからく口なく梢をかゝやかすはたくはゝかんのことくなり在京の諸大名御慰みの爲にとて種々のたいへい口つゝをさゝかせ御所をさして上りわたなべをもつてかくと申上ければ大將御きげんかぎりなく東西の大にはに立出させ給ひつゝ既に御酒宴はじまりける、面白かりける御遊び心もすんでいさぎよくきやうを催ほす所に常陸の郡しゆきつな俄に飛脚到來して、上總の國の住人むれの別當なをすみ逆心をおこし、いにしへちかたの大じんに仕へ申鬼共にふうきくわきをみかたになし下總に押し寄せすへ竹城を攻め落しあまつさへすへ竹取こにいたし候へば、ゆゝしき國土の御大事いそぎ打てを給はるべしと大息ついて注進す、賴光驚かせ給ひいかに有べきと御詮議なかばの所へ鎌倉のかげもと御所に參りすへ竹が妻子參りたるよしごん上す、君おぼつかなくおぼし召それこなたへと有ければ、すへ竹が女房は二人の子供の手を引きて御まへ近く參りつゝ始め終を申上、泪にくれていたわりしがやゝあ

つて申やうつまにて候すへ竹、わらはに申けるやうは何とやらん此たびは難儀におぼへさふらへば、此おさなひ物どもを君の御げんざんに入れ奉り、もしもいくさの習ひにて我打死すると聞ならば、朋輩たちを頼みつゝ御ぜんよろしく申なしうらべの家をつかせよひたすらをちよと申間力及はす小供を連れ、あかぬ別れをふりすてゝ是まで參り候と、御前ともはゞからず聲を上てぞ泣きいたり、頼光聞召れ誠にふびんの事共かなかれ十七の時よりも君臣のよしみをなし、忠節數度に及ぶといへども就中われ大場が手に捕はれ、既に危うき命をもすへ竹が武畧にて二たび敵を滅し、今みそじに餘るまで片時もはれしとなれにしあとのきうかうもいたつらごと口惜やと御涙はせきあへず御まへなりし諸大名みな〳〵袖をぬらさるゝ其時大將御涙をとゞめさせ給ひいかにかたがた此たびのいくさは朝敵といひ一つは又すへ竹がついせんの爲なれば、よりみつじきに向ふべし、去ながらなをずみはおとに聞へし器量もの、殊に又ふうきくわきが從へば、すこし難儀におぼへたりわたなべいかゞとの給へば、つなの太郎かしこまつてさん候御でうの如く大敵にへんげの組し候へば、いくさにをいては重く覺へ候なり、去ながらかれをほろぼさんてだてといつぱ、承るに此鬼は酒を好むとつたへ候へば毒酒をしたゝめ申つゝ大手口のかたはらに幾つももたいに入おき風鬼がかけんときよせてさつて逃げ去るべし、さけと見て此鬼立よつて呑むべし、毒酒なれば必ず五體のうらんし己れと自滅仕らん彼等が滅び候はゞ、なをずみはおのづからひちやうのつばをもぐごとく忽ち打取申べし、此儀はいかに申ける、其時きん時つゝと出、いかに綱どの物しり顔に罷出、自餘のことばも待たずして、わたなべ殿の計畧然るべう共思はれず毒酒にて強き敵をほろぼし、調伏にて人を殺すは女わらべのなすわざ、敵は鬼にも神にもしたまへ、此金時は左樣の面倒なる企みはいや〳〵、たゞ一文字にかけ入をやつはらと引組み、運の天にまかすること誠の勇士の本ならめ、あゝ聞ともないくんはふやとたゞよそめしてこそ申けり、時にさだみついふやう金時のの給ふは血氣の勇士といつゝべし、それもろこしの孫氏が計略にも戰つて勝つことは誠の勝に更にせず、弓や取ての名人

は戰はずして勝つと有たは、一身を全うして敵を滅すてだてこそあらまほしけれ、金時いよ〳〵りつふくし、おゝ其もろこしの吳氏孫氏が憶病流の習つて、ごへんもそれをまねび給ふかあら□□やな、さやうの人にはにるもいや戰かはずして勝やうに、命惜くばいくさは御無用四天王といはるゝが、かりにもよはけに口をしゝ、いくたびも〳〵それがしに置ては鬼神にかけ入てつばうほこ續のかん程、馬人のきらいなく落花微塵に打ひしぎ、死人の山をつかせんこそ心地はよけれと申ける、さだみつなをもといまらず、ごへんな人もなげ成いひやうかな、我儘も人によるべし、そうしていくさの習ひ計略用ひず、軍法破るは侍にても人にてもなし、猪武者とてちくるいに、たとへたりとはつたと睨み申ける、金時打笑ひ、御免あれさだみつどのもとより我はゑやう共なき山うばが一子なれば無禮そこつも多からん、又我儘は生れ付、此金時などを蕃類に譬へん物は異國は知らず、日本口とはおぼへず、あつはれわどのはつわ物かなと、血眼になつて申ける、なにとやらぬこと實になつて見へければ、わたなべ中にへだたる君も御座を下りさせたまひつゝ、かた〴〵が申ぶん、何れも一利備はれり、去ながらかほどの大事を目前に置き理非たゝさんことあるべからず、此上は賴光軍法いたすべし、さらばうつたてかた〳〵と都合御勢八万余騎、花の都を打たつて上總の國へといそがるゝ、それは扨置きむざん成かなすへ竹は、いつしか敵の手に渡りらうぐつの身となりて、けふをも知らぬ我命、をゝなげかし物をと思へ共、遠に我は四天王中にも忠有さふらいとて、ひと多き其中にたう八ケ國武者所を給はりしに、いひがひなくも取ことなり、いやしき奴原が手にかゝりうき名を下さん口惜しや、正八幡大菩薩、源氏をすてはて給はずば、今一度それがしに神力そへさせたび給へと、心のうちに祈誓しはら〳〵泣ていたりける、不思議やな虚空よりかんなぎ一人忽然とあらはれ、いかにすへ竹それゑんあればとくあり、せいぐわんなとか空しかるべきゑんりきを與ふべし、いそぎ獄屋を蹈み破りはや落ちよすへ竹、我はこれ八幡宮の神勅たけうぢのゑんなりとて雲井はるかにあがらるゝ、くらんど喜悦の眉を開き虚空に向つて參拜し、さらば敎へにまかせんと

らうのこうしに手をかけ、ゑいやつとをしければ、さしもしたゝかにこしらへたる扉くわんぬき一度に折れてのきにけり、番のものどもきもを消しあはてふためく所を、をれたる門とびらにをもちさん〴〵に薙ぎふせ、殘りし物共おつちらし夜まはりに打まじり、虎の尾を蹈む心地してゑやうらうを忍び出たるかのすへ竹の御運の程めでたし共なか〳〵申ばかりはなかりけれ

## 第六

### 公時二人鬼打并なをすみ最期の事

其後攝津の守頼光の御勢、既に上總におしよせ夜あけなば、急に取りかけんとその夜のあくるを待ち到り、かゝる所にすへ竹大童になつて走せ來る、人々これはと見る所に分れて、久しきすへ竹なり、君をはじめ奉り、をの〳〵夢の心地して呆れはてゝぞいたりける、やゝあつて頼光はいかにすへ竹汝は敵のとりことなり、打れたりと聞つるがいかにして是迄は逃れ參りて有けるぞ、藏人承り、有次第をつまびらかに一々言上申けり、武將聞召れ、扨は朝敵罰せんため、うぢ神八まん大菩薩ゑんちよくおろさせ給ふかと、御手を合せ給ひつゝ三度禮拜なされける、御まへ伺候の諸軍勢皆々頼拜奉る、その時大將いかに方々、なをずみが滅亡はたゝざんじの内成べし、さりながら敵少勢なりと侮つて、打とけ油斷有べからすと、御座を立せ給へば並ゐたる諸軍勢やく所〳〵と歸りける、其金時心に思ひけるやうは、我都にては余りにもつて本意なし、打て出ぬ其時風鬼火鬼とひつくんで、いきながらつれ來り酒のむ伽にせん物をと、いまだ夜中の頃よりも只一人忍び出、大手の門にたゝずみける、され共門を開かねば、大音聲で呼はるやう、只今是へ寄せ只一人なのる物をとにも聞らん國にも見よ、山河をめぐる山姥が一子攝津の守頼光の御内成四天王の其中に坂田の民部金時といふ者なり、それがしに向つて凡夫は中々及ぶまじ二匹の鬼共出合て此金時が腕骨を見よ、鬼共は大聲上てぞ呼はりける、風鬼火鬼是を聞につくゝきやつが廣言かな、出物みせんといふ儘に大手の木戸を開かせて鐵棒をひつさげ坂田を目にかけ飛んでかゝる、

金時見て鬼立出られ候か、いでげんざん仕らんと四尺八寸の岩切抜き、てつぼうに打合火花を散し戰ひける、さしもに剛なる金時もふうき口わきに打立られ、下手に成て金時既に危うく見へにける、時にさだみつ走せ來りおし並べてくわきと組む、ふうきも棒を打すて金時とひつくみ上になり下になり、矢聲を上てねぢあへ共、兩方聞ゆる大力勝負は更に見へざりしが、いかゞしたりけん金時、ふうきに取ておつふせられさだみつくわきと組みながら、こはいかに金時はねかへせ〳〵と人に力を添ふれ共、其身もあぐんで見へにけり、金時下に有ながらふうきか右の腕を取り我はつかれて候へば暫く休み申なり、たゞ其方が危うく存るというより早く取て返し、ちつともはたらかせず鐙の上帶にて、たかてこてにいましめひつ立んとする所に西の手にいたりける渡邊すへ竹かけ付くわきを取ておつ伏せ、首ちうに打落す、金時こそよく遊ばしたる物かな、我もすけたく候へ共鬼の番にひまを得ず存じながらの延引、ごめんあれさだみつと四人どつと打笑ひ、ふうきを先きにをつ立本陣さして引かへす、なをすみ聞いて怒りをなし、かれらを失ひいつのため命を惜むべし、切死に死ねと下知すればはやりをの若物共よこへの立をさきとして、くつきやうのつは物廿五騎あますまじとて切て出る、渡邊すへ竹是を見てやさしのくわしやばらと多勢の中に破つて入西から東北から南雲手かくなは十文字、八ツはな形といふ物にさん〳〵に切たりけり、殘りし奴原東西へむら〳〵ばつと追散し、暫くいきをつぎいたり、なをずみ彌怒りをなし、櫓より飛んで下り、當るを幸ひにはらり〳〵と薙ぎ伏する、すさまじかりける有樣なり、末武見てなをずみか珍らしや我ぞうらべの末武なり、日頃の欝憤はらさんいかに〳〵と申けり、なをずみ聞てゑゝおのれをてのびにし、今にむねんなはれやらず、今ぞ手並は見るらんと走りかゝつてむずと組む、なをずみ無双の大力物の數共思はず、末武を中にひつさげあはやと思ふ所に金時やがて走せ來り、草摺を疊み上つかも拳も通れ〳〵と三刀さす、弱ればかしこへどうとなげ、首ちうに打落し、君の御めにかけゝれば、武將御祝氣かぎりなく、敵殘らず追討有、其後都にかい陣有て天下おたやかにおさめ給ふ、源氏の御代すへ

はんぢやうめでたしとも中々申ばかりはなかりけれ

二條通正本屋喜左衛門

四天王大田合戰終

# なすの與市竹生島詣

付舟いこんの事

## 第一

さてもそのゝちぢおもんみるに明君は賢を愛して國土をおさめふめいのよには佞を好んで國ほろぶここに源氏の大將源の頼朝公はおごる平家を御誅伐あり鎌倉に御座をすへ武家の成敗取おこない戸ざゝぬ御代とおさまれり其頃下野の國のくわんりやうに那須の與一宗高おろしとてふし弓取一人ありけるが然るに宗高は一とせ平家御追伐の時四國八島の沖にして源平兩家のまの前にて扇のまとを射て落し名をばんてんに上げ給ひ下野の武者所を給はりてふし那須のこほりにすみ給ふ姫君一人おはします御名をばたへまの上と申て十三にぞなり給ふ扨また家の後見にはもりをか源内みちふさとて一騎當千のつはものなり或時宗高御臺所にうちむかひ思ふしさいのある間近江國竹生島へ參るなりるすの口口口は姫をともなひましませと道ふさをはじめとして家の子郎等引具して三重近江の國へぞ上られけるいそかせ給へば程もなく竹生島にもなりぬればまづ御前に參りつゝ鰐口てうと打ならし故郷に殘す妻の胎内にみどり子ありあはれ願くは男子になしてたまはれと深くきせいをかけ給ひてござやうせんぞよとふしおがみ扨御まへを下向あり宿坊に入らせ給へば住持いそぎ出迎ひ誠にはるゞゝと是までの御さんけいかへすゞゝもめづらしやとさんかいにちんくわをもようしぞゆをさまさまに奉りさて御なぐさみの其爲に御舟を飾り立住持案内仕り三重御島まはりと聞へける海上はるかにこぎ出すおもしろのうみづらやながめも多き其中にひらや口口つの朝霧に浪のうねゝゝぞげゝれば釣りせで歸るあま人は煙浦の歸帆もかくやらん見るゝゝ雲のたち迷ひしぐれをもよをす其けしき是ぞ誠に瀟湘の夜の雨の名殘かや夕陽西に傾けば三井寺の鐘の聲けふもはや命の内にくれぬると名殘を惜むゆふまぐれ遠寺の晩鐘これならん思ひつらねて行程に滋賀唐崎の磯ぎはにつよくきけたるかりかねの友呼び遊ぶ其聲は平沙の落雁是ならん鐘の山に照る月は是ぞ誠に洞庭の景と打ながめ御ゆふらんは限りなしかゝ

りける所に美濃の國の住人はちやの冠者さだ國は郎等四五人打つれてせうせんに打のりつりたれあそびに出られしが叡山の山おろしはげしく落ちてはちやが舟に向ふさまにつき當るさた國血氣の勇士にて船端に立上りやあ何者が船なるぞいそぎさしのけよと申ける那須の郎等是を聞たれ人なればこと〴〵しやまづそなたの船をのけ給へさだ國聞て腹を立につくいものゝいひやうかな我を誰と思ふらん美濃國の住人はちやのくわんじやさだ國といふ者なり今當家において此さだ國などに楯つく物はぐにんなつの虫とんで日に入が如し己れらいち〳〵に海上へ切てはめんと罵しれば宗高もたまりかね白木の弓をおつ取り大のかりまた打つかひ船底よりつゝと出てことしやはちやどのいづくにていかほどの功名しらるゝ事あつてかゝる廣言は申さるゝぞあふ〳〵やがて心へたり御ぶんは梶原平三景時の聟なり當家において君の御きしよくあつきより舅の權威をかうにきて世には人もなきやうに左樣の振舞びろうなり我は是下野の住人那須の與一宗高なり小兵には候へども見參のしるしになかざね一すぢ參らせんいづくと矢つぼを好み給へとあればさだ國聞てなに宗高にて有けるかごへんは聞ふる手きゝの人大ひやう一矢うけて閻魔のちやうの訴へにせんとおどり出んとする所を郎等ども取て押へあゝ暫く〳〵爰にて御生涯に及び給はん御事は誰かは無念のはらすべし爰をのがれ道に待うけ歸るさを打べきなりひらに〳〵と敎訓すれば勇みかゝりしさだ國もおくびやう神にひかされて尤といひもあへず急ぎ船をぞこぎ戻しゆくへもしれずなりにけり宗高此由御らんじていかにはちやとのことばにはにざるふるまひかなかへせもどせとの給へば耳にもさらに聞入れずすみのをさしてぞ歸りける船中の人々は一どにどつと打笑ひ舟こぎ戻しそれよりも宿坊さしてかへらるゝ彼の宗高の御有樣あつぱれゆゝしき共中々申ばかりはなかりけれ

## 第二

はちやのくわんじやむほんの事

さても其後はちやの冠者さだ國はみづうみにての舟いこん心にこめて無念さに一家の郎等はせあつめいかに汝等物を聞け那須の與一宗高にかゝる恥辱を與

へられ生きては何のゑきあらじ道にまちうけ打べきなりとかく申に及ぶまじはやうつたてやもの共と都合其勢五百余騎みちのほとりに立出て三重とや〳〵と待いたり是はさてをき那須の與一宗高は侍共を近付てはちやの冠者さだ國は仁義もしらぬあふれもの殊にきのふの耻辱をばいかで其儘あるべきぞ定めて道にて待伏せんめん〳〵物の具せよやとて其勢は八百余騎本國さしてぞ下らるゝ美濃國に入ぬれば案の如くはちやが勢四方よりもかけ合て三重時の聲をぞ上げにける時の聲もしづまればこゝば寄手の方より一陣にこまかけ出しそも〳〵是は當國の住人はちやの冠者さだ國なりきのふの意趣を晴さんために是に待かけ申なり那須の與一宗高に見參やつとぞ呼わつたる宗高聞し召何に定國にて有けるか水うみにての舟いこん晴さん爲に待受けて重ねて耻をかゝんとやふゆふ禮義もわきまへぬ野干におとりし侍といくさをせんは無念なれ共待うけしたるがやさしさにあれけちらせとありければ畏たりとて郎等の道ふさは大おん上げて云やうはいかに美濃のはい武者共宗高の御内にもりおか源内道ふさと云ふ大剛の者ありとはかねて音にも聞つらん汝等をあはぬかたきと思へ共いで物みせんと云まゝに大太刀抜いてさしかざし多勢が中に破て入三重火花を散して戰ひけり時もいまだ移さぬまにくつきやうのつば物を其かずあまた切たりけり本より道ふさは心は剛なり力はつよしいくさだては上手なりさしもの寄手と申共もりをかに切立られ殘りすくなになりにけるを四方へばつとおつちらしかち時どつとつくり立三重まつかたはらにぞ引にけるさても其後定國は殘りし郎等近付いかに汝等それがし鎌倉に下り舅の梶原を頼み君に言上仕り此本望を遂ぐべきなりと取物も取あへず夜を日についでぞいそきけるかの定國か心の内むねん共中々申ばかりはなかりけれ

## 第三

かぢはらさんけん付與一るざいの事

扨もその後さだ國はいそげば程なくはや鎌倉になりしかばやがて御前に參りさんゑん申けるやうは扨も下野の住人那須の與一宗高は竹生島に參詣と見へ候がいかなるいこんにやかへるさにそれがしが城に押

寄せ既にいくさに及びそれがしが郎等あまた討せては候へ共後日の御咎めを恐れ陣中を切抜け是まで參り候と誠しやかに申上るらいてう聞召何と申ぞ宗高はいしゆいこんもなきにおしよせて一戰に及たると申か宗高ほどの弓取が左樣のろうせきはいたすまし定めてむまのりやいかさとがめにいくさに及びかけ負けてざんげんするとみへて有其だんは重ねて評定あるべきなり罷立とぞ仰ける折ふし梶原御前に候ひしがつゝと出て申けるは御詞尤にては御ざ候へ共さりながら宗高一たんの御暇を申上げす遙々と都近き所まで上洛申事あるはひとへに君をかろしめ申に似たりぢよの掟にても候へば先づ暫く流罪にも仰付られ候へとさゝへかゝればもとより賴朝は梶原が申事は何事もよろしく思召すにより尤梶原申所一々以て至極せり重ねてぢよの掟の道もあれば本領を召し上げ流罪をさせんとの給ひて越後の國の住人五十嵐のぶんじ其日の御番に當りしを御前に召され那須の與一宗高をまづ汝に預けおく召つれ下れとの上意なり畏て候とやがてりやうしやう仕りいそぎ御前を罷立おたわらまで出むかへ宗高の下國をば今や〳〵と待給ふむざんなるかな宗高は此事を夢にもしらずして本國さしてぞ下られけるこぶんじ與一を御らんじてことばやがてはせむかい對面して上意の趣の給へば宗高聞し召南無三寶扨ははちやめに讒言せられたると存なりさりながら此度竹生島の參詣をあやまりとの上意のうへはとかう申に及ぶまじともかくも御意にしたがひ奉るいかに道ふさ汝は一先づ國に下り妻や子供をいかなる所にもかくし置天の恵みを待つべきなりばんじは賴むとの給ひて涙を流し仰せける道ふさ承りせひにおいてそれがしはいづくまでも御供仕べく候へ共一先國に下り御臺姫君をいか成所にも忍ばせ奉りやがて越後に參りあれにて評定仕らんおいとま申す我君さまと心強くも立別れ下野さしてぞ下りける扨宗高はそれよりもこぶんじと打つれ越後の國へぞいそがるゝとにもかくにもかの宗高の所存のてい口惜しきともなか〳〵申ばかりはなかりけれ

## 第四

道行付若君たんじやうの事

さる程にもりおか源内道ふさはやう〳〵として本國

にかへり女房たちを近付てそれがしが參りたると御前へ仰上らるべし承り候とてみだい所のおまへに參り此由かくと申上る北の御方姫君はやがておもてに出給ひ心元なや道ふさよそも何事あるぞとの給へばもりおか承りさん候我君はかやう〳〵の仔細により越後の國へ流され給ふとかたりもあへぬに人々はなきぶしわつと叫ばせ給ひける下色ぶしおつる泪のひまよりもくときごとこそあはれなれいたはしやむねたかどの思ひもよらざるうきめにあひ配所の旅の道すがらふる里の事共を思召しいだされてさこそ物うく思すらん妾がことはともかくも姫は何と成べきとなきぶしりうていこがれなげかるゝ地道ふさ承り御なげきはさる御事にて候へ共たゞ御心つよくおぼしめせやがて本望遂げ申さんそれがし存るむねの候へば是より信濃の國善光寺のほとりまで一まづ御忍びなされ候へみだいさまとぞ申ける北の御方聞召ともかくも此うへは汝が心にまかすべしいざや忍び行んとて三重ひとま所に入給ふ思ひもよらぬ旅のそら我身の果はうき雲のさそふやいつかまたよにあふみやのめうじんと聞につけてもたのもしやつまのゆくへを安穏に守らせ給へと伏し拜みたびのうきみの道すがら思ひふかやの宿を過ぎけふこそ爰にからす川浪の高さに打こへて我をばたれか松枝の宿過ぎ行けばうらめしやうすね峠をながめこしよもにうきなをさらしなの月の光のかげ清みとまり〳〵のあばらやで涙の枕かすそえてあかしくらして行程に名にのみ聞し信濃なる善光寺にこそ着かれけれ先づ御まへに參りつゝつまのゆくへを心靜にふし拜みさて御まへを下向あるかくて源内道ふさはとある所に宿を取り御臺姫君入れ奉りおくり旅のつかれをはらさるゝはや四五日も過行ばいたはしや北の御方はたゞならぬ御身なれば御産の月にやあるならん御心よは〳〵となり給ひあら苦しやたへまの上むねくるしやとの給ひてつかれなやませ給ひける姫君あまりの悲しさに誠や御枕に立よりてなふいかに母上さまみづからはたへまのうへにて候道ふさも御まへに候かまいて御心まどはせ給ふなと御力を付給へば御臺所は其まゝに三重御産のひばをぞとき給ふ御子取上げみたまへば地玉をのべたる如くなり若君にておはします果報つたなの此若やよがよに有し物ならばお乳やめのとをあ

ひそへてみすやきちやうの内にしてさもゆゝしく有べきに思ひの外にさはなくてしづがふせやの内にしてかくあさましきさんやのていわらはゝ何と成べきともだへこがれて泣たまふ道ふさ承り御なげきはさる事なれ共まづ〳〵御ゑんし共に御堅固成こそめでたけれそれがしかくて有内は御みやつかい申さんとよきにいたはり奉る心の内こそ殊勝なれかの道ふさか心中頼もしき共なか〳〵申はかりはなかりけれ

## 第五

### いがらしこぶんじ若君をひろひ給ふ事

是はさてをき越後の國におはします那須の與一宗高はこぶんじ殿のおなさけにてわづかの屋形をしつらいてあかしくらさせ給ひしが故郷に殘すつまや子は何となりなん物うやと是のみ物おもはれけるあはれなりける次第なり地かくて信濃におはします宗高の北の御方はもりおかを近付ていかに道ふさこよひ不思議の夢を見る善光寺の山門に此若を捨て置け末はめでたかるべきと御僧の給ひしを夢の内にも悲しくて行衞めでたく成とてもいかですてゝは置べきとこたへ申せば又御僧の給はく捨ずは重ねてうきめにあひ若もろ共に朽ちはてんとあらたに夢想の有けるがなきぶしやあいかゞはせんとの給へば詞もりおか承り扨もふしぎの御ことかなそれがしもさやうの靈夢をかうむり候其御僧と見へ給ふは善光寺如來に疑ふ所にあらず殊更此佛は靈夢あらたにましませば佛のをしへに御まかせ候て然るべしと申上る御臺所は聞召さあらば靈夢にまかせんと心づよくも北の方若君を赤き衣に引包み姫君もろ共宿を出山門に立出てと有所に捨置てなきふしくときこそ あはれなれふしあわうらめしの世の中や汝いまだおさなく共みづからをうらむるなかれ下いきとしいけるものことにいろぶし子を思はぬ物はなし斯くなしけるも末のよを昔になしてわどのをもよにあらせんが爲成ぞことには如來の靈夢にまかせ爰に捨置きかへるなり末頼もしく思へとて心つよくも捨置いて立歸らんとし給ふ時いたはしや若君は乳房のわかれや惜しかりけんわつと叫はせ給ふ時きも魂も消へはてゝ又立歸り抱き上乳房を口に入れ給へとせき來る涙のこぼるゝはつらぬくなきぶし玉の如くにてふしせんとも更にわきまへ

ずふし玉ばし上泪にむせばるゝことばかゝるあはれの折ふしいがらしの小文治は夢想の告げの有けるとて侍あまた引ぐし善光寺にぞ參られける御臺姫君御らんじて扨若君を捨置てひともとすゝきにかくれいてことのていを見給へば小文治は馬より下りまづ御前に參りつゝ心しづかにきねんして扨下かうの折ふし山門を見給べばよにいつくしき小人有我はいまだ子を持たず是ぞ夢想のしるしなるらん我子にせんとの給ひて侍共に抱かせて悦び國へぞかへらるゝ御臺姫君はすゝきの中よりかけ出て跡に殘りしそうしき一人近付のふことば只今の大名は誰人ぞと尋ね給へばさん候越後の國の住人いがらしの小文治殿といひすてゝぞ通りける地みだい姫君聞し召跡をのみ見送りてかゝる人の手に渡り下いろ果報ゆゝしきいろ我子やな上いろとは思へ共かなしくて心もそゞろに狂亂して上おんのふ其子はやるまじきはや返してたべやたびの殿とおめきさけばせ給へ共はや行衞も見へざればみだい姫君取付いて道のほとりにたをれふしなきふし是は〳〵とばかりにてこゑを上てぞ歎かるゝみだい所の心の内あはれ共なか〳〵申ばかりはなかりけれ

## 第六

もりをか源内はやうちをきる事

かゝりける所にもりをか源内道ふさ御向ひに出けるが此由を見るよりもする〳〵と立寄りのふ何をなげかせ給ふぞや地北の御方聞召御泪のひまよりいかにもりをか只今いがらしの小文治殿と云人か若を拾ひ行き給ふあまり別れのものうきになげき玉づみて有ぞとてなきぶしかきくどき申さるゝことばもりをか承り扨もめでたき御事かな其こぶんじ殿こそ我君のおはします越後の國にて候なり偏に是は善光寺の如來ののふちううたがひ更になし地やがて御代に出給はんといさめ申せば北の方少心を取直し扨姫君に御手を引れ下なく〳〵上おんはゝいほり三重にかへらるゝ是は扨置梶原平藏景時ははちやの惡者を近付ことばいかに定國聞給へ扨も我君賴朝はなすの與一宗高を一たんのこらしめに流罪に仰付られしが近き内に召かへされんとの御いきとをりとみへて有宗高きさん仕らばごぶん我等の滅亡なりいざや小文治を賴み與

一をひそかに打せ申さんと深く内談してやがて文をぞかいたりけり其狀に曰く那須の與一宗高をながながの御預けさこそと思ひやられて候哀れ願はくは宗高をそれにてひそかに誅して給はれかし君の御前は病中にて相はてたるとひろう申さは後日のとがめも候まじ此御恩賞にはいがらし殿の身の上に玄せんの事も出きなば景時定國二人の物の御命にかはるべし末代迄御はうしに萬事は頼み奉る景時判定國とかきとめはちやが中間に申付越後の國へぞつかはしける御まへを罷出三重越後の國へぞ上いそぎける去程に道ふさはみだい所においとま申ことのやうを聞ん爲是も越後に下りしか道にてかの飛脚にはたと行あいもりをかきつと見ていかさま不思議の使ぞと思ひ立歸りなふ御ぶんは何方へ通る人成ぞ我も伴なひゆかんと申せば飛脚聞いてそれがしは美濃の國の住人はちやの冠者より越後へ參ると申けるもりをかはつと云より早く首打おとし文を奪ひ見てあれば我君打つべきたばかり狀なり天のおしへと嬉しくてか程のせうせきある上は是より鎌倉へや參らん又越後へや下らんと案じ煩ひしがいや越後に下りこぶんじの心を引きみばやと越後をさして下りける心の内申ばかりはなかりけれ

## 第七

若君ぐそくき并けんぶくの事

かくて其後いがらしこぶんじは若君をひろひ取せんわう丸と名を付て花の如くにもりそたて月日重り今はゝや七歳にぞなり給ふある時に小文治は家のらうとうにあやせの源五を近付いかに源五物を聞けあのせんわう丸七歳になりければはじめて具足を着せ申さす弓矢に名を得しつはものをぐそくの親に頼み八幡をくわんじやうし武者になさんとおもひ立たれ人を頼むべきと仰ければ源五承りたれ〳〵と申に及ばず是に流されおはします那須の與一むねたか殿こそ弓は揚由が跡ををい數度の功名たぐひなきほまれの勇士で候へば宗高殿を頼み給ひて然るべしと申上るいがらしげにもと思しめし其儀なればなんぢ參りて此由を申玄やうし奉れとありければ承り候とて御まへを罷立て宗高殿へぞいそぎける程なくしたくに成しかばやがて對面仕り件のあらまし申上る宗高聞し

召仰にては候へ共ごぶんも思ひわけても見たまへ我は弓矢の冥加も盡き日頃忠節あだとなり流罪のうき身と沈む身の具足の親にならんこと今はしき次第なり只それがしはごめん候へとよく〳〵申てたべと有あやせ承り御ぢやう尤にて候へ共御身咎なきことは鎌倉殿も御存にて候へば只一たんの御いとまを仰られぬとの御あやまりにて當座の御勘氣にて候へば何かはくるしう候へき幸ひこれに御入候を小文治もよき折柄と存せられおほそれながらそれがしを遣はされ候へば何と御辭退候共せひにおいて賴奉ると再三強いてぞ申ける宗高聞召此上は力及はずともかくも小文治殿の御はからいにまかすべきと仰ければ源五めんぼく施しやかたをさしてぞ歸りけるおまへになれば此申上るいがらしなゝめに思召吉日をあらためゑゆ〳〵のほうらいかざらせて八幡をくわんせうし宗高の御參りを今や〳〵と待たまふ去る間宗高は時のよそをひ引つくろい小文治やかたに出らるゝいがらしいそぎ出むかひよくこそ來り給ふ物かなさらばこなたへとの給ひて奥にゑやうし奉り互ひにしきだいおさまれば源五具足を取持て御まへにさしをけばむねたか若君を近付てやがて床凡になをし置具足を着せさせ給ひける其後にたかひぼ取て引結びいかにせんわう丸我はかやうのものなれ共さかゑ成しいにしへは君に忠ある侍なり戰場にかけ出弓矢を取ての勇力はそれがしにあやかり給ふべし又果報のところは御親父小文治殿にあやかり候へと少し立のきつくづくと打ながめ扨もゆゝしき若君や鎧つきのけなげさよと我妻の胎内に殘し置しみどり子が男子にても生れなば此若君と御同年にて有らんと思へば昔しが思はれて包むに餘る泪はよそのみる目もあはれなりおつる泪のひまよりもやう〳〵心を取なをしさてさて面目なやこぶんじ殿最前よりも辭退申所はこゝのことにて候我身の思ひ深ければかゝる祝の座敷にて今の泪の其ふぜいさぞや心にかけ給はんまつぴらゆるし給ふべしさりとてはゆるしたび給へ小文治聞召誠に御心底のほどおしはかられて候とて共に泪を流さるゝ其後源五は御盃を取持て宗高の御まへに置宗高は小ぶんじへこぶんじはまづした共に宗高へと互ひにしきたいましませばおとなしやかに若君は口ん〳〵宗高聞召せ其盃をそれかし頂戴せんと仰ける宗

高聞召るゝやさしやしほらしや誠に十歳の翁と此わかの事成べしさらばりよがい申さんと盃を取上わか君にさし給ふわか君は床凡より下り給ひつゝしんでおし頂き給ふ其時宗高は錦の袋の内よりも矢を一筋取出しいかにせんわう丸そも此矢と申は一とせ平家御誅伐の御時四國八島の沖にして扇のまとをゐておとし其名を雲井に上しやなれば子孫にゆづらんが其爲に身をはなさず持しか共御身に是をゆづり申とてわか君にぞ渡さるゝわがこに重代をゆづるとしらぬ親子の心の内こそあはれなれとにもかくにも世の中の物のあはれは是なりとて皆感せぬものこそなかりけれ

## 第八

與一こぶんじかまくらへ下り給ふ事

かゝりける所にもりをか源内道ふさはやう〳〵としてて越後に下り小文治殿の門外に立より番の侍を近付それかしは鎌倉よりの使なり此狀上へ上てたべといふ家の物承り小文治殿に奉るいからし怪しく思召急き開いて見給へば宗高打て參らせよと梶原はちやが連判なり是々見給へ與一殿景時定國がかやうの文を遣はす事是ぞ訴訟のたねならんとづはちやが使をおつかへし申さんとやがて表に立出給ひやあなんぢははちやが使なるか扨も〳〵景時定國は犬にも劣りし侍なり宗高ほどの弓取をやみ〳〵と殺せとや思ひもよらぬ次第なりいそぎ歸りて此旨を念頃に申せとてはつたとにらんでの給へばその時もりをか泪を流しあつはれ忝の御心や此上は何をかつゝみ申すべき我ははちやが使にあらず宗高の後見もりおか源内道ふさと申ものにて候道にてはちやが使を打て捨て文を奪ひ取御心を引見んため是まで參りて候なり主君宗高の御事をばんじ賴み奉る又一とせ善光寺にて拾ひ給ひし若君こそ宗高の胎内にて別れ給ひし御子なりかゝるよしみの御なさけに宗高の誤りのなきとをりごん上なされて給はれと鬼のやうなるもりをかも御まへ共はゞからず泪をはら〳〵とぞ流しける小文治聞召扨は御身はもりをかなるか宗高も是にましませばいそぎたいめん申されよ是へ〳〵との給ひてやがて座敷に出ければ宗高は御らんじてやれ汝はもりをか成かとて嬉泣にぞなかれける其時小文治はせん

わう丸の手を取ていかに宗高殿是こそ御身の胎内にて別れ給ひしわすれがたみの御子にてましませば親子のたいめんおはしませ進上せんとの給ひてわか君をぞ渡さるゝ與一夢の心地にして扨は我子でましますかたねまきそめしなでしこの草のゆかりを見るからにうゝつと更にわきまへず玄ばし泪にむせばるゝ落る泪のひまよりもいかにせんわう丸こぶんじ殿の御やういくかまいておろかに思ふなよ〳〵孝行仕れと髪かき撫て申さるゝ小文治聞召あゝおろかなり宗高殿子孫に傳はるぢうだいを我子としらで譲られしは是ぞ親子の深きえん御よつぎに奉るかゝるめでたき折からにいざ鎌倉に罷り下り御らうちうへ内談して御よに出し申べしはや打立給へと云まゝに供人あまた引具して悦び勇みてそれよりも鎌倉さしてぞいそがるゝはや鎌倉になりしかば宗高仰せけるやうはいかに小文治殿それがしは佐々木の四郎高綱と少しよしみの有中なればまづ佐々木に對面して事の次第をないだんせんこなたへ御入候へとて佐々木のやかたへいそがるゝ程なくしたくになりしかば案内かうて内に入高綱に對面あるはじめおはりを語りつつかの文を見せ給へば高綱御らんじてよくこそ參り給ふものかな先以て小ぶんじ殿是までの御出は近頃玄うちやく申て候宗高とそれがしは兄弟よりも深き中なりそれをいかにと申に父にて候佐々木のげんざうよしとも御手にしよくしたいけん門の合戰に打負けおちうどゝなりし時おぢにて候ひでつぐそれがしが五歳の時下野へつれ下り與一殿の御親父介高殿にあづけ置十六歳のくれ迄一所にそだちしきうゆうのよしみに一命なり共參らせん其うへ梶原にはあめが下のしよ侍やしんのはさまん物はなし我々かく口ての内御け人五十三人はかねて内談申せしなりはちやのくわんじやは數ならず先梶原を申請けざんしんの口をしづめんと侍一人近付御家人五十三人に内談すべき事ありとて一ノつかひを立られたり承り候と御まへを罷立て一々三重玄だいにふれにけりかの佐々木の心てい頼もしき共なか〳〵申はかりはなかりけれ

## 第九

### 大名五十三人連判の事

去程に五十三人の人々は何事やらんと我も〳〵と佐々木のやかたに出られけり高綱立出たいめん有かたがたを是まで申入るゝ事よのきにあらずかやうかやうの仔細ぞと人々を呼び出しめん〳〵に對面させ扨かの文を見せ給ひ是々御覽候へ方々かやうに梶原がおのれが心に入らざる物は口にまかせてざんげんすかくては後々は人のたねも有まじきそれがし一人ひと〳〵の爲に立出て此あらましをごん上し梶原一門が首を由井の濱にさらすか又我々いつけつみに沈むかせひのあんひを極めんと存が扨かた〳〵は何と思はるゝぞと申されば千葉の彦太郎ひざを直し誠に與一殿一人に限らず景時がざんげんにて亡びし人々數をしらず君の御きしよくよきとても彼をその儘置んこと武士の本意にあらずやとよに頼もしくぞ申さるゝ一座の人々是を聞きもとよりにくむ梶原なれば皆尤とどうじつゝさゝめきわたり悦びける其中にもかさいの六郎きよしげは梶原とげゑやくについてしたしければひいき顔にすゝみ出なふ是はわかげのなせる所なりさすが景時などをほろぼさんはことの大じ成べし（不明）先づ家老の衆へも内談あつて然るべしとぞ申ける秩父の六郎しげやす進み出ていかに清しげ四十に余りし高綱を若氣のむりとは何事ぞ其上家老の衆とても和田ちゝぶ千葉かづさ四人なり先づ朝いなの三郎是にましませば義盛とだういなり上總の介殿は佐々木殿のしうとなり千葉殿はちやくし彦太郎是に候へば是以て同事なり父重忠が名代にはかひ〳〵しくはなけれ共重保これに控へたり何のさはりの有べきぞたとへ天命つきはてゝ此こと申あまりて身はなき物となるとても思ひ立たる一念のひるかへすべきにあらず言上申かなはずば梶原がたちに亂れ入り親子のものが首を切てすて腹かき切て死んこと何のしさいの有べきとさもいさぎよくの給ひしはげに重忠の一子やとほめぬ物こそなかりけれきよしげ心に思ふやういや〳〵何となくさしきを立此ことを梶原にしらせんと思ひゑやく取なをし申やうげにそれがしがあやまりにて候めん〳〵の思ひ立給ふ上はいかではからひ申べき先したくにかへり明日すぐに御所へ上り申さんとざしきを立んとする所を朝いなの三郎取て押へやあごへんがけしきたゝならず重保がことばにさつそくしたかい此事梶原にしらせん

と思ふ所存あらはれ見へて有此義秀か見るめはちがふまじ此ぎつふしづまる迄は弓や八幡大ぼさつごふんのやどへはかへすましと小かいな取てひつたて狹き所におしこめて高綱の後見あらおか源太左衞門宗つぐに預け置有し所へ立かへりはや打立や尤なりとてにたんの四郎が筆取にて一々みやうじをしるしけりまつ一番に佐々木の四郎高綱千葉の彦太郎つねうち秩父の六郎重保あさいなの三郎義秀三浦平六兵衞義村江間の小四郎よし時つちやあいきやう一でう板垣へんみ竹田おがさはら川越の太郎重ふさ武藏の七黨お山の一黨都合御けにん五十三人訴訟かなはぬ物ならば一所に思ひ定めんと連判きせうをかきはにやいて水に入おの〳〵五たいにしつかとおさめ是をさいごと只一筋に思ひ切御前をさしてぞ上らし〻 此人々の勢いかなる天魔やくじんもおもてそばめておちぬべしあつはれ頼もしき勇士どもの所存どもやとみなかんせぬものこそなかりけれ

## 第十

### 各もんだう并そじやうを上る事

去程に五十三人の人々は佐々木を一人大將にて御前をさしてぞ上らるゝわだちゝぶかつさ四人の人々は此事をしらぬていにてさいぜんより殿中にぞつめ給ふ去間頼朝公記錄所に出させ給ひ此由を御らんじて方々がていはたゞならず何事か有との御詮なり佐々木四郎とかうに及ず一通のそぜうを取出し御前にさし上るたかはしの判官承り謹んで讀み上る其文に曰く風ぢきりにあくうんのうごかし日月の光を奪ふ纔臣國にはびこれば君のちよくたいをばうずよつて政道明かならん事をこふしやうそも〳〵過ぎつるりやうわう元年の頃おい那須の與一宗高宿願のしさい有近江の國竹生島へ參詣仕候所に美濃の國の住人はちやの冠者定國かりすな取に出けるきざみ定國に行あひとつ口のかいを口口きしを宗高物まふでといひ一ツには君の御前をはゞかりかんにんの胸をなすり歸國におもむき候きざみ定國多勢を卒し道に待ちうけすでにいくさに及候へ共宗高口んりよにかなひ多くのかこみを切ぬけ罷下り候定國後日の御咎を恐れ鎌倉に走せ參じてぢうとの梶原を頼みざんぢん申といへ共君御同心もましまさゞりしを梶原が一言に及び

るざいのつみに沈み候然れ共ついに御ゆるされを蒙るべき梶原ゑんいに思ひ入りかくの如くの文を書きいがちしの小文治へさし遣はすといへ共いがらし禮義を思ひそれがしがたちにまいりないだん仕るばんじのていをけんだんせしむるに梶原かふるまひあくといひおごりといひ表裏いんやうの働きをもつて君の御かん厚く候へば我々共が身の上も何事か申上んけふは人のうへあすは我が身のうへをや申上んと何もやしんにはさみ候へば早く五逆の罪に伏せられけんりんあきらかならん事をこいねがふ所の連判五十三人件のごとし佐々木の四郎高綱つゝしんで申上ると高らかんぞ讀み上るらいてう聞召いかに家郎のめん〳〵ことの次第を聞たまへそれ語に曰くはやしの内にたか木は風にやぶれ人すぐれて忠ある武士は人のそねみ有とゑるせり今梶原が事成べしかれけもきは頼朝ふしきの中にかくれし時危うき命を助け其後源平の戰にも一命を塵芥よりも輕んじ宇治川一の谷やしまだん浦の合戰にもすこむる忠を盡し今とても頼朝が爲めには身をも命をもつゆちりほども惜まず天下を大切に思ふ物がいかで左樣成ざんげんなどをめぐらさんそこつな事を申なと顔色變つて仰ける佐々木承り扨は天下に忠の武士は梶原一人にて候なかく申高綱も身に相應の忠を仕り候先みちのくの伊達の大木戸の先陣宇治川ゑんしう諏訪合戰の先陣其外さきがけぬけかけ分捕功名梶原ほどこそ御座なく共すいぶんはげみ候ことには石橋山の合戰にかけまけさせ給ひ大ば兄弟きびしく追駈け奉り既に御自害に及び給ふをそれがし一人蹈止り大勢をかけちらし防き戰ふ其ひまにといの杉山まで落ちさせ給ふ其時の仰には頼朝天下を取るならば日本半國はゑさせんと諚有しを早くも御忘れなされ候物かなよく〳〵御思案あつて御らんせよ梶原は此頃平家方よりうさんのいたし君御一代の侍かく申高綱は多田の滿仲よりそれがしまでは六代君までは七代普代相傳の侍なりされればきのふけふ參りたる梶原はゑんじつ君の御事を大切に存せんやよく〳〵御思案候へとはゃかる所はなかりけり君もことわりとはおぼしめせ共猶も梶原を御ひいきにて扨景時は人の上をたび〳〵ざんげんしたる證據ばし有か其時千葉の彦太郎しやく取なをしさん候景時がざんげんせし人々は先御舍弟範頼同

よし經御いとこやすかたの三郎よしさだ竹田の太郎よしのぶ其外國侍は申に及ずされバおのれが氣に入たる物は御前にてもよろしきやうに取なし心に入ざる物はあしさまに取なしとがなき物を流罪死罪に行ひ候ばんみんいこんに存すれ共御まへをはゞかり申上る者もなしたゞせかいの惡魔は梶原一人にて候かほどぶだうの景時をよろしき者と思召す御所存こそ口惜しけれとめん口口口しをいらゝげ血眼になつて申上る君聞召いや〳〵さやうにてはなしいかに梶原が申とて我兄弟と思ひかへ咎なき者をほろぼさんや其者共がむほんに於て疑ひなしよしそれは過ぎつること那須の與一宗高は我に一たんのことわりもなく都近き所まで上りさるとがにより流罪にしづめをきけれ共方々ゑきつて申うへはとがをゆるすぞ罷立とぞ仰ける秩父の重保すゝみ出て申されしは宗高は僅の御とがめゆへちよの掟の爲一たんの流罪なれば御ゆるされを御恩とも存せす候たゞ我々は大惡人の梶原を此たび申うけん爲れつざ五十三人此そせうかなはずば二度したくにかへらじと連判きせうを書き罷出候かく申上るだん全く梶原をそねみ申てごん上仕るにあらずかれかくて候はゞ萬民怨みをふくみ天下もおだやかなるまじと君の御爲を存じ命にかへてごん上仕候弓矢八まん大ぼさつ侍めうりもつき候べしひやうりを申に候はずせひの次第を聞召わけられ梶原を我々に下さるゝか又かけ時一人に五十三人を思召かへられ切腹を仰付らるゝかとかくの上意を承り候らはんと申切てぞいたりける賴朝聞召其儀ならば梶原を召出しことの仔細をたづぬべし先かた〳〵はしたくにかへられよとの御諚なり朝いなの三郎たまりかねつゝと立てこはのび〳〵なるでういかなおふげに心へたり我々が申上るだん皆あしく聞召させ候五十三人の者共に一どに腹を切らせん事よのはゞかり思召何となく先かへし折々はよのとがを仰かけられ五人三人づゝせつかいあるべきとの御思案とおぼへ候よしそれとても思ひもふけしことなれば死する命は惜しからねど大惡人の梶原をらく〳〵とうきよに置我らばかりはてんことめいどまでの迷ひなりなふ方々は是に暫く待給へよしひで一人梶原がしたくへ走せゆき首ねぢ切て只今かへり申さん其首を見たまひて今生のまふしうをはらし立ならんで人々よ一

所に腹を切べしといふより早く立出る君御らんじてやあ暫くとの給へ共きかぬていにてかけ出るよしもり見給ひていかに朝いな先づ上意を承りよしひでいかにと申さるゝさしもに勇むあさひなも父のことばの重ければ立歸るれいぎの程こそ殊勝なれよしひでのいきほひあつぱれがうなるさふらいやとほめぬもものこそなかりけれ

## 第十一

### さだ國さいご并與一本領を給りそよち入の事

君は此よし御らんじていかにかちうのめん〳〵若者どもが我儘を申にしづめ給へと仰ければ千葉上總よしもり三人の人々申されしは御ちやうにては候へ共かれらが申上るだん一々理に當つて候へば何と申べきやうも御ざなく候たとへば理非はともあれむたいにおづめよとの上意ならば切腹を申付るより外はたしなしいかに若者共梶原はたゞ一人にて其身にあやまり多けれ共君大切に思召かた〳〵は五十三人にてしかも道理を持ちながらかく御承引なき上は五十三人を梶原一人に思召かへさせ給はん御きしよくにあらずとかふの事をいはんよりはゞかりながら御前にて一々切腹仕り君の御ふくりうをやすめ申せ若者共を先立てあとになからへ我々がうきよに有て益もなし先なんぢらがかいしやくしてつゞいて腹を切べしとひたゝれのつゆを結んで太刀の柄に手をかけ給ふ重忠御らんじておばらくあゝ不覺なりかた〳〵道理至極の身を持て腹切らんとは何事ぞよせん鎌倉ばかり日月の光有べきかいざ筑紫の方へ打こへ世の中の善惡をよそにてみ聞申べし我々こゝを立のかばおそらくは鎌倉に殘る武士は有まじさあらば君より打て下らんは必定なり其時うらみの矢を一矢づゝ仕り扨一所に腹を切べしはや立たまへ八々と一どに座敷をはらりに立賴朝おどろき給ひ重忠の袂をおしとめ誠に一人ならず二人ならず賴朝を大切に思ひことばを揃へ申上は梶原惡人に疑ひなししづまり給へ一ごん申ことわり有石橋山の合戰に賴朝伏木の中にかくれしに景時が助けしゆへ天下の主とはなりし賴朝が一世の內に梶原が身の難あらば命にかわらんと契約あり今一ど景時が命を賴朝にたび給へ明日にても梶

原いぎに及びし事あらば其時は心のまゝに行ひ給へせひにおいて此度は我にはうしんし給へと忝もお手を合せ給へばゑぼしの先を地に付一どにあつとぞ感じけるさ程の御心さしにて候はゞ誰かはいぎに及ばんと皆々ぢんいをはらしける君はなゝめに思召やがて宗高を召れいかに宗高なが〳〵の流罪さこそ無念に思ふらん此たびのけぢやうには本國下野は相違あらずはちやのくわんじや定國を人々のはらいせにちうばつせよとの上意にて御ざを立せ給ひければ皆々おいとま給はつていそぎお前を罷立三重本所〳〵にかへられたり去る程にかくて宗高は大せいを率しはちやがやかたへおしよせ関をどつとぞ上にける城の内には上を下へとかへしけるされ共定國やぐらに上り何者なれば浪籍やなのれきかんと呼はつたり其時宗高一ぢんにこまかけ出しいかに定國めづらしやごぶんすこむるらうぜきして流罪のうき身となしおきしが天のぢゆんくわんめぐり來てかうべをはねよとの上意をうけ是までむかつて候なりとく〳〵腹を切るべしと上おんにてなのられける定國大きにおどろき上いなればかなはじとはらかき切て死んだりけりやがて首をとり宗高の御目にかくる今こそ本望とげたりとて宗高はみだい公達にたいめん有御よろこびはかぎりなしさあらばしよち入申さんと本國に下りかずのやかたをたてならべ二たび榮花にさかへ給ふ千秋ばんせいめでたきともなか〳〵申ばかりはなかりけれ

寛文參癸卯年六月吉日

なすの與一竹生島詣終

# 頼光あとめろん

## 第一

しよぎやうむしやうとひゝきつゝほだいをしらするゑんじのかねしやうじやひつめつ四き天べんのはなの色定めなきはしやばせかいこゝに六孫王の御まこたゝのまんぢうの御ちやくしせつゝのかみみなもとのらいくわうはすどのげきしんうちたいらげへいあんじやうに御所をたておくりていとをしゆごし申さるゝ去かるにいか成御去ゆくうんにやすきぬるきさらぎの頃よりも御こゝちれいならずさるによつて御しそくよりちかきやうをはじめ御家のしんかむさしのかみわたなべのつなはりまのかみひらいのほうしやうとうたうみのかみうすいのさだみつするがのかみうらへのすへたけわたなべかしやていみたの源太ひろつなそのほかさいきやうの大みやうにちやこてんにあひつめて御きけんいかゝとうかゝひけるかくて卯月さつきの頃は三重したいにおもらせ給ひけるさてそのゝちに四天わうひとりむしやをはじめ御家のしよさふらいのこらず御ひろまにあひならび御びやうきのありさまをとり〳〵ひやうぢやうまち〳〵たりしかる所へといはら入道御ひろまにまかり出さてもきみの御びやうき何共はかとらざるにより三でうの大なごんみつすへきやうをもつて御跡めのぎをさうもんなされ候へばいこくにもさやうのれいおほき事なればとかく國おたやかなるやうにあひはからへとのせんしにて候間をの〳〵くふうをとつくとおさめ天下の御じつけん御じつしよりちかきやうか又は御しやていよりのぶこうしかるべきかしんていをのこされすこん上有べきとの上いにて候といさいこまかにあひのべてをくをさしてぞ入にけるいつれも大じのせんぎなればざちうひつそとしづまりける時にわたなべあふぎを取なをし人々はなにと思ひ給ふぞ是は一大事のひやうぎなりしかりといへどもおたづねあるを御返し申さてはかなふましまづ此わたなべかほつする所を申へしもつ共御子よりちかきやうしかるべきと申たけれ共よりちかきやうは色にみたれさけにちやうしばんたん我まゝなる御心入なり此君天下の御せいたうおこなはせ給はゝばんみんのな

げきよのくるしみあつて御家のめつほうとをかるましきとぞんずるいつれもはなにと思ひ給ふぞとさしきをきつとみわたせばほうえやうきんときさだみつすへ竹めとめをきつとみ合せわたなべどのゝ申さるるごとくよりちかきやうの御身持はたうのげんそうとや申さんけつちうにやたくらべんこくどをみださんとおもはゝ此君しゆこにしかるべし又天下長久あらしめんとおもはゝ中々むようのいたりなりされば君もけんさいの御子と又は御しやていよりのぶ公かいつれかとそれと上いはなけれ共頼光の御しんていにもよりのぶ公しかるべしとおほしめさるゝはいちしるしとはゝかりなくそのべらるゝ爰にわたなべかしやていみたの源太ひろつなはひざたてなをしいふやうは何と候かかた〳〵はげんざいの御しそくよりちかきやうをさしをきよりのぶ公のせひたうよからんとはよにあたらしきひやうぢやうかなをの〳〵はよりちかきやうにいか成しゆくい有てかゝるせんきは候ぞせけんのひはんもあるべきことなりよく〳〵くふう候へとにがりきつてぞ申けるほうしやう聞ていかにひろつなそれ天下は一人の天下にあらずばんみんの天下なりたとへば五人十人の子を持ても其子共あく人なればよをゆづらぬがほうぎたり是たみあんせんこくどゆたかならしめんためにて有すでにもろこしのきやうわうは八人の太子をさしをきいやしきたみのしゆんをあけてくらゐを御ゆづり天子となし給ふ其せんれいはかすおほしことによりのぶ公は頼光の御しやていよりちかの御ためにはおぢにてはましまさずやしからば何のへたてかあらん我々は御家ひさしかるべきことを思ひてのせんぎなりとぞ申さるゝひろつなかさねて申やうおろか成いひことや其ぎやうしゆんはたいたう四百よしうにもたぐひまれ成大せいじんそれをじやうぎにはすんぽうはづれ申べしまさにせいのりう王はけんのくひを切太子に國をゆづり給ひしれいも有よりちかいまだ御じやく年にましませばあしき事をはめん〳〵のからうやくにかんけんあり道をみちにたくされんこそしんじつのちうかうならんとざを打てそ申けるきん時いらつてすゝみ出いかにひろつなさなきだにあくにはうつろひやすき人心よきを手本にせすしてあしきをじやうぎにせよとは心へがたき事共なりさればよりちか

きやうにはそれがし御物のぐをきせ奉りし事なればよじんよりたいせつにそんすれ共よりちかのあくぎやくはゆめ〳〵もつてなをるまじとあざわらつてぞのべらるゝいやそれはさもなしきん時とのたいばごときのあくにんだにすゝめによつてぶつちに入したるめしありましてよりちかはそれほどまでは候まし心なきさうもくもたむれはなをるならひ有たゝ〳〵かた〳〵はよりのぶと一みのやうにぞんし候とこみ出々申けるわたなべあまりにたまりかねやあすいさんなるひろつななんちか申はみなこと〳〵くあくしなりかく五人の人々はすねん天下のしつけんをかうむり御家長久たみあんせんと心かけ五じやうをもつてみをくだくかゝる大事のひやうぢやうをおことらかちゑのたけにおよはんや小鳥共かあつまりてわしをさみするしんていは近頃もつてりよくはいたり罷立とぞいからけるひろつなもとよりおこりものやあこふんも我もかはらぬちゝか子にてありさきにむまれてあになればとていかでか所存のかはるべきおとか打たちあにたつやたゝざるやとたちのつかに手をかくるこはすいさんなりたちふみをつてすてんととんでかゝるを人々取ておさへさりとてはおとなげなし去つまり給へわたなへひらに〳〵とせいしつつまづひろつなをかたはらにおし入るつなは大きにいかりをなしこはきこへざる人々かなかやう成あく人めをたすけをけばわたなべが家の疵なりまつたく人手にはかけましき爰をのき給へはなし給へとふりきり〳〵かけ出る渡邊がていたらくたゞやくじんもかくやらんと扨おそれぬ物こそなかりけれ

## 第二

扨も其後みたの源太ひろつなはさしきのむねんはれやらずしよせんたゝよりちかへ御むほんすゝめつゝ天下をくつかへさんとおもひしかいや〳〵いにしへよりおやとたゝかひしうにゆみを引ほんいをとげたることかたしなまなかにおくれを取てはまつ代までのかうなんなり是をぼだいのたねとしてしやばのきづなをはなれつゝしづかにうきみをおくらんともとゝりきつて西へなげしよ國しゆきやうにいでにけり此ことよもにかくれなくよりちかきやうは聞召御

めのとのすきたの平八時かとをちか付扨もみたの源太ひろつなはあとめの事に付四天わうとかうろんしよをうらみてとんせいす是に付てもよりちかゝ身のうへおあんするに父らいくはう我をみかぎり給へはこそおぢよりのぶとそれかしといつれかあとめにさだめんとからう共にしろふおほせはなけれ共よりのぶせいたうよからんとおほしめさるゝ所なり其上四天わうひとりむしやかよりちかをさま〴〵にそしりしゆへにおぢよりのぶにけんいをうばはれ此めんぼくいかゝせんもはや此うへはいづくへもひきこもりいさぎよくうちじにしかばねはやぐはいにうづみ名をはくもゐにしらせんとやがてきんじゆのしよ侍三百よにんめしぐしてしのび〳〵にやかたを出るちせんさしてぞ三重いそかるゝはやそま山になりしかばはた馬しるしをたてならへよりきのせいを待給ふされば〳〵よりちかきやうたぐひなきあく人なれ共たしなきていにみへけれとも今はらいくはうの御かんきをかうむり給へばたれか心をつうずべきたゝ爰かしこのあふれ物のふしのほかよりかせいの者はなかりけりよりちか御覧していや只人をたのみていくさをせはこそ日頃のよしみをひるかへし道をしらぬぐにんらは中々なきこそましならめ我一せんのほんいをへはみなわれさきにときたるべしもとより此そまやまは四ほうになんじよをかゝへつゝたぐひなきやうがいなればいくまんぎにてせむる共すこしもあやうき事はなしさし取引つめいおとしてかたきよはらばしころをかたむけどつとかけまつかうたてわりかたてきりせうぎたをしはらいぎりをつゝめ〳〵きるならばうき世のなぐさみこれならんとかんら〳〵とうちわらひきどさかもきひしらんくゐそのしな〳〵にげぢをなしよするかたきを三重今や〳〵と待ゐたり此事くらくにかくれなくらいくはうの御前には四天王をめされつゝ扨もよりちかをのれかひぎをうらみずしてらいくはうにふそくをなすこそはかなけれおやの身としてたゞ一人の子をみかきるはよつくあしきと心へぬ天めいしらぬくにんめを時をうつさずふみつぶしまつだいまでのあく人のみこりにせんとさかたのきんときにざいきやうのしよさふらひ五千よきのちやくたうをくだされ大しやうにぞふせらるゝきんとき上いをかうむりわうもう二ねん五月廿六日く

も井のそらもゆたかなる月のみやこをうちたちて三重ゑちぜんさしてぞいそきけるよを日についでうつほどにはやそまやまになりしかはとうざいなんぼく一だうにときをとつとぞあげにけるかくてきん時はたゝ一もみにとしきつてけぢをなしければ城の内にはてきをきどへつけまじとてさきをまはしわつて出大手からめて入みだれ三重ひはなをちらしてたゝかひけるされともよせてはたせいといひことにはめいたいぶそうのきん時がくんほうの手だてをつくしてもみたつればじやうちうのぐんぜいとものこりずくなにうたれけりよりちか大きにいかりをなしあさましのふぜいやな二のせはなきかあれけちらせとのたまへばひろはるうけたまはりいでそれがしざんしにしやうりをつけ申さんりよくわいながらひろはるかはたらきを御けんぶつ候へとかれ木にはとのとまりたる家のしるしを下人にもたせゆらり〳〵と立出てわれは是二のせの源六ひろはるなりことあたらしきやうなれども扨も此さし物はわれらがせんぞ二のせのくわひりやうしゆくはんあつてうちかみ八まんぐうへさんけいせしむる所に一ぞく共にはかにぎやくしんをおこしあとよりをしよせ來りし時くわいりやうあたりをみればかれ木にはとのとまりてあり是ぞ八まん大ほさつまさにしやうぢきのまことをてらし給ふとらいはいしたせいのなかへわつて入くんでをちてはくびを取ておさへてはねぢくびしいきをもつかずむねとのくびを八ツうち取くだんのかれ木のゑだにかけ其外のぐんぜいをあきのこのはとうちちらしきうなんをはらした事是大ぼさつの御めぐみそれよりも此かた代々家のしるしとすされは中につくりしはとは八まんの御しやうたい一ねん一ふつこしんのみだ八ツのえだは八そうじやうとをかた取なり心さしのともからはかけいで此木のえだにかうべをつらぬきむいのみやこにおもむけと大をんあげてぞのゝしりける時によせてのちんよりも今木の源六げんないとなのりなに二のせどのにてましますな花まちゑたるげんざんすはまいりそふと二うち三打うつかとみへしが二人は四ツになりてぞたをれけるやがて首をかきおとしゆきの内よりさくばいくわくれなゐ打まかふもゝの花とこすへにこそはかけにけれ其後よせてのぢんよりもうのはなおとしのはらまきに

くはかたうつたるかぶとをきたむしや一きしつゞ〳〵と立出て是はごうしうのらう人みしなの兵こもとはると云ものなり二のせ殿のはたらき日比うけたまはりおよひたりそつとひけんいたさんとはしりかゝつてきりむすぶたがひになをへしたち打のめいじんなれば上だん下だんにからんで付てめぐればひらりとしさりうけつひらいつ突をせんとはげみしかもとはるなにとかしたりけんもみちのめつけをあやまつてゆんでのたかもゝはらはれてのつけにかへす所をくびちうにうちをとしさしもめいよの見しなとのうきよのひまをあけほのゝ日かけにきゆるあさかほの花のくひそと打わらひ同ゑたにそかけにける木のめの小太郎みるよりも花とみながらちらずはぼうじやくぶじんなりときつてかゝるをつゝといつてがひつかみかしこへとうとをしふせくびふつとかき切てをのれかぶんざいにて二のせがしるしのかすにいらんはくはんたいなれとも心ざしのやさしければ是もかすに夕かほとて同じくえだにかけにけりひうかの善次みるよりも四天王ひとりむしや二のせとよばるゝかうのものを木のめかうてには及はんやとはしりかゝつてむずとくみはねたをさんうちふせんとをせともひけ共二のせちつともたぢろかず善次があげまきかいつかみゆんでへからりと打たをしくびふつゝとかきをとしたちあかる所へしら山兵衛本庄ぎやうふかはせよつてゆんでめてよりくみけるを物々しやと雨のこはきにかひはさみ四天王一人むしやならで二のせとくまん物は日本にはおぼへすとまへゝ引よせむずとしめ一々くびをねぢきつて一ッ二ッはつねのことはなのさかりやよしのやまらつくわゑたにかへらずといへどもまたさけばこそさそふむじやうの風二たびこずへをかゝやかす花のふゞきをのこせやとゑだひきよせ〳〵うちかけていかによせての人々二のせが家のきちれいのくひもはや七ッはたまはり今一ッになりてあれは心あらんともからはかけ合はつそうじやうどのかすに入後の世たす(か)り給へかしいかに〳〵とまねきけるきん時是を見てけに二のせにおよはん物はみかたの内にはおぼへず時の大将かうむる身かさしあたつたるみかたのちじよくせひなしと太刀ひつそばめかけ出て阪田のきん時是に有すもふかつくればぎやうしか出てよろぶとかや身ふせう

なれ共それかしかくびのかずに入申さんいかに〳〵と申さるゝ二のせ聞もあへずまづ此間はひさしう候さかたどの年頃日頃かたをならべひざをくみたがひにさいつさゝれつさけくみたりしもうつりかはれる夢なれや二のせがくびを御さかなにしん上いたすか又御くひをさかなに申うくるかうむのしゆゑん仕るなりたゝ一たちとうつてかゝるをきん時はつしとうけひつはづしてきりこめは二のせ又てうとうけてひつはづし太刀のすんはのひたりとまくりたて〳〵すきをあらせずうちたつるをきん時はづみをみすましひらりととびかたさきよりもちのしたまではらりずんときりすへてかへす太刀にてくび打をとしくだんのしるしのえだにかけさあのぞむ所のはつそうぞやうとよつくじやうぶつ仕れくびの七ッや八ッを家のしるしとよろこぶははむしやのわざ此きん時はほしからずなんぢかめいどのみやげにせよとかしこへからりとなげすてゝしづ〳〵とひつかへすかのきん時がていたらくあつはれ天下のまれものやと扨ほめぬものこそなかりけれ

## 第三

さるほどに城の内にはたのみきつたる二のせの源六うたれければ今ははや城中もたもちがたくぞ見へにけるよりちか此よし御らんして此うへはわれぢしんに打て出きん時めがくびを取二のせにたむけゑさせんといたる所を立給ふを平八やがてすかり付さすか一家のろうどうに御手をおろさせ給ひつゝすこしの御あやまりもましまさはまつ代までの御かうなん一まづ此城を御ひらきまし〳〵てかさねて御ほんいをとげさせ給はんこそさすがに君にはにあひたる御おこなひたるべきとさへぎつてかんげんすればよりちか聞給ひなんでうきん時めほとのやつめをいかでしそんし申べきみつけんこつにうちわりてのこるやつばらしやうぎたをしになぎふせんととび出し〳〵給ふを平八なをもかけふさがり御ぎつになるべきことをそれかしいかで申さんやさやうのあらぎははむしやのわざたゝ大ようにことをとげられ天下のけんいをとらせ給ひとこそしんじつの御本いたるべけれかくいとはしたなき御心にてこそかやうにならせ給ひ

てあれあさましの御所ぞんやかく申だんにくしとおほしめすならばそれがしかくびをとらせ給へ命のあらんかぎりは夢々はなち申ましとなみだをなかしせいこんすればよりちかとつくと聞給ひ此うへはともかくも御ぶんかはからひにまかせんといかりをしつめ給ひければすぎた大きによろこびしからばこよひ雨かせのまぎれに御しのびなされ候へと扨打じにしたるしにんをつみかさね城に火をかけひかしの方より山つたひにぞおちらるゝよせては火の手をみるよりもすは城ををちぬるはと一どに馬をぞのりいるゝされ共城には人もなくたゝやけのこりたるしかいばかりぞ有にける扨はおちゆきぬるとおぼへたりいざをつかけんと我も〳〵とすゝみけるきん時是をみてしばらく〳〵かた〳〵よ是はじよのてきとはちがふべしたゞあく人とはいひながらげんざひの御子といひことには此きんときもぐそくをきせ申せし事なればよそのやうにはおもはれずさるによつておちばおとし申さんためわざとてぬるくせめてありきん時ほどのものが是ほどの城内を今までてまを取べきやしよぞんあつてひかへたりいさかへぢんせん人々としよぐんせいを引ぐし三重くはらくをさしてぞかへりけるていとになればうちとる所のくひ共を取もたせいそき御所にあがりつゝとひはらにうだうをもつていくさのしたいをこん上あるとひはらやがてをくに入やゝあつて立出てたゝ今のおもむき一々ごん上つかまつり候へばよりちかきやうのかたちのみへぬはさだめてやけうせてぞあるらんたとへおちうせたりとても三國ぶさうのあく人をいつまでめでたかるべきやまつじやうをさつそくにのりつぶしことには二のせの源六をうち取事ちんちやうの至りなりつきては御びやうきゆへ此たびのぐんせいのはたらきそのいでたちを御らんぜざることいづれもほひなく思ふべしかつらはひやうちうの御なくさみのためかいぢんのともからがむしやぶりをさくらのばゝにて一けんあるべきとの上いにて候そのよういを仰付られ候へきん時うけたまはりいさい心へ候といわらとのさらは申付んとていそぎ御てんをまかり立ようのしなゝけぢをなし三重一々次第にふれさせけるゆゝしかりけるぎしきなりそのゝちらいくはうは四天王をめしくしてやぐらにあがらせ給ひけるそのほかの

人々も思ひ〳〵にさしきをうち上下色めきわたりけり思ひ〳〵の家のまく大しきせいしきむらさきやくれはあやとるあやのもんにしきくれなゐさま〳〵にうつり心やそめ色のせつにあらねともさくらのばゝ今やはるかとさきかはるやたけ心や物のふのとりつたへたるあづさゆみその家〳〵はおほけれどなかれもきよきみなもとのもろこしまでもひゞくかぶらのゆみやのみちまして我かてう一ゑんをさまりなびく日のもとのげんじのいせいぞめでたけれさてこくげんになりしかばさま〳〵のむまかいぐつたへをきにしつなのひしよ三重こゝをはれとぞのり出すさる程にきん時仰をこうむりて一々しだいにたづねけりまづ一ばんにしらいとのはらまきにくれなゐのほろをかけはくばむらさきのたづなはたそ御めんなるぞばせうながらのり給へさん候くはんむ天皇のびやうゑいたかもちの大きみに五代のこうゑんわたみ浦のせうしよし國このたひ大手のきとのせんちんとぞなのりけるヲキ二ばんにもへぎをとしのよろひおなしけのかぶとにきほろかげ成馬にのつたるはいかにシテ是はきいの國はつせうじのはたかしらいもせの忠太としくにとなのりけるヲキ三ばんにくろかはおとしのよろひにもへぎのほろ黒きむまにくれなゐのたづなはたそシテ是はかつらはらのしんわうのかうゑんかまくらのごん太左衛門がまごかまくらのごん太郎かげひでこんどみなみの手のようちのしんかりとぞなのりけるヲキ四ばんにしきのかわのよろひにあさぎのほろかけあしげのむまにのつたるはたれなるぞシテ是は平しんわうまさかどをうち取名を天下にあげたりし田原藤太ひでさとに五代のかういんたわらの平太ひではるとなのりしづ〳〵打てぞとをりけるヲキ五ばんのたまくれなゐすそごのよろひむらさきのほろをかけひばりけの馬にあさぎのたづなはたれ人ぞシテ是はこのたひのたゝかひにぬけがけいたしかたきしきうち取打しにいたせしにかひだうでわのかみが一子小太郎ゆきとしすなはちそのせんちやうにをいておやのかたきをうち取おはん(ぬか)つもるとしは十五歳とぞなのりけるヲキ扨又六ばんにくろかはのとう丸にくわかたうつたるかぶとにうすぐれなゐのほろさびつきげの馬にのつたるはたそシテさん候なにかしは御せんぞ六そんわうの御せんにて

いきたるをがとくんでひきさきほまれをせじやうにふれたりしあくせんじひでかねがまご大せんのしんやまだのはるひでとなのつてとをるヲキ七ばんにあさきいとのよろひくちばのほろかけあをの馬にむらさきのたつなはたれなるぞシテ是はちくごの國のむしやところたけちの源藏やすくにこにて候此たびの一ばんくびとそなのりけるヲキ扨八ばんにはきいとのよろひにすぢかぶとくろきほろかけさめなるむまいのつたるむしやはたれやらん是こそゆうりやく天わうのぎようにちよくをかうむりなるいかづちをよひくだしみかとゑいらんに入しするか大じんのばつようするかのせんしこれかとにて候となのつてこそはとをりけるヲキ扨又つきの九ばんめに、くちばのよろひにあやのほろかけあるきむまにあさぎのたづなはいかにヲキ是こそばんとうの八平次のなにかし、いかまの與一まさもりとしつもつて五十八いくさにあふこと十三と一どもふかくの名をとらず、此たびせんじやうのかうみやうは、御もくろくにめいはくなるべしとたづなしづかにあゆませて大ようにそとをりけるヲキ十はんにこんいとのもの〳〵ぐにしろほろかけ、くろのこまにむらさきのたづなはいかにシテ是はむさしの國のちうにんにはたけやまち〳〵ふの九郎しげもとなり、此たびからめての一ばんのり一ばんやりとぞなのりける二人扨そのほかはやまとげんじにみのさふらひ、あふみの國にはやまもとかしはぎきむらあねがははりまの國にはとんだたかなしあかまつとう、いがのはつとりいせ平次三かはに、あすけやはきむしやいづもの國にはみちたかはひやま、ほうきにたくまあねはの一とう色々の家のもんもゑぎひをどしこざくらやみのはなをもたかにしかさかは、あかゝはくろかわあらいかはきいとしらいとむらさきや、さて又馬はれんぜんあしげとらつきげよつじろあしゝろひたいじろからげひばりけかげかすげ、かうしくりげひめくりげ思ひ〳〵のくらをかせ心〳〵のたつなをかけ爰をせんとぞのつたりけるがてる日にかゝやく物のぐは一しほいろやまさるらん、五しきのほろがいりみだれのりいだしたる馬のかずいしやう七百三十よきはなやもみぢのことくなりときに取てのけんふつやさゝなみや〳〵はまのまさごはつくる共けんしの御代はよもつきしめで

かりともなか〳〵さてなにゝたとへぬかたもなし

## 第四

かくてそのゝちうきやうのしんよりちかはたくみしあくぎやくいたづらにあきのしもときへうせて、よの中ゆたかになるに付てもらいくわうの御きしよくよろしからざるによつて、御よつぎよりのぶ公四天王ほうしやう其外のしよ侍をめしあつめないぎひやうぢやうとり〳〵なり時の天やくのかみよしだのほうゐんじのむらほつきやう御まへにかしこまりよりのぶ御らんじてしてまづこんにちの御きげんは何とうかゞひたるぞ、心もとなしとおほせければ、兩人承りさん候今日の御きげんはさしてかはらせ給ふ御事も御ざなく候たゝ御ひやうきのていしんに御くたひれ候て御心の御むすぼれふかくみへさせ給ひ候とかく御心をほうしさせ給ひ御きのどゝこをりすこしはれさせ給ひ候はゝをのづからやくりきもまはるべきやうにそんし候とつゝしんでごんじやうすよりのぶ聞召いかにかた〳〵さらは御なぐさみをなにとぞくふうをめぐらししんていをのこさす申上よとの上いなりいつれもしはしもくねんたる所にきんときやがてすゝみ出げに御心なぐさみのふうけいなにかしかるべき物それがしのそんしより候はそれ人の心をいさむる事まゐんにましたる事候はずもろこしのらくてんかしゆかうさんをまなひていせんにさけのいつみをたゝへひちよをそろへ今ようろうゐいさまさまにをんせいみめうをつくさんことかゝゝあらんと申さるゝ時にほうせうすゝみ出是そきたいのふうけいもつともよろしく候はん扨それがしかぞんするにはそれやもふと申もじやぎのわざ其にごれるをはらはんにはしやう〳〵のれい〳〵たるにしくはなしみなみの御てんの花そのにせんぎやうのていをまなび時にあらず其そのゝもゝ色〳〵ふせいをつくしつゝからくみ御めにかくる物ならばすこし御心もはれさせ給はんと申わたなべのつな是をきゝ兩人のもやうしももつともおもしろくは候へ共それはいこくの事わさなりちかきわかてうのふうけいを申べしさがの天王のきようかとよとをるのおとゝいつし人思ひやそらにみちのべのちかのしほかまをたへしのび六

條かはらのゐんにしほかまをうつしなにわのみつのうらよりもとうしほをくませゆふきやうありしはなにとやらんたへなるやうにぞんずれば御ていぜんにしほやのていをかざりびちよをあつめあまをとめにつくりしほをくませ、又はうほきのおきなとをあひませしほやくていのゆうけいいかゝあらんとごん上ある、よりのぶ聞召いづれをわけていひがたしとかくかき付を以てごん上然るべしとやがて一々にあひしるさせ人々をめしぐして三重おまへをさしてぞ出給ふ御まへになればみぎの次第をこん上ある頼光御らんしてまづもつてそれがしがびやうちうをかなしみて、せい〳〵をつくさるゝのだん誠にもつてしうちやくせり、よつて此かき付のだんいづれもよろしき事ながら中にもちかのしほがまのこと、われさかんのいにしへみちのくへ下りし時少けんぶつ申てあり、むかしのてい一しほなつかしく思ふ間、まつしほかまのふうけいのぞみなりと御きげんよろしくおほせ出さるゝ所へきうしうくまのゝしんぐうのべつとうあはけわしくさんじやう仕り、扨もにやくわうしのやしろはそんのおよび候間しゆりのために、うしろのかたをやぶり候へばかくのだんの物をこめをき候とさしあぐる、すなはち御まへにてひらきみ給へはあつきいたに人をゑにかきむないたとくびにはやのねをつよく打こみちんじゆぶのしやうぐんらいくはうとかき付しうらにはなむ日本第一大りやうごんげんきずいをたのみたてまつるせいくかんたがへ給ふなとんしゆみなもとのよりちかとかきしるしてうぶくのぐはんじよをそへていたりけり人々大きにおとろき是はいかにとさはきける時にらいくわう御なみだをはら〳〵となが させ給ひいかにかた〳〵扨も〳〵天めいしらずのよりちかめや子としておやをてうぶくする事ためしあらざる事なりそれかみはひれいをうけたまはずなにほどきやつめがいのる共われじやうがうきたらずばしぬまじけれ共うんめいつくれはかゝるかうひやうせひもなしさればせんぢつのかつせんにおち行ぬるとすいりやうはしけれ共おんあひはなれぬおやと子の中のかなしさはよのうき事もみにしまはすこし心のなをりやせん、もしさもあらばおりをへて、國の一ヶ國や二ヶ國は申おこなひ、又さもさくは出家そうのみとなしても頼光がう

き世のかたみにのこさんと扱こそゆうめんしてはあれ、かのもろこしのしゝわうはちくるいなれとも子をかなしみてちにふせは、子はさらみちをわきまへず、とやをはなちておやをいる、是よりちかにあひおなしらいくはうむなしく成ならはいか成ぶつしくやうもなにならず、たゝよりちかめをたつね出しからめ取かうべをはねてそれかしがつかまへにたむくべしくさのかげにてじつけんしうき世のむねんはるべきといかれる御雨がんに御なみだをうかめ給ふ、よりのぶこうをはじめおにをあざむく四天わうひとりむしやげに御だうりなりことはりやとみな〳〵なみだをなかしける、やゝありての上いにはよし何事もさだめなきよの有さまをしりながら申はぐちの至なり、まづかた〳〵か心ざしのゆうけいのしたくあれせめてはうきをはらすへしそれ〳〵とのたまひてござをたゝせ給ひければ承はり候とをの〳〵御まへを罷立三重にはかによういと聞へける心もことばもおよはれず上下たへなるあそひとて色めきわたりいさみけり、かくて其後頼光は人々をめしぐしてもみぢのでんに出給ひよものけしきをみ給ふにげにもうつせるしほやのていなにゝ付てもよの事はふしうきふしゝげき竹はしらあしのかきねにくさのやねつゆもたまらぬあはらやは、月みるためのあまのわさかや、かのきはのつたかづらくものあらしにふきとちてうらさびしくもしほかまのけふりいぶせくたちのほるまかきかしまのけいきまて今もくせんにあらわしてすきしむかしをみちのくのめいしよを思ひつゝけつゝひとしほきやうに入給ひ、よもをはるかにみ給へばいふにたへなる御あそひ、心も爰にすまのうらぶひのむかしあらわれてひかるけんしのたいしやうはのにすむむしのわれからとをかせるつみの身をせめて三とせの思ひたゆるまもなみのよる〳〵あこかれてもしほのけふりと立のほりきへてはそらにゆき平のせきふきこゆるとなかめしも、たれをまつ風身にしみて、そでそほぬるゝむらさめのふりにしかたのうらはまで思ひつゝけてまつしまやおしまのあまのぬれころもかわくまもなきしづがわざあたにくれゆく月と日をかそへ〳〵てこよひしもげにはつあきの七日なりくゆる思ひのたちのぼりそらにもこひがあればこそ、そらにうきなは七夕の、いとくりかへ

しかへしつゝ、こひのそめぎぬをりひめのあまのかはらに立わひてあふせのなみにうきしづみ、年にまれなるちぎりとてわかれもつらきなみだ川、わたせるはしやかさゝきの、みもくれなゐにそむとかやさればうたにもごよひこん人にはあはじ七夕のひさしきほとにまちもこそすれとふることまでも思ひでゝむかしししのぶのうらはまでいとしん〳〵とすみわたりまつのあらしのをとすごくしほくみぐるまわづかなる、よをおしめ共したへともかへらぬものはゆくとつとさりけらしなとしのくれあゝさてはかなきうきよかとむじやうをくはんしおはしますその折ふしにあまをとめあさのころものそでをむすんでかたにかけ我も〳〵と立よりていさ〳〵しほをくむべしさあのふしほをくもたんぶとくみもちてもつやたこのうらあつまからけのしほころもくめ口ぞかけはおけにあるげに〳〵もらさでもらさでてらせ日のひかり月のでしほをくむをけにうつろふかけはいつまでもつきぬいつみときくのさけとことぶきしてたはれはらいくはう御ゑつきまし〳〵おほめでたやと御きげんよろしく候へければ其時にあまをとめしほきのおきなもろ共にきみか代は千代にや千代をさゝれいしとしうけんうたひ立ければざちうに有し諸大名皆萬せいをとなへつゝ千しうらくはたみをなで萬ざいくらく命をのふ頼光の御いせいめてたかり共中〳〵に何にたとへぬ方もなし

## 第五

しようじゆせん年ついに是くちぬたれかしやうじやひつめつのことはりをまぬかれんあゝかなしきかなや頼光は御とし五十四歳を一せとしついに御たかひ有ければよりのぶ公をはじめ四天王ひとりむしや御家の諸侍あんやにともしひきへ日月のかげをうしのふことくなりされ共人々涙をおさへ今ははやなげきてかなはぬしでのたびとかく君の命を取し御かたきはよりちか卿ほねをみぢんにくだきてもせひ〳〵くひを打取て御きやうようにほうずべし扨明日は一七日の御ほうしなりいとなみすぎて其後はをの〳〵てたてをめぐらさんとまづ御ほうしのいとなみを三重みな〳〵あるこそしゆせうなれ是は扨をきうきやう

のしんよりちかはいづみの國ふけいのうらにてはたをあげよりきのせいを待給ふ所に頼光の御たかひと聞よりもきん國のしよ侍我も〳〵とはせつく事たゝぬのをひくがごとくなりすでにはやよりきのせい十萬八千よきとぞしるしけるよりちかしよぐんせいに打むかひ父頼光われをあく人なりとすてられしか天は誠のかゝみにて天下を我にあたへ給ふしるしまさにあらはれたりよに有かほ成おぢのよりのぶにくかりじほうしやう四天王がくび一々に打をとしおやなからも父頼光はてきなればつかもびやうしよもほりかへし日頃のむねんのさんずべしはやうちたてやかた〳〵と三重ていとをさしてぞをしよする此事よもにかくれなくよりのぶ公は四天王ひとりむしやをめされ頼光のゑんぎやうとてしづ山かつにいたる迄うれいの色をなす所にげんざいの子としてたちまちゆみやをおこすこと天めいしらすのあく人かな此うへはせひもなしいそぎかた〳〵はせむかひざんじにたいぢ申されよわたなべ承はり上いのごとく一七日も立やたゝざるにせんぢやうのかけあひほんいには候はね共ちからおよはぬ仕合なりさりながら人のひはんも候へばたゝてきのしかけをまち都にての一せんしかるべう候はんと申あくるきん時きもあへずこはのび〳〵なるせんきかなきみの御ゆひごんにもいか成千ぶ萬ぶのくやうよりよりちかのくびをはかのまへにたむけよとの上いをばはやくもわすれ給ふなよし人々はともかくも此きんときにをゐてはすぎにしいくさに打もらしたるゆへにより君をてうぶくせられしなりげんざいのおやをいのりしとんよくぶたうのよりちかをいつまであんをんならしめんといたる所をずんとたてば四人の人々もたまりかね三重みな〳〵したくをせられける是は扨置こゝによりちか卿の御めのとすぎたの平八をきかげはきやう人にすぐれあんふかきかうの物なれはきいの國のちう人おしをの源太そのべの藤内とてなんかいたうにて其なを得たるゆうしを近付ことのていをさつするに頼光あひはて給ふによりほうせう四天わういかりをふくみいくさのたてやうもさだめずわれさきにとぬけがけせんはひつぢやういさみちに待かけうむのしやうりをたゝさんとみかたのこちをぬきいでゝつの國あべのがはらになりしかば先すぎたの平八は一むらま

つをこたてに取こだかき所にひかへける二ちんにはそのべをしをあひならびたとへぎじんなりとももらさしとうでをさすつてひかへける然る所へきん時むまにしらあはかませはせきたる平八すはたれなるらんとまつのかけよりたちよりちかつきみればきんときなりなふひさしう候さかたどの是はすぎたの平八にて候ちかころめんぼくなくは候へ共いにしへのよしみにはいかやう共たのみ入候とさもありそうにあひのぶるなにすぎたなるかかうさんとやさふらひはわたり物ちつともくるしからざる事さらばてきのあんなひいたされよははらきによりほんりやうしさいあるべからずと申せば、さらば御さきいたさんとよるよとみれはきんときかくさずりたゝみあげてつかんとするをさあしつたりととひらりととびかいつかみをしふせてさいせんよりもはかりことばしつたれ共なんぢほどの物かなに事をかしいださんをひて事をみんためにわざとゆるしをきてありをのれこときのうでにてこのきんときがおよばんやとくびをかゝんとする所へをしおの源太かけあはせきん時がゆんでにまわりさしとをさんとするうでぼねをひつとらへまへゝ一しよにひきよせ二人をさうのひざにてをしつめあとよりつゝく其べの藤内をかいつかみはるかのそはへなげすてゝ二人かくび一々にうちをとし是もいくさのかどいでとにつことわらひ立にけりしかる所へわたなべほうせうさだみつするたけぐんせいをひきくしはせ來りやあきんときわれゝをうちすてぬけかけはいつものくせとはいひながらよりちかはたいしのてきなりとつくとそなへをいたさんといひもあへぬによりちかはすまんのくんびやうはつかうしたがひにときをつくりたて三重いくさは花をぞちらしける都がたはこせいなれども三國ぶさうの五人のものぢしんにてをくだきたゝかへばすまんのよせてかけたてられうをうざをうにげちりけりよりちか大きにいかりをなしみれんなるくわじやばらかないで〳〵よりちかゝ手なみをみせんと五人ばりに十五そくとつてつがひさしとりひきつめさん〳〵にいたまへば一やに二き三ぎづゝいをとされ一ッもあだやのあらざればざんじかあひだに百きばかりいおとされさしもにいさみしみやこぜいむら〳〵ばつとぞひきにけるときにきんときすゝみいでこはおくれた

りなんぢらと一もんじにとびいづるをわたなべとつておさへやあのよりちかのゆんぜいはばんじやくとてもたまるまじ此人にゆみやをもたする事はりやうにみつをあたへおにゝてつぼうをゐさするにひとしし(一)なにとぞしてたばかりゆみやをすてさせ申さんまづしばらくとせいごんす其時きんときはらをたてなふわたなへせんじやうにむかふ身がてきのやさきをおそれつゝいかでかはたらきなるべきやことにうんはてんにあり爰をのき給へやといふまゝにかけいづるをわたなべなをもおしとゞめもつともうんはてんにもあれはてきにもまたみかたにもありすこしは人のいふ事をもちひたまへやこれをわたすぞかたかたよかまひてはなし給ふなとむたひにとつてをし入さて大をんあげていひけるはそれなるはよりちかにてはましまさすや是そわたなへのつなにて有むかしは三代そうをんのしゆくんなるかいまは八ぎやくざいのとが人なりげんざいの父うへをちやうぶくありしみやうばつはいつまでかのがるべきあつはれ三國ふさうのあくにんかなかく申がむねんならばちかづきたまへまつかうをたゝひとうちのしやうぶなりとわざとにくさげにぞあさむきけるあんのごとくよりちかけつきさかんのゆうしなればこのことばにいかりをなしすいさんなるあくごんかなおのれごときのやつにゆみもたちもいらばこそたゝ手とりにせんといふまゝにゆみやかしこになげすてはしりかゝつてむずとくむときにわたなべもとよりきこゆるはやわざなればはねつひらりひつこゝをせんとぞもみけれどもさんこくぶさうの大ぢからにてものゝかずともせずちうにひきよせなげんとすればわたなべしととまとひてはなさゞればこはもの〳〵しやといふまにゆんてのかたへはねたをしくひをかゝんとしたまふところへさだみつすへたけはせきたりやうはうよりもむずとくんでひきよせよろひのうはをびひきちぎりたかてこてにいましめいまこそほんもふとげたりとのこるぐんせいうちたいらげみやこをさしてそひきのほせてんかあんせんにおさまりけるなをなをげんじの御はんじやうめでたしともなか〳〵申ばかりはなかりけれ

江戸大傳馬三丁目本問屋板

頼光あとめろん終

# 津戸三郎

宇治加賀掾正本

## 第一

地下ぢやかにだいば有りかうしにとうせき有り、くにがうてきあらずんば、めいしやうのほまれ何を以てかあらはれん、さればらんは太平のはじめぶんぶさかんの源うぢ、九郎御ざうしよしつねは、かねうり吉次にしたがつて、みちのくに下かうあり、ひでひらがしやじやうにて、頼ともにくはゝり、平けのぎやくとをしづめんため、おくせい十萬よきをゐんぞつし、チヨンフシ御しんばつとぞ、聞へける、およそ三ぐんをつかさどる御きりやう、天ねん其徳そなはつてそなへぎやうれつかいたいこ、しやう〳〵せいせいとしてきんてつみなる御ぢんをし、ぼくどうせうふもかうべをたれ草木も、ゑだをかたぶけり、こゝにあれたるわらやがのきおくもくまなく見へ給へば、六尺ゆたかの大おとこやのねをとぎてかたへには、二八の娘つゝりさす、はりのみゝずもゆびぬきてきゝ手づまの手もたゆし、むさし坊辨慶きつと見てもんぐはいにつつ立、詞けふ我君の御しゆつぢん五十四ぐんのたみ百性、かつかう申おりからおさめすぎたるふるまひりよぐはい千萬、まかり出て一禮せよとよばゝれば、かの男くつ〳〵とわらひ、いやはやながいきすればあたらしいことを聞、主をもたぬらうにんなればわが君とあがめん人あめがしたに持申さず、ぐそくきたがこはくもなし、たれにおそれてへちまのかは我てらの佛たうといな、津のとの三郎かつひらといふらう人もの、此女は我いもと身こそひんなれ、今日まで人にれいせぬ此男と、兩足くつとなげ出しひざをたゝいてゐたりけり、詞辨慶こらへずすねふみをらんとかけ出る、よしつね馬よりとんでをりァ、しばらく〳〵、津のとの三郎とは聞及びし源氏ふだいのゆふしぞや、我こそよしともが八なんよ、西國へ同道せん力をそへて得させよひらにたのむとの給へば、津のと兄弟はしり出僕は源氏の御するがと、手をつかねて申せしは、詞誠に源氏の大將のたのむとの御諚御供申べう候へ共、おやにて候津のとの兵衛御父義朝公につかへ、しな〳〵の高名をんしやうあるべき所に、ざんしやのわざにて本

りやうをめし上られ御父が常々申せしは源氏のしやうばつくらきゆへ、ざんしやはさかへ忠臣はおとろふる、うらめしの義朝や此うらみはしそん迄わするなと申をき、はら切て相はてし親の一ごんこつずいにこたへもだされず、かく申とてしん八まん平家にしたがふ所存なし、つちをなめ水をのみ、うへしせんこそ孝行共義共我共申べし、御諚をそむくにあらね共御奉公は御めんあれとりをたゝしてぞ申ける、詞よしつねしごくましまし、しからば汝にをとらぬ武士たのんでゐさせよ、津のと承り爰に出羽のなにがし佐藤庄司と申者のせがれ、次信忠信兄弟の内一人頼むとの給はゝ、よもいはいは候まじとごん上すれば御大將、其義ならばぐん兵をかめゐ片岡むさしにつけてさきへうたせ、佐藤がたちのあんないにはわとのをゆうゐんすべしとて、二手にわくるはたの手に、よろひのにしきにほはせてきうばの花、こそ三重さかりなれ去程に佐藤兵衛忠信は此ことを聞よりも、うれしや義經の御供し西國におもむき高名せんといさめ共、兄弟の内一人と有からは、兄の次信御供を望みよも某は上すまじ、ェ、くつきやうふんべつ有、ぜひ某がのぼらんと津のとが庵にあんないし、詞四郎兵衛忠信おみまひ申といひ入るいもとのはや姫立出、兄うへは義經公の御供し其かたへと言、忠信小ごゐに成いや三郎殿に用はなし、御身にないせうをしらせ申ことの有り、承れば兄次信とはひとしれず、夫婦のかたらひあさからぬ中と聞て有り、何とさうかといへばはや姫かほをあかめ、御存のうへはつゝみ申さんやうもなし、はや七月の身もおもし玄て此ことがあらはれしか、いや〳〵さやうの義ではなし、義經公より兄弟の内一人ぐせらるべきとの仰に付、兄次信いくさの供を望まるゝ、あかぬ別れはぶしの道共おばさんか、弟の口から兄の惡性申にくきことながら、爰をよつく聞給へ、次信上がたへ上りなば國へは討死といつはり、京女のめかけを拵へいくさは半ぶん色あそびと、けらいしのぶの小太郎に談合有しを慥に聞、然れば二世の御ちぎりすてられ給はんせうしさに、そつとないせうをしらせ申爰はひらにとめ給へ、いくさの供には弟のやくふせうながら、はて某がまいらふ迄とまがほに成てぞ語ける、女心のはや姫涙もむねにたもちかね、よくぞお

しらせ忝なやさやうの事を聞からは、すがり付ても引とゞめ西國へやりはせじ、何とぞ次信殿にあはせてたべとなきければ、しからば某はせ申さん何かなしに取付て、めつたむしやうになき給はゞ、いわきをわけぬ次信思ひとまるひつぢやうぞ、たゞなき給へ〳〵とつれてしゆく所に三重「かへりけりかくとはしらず、三郎兵衛氏神のやしろにまふで、ぬき奉りらいはいし、源氏の大將御出陣ねがはくは某を御供にぐせられ、神力を以て高名し、ほまれをのこす雲のうへなむやむらさき明神とかんたん、くだくゆふだすき、ゆふにやさしき女のこゑいがきの內より、次信さま〳〵とよびかくる、詞はつとをどろき何者といへば立出袖をひかへいや申、おきづかひなものではなし、わらはゝ當社のしんしよく行春が娘いくよと申者なるが、御しやてい忠信さまとしのびてあひに相ぼれの、神ぞいとしさかはひさは命もいそのうみをこへ、山をへだてゝ西國へ義經さまの御供を望み給ふと承る、上方は色所心もとなふ思はれて、はぢをいはねばりがたゝずりんきぶかきは生れ付、兄ご樣の御いけんにてとめまして給はらばこんしやうごしやうの御じひと手を合てぞなげきける、次信をりにさいはんとだうり〳〵去ながら、詞忠信けつきさかんにて兄の意見は聞入ず、御身すがつてかきくどきひたすらなひてとめ給へ、たゞなき給へ〳〵、とをしゆる所へ忠信はや姫來りしが、あれこそ兄よ弟よと二人の女をめん〳〵にかくしをき、詞ャア兄じや人忠信かと地だがひにしらぬあいさつはおかしくも又しゆせう也、詞しばらく有て次信、此度我君西國の御供兄弟の內一人との御諚、某罷むかつて高名すべきりうぐはんに、さんけいせし折から汝は何とて來りしぞ、忠信聞ていや〳〵此度は某御供申べし、惣領の身が討死せばたれが家をつぎ申さん、惣じて國をまもるは上たるやく、一きむしやのはたらきは下たる者のやくなれば、せひ忠信が御供とぞ申ける、次信聞もあへずおことが詞も一り有去ながら、そちは若き者なればさねかたまらずむしやなれず、はれいくさおぼつかなし國に殘て父母につかへよ、今度は次信むかはふずよといへば忠信きしよくをそんじ、秋のこのみにこそさねかたまるといふ事あれ、わかきものにてはれいくさがなるまいとや、是せうぶ

はらうせうによるべからず、兄とは生れ給へ共はれいくさはあぶなもの、地色中たゝ某を上せられよとあざわらつて申ける、次信はらにすへかねはれ軍あぶなしとは、詞偖は某おくびやうすべきものと思ふか、チ、おくびやうはめのまへよ次信彌々腹を立おくびやうものゝ弟なれば汝はなをもおくびやうならん、なふはづかしけれど此忠信はおくびやうすべきほだしなし、貴殿は國にほだされ偖こそおくし給ふらめ、やいさうろたへもの、國に心がひかれんとはわがおやは汝もおやもつておなじことはりよ、なふ兄じや人、親におやはかはらねど此忠信は、津戸の三郎がいもとはや姫といふほだしはもたぬといふ、次信はつと思へ共さあらぬかほにて、それはたがこと身におぼへなしといへば忠信ふつとふき出し、地色ひつぢやう覺へ候はぬかと姫の手を引出けるとき次信立てにげんとすはや姫すがり引とゞむ、忠信悦びそりやそこがなき所、なけ〳〵とよばゝれば、西國へはやりませぬやらぬぞやいのとなき給ふ、地色次信せきめんしながらいくよいくとよびければ、する〳〵とはしり出忠信さまわらはをすてゝ西國へゆかんとは、お心もかはりしかどふでもやらぬとなきければ、次信そりやそこがなき所、はや姫なけいく世なけと、兄弟かほに袖おほひはなにうぐひすほとゝぎす、一たびに待すがたかやたゝなけ〳〵と斗也、かゝる所へ父の庄司、君をぐぶし津のと諸共來らるゝ、兄弟おどろき二人の女をかくさんとす、ア、〳〵、しばらくくるしからずとおししづめ、庄司申されけるはやれ子共よ、君を御供仕り是までくる事よの義でなし、兄弟の内一人賴たきとのおほせをかうぶる、地色弓矢のみやうが庄司がおひの悦び也、兄か弟かいづれかうなるをまいらせんと思ふ所に、兄弟義をおもんじてあらそふしんてい庄司が子共はかうの者、ヲ、賴もしし〳〵とうれし涙をながさるゝ、偖汝らはしのびづまをもつたるとや、なさけにまよふはよきつはものゝくせぞたし、ふたりの女郎よめに取子共と思ひなぐさまば、庄司はおひのたのしみ有、此うへは兄弟共に御供申せと有ければ、次信忠信悦びていさむ心のゆゝしさよ、地庄司重て申さるゝは、詞かれら兄弟心はかうにて弓やかきおひ打物取り、馬引よせて打乘りて敵にむかふ其時は、地色千騎萬騎にも

おとらぬ者にて候へ共をさなきより主を持ず奉公の道を存せず、我君へまかせまいらする庄司が心をさつし有て、御めをかけて召つかはれ下さるべし、引まはしてたべはうばいたち、偖汝らも今がおや子のわかれ也父かけうくんをたもつて君にふぢう仕るな、けふよりしては庄司を親と思ふなをやにも主にも君一人、地色一命を奉り身はなきものと心へ、よき敵と見るならばおしならべてむずとくみ、首取てなをあげよじんきをしらぬはゐのしゝむしや、兄は弟をかいほうし弟は兄にそむくなよ引共兄弟つれてひけかく共兄弟つれてかけよ、兄うたせて國もとの父や母が戀しいとて、弟ひとりかへらふと思ふな、弟を討せて兄かへるな老たるおやさへ思ひきる、今をさかりの若むしや共心を殘すな、けふのかどでをまつごときはめいさぎよく討死せば、生て親子のたいめんよりなをしもうれしかるべきと、すゝしげにはいさむれ共さすがらうごの親子のわかれ、さへぎる涙せきあへずかくいふはふびんさゆへ、花のやう成若ものをしねとはさらに思はぬと、御前をも打わすれ兄弟にすがり付しばしきへ入なきぬたり、御大將を初めとし、有あふしよぶし一どうにそでをしぼらぬものはなし、地色しかる所へいるま都のむしや所、あんさゐのだん正太郎氏重あはたゝしくはせさんじ。詞偖も平けの一もん君御はつかうのよし傳へ聞、四國八島にたてこもりいくさの用意まつさいちうと承り候、へんじもはやく御しゆつぢんしかるべく候と大いきついで申けり、はうぐはん聞召ヶ尤さぞあらん、去ながらいく萬騎こもる共物の數とは思はぬなり、いかにだん正、是成者は佐藤庄司が子そく三郎兵衞次信、四郎兵衞忠信といふ兄弟なり、向後心を合此度の合戰いさぎよくはげむべしと、念比にの給へばだん正承り偖は聞及びし御兄弟にてましますな、誠に御きりやうと申あつぱれお侍候、さればいくさはせいの多少によくらず只一心のはげみ第一とかや申候、貴殿達はいまだ不軍にて此度が初めならん、地色かまへて〳〵ふかくばし取給ふなさあれば君迄の御ちじよくぞと人もなげにぞ申ける、地兄弟むつとせきあげしが押しづめ、詞いかにも〳〵御仰のごとく我々兄弟はつゐにいくさとやらんはいかやうにはたらき候もかつて存せず候、しかしなが

ら貴方のさし圖を以てずいぶんはげみ申べし、若又いくさの次第によりさきがけ生どりぶん取高名仕がちにて候間、必御氣にかけられなとおこがましくぞ申ける、彈正きしよくをそんじャ兄弟、きのふけふ侍にまじはりせんぢやうにて高名せんとや、偖も口はちやうほういはれたり〳〵、地よし〳〵いらざる先がけ致さんより、只わがげぢにまかせられ命大事にせられよかし、あしきいけんは申さぬとあざわらつてぞゐたりける、兄弟今はたまりかねヶ、此うへは何が偖、ごへんのげぢにまかすべし御出陣の門出なれば、兵法けいこ仕り御でんじゆにあづからん、詞いざ參さふとたちにてをかけつめかくる、彈正もとびしさり刀をぬかんとしける時津のとなかへわつて入是々、此けいこ某もらひ申さん、さいぜんよりのつめひらきみな君をたいせつに思はるゝゆへにて有、侍たる者はさ程の心ならではせんぢやうへは出がたし、地色ヶ頼もし〳〵と、わざとざけふに取なして、ことゆへなくしづめしはまことにぶんぶの侍なり、地色はうぐはん御らんじ津のとが了簡一々以てしごくせりいかにさう方のもの共かまへていしゆを殘すべからず、此度の出陣は義經が一しやうのはれいくさぞ、地隨分はげめ面々といさみいさんでそれよりも西國さしてはつかう有ル門出めでたし千秋樂萬々、歳とぞ祝ひける

## 第二

地九郎判官義經頼朝卿の代官をかうぶり、一の谷をせめやぶり八島に御ぢんを召れける、奥州勢の彈正太郎氏重は佐藤兄弟にいしゆ有ル中我手の者を役所にあつめ、詞偖も此度源氏の勢我等をはじめ、大名小名れき〳〵多き其うへに、何をふそくに佐藤兄弟召出され爰にては次信、かしこにては忠信と人もなげ成侍だて大將もめがあかず、見聞もむねん千万なり何とぞひけ付ちじよくを取らせ、こゝとはかば打ころせきやつらを壹き當千と御たのみ有うへに、いらざる忠をはげみ犬ばねをつて鷹にとられないくさせんより佐藤兄弟討てとれと、はまべをさして下りしは法にそむきし三重「ふるまひなり、げに思ひても、地中色思ひにあかぬ親子の中いたはしや佐藤庄司、

次信は小ざくらをどし忠信はふぢなはめのよろひをつねづねこのみしとてにはかにをどさせ、しのぶの小太郎同小次郎兄弟に取もたせ、二人が方へをくらるゝ（チクリおやの、「心ぞあはれなるかすみとともに地色中たつか弓八嶋のいそに着けるが、陣所〳〵を見わたせば竹たばらんぐいたきすてし、所々のかゞりもよるはもへひるはきへつゝうすけぶりしほやのけぶり立つゞき方二三里が其間、さかもぎびしく引たれば、佐藤殿の御陣所はいづくととはん便りさへなみ打、ぎはに、くる、人を、地あまかと見ればさもなくて、十六七の小わらはの腰にさひたる山がたな、さすがしなよくをとなびて姉とおぼしきふり袖に、もつもにあはぬ商やわらんぢ賣にはをしかりし、詞しのぶ兄弟是子共わらんぢかはんといへば、いや是は武者わらんぢ、旅人の御用にはたゝずと云、ゝゝぢん所に商するからは、あれに見えたる陣やづゝは誰々としつつらん、あらまし語て聞せよかし、地色やすき間の御事ぞ毎日商致ゆへ、御ぢん所やく所は存じたり教申さん聞給へと、東西南北指ざして念比にこそかたりけれ

## しるしぞろへ

あれ〳〵東のおのへより、南のをかの小松原雪の山かとひたじろの、まくを其まゝふもと川、からほりほつて高やぐらチクリ風に「うずまくしらはたのかげにぐんびやうかぶとをならべ、よろひの袖をつらねしは、御大將の御ほんぢん、其はたもとに打つゝき小チクリだきざゝ、たきいね花うつぼ、なみにうさぎのしるしこそ、かめのかた岡いせするが、とつこにりんぼうつけたるは、ひたちばうかいぞんかねふさはみぎどもえ、ひとつどもへみつどもゑ、五つわちがひ六つかりがねなゝつだうぐを立たるは、大將のひざもとさらずむさしばうべんけいのやくしよとこそはをしへけれ、まへはさかもぎ、きゝとしてせいろうたかくあげさせ、ようじんきびしきいきほひは、さき手の大將さゝき殿、偖たけがきにをりきどうち、印ばかりをたてたるは、はたもとのほろ大將、くまがへのぢんしよなり、川ごへがもの見のこや、松にかけたるたいこがね、あけゆくとこをおどろかす、くもにあさ日の印こそ、いくさ大將はたけ山、

手せいは五千よきとかや偖ひとへびしいれこびし、花びしまつかわ三がいびし、おがさはらの一たうなり、二つ引の大まくは平山のぢんどころ、おもだかはをやまの一るいたつなみはおぐりたう、ほうでうはあとぞなへうぢんさぢんはどひ三うら、ひらきあふぎのはたをなびかせきばのむしや二三十、御ようじんとよばゝつてチクリやくしよ、〳〵を、かけとをるはさたけのなにがし、こやめぐり、はまの手はかまくらせい、偖山の手は都せい、かいだて、もちだて、めん、どり、ばにつきならべかちむしやきばむしやゆづるをしめし、すはといはんころのうち、かけ出んけしきにて、君をじゆごし、給ひけるは、誠にゆゝしう候ひし、比はやよひの、そらながらあきに、さへたる月にほし、ちばのすけのやくしよなり、しげめゆひはゆふきの七郎、きつかうはさはらの十郎チクリ三ぼん、「うちわ、うろこがた、風にもまれて、あがりふぢ、またさがりふぢあげはのてふ、むさしせいさがみせい一二のそなへと聞へける、偖おくがたのぐんびやうは、十万よきを二手にわけ、ぢんしよはおふ手からめ手中にたてたるはたのもん、ゆきおれ竹に村すゞめではのしやうじが二人の子さとうつぎのぶ、忠信は日本ぶさうのつはものと敵も、みかたもかくれなし、其外うら〳〵山々も皆しろたへにしらさぎのむれゐる松見れば、げんじのはたをなびかする、たせいはかぎりしられずと殘らず敎へ語りけり、地色中しのぶ兄弟手を打て偖もよく覺えたり、詞我々は佐藤殿のげにん、父ごの方より御兄弟へ此よろひを參らせらる、とてもの事にあんないしてくれぬかといへば、地色中娘よろこぶ色見えて御案内もいたすべし、詞偖なれ〳〵しう候へ共我々は此あたりのかり人、わしのおと申者の子共成が、源平の兵亂にて狩もかなはず、親をやしなふいとなみに習はぬわらんぢうり候、あはれ殿さまへ御奉公せさせてたべと、いひもあへぬにしのぶ兄弟、是はさいはひ戰場には一人もたよりぞや、吉左右〳〵われ〳〵にまかせよ、好奉公に肝入らんとつれて、陣所に三重「急ぎけり、地色あくれば三月十八日大將軍の御出立、赤地のにしきのひたゝれ紫すそごの御きせなが、あぶみふんばりくらかさにつつ立あがり、詞一院の御使けんびいし五ゐのぜう、源の義經とたから

かに名乗て、よせくる平家の兵船を今や〳〵と待給ふ、地佐藤兵衛次信は父が送りし小櫻をどし、わたがみだかにきながし、けさ迄着せし鎧をばわしのおに打きせて、馬を乗すて御馬のまへに畏る、詞大將御覽じかれはいかにかうにんか、いや是は次信が弟にて候御馬のさきにて討死せさせ申さんため、召つれ候と申せば判官重て、次信が弟は忠信斗と覺へしに心へがたしと宣へば、次信謹でさん候、かれは此へんの狩人わしのおの三郎と申者人と生れし思出に侍にまじはり度由、かれが姉達てなげき候故、色しらぬ東えびすの次信め心ざしにほだされ、兄弟の約諾仕て候、哀御馬の口に召付られ候はゝ有がたく候はんと申上れば、義經ほとんど喜悦有、あつぱれ器量の若者次信はくはほう者あやかりたし、いかにも某召つかひ弓取となすべきが、地色中迚の事のづいでなれば姉はどうぞ成まいかと、たはぶれ給へばわしのおは鎧の袖をかほにあて、はづかしさふなるむしやぶりに敵も太刀をばすてぬべし、地色中あんざいの彈正太郎ごぢんよりつつと出、詞次信殿の御舍弟お近付に成申さん、ヤア、是は此比陣やにてわらんぢうつたるわつぱ成が、是が貴殿の御舍弟かはてよい弟をもたれたり、向後我等もとくひに成わらんぢ誂申べし、軍中に用からは百里も二百里もあゆまるゝ能わらんぢがもとめたし、あたひにはかまはずはうばひの中なれば、五せんは三せんはたゝもとらせてやらふはとにくていにこそ申けれ、次信むつとせきあげしが、ヲやすい事〳〵、去ながら百里二百里はくわらんぢの何の用に入申ム、合點〳〵憶病風に寒け立大敵に追立られ本國へ一とびににげゆくためのわらんぢか、ヲゝやすい事といへば彈正重て是さ、何にもせよ我がすねは人にかはつてたくましゝ、是に合て作つてくれと土足を次信がひざもとにふみ出す、次信太刀に手をかけヵ、見事なだんびらすね、此足にて逃たらば天竺迄も一とびならん地色やうらうほね切取てかたに合て作らせんと、太刀をぬけばだん正もとびしさつてすはとぬく、地どひさゝき畠山辨慶なんど左右にすがり是は不吉としづむれ共はなせはなせとねぢ合所に、地平家の兵船こぎつれてときのこゑをぞ三重「上にける其隙にどし軍も漸をさめしづまりぬ、三人乘たる小船いそ近くこぎよせ大將

ふなばりに立あがり、詞一ほんしきぶ卿葛原の親王九代のこういん能登守のりつね、源氏の大將義經に、見參のしるしに小兵ながら中ざしを參らせん、うけて御覽あるべうもやと大音上てぞ申さるゝ、判官陣頭に駒かけすへ、ゝ、もの〳〵し能登殿の御ゆんぜい關東迄もかくれなし、たゞなかにうけとめて九郎が鎧のさねためしたう存る也地發の程が所望ざうとむねをたゝいて宣へば、地すはや源平兩大將あんぴは發ぞとてきみかたかたづを呑で見る所に、詞小櫻をどしにかげの駒、みかたのぢんを一もんじに乘り分矢をもてにかけふさがり、抑是は出羽の庄司が惣領佐藤三郎兵衞次信とは我事なり、本國を出しより露命は君に奉りかばねは八嶋の魚口にあたふ、能登殿の大矢を某心見仕るんまの帳のくはんどうにうつたへん矢つぼは君と同前と、地つるばしりを三度なで、につこと笑て待かけしはめを驚かす有さまなり、詞敎經仁有大將かんじてさすがはなち得ず、菊王しきつてすゝむれば又げにもやと思はれけん、五人ばりに十五そくからりとつがひ引しぼり、しばしかためてゐいやつと切てはなせば、あやまたず次信がむないたにはぶくらせめてはつしとあたりちけぶりがはつと次信弓矢打つがひ、たつの矢をはなさんひかんと二三度四五度しけれ共魂くらみいきもきれ弓手のあぶみけはなつて、めでへかつぱとおちけるはむざんなりける次弟なり、詞菊王はくびとらんとおり立所に、忠信はるかにはなつ矢が左のひざにすはと立、どうどふすをのとの守船よりとびをり、菊王が上帶つかんで船ぞこへなげ入給へば、大力に打付られみぢんにくだけてゐゝてんげり、是を見て平家の軍兵ふねを乘すて我さきにと、くがへさつと打あがる、兄次信がけうやうと忠信まつさきかけゝれば、わしのお三郎しのぶ兄弟かれらにつゞいて源氏の兵かけちがへ入ちがへもみにもふでぞ三重「戰ひける軍なかばに、むさし坊辨慶くび二三十じゆずつなぎにして引ずり來り、詞討れしものゝ追善にくびじゆずを思ひ立、今少たらざれば奉加に入て給はれと、長刀長のべ切てかゝればよせてはさつと引たりける、ェ、しはい事後生に何がおしいぞと、にぐる敵を追廻しねぢくび打くびどうぎりつゝぬき、むれ高松をたてよこに追返し追もどし打立〳〵きりまはるは

すさまじかりし三重「いきはひなり地なみにたゞよひうせしも有り、人馬にせかれてしするも有かなはじと平家の勢、とびのり〳〵ふねはおきくかば陣所へさつとひく、詞辨慶は立返り討取首をつなぎそへそへ、ヲ、是でこそじゆす一れん地百八ぼんなふつくらんより後生が大事な無あみだ、なむなみだ佛と念佛し本陣さしてかへりしは、あつぱれいだ天ばらもん天、詞せうき大臣しゝ王のあれたる、すがたもかくやらん

## 第三

地夕がすみ八嶋のうらの松くらく、むれゐるかもめ立さはぎとわたるふねのかぢの音、しん〳〵として物さびし、ときのこゑも矢さけ火もいそうつなみに、引かへて、平家うづりかはれるきやうがいは、あすの身のうへおもはせし、あはれもよほすおきつ風、いそ山ざくら、かつちるも、心をくだく、たねと成いと物すごきうらはかな、地色中次信がちうきん義經かんじ思召今一度對面せばや、尋來れと忠信仰をかうぶりて、しのぶ兄弟左右にぐしなく〳〵御陣を出けるが、いざ立わかれ尋ん、としほやのつじよりしゆじうはヲクリ三方へ「こそはわかれけれ、地色中まだ宵やみのしほぐもり浦さびわたる春の夜は、心ぞ秋の夕成すさきのだうの西東、むれ高松の北南奥州の佐藤殿やおはする、次信殿やおはする、君よりの御諚にて、弟の忠信が御むかひに來りしと、しづかによふでとをれ共こたふる者こそなかりけれ、地けさは兄弟つれたりしにこよひはじめてひとりゆく、八嶋のなみのをと迄もきのふにかはる、心地してなふ次信殿兄うへと、よばんとするもこゑたゝずみねにひびくは松の風、外山のかたにかすか成手おひのこゑの聞ゆるを、うれしやそれかとはしりよればむれてともよぶつま千鳥、ばつと立てみだれゆく後の山にこゑするは、しのぶがよばふこだまにて次信とも佐藤共、こたふる物はなかりけり今は力もつき弓のゐるかひなさにかけめぐり、なふ兄うへはおはせぬか次信殿やおはすると、こゑをばかりによび立〳〵又ふししづみなげきけり、地色むざんやな次のぶ精兵にきうじよをゐられ、大事のいた手といひながらしに

もやらずかたわれ船のかたかげにたゞよひふしてゐたりしが、弟のこゑと聞やう〳〵にはひ出忠信かと聞もうれしくはしりよりいまだ存命ましますかとすがりついていだきおこし、ひたいをおさへ御手はいかにととひければ、今を限の次信我身の事はいはずして、詞君はいかゞわたらせ給ふ御身は手をもおはざるか、地色みかたは何程討れしぞとたへゆくいきの下にさへ弓矢取身の一言と傳へ聞だにあはれなり、詞忠信涙をおさへ君も我にも恙なく軍はみかたのせうりなり、御供申せとの仰せなりぐし參らせんといひければ地中ヲ、うれしさいごに君をはいし御前にて死すべきぞつれて參れといふ所へしのぶ兄弟かけ來り、とかうしつらひすさきのだうのやぶれどに、次信をいだきのせさき忠信あとはしのぶがかきそへて、涙にしほれたど〳〵とゆくや、東の三重山のはに月ほの〳〵、地色と出にけりわしのおの三郎は次信が心ざし、ちをこそはわけぬ兄弟とむすぶゆかりのくさのゑん、しがいを取置くびを敵にわたさじと、せきくる涙ももの〵ふの八嶋を尋めぐりしが、面はちにそみうつぶしにふしたる手おひ有、是やはとよく見ればかぶとのしころ草ずり迄、ちりつもりたる櫻花よろひの絲をうづみたり、涙にくもるおぼろ月小ざくらをどしと心へて、是こそは次信殿といだきついて歎しが、地色この世ならぬ御こうおんさいごのお供と存ずれ共、高名もせず相果ば世の人口も候へば、善敵と討死しやがて追付奉らん、今よりは君なくてたれにか見せんわがすがたと、さしぞへぬいてまへがみ切口をしわつてふくませ二世の契りのしるしぞ、と又さめ〴〵となきゐたり地かく共しらで彈正太郎、次信をころしうつぷんをはらさんと、よはにまぎれてありきしが此てい をきつと見て詞ヤアわしのおか君よりの御諚には次信ふか手をおふたるよし、敵にくびをとられ見ぐるしきしにをさせんより、腹切らせくびうつて參れとの御事なり、そこ立のけと太刀ふり上る、わしのお手おひに立おほひァ、しばらく〳〵、ふかでおふたらばかんびやうせよとこそ有べけれ、腹切らせよとは心得ずことに忠信某をさし置、いこんふかき貴殿に仰付られんやうなし、しがいは我々かた付申すといへば、偖は御諚をかろんずるか、いやさ何にもせよ次信がくび御へんにはう

たせぬといふ、ェ、わつぱめこしやくものと、地打てかゝるをうけけれ共さん〳〵におつたて、はしりかへつてくびうち取ゆきかたしらず成にけり、地わしのおつゞいて立返りなむ三ぼう、敵にさへとらせぬ首みかたにとられし口おしさよせめてむくろをはうぶらんと引おこせばこはいかに鎧に付たる櫻花はつとちつて小櫻と見えしはもとのみやま木やくろかわをどしの鎧なり、袖じるしをちぎつて見れば、能登守の郎等つくしの孫六安國としるせり、ム、脩は次信殿にてはなかりしな、先うれしとさして行しほやの、かたへぞ三重」歸りけるすでに夜半の時、申御本陣には義經諸大名れつざ有次信がうはさのみいかゞ成けるふびんやと、大將心をなやまし給ふ所へ佐藤次信を召ぐせしと言上すれば、それこなたへとよせさせ給ひ御ひざを枕とせさせ、脩も〳〵ふびんのもの〵有さまや、いかに次信おことは義經が命にかはり、もはや死せしと思ひしに生がほ見たるうれしさよ、心にかゝる事はなきか國もとへいふ事あらば何事成共申をけ、諸侍はおほけれ共親共子共某を、父の庄司が頼みしゆへ義經もけふ迄は、命二つもつたりしが只今汝にわかれん事のびんなさよ、と御らくるいぞ有がたき、地やゝあつて次のぶまなこをひらき名殘をしげに御かほを見あげ見おろしなみだをながし、忝しといふころもしどろに、もつれかすかなり、地忠信涙にくれてゐたりしが手おひに力をつけんため、詞ヵ、いひかひなし次信殿、權五郎景正は鳥のうみにまなこをいられ、七日が中にたうの矢をゐかへししと承る、それ程こそあらず共などや御前にて返答は宣はぬぞ、地色中忝くも枕もとはさうでんの我君、弓手はちゝぶめでは和田、どひさゝきむさし坊かう申は弟の忠信にて候と、ころをあらげいひければ次信は枕をもたげ、詞何條その景正にをとるべきにあらね共、地中三國にかくれなき、能登守の大矢をたゞなかに請とめ、次信なればこそ物をば申せ、敵みかたのめをさまし、しかも我君の御ひざにてしする次信が何に心ひかされていふ事の有べきぞや御がいぢんの御供して奥州に下向せば、次信こそ我君の御用に立て、源平のめを驚かし死たれば、雪をれ竹のさかさまの世をばなげかせ給ふなと、隨分かうかうをつくせよ人々かた見は日比書をきて守袋に殘

せしぞや、詞やれ忠信、おとこは高きもいやしきも、地中わかきとて人ゆるさず、たんきはみれんのはじめとしれ君に不忠存んるな、はうばい達に慮外すな、野中のかゞせみをづゝしもひとりはたゝぬ世中ぞ、地必人にに、まれな親や妻子もつねゞゝは、ぷつつと思ひ切しかどおんあいのすてがたさ、只今のなつかしさ次信ほどの者なれど兼てのかくごもさいごにはかはるものとは今ぞしる、これもおことが手本のため語りをくと計にて、たへ入まなこの中よりも涙をはら〳〵とながし、いふべき事も是斗いとま申て我君さま、是迄ぞ弟ちゝぶ殿和田殿むさし殿はおはせぬか、忠信にめかけてたべなむや西方みだ如來と、手を合めをふさぎおしむべきはとしのほど、卅三のまばろしも八嶋のいそのなみのあは、きへてはかなく成りにけり忠信わつと取つけば、君をはじめ奉りきんじうしもべとねりに至る迄、一度に是はところを上おしみなげくぞ、だうりなる、判官御涙の下よりも、すてはてし身もながらへてあれば有世にいかなれば、惜まるゝ身はとゞまらぬいかなるゑんにか主と成いかなるものか家人と成、かゝる哀を見る事よ父義朝はしらね共、兄かまくら殿かば殿にわかるゝもかくあらん來世も必主從ぞと、忝くも次信がしがいにすがらせ給ひければ、鬼をあざむく辨慶も、むせ返り〳〵こゑもおしまず、なげきける、地かゝる所へ彈正太郎あはたゞしくかけ來り、詞すは御大事こそ出來候へ、わしのおの三郎は次信にはなれみかたに力なきゆへに、平家へちうしんと存候其しさいは、只今敵のしのびの者某討とめ候所に、かへつて某にてきたいしすでに太刀打に及しを、兎角切ぬけ敵は討とめ候といせんの首をさし出す、わしのおついでしこうすれば人々一度にはらりと立わしのおを取まはす、三郎少もさはがずア、是々御さはぎ候な、まつたく左樣に候はず是あんざい、一疋の馬がくるへば千疋の馬をくるはすとは御へんが事よ、某をざんするのみかしゝたる敵の首取て、しのびの者を討たるとはいかに、彈正聞もあへずしからば汝は敵の首取ル某に、何とて打てかゝりしぞ是二心のせうこといへば、一座の人々わしのおいかにとつめかけける、わしのお涙をはら〳〵とながし申上るもかなしやな、地色中情の兄の次信がゆくゑを尋出るにぞ、心

もみだれちる花にむもれし鎧を次信が小櫻をとしとめもくらみなげきしづみし折から、次信が首うてとの御詮なりとてりふんじんにきり取て歸り候、せうこには其首の口をわつて見給へびんのかみの候べしと、申もあへぬに忠信口をしわつて見てあれば、一ふさのくろかみ有辨慶物もいはずつつと立、詞あんざいがわだがみつかんで、ちくしやうおとりの惡人もんだうするもむやくのさたと木戸の外へかつぱとなげ、地色かまふな忠信かまふなわしのお、先次信を辨慶がゐんだうしてとぶらはんと、けさころも着するまに義經を始め、大名小名殘りなくしがいに手をかけ給ひけり、詞辨慶はじゆずをしもみ汝元來鐵石のごとし、極樂もいや地ごくもいや、しゆらたうにとうりうし、討れてしする平家の勢と冥途にても合戰して、しやかみだのねぶりをさましゆきたいかたへつつとゆけと、地だらに眞言くりかけ〳〵よみかけて、のへにおくれる春の夢さめての後の末世迄、詞ためしまれ成もののぶやと語つたへて殘りける

## 第四

地佐藤庄司の御かたへはなげきをはゞかり、忠信よりわざとたよりもせざりければ、庄司一家の人々は夢にもかくとしり給はず、たいないにてわかれつる次信が一子たんじやうせしを次若と名付、西國のたよりをば明くれまちわび給ひけり、地色中兄弟はつねづねつくり庭をこのみしに、がいぢんせば見すべしとてさま〴〵の木草をうへ、岩ぐみやり水心をつくしいかほのぬまより、ふりよき松を見立させヲクリあまたの、フシ「にんぶ持來る、地色庄司ふうふ二人のよめ庭におりて見給へば、詞松のえだちにそまりあけに成て見えければ、人々氣にかけにんぶを召いかなる事とぞ仰ける、にんぶ承りさん候、いせんはかろく見へし故にんぶふたりして持ければ、ばつくんおもくしてとりおとしさきのぶは何事なく、つぎのぶうたれてきずをかうぶりさん〴〵の事といふ、地はや姫おどろきやあ何といふきがゝりや、いひをせと有ければ、はて何と御聞なさるゝ、此松の木を取おとしさきのぶは何事なく、地色つぎのぶがうたれ候さだめて命はあるまいと、ものがいはせしつじうら

は後にぞ思ひあたりける、地色中人々けうさめかほを見合しばしことばもなかりしが、詞庄司ゑんを取かへヲ、めでたし〳〵、小松は平家の大將次信がうつたるぞ、地色悦びのしゐゑんせんとおくに立入給へ共はや姫なをもおちつかず、しよせんわが兄津戸の三郎殿をたのみ、此子をつれてさいこくへくだらんとたびのいとなみそこ〳〵に、次若をかきいだき兄のいほりに忍びゆきとかくかたらひ兄弟は西こく、がたへと三重「出羽の國

## はやひめ道行

なじみのくもの、あけぼのや、月になごりておもふには、さきにわがつまあとにおや、おもひきるせときらぬせの、中に立たるみをづくし、此身をつくすあはれさよ、されども津のとの三郎はいもうとにちからをそへ、つき若をあひしては、歌めだにさめたら、せなにきつとおひのとの、ねんねこせ〳〵、おとせでおよれのゝへまいろ、のゝへまいろ、ゆくかたいづこ水ぐきの、をかのくずはら風さはぎ、フシチクリうらみつ、わびつ、世中のくはいろかへて、あをば山、ひくまののべにたつしかも、つまこひかねてかいろとなくはしほらしき、男もやうのころものせき、かすみのせきのなゝへやえ、長地うの花まだき藤ちりてはつほとゝぎすはつこゑをしのぶもぢずりたれもみな、きて見よかしの、やつさしくも、うきなへだつるまがきがしま、たらちのさとゝかゑり見る、とまやのをぶり一すぢを、二つわりなるひたちをび、とけてかたりし、むつごとをあだに、なすのゝ春の夢きへつゝ夢の、かよひぢを、我になきそかなこそのせき小チクリ花の、なごりのあさか山、坂が手ひきあふてのぼらりよかのほんや、のぼられじ、のぼればくだるもがみ川、をだへのはしのたへていつ、あふぐま川を江戸フシわたれとや、すぎしまろねのうつりがも、いさしろむくの袖のうら戀ぞ、つもりてみなの川、そもや情のみなかみはどれ〳〵あれつく、つくばねのみねよりおつる、たきつながれはたけなかに、ひゝきをかぜにたゝませて、ひらもとゆひのくろかみ山わけゆく、すゑはむさしのゝ、アゝくさにあこがれつゆにねて、けふ四日五日めになれし、ふじさへ跡にみかはのくにすぎておはりのわたしふね

のりて、はしりて、いせもはや、とまらぬせきのぢざうだう、にあひ〳〵の、つまをさづくる、ちかひくちすなくちなばくちよわがなかの戀は、うつまぬ、手道つち山や、あふみの海ははるふけて、みづの見どりもかげうつる、しげりしみねは八わうし、二十一社のかみどころ、さるはさんわうまさるめでたき、御世のしるしは、松もとの、まつはするどくやなぎははでに小チクリたけは、しなへてふしみのさとチクリ江口、「かんざきにしの宮、歌夕日のにしきからくれなゐにゆくみづを、くゞり〳〵くゞり〳〵、くるくる〳〵、みづくゞる、かげひづたひの、さとをこへ川をこへづゝ山こへて、地谷をこへても一のたにまだ二の谷三のたに、こゝも此たびつはもののひやうごの、津よりをひかせの船はみつばのやしまのうら、浦なみかけてあしふけるしばのいほりにしばしとて、やどもとめてぞやすみける、地色あるじの女とぼそをあけ、詞此所は源平のかつせんいまだおさまらず、たこくの人にはむざと宿は參らせす、何方よりととひければ津戸聞て、我々は出羽の國佐藤がゆかり、いくさの次第兄弟が有樣きかまほしくはるばるのぼり候といへば、地かの女きゝもあへず儕は左樣に候か、みづからは此所のかり人鷲尾の三郎と申者のあねなるが、次信さまの御かげにて弟は源氏のさぶらひと成、御おんをうけしもの候、いくさはゐまだおはらねども平家は大かたほろびしよし、つぎ信さまの御事は能登殿の矢にあたり、はて給ふとやらん聞しかど、女なればせんじやうへ出たる事も候はずくはしくは存せぬなり、いざ弟のわしの尾がぢんしよへともなひぢきにやうすをとひ給へといへば津戸よろこび、しからば御供申さんとはや姫次わかいほりに殘し、かの女と打つれてぢんしよをさしてぞいそぎける

## 次信めいど物語

地いたはしやはや姫次若をかきいだき、あるじの女の物がたりもし誠ならばいかゞせん、あはれいつはりなれかしとたよりまつまのまちどをく、袖も心もくづをれチクリてとろり「〳〵の、あだねぶりフシまくらがうへに、地色こまのあしなみくつわのをとに夢さめて、いほりの内に入來るを見ればつまの次信小

ざくらをどしのものゝぐかため、しほ〳〵として見え給ふ、なふ我つまかといだき付うれし、涙をながせし地色下が、やゝ有て能登守の矢にあたり、御さいごとも聞しゆへいかばかりあんせしが、是はうれしき御事とあれば、詞ヲ、すでにしなんとしけれども、たいないにまきすてし情のたねのみどり子に、地色中心ひかるゝしほ時の夜に三ど日に三ど、軍の隙はなけれどもしばしのいとま給はりて、是迄は來りしとさめ〴〵とぞなき給ふ、地時に山なり谷こたへ、天地六しゆにしんどうして大地もさくるごとくなり、地次若わつとなきければ、いやくるしからず又こそ平家がよせ來る、一いくさしてかけちらさんけんぶつせよやと打出れば、平家はよせくる波のおも大將をはじめとし、一もんのげつけいうんかのごとく、しんゐのほこさきがまんのつるぎ、やいばをそろへあらはれしヲキ地そらのけしきも引かへてやよひなかばの春の色けふのしゆらの敵はたぞ、太夫ヲ、能登守のりつねよ、謐下あらもの〳〵し手なみはしりぬ、ヲキ其一念のうらみのやさき、太夫思ひぞ出る地だんのうらの二人フシ其船いくさ今もまた色ゐんぶにかへる、いきしにのうみ山一どうにしんどうし、太夫五ぢん六よくのかせ立て、ヲキ生死のうみのあつごほり大夫とくればみかた、ヲキむすべば敵二人はしりかゝつてはつしとうつ、うたれてさつとひくしほのまた差くるは五ぎやくの太刀、なをまうしうの山めぐりチクリ〳〵、めぐりて打たちは、大夫地是ごうしやうのりんゐの太刀、ヲキひらいてうつはくとんの太刀、大夫とんでうつはじやけんのたち、ヲキしんよく大夫とんよく二人きづなのたち、きつてもついてもゐてもうつてもたゆまぬは、しんくゐごうの三こうの、こんはめいどにいたれども、大夫はくは此世にとゞまつて、ゐんにひかれものにふれ、又立返るいそのなみ、ヲキ謡舟よりはときのこゑ、大夫くがにはなみのたて、ヲキ月にしらむは大夫つるぎのひかり、ヲキうしほにうつるは、かぶとのほしのかげ、二人水やそら〳〵ゆくも又くものなみの、打あひさしちがふる、ふないくさのかけ引うきしづむとせし程に、はるの夜のなみよりあけて、かたきと見へしはむれゐるかもめ、ときのこゑと聞へしは、うらかぜなりけりたかまつに高松に木隱れて見へず、成にけり、地色つぎのぶいほ

りにはしり入見給ひたるかあの如く、日夜のいくさはしげけれどいもせのちぎり此子をも、あひた見たさに來りしと、つぎ若をひざにいだきのせなみだにくれて見えにけり、地かゝる所へ津戸の三郎、鷲尾兄弟忠信諸共歸らるゝはや姫はしり出なふおそかりし、次信殿も待かねて御入といふ、詞人々をどろき、しゝて程ふる次信是に有とは夢ばし見たるかうつゝかといへば、はてさいぜんより御出にて次若をてうあいしまします、地色先入てあひ給へといひけるにぞ、なをしもふしんはれね共いほりに立入見給へば、なむ三ぼう次信がおもかげは小櫻をどしのものゝぐに次若斗いだき付有しかたちはなかりけり、はや姫是はとすがり付なふ次信殿我つまと、よべど叫べどこゑもなしものゝ、あはれのかぎりなりはや姫涙の隙よりも、くどき給ふぞだうりなる、傳も〳〵みづから程よにあさましき者はなし、かりそめになれ參らせみとせにたらでわかれし事、すぐせいか成むくひぞやせめてをんあいのよしみには今一度次若が我つまかとなどや詞をかけ給はぬ、なふ次信殿〳〵と、かひなきよろひにいだき付ふししづみてぞ、なき給ふ、誠にふるさとの庄司殿かく成給ふとは露しろしめされずし、やがてがいぢんし給はんとあけくれ待わび給はらん、是に付ても過し比つくりにはをきれいにとて、ふりよき松をもとめ給ひ、兄弟が歸りなばちそうにうへをきみすべしとて、あまたの人夫持來りおもくてあやまち仕たりしと、いひし詞の氣にかかり心もとなう思はれて、取あへず上りしがむなしくならせ給ふとの、傳はつげにて有しよな生は死のもといあふはわかれといひながら、思へば〳〵かなしやと、天にあふぎ地にふしてうてい、こがれなき、たまふことはり、せめてあはれなり、忠信涙をとどめかね、詞傳はうつゝにたましゐのさいしをしたひ來り給ふか、などや某にもみへさせ給はぬ兄うへと、よろひにすがりなげくにぞ鷲尾兄弟物にさはがぬ三郎も、小手草ずりに取付て人めも、わかずなきさけぶもあて、られぬ次第なり、地色あんざいの彈正太郎は御前にてちじよくを取、ぶしのまじはりならざるも彌きやつらがなすわざと、一みのあくたう引ぐし跡より付て來りしが、詞とぼそけやぶり無二無三にこみ入ける、心得たりと忠信次若をゐだきと

る、津戸おもてにかけふさがり、ム、汝は聞およびしあんさいな、うれへにしづみしよはみをくひ我々をうたんとは、おのれは命に持あぐんだな、いくさせまいとせいもんは立たれ共おのれをころすはねずみぞと、いふよりはやく引つかみをつぷせ、そば成大石をとつてせばねにどうとをしかけ、ヤアねずみ殿ちう共いへと、地ごくをとしにをしつくれば、五たいくだけてしゝてんげり、なをもすゝむやつばらを四方へばつとおつちらす、人々悦び立かさなり、日比のいこんをさんぜし事まうじやも悦び給ふべし、いざやぼたいをとぶらはんとかねて次信きへしたる、都法然上人も頼み申さんこなたへとて、都路さして上らるゝ源平両家の物がたり、ものゝあはれは多けれどかゝるためしはしやうこにも、又まつだいにも有べからずと皆人、かんずるばかりなり

## 第五

地四海なみしづかにて國もおさまる時津なせ、はやうちの使として源八廣綱院の御所にはせさんじ、詞侭も九郎判官義經朝敵ついたうのゐんぜんをかうぶり、八嶋だんのうらあかまもじがせき、所々の軍に平家の一門ことぐ〳〵く討ほろぼし、宗盛ふしをいけ取天下太平の御代と罷成候條、内侍所印の御箱ことゆへなく、都へ入御なし奉るべきよし謹でそうしける、地色法皇ゑいかんあさからず廣綱に兵衛尉を給はり、源八兵衛と召るれば、卿上うんかく洛中洛外近遠の民百姓、源氏の御代は萬々歳千秋樂とぞ祝ひける、地色侭廣綱は御簾ちかく參りいくさの次第御物語仕れとの給へば廣綱承り、詞せんじもだしがたく候へ共、出羽の國佐藤次信と申者、義經の命にかはり討死仕て候かれがしんぞく新黒谷にて追善の佛事を取まかなひ候ゆへ義經が代參としてゑかう仕べきよし申付て候へば、地色先黒谷へこそと申上れば、尤しゆせうの至なりと御いとま下さるれば、廣綱は悦びの袖にもあまる身のみやうがとたいしゆつ、するこそ三重「面目なれ西のむかへの、地色しうざん新黒谷には次信が追善四十八夜もけちぐはんにてはや姫次若さんけいあれば、らうにやくなん女ぐんじゆしてゑかうをなすぞことはりや、地色かくて法然上人は

御弟子あまた左右にぐし、かうざにあがらせ給ひける源八兵衛廣綱は、義經の名代にて大黒といふ名馬、判官御ひざう有けるを次信度々所望せしが、はうばいのそねみとてついに下し給はず、御しうたんのあまりにやまうじやにおくりひかるゝとはかのめぐりを三べん引てめぐりければ、馬も毛をふせみゝをたれしほれしふせいぞあはれなる、詞しばらく有て津戸の三郎參詣す、蓮生坊座を立てヤア、御ぶんはつのとの三郎か我こそ熊谷入道よ、命あればあふたよな、先此度は力おとして忠信鷲尾などは見へざるか、三郎津戸といへ共さらに返答せず、心しづかにゑかうする、詞蓮生はらを立こりや津戸、法師と思ひ近付をもどする、奉加帳も頼まい見ぬ顔するなひけう者といへば、ヱ、かしましひけうとはわ僧が事よ、ム、此坊主ひけう者とは何事ぞ、詞やれ侍はな、親兄にはなれてもしがいををしのけいくさするをぶしといふ、忠信鷲尾は次信がうれひ有といへ共、いくさおはらねばはかへ參らず、かういふ津戸もしさい有て侍はやめたれ共、あんざいの彈正太郎といふ惡人をうつたるぞあつ盛の情か有、いやむじやうをくはんずるなどゝてぐんちうより出家する、是は何とひけうならずやといへば、蓮生大手をたゝいてかつらかつらとわらひ、こりやぼんぶ、小せうをもつて大せうははかりがたしくそうかふようは太刀も刀もいらばこそ、地色念佛をもつて切はらへば力をもいれず、三がいに敵なくあんやう極樂せかいといふ、めでたき國の大將軍とあふがるゝ、詞是が何とひけう物かといへば、時に法然聞給ひ、津戸のふしん尤々ぶしの心にて一筋にふようをこのまば其通、せはにも申ごとく佛法とかやらの雨は出てきけ、地色ひろく見るにしくはなしぐそう印を見せてうたがひをはれさせん、是に立たる五りんのざう四十九のあな有、是わうじやうのこじつ能きに給へかた〴〵、詞それ人間しゝて四十九日が其間四十九本のくぎをうたる、かるがゆへに念佛壹萬べんにて壹つのあなをふさぎ、四十九萬べんにみつる時五たいくそくしわうじやうす、地色中されば次信がとぶらひも念佛のたじなく、今日迄四拾八萬べんくしやうせり、今壹萬べんとなへなば此あな殘らずふたがるべし、是を見てほつきあれ、南無阿みだ佛とかいひやくあれば、皆念佛を

ぞ三重「申ける地七々四十九萬べん十念を下し給へば、五りんのあなふたがりてゐはいより光さし、五りん四方へわかるゝと見えけるが、次信がおもかげ、五たいにすほんくぎをうたれヲクうつゝの、「ごとくあらはれて、地色をのれとくしやう念佛して打たる釘は一度にぬけ、則往生極樂のかたちを見せてうせければ、さんけいのきせん一どうにあつと、はいする計なり、地色津戸一念ほつきして、有がたし〳〵もはやぎしんははれたりと、もといりふつつと切てすて、詞をしはだぬいて太刀をさか手に取なをす、蓮生をしとゞめ是何事といへば津戸聞て、念佛のくりきにて往生せしを見ながら、しやばくがいにへんじもながらへ何かせん、はらかきやぶり極樂へはやくゆかんといへばヲ、頼もしき大くはつの佛者かな、去ながらいかに念佛申ても、しゆぎやうのこうつもらでは往生は成がたし、いや〳〵一念みだぶつと聞時は十念も一念、百年千年申ても一念が大事、地そこのけといふまゝに弓手のわきよりめでのわき迄引まはす、一門たもん出家達是は〳〵と立さはぐ、詞いや是めでたき往生かなしむなとをししづめ、地サァ蓮生只今ぞと、けつかふざして待けれ共しなんずけしきはなかりけり、詞蓮生そばより何と往生はといへばいやまだしなず、たいないに人間の五ざう六ぷ有ゆへかそれ引出せ、蓮生心へたりと、はらわたをくり出ずん〳〵に切てすて、サァ何と往生はいやまだしなず、ゐまだにくしん有ゆへならんさがして見よ、地色蓮生両手をさし入是爰にこそと、ゐん〳〵たるくれなゐの一つの玉を取出す、人々是はと見るうちに虹のやう成おを引て、玉はこくうに西のそらくもを、かけてぞ三重「とびさりける地是ぞ我一念のあみだ佛、有がたやとはいすれば皆一どうにらいはいす、地法然わらはせ給ひ、いや〳〵誠の佛ならず、人間しやう〳〵の佛性はゐたれ共、ぼんなふに引れ佛心をくらまかす、地色善惡共に一つなれ共、わかるれば二つと成、詞只今去しは衆生心誠の佛は念佛せよ、地なむ阿みだ佛と御手を合せ給ひければ、ふしぎや津戸がたいないより又かゝやくたる玉一つ、れきれきとあらはれ出、うかべるくももむらさきに光りをはなちみへ給ふ、地法然御覧じあれ〳〵誠の佛性よ、いぜんの玉も汝が心あの玉も汝が心、心と云意

識と云、善と成悪と成ごしんのみだ共とかれたり、今念佛のくどくにてゐどのたいは離るれど、いせんに去たる惡心天にこつておほふがゆへに、本心ちうのくもにまよひ、我心我をせむとは見よ〳〵佛法もくせんたり、地ごくも心極樂も心、うたがひの念をさり念佛せよとの給ふ時、黒雲長夜のやみとなつてらいくはでんくはうこくうをくだき、我惡心のたましゐ又立返ると見えけるが、くれなゐの鬼火車を引ゐぎやうの惡鬼くびきをゝし、雲にとゞろき來りしはすさまじ、かりける三重「次第なり地天地にみつるこゑをあげ、詞抑我津戸三郎がしんはくにやどつて年久し、今念佛の光りにやどりをやかれこくうかいに歸す、汝も我我も汝たり此車にせうじて來れ、まかいにゐんだうして佛法をやぶり三がい皆我道に引入れん、來れ〳〵とよばはるはなるいかづちのごとくなり、地色其時ふしぎや玉中に妙成こゑ有て、汝何者ぞ我は是津戸三郎が心に住せし佛性、汝又たいにやどりし衆生心六こん六よくしんゐぼんなふしゆらちうどう、皆是めに見みゝに聞、形にぢうして我佛心をくらませし、惡心かたちをはなれてはすみやかにめつすべし、此佛心ははかりなき命の佛極樂へゐんせうたり、詞其時惡鬼いかりをなし、よし〳〵汝はともかくも形にぢうせし我なれば、津戸がかばねを取てゆかんと、地色みやうくはの車をし出す、時にかの玉とび上り、もへたつほのほの車にうつらせ玉ひける、地惡鬼力を出せ共車はばんじやく、山をおすがごとくにて兩りんきしりてはたらかず、各あつとはいすれば玉の中よりなむあみだ、な無阿みだ佛と十念を下し給ふと見えける時、津戸は極樂往生す玉はひらけてみだ如來、惡鬼は二そん車はれんげ、ほのほはすゞしき雲中に諸菩薩諸佛らいかう有、天人をとめぶがくをそうしなゝたびかへすおみ衣、なづともつきずさゝれいしいはほと成て松たかき、詞今につたふるげんじの御世萬々、歳こそめでたけれ

津戸三郎終

# 義經追善女舞

## 第一

次第矢立の杉のふかみどり、〳〵、心のまとをいのらん抑相州矢たての杉と申は、八幡宮の神木にて、詞一とせあその權のかみが吉れいより、カヽルしゆつぢんのものヽふうはざしの、かぶらをけんじてぶうんをいのるに、一としてせうりをチロシえずといふ事なし、地さるによつて曾我の十郎祐成、同五郎時宗も、しやうぞくあらためけつさいし神木の左右に立わかれ、今はうなふの中ざし神靈なふじゆましまさば、親の敵祐經を討せかんおうあやまたせ給ふなと、くはんねんかたく引しほり手さきあがりに切てはなす、祐成は一の枝時宗は二の枝にはひゞきしてこそ立てけれ、ヲ、有がたし悦ばし、某は一の太刀我等は二の太刀うたがひなしと、手のまひ足も地につかず悦ぶ心ぞ道理なる、地色時に鬼王申樣、詞是に付吉事を承て候、先年衣川にてうせ給ふ判官殿の思ひ人、靜と申白拍子義經なく成給ひて後、かみをそり衣をそめ妙音比丘尼とひじり切て候が、義經の御追善いとなまんため、大磯小磯の白拍子をかたらひ、扇が谷にて一世一度の勸進舞を興行の由、地色今日は御敵、工藤祐經が御申にて鎌倉殿の若君、賴家卿御見物に御出と承る、くつきやうの折でさめれうかゞひ、給へと申けり、地色兄弟彌いさみをなし矢立の杉の御れいげん、はやくもあらはれたりけるかなけふと云けふ年月の、むねをひらかん扇が谷たヽみかけつヽ敵をば、討ばや波のよせ太皷こゑを、しるべに三重「急がるヽ、名も高やぐら、地天にいのりをかけまくも、かしこき御世や太平と二本祝ひに立にけり、傍又ぶたいのけつかうには、紅ゐこぞめのあげまくに錦の水引かゞやきて、女かぶきのさすがまた四本ばしらのふしなしも、うきふしこめてなまめかし、見物老若くんじゆして、色をかさぬる花道のすぐ成御代こそしられけれ、地色傍西の棧敷には鎌倉殿の御嫡男、源の賴家卿御年は十九歲、世取の御きりようあらはれさせ御ゐせい有てたけからず、御座につゞいて梶原源太が嫡子同平五景早、工藤左衞門祐經はおもてなしのていしゆなり、さじきの下前後左右にぐ

ぶの諸侍伺公する、偖又東の棧敷には、若君の御おぢ蒲の冠者範頼忍びて見物ましませし、此蒲殿は頼朝の御弟義經の兄君成けれ共、正直斗を面とし、人の善悪はにきぬきせず一てつむはうの我まゝ故、時のきにあはずしてわづかの所領ををこなはれ、かゝる物見の御遊にも世にひそやか成有様なり、じこくうつれば諸見物はやう初めい〳〵と、口々によばはりしこゑの内よりはやしのやく、ぎしきたゞしう立出て次第〳〵に着座する、地跡より大夫妙音比丘尼、かうぞめの八とくにすりゑの長けん扇たづさへナクリぶたいの「さきに一禮し、色地しばしなりをしづめ、東西〳〵、詞偖憚ながら申上侍ふ、此度自が女風流御見物あられんとて、れき〳〵の御かた様早早地色よりの御出は、袂にあまるあま衣返す〳〵も有難く侍ふ、それに付此度の興行、身命つなぐ玉むすびにも又名をしられんとにもあらず、わらは靜の昔九郎判官殿に思はれ參らせ、長生殿の御情驪山宮のさゞめごと、きへてかひなき水のあは、衣川のわかれより、岸にはなれねなし草、露計の御手向もと、思ふに叶はぬまづしき身、哀御見物のあたひをもつて、佛をもきざみなき人の御ぼだいを吊はんため、面をさらしはづかしのもりてあまれる我涙、不便と思召れよと人めも、わかぬ有様に、見物くんじゆをしなべて皆々、袖をぞしぼりける、や、詞我身のかなしみに御たいくつを忘れたり、偖今日仕るは、妻戀猩猩と申にて候、則大磯の風折舞かなで候、地色とかくおなじみなにはに付、あしき事をもよしなしの御ひいき頼上參らすると、立歸るはしがゝりより大夫さまどうも〳〵と一度にどつとぞほめにける、地かくてうしを取々の、酒に妻よぶ猩々のみだれ心も諸老せぬや、〳〵、藥の名をも菊の水、盃もうかみ出て友にあふぞ嬉しき此友にあふぞうれしき、みきと聞、〳〵地名もことはりや、秋風の、ふけ共〳〵、さらに身にはさむからじ、ことはりや白菊のことはりや、白菊の、きせわたをあたゝめて酒をいざやくまふよ、まれ人も御覽ずらん月、星はくまもなき、所はじんやうの、江の内の酒盛猩々舞をまはふよ、あしのはの笛をふき波のつゞみどうどうち、こゑすみ渡る、浦風の秋のしらべや、殘るらん、地色ぎがくなかばに工藤祐經御棧敷にゐたりしが、ぶたいへつつと飛出

あらふしぎや、詞あのたいこやぐらにあみ笠きたる男二人ぶたいをば見物せず、御座にめをはなさぬはくせ物あれ召とれ畏て、地色やりぶすまをつくり取まはす、詞ア、是々そつじあそばすなと、地色飛でおるるを四方よりかこんだり、祐經立寄見るよりはやくやあ、詞わとのらは曾我兄弟よな、ヲ、合點たり大御所頼朝公は、ごぶんらがために祖父の敵、さるによつて若君をうかゝひ奉るにうたがひなし、偖々命しらずかな是々梶原殿、某とは一門なれば一みと覺さんも迷惑なり、急度せんぎ有て拙者があかをぬいてたべ、景早聞ていやさ、地色せんぎ迄もなし先からめよとひしめければ、兄弟大事のばを見付られ殊に君をねらふといひかけられ、とかうのいひわけにたうわくせられしが、ちやくと祐成ちんじらる、詞いや是各は存もよらぬなんだいを宣ふ物かな、此上はまつすぐにあかし申さん耻しながら聞てたべ、某今日の舞人大いその風折に内々心をかけぬれ共、地色身がひんなればけいせいにも見すかされ、餘りつれなく候故せめて一言の恨申さんため、かくの仕合おりわるく參りあはせて候へば、只々御しやめんかうぶらんと誠しやかにのべらるゝを、風折樂屋にて聞付する〳〵とはしり出、詞やあ御主さまは誰人なれば名もしらずかほもみず、けいせいこそいたせひんな男とてすてはせず、地色思ふと云人達へは品によつてあふてもやる、よしはあふてやらぬとてもむげない返事は一度もせず、大せいの人も聞に身がひんなれば女郎がつれないの、いや風折は戀しらずの情しらずのなんのどゝて、けいせいの一分すたるやうのいひ分さあ、いひわけはやくしや、どうぞ〳〵とこゑふるはし、すんとしたために玉こぼす是戀しりのかんばんかや、地色本より祐成跡かたもなき事なれば、返事ぐどつき見えければ時宗おつとり、詞いや〳〵そなたのしられぬ事もあらん、かぶろを頼み文をさいさいやられしといへば、地色そんならかぶろに尋ぬべしこいよ竹之丞、地色こいよ〳〵とよぶ下よりあいとこたへてはしりくる、兄弟はつと思ひながら是々竹之丞、詞そちに中立頼しを、しらぬといへば我々たちまち發にてころさるゝ、地色たすけふ共ころさふ共、其方次第と有ければ一めもしらぬ竹の丞、有しやうにていかにも〳〵私を、あのさま度々頼ませしか共

惡性のつかひすなと、親方やり手の云付ゆへ文の數
數火にくべて、中にて返事致せしぞやあのさま達に
とがはなし、いとしぼなげにこらへてやらんせと人
の顏色みて取て、しらぬ事をも間にあはせにつこら
しげにいひこなし、人のなんぎをすくひにしかぶろ
のりはつぞかくべつなる、地祐經眼を見出しなまこ
しやく成うそつきめ、をのれがせうこに成べきか只
からめよと云所に、蒲の冠者範頼棧敷をひらりと飛
でおり、しらゑの長刀かいこふで曾我兄弟に立かこ
ひ、祐經景早をはつたとにらみ、びく共せばまつか
うに切付、給はんいきほひなり、地兩人こゑを上は
あ、詞しれた〳〵、曾我兄弟をかたらひ蒲殿の御む
ほんぞ、御ゆだん有地なと云もあへぬに頼家太刀に
御手をかけ、御きしよく、かはりみへ給へば、蒲殿
御覽じから〳〵と笑ひ、偖も〳〵笑止千萬、龍は一
寸より其きざし顯はれ、びんがはかいこの中よりこ
ゑ有とや、ゑこく本朝にもたぐひなき、名大將とよ
ばれ給ふ頼朝の嫡男共覺へず、某むほんの心あらば
かゝる牢人風情をかたらふべきか、誠のむほん人が
しりたくは、是成梶原祐經めよ、くはんしよはたの
しんでゑんせず君子はぎがくをみずといへり、いま
だ平家のよるいしづまらず、又義經が重恩の侍恨を
ふくむも多かるべきに、其用心もなくあのねいじん
めらに心をゆるし、見物遊興に我を忘るゝ愚將にて、
源氏の代をたもたんとは心もとなしおぼつかなし柳
公權がやつこははいうを盜み、張之定がやつこは銀
器をぬすむ、けいはくしゆれんのねいじんを見しら
ざるはかなさよ、詞是某がけふの見物まつたく遊興
にあらず地色天下をたいせつに思ふ故、若か樣の事
もあらばとけいごのために來るなり、かく忠節の某
を、あのうづむし共めがそれ逆心とおどろかせば、
けでんし太刀に手をかけ誰をきらん心ぞや、詞やい
ごくどうの祐經め、をのれは曾我殿原が親の敵たる
故うるさく思ひ、鎌倉殿をねらふとさゝへ誠せわに
いふ、やくびやうの神にて敵を取るべき手だて、地色
云まい〳〵此上にも、曾我兄弟にゆびでもさせ某が
相手ぞと、大長刀をふり廻しびしやもん立に立給ふ
はすさまじ、かりけるいきほひなり、地面目なくも
祐經はわな〳〵〳〵とふるひながら、申わけは候へ
共、詞所もわるし折わるし爰は拙者がおとなしく、

地先あやまりに仕らん、いざさせ給へ我君と御供申立けるが、はるかに行てふり返り、けふ計はあやまる共いひ所でいふてみせんと、いかつらしくいひければ蒲殿腹筋をより、詞やあ犬のにげぼえせず共かへす時にはやく歸れ、地いで〳〵けふのきり狂言に某が劔の舞、一さし舞てかへさんと長刀取のべふり廻し、ぶたいの敷板どう〳〵〳〵、どう〳〵〳〵となるは瀧のみづ、なるは瀧の水車八方花がた手をつくし、儲長事の御たいくつ惣やうさまへのおいとまごひ腰の廻りの御用心、又祐經や梶原はくびのまはりの用心せよ、あぶない〳〵追付〳〵千秋樂と、曾我を祝て和歌を上、名をも上たる高やぐら、太鼓の音はつててんてん、てんがら〳〵てんがら〳〵、てんがら〳〵がら〳〵〳〵〳〵手がら〳〵とほめざる、人こそなかりけれ

## 第二

右大將賴朝卿四海太平に治め給ひ、賞罰正しくましませ共梶原源太景末が嫡子、同く平五景早とて、父にをとらぬねい人の、フシ近習に有こそうたてけれ、地其比備前の國吉備津宮の神職、大藤內といつし者工藤祐經が取次にて、御前に伺公しふしぎの事を言上す、詞さんぬる七日の夜吉備津宮の寶殿めいどうし、風もふかぬに神木の枝たゝかふごとく相うち候故、ねをほらせ見候へば、あやしき箱の候に付早速持參仕候と御前にさし上る、地賴朝御覽じそれ急ぎひらき見よ、畏て人々ふた打はなせばもつたいなや、わら人形に紙しやうぞく、ひたいに源の賴朝と書付むないたふし〳〵つがひ〳〵に白羽の矢をつき立て、朱うるしをもつて八幡の御使、蒲の冠者範賴敬白と書たりけり、武將暫あきれさせ給ひ、儲も〳〵淺ましや、九郎が事はぐんらうにほこり、賴朝が敵と成べきざしを察しちうばつしぬ、又範賴はおさなきより我まゝきずいのいちばりなれ共、心あくまで正直成しがあつぱれ天まのしやうげならんと、仰もあへぬに工藤左衞門すゝみ出、詞御れんしの御中を申はいかゞに候へ共、さんぬる比若君ぎがく御遊覽の折から、蒲殿伊藤が世倅共をかたらはせ給ひ、御棧敷近く取かけ給ふを某梶原事をたゞし候へば、

却てさかねだりにし引取給ひ候、地色彼是存合すれば逆心うたがふ所なし、と申もあへぬに梶原平五いかゝ様天下の御大事は蒲殿ならめと、諸大名の風説今存あたり候と、手をそろへ讒しければ頼朝彌御機嫌そんじ、天命しらずの大悪人幸頼家が軍の手ならひ、梶原祐經付そひて、をしよせ切腹せさせよと、三千餘騎をたびければ、じするに及ばず頼家はうゐんの御門出、よろひにかはる花あやめ蒲の屋形へ三重「をしよする、範頼かくと、地聞給ひ引うけてはあしかりなん野合の軍見事にしすみやかに腹きらんと二百餘騎の手勢をそつし伊豆とさがみの堺川、波の白はたなびかせて、今やをそしと待給ふ、地じこくうつさず三千よき馬けぶりを立をしよせときをどつとぞ上にける、頼家駒を一ぢんにすゝめ、おぢにむかつて弓引は其恐れ有といへ共、父頼朝の命に應じ頼家むかつて候ぞ、御腹召れんにおいては御かいしやく申さんと、聞もあへ給はず蒲殿大音上、詞ヶニ〳〵忠孝有兄弟をほろぼし、しきよくにおもねるやつばらを見しり給はぬ兄頼朝やわぬしらが、地つぶれし眼をきりあけて善悪をしらすべしあれふみちらせ承ると、両ぢんたがひに入ちがひおめきさけんで三重「たゝかひける地範頼ぶさうの手きゝにて、自身のはたらき御家人も火水に成つてふせげ共、三千よきに二百よき皆悉討なされ、今は是迄と腹をきらんとし給ふを、めのと子の刀禰川太郎をしとゞめ、ヱゝいひがひなし無實の御腹めさんとは、口惜き御所存かな御命まつたうし、悪人共が行末を御覧ぜんとはおぼさずやと、様々せいし天のあたへとあるほらにかくし參らせ我身は小高き所にかけあがり、詞清和天皇のこういん蒲の冠者範頼が腹切をみて手本にせよと、地色心もとにつき立十文字にかきやぶり、太刀をくはへはるかのきしへまつさかさまに落ければ、うずまく波のそこはかなくもしがいはしづみうせにけり、地よせてのぐん兵いち同にすはや蒲殿討死ぞと、ゑびらをたゝきかちどきつくりチクリさゞめき「あふてがいぢんある、地色脩も梶原祐經はしんがりにとてひかへしが、さはなく祐經景早に向ひ、範頼は討ほろぼすもはや無念ははらしたり、いざ此度の一禮に大藤内を慰めがてらこよひ大磯へ立越て、曾我兄弟をひいきせし彼かぶろめをひしいでくれん、尤々よ

からんと、くるわ一番くろがうし長が一家の女郎を、三日三夜あげづめとさきへ使をはしらせて、是やけいせいかいぢんといさむ心も三重「なまめかし、なさけのもりの、下道を、地けさふみそむる新客は、誰とかこよひねざゝはら、かぶろの時に竹の丞とよびし其名により竹の、虎御前と改めて思ひよるべの水あげや大吉日の初賣に、一家の女郎打つれてあげ屋揚屋を廻らるゝ、右のあしから、くりだしあゆみ一ゆりゆつて、ふり袖や、えんでんたりしひたいのきは、せんげんたるおひさがり、生れ付にてつくろはずすんとして又、にくげなく、戀の初苗二ばより、松のくらゐのそなはりて三百六十餘ケ日はヲクリお隙「あらじと祝ひける、地爰に曾我の兄弟は、いつぞや芝居にてのなんぎかぶろが詞一つにて、大事の命たすかりし其一禮をと思ひ此所へ來れ共、早其かぶろは虎御前とて、今日よりくがいのつとめ水上とてざゝめけば、兄弟むさ共よりつかずしゆびもがな一ことの、禮をいはんと跡に成先に成付まとへば、つれの女郎やり手などぞめきの者と心得て、きの通らぬうつじんやとくつ〳〵〳〵とぞ笑ひける、地色されし共虎はめかどつよく、曾我殿原を能見知、はてわる口をいはんすな、すいだてする男よりむくなお人がかはいらしよしない事をといひすてゝあげ屋の、内へ入にけり、地祐成是ぞ思ひのたね、弟にさへつつみかねあれ聞たるか時宗、先度といひ今といひ、我をたすくる情の詞、ェ、牢人の身ならずは、一夜買て禮をもいはんにひんせんなれば力なし、こよひは此邊にやすらひ虎がもどりを待請て、せめて詞の禮いはんに先こなたへと兄弟は、茶屋のみせさき御免なれと夕ぐれ、かたにぞ三重「成にける、かゝる所へ、地祐經景早は大藤内をいざないて、あげ屋に入れば出口の茶屋たいこおろせはしり出、水上のだいじんさまのみゆきなるぞとどさめいて、やれお盃よお肴よ先ひいやりと吉野川、くず水などともてはやすさはいこつがらきさんじなり、地待まふけたる事なれば、新造の虎大夫天しよく各座敷にゐながれけり、祐經虎をつくゞみて、偖々見事な新造じやが能々みればかぶろの時、詞竹の丞とやら名をいひて、一めもしらぬ曾我兄弟がひいきし我々にはぢをあたへられしがなふ、世はしれぬ物、御身のひいきめさる

舟我殿は、す牢人にて金銀はすつきり祐成、地又我我はにくまれても、かねが敵の賣物にてけふより三日買きれば、たてふともふせふ共、三日三夜は我々次第なんとていしゆさうではないか、かねの恩の有がたさ、いふにいはれぬ山ぶきの花の露はつ〳〵は、まはれ〳〵とのさばれば、女郎達興さまし座敷しらけてみへにけり、地ていしゆから〳〵とけいはく笑ひし、これやおもしろい旦那のわるがう、ならずの宮の禰ぎ殿へおみきをさゝげて太神宮を、勇めん勇めんいざいさめんとてうし盃持て立、詞大藤内氣色しやいていしゆ、ならずの宮の禰ぎ殿とは某にあてことか、地吉備津宮の大藤内ぞあなどつてけがまくるなと、眼をいらゝげはつたとにらむ、祐經景早打笑ひいや是藤内、詞今時はやるかる口にて誰もいふ事氣にかけらるゝな、これやていしゆ、大藤内は見かけとちがひずんど心のやさ男、我々ちそうせで叶はぬわけあれば、新造の虎殿は大藤内にあはせんといふ、地虎はつと思ひしが、さあらぬ體にて座敷をたつ藤内すがり引留め、詞ヲム某をふらるゝ體是、おとここそげびたり共、地吉備津宮のかぐら錢參錢共に打こみて、つゞけ買をするならばふり度てもふられまい、よしふらばふれ〳〵歌ふるやこづまがいとしなといだきつくをつきこかし、ェゝけたいのわるいとはしり出れば祐經追かけ、なまずいさんな小めらうめと、やにはに取て引もどせば、すは御機嫌がそこねしと亭主やり手立さはぎ、新造の氣みじかなだいじのお客を何事ぞと、たゝみかけてしかれ共虎は少も驚かずはてけたゝましいどうぞいの、詞女郎の客をふるが何とめづらしい事か、地たとひ身あがりし一ごけいせいの身でくらすとても、あのやうなかすねぎに水上は賴はせぬ、大名高家のゐせいにも自由にならぬはけいせいぞや、かうなつた上からはこんりんざいふつてみせふ、あたいま〳〵しけがらはしと涙をながすぞ道理なる、地祐經景早大きにいかり、すいさんなる小めらうめしよせん鎌倉殿へ申上、けいせい町を法度にし、けはひ坂大磯をくろ土にしてくれん、いざ立給へと立んとす虎が親方くるわ中、おどろきかけつけ何分にもおはらのゐるやうに仕らん、まつ平おゆるし下されよとおひざをだいてわびけれ共、詞いつかないかな、我々が同道の人新造づ

れにふらせては、けいせい買の一分たゝずびやくらいきかぬといぢばれば、地長は虎にしがみ付やい爰な女、かぶろの時からかひそだて物いれて仕立るも、をのれらにかゝらんため今から客にえりきらひ、後には何と成べきぞおわびごと申上、御機嫌をなをさぬかさなくははしに引おろし、青のうれんのすまゐじやがとさん〳〵にちやうちやくす、虎はひるまず顔ふり上、傾情ないしわざ哉打てはらだにゐるならば、腹のゐる迄打給へかうしたいぢに成からは、いか成うきめにあふとてもそこはいとはずどう成共、心まかせに、し給へと聲をあげてぞなきゐたる、地長者こらへず取てふみ付情なくも衣裳をはぎ、木綿布子をきせかへて、詞某よくをはなれかやうの體に仕り、はしへおろし候上は御堪忍下されよと、地手をすつてわびければヲ、よいきみ〳〵本望ぞ、傾も長はきさんじ者、是を肴に酒のまんと、どつと笑ふて入けるはむげな「かりけるしわざなり、地はやくるわ中さたすれば、曾我兄弟聞付てはがみをなしゐたりしが、五郎きかぬ男にて命の親の虎成に、はぢかかせては見てゐられじ飛で出るを十郎引留、詞やれまて時宗たんきなり、傾城と云者は何事も親方次第、地金銀持てうけださねばこちのあやまりそつじすな、しづまれ〳〵とせいすれば鬼をあざむく時宗も、金銀と云に行あたり口惜さうにこくうをながめ、ヱ、たつた今此所へ五千兩程ふつたらば、其親方めをはひまはらせ虎がゐせいをあぐべき物、傾々無念と思へ共是非ない袖はふらねば、うでなどふつて歸らんとこぶしをにぎり力足、とがなき草木をふみちらし曾我の里へぞ歸らゝ、虎が心にくもでかく、いもせのはしのわたりぞめ是や戀路の手本ならめと皆人、したふてかよひけり

## 第三

春過てよそのみやまは夏木立、爰は涙の時雨して我身一つの秋の菊、曾我兄弟の母上は晝は夏書し花を摘、夜は法華經をとくじゆして妻の河津のぞうしん佛果、子共が行末げんあんごせんせう大ぼだいとふし拜む、涙の露もくるじゆずの玉につらぬく計なり、地かゝる所に祐成は御前にひざまづき、詞いつ

も〳〵同じ樣の御そせうに候へ共、五郎めが御勘當又地申上度候と、聞もあへず母公いや是なふ祐成、詞きけば御身兄弟は祐經を討んとて、鎌倉殿の若君芝居御遊の御座近く忍び入見とがめられ、既にあやうかりつるを蒲殿の御力、又傾城のかぶろとやらんが情にて命たすかり歸りしとや、地さればこそ自が常々も云ごとく、鎌倉殿は討とても祐經は討れまじ、却て命うしなひてなげきに餘る此母が、思ひに思ひを重ねさせなと兼て云しは爰ならずや、もしもの事の有ならば母は何とか成べきぞ、なげきしねとの心かやァ、情なきしわざやと恨、かこたせ給ふにぞ、地祐成は詞なくさしうつぶいてゐらるれば、地母上重てやれ祐成、惣て他人の恩をしらぬ故親の恩をもしらぬぞとよ、蒲殿は弓取の、道を守てたすけ給へばさも有げな事なれ共、彼傾城のかぶろとやらんはわらべ心にやさしくも、終に見しらぬそち達が難義を我身に引うけて、時の詞の取合命の親とは其かぶろ必あだに思はれな、君傾城はいやしきものと人がおろしめあなどれ共、傾城に筋はなし、いか成貴人高家にても、世に落ぬれば親はらからのためにしづみし浮世の中、明暮御身をそばに置みれ共〳〵見あかずし、少の間もみへざればとやかくやと案ずるに、哀やなかぶろが親のひめごせの子を手ばなして、あひたき時もえあはずしどうかかうかの氣遣は、子を持てこそ思ひしれ身のひん故になでしこの、花とみる子を賣つらめ、我まづしきに引くらべ猶思ひやる親心ァ、淺ましの人界やと聲もおしまずなき給ふ、地女房達も祐成も、實御ことはり至極やと共に、袂をひたしけり、地暫有て母上御守袋より、黃金十兩取出し、是此かねはおことらが爰はの時にとため置しか共、其かぶろとやらんにやりてくれよ、我子の命をたすけし人に何事かおしからん、傾城の身は何事も、心にまかせぬ計にて、かやうの物の入ときく、さもしけれ共と計に、わらはが露の禮ぞとて、品よく云てやられよと、涙ながらにわたさるれば祐成三度いたゞく手も、心もたゆる計悉け涙にむせびながら、是皆我等がためなれば、祐成拜領同前なり、地然らば急ぎ大磯へ參り一禮申歸べしと、おいとま申立ければ母上後を見送りて、傍情なやうつみくすみ川津とて、三ヶの庄のあるじ伊藤の孫の上不便さは、

わづかのこがねを悦びさらば供をもつればこそ、かちやはだしの其有樣、こはそもいか成なれのはてぞと伏まろびてぞなき給ふ、地女房達立よりて、漸すかし慰め參らせおくにいざなひ三重「入さ山、はや日はくれて、地中夕すゞしきさよせみせや、はし女郎の花盛、行かふ者は、旅人や、僧は舟おさ馬かたの、六さま七さま八まんくされ似合、〳〵の、まぶぐるひ、くせつの酒に歸るさは、どろさになりて歌よふたとさ、〳〵、ちどり足して行もあり、もん日を頼みかけられて、つくりやまひのかくれがさみの戀風はかはらねど、位おるればちる花の色もうすきぞ哀なる、地去程に祐成は、大磯の町に入よそながらみてあれば、むざん成哉虎御前せばきつぼねにひとりぬの、班女がねやのとぼし火も涙に、しめるうすげふり、もめん小袖のうらぶれてはだへの「玉もくもるらんぞめきのざう人、地入替り立かはり、大夫おりの名物さま笑ひがほが見ましたい、たばこ一ふくおふるまひちん〳〵ちがひのかり枕、御めんなれと遠慮なくひざに、もたれつ寄そへど、地虎はいなせの詞なく、押うつぶいてなく涙、のべのはな紙打亂れ、しぼるかひこそ、なかりけれ、地祐成みるにたへがたく押わけいらんと思ひしが、いやまて今は人多しとしばしためらひゐる所へ、親方の長者來りやいそなびんぼう神め、詞其身に成てもこりもせずすねはたばつて客せぬ故、あか坂のはたごやへ出女にうるはづなり、代金は只十兩請取てからはわびられじ今が分別所じやが、地思案はなきかといひければ、虎は涙を押へなふそれこそは望なれ、此くるわだにはなれなば出女は僧置ぬ、下のみづしのつとめ成共と思ひ切つたるへんたうを、あか坂のはたご屋聞幸々去ながら、詞大名方のおとまりには、お杓に出お肴に一さしまはねばならざるが、何と扇は成候か長聞て、成程〳〵靜と言名人にならはせて、かたのごとく舞手と云、いやそれとてもみぬ商は申さじ、地然らばまはせて見せ申さん、迚の事につれ舞にと、けはひ坂のしのぶずりがかぶろ少將をやとひにつかはし、いざ〳〵こなたへ〳〵とともなひ、内にぞ三重「入にける、祐成も、地とざまの者に打まぎれじこくうつして見給ふに、虎少將しやうぞくし、扇おつ取立出て、舞は何をか舞申さん長聞て、されば數々有

といへ共一年鎌倉殿、奥野の狩のすまふ舞、よからめといひければ二人はあつとこたへつゝ、かれうびんがの聲を上ヲくりおもし「ろふこそうたひけれ、去間東八ヶ國の諸大名、いざ佐殿を慰んと、奥野の萩のかり衣、夜晝七日の狩くらに、ゐのしゝかのしゝくまむさゝびうさぎ、たぬきよぶこどり、妻こふきじを、妻ごめに、其數あまたかり取て、柏が峠打あがり既にしゆえんぞ初りける、ヲキ地こゝに、伊豆の國の住人三島の入道つつと出、いでや肴にわ殿ばらすまふ一手あそばせや、入道行事に參らんと太夫云よりはやくあいざはの彌七郎、よきなぐさみござんなれどなた成共御出と、さそくをふんで出たりけりヲキ瀧口三郎是を聞、おあひ手にとすゝんだり太夫あいざはは十五歳ヲキ瀧口は十八歳二人いづれもすまふは上手なりつまどりしたる有樣は、雲吹立る山風の松と櫻に音立て、鳥もおどろくごとくにてむすべばはづしなぐればまはり、しばしせうぶはつかざりしが、彌七した手に成とゞろ〳〵〳〵、はしりてうくひざを、つかれて彌七ぞまけたりけるヲキ兄の彌五郎たまりかね、袴のひもとくをそしとて取て引ちぎり、參る〳〵とをどり出あたつてみれば太夫ふんばつて、二人山ををすがごとくなり彌五郎手だれのすまふにて、瀧口がこまたをかきはなじろにひつすへた、だますに手なし大力も、枯木だをしにたをれけり、是をはじめてやぎ下の小六郎、竹の下の孫八左衛門高橋の忠六兵衛、ゐびなの源八よきすまふ、八番迄こそ勝たりけれヲキ殊にすぐれてみへけるは、大場が舍弟俣野の五郎、あら手のすまふ廿一番つゞけがちしてくはうげんはきいかめしげに立たりけり太夫爰に伊豆の國のはたがしら、河津の三郎祐重につくき俣野がくはうげんかな、小がいな押折すつべき物をと二人白きたづな、ふたすぢよつてしつかとをさめ、ゆらり〳〵と出たる姿さしかたにしてほねたかく、かしらちいさくすそふとくぼさつなり成大男、うしろのおりぼねほその下へさしこみて、たけは五尺八分年は三十二歳なり、ヲキ俣野は三十一歳みきはまさりの大力二人やつところゐかけ手あひをしむんずとくんであてつ、あてられつ一あせさつとながるゝふせい、いはほにたてるから松の、露ふきみだすにことならず龍ぎんずれば雲おこり虎うそぶけば風さ

はぐ、四つ手くづし五つばね六つもぢりと云物に、七はなれ八はなれはなるゝ所を河津の三郎、右のかいなをつつとのべ、俣野がまへぼろかいつかみ、腰も手づなもきれてのけとかみのわげめに地をすらせ、ひつくりかへしてめより高くくるり〳〵ともつてまはり、かた手をはなしてまつさかさまに大地へどうど投ければ、さつてもおすまふとつたり河津、坂東一の地まれ物ぞやと上下どつとぞほめにける、それより各いとまごひ宿所〳〵に歸さるゝ、太夫河津の三郎祐重は、せんだん藤の弓をしにぎりさびつきげの馬にのり、ふし木あく所のきらひなくさしくれてこそゐゆ ませけれヲキ爰に工藤が郎等に、近江八幡二人の者待まふけたる事なれは、一のまぶしをやりすごし、しゐの木三本おひたるかげより大のとがり矢ひようとゐる太夫思ひもよらではせ通る、二人河津がくらの山がたゐけづりむかぶきのきゝはをば、前へくつとゐとをせ共智者はまどはず、勇者はおそれず河津弓と矢うちつがひ、四方をきつと見まはせ共きう所のいた手にしやうねみだれ、あぶみけはなしかつぱとふしかりばの露ときへうせて、今世がたりの手向草とんせう、ぼだいと舞にけり、地祐成聞に心みだれ人めもわかずはしり入、なふなつかしの物語やと虎少將にいだき付こゑもおしまずなき給ふ、地長者一家おどろき酒のえひか氣ちがひか何者成ぞとのゝめけば、詞いや是なふさはぎ給ふなさらさら左樣の者ならず、しづまつて聞てたべ、地我は只今の物語の河津がせがれ、曾我の十郎と云者成が、虎にふかき恩有故ほうぜんために來りしに、思ひもよらぬ物語父なつかしさのあまりぞや、又子細有て黃金十兩虎がために持參せし、これを長者へ參らせん、虎に不便をくはへてたべと取出し渡さるれば、長は本より赤阪の者俗て左樣に候か我々も古へは御家のお百姓、御恩蒙る事なれば此上は御らう〳〵の御いとなみ仕らん、追付目出度御出生を松のはの末長く、さかゆく君を祝はんと奥にいざなひ參らする人の情も、世のわざも戀のあふせも親孝行のまことからこそ誠あれとて聞入、道にぞ入にける

## 第四

折節のうつりかはれる物毎に、哀はあれど玉祭る秋こそまされと夕間暮、地蒲の冠者範頼卿、刀禰川太郎が忠節にて虎口の難をたすかり、しばし蟄居し給ひしが、はやうら盆にも成しかば、父義朝のなき玉を祭らはなんど思召、手づからとぼす燈籠の、影だに忍ぶ世の中のさがみ寺へと参らるゝ、地かゝる所に向ふより牢人と覺しきが、是も燈籠たづさへてすりちがひ行あみ笠の、めとめを合せや、詞範頼様、何曾我の五郎か偖々久しや、して是は何方へぞ、さん候某母が勘當つよく屋敷へもよせぬ故、大磯の虎けはひ坂の少將二人がかいほうにて、宿も定めず候が、今日は虎少將河津が墓へ参らんにつれ立くれよと申せ共、女の道づれ人のめ立もいかゞと存さきへ参候、君には何方への御越にて候ぞ、ヲヽ、地我も同じ日陰草、はかなき父の玉祭かくはしつらひ出たれ共、諸大名の廟参にかくれ忍ぶも心うし、無心ながら其方へ此燈籠を言傳ん、義朝のみはかへ備へ水をもさゝげ給はれや、互に同じるらうながら心身をなす捨られそ潜龍は三冬に蟄して陽來を待天の道明かなり、互に本意を達せんは只今の事成ぞ、たとひ祐經大名にもせよ、此範よりがかたうどせば、百萬騎に一人と祐成へも傳へてたべ、爰は途中まづはさらば、さらばと、わかれ三重

## 水向參道行

ゆくみづの、ゐせきによどむ、なみまくら、くゝりまくらになげしまだ、うたてやゆふてほどけては、又ゆひなをすくろかみの、つとめのならひいつの世の、いか成松かしぐれそめけん諺さきのよのむくひまで思ひ、やるこそかなしけれ、うきなにもかへ身にかへて、いとしきまぶのいとしぼや、人のうはさのやえむぐら、フシわけてわけよき色ごのみ、おんと情と、ふたえまはりの二つおび、思ひまはせば外ならず、そが兄弟の父上こそ我々ためにはしうとごよ、いざや御はかに參らんと、虎御前少將はぼたんやはすのとうろうを、心計のたむけ草、フシチクリもつ手に「じゆずの、露そへて夕日にかさを、かたぶくる、かぶろの時にみしまゝの、くるわのそとをけふみれば、我身も戀のすごもりにはをのす鳥もひろ〳〵とのべめづらしき花むしろ、しいてねたましをみなへ

し、女すがたにむらさきの、ぼうしとみせてはつぎきやう、ひゆりしらんの色々にたぐひなじみの、袂ゆかしきそが菊を。一もとおれば、さつとこぼるゝ露の、もろさよめのまへに、むじやうをつげてあだしのゝ、けぶりがくまになくからす、いるのあらそふこゑきけば、ちくしやうだうと白雲の、入さの山の山おろし、ヲクリふもとの、松の共ずれに、えだとえだとが、さら〳〵〳〵はた〳〵てうど、うつをとは、是ぞさながらしゆら道と、あをぎてきけば水こひどりの、ヲクリ雨待がほのもろごゑや、がき道則まのあたり、我人道の八くのやみ、てらし給へと里々に、なきたまよばふ、むかひ小ヲクリ火は心、々にいづこのたれか、父をよぶらん、母をこふかやいとし、妻子や、まねくらん、是をみかれを、聞からによその哀にけふもまた、命の内とくれにけりあすもや、聞ん入相のかねて頼ん頼めや頼め、女人成佛うたがひなき妙法蓮花の此とうろう、もみぢが枝に、かけをけば、よるの錦ととりまある、光につれてをろかやな、火を取にくる、虫の数々ヲクリかうろぎ、いとどはた〳〵や、いなばのいなごきり〳〵す、りん〳〵、ちろりん〳〵〳〵、ちろりとなく松虫の、こゑもすゞしきすゞ虫や、ながれの身には聞もうきなのくつわ虫、空おそろしき秋げしき、雲おさまつて天たかく、銀河は空によこたはり、妻まつほしの、中空に、西へちろり、東へ小ヲクリちろり〳〵〳〵、と夜半のあげはの、はつとたつては又飛あつまりをのれと、をのが夢さますうつゝ、共なし、まぼろしの、うきよなりけり様々よ、市しばはこぶしづのめが、露の高がや押分る、歌みのも笠もぬれしほたれてそれや皆、たれも戀にあかでなあゆむ、身ぶりのいたづらや、あだな立けせ秋ぎりの、ふかき思ひの中村の、里もほのかにみへそめて、心のたづな心のこま、むちをあげたる半月にあれと、ゆびさすはちすばのうらぼんまつるてらのなや、法のしんによの玉手箱はこねの山にぞ三重「着給ふいでや其比、地工藤祐經が嫡子犬坊丸、箱根の別當を師と頼みけふ入學の吉日と、さも花やかに取つくろひ寺入とこそざゝめきけれ、地師の御坊への送り物、兒法師下々へも近江の小藤太八幡の三郎取つくろひ披露する、大勢の兄でしよりはるか上座に犬坊丸、机にかゝれば同宿共僧も御

きよう御りはつと、からすをさざとへつらふ所へ、時宗はべうさんの道にて此由を聞、直に別當の御坊へ行お禮申とつつと入奥へつか〳〵通るを見て、兒法師しゐ〳〵、といへ共きかぬかほにてようしやなく、犬坊が上座にひざをまくつてどつかとなをる、近江八幡氣色をそんじなふ〳〵、詞是は工藤左衞門殿の御息犬坊殿、今日始てお寺入成に近比そつじしさられよといへ共、地時宗少もをくせず二人が前へ兩足かぬつと出し、ひざ打たゝきから〳〵と笑ひ、詞ヲヽ犬坊にもせよ猿坊にもせよ、學問所にては兄でし程上座をしめる作法なり、別當の弟子中に此はなより此座敷に先輩は一人もなし、地たつた今寺入して、れき〳〵の兄でしの上になをるはすいさんぞ、某は師の御坊よりとつとむつかしい兄でし也、手習にぶせいならば此、にぎりこぶしにて、めはなのあひを五十も百もはつて〳〵はりまはし、其上に机をおはせ相弟子中のげたざうりをなをさする、ぐつ共いへばたゝきだすしやうねに入てしつかとならへと、はつたとにらみ付けるはにが〳〵、敷こそ見えにけれ、地近江八幡聞づらくはてにが口いひな兄でし哉、詞尤師弟同門の禮儀有といへ共、金銀祿をおもくすれば大勢の兄でしをもこへ、大事の祕密祕傳を傳受するためし有、是、此方の若殿はけふ始ての寺入なれ共、各の十年にもえせぬ禮物を只一度にいる成が、何と此まねは成まいのといへば、五郎ゐだけ高に成やれ、君子は禮をおもんじ小人は祿をおもんず、知行兼備の別當の坊が、なんぞわづかの包金にめがくれ道をそりやくにし給ふべきか、地いろはのいの字もしらぬわつぱ、上座はすいさんはやくしされときめ付る、犬坊も色をかへいや、いはすればいふ事と、何といろはのいの字もしらでとは我をあなどつていふか、ヲヽ詞よいがてん多分おしりやるまい、但しつたらば聞て見よういで其いろはは何と何と、はて子細らしいいはいろはろははは此外に何が有、時宗腹筋をよつてされば此こそ〳〵、ヲヽしらぬも道理、いで汝が樣な初心坊には兄でしがひにといてきかせん、やい、それなる愚人共もよつくきけ、惣ていろはといふ事をろそかに思ふかや、地抑文字は義理の器にして其中に妙義をふくむ、先いの字をのぶるに左の點は念をおこし、筆を立る所かろく

して、すめるが故に天也陽也父なり、右の點は心をとゞめて筆を押へ、納る所をもくしてにごるが故に、是地也陰也母也、兩點の間諸法實相中道にして、萬物其中に生ず、天竺にては阿字第一命ととき、あうんの二字を一切有情の父母とす、されば天竺は能生の國なれば、本佛堅固の阿字を以て最初とし、諸の文字に阿字をそなへて五音有、あいうゑを是なり、倭國は所生の國なれば、根本を取ていの字をあらはす、是によつて平聲はたゞしくしてをだやかなり、上聲ははげしうしてあがり、去聲はすんで遠く入聲はなをうしてつゞまれり、是皆いろはのいの字より事おこり、語默作々起居動靜、三世生死いろはに過たるさとりなし、是をもしらぬ愚蒙のやから、兄でしより上座のくはたいとこぶしふり上犬坊が、ひたいあたまのようしやなくたゝみかけ打ければ、近江八幡太刀おつ取のがさじとひしめく所へ別當あはてて走り出、詞眞平〳〵御免なされよきやつはかくれもなき一てつもの、愚僧つとめの內ならずば何しに座敷へとをすべき、とかく御腹ゐせにはいか程成共某をうつて御堪忍下されよと、地手を合わび給へば五郎聞もあへずいや〳〵、詞弟子のかはりに師匠を打する事や有、師のためにこそ命はすつれ、打て腹だにゐるならば某こそ相手よ、いか程戈共うてや〳〵犬坊と、顏さし出せば犬坊扇をもつてうつ所を、ひつはづひて小がいなとり四五間、取てなげにけり、近江八幡いかりをなし、みぢんになさんと飛かゝる二人がうでぼねむづと取、すしなやつめがうでだてと大地へどうどひしぎ付、ほね〳〵ふし〳〵みぢんにくだけ五臟六腑一つになれ、ゑい〳〵と踏つくれば目口より血をはき終にむなしく成てげり、地さあらじやうらいの玉祭はすのは笠にあさがらづえ、白瓜馬にそうめんたづな祝ふてさしさば一さしと、二人のしがいをかたに引かけ佛殿、客殿くりはかはらかけまはつてかつぱとすて、どつと笑ふて歸りける是ぞ手がらのいろはにほへと又、祐經が桑花のはな、ちりぬるをわか今の事頼もし、きみよし、心地よしとて聞人、ゑみをぞふくみける

## 第五

建久三年初秋三五の月寒く、さながら物のかなしきにいたはしや河津の後家、祐成をいざなひ池の汀に聖靈棚をしつらひて、百味百菓の甘味をつくしフシゐますがごとく祭らるゝ、地蒲の冠者範頼も、父義朝義平朝長義經の尊靈を、同じく祭らせ給ひければ虎御前少將も、顔打かくしよそながら水を手向るかうチクリ有殊勝にも亦哀なり地母上涙ながらヤア祐成、憚乍範頼樣にも聞召させ給はれ、かばかりふかき親子の中、いかなれば五郎め母がけうくん聞入ず、をのれが身には勘當うけ母には腹を立させて、か樣の時にも出合ねば、我くるしさは外に成不孝のつみにしづまんかと、不便にもまたにくしみに、むねをいたむもかれめ故ヲ、情なの我子やとむせかへりてぞなき給ふ、地蒲殿御涙ながら實尤なり去ながら、わかき者の事なれば先勘當をゆるされて、自然に異見申されよ、我も共々なだめんにと宣へば母上は、偖有難き御仰やと言すて袖をぞしぼらるゝ、地角てたそがれ過る比池の蓮に風落て、こぼるゝ露かなき玉か、けしたる姿よろ〳〵と、杖にすがり、よろぼひ出、あらゑんぶ戀しや、中有に迷ふまうしうの、しんゐの霧にとぢられて、わたりもやらぬみつせ川、河津がゆうれい成けるは、なつかしの人々やとをしうつぶいてぞなきゐたる、地老母夢の心地してこはそも誠か夢成かとはしりよらんとし給ふを、祐成しばしとをさへ、ばうこんゆうれいなどゝ申はめには見へても取べきかたちなし、皆一心のてんだう御そば近く寄給はゞ、忽きへうせ給はんに、只是より何にても御詞をかはされよ、母はせきくる涙ををさへ偖淺ましや河津殿、一しうき第三年年忌〳〵御命日、朝晩つとむる經だらに殘るかたなき吊ひに、何にか念がひかされてかくは迷ひ給ふぞとふしまろびてぞ、なげかるゝヲ、年月の施佛供養更にをろかはなけれ共、一つのさはり有故に、佛事法事もあだと成よみぢの闇と成はとある、してなふ其さはりとはいか成事にて候ぞ、我身に叶ふ事ならば命にかへてもかなへ申さんヲ、嬉しくもいはるゝ物哉、いやさはりとて外になし、しゝても迷ふ子故の闇、いづれをろかはなけれ共五郎はをと子の事なれば、草葉の蔭でもかはゆきに、御身の勘當ふかき故方々るらうの身と成て、なげきかなしむ五郎が涙我さきの世の

迷ひとなる、急ぎ勘當ゆるされよ忽我ほ成佛ぞ、若さもなくは無間にしづみ惡鬼のほこにつらぬかれん、うかめふ共しづめふ共、おことの心一つぞやァ、情なやくるしやとさもたへ難きこは色に、母はきも消心もきへなふ五郎を勘當致せしはさら〳〵にくうてふけうせず、不便の上に不便さの餘りての事ぞかし、何が偖此上は勘當ゆるし申さんに、迷ひの雲を打拂ひ成佛し給へ河津殿、やれ祐成五郎をはやくよびよせよ、勘當をゆるさんにフシはや〳〵と宣へば、地嬉しさ餘り時宗は、父ゆうれいにばけたる事はつたと忘れはしりより、偖有難き御赦免やと母上にすがりつく、母は興さめこはいかにと、おどろかせ給ひけり、地其時蒲殿宣ふは尤なり去ながら、詞内々五郎某に樣々に賴む故、祐成に心を合かくはたばかり申せしぞ、地一つは河津追善のため、又範賴にめんじてもとかくゆるしてたべとあれば、何が偖女とても一度いひしことのはを、いかでかたがへ申べきもはやゆるすぞ五郎やれめづらしやなつかしや、ちぶさをくはへし箱王が加程に成人しけるかや、河津殿のゆうれいと見ちがへたるもことはりぞや、よく

も〳〵父上におもざしの似たるかなと、鬼の樣成時宗がゆうれい出立をそのまゝに、ひざに引よせなでさすりいとしのものやとあいし給ふ、をや子の中こそわりなけれ、祐成あまりのうれしさにまづ〳〵こなたへ〳〵と、をの〳〵ともなひまいらせて屋かたのうちへ三重「いり給ふかゝる所へ地梶原平五景早工藤左衞門祐經駒をはやめ大をんあげ、詞やあ〳〵曾我兄弟の者共をのれらは先年蒲の冠者範賴へよしなきむほんをすゝめ、何心なき蒲殿是非なくはらをきられし事、是汝等がゆへなるに其わきまへもなく、をのれらゆう〳〵とながらふる段ひけうしごくのいぬ侍、もつては蒲殿の敵同前くびうつて參れとの賴朝公の仰なり、地異義におよはゝからめ取しばりくびをはぬべきぞと、みだれいらんとしける時蒲殿つつと出、詞やあめづらしや兩人、何といふぞ範賴がはらをきりたるゆへ、兄弟をも討んとや、やれ、汝等ごときがざんげんにて切腹をする此範賴にあらず、某かやうにながらふるからは兄弟討せんやうはなし、地いで〳〵兄賴朝の御前へ汝等をつれて出、始終の段々言上せん我について來れやと、かけ出給

へば兩人はつとおどろきぎやうてんし、儲は御堅固にわたらせ給ひめでたう候此段を、急ぎ君へ申上よろこばせ奉らんと、駒ひつ返し行所をどつこへやらじと時宗はゆうれい姿其儘にて大手をひろげおつかくる、祐成も追掛祐經が乘馬の、尾づゝを取て引ければ屏風だをしにかつぱとふす、されども祐成高ももを馬にしたゝかけつけられ、暫しよろぼふ其隙に祐經馬に飛乘てにげて行衞はなかりけり、かゝつし所へ時宗は梶原をのせながら、おなじ馬の三づにのりむちをうつて乘かへす、範頼御覽じいしくもしたりでかしたり、さは去ながら祐經めを取にがせしはゐなさよ、明年の夏鎌倉殿ふじのみかりのさたあれば、和田ちゝぶに内通しかりばにて討すべし、先手合にしやつめを討せめての事にはらをゐよ、忝しと祐成は馬上成梶原が、腰のつがひをざんぶときつて落る所を時宗、飛かゝつてむな板をさしとをし〳〵、我きたりけるしにしやうぞく梶原がしがいにきせ、追付祐經送るべしめいどの先立せよやとてフシどつと笑ふぞ心地よき、地母上は御覽じて、身より出せる科なれ共、玉祭の折からむやくのせつしやうあさましし、もはやしんゐをふり捨て、聖靈に御ゐかうせん實尤と各、御經どくじゆのこゑの中くまなき月の雲間より、河津の姿かげのごとくあらはれ給ふぞ三重「有難き、妙なるこゑにて、地それ本有圓成の都には、苦としてすつべきもなく集として取べきなし、怨と成親と成皆是かりのたはぶれぞや、汝等孝心ふかき故我天上の果をうけて、月宮殿の壽仙と生る猶も現世の武名をまもり、未來は一蓮並座の契りをなさんと宣ふみこゑもしら雲に、法の月輪天子とあらはれ光明四方にちりしきみ、香のかほりにつゝまれ雲がくれゆく天津空、忉利天上有頂天梵天宮迄ものゝふの、ほまれをあげし曾我兄弟親孝行のとくゆうは、くはうだいむへんむりやうのゐき文武はんじやう萬々歳の秋津國をさまる、御代こそめでたけれ

右此本者依小子之懇望附秘密音節自遂校合令開版者也　加賀掾

二條通寺町西へ入町　山本九兵衞刊

義經追善女舞終

# 愛染明王影向松

加賀掾直正本

## 上之巻

序五大明王の中に愛染明王と申奉るは赤色御尊體御手にちゑの弓をたづさへ、方便の矢にて惡魔をがうぶくし給ふ、去によつて信心渇仰の輩は、衆人愛敬の幸を蒙ることかはけるに火の付より利生なをしすみやかなり、こゝに美濃國の大守右京大夫政もとの嫡子、修理ノ佐政方とてナロシはつめきりやう、すぐれば、地つぎめの參內つゝがなく都に月日を重ぬる中、御父政元御重病とて飛脚かさなり來りければ、取物も取あへず本國に下向あれ共、御しにめにさへあひ給はねばかひなきうれひにしづみ給ふ、御繼母妙壽院と申せしは、邪智とんよくの惡心にて、詞もとがるけんさき船家中かぢをぞ取かねける、げにやくはういん、地矢のごとく程なくけふは政元の、御忌日成と施行を引せ給ひければ、きかつに及ぶひん者乞食我も「〳〵とあつまりて施行を受て、歸る跡へをくればせに盲目一人杖に任せ尋ね來り、詞御施行を下さるゝおやかたは是かじや迄と、地色政方御繼母おはす共しらでさぐり足して行んとす、繼母見給ひ偖ぞんざいな盲人いかにめかいが見へぬとて、大かたさとりもあらふことあれ追さげよ長て中間若等立かゝり、さがりませいと追さぐる國家老治郎大夫ことぐ〳〵敷こゑを上、詞やあ推參也土めくらめ、目くらならばめくらの樣に遠慮して尋るはづ、必定をのれはまいすめくらのこじきめくらめ、ぬすみかはきに來りつらんやい、忝くもこれに渡らせ給ふは當國の御あるじ、右京大夫政元公の御後室、同く御代繼政方公定て聞も及びつらん、御後室は御繼母たれ共道の道たるお心から、大殿御死去なされてもなさぬ中のへだてなく、御先腹の政方公へ御かとくをゆづらせられ、親殿御追善の其爲にかく御施行をひかるゝ所に、地色お國の粟をはみながら指當つたる慮外者、あれたゝきだせ打だせとあらゝかにいふしたより、なを聲々にのゝしればうろ〳〵、きよろ〳〵どうてんしおゆるしなされ下されよとわな〳〵、ふるひゐたりけり地色政かたしばしとしづめ給ひ、アゝさなせそ〳〵かれが眼見へばこそ、慮外者共いふべけ

れ、官者と讐者とを見てはなれたりといへ共、必立てはいすといへり、其上父の御めい日何程のことあればとて、ゆるして施行をとらせかへすべしと、大様成詞を聞継母面をやはらげて、儕も〳〵若殿はよふこそ心付ました、親殿に別れてより、月共日共ひとり大じに思ふそなたの前へ、慮外者と思ひし故御めい日にあられもない、よしないつみを作りたりアアゆるさせ給へなむあみだ、なむあみだ佛みだ佛と念佛をあくびにかみまぜてフシけもないかほしてゐられける、そこの心ぞ恐ろしき、地色盲目かうべを地に付、儕有がたや忝や誠に申も恐れながら、殿さまの御一言なくは打擲の上追出されんに、御ゆるされかうぶる段さすが國の守さまにてましますよな、此厚恩いくばくぞ申上るも憚有、詞それに付恐ながら御そせうの願ひ候、迚のことに殿さまのおじきのお詞今一ど承りたく候と、地色みゝをそばだて目をしかむ政方は聞給ひ、盲目が訴訟とは心へがたし、遠慮なく申せよと聞もあへずよこ手を打てアハ、詞儕こそ儕こそよく聞たり必御油斷なされまじ、御大じは殿さまの御命只今あやうく渡らせ給ふと、いはせもあへず治部大夫引とらへねぢまはし、是は〳〵土めくらめ、いかに御きげんよきとていふことゝいはぬこと有、一國一城の御主なればゐし達御前に相つめ晝夜御きげん伺ふ物が、をのれづらが考にていま〳〵敷も御命、あやうきなどゝぬかいたは此口からはきだいたか、ゑらぼね引さきくれんずと引よすれば政方やれまて〳〵治部大夫、地色しばし〳〵とをさへ給ひ、其方がいふ通其理り有といひながら、しごうのじこく今をもしらず、又死はうしろより來る共いふ、たとへ賤き盲目とていか成妙術をかはゐつらん、傳聞周宣といつし相人は、魏の文帝の五音を聞て宮中にたうじやうあらんことをしるとかや、先しづまれとせいし給ひいかに盲人、して某が一命今日をはるとのかんがへ近比以て心へね共、よく〳〵覺のあればこそかくはなれ切て申と聞へし、いさゝかも遠慮なくまつすぐに申べし、道理たゞ敷しごくにをいては其かくごも有物ぞ、すみやかに申せやとおどろく氣色し給はねば、盲目しばらくかうべをさげ仰下され候通いさい畏て、詞元來私其いせんは去しさい候て、もろこしの師曠が秘密を傳へ、恐らく五音の占

にをいては千に一ッもあやまること、過言には候へ共先日本に覺ござなく候、然れば今御城下にて身命をつなぎ候へば、いか成ことにあふとても殿さまの御大じしりのがしにはいたしがたし、地色夫人の五音といつは、宮南角徵羽に別れ四季の調子其時をあやまたず、地先青陽の春つげ鳥、うそひばり百千鳥秋の山邊のさをしかや、ちぐさにすだく虫のね迄も、皆五調子にもれざるなり、今はきさらぎ半なれば、尤双調たるべきに、殿の御調子平調なれば奇怪といふも餘り有、太極うごいて兩儀となり、兩儀わかれて四象と成、四象則八卦を生ず八卦體用の、妙をわかち五行生克の道理をさつし、吉凶悔吝の機をあきらむ双調は春の調子、五行に取ては木性とす平調は秋の調子、五行に取ては金性なり、用の金體木を克することあたかも、磐石をもつてかひごをくだくにことならず、されば秋吹西の風、金風と名付つゝ此風にあたる時、青々たる木葉も皆ことぐ〳〵くきばみおつ、あらしの前の、紅葉たきゞをおほて火にむかひ、石をいだいて深淵にのぞみ、薄氷をふむためしよりなをあやうきは殿さまの、只今の御命、あつはれゆゝしき御大じ、地色若又考そんじなば、此めくらめがいき首をごくもんの木にさらさるべし御うらみとは存ぜずと詞を、はなつて申ける、地色八々目とめを見合さほど覺有ことならば、うたがひをはらす爲はうがくを慥にうらなへ盲人しばらく頭をめぐらし、詞殿さまの御座所まさしく東方震の位、克する物は兌の卦なり、然れば今のわざはひは必西方酉のかたより來るべしと、地色いひもあへぬに高へいのかげよりも、人かげ見へて打しゆりけん政方のひだりの袂を前へぐつと打つらぬき、うしろの松をゆるがせてうらかく計立ッたりけり、それくせ者よあますなと侍達追取まく、こはかなはじとあらはれ出政方に討てかゝるゑたりやおふと治部大夫、鑓引さげ立かゝりなんの、くもなくつきたをす、地色政方立より見給へば六十餘りの老人なり、詞して先をのれ何者なれば、いか成いこん有てかくらうぜきをはたらくぞまつすぐにはくでうせよ、地色いはずは此まゝくつうをかけせめさいなむがといからるれば、老人くるしきいきのしたより、詞ヲヽ、御ふしんは斷なり、かくしそんぜしことなればつゝみてゐきも候はず、拙

者はおばを打からせし牢人者にて候が、よく故に御家の御家老、民部之丞友春に深く頼まれ、殿政方公をこゝにかくれ討てくれよほうびは望に任せんと、武士の有まいことながら、地牢人の悲しさに、やすやすと頼まれて、ゐたる所のしゆりけん只一打と存せし所を、盲目にさゝへられ本望とげぬのみ成か、くつうを受ん無念さに殘らず白状仕る、只御じひに片時も早く首をはねられ給はれ、はやとく〳〵といふいきも、くるしげそふにきれはてゝついにむなしく成にけり、地色政かたほとんどあぐませ給ひしばし物をもの給はねば、繼母つゝと出僭おろかや政方殿なんのしあんの入ことぞ、御ゝ身の命つゝがなき上惡人はみんぶの丞めとしれたれば、歸りしだいみんぶめをさかばり付にをこなひて、はらをゐさせ給ふべし僭々はらの立中にも、なふ有がたやたふとやな、若殿けがのあらざるも今日の佛の守りめと、一ッは盲目がはたらきァ、嬉しやでかしたりでかされたり、命の親のそなたをば此まゝをかふ樣はなし、治部大夫いか樣共はからへと有けるにぞ、誠にめでたふをさまりしも盲目がうらかた故、いかゞ仕り候はんと謹てうかゞへば政方もうなづかせ給ひ、成程〳〵尤さいぜんよりさは思ひし、此度忠義のほうびとしてけんぎやうしよくになすべきぞ、又みんぶめは歸りしだいいか樣共はからはん、先々盲目いたはれとておくをさして入給へば、はつと計に一家中ことぶき歸る其賑ひ、盲目は小つふりふり、あふぎてんがうはな小歌一夜、けんぎやう三重「これならん、すでに其夜も、地なかば過草木もねいる丑の時、政かたのうら門に山伏三人わら人形をよりに立、へいはく追取ふり立〳〵、じゆずさら〳〵とをしもんで、口つつしみうやまつて申それ、ひみつの法といつぱ、△そのかみびるしやなせそんよりこんがうさつたにふぞく有、○りうみやうりうち大くはうちけいくは大師にてん〳〵し△僭、我朝の弘法大し聖寶そんしにさうぜう有、○つゞいて某傳來せり、口眼にもろもろの、けがれを見て心にもろ〳〵のけがれを見ず、みゝにもろ〳〵のけがれを聞はなに、もろ〳〵のけがれをかぎ乃至身口意に、もろ〳〵のけがれをふれて心に、もろ〳〵のけがれをふれず、○我身則△六根清淨、六根清淨、口なるが故にフシ五ざうの神、フ

シやすらかなり、此故に人は皆、天地の神靈にひとしかるが故に、なす所の願ひとして成ぜずといふことなし、○東方に降三世、△南方にぐんだりやしや、○西方に大いとく△北ッはう、○金剛夜叉口中央に、大日大聖、不動明王うや〳〵しく、地明王の尊體を、はいし奉るに外にはふんぬのさうをげんじ、火燒三昧に入給ひて衆生の諸願をかなへしめ、フシ内には大慈の益ふかし、今まさに、祈る所のいしゆいかんとなれば、右京太夫政方が一命たちまち、だんぜつしせしめ給へ尤、ひごうのめいといへ共小をばつして大をすくふのいひなり、あふぎ願くは、ばん天帝釋けんらうちじん我日のもとの神かぜや、いせに兩宮太神宮、王土ちんごのいなり○ぎをん、△御靈八所○松ノ尾口北野、今宮の太神宮○上がも△下がも口きぶねの社惣じて一万八千餘座諸佛菩薩大龍王、明王部天どうぶをおどろかし奉る、此へいはくにのりうつりたちまちきずいを見せしめ給へと鈴錫杖をふりならし、さんごをなげ付とつこをもつてなづきをわり、てうじやうよりあゆるちをごまの油にしぼりこめ、せめかけ〳〵祈りしは身のけよだちて三重すさまじしフシ去程に、政方の執權みんぶの丞友はるは、とんちふゆうの侍成が常々繼母治部大夫、政方失ひ申さんとたくむ心を見透して、他國へは行ずしてよにだに入ばこゝかしこ、やかたの邊りをはいくはいす、こよひも來り見てあればあんにたがはずてうぶくの祈りぞと見るより早く、偖こそ〳〵こいつらが繼母治部に賴れて我君じゆそと覺たりをのれらあごをくひちがへさせん、幸やみのまつたゞ中をゑぐてのけんとさし足し、そろり〳〵と忍びよりたんせいをこらし祈りゐる、うしろより左右方の下僧をけこかし先達をかしこへどうどつきたをし、人がたをつ取立たりしは思ひがけなき所なり、地色三人きもをつぶし漸におきあがる、され共先達おくせぬかほにてやあをのれ何者なれば、詞忝くも此祈りは國主政方公より仰付られ、當年國民あんをんの爲ひそかに大法をしゆするの所に、地色さまたぐる汝ばくだい成らうぜき者、明王の御ばつをかりぶり立所にくげんを受、未來永々世々生々うかむこと有まじきぞ、我はじひの此身なれば見のがしにもせんずれ共、法力ふしぎと政方公の御みゝにたつしなば、うきめを見んがふびん也定

て本氣でよもあらじ、足本のあかきうちとう〳〵、歸れといかりける、地色友はるにつことわらひげにげに是は斷也、八をすくふ行法かりにも惡心あらふ樣なし去ながら、詞只今お手前いはるゝは國主政方より仰付られ、安民の祈りと申されし共此人がたには、修理大夫政方てうぶく祈る物也、願主後室妙壽院と書印、つがひ〳〵ふし〳〵にまなく大釘打立ても、民安全の祈りと成やいや是なふお山伏、偖々おしゆせう千萬わるい者に出あふたと思へど、地色ふていけてをかぬうぬめら主人のやかたでせんさくせん、さあゆめまいすら行まいかとねめ付れば、山伏共あらはれてはもともこもどふした物で有ふぞとたうわくの內よりも、何とぞ此ばをすりぬけんとけんのつばもと打ならし、ェ、めんどうやかしましい、をのれ名をなのらぬからはにせ者に極つたり、詞其上殿をてうぶくなどゝ夢にもしらぬむじつをいひかけ、行法をさまたぐるよ、聞へた〳〵、必定をのれは此比せけんにはいくはいする盜人に極つたり、此御やかたのざい寶を心がけ來る所を此行者に見付られ、顯れんせつなさに我々を討とらんたくみ、いふまい〳〵三世も見ぬく某あたゝかにくはふかいな、地色待てゐよ政方公の御前にてあかさゝらさのうちをあけんと、足ばやににげんとするを引たふしどうぼねをしつかとふむ、二人の下僧はかなはじと跡をも見ずしてにげうせたり、サア同行なしの山伏殿、出某が名をなのりきをおちつかせ申べし、こともおろかや政方公代々の家老職、みんぶの丞友はるとは此はな成が見しつたか、ふどうのばちは待遠なれば先此方のはぢをあたへん、人をのろへば身をのろふ覺る樣にしてくれんと、兩足にてせぼねの上をどう〳〵〳〵とさん〳〵に力に任せふみ付れば、詞なふいたや悲しやもふしにまする〳〵、少しおゆるめ下さりませ有樣に申ませふ、私は角行と申山伏にて候が、誠は御繼母治部殿に賴まれ政方公をてふぶくせば、當國中のきたうのぶん汝一人にいひ付んとくれ〳〵よぎなふお賴み故、せひなくか樣に祈れ共もつたいないなんのお前さま、上にはか樣に見せかけても心中には殿さまの、地色御ぶうん長久成樣にとたんせいをこらし候、おじひにおたすけ下されば有がたく候はんと、ふるひわなゝくかほばせの、ひげに涙はつたひけり、

地色友はるはらすぢをよつて打わらひ、詞なふ角行とやらはいせんとかはりいかふ詞がなをり申た、ヤイ、をのれかゝる大じを頼まるゝ程の者が、いや殿さまはのろひませぬ御長久の祈りなどゝ、此ごに成ちんじたとてそふむまふくはふ地色かいのしかしたつときお僧故、繼母治部さへほうびと有を相家老のよそめもならず、よいは〳〵屋敷へ引、白狀の其上にてほうびには親重代三尺二寸の大だちを、おなかへ進上いたすべしいざ立あがれと引おこし、先にをし立だんな殿お先へござれ御供には、千ぎにあたる友はると引立行こそ三重「こゝちよき、其夜も明て友はるは何心なきていにもてなし、下部に長持になはせ政方の御門内へ入、げんくはんさしてあがる所へついに見なれぬやさ女、白人ならぬだてふぜいすんとすがほのすき通り、情こめたる目のはりや、友はるを見てはつと計おもはゆげに口おほひ、かたがげにいらんとすかたいみんぶも戀風に、うつかりひよんとさむけ立覺ずこしをとんと打、ヲ、いた、ほに誰さまじややらぶし付な、人が見たらばたゞとはいはじ、大じの所をむごらしいそうしてみればおれ程な、かたい者は此かいに又とひとりござるまいと、いはんせいでもこはいかほといふたら又しからんしよ、それにゆるりとござんせといらんとするを引とゞめ、詞是は〳〵めいわくなふお女郎、いかに我かほかたいとて心がどふで有ふやら、人にはそふて見よ何やらには地色乘ても見いであたまからいやでござるといはぬ計のあしらいは、しんぞ聞へぬ此上は情らしいお色事を、せひきかいでは此袖をいつかな〳〵とすがりつく、地色かの女ほゝゑみて、偖も嬉しい御詞偽りにもせよ忝さ、身に餘り候ぞや去ながら、みづからは此お屋敷へけふはじめてのみやづかへ、なじみなければどなたにもうね〳〵しうおはづかし、しかし今見て今のこと誠共思はれず、しんじつ定か定ならば迚ものことに御名をもあかし聞させ下されかし、一じゆのかげ一がのながれえんとえんとが行あふたら、後にはめつたに打とけていとしいやらなんじややら、それから跡はいはひでもしれたことよとをしかくす、かほのもみぢの色もよき、女にうつつをぬかりなき民部もこしをどうどぬかし、偖通つたるあいさついかにも名をばきかすべし、某こそお

家の執權民部友はるといふ者じやが、けふはじめてと聞なればさぞうゐ〳〵しう思はれふ、いはるゝごとく他生のえんかたい男かやはらかなる、其手をほほへととらんとするをふりはなし飛かゝり、みんぶか刀ひんぬいて親のかたきのがさじと打てかゝるをひつぱづし、小がひなとつて引ふせ、詞こりやなんじやなんとする、やあら心へぬ某を親のかたきと打かくるがまつたく以て覺なし、先汝はいづくの身の者討れし親の名は何といふぞ、人たがひと見へて有まつすぐにしさいをかたれ、樣子により便にもなつてやるまいものでもなし、刀もぎ取引おこし、しりめにかけて立たりけるみんぶが心ぞ道理なる、地色彼女はがみをなし偖もむねんやさいぜんより、心にそまぬたはぶれをさま〴〵にいふたるも、親のかたきはみんぶぞと名をきいたばかりにて、かほをしらねば何とぞしめにさへかゝらば一たちに、討てすてんとおもひしにはやまつてしそんぜし、なせにひきやうなみんぶの丞覺ないと僞るぞや、そちがたくみで殺されし眞砂のぐんじが獨娘玉千代とはみづから也、いとほしや父上いぜんはよし有人なれ共、樣子有て牢人のまづしき故にせんかたなく、わらはをおさなき時なりも都九條の色里に、うきふししげきかはたけの流れの末も、今しばし、年さへあかばと思ふ內どふしたえんやらおもしろい、かはゆい人につ いなじみたとひ此身はどふならふと、此男ならではと互にかはす枕の上ね物語に宣ふは、我はもとみのの者、急なこと故國へ行、やがて迎をのぼさんとわかるゝ跡のかなしさは、立てもゐてもとゞしても有にあられずくるわをば、ひそかに忍びぬけ出て美濃と聞しを便にて此所へにげ下、跡では親かたはらを立身請の手付取置しに、定て親との仕組ならん、娘をかへすか身請のかね思ふ樣に立ぬならば、預ふの斷ふのと色々せがむ其中へ、そなたが京へのぼり合せかふした咄しを聞付てよいこと有と我父を、ひそかによびよせぐめんごかしに侍は互のこと、金は殘らず立てやらふが命にかけて無心有、かふ〳〵したることゝいへばひだうとしれど父上の賴まれ給ふも世の中の、なふ子にまよふ親心わしがかはゆき餘りにや、眞砂のぐんじ共いふ武士がそちが樣成惡人に賴まれ、殿さまに手むかひも皆是みづから故なれば、

神さま達の御ばちにて親をか様に討するむくひ、不孝共天ばつ共人にうらみはなけれ共、此世さへ浅ましきながれの身さへ有物を、しゝてはなをし親殺し重ねかさなるむくひのつみかへすべくも、かなしけれ、なれ共金故合點して討れ給ふことなれば、親のかたきとなのりつゝ打かけふ様もなし、せめて父のきやうやうにだましうちに一たちうらみ、その跡はどふならふと迚もながらへあられぬ命、とは思へ共かく成ても義理もなんぎも親かたにも、親にもかへて殿さま共しらでほれたがいんぐはぞや、せめて一め政方さまにあふておかほを見た跡のみらいはうきめにあひたい見たい、なふ殿さまとやらいふ政さまにと身をなげ、こがれ泣ゐたる、みんぶ一々聞とゞけ、殿とのわけは尤ながらしゝうをしらぬことなれば、いひわけにたうわくしいきをつめてゐる所へ、後室治部を先に立政方諸共侍共、ばら〳〵とはしり出友はるを取かこみ治部大夫大をん上、詞のがれぬのかれぬみんぶの丞先達てあくじの段こと〴〵く聞たる上、やかたへあがる道筋にてあの女が跡より來り、みんぶさまにあはせて下んせ頼むはいナアとばつとした口上に、きちがひそふなと家來共つぎのけて過行を、無理に取付頼むを聞ば殿さまつぎめの御のぼりに、都九條の御慰におなじみと聞ゆれば、實はお年わかな故かふしたことも有べきが、みんぶさまと尋る上は偖は汝がすゝめにて御通ひと聞へたり、しかしながら此女こゝ迄來るふびんさに、さき程より今參りの奉公人といひなしおくへはいれずだまして聞ば、殿さま故にくるわをば身請もいやとぬけ出るよし、其金故に女が親娘は見へず金はなし、しなねばならぬを汝聞付かれを頼み、施行のまぎれに殿さまをしゆりけんにて討參らせ、御後室我々をもすでに討する其ぐめん、され共君の御ぶうんつよくうらかた故に御命つゝがなくわたらせ給ふ、こりやみんぶ、むほんをたくむみやうばつにてかくあらはるゝ其上は、地色たいほうのごとくのこぎり引ちまたにかばねをはり付にせん、色の太こを持たる故むほんの太こも上手なり、ついでにしゆらの太こをもたせんかくごせよやとあざわらふ、地色され共みんぶへんじもせず少しもさはがぬかほを見て、繼母身をもみきばをかみ偖大それたおそろしい、主を殺し國をとら

ふと思ふ程成こんじやう故、あらはれてもまぢ〳〵とあの大たんなつらはいの、そふしてかりにも政方の、情深ふせられし女けいせいにもせよ行々は、うちなふて玉のこしどふした身にならふもしらず、さある時は主人のつまじやに其親を討せぬれば、重ね重ねの大ざい人しかもあの子が親達もいせんはよし有人と聞、戀故とはいひながら親を討せ女心に、定て無念成べきに主殺しの國法に、はやをこなへややれしばれ、ェ、まだるいとせりかくるどしやう、ぼねこそ恐しき、政方心も心ならずさぞみやぎのが我故に、かく成しと思へばふびんもまさりくる、涙はむねにせまりながらさすがそふ共いはれはせず、さあらぬていにてやいみんぶの丞、詞あつぱれをのれはばくだい成不忠の者、代々家老職も勤る身が、何のふそくにか樣成あくじを思ひ立ぬるぞ、地色其上かく迄かこまれてもまだのがれんと思ふかや、日比の心と引かへみれん成こんじやうぼね、をのれが樣成人でなし見るも中々けがらはし、ャアみやぎの、かくあらんとは思はずして女心のはかなさは、我をしたひて來りしな、ことに親迄殺されし、心の内いか計さつしやられてふびんなり、かふしらけた上なれば、もはやつゝまん樣もなし親のぐんじがてきせしも、そちとかふしたわけなりとしらで金故頼まれて、討んとせしはしれたこと、子を思ふ親心それはうき世のならひわきまへなきは尤なり、其かはりにはみんぶめを其方にとらする間、いか樣共きりさいなみ本意をとげよ、母じや人治部が手前へ云わけもめんぼくなやとせきめん有こそ道理なれ、地色友はるゐなをり手をつかね、詞憚りながら是は御詫共覺奉らず、御先祖より御家老職つゝがなく相勤、しゆみより高き御恩をかうぶり何しにやしんを存べき、いか樣是には樣子あらんいやなふ治部大夫、して殿を某がいし申せとみやぎのとやらんが親を頼み、御命あやうき所をつげしらせ奉る、其ちうしんは御家中にて誰人にて候ぞ、相役のよしみには御しらせに預りたし、地色いふても大じのせんぎのばひとへに頼み申と有治部大夫るせ笑ひやれ、天しる地しる我しる人しる地色惡事千里かべにみゝ石の物いふ世のならひ、され共是は我君の正直正路にまします故、諸神諸佛の御めぐみにて行衞もしらぬ盲目なれ共、殿の五音

五調子を考御命をたすけ奉りし故、則けんぎやうになし下されおそばさらずのおきに入、しよせん干も萬もいらぬ急ぎけんぎやうを召出し、あかさくらさの埒明んとチクリ頓て「かくとぞ、いひ入ける、盲目いぜんにかはるしやうぞくもつたいつけて畏る、みんぶつく〳〵打詠め、詞ム、うらかたのおめい人と聞けんぎやうの御坊とは御じぶんよな、拙者はみんぶ友はるとて殿のお口まねをもいたす者かなはざる御用故此比他出いたしいまだ御めにもかゝらぬが、先以此たびは殿さまの御身の上といはせもはてずけん校ハア、さればこそ〳〵、誰にもせよ此てうしはお國を望む野心有、皆々御ゆだんあそばすなと、地色聞より早く侍共一どにはらりと取まくを、友はる手を上ア、詞さはぐまい〳〵、もふ此様に聞だされあらそふても埒明ず、偖々せひもない此こと計がしれふとはうろたへた神も中々しられぬはづ成を、お座頭殿にかんがへられ思ひの外のちじよくを取、何かくさふぞ某がいんぐは物語をさんげいたさふ、さんげにはぢうざいもめつすと云御ふせうながら下にゐて、拙者がたくみの様子をお聞下されいやかはつたことでもござらぬ、御ぞんぢの通りみやぎのが親はしゆりけんの上手と聞、殿さまをなんのくもなふしてやつて其殘りの衆はたゞ取様にころそふとは思ふたれ共、地色治部殿が生てござらば其様にむま〳〵共成まいことじや、先治部殿を此ごとく、まつ此様におれが様に先へしまふてのけふと思へど、殿様を手にかけては世上へ主殺しと、いはるゝ聞へもわるしこゝらがしあん所と思ひ、角行といふ山伏を當國中のきたうじやにせんと、まひないにて深く頼み夜も丑みつに及ぶ比、ひそかにうらの御門にをいてじゆそてうぶくの人がた、大釘をまなく打込うらには願主ア、誰やらな詞ハア誰やらとしてあつたが、忘れまいことを失念した、ヤア後室さまではなかつたぞ、但覺はござりませぬか、はて此咄しは後室さま治部大夫殿のいかふ御みゝにさはるそふな、まつたくそふではござりませぬ、ヲ、それよ〳〵、地色此みんぶ友はると書付、せめかけ〳〵祈る所へ何者かまつさい中へつゝと出、角行坊をひつとらへせんぎの上のせうこにせんと、かの山伏ではなかつた某と人がたを、あのひつの中にをし入こゝ迄ぢさん致せしが、詞後

室さま治部大夫殿、なんと跡先のつまらぬ咄しにくいたくみでござりませぬか、地色どふでのがれぬ某が命いつそ打あけしまはんと、飛かゝつてけんぎやうをひざの下にどうどしく、是はといふて治部大夫繼母をはじめあはつるをみんぶの丞大音あげ詞ア、是うろたへまい〳〵、友はるがいんぐは咄しはしまひがどこへこけふもしれ申さず、ゆつくりとお聞なされ先一ばんがけんぎやう殿、お手前も桂馬坊といふお山伏それ故うらかたがお上手にて、友はるを各と相談にて、殺しさへすりや殿さまは手間いらずと思召ふが、此様なこしらへごとを、せんぎして顯はすこと又友はる山伏がいへのでんじゆ、見ゆる眼をふさぎめくらのまねがすきならば、地色つい手にながふふさがせんサア、眼玉をるぐるぞとずばとぬくたち風に、詞あいた〳〵めをあきました去とては御尤御尤、まつひらおゆるし下さるべし有様に申ませふ、ねはよく故に後室さま治部大夫殿に頼まれて、か様か様にするならばほうびは望に任せんと有詞にあまへ付あがり、地色かくの仕合其段はまつぴら御めんかうぶりて、命をお助け下されば有がたく存べし、ヱ、おれがこふ有ふと思ふてゐた、なんのいんぐはにきうくつな此めをふさいでゐたじや迄、命が有てのよくづく是、あきました〳〵とめを見だし、てぞふるひける、詞友はるから〳〵と打笑ひ、いや〳〵それ計ではゆるされず、其ぬかすのにきよごんなくばあのひつの中におる、地色をのれがつれの角行めをよび出せさなくばどうばらをるぐるがと、たち取なをせばア、それではあぶなふて申されませぬよびだしませいでなんと致しませふ、ヱ、きてんのない是々角行、此じゆつないのが聞へぬか早ふ出てお心をなだめ、命をたすけてくれよとて涙をながしひゝるにぞ、地色角行もふるひ〳〵おづ〳〵くびをさし出しけいま坊そこにゐるか、是程きうくつなめにあふてもそちがうきめを見た時は、こふしてゐるも友はるさまのおかげ、どふぞおわびを申上て見よ僧もかはいやじゆつなかろ、こゝは極楽〳〵となを〳〵すくみゐたりける、地色政かた今はこらへかねはしりよつて角行人がた共に引出し見給へば、友はるがいひしに違はず人がたに大釘打、政かたてうぶくと書付願主後室と有上はあらそふてもあらそはれじ、ヱ、聞へぬと

思ひながら御継母はまゝしき中こふしたたくみなされふ共、よい年をして治部大夫めともゞ〳〵にをどりあひ、みんぶをも討せんとはよくも〳〵したるよな、をのれ手討にと思へ共いふても親へのふけう、只今はたすくるぞとふ〳〵やかたをでゝうせふ、かく有べきとはしらずしてさいぜんより友春に、さまざまのあつかうざう言ゆるしてくれよとくやみながらいかりの涙はせきあへず、地色友はるかうべをさげこはもつたいなき御ぢやうや候、此身はみぢんにはたかれふ共君つゝがなくわたらせ給へば此上のよろこびなし詞サア御継母治部大夫もはやのがるゝ所なし、一々くびをならぶるぞかくごせよといひければ、二人かほを見合せくつ〳〵とふきいだし、やいすつぽり共、なるほど是はがねてより後室と我ふうふに成、うぬらさへころしぬれば、國のかみはそれがしと、家中は殘らず一味させたゝとる樣に思ひし所にさすが民部友春程有ッて、よふ見出した其れいに政かたをのれがいけくびうち、地色國の主はそれがしぞ夫うちとれ長て侍共、おばなのごとくぬきつるゝ政方友はる是迄と、主從二人立ならびむかふ大せい引うけて命かぎりに三重「たゝかひけるてきはたせいの、地ことなれば政方うす手といひながら、其かずあまたうけ給ひ漸にきりぬけて、ヱ、ふびんや宮城野は女の身なれば定てうたれしゝつらん、われ故思はぬくるしみのやひばにかけし、ぶびんやと、フシむせび入て、ぞなき給ふ、地色所へ友春かけ來り、なふうれしや殿さまは是に御入あそばすかや、ずいぶんふせぎ候へ共大せいにへだてられ、御きづうけさせ申こともむねんながらせひもなし、一先こゝをいづかたへも御供申立のくべし、いざゝせ給へとすゝむれば政方涙ともろ共に、かく迄忠義なしくるゝ其方がいさめそむくにはにたれ共、うんつきゆみのちからなきあれを見よかたきのやつばらむらがつて追くれば、今はのがれん樣もなしすみやかにはらきらん、かいしやく頼むと御たちに手をかけ給ふをしがみつき、詞ヱ、其御所存成故にか樣のなんぎもおこるなり、地色此友春があらんかぎりはめでたく御代に立申さん、おくびやうみれんの追手共何十萬有とても、ちつ共きづかひましまさずはや何かたへもおちさせ給へ、あしきことは申まじこくうつるといさめら

れ、然らば詞はやぶるまじ命さへ有ならば、たがひに尋ねあふべきとなみだとともにおち給ふフシさだめなかりしうきよなり、地色ともはるいまはこゝろやすしおちのび給ふ其あいだに、さゝへてのかんと待所へ又のがさじとかたきのせいむら立てかけむかふ、主人はおとすこゝろやすしと、うでをかきりにきりまくり〳〵ちり〴〵ぱつとをつちらしながゐは、むやくこれ迄と、君の御あとしたひゆく頼もしかりける三重「しだいなりむざんやな、宮城野は何國にかくれしのびけん、しなば殿さま一所にとおもふうちにもおやのかたき、治部大夫を何とぞと身をひそめ此ところを、うろ〳〵尋る左右方より繼母と治部鑓ひつさげ、詞ヤアしにぞこなひのやけめらうめ、をのれはさだめて我々をおやのかたきとねらふと見へた、地しやばふさぎのいきけいせいをしにげいせいとやりだまに、あげてくれんとつつかくるをあなたへはづしこなたへくゞり、女のねんりきやりさきをはねてけやぶり柴がきを、むかふのそとともに出たりける、地色すきもなくゆん手めでより鑓さきそろへとりかこむ、心へたりとにげんとするをまへなるゐづゝのうちよりも、どつこへやらぬとやりさきに今はせんかたつきはてゝ偖くちおしやむねんやな、とてもころさでかなはずは殿さまはいづくにぞもはやをのれらがいしつらん御しがいの其前にて、いさぎよふあひはてんしばらくまてなさけにと、フシ手をあはせてぞなきゐたる、地色繼母いらつてヤアうろたへもの、殿めは民部にさゝへられうちもらしたるはらゐせに、せめてをのれみやうだいにころさひでをくべきか、地色まだるいはやふといふしたよりずばとつきたてつきとほす、くるしみもだゆる其ころはならくゝいふならく、ならくのそこのおにどもがかしやくのせめもかくやらんついにこときれいきたゆれば、それゐの中へしづめよとチクリまつさか「さまにぞなげいれける、ときに屋なりしんどうし、おそろしや宮城野がなきがらゐつゝをあらはれ出、しうねきかんばせうらめしげにはつたとにらむまなこのひかり、かみそらさまにたちまちくちよりほのほをはつとふきかけ、ふきかけ繼母をめがけとびかゝる、わつとおどろき治部大夫ありあふ者どもきをとられ、こけころびつゝにげんとするを一ねんしんいの

ちすぢのつな、じゆうじざいに引まはしともになら
くの供せよと追立、追つめ追まはすおそろしくも又
三重「すさまじし、地なんなく繼母をひつつかみ、我
くるしみを思ひしれ、かしやくのせめも様々にむけ
ん、きやうくはんあびやうちん、八まんぢごくのそ
こはかとなきおほぞらのきりかすみうずまくくもに
くる〳〵〳〵、くるりくるまの我まゝにまゝ子をに
くむ繼母のいんぐは尤、かふよと夕やみに姿は、もろ共うせにけり

## 中之巻

かくとだにゑやはいぶきのさとばなれに、政方のし
つけん民部の丞友はるがおぢ、三上藤大夫といつし
者、何としてかみそじ余りのころより雨みゝひしと
聞へかね、たま〳〵いふことにてもみゝに口よせ、
大ごゑせねばかつて通せぬふじゆうさに、武士をや
めてどみんと成いぶきのさとに引こもり、物にかま
はぬ身のらくと月日をくらしゐたりしが、先祖より
しんかうにて、いなりのやしろをつき山のうへにく
はんじやうしあゆみをはこび奉りしが、けふはやよ
ひ午の日伏見の神のお出也、心いはひとあたり成、子
共をよせてまつりごと誠に神も納受のテクリちかひ
「あらんと頼もしし、地色かゝる所へ政方の御妹都の
前と申せしはげしやくばらにておはせし故、やかた
へは忍び御さとずみにてまします中、母もむなしう
成給ひみなし子なれば政方へ、ひそかにかくと申さ
んと思ふにかひなく國みだれ、政方のゆかりとあら
ば一々にからめきたれと治部がきびしくふれし故、
漸我屋をのがれ出頼む者にはをさなきより、召仕ひ
の雲右衛門とて下部の者只一人御供にぞつれられけ
る、此雲右衛門下部ながら心がうにて、きりやうは
あつぱれ何某共いはるべき人さうなれば、生れ付の
せひなきは口どもつてごんぜつのかなはぬ迄も御供
と、都の前をぐし奉り三上が門に立寄て、物申さん
といひいるゝ下男立出、詞どなたにて候ぞといんぎ
んに尋ける、雲右衛門小ごしをかゞめ、ァァそつじな
がら我々は、みのゝ者にて候が御主人三上藤大夫さ
まへ、じきに御めにかゝりたきしさい有て参りたり、
地色お取次を頼みまするといんぎんにぞ申ける、地色

下男請取てしばらくそれに御待と、やがておくに立入て主人藤大夫がなをりゐる、そばちか〳〵と立よりて、詞申々どなたかは存せぬが、みの丶お衆と申され、じきにお前へおめにかゝりたきよし申されまする、ャァなんじやみのがやぶれた、はてそふではござりませぬ、みの丶國衆でござりまするが、直にあひましたいとでござります、フムなんじや、みの丶國の者ぢやが身にあいたいとゆふか、あい、はて偖々、それをさゝやくことか、誰じやな、若おいのみんぶが近付かもしらぬ、地色先こなたへ通せ畏てこなたへと二人をおくへぞ通しける、藤大夫たいめんし、ついに御意もゐませぬおかたじやが、何の御用に拙者をば御尋にて候ぞ、詞先じゆうながら申ましよ、わしはみゝがとをふござつて、しやう〳〵では聞へませぬ、近くへ寄てずいふぶん大きなこゑでいふて下されと、地色みゝをそばだてじつとして聞ゐたる、詞雲右衛門ちかくより、仰られまする通御意ゐましたことはござりませぬ、ィャ別義ではござりませぬ、則是に居られまするは、みの丶御城主政元公の姫君都の前さまと申して、若殿の御爲には御妹子にてござりまする共、げしやくばらにて候故御屋敷への御ひろめなく、折を待候中に親殿は御かくれましまし、うみの母御もおすぎ有、其上お國は御家老治部大夫がぎやくしん故、殿さまもみんぶ殿もいづく共なくおちさせ給ひ、地色其上治部めが國中を政かたがゆかりとあらばからめよと、きびしくふるれば無念ながら姫君の御供申、國は立のき候へ共かゝるじせつに候故、誰をたのまんかたもなくさま〴〵心をくだくうち、貴殿さまの御ことは友はる殿の御おぢごときき、ぜひにお頼み申さんとなれ〳〵しいことながら、是迄御供申たりあはれ御かくまへ下されば、くさばのかげなる大殿もいか計御満足ならん、御了簡に預りたしと手をつかねてぞ申ける、地色藤大夫も大かたはみゝには入しか共、したぢみゝの聞へぬにどもりまはつてかたるにぞ、偖きのどくしんきやと心あくせきあたまをかき、といきをつくを都の前もとよりさとき心にて、ちやくとさとり硯をこひ、くはしく書て見せ給へば藤大夫飛しさり、偖は姫君さまにてわたらせ給ふかたとひ御はらちがひしとて、たいないはかり物御たねはひとつなるに、いかでそりやく

にいたすべき、みゝ故にこそどみんとなれ、もとはたゝしき友はるがおぢ藤大夫にて候ぞ、御代に出さで置べきやとはいへお國のさうどうは、夢にも存ぜず候が偖は治部めがたくみなりしか心もとなや若殿は、いづくへおちさせ給ひつらん、民部は御供せざりしか何とかしけんきづかはし、いかゞせましとたうわくにあぐみ、はてゝゐたりしが、地しばらく有ていや申姫君さま、そつ共お氣遣あられまじ、某若年よりいなり大明神をしんかうし、まさかの時はすくはんとの御むさうに預る程のれいげんあらたにまします故、御らんのごとく庭前に社をしつらひ候へ共、ついにかゝることぞとてなんぎは願ひ奉らず、此度こそいつせ一代さいはいけふは彌生のお出也、ひたすら立願こめ申殿のお行衞姫君を守らせ給へと立願申さん、先々こゝははしぢかなり見苦しく候へ共、おくへ御入下されよとよきにいたはり參らせて、せめての御ちそうには手あみを引、追付歸らん家來共かしづき申せとゆふクリまくれはまべを「さして出にける、地色然る折ふし角行坊治部大夫がさしづを受、都の前を召とらんと十四五人ともなひあそこ爰に忍ばせて、我身は只三人姿をかゆる順禮の歌ふだらくやきしうつなみは、みくまのゝなちのお山に、ひゝくたきつせ詞西國順禮に御ほうしやと、地色うたひつれつゝ通りければ都の前聞給ひ、偖もしゆせうやみづからも親達の御ぼだいの爲、又はげんたう二世の爲とひそかにそともに出給ひ、角行ともしらずなふ〳〵順禮達、是はわらはがふたりのおや達ぼだいの爲と、小袖を一つ渡さるれば角行受取偖は是、都の前に極りしと思ひながら見しらねばそこつもならずをしいたゞき、しゆ〳〵ぢうざい五ぎやくしやうめつじたべうどうと、稱へ〳〵小袖の紋見れば二つ右どもゑ、さあ是じやは心へたとちうにひつさげかけ行たり、地色折ふし雲右衞門一間にふして有けるが、此をとにめをさましはつとおくに入けれ共はや姫君は見へ給はず、詞なむ三寶うばはれし、をのれらどつこへかへさぬかと、地どもりまはつてかけ出る所へ大せいどつとよせ、雲右衞門を追取まくいやものくさいやつばらと、地向ふ者共さん〳〵になげふせ、うちふせをつ立ればおくびやうみれんのざう人ばら跡をも見ずしてにげ行を、さもしきたなしこ

んりんならく火に入、水をくゞりてもうばひかへさで歸らんやかへせ〳〵、〳〵〳〵とをつかけ行こそ三重「賴もしきいさかひ過ての棒ちぎり木、藤大夫がけらい共さすがどみんのはかなさは、物かげにかくれゐたりしが漸と立出て、詞やれだんなのお若お姫さまを何者かつれ行たり、地遠くは行じのがすなともや〳〵してゐる所へ、地藤大夫いをおけをさげあみをかたげ歸るを見て、けらい共あはたゞしく姫君はうばゝれ給ひ雲右衞門は追かけて、と聲々にひしるにぞ、くはつとせき上物をもいはず二三町かけ出しが、なんとかしあんをし立歸りいや〳〵どふでも追かけてとかけ出ては又かけもどり、うろ〳〵はぎりしてじだんだ踏、すわつゝ立つする折ふし下の女三寶に、供物をすへつき山のいなりの社へそなふと見て藤大夫飛かゝり、地そなへの三寶ひつたくりみぢんになれと打付る、皆々おどろき是はそも餘りおせきなされた故、お氣がのぼつてお心もそゞろになりしかもつたいなや、先しづまらせましませと、せなをさすりつなでおろすをふりはなちつきのけて、いなりのしやだんをはつたとにらみ涙をながしねめ付て、詞やいかたり狐のばけぞこなひめ、年比日ごろえん日ごと又は神事おこたらず、御供をそなへたつとめ共何をかふとの立願せず、然るに此度我おいの主人のやかたさうどうに付、姫君御入遊ばされ、かずならぬ某を賴むとあればもだしがたくかくまひ申御ちそうに、あみを引に出る跡にていかにうつけた神なりとて、氏子の主人の姫君がうばはれ給ふをおめ〳〵と、よふも〳〵見てゐたなあやい、それでいなりの明神のとあがめられふと思ふてゐるか、そふとはしらでうか〳〵と信心したがくやしいはいやい、さあ、地色是からはしばらくも我地に置ことけがらはし、この藤大夫がどそくにかけしやだんを只今ふみくだく、はらが立ばたち所に我とりころせ恨はなし、去ながらとてもばちをも利生をもしらぬきつねの四つあしめと、しやだんに手をかけるい、やつと引たふし、のりかゝりとびらかうらんこと〳〵くふみくだき、かしこに有し棒をつ取さん〳〵にうちくだき、はがみをなしてかけ出しはいまはし、くも又三重「道理なり、謠次第我はばけたと思へ共、〳〵、人は何とか見るべき、狂言是は三上藤大夫がちんじゆにす

むふるぎつねのこつちやう、當月午の日は京都いなりのお出故、毎年諸國の末社あつまるなれば、我等も當年のぼつてござる其るすのまに、藤大夫がおいみんぶ友はるが主人の娘、かたき故國をおち藤大夫を頼む、何がたのもしいしやうじきしやなれば、都の前を守りてくれよと社へ深ふきせいし、ちそうの爲手づからりやうに出た跡へ惡人共がみだれ入、姫をうばひかへつたげにござる、藤大夫かへり見てさんざんはらを立、うき世に神はないねがふてもゑきないとさすが凡人でござるは、我るす共るしらひでしやだんをみぢんにふみくだいてござるが、是は藤大夫が正直な心からは道理共〳〵、是程の道理は近年又有まいと思ふ道理でござる、とあつても今更致し樣もござらねば、しよせん友狐共をかたらひかたきを待請、姫をうばひかへし藤大夫にわたし、いひわけもいたさふと存じ取物も取あへず歸りまするが、地色偖も〳〵治部大夫めは前代みもんの惡人と、いひもあへぬに角行坊姫君を引立させ、此所へ來りしがはや日はくるゝ急げよと、いふ向ふよりくだんの狐角行が傍輩桂馬坊と身をばけて、挑灯をさげこゝにきかゝりエ、詞角行坊かよい所であふて有、餘りをそしと治部大夫さま仰付られ、地色むかひにきたが何と首尾はと尋ねける、角行いつぱいくひ何桂馬坊にて有けるか、詞悦こんでくれ都の前を早速にいけどりしが、なんとでかしたではあらざるか、地色とはいへきやつもくはほう者、みめかたちすぐるれば、つれて歸るとすぐさま殿が手かけにせふとおつしやつた、さあ〳〵早ふ歸り殿に見せてよろこばせ、ほうびをいつかどしてやらんとフシ跡先しらずにいさみける、地色けい馬坊打うなづきでかされた〳〵、殿のきげんはしれたこと片時も早く歸らんが、しらるゝ通道惡敷日ははやくれて行先見へず、追々迎をこすはづじやが道にまよひはせぬかじや迄と、いふかは向へ狐共迎の者の挑灯に、あまたばけてともしつれおひ〳〵、とよびかくるそりやこそ迎がきたは、詞太儀ながら桂馬坊此女がなはを取、大じにかけて引てたも成程〳〵合點じや、地色こちへ任せと請取かはべにかゝれば此のべの、きつね共せなをならべはしにばけて見せけるを、皆々誠のはしなりとチクリひかりを「たよりに渡りける、地色程なく大せい渡りすめ

ば提灯のひかりもうせ、せんごもさらに見へわかず、跡には角行とけらい少々、都の前桂馬坊殘りしが、角行坊ふしんはれずこゑを立、詞やあ〳〵橋向ひの侍共、何とて挑灯の火をけした、早くとぼしはしをあかくし渡さぬぞ、地色大じのめしうと跡に有にフシぶさたなりとぞいかりける、地色かは向ひのもの共いや〳〵左様では候はず、我々渡りすむ迄は挑灯見へて候が、見ればわたりしはしもなしめいよなことゝいふこなたへ、又提灯高々と迎と見へて、おひ〳〵とよびかくる角行力をゑ詞ェ、くどんなそち達が挑灯のかげ、かはへうつるを取ちがへそれへ行し、是是迎はこなたなり早ふまはり來れよと、地色谷共しらずさしかゝれば又狐共はしとなり、道と見せて有けるをばかさるゝとはきもつかず、先に立てわたりしはフクリこゝち「よくこそ見へにけれ、地色なんなく向ふへわたりこしさあけい馬姫をつれ、いそいでわたりやといふ内に又挑灯のかげもなし、角行彌ふしんはれず、詞是は偖、はてめいよな合點の行ぬ、地色どふしたことで有ふぞと、きやうをさませばにせ桂馬から〳〵と打わらひ、詞あの大だはけがぬかしたざまは、我を誠の桂馬と思ふかやい、それにて慥に承れ、政方の家老みんぶの丞がおぢ三上藤大夫がちんじゆにすむ、こつちやうも〳〵いなりの鳥居を七度のはまなみ丸といふ白狐なり、地色我すむやしろを藤大夫がみぢんのごとくくだきしも、をのれらが此姫をうばふて歸る故なれば、取かへし藤大夫へわたさでは此波丸が、すみ所なくあまつさへ此のどがさらりつとひあがるなり、あのうんつくめらがつらを見よ、大義によふこそほねをりぶんにしぶ茶をのめとぞわらひける、地所へ藤大夫雲右衞門まつくろになりかけつくる、都の前すかし見給ひなふ藤大夫殿か雲右衞門か、箇樣〳〵のことなりと有し次第をかたらせ給へば、藤大夫はつと計かうべをさげひざまづき、かくじんへんにましますをもつたいなくもみやしろを、どそくにかけし其みやうばつさは去なからお主のため、ゆるさせ給へと手を合せフシひれふしてこそ泣ゐたれ、姫君も雲右衞門もかんるいきもにめいじつゝらいはいしてぞおはしける、地色白狐も神慮うるはしくうれし涙と諸共に、必ちつ共くるしからず皆是かたきがなすわざなればおことらにとがは

なし、いざ〳〵ともなひ立歸りじせつを待政方にめぐりあはせんきづかひすな、若又かたきがよせくる共皆狐に任せてをけ、かたはしよりふみくだきからすのゑじきにしてくれん、道がくらいに挑灯と先にすゝめばあまたの狐悦びともす其ひかりフシ只まんどうのごとくにて、フシ心しづかに、地行給へばかはと山との向ひ成かたき共こゑを上、詞なふ〳〵いなりさま頼みます、是はあんまりむごいぞと、地わたらんにも大河とたに、そこともしらぬやみなればなにとせんかたあらしにふかれ、其夜はそこにてすゝみゐるきみよか、りける三重

## まさかた道行

とても身は、地くはたくをいでよとすゝむれど、みやうりの心つよければ、きいておどろく人もなし、らうせうふぢやうのハチタ、キフシ世のならひ、しする命の其きはゝ戀しきつまもしたがはず、いとしき我子もともなはず、ひとり出ひとりゆく、ふなをか山の夕けぶりたへぬなみだぞフシあはれなる、フシそれより物のハチタ、キかなしきは、いらく、とひゞく山寺の、かねにことかくせつきまへたびでひだるい夕間ぐれ、きちんどまりのわびしさは松の木枕もめんよぎ、ひざよりしもはかんざらしあしをつゝめばくびすぢへ、つきぬく様なさよ風によのめさのめもあはざのからす、つばさ色なるすみぞめに、ころも計はそむれ共、そうとぞくとをかけもちに、フシチクリ世をすてかぬる、我はそもみのゝ國にて誰あらふ右京大夫政方と、人にしられし身なれ共國はかたきにうばはるる其上家老民部之丞、又はふた世とむすびてし、宮城野の露ちり〳〵に、行衛さだめぬひとりたび、せんかたなさのはちたゝき、ひさご一つを友としてキンチクリ人めを、忍ぶかくれがさ、かくれみのぢを立いでゝ、いつかむかしにあふみ成、今津の宿にきて見れば旅のならひか此身にも、かごやろ〳〵はいしゐどう、馬かしはばら歌さむさをしのぐやあこれの、さけの、酒のゑひざめさめがひや木々にさゑずる、とりもとのフシつばさ、たのまんこきやうの文、硯の墨やすりはりの取三重岩のかけぢをよぢのぼりフシ西をはるかに、見おろせば、ひらのいぶきの山風にばつと立なみ、つれてむれゐる歌はまちどりの友よぶ

こゑはちり〳〵やちり〳〵やちり〳〵と友よぶ所に、かもめこぞれる岩の上フシ雪や、つもると、水うみの、向ふに見へし高山は、ありしむかしのさと通ひ歌ひゑの山かぜ身にしみて含なたねの花もうらがれとうたひし比もいつしかに、又あらたまる春のそらみぞれあはゆきはつれ雪、ふりぬるとしにかへるかとたどる計にちら〳〵〳〵ぴらり〳〵と風にちりくるもみぢ笠、さうばうたりし山嵐むせぶ、計におちくれば、しばしつかれをやすめんとと有、所に着にけり何かはしらずかさのうへにおちかゝるこゝちして、しきりにおもくすがたも見へずこゑ計して△申々政さま、殿さまとよびかくる○こは心へずかゝる道のちまたにて姿も見へず我名をよぶはきつねたぬきが我しやうきを、うばはん爲かおろかやな、それは人によらふぞと心に思へどきみわろく、まつげをぬらしべいろうしやのうまかぼだらまにはんだらととなへ〳〵ゆかんとす△時にたちまちすがたをあらはし、さもくるしげ成こゑをあげ御うたがひはおことはり、わらはゝやかたでわかれにしみやぎのにて候が、彼さうどうの御跡よりおちんと思ふ其中にも親のかたきのことなれば治部を一たちうらみたくあなたこなたとする中になふ口おしや本望とげぬのみならず、御繼母治部が手にかゝり、返り討にあへなくもひと思ひにころさずし、鑓先につらぬかれあまつさへまつさかさまにゐの中へしづめられしうさつらさ、いはんかたなきくるしみの、中にも君を戀しゆかしと思ふ一念かつは、又本意をとげぬ無念さにこんはめいどにおもむけど、はくは此世にとゞまりてあさましかりし我すがたかくあらはして侍ふぞやあはれ日ごろの御よしみ御忘れ下されずは治部を討てみづからが、しゆらのもうしうはらさせてたべ、淺ましの我身やと泣共こゑの出ばこそ、ふびんにも又、哀れなり地色政方十方せんかたなく、偖はみやぎの成けるかや我故ついに此世をば、あたらさかりの花のすがたよしなきことにころされて、さぞや無念に思ふらめ、去ながら、たとへ生をへだつ共、かりにもふうふは二世といふなど近よりてうさつらさ、かたりてなり共我思ひはらしてはくれざるぞ、あら情なやとよらんとすれば△其まゝきへて○又かしこになき玉の△かげろふ、いなづま□水の月かや姿は見

ゆれど手にとられず、○地色せんかたなさに政方はわつと計にたふれふしきへ入計に泣給ふ△地色○ゆうれいばうぜんと又あらはれいや戀しきは我とてもをとらぬ君が心ざし、見るに立そふれんほのくもはれぬ思ひと成侍へど、とてもかなはぬしでの道、此世のえんこそうすく共、みらいはかならずふうふと成いきかはりしにかはり、ながふめをとぞいつ迄もつきそひ度は侍へ共、えん王よりのつかひしげくもはやめいどへ歸るなり、あらなごりおしやかなしやと□さけべるこゑはこだまに殘りすがたは、きへてうせにけり○政方夢かうつゝかとあなたへはしりこなたへかけ、たゞ狂亂のごとくにてやれ今一どせめて詞をかはしてくれよ、去とては情なやとよべどさけべど其かげも、なげきて今はかひぞなき、此上は何とぞしみんぶに尋ねめぐりあひほんいをたつしみやぎのが後世をたすけえさせんと思ふ心を便にて都のかたへおもむけど、めぐりあはんと思ひてし人は此世にはかなくも、なきと思へばまのあたりあひしは夢か今さらに、かゝるなげきはうつゝにもいづれを夢かいづれをうつゝ、わくべきかたも夢のよの夢ぢを、たどるごとくなり、

## 下之巻

□春霞、立ならびたるむねつゝき、こや王城の情の市うそに誠をつきませて、あきなふ戀のとひ丸に、よねかふ客の、地とだへなく四つ手のかごのほをまきて色のみなとゝ賑ひけり○地去程に右京大夫政方は、ばうぜんとしてそれよりも漸都につき給ひ、こゝ色ざとのあたりともいさゑらつゆのをだのはら、みどりにしげきくさのはも、霜にはあへずうらがれん、是皆せけんの無常ぞとしやうみやう、してぞ通らるゝかゝる所へ大吉といふかぶろはやり小うたのゑざうしを、よみ〳〵來り先も見ず政方に行あたり小びつしよなくゝこゝなはちたゝきは、何をしやうねにうつかりと、人のくるのもえ見やらぬはあきじねそふな杖やろか、そふしてそなたのしやうばいはみな此さとのきらひ物、しゆせうそふにあはれらしうへうたんたゝいてこまごといひ、衣のみじかい其ふうは客様達にいけんする、ぜんもんとやらいふおや

じの様で下心のこなれぬうつけたなり、はやふとつと〳〵とほらんせとおりや〳〵としかりける○地色政かたいぜん忍びくるさととは夢にもわきまへず、きもさんらんしうか〳〵とかまはずひさごを打ならし、さつてもいふたよくいふた、をのがめくらはたなへあげ、人をめくらといふやつは、しつかいさるのしりわらひ□汝ぐはんらい鉢ダ〳〵キびんぼう人の娘にて四百六十五匁に、身をうられきてやう〳〵と今けいせいの玉子ずし、すしにそだちていき過て客に口上いひちがへ、すきさへあれば板の間のらうかのすみのくらがりに、茶わんのそこを枕にしまんぢうくはふとねごといふ、すこしせいたけのびぬれば、あげやのむす子とまぶぐるひわけも見へざる文通ひ、うかり〳〵とうかついてやり手にわめかれしく〳〵と、小すみへよりてほへるをばしらぬと思ふか小びつちよめ、かはいや〳〵なむあみだなまふだ〳〵なむあみと、そしらぬかほしてゐられける△地色かぶろ大きに腹を立ェ、あのにくてな口はいの、あんまりあほうつくさず共早ふあるいてこめもらや、詞エ、はらの立にくらしいさりとは此世のはちたゝきうなゝせ、どこのはちたゝきじやたゝきたされなとたゝきにかゝれば、ちやくとぬけ、ヲ、をのれが様なこしやくなやつは此くろぬりのへうたんで水あげがしてやりたいと、いひすてにぐる向ふより、みやぎのが妹女郎、今はやり手のしらぎくはついかい取のひだりづま、きやらの追風くゆらせて道中しづかにあゆみ來り是は〳〵はしたないどうしたことぞ大吉、見ればこはい所をばかりまはらんすと聞及ぶ、修行者さんを相手にしもつたいないあんばくな今の身ぶりはどうぞいの、よいは〳〵まつてゐや、玉につげたらよいことであんまりほめはせまいぞと、いひなぐりつゝいやなふ修行者さん詞さだめしおはらが立やしよけれどいふても年のゆかぬ者、こらへてやつて下さりやせ、偖それに付はじめておめにかゝりやしなれなれしき御ことながら○地色けふはわたしが心ざす人の忌日でござんすが、こふした勤の身なれば思ふ程なとむれひも、人頼み斗なればせめてとねがふしるしにや、思はずそなさんにあひあしたもあさからぬのりの御えんとありがたし、ちよつとあげ屋へおこしあり御ゐかうなされ下さんせば、身に餘りおうれし

からんひとへに頼みあげやすと思ひ、入たる必ざし、よぎなきていにぞ見へにける○地色政方はつと心付偖は世に有其むかし、通ひなれたる色ざとかなふはづかしめんぼくなやと、顔もえあげずかくしながらとやせんかくやいひぬけんと、しばしあんじおはせしがやう〳〵と思ひ付、詞ハアおしゆせうやおきどくや、かゝる勤の其中にて御ぜんごんのお心ざし返す返すも感じ入申ませふ様もなし、しかしながら拙者義は、さりがたき用事故只今外へ參るなり、地色おゆるしなされ給はれ急用に候はずは、にやはしきお頼みをお殘多やといひすてゝ行んとするを引とゞめ、心さこそましまさんがひま取やする事でなし、少しの内の御ゑかうどふでも頼み上やするそれ大吉、おお供してといふに取付すがり付、先にからの口ごたへは、皆々わしがわるかつたこらへてこちへきてくだんせ、其禮にはへうたんで、水揚をしてもらひませふとむりにつれだち三重入日さす、あげ屋の座敷、地はれ〳〵とたゝみの色もあさみどりはるの夕かせほの〳〵と、火取がうろに立けぶり、三ぶくついのかけ物の、もやうは少しことざめて、中尊にあいぜん明王左右に風流のなん女の圖、本ぞんとあがめしはめづらしくも又ふしぎ也、○地色政方女郎に打むかひ、詞して心ざしのしやうりやうの御かいみやうはととひ給へば△さればいな、則そなたにかけました女郎すがたのかけゑこそ、ふかい御をんに預りしあね女郎さんのうつしゑでござんすが、こちらにかけし男ゑの殿達にふとなじみ、互にふかふのぼりつめ、あまのたくてふもしほぐさけぶりくらべの中なりしに、其殿美濃とやらんが本國にて、お下り有しをわすれかね、くるわをはしり見へさんせぬより、あまりかなしうこがれまし神さま達に願をかけ、どふぞあはせてくだんせと祈るにかひもなぎさの千鳥、なきあかしたるけふの日を御めい日と心ざしかくはとむらひまいらする、又まん中なはみやぎのさま、常々信心なされやしたあいぜんさまのみかげなり、よい様にせわやいてほとけになしましくだんせと涙をながし泣ゐたる、地色政かたはつとかほ打ながめ、今迄はよその様に思ひしが見るに付聞に付、よく〳〵思へばさりしころみやぎのにつかはれし、かぶろのまがき立のびて今白ぎくの大夫姿、見わすれたるもことはりやれ

我こそといはんとせしがちやくとひかへ、ア、よしなしまよふたり、かくといひなば身のちじよく、又みやぎのがしゝたりし有さまかたり聞せなば、なげきくやまん見るめもうし、ことにてい主喜平次が聞付てはいかゞなり、よい程にしてかへらんとは思へ共みやぎのが、身の上なをし思ひ出し心もみだれむねにこがるゝ涙をせきに、まぎらかし、いかふせけんがひゆる故ぎやうさん風をひいたそふな御ゑかう早ふしまひ歸りてまめ茶をたべませふと、ひさごをたゝきとこのゑにむかへばなをしいやまさり□過しことのみ思はれて身もしびれこゑふるひ、忍び涙をかくさんとすれ共わき出わき返りせき上〳〵すみ染の衣を、ひたしなげかるゝ△地色しらぎくさとき女郎なればちやくと合點しつゝとより、見れば見る程うたがひもなき人の思ひ人政さまじやが是はそも御すがたかはりしとて見ちがへたはわしがそさう、わたしこそ其時のみやぎのさんにつかはれしかぶろのまがき御見わすれありはせまいがどうよくなきよくもなや、先それはそふとしやれ過た、此お姿はどうじやいなわけもない、偖もかはりし御げんやとすがり付てぞ泣ゐたる○地色政方も涙ながらア、偖しばしの中ながらなじみほど世にこくに嬉しい物はあらざるぞ、かく成はてし我身をば、みやぎのがよしみとてよふこそ泣て下さつた、誠にかゝるざまに成此さとなどへ足ぶみは人間のすることならねど、はちをいはねばわけ立ず、みやぎの此さとぬけ出て、我を尋ね下るとかや、か様〳〵のしだいにてかたきに國はみださるゝ、いきがひなくおちさる跡にてかはいやみやぎのも惡人共が手に掛り、ひごうのしにをとげたるとてあさましきかたちとなりあひ見ることもかたいとにつらぬくたまのあくがれて、我をしたへる其おもかげまぼろし共うつゝ共思ひまはせばなまなかに國をものかず討はたさば今のうきめは見まじ物うらめしの此身のごう、いか成くはこのいんぐはぞと人めも、しらずなき給ふ、□地色白ぎくも諸共に、げに御道理ことはりとこゑも、おしまずなきにけり△地色此有さまをさいせんよりてい主喜平次物かげにてとつくりときゝすまし、そつと立出よこ手を打、さつてもお久しや政さま、はつとおどろき、たつてにげんとし給ふを△くるりとむかふに立ふさがり、扨是は是

はおどうよく、先にからお身のうへの御物がたり、一つも殘らずあれにてくはしく承り、びつくり共御いたはし共申わくべきかたもなし、と申ながら御恨みは、段々深き御こんいに預りし私、いやしき身すぎをいたせ共、慮外ながら憚りながら推參ながらくはんたいながら、心のそこは武士がたにもまけはせまいと男をばたてると申はおかしけれどちつ共お氣遣あそばされなかた身にひつかけ申べし、むかしが今に至る迄、主に弓引てきする者ひとりとしてせうりをばえたるといふこと、淨るりぼんにもついに出たることもなし詞まつ其ごとく治部大夫一たんお國にはびこる共、地色日月誠をてらさせ給へばじめついたさで有べきや、其内御ふじゆうなりとも是に御入あそばされよ、おかくまへとははゞかりたゞゐつゞけと思召、ゆる〳〵くらさせ下さればひとしほ大悦仕らんこの上にもみやぎ野さま、一所に御入なされなばかふした時にも御たのしみ、ふかき思ひもあさはかにはかなき無常のせかいやと涙をながすしんじつに、口しらぎく ありあふかぶろ迄涙に、むせぶやさしさよ、地色政方嬉し涙と共にかくばかり皆々念比成詞をうけ、身に餘り思へ共とてもおもしろからぬ世をてい主のやつかいめいわくなり、命だにながらへばと△いはせもあへずてい主頭をふつて目顔をしかめ、詞偖も〳〵ふるい〳〵、左樣におちぶれさせ給へばお心迄ひがみしか、とかくお氣をはらされて、ゆるりと是に御とうりうなされませ、ヤお久しぶりじやに誰さまぞかりましてなぐさめませふと申ますると座敷つき地色宮城野さまの御ことば御はてなされてせひなきこと、追付御代に御出のときいか樣の御とむらひあられふ共それはまゝじやに、とんとおわすれなされさいはい菊さま御ことは、其ゆかりなり御きりやうはおそらく只今くるわ一ばんまだ〳〵まだどこやらに、みめうむるいのうまみ有とまいつた方の御ふいてう、若まだいじむじおつしやると慮外ながらちくしやうじや、是菊さま大夫さま、お前も日ごろの御口ぶりいやでないをしつてゐる、そこらを頼み上はのてふ羽袖をかへすもんさくのころはり上てかのかんたんのかり枕、詞一すいの夢のさめしも五十年、又五十年百年なり、偖其後は二百年、是を合せて四百年、又五百年、千年は鶴のよはひと

おぼしめせ、うら嶋太郎は八千ざい、東方さくは九千ざい、龜は萬歳めでたさよ、しやかのかぶろの水上は五十六おく七千萬ざいと聞時は口に、はゞりていひにくし△地色さあ〳〵こゝも氣が替らず先々おくへお供せん、宮城野さまのあはれごと又は御國のきのどくざた、西のうみへさらりつとわすれさせまし下さるべし、是大夫さまそこらをとそゝりたつれば○しらぎくも、かぶろのときの子心に政さまはよい殿と、かいついいふてわらはれしもかふしたえんのはしならん、地こちごさんせといだき付、草葉のかげて宮城野さまちつとのうちじやあちらむいてくだんせと口手がいれば又足もいるえんおうの、ふとんれんりのよぎ、はやときがくる下ひものながき、契りと三重成にけり口つゆ霜ときへてもまよふ戀路のやみ、わするゝひまもなぎさこぐあまのをぶねが、こがれくる、地色宮城野がなきかげは、かけるをはなれ又こゝにあらはれ出るしつとのねん、女心のあやしさよ△なふうらめしや政かたさま、我より外によの女のはだふれじとちかひをき、人にこそよれしらぎくと御ねすがたは何ごとぞや、あゝねたましや腹立やとたぶさをとつて引出す口みだるゝかみもみだる我心も是皆御身の惡性故、あはれみ給へ淺ましや、たちまち宮城野がをんねん政方のひにくにいり正氣をうばふくるしみに○しらぎく夢共わきまへずなふかなしや宮城野さま、是程こがるゝわたしには何を見かぎりそれぞ共、詞もかはさせくだんせぬさりとては情なやといだき付んとしけれ共かたちは跡なく△ナヶシなみだつくして思ひをそむるふでのすさびにおもかげの地又立出る、ふしぎさよ○地色政方ふしたるとこの内、すつくとおきて見給へばありしつとめの其まゝに、雪のすあしのしろ〳〵と打見上ればヤア是は〳〵、詞シテそなたはしんだではないか、地色こはそもふしぎといふはおろか我こそは御身をあくがれしたふ故、前後ふかくにとりみだしやるかたもなきおりふしに、ちぎりくちせずあひ見ること夢かうつゝか夢ならば、さめてくれよよろこばしと口互にひしといだきつき泣より外のことぞなき、宮城野涙をおさへ先つゝがなくおはしまし、御めにかゝるうれしやな、誠にわかれましてより御なつかしさいかばかり尋ねかねつゝ此さとへ、まへのゆかりと御と

はせもしあらふかとまつかひの有とはいへどうき世の中かはりはてたる御すがた、見るに涙はとゞまらねど、それはくやみていらぬことかふおめにかゝる上はなげきてせんなし此うへは、いつかた迄もお供してしんじつにそひませふ是、我おとこいとしいぞや、かはゆいぞや女房と△いだきあひ、○しめ合て口さもむつましきていたらく夢としらざるはかなさよ、地色しらぎくはさいせんよりすこしまどろみふしたりしが、ふつと夢さめ見てあれば、政方宮城野いだきあひてゐるけしき、見るよりむつとせきにせきむつくとおきてつか〳〵とより、政方のむなぐらをしつかととりいや是申政さま、詞是はあぢでござんすの地色まへはどふであらふとまゝ、いきかたづくでさきにからまくらをならべしうへなれば、たとへあねさまでござんしよが宮城野さまでござんしよがこはいことはちつともない、もふけふからはわしが男ござんせねよと手をとつて行んとするを△宮城野引はなちつきたふし、詞ヱ、是こゝないたづらもの、おれをたれじやと思やるぞ、いやほにあんまりじやがの地色そうじてつとめはいたづらがちながならひとはいひながら、あね女郎のふかふあふおとこをねとりつべこべと、けつくこちからあやまらせふとなんぼかさからゆやつても、それは人によらふぞや、いかふかんにんしにくけれど妹女郎のちなみ故、さたなしにこらへてやる今度からたしなみやゝ、政さまこちへと手をとれば、いやあたゝかにはなそふかいの、政さまもつまらぬは宮城野さまと御ふうふの、御心中立さんせばなせに人にほれさんす、こちからしかけた戀ではなし、わしがおとこじやはなさんせ、いやだいたんなそち達に、ねとられてたつものかはなさぬか○いやはなさじと口後には兩方いとみあひ○あなたへひつぱり△こなたへひき口たがひにあらそふしつとのあくふうふきたて〳〵、れんぼのねつたうくらり〳〵、くら〳〵〳〵、とう〳〵〳〵とわき返り、げん世ににほひしそらだきの、らんじやのけぶりほのほとなりくみ、ながしたるさかづきの、酒しらなみてんにみなぎりうらみとこひの二河白道、三惡道のかしやくのくげん思ひしらせん思ひしれとひつ立〳〵、くる〳〵〳〵とくるしみなげく其こゑの、まことうつゝにあらざれは、かの夢人はかけ

ゐにとゝまり三重「うせにけり、二人は惣身地あせにひちばうぜんとしてなくばかり△地色なふこひしのあねさまや、○なつかしの宮城野といだきつけどうつつのかたち、床にかけゐのいきうつし、偖は此ほどなつかしとふかくも人を思ひねの、夢としらせばさめまじをせめて詞を今一と、口かはしてくれよとふしづみなけど、さけべとかひぞなき、地色所へかたき治部大夫、侍あまた引ぐし一間へふんごみャ詞見わすれたか、政かた、いせんは主従今にては國のかみとあがまへられ、くはつけいくはんらくにほこるといへ共家のけいづをみんぶめがをのれにわたしおとせし故つぎめの參内なりがたし、何とぞをのれを尋ねだしけいづさへひつたくらば命はたすけをひはらはんと方々と尋ねつかれ、きうそくがてら家來共がなぐさませんと此さとへ、らくあそびに來る所に、地色日ごろしやうじき成某故佛神のみやうりにかなひ、しんだとりよりなをやすくいけどつて國へ引、けいづをぬすむとが人と諸人の見こりにしてくれん、あたぶのわるい其ざまで、錢かねなしの色ぐるひうでなしのふりずんばい、ゐざりのおろせ及びなしとかんら〳〵とぞわらひける、地色政方待つるかたきながら大せいなれば何とぞし、治部めをうつて宮城野がぐげんをたすけ其跡は、うたるゝ共せひなしと身づくろひ有所へ、民部友春いかづちのおちぞこなひたる力足ぐはた〳〵とはしり、入ャうれしや殿さま御きげんにてわたらせ給ひ恐悦至極仕る、ちつ共おきづかひ遊ばすな、友春が參つたと、地色聞もあへず政方何みんぶとや是はそも、ふしぎにしつてかけつけし我身落たる其跡にて、みやぎのもアノ治部大夫めに殺されしよし、此上はくひ付てもしやつを討ではらもゐず、もししそんせば友春跡を賴むとの給へば、みんぶ聞にたまられずもふ〳〵おくやみ御無用さあ詞治部大夫め、友春がしやばのなごりのうらみのたちかねあんばいを覺させんと、地色政方諸共ぬきはなちさやふみわつて立給へば治部大夫あざわらひいやしやらくさい死人めら、地色ついでにつちへにへこませけいづをうばへと夕そらもにはかにくらくしんどうし、宮城野けしたるすがたをあらはし△ア、お待なされませ、尤御本意とげられふなれ共たせいなればおぼつかなしわらはしやばにありし時常々

しんじ奉る愛染明王のりけんにかけ、親のかたき國のあだたいぢあらん御つげのしるしあれ、御らんぜよ御正體をと口誦いふこゑの下よりも、ふしぎやゑざうにかけ、置たりし、明王きへうせ給ふと見れば、あたりもかゞやくがうまの尊體惡人たいぢ、有がたや口地ついに追つめ追まはし治部大夫をづた〳〵にさしつらぬきて御すがた光明四方にかゞやけば、有がたくもたつとくもをの〳〵はつとかうべをさげはいすれば、宮城野もたちまち成佛とくだつのをさまる御代は千秋樂、萬歲樂や福德の諸人あいきやうぶんぶの神、廿六夜の月々にたつとみうやまひ奉る、月待の御利生あら玉の、かず〳〵つゞ御はん昌めで、たかりけるはるとかや

右此本者依小子之懇望附祕密音節自遂校合令開版者也　加賀掾

二條通寺町西へ入町　山本九兵衞刊

愛染明王影向松終

# 酒天童子

## 第一

さてもそのゝち、ことばこゝに人わう六十六代の御門をば一でうの院と申奉る、うちには三くわう五しやうのきをあらはし、ほかにははんぎのまつり事をただしくして、ばんみん天をんのおもんじ君のめぐみば久かたの、やしまの外もくもりなく、月の都の道ひろくおさまる御代こそめでたけれ、其比天下のしゆごをせいわ天わうより五代のそん、多田のますぢうの御ちやくし、けんひいしのべつたう、ちんじゆぶの將ぐん、いろふしせつつのかみ源のをろし頼光とぞ申ける、地あいしたがふらうどうには、ことばわたなべの源五つな、さかたのみんぶ金とき、とを〳〵みのかみうすいのさだみつ、地うらべのしきぶするゑたけ、ひとりむしやほうせうとて、以上五人の人々は、ぶゆうの道に誰として、るいたいのおもてをあはするものぞなき、かの頼光のゐせいの程、うら山さらんは、大三重なかりけり、ある時頼光、やかたにくわいがう有、春さめのふりくらしたるつれ〴〵に、こずへの花もほころびて、けふもくれぬとつけわたる、こゑもさひしき入あひの、かねつくころにもなりしかば、おの〳〵しゆゑんはしめつゝ、地てまつさへぎるきよくすいの、ながれにうかふさかつきのめぐれや〳〵、おぐるまの、しゆ〳〵のゆうらんおもしろや、うたひつわものゝまじわり、頼みある中のしゆゑんかな、ことばすでにはるの日も、はやくれがたのこと成に、茶のくはひしゆゑんことをはり、よものはなしに成て頼光仰けるやうは、偖もたうぎんの御せいたう、天下にあまねく、ばんみんかうゑいを悦ぶ、我又天下のぶしやうにそなはり、せかいのりらんをたな心にかけ、世上すでにせいひつにして、弓を袋におさめし也、なにか世の中にめづらしき事は候はすや、めん〳〵いかにと仰ける、そのときほうせう申さるゝは、さん候此頃都にはめづらしき事を申ならはし候、九てうのらしやうもんには、きじんかすんで、くるれば人を取くらひ、ぎうばろくちくをつかみさく、去によつてかのあたりへ、よに入人の行かよふ事なしと人皆申ならはせり、定てかたゞ〳〵も

聞召れ候らん、めん〳〵いかにと申さるゝ、まんざの人々誰も聞た誰もたれもと申さるゝ、其中にわたなべのつな一人へんたんをも申さず、きかぬかほにていたりしが、ひざをし立大べしにへしたる口びるをきつとそらかし、是はほうせうの仰とも存せずや、それをいかにと申に、つちも木もきもわが大君の國なれば、いづちか鬼のすみか成べき、さすがにあのらしやうもんは、王城のなんもん、とうざいの兩寺はくはんむ天王の御願所、是又天下の御きたうに、立おかせ給ひし大がらん、中比こうほう大師、かの寺にておうしてたいざうかいのまんだら、七百よそんをくはんじやうし、しんごんひみつのだうじやうなり、かゝるたつときまのあたりに、たとへきじんがすめばとて、それをすませて置べき、か筋ことばなき事な申させ給ひそ、ほうせう聞て、儕は某御前にていつはりを申と思召か、其ぎにて候はゝ今夜にても行むかつて御らんせよ、渡邊聞て、儕は某え參るましきと思召すか、其時まんさの人々一どうに、是はむやくととゞめける、いや〳〵ほうせうにたいしてあらそふいこんはなけれ共、一つは君の御ためなれば、あつはれしるしのふたを給はれかし、某今ばん行むかつて、事のじつふを見て參らんと、はゞかりなくこそ申ける、ことは其時頼光綱にむかつて、げにげに汝がいふごとく、かつうは君の御ためなり、是を立置歸るべしと、しやうさつを下されける、かゝりつなはしるしを給はり、いそぎ御前を罷立しが、又立かゑりかた〴〵は、ひとの心をみちのぐの、あだちがはらにあらね共、こもれるきじんをしたかへずば、二たびめん〳〵におもてをあはする事あらじ、是迄なりと申切て、しゆく所を、さしてぞ三重歸りける、やかたになれば、かゝり物のぐ取てかたにかけ、重代のつるぎをはき、たけ成馬に打のつて、人をもつれず只一人、二條大みやをみなみがしらに三重あゆませ行さへもせず、くもりもやらぬ、おぼろ月よに、とうじのまへをうちすぎて、らしやうもんにさしかかる、俄にふきくる風の音に、こまもすゝまず身ふるひしてこそ立たりけり、つなは馬よりとんでをり、羅生門の石だんにあがり、しるしの札を取出し、だん上に立置立歸らんとせし所に、何かはしらずうしろより、綱が甲を取て引とゞめ、つなも聞ゆる大力

にて、取たる甲のおを引ちぎつて、おぼへずだんよりとびをりける、其時きじんはいかれる姿をあらはし、其たけかうもんのきにひとしく、まなこは月日のひかりかゝやき、引さきくはんととんでかゝるを、とび違ててうと切る、きじんかたうで打をとされ、すこしひるみてついぢにあがり、やれつゐには其うで取かへさん物をと、雲のうちにてよばはりこゑして、行がたしらずうせてんげり、つな此由を見るよりも、ゑゝ打もらしたる口をしやと、切たるうでをゆんでにひつさげ、こまを引よせゆらりと打のり、屋かたをさしてそ三重歸りける、御前にもなれば、ことば此よしかくと申上る、大將をはじめ奉り、まんざの人々取々に是を見るに、いかにもふとくたくましき事、大ばんじやくのことくなり、つめのさきかゞまつて偏に龍ににたり、頼光御らんじて、いかに源五かやうのあつきは、七日の内には必わざをなす物なり、ふかく事をつゝしむべし、是はたうざのゐんぶつとて、金作りのさやまきしたるひけ切の、御こしの物を渡邊にくだされける、かゝりつなは弓矢の名をあげて、悦び御前を能立、わがやをさしてそ三重歸りける、わがやになれば、ことば偖おにの手をしゆのからひつにおさめそのゝちは、たきやうもせずもんこをとぢ、ふかくつゝしみいたりけり、かくて其日もくれければ、もんをしきりにたゝく、ばんの者立出て、あやしやたそととがむれば、いやくるしくも候はず、津の國渡邊に有しつなの太郎がおば成が、是まで參りて候なり、こゝをあけよと有ければ、番の者承り、いや誰にてもあらばあれ、こよひはよもふけぬ、明日御出候へと、いひすてゝ内に入、おば此由を聞給ひ、地打うらみたるこはねにて、あらうらめしのしだひやな、誠にをんをえておんをしらざるは、そもちくるいにたとへたり、わどのおさなき時よりも、みづからがそだて、けんたうそせつのさむきよは、ふすまを重はごくめり、きうかの天のあつき日は、あふぎのかぜに手をさらず、わどのをつなといはせし事、みづからがおんならずや、としおいよはひかたふけば、あすをもしらぬ命にて、わどのを一めみんために、くもひとをきふるさとより、はる〳〵尋來りしに、もんより内へ入ずしてをひかへすほうや有、わどのじやけんの者かなとうれいふしこゑをあげ

てぞなき給ふ、ことばさしもにかう成渡邊も、あくまでおばにくどかれて、もんをせひなくをしひらき、いやとよ是は僞なり、おばごせわかき時よりも御心たけ〳〵しくましませば、今もさぞわたらせ給ふかと、御心を引みん其ためなり、かゝりこなたへいらせ給へやと、よまのでいへぞしやうしけることばおば仰けるやうは、此ほどは打つゞき、わどのばらが身のうへに、ゆめ見のゝしくはんべれば、何にても思ひ合する事なきかとある、つな承り、羅生門にて鬼のかいなを討たる事、有のまゝにぞかたりけり、おば此よしを聞召、誠やらん今生にて、はるふし鬼のかたちを見し人は、來世はうかぶと聞なれば、ことばなふ其鬼の手とやらんを、わらはに一め見せられよ、綱此由聞よりも、かなふまじとは思へ共、又もふけうと有べきかと、せひなくかいなを取出してぞ見せにける、おばかいなを手に取とりまはし、引まはし見るよしにもてなし、きられしうでにつぎ合せ、やれ是は我手なれば取ぞとて、かゝりたちまちあつきとなり、はふをけやぶりとんで出る、綱此よしを見るよりも、ゑゝたばかられたり口をしやと、あとをしたふておつかくる、雲の内にてわらふこゑして、ゆきがたしらずうせてんげり、綱あまりのほねなさに、うん中に向て、天もひゞけるこゑを上、おのれへんげのしんなり共、我たましいは、じんづうなれば、天地さうかいしゆみせんのはてまても、さがしいださで置べきか、終にはたいぢせん物をと、八げんはなつてのゝしつたり、それよりも今のよにいたるまで、渡邊たうの屋つくり、はふを上ぬぬんゑん是なり、せん代みもんのためしやと、皆かんせぬ者こそなかりけり

## 第二

さるほどに、ことば渡邊の綱は鬼神のかいなを討しより、よの中しづかに成けれ共、つゐにかいなを取かへされしより、まつた近國にはいくはいし、人の妻子を取事は、都の内にもくげ大臣の姫君たち地其かずおほく取とかや、爰にいけだの中なこんふし國高とてをくりかうけ一人をはします地只一人の姫君有、ちんの内にて人ならせわか紫のにほひふかく、はつ

もとゆひのねみだれがみ、行するゑなかき御てうあひ、はや十三にぞ成給ふ、さればにや世の中の、情を聞人ごとに、心をかけぬは中三重なかりけり、是は偖置、ことば爰にかづさの國のぢう人、藤原のせうげんともとしとて、弓取の有けるが、此姫君の御事を、かねてよりもきゝおよび、やがて使を立らるゝ、あらおのこはでんぶなりとて地いろおつぼねにいひふくめ、ゑんの使を立らるゝ、ことばやがて國高のやかたに行、あんないかふて北の方に近付、ゑんの使を申上る、御臺聞召、尤さは候はんずれ共、此方の姫か事は、二條のきんだちへかねてけいやく有し事なれば、かなふまじきとの給へば、中なごんつかひの者に打むかひ、大きにいかつて我むすめをのそまん人は、院の宮がたくはんばくてん上のきんたちか、ぶけに取ては天下の武將、源の頼光のもんは成へしなんぞや、あつまのあらゑびすをむこに取べきいはれなしと、もつてのほかにの給へば、地いろ使の女房、力なくなくりいそぎ、やかたに歸り、有のまゝにぞ申ける、ともとし大きにふくりうし、お中さけすゞあづまぢの、さのゝふなばしさのみやは、たへては人の戀わたるへと、思ひこがれ給ふにぞ、御いきどをりふかくして、我ふしやうなればとて、さのみ國高がいやしむる道にてなし、此うへは國高がやかたへふんごうて、姫をうばふか、さらずは國高とさしちがへんと、たちおつ取てとんで出る、ちからの介が取付てしゝ申こはもつたいなの御所存かな、うへのおてらのちごほうし、それよりもなをやはらか成くけ長袖とたたへたり、誠にはんどうむしやの其中に、ゆうりき人にこへめいちのほまれ取給ひ、したながけれ共我々迄、あらおのこのりきしやといはれしもの共が、罷こもつてありながら、いなこのやう成人間に、君の御手はおろさせ申まじ、おいて物を御らんぜよと、しつほりとぞ申ける、ともとしせきたつむねをおしさすり、おゝよくこそ申たれ、わかき時のならひにて、戀にはたれもせく物ぞ、ふかくのものと思ふべからず、此戀をふつゝと思ひきる、八まん〳〵二ごんとはつがぬぞと、小刀をもつてつばもとを、かつし〳〵ときんちやうをはつたるは、いさぎよくこそ三重見へにける、是は偖置、ことば此比たんばのくに、大江山にすむ、酒天童子がけんぞくに、石くまとうじといひ

し鬼此由を聞よりも、偖も中なごんの姫君を二條殿へむかへらる、是よきさいわいなり、女とへんけうばひ取、どうじのきさきにそなへんと、かゝりあたかもじんべんをえし鬼なれば、たちまち女のすがたとへんげ、ことば池田殿のやかたへ行、あんないこふてたいめんし、さいはい今日さいじやう吉日、姫君をおくり給へとの二條殿より御使と申ける、國高もとよりやくそくの事なれば、地いろしうぎのよそほひ引つくろひ二條、いろをくり殿へぞおくらるゝ、かゝりくだんのおに共一條のもとり橋にて、請取わたしのぎしきをして、二條殿へはゆかずして、東寺の今道より、あたごのかたへ行かと見へしか、御供の待女房と見へしは、いるひいぎやうの姿と成、行がたしらすに上「とんで行、是は偖置、二條殿より誠の使ぞ立にける、國高おどろき、偖はともとしめがたばかり取たるにうたかひなし、おしよせて取かへさん、馬にくらをけものゝぐせよ、かゝり承り候とうへを下へと三重かへしける、あくじ千里を行ならひ、ともとし聞てちからの介をまねきよせ、姫をくれぬのみならず、そうごんはきし事、それさへむねんに思ひしに、むしつをあたへ某を、ほろばさんとのくはたて、やせくけはらがぶんとして、ぶけに弓を引ん事、とうらうがをのをもつて、りうしやにむかふににたるべし、ことばいざこなたよりおしよせ、くもの子をちらすやうに、かたはしよりふみつぶさん、用意せよ、かゝり承候と、物のぐおつ取なげかけ〳〵きるまゝに、馬共を引立〳〵打のり、夜は何時ぞ八つの比、じぶんはよきぞとよせかくる、両方よりよするせい、二條ほり川にほつゝめ、川をへだてゝあみあはせ、ときのこゑをぞ三重あげにける、かゝり時のこゑもしつまれば、偖両ほうより馬をはた〳〵と乗合、ちからの介がせんにことばをかくる、それ〳〵てきと見た名を何といふやらん、我は是かつさの國ともとしか郎等に、小林ちからの介もりみつといふものなり、しさひなきともとしにいきどをりをふくまるゝ、いしゆをつぶさに承り、あいてもあらばそとくんて見申そ、さなくばかたはしより、わしがすゞめをつかむやうに、ひらふて御めに掛んため、罷出ばつて候と、ことばにくぎをぞ打にける、おゝ聞た〳〵、是は國たかゞ郎等に、今川るもんなりとをといふ者な

り、忝くもうへつかたへ、御けいやく有姫君を、なんぞやあつまのあらゑびすのぶんとして、りふじんにうばひ取事、じんぎやぶるやから者、いそぎ姫ぎみをわたすべし、からめとられてこうくはひくびすをめぐらさじ、命をしくばはやかへせ、かへせ〳〵とのゝしつたり、もりみつ聞てやれうろたへものよつく聞、しんぎをたゞす侍か、たとへば女のきゝんがゆけばとて、などしんていをくづさぬぞ、おのればらが心に引あてあさいすいかな、侍たるべき者がかゝるむしつにあふうへは、いや取たぞとらぬのへんたうにはおよはぬぞ、あれけちらせもの共、かゝり承り候と、かたきみかたが入みだれ、火ばなをちらして三重たゝかひける、然る所へ、ことば六尺ゆたかの大の男、ひたゝれの露をむすんでかたにかけ、くろかねのはうをつきちん中へとんて入、しづまれ〳〵せまい〳〵、是は四天王の内遠江の守定光といふ者也、頼光よりの御使也、何ゆへもつてかくらうぜきにはおよばるゝぞ、だいりまちかきあたりにて、王位をもはゞからず、洛中をさはがせ給ふはかみをないがしろにしたまふゆへ也、かた〳〵もつて然るべからず、惣して此頃うへつかたの姫宮たちうせさせ給ふ事其かずをしらず、事のうたがはしき事あらば、せんしをもつて後日にきうめい有べし、まづ〳〵いくさをやめられよと、かゝり定光しきりにせいすれば、両方一句につめられて、國高ともとしたがひにちんをさつと引、かの定みつのふるまひを、上下萬民をしなへ、かんせぬ者こそなかりけり

## 第三

かくてそのゝち、地ともとしいつはりなきにより、重ねて弓やはなかりけり、偖國高のやかたには、近國他國を尋れ共、其行かたのあらされば、其頃都にかくれなき、めいよのはかせの上手有、いそぎ召よせ給ひける、御臺あまりの物うさに、はやく参れやすうぢよ、今は誰をかはぢぬべき、迎へよりて事とはん、なふはかせ聞給へ、それよの中のおやの子を思ふなひいづれか思はさるべきや、かなしきかなやみづからは、只一生にひとりの姫の有けるが、有夕くれに、女房の來りたばかりしを、しらで其まゝい

ざなひゆかれ、其行方のなきぞとよ、ことばはかせ承り、してお年は何と、とらのとし、いねうしとら、おゝ倭はお十三な、何の月の何の日の何のこくの御たんじやうぞ、とらの月のとらのこくにたんじやうす、姫か行ゑの有ならば、數の寶はおしからじ、生れてよりも此かたは、えんより下へおるゝだに、おちやめのとが付そひて、あらきかせだにいとひしに、わかれてよりも此かたは、又二め共見る事なく、あうらめしのわが身やと、きへ入やうにぞなき給ふ、ことばはかせ承り御どをり也理りとて、六十一のこよみに八十三のさんぎをはらりとみだき、易のおもてをしはらくみてよこてをてうと打、姫君の御行ゑたんばの國大江山にすむ、きじんがわざにて候也、去ながら御命某延命久と祈るべし、やがてめでたふ二度御所へきにうなさしめ奉らんと、地いろさも頼もしくうらなひて、はかせは我やにかへりけり、地倭それよりも中なごん、いそぎだいりへ三重あがらるゝ、だいりになればことば姫をとられし有さまを、有のままにそうもん有、帝ゑいぶんましく〳〵て、くぎやうせんぎまち〳〵たり、中にも五條の大臣申さるゝは、惣して國高一人にかきらず、近年人の妻子を取事其數をしらず、萬民の煩國土の大事是成べし、昔くはんむ天わうの御とき、たむらとしひとすゞか山の鬼神をたいぢす、せんれいにまかせられ天下のぶしやう、せつゝのかみ頼光に仰付られたいぢ有べし、あひともなふらうどうには、さだみつするたけ綱きんときほうせうとて、鬼神をも手のうちににぎる程の兵なれば、あつぱれしさいは候まじと、只手に取やうにぞ申さるゝ、帝ゑいぶんましく〳〵、いそぎめせとのちよくぢやう也、地長り候とをくりやがてちよくしをたてらるゝ、頼光ちよくめいかうふり、いそきだいりにあからるゝ、内よりのせんじには、汝は急きたんしうにはつかうし、人をなやますくせものを、たいぢせよとのちよくぢやう也、頼光ちよくめいかうふりて、あつはれ大事のせんじかな、誠に鬼神はへんげものなれば、ちりやこのはに身をへんげ、ほんぶのまなこに　見つけんことはかたかるべし、まなこにさえぎる物ならば、いかなるてんまやくじんなり共てつへきをもふみやぶり、手の下にうちしたがへ、しんきんをやすんぜ奉らんと、つゝしんでお

請を申御前を立やかたを、さしてぞ歸らるゝ、したくになれば、ことば八々を近付、此度はつねの打手に替りたり、神の力を頼まんと、綱金時はくまのへ代參すべし、定光末武はすみ吉へ、地かゝり傳頼光はほうせうをともなひて、あまた供人引くしてやわたの山へそ三重參らるゝ、お山になれば、鬼神たいぢの御りうぐはん、十二人のかぐら男、八人のやをとめほうへいをさゝけ、神前にてみゆを參らせ三重給ひける、あら有がたや、きねがたもとになるすゞの、神の御聲そひてあらた成ける、御たくせん、我ほんぢ、じやつくはうを出しよりも、すいしやくわくはうのひかりをあらはし、ふんたんとうこのやみを照し、まつせの衆生をまもらんため、此岩清水の、きよきながれにかげをうつし、君もそくさい氏子はんじやう、きんじやうさいはい〳〵、鬼神をはやくたいぢせよ、かけ身にそふて守るへしとて、神は上らせ給ひける、かゝり頼光なのめに思召、あらたに御ぢけんかうふりてやかたをさしてぞ三重歸らるゝ、やかたになれば、定みつすへたけ綱金時も、あらたにれいむをかうふり、ことば同下向申さるゝ、頼光仰けるやうは、此度は人あまたにてはよろしからず、以上六人山伏にさまをかへ、山ぢにまふふぜいにて、鬼が城にみだれ入、いかにもちりやくをめくらしてたばかつて討べき也、用意せよ、承り候と、思ひ〳〵のはらまきをしだひしたひに三重かさりけり、先頼光のおいの中にはらんでんくさりと申て、ひおとしの御よろい、しゝ王の甲にちすいと申て二尺八寸有ける金作りの御はかせ、しひにんにくの衣の上に、わつそくにむすんではき、たいぞう、こくしきのはゞき、八つめのわらんづしめはいて、さもゆゝしくこそみへ給ふ、かゝり傳ほうせうはむらさきおどしのよろひに、岩切とて、四尺八寸有けるが、ふたへにかねをのべ付て、三そくあまりにねち切、おいに入てぞかけてんけり、綱はもえぎのはらまきに、同げの甲をそへ、鬼切とて四尺七寸有けるぬけば玉ちる計り成を、ゆんでのわきに覺へける、定光末武金時も、思ひ〳〵のぐそくを入、心々のつるぎをはき、さゝへと名付さけを入、火うち付たけほらのかひ、こんがうづるをつきつれてすでに、みやをこを三重

## 頼光山入道行

出らるゝはやあけがたの、山のはに、月も雲かゝる、かげにかつらの里とかや、さをなぐるまのはかなさは、うしもつなでをほぶらん、いさむ心はくつかけのふむ、こまのあしなみはこばせて、地さかゑるおにおひのさか、なをしんりきのみしめなは、むかふあくまをきりしきみ、ほうらいぎうはいるなれば、せんしう、ばんぜいのかめ山に、よろこびのきたくをいそかんと、大江山のふもとなる、かの姫むろにぞつかれける、ことば是よりすゑは道もなし、いかゞはせんとおもふところに、しばかるおのこにゆきあふた、らいくはうちか付いかに山人、此國のせんぢやうがだけおにがいわやはいづくぞや、をしへてたべとありければ、さん候あれ〳〵御らん候へ、まづみなみにあたつて、かすかに見ゆるたかねあり、しろく物のみへけるは、おそろしきおにがじやうよりながれて、おつるたきのみづちしほにみゆる、時もあり、地又其みねのあなたこそおにがさいしよと聞からに、じんりんさらにゆくことなし、なふきやくそうと、おしへてこそはのとをりけれ、かゝりらいくはうなのめにおぼしめし、さ有は此みねこせやとてたによ、みねよと三重こされける、じんりんなければ、あるひはたかねのくもにまくらをそばだて、いわもるみづにてのんとをうるほし、がゝたるやまのそはづたひ、ことばつゆなめらかにしてかゝりあしをつまだて、木のねにとりつき〳〵こゝろをくだきもをけす、ことばすさんろしゆ川とより、あめなふしてこうずひころもをうるほせり、見あぐればばんじんのせいげつしのきをけづり見おろばせんじやうのへきたんあひにそみたり、地みゝにふるゝものとては、みねにこつたふさるのころ、ゆきのしたゆくちり〳〵みつのをとをのみ、地しづがつま木のおのゝおと、心ほそさはかぎりなし

とある岩まをみれば、しばのいほりの其中に、おさなき三人おはします、頼光立よりいか成人にてましますぞ、おぼつかなしと仰ける、さん候一人はきしうおとなしさとの者、今一人は津の國かけこのこほりのもの、又一人は都近き山城の者成が、此山の酒天どうじにさいしをとられ無念さに、此比爰に來りて有、偖きやくそう立をよくみるに、ちよくめいを

かうふり、かれめが打手に向ひ給ふと覺へたり、我我せんたち申べし、先おいをもおろしつかれをもはらされよ、頼光聞召、近比御情とこそ存れ、いかにめん〳〵しばらくやすらい候へ〳〵、畏り候と其時おいをひた〳〵〳〵とおろし、しばいにおりゐてやすらひける、時にさゝへの酒を取出し、兩三人のおきなへは酒をさま〳〵、にすゝめける、地ことおきなのめに思召、鬼を討べきはかりこと、きやくそうたちに語べし、かの鬼つねに酒をのみ、ゑいふしたる物ならは、わか身のうするもしらぬゆへ、酒天どうじと名付たり、此三人のおきなこそ、めいよの酒を持參せり、其名をしんへきどく酒とかく、神のほうべん鬼のどくとよむ也、此酒をあたへゑいふしたる所をうち給へ、ふさぬさきにはかならず御むようとて頼光に下されけり、今一人はながへのてうしを取出し、是もむかし神代の時、鬼と國おらそひの有し時、此てうしにて、酒をくみ、鬼神をたいぢし給ふ也、口の二つ有事は、かゝりどくと藥のへだて也、ゑのながくはんべるは、命ながへのゑんきをかたとり、此てうしにてくむならば、くだんの酒はいつみと成、のむ共くむ共よもつきじとて、頼光にたびてんげりことば今一人はほしかぶとを取出し、是も昔神の軍の有しとき、正八まん大菩薩あくまをしりぞけ給ひしときめされたる甲也、これをちやうだい致して討給へ、たとへばばんじんが力をへねつてつをわかしかくる共、すこしもしさい候ましとて頼光にぞ下さるゝ、かゝり三どちやうだい仕り、儕は三社の御がみの、是迄げんとうめいはく也と、かん涙きもにめいじて、なふ有かたかりける次第也、かゝりさあらば打立給ふべし、猶々道引申さんと、先達してこそあゆまれけれ、かうざんふかき谷迄も、かゝり夢ぢをたどることくにて、鬼が城の山口成、ほそことば谷川にぞ着給ふ、此川を上り給へ、やがて程こそちかからめ、かゝり一人はくまの權現住吉の大明神、正八まん大薩と、けすがことくにうせ給ふ、かゝり六人の人々は歸らせ給ふ御跡を、やゝしばらくらいはいし、川かみさしてのぼらるゝ、此人々の御有樣、有かたしとも中々申、斗りはなかりけり

## 第四

かくて其後、地いろ六人の人々は、ことばをしへにまかせ川上にのぼり見給へば、十七八成上郎の、あけのちしほにそめかへしたる御小袖、涙と共にすゝがるゝ、ことば頼光立より、御身はいか成人にてましますぞ、さん候みづからは、都にて花ぞのの少將の、地一人姫にて侍るが、あるよ鬼神にとらはれ、此所に來りたり、戀しき父母や、おちやめのとにあひもせでうれいうきもつらきもとゞめたり、地いまだみづから一人にかきらず、くげかたの上郎達、十四人迄ましますが、酒天どうしといふ鬼が、かなしきかなや上郎達のかいなをぬきもゝをそき、酒と名付てちをしぼり、のみける事のあさましや、いとをしやほり川の中なこんの姫も、けさちをしぼられ給ひしが、其御小袖をみつからが、是にすゝぎ申ぞところを上てぞなき給ふ、頼光御覽していとふなけかせ給ふなよ、我々帝のせんじかうふり、此山の鬼神をたいぢし、御身たちをやがて都へくそくし申さん、鬼を討べき其じこく、道引給へと有ければ、地姫君よしを聞召是は夢かや、うつゝかや、なふ其ぎにて候はゞ、さあらば道引申べし、去なからみづからが、今迄爰になが居して、いか成うきめにあはんとて、なく〳〵歸らせ給ひける、ことば頼光なのめに思召、いかにめん〳〵あらうれしや、もはや鬼神はうつたる物ぞ、尤々日暮ぬさきに岩やに入べし急々とこそ、いふやいなや程もなく、鬼が城にぞつかれける、ようじんきびしく打みへて、石をたゝみてついぢをつき、山をうがちて門を立、岩を割てとびらとなし、ことば偖其内にはくろがねのもん有番の鬼共是をみて、此程は人をこびける折ふし、ぐにん夏の虫、とんて火に入とはかやうの事をいふやらん、出々引さきくはんととんでかゝる、中にも心有鬼が引とめ、やあしばらく〳〵、かくめづらしき酒肴下にてはからひたべんより、先かみへ申て御意次第にたべんといふ、此義は然るべしと童子へかくと申、童子聞て是はふしぎの次第かな、何さま對面申べし、それこなたへと申せ承り候と、かゝり六人の人々を、をくりゐんのきは迄しやうじける、其時なまぐさきかぜ吹て、らいでんいなづましきりにして、ぜんごをばうずる其中に、せい高く色うすあかく、かみはかぶろにをしみたき、

かゝり大がうしのおり物に、くれないのはかまをき、てつちやうをつゑにつき、あたりをにらんで立たりしは、偖身のけもよだつ計り也、ことばどうじ申さるるは、我すむ山はつねならず、すせきぢやうの谷よりわき立雲のなみきりふりかすんて道もなし、そらをかくるつばさ地をはしるけたもの迄、道なければくる事なし、ましていはんや人間の身として、そも天をかけつて來るかや、かたれきかんと申ける、ことば頼光聞召、御ふしんは尤也、我等か行のみなかみゑんの行者といひし人、道なき山に道をふみわけ、ごきぜんきあつきとて三人の鬼神の有に行合、しゆもんをさづけゑじきをあたへてはごくめり、されは此きやくそうもおなしながれをくむ、本國はでははのはぐろを出、大みね山にとしこもる、漸々春にも成しかば、都一見の其爲に、夕へよをこめ立出る所に、せんやうたうよくふみまよひ、思はずも爰にうかれきて、童子の御めにかゝる事、是ひとへにゑんの行者の御引合と存也、誠に一じゆのかけ、一がのながれをくむ事も、皆是たしやうのゑんぞかし、ことば酒を持せて候へは、おそれながらもとうじへ御酒一つ參らせあげ、我らも是にてよもすがら、酒もりしてなくさまん、一やの宿をかし給へとけに有さふにの給へば、どうし聞てもとより望む事なれば、酒と聞より悦びて、それ〳〵きやくそうこなたへと、ゑんの上迄しやうじける、ことばかくてとうじ人々に打むかひ、さらばとうじもきやく僧達に御酒一つ參らせん、夫それと有ば、承り候と十七八成上郎を二三人つかみよせ、いたはしやなあさましや、うたかのゑをうつ其ごとく、かいなをぬきもゝをそぎ、酒と名付てちをしぼり、ことばさかつきそへてどうじがまへにぞ置にける、どうじ盃取上なにがしたべ申さんと、一つうけてさらりとほし、頼光にさしければ、頼光盃取上、一つくんでさらりとほし、綱にこそはさゝれける、綱さかづきちやうだいし、さし請、引受つゝけて三ばいほし、しゆつふうといひてこびたいをはたと打、偖々おたんな申、かゝにきく酒、ゆどの山にはつまかくれさけ、はくろさんのとなりしらず、くまの山がのほい〳〵酒とて、ことばあまたのめいしゆをたべ申たるがなふ、なかんつく此酒は、あらおごりかなく是ぞめいしゆとほめにける、どうじなの

めに悦ひ、それ〳〵さかなはなきかとある、今切たると打みへてかいなともゝをばんにすへ、どうじがまへにぞ置にける、それ〳〵こしらへて參らせよ、承るとて立所を頼光おさへて、とてもの事に某てれうりしてたべんと、こしのさしそへすはとぬき、ししむら四五寸切した打してぞしやうくはん有、綱御情のふるけれは某もとて、鬼のかうぶつ手の内のししむらをかいつかみ、さもむまさうにむしり〳〵としがみける、どうじ見て偖々きやく僧達はいか成山に住なれて、かくめつらしき酒肴、ふくせらるゝそふしぎなれ、其時頼光御ふしんは去ことなれ共我等が行のおもてとしてじひにて給はる物なれば、たとひ心にそまず共、じたいにおよふ事はなし、ことにかやうの酒肴本來くうの人げん、打も打るゝも夢のたはふれ、そくしんそくぶつ是也、くうに二つのあぢはひなし、あら有かたやとらいすれば、とうじもかへつて頼光にらいをなし、心にそまぬ酒肴、參らせけることはづかしやと、心打とけ見へければ、ことば其時頼光綱にむかひ、それ〳〵とあれば、承り候とくだんの酒を取出す、頼光仰けるやうは、おそれながら某持參の酒どうしへ一つ參らせん、御心みのため一つくんでさらりとほし、どうしにこそはさゝれける、とうじさかづき取上、一つくんでさらりとのむ、誠にしんべんきどくのさけ、其あぢかんろのごとくなればさし請引うけ、のむほどに、かやうの酒をのむ事は、是が一ごの初也、我さいあいの女有、よひ出してのませんとことば國たかの姫と花そのゝ姫をゆんでめてにそ置にけり、其時らいくはうそれそれとあれば、綱承り上郎達へともりながす、其時どうし立あがり、いで〳〵我せんぞをかたりきかせ申さん、本國はゑちごのもの、山寺そだちのちご成が、ししやうに、ねたみあるゆへに、あまたのほうしをさしころし、ことば其よにひろい山に行、わかすむ山と思ひしに、でんけう大師といふほうし、我たつそまとておひ出す、力およばず此山に來りしを、こうぼう大師といふほうしに、ふうじこめられかなはずし、それよりかはちの國、かづらき山にこもりしを、笈をもふうじておひ出す、それよりこうぼうはかうや山にこうちやうじ、其後はさやうのほうしもなきにより、又此山に立かへり、都よりはほしき

女を取よせ、るりのくうてんいらかをならべ、女に手あしをさすらせおきふしぬ、いか成ていわうの身なり共、是にはよも過ざらじ、され共心にかゝりしは、ことばみやこにかくれなき源の頼光とて、大悪人の兵有、かれがけんぞくにつな金時定光するゑたけほうせうとて、以上五人のくせものありそれをいかにといふに、去年の春いばらきとうじを都へつかはし候時、渡邊の綱に行あひ、ゆんでのかいなを打おとされしが、ついにかいなを取返し、今ははやしさいなし、きやつはらがむつかしきゆへ我はみやこへ行事なし、此しやうくはくをかまへしも、きやつばらをふせがんためなり、かゝりいか成しんつうをえたる兵者なり共、是まではよも來らし、きやく僧いかにとかたるやいなや、あらすさまじや色かはりて、しゆてんどうじは頼光をめをもはなさず打ながめ、かゝり御身かまなこをよく見れは頼光かと覺へたり、偖其つぎはいばらきが、かいなを切し渡邊ノ綱にて有、殘る四人のもの共は、定光末武金時ほうせうかと覺たり、ことばいぶしう候お立あれ、是に有あふ鬼共よ、心ゆるしてけがばしすな、我にも罷立ぬると、てつぢやうをおつ取色をかへて、そひしめいたり、ことば頼光ちつ共さはかず、袈をちんじそんじなば事の大事と思召、につことわらつて、是は近比御情共なき御ことばかな、日本一の兵に此きやく僧かにたるとや、もと竹もするゑ竹も名を聞だにも初也、ましてめに見る事はなし、只今仰をよく聞は大悪人と承る、あらもつたいなやあさましや、さやうの人にはにるもいや、我らが行のおもてには、ものゝ命をたすけんため、さんろを家とする事はうへたるこらうにちきをあたへ、うしやうひじやうをたすけんため也、しやかむに佛のいにしへ、らかん仙人にわかれ給ひ、せつせんにいらせ給ふ、則御名をせつせんどうしと申、ある時山ちを通らせ給ふに、ふるき谷のそこよりも、しよぎやうむしやうぜしやうめつほうととなふ、せつせんふしぎに思召、谷にさかりて見給ふに、九そく八面の鬼神とてかしらは八つに足九つ、さもすさまじき鬼ぞ有、せつせんどうじの給はく、只今となへし四くのもんいまだ二く有べし、とてもの事に殘りしもんをさつけよとある、鬼神こたへていはく、さづけん事はやすけれ共うへにのぞんで力なし

何にてもにくたいをぶくしなばさつけんといふおつての給はく、やれきなくとよ、それにくたいはぐわらくのごとし、石かはらよりむさき身を今たつときもんにかへて、衆生の本くはいにたすけん事こそ本望なれ、殘りしもんをさつけなば汝がゑぢきに我ならん、鬼神なのめに悦び、其義にて候はゞ、殘りしもんをさづけんと、かゝりしよぎやうむじやうぜしやうめつはう、しやうめつゐじやくめついらくととなへければ、あら有がたやとらいはいし、きしんの口へとひ入給ふを中にてすくひ奉れば、鬼は則八大大日、せつせんどうじはしやかむに佛、又有時には是やこの、地はとのはかりに身をかけしも、皆是いけるをたすけんため也、是にありあふきやく僧達も、おなじ行にて候へば、ことば何にてももん一つさつけ、はや〳〵命をめさるべし、露ちり程もをしからしと、かんたんくだきてのべらるゝ、ことばとうじ是にたばかられ、仰を聞は有かたや、きやつはらか是迄はよも來らじとは思へ共、つねに心にかゝるゆへ也、ゑいてもほんじたがはすや、あかきは酒のとがぞかし、おにとは思召れなよ、我もそなたの御姿、

打見にはおそろしかれ共、なれてつぼひは山伏と、うたひかなでゝずんと立、ことばさかづきをほうせうにさす、そば成とらくまどうしにまへとある、ずんと立てぞまふたりける、くもゐより、そら山伏がおち來り、酒や肴のかざしとぞ成おもしろやと、をしかへしをしもどしぶてうほうとぞしやべりける、ことば此歌の心はくもゐとは都の事、そら山伏とはにせか正じんか、引さきくはんといふ思ひ入なり、あらかしこき鬼めらかなと、心の内はおかしけれ共はをくいしめてどつとほめてぞとをしけれ、ことば其さかづきをへんれいのため石くまどうじにさす、つなは立てそまふたりけり、本ふしとしことに鬼のしこくさおゆる共、春の花みに、切てちらさんと、きつけうをいはふ歌の心を聞しらで、鬼共は手をたゝいて、たゝおもしろやとかんじける、ことばとうじさしきにたまりかね、いかにきやく僧たち、某が代官には二人の女を殘し置、こよひは酒をのふで遊び給へ、明日御めにかゝるべしと、かゝりあらおかのしやうじをおしあけて、よるのふしどにさし入ぬ、有あふ鬼どもは是を見て、こゝやかしこにふしたるはよねんもな

ふこそみへにけれ、ことば頼光二人の姫を近付、いかにかたゞ〳〵鬼のふしどを道引給へ、こよひ鬼神をたいらけ、明日かたがたを都へ送り申さん、なふ是は夢かや、ことばあゝおとたかし〳〵、しづまり候へしづまり候へ、なふ其義にて候はゝ、御ようゐあそばせめん〳〵と、おの〳〵物のぐかためける、此人々の心の内、いそがはし共中々申、はかりはなかりけり

## 第五

かくて其後、かゝり頼光出立には、はたにはくさりかたひらに、らんてんぐさりと申て、火おどしの御よろひしゝわうの甲に同三社の御神より給はりし星甲をき、ちすいといふつるぎをさし、なむ八幡大菩薩と、しん中にきねんして、さきに出させ給ひける、かゝりのこる五人の人々も、思ひ〳〵のよろひをき、心心のたちをはき、女房達を先に立、岩〳〵をさして入給ふ、ことば時に定光こゝをひそめ、鬼にとられしものあらば、ひそかに是へ出よとあれば、其時岩やの内よりも、我をもたすけ給はれと、すそやたもとにすかり付たる有様は、誠につみふかきざいにんが、ごくそつの手に渡り、とうくはつぢごくにおとされしを、ぢぞう菩薩のしやくぢやうにて、すくひ給ふもかくやらん、かゝり女房達のあんないにて、ことば岩やの内をみ給ふに、十七八成上郎の、かいなをぬかれもゝをそがれ、あけにそまりておはします、頼光御覧じてあれはたれやの姫君ぞと、あればほり川の中なごんの姫と申さるゝ、頼光立よりいかに上郎、みな〳〵都へ歸らせ給ふが、御身はのぼらせ給はぬかとあれば、地いたはしや姫君は、かすか成いきの下よりも、あらはつかしやあさましや、かく成はつる有さまを見せ参らするはかなさよ、あらうらやましの人々や、我はきのふの晝の比、かいなともゝをそがれ、いまた命のきへやらでかくくるしみをうくる事、哀とおぼしめされよときへ入やうにぞ、なき給ふ、地おつる涙のひまよりも、いかにかたゞ〳〵、都へのぼらせ給ひなば、父母の御かたへ、かたみをことつて申へし此、くろかみを切てたべ、頼光それ切て参らせよ、承り候とやがて切て参らせける、地又小袖はみづからか、今はの時迄も、身にまとい

ける小袖なり、母のかたへ届てたべ、雪のまどのおれたけの、よはさかさまの事なれど、我をみるよと思召ごせ吊て給はれと、念比に届てたべとうれいふし涙と共に申さるゝ、地上郎立は取付て、いとをしの御事や、かくおそろしきちごくにも、御身に心がひかされて、跡に心が殘るとてうれいふしすかり付てなけかるゝ、諸子の哀と聞へける、頼光御覽じてけにどうりなり去ながら、心つよくも待給へ追時むかいをこし申さん、末頼もしくもましませと、女郎立を先に立どうじがねやへぞ三重忍はるゝ、かゝりくうでんろうかく打過て、鐵の御所と名付くろがねにてとびらをかまへ、あかゞねのくはんぬきさし、中々ほんぶの身として入べきやうはなかりけりこうしの隙よりみてあればともしびかすかにかゝげ、酒天どうじが有様は、よいのかたちに引かへて其たけ一丈斗にて、手足はくまのごとくなり、かゝりかみはあかくてさかさまにおひ、まゆげしげり四方へ手足をなけ出し、ゆたかにふしたる其すがた、身のけもよだつ斗りなり、かゝり内へ入へきやうもなし、いかゞはせんと有所へ、三社の御神あらはれ給ひ、いかに頼光心やすかれどうじが五たいを八方へつなきて有きる共つく共しさいはあらじ先頼光は首をきれ、殘りし者は足手五體を切べしと戸平をさうへおしひらきけすがことくにうせ給ふ、人々悦びみたれ入其時どうじめをさまし、なさけなしとよきやく僧達、僞なきとの給ひしが鬼神にをうとうなき物をと、大ごゑ上ておめく聲山もくづるゝ斗りなり、ことば頼光ふり上丁と切、五人の人々も足手五たいをつだ〳〵に切、其時どうじがくび頼光のほしかぶとをめがけくい付、人々立より切給ふ、されども神のはうべんにて、其身にしさいはなかりけり、けんぞく共があまさじと、我も〳〵とかゝりあふ、心へたりといふまゝに、四ほうへはつとおつちらし、有し所へさつと引、ときにいばらきとうじあまさじとかけ出る、渡邊ゑたりやあふとむずとくみ、うへを下へとかへしけるが、いばらき力やつよかりけん綱を取ておさへたゝ一口とせし所を、頼光はしりかゝつて丁ときる、殘りし鬼共おつふせ〳〵切ふするかゝり僭それよりもどうじが首を都へぢさんし、御かどへさし上奉る、數の御はうび下さるゝ、偖其後は國もゆたかにおさまり

ける、千秋萬歳めてたし共中々申斗はなかりけり

右此本は太夫ぢきの正本をもつて板行致し候されば初心稽古のためこと〴〵くかながきにしてふししやうくぎり三味線ののりかたほどひやうし三重おくりのしな〴〵ひみつを殘らずあらはし出板行し也

京寺町通二條上ル町　版元　鶴屋喜右衞門
江戸通油町　鶴屋喜右衞門

酒天童子終

# 念佛往生記

## 第一

行水のながれはたえずしてしかももとの水にあらず、淸くやはらぐ源の、たう〳〵ぜんとしたゝるとはげにいちじるくぞ聞えける、爰に流人前ノ右兵衞ノ佐賴朝卿、其威漸東關万里にふるひ玉ひ、ゐながらをんでき追討のヲロシぐんりよの程こそ、大やうなれ、地先々木曾がらうぜきをしづめて後、平家の一族いづく迄も追つめて、ねを切て葉をからし目出度がいぢん有べしと、引手になびく靑柳の枝をつらぬる御兄弟、御代官に立玉ふはよに賴母敷ぞおはしける、地色偖追手の大將軍には蒲ノ御曹司範賴、搦手の大將軍には九郎御曹司義經、相したがふもうしやうには和田ノ小太郎義盛、秩父庄司次郎重忠、平山ノ武者所季重、しのとうのはたがしら、熊谷ノ次郎直實同子息小次郎直家、佐々木ノ四郎高綱梶原源太景季なんどを先として、都合其勢六万余騎、壽永三年正月下旬に東寺四つ塚とばなは手に大まく打せぢんを取、平家の一族追討の軍ヲクリ「評定取々なり地色中にも大將軍蒲御曹司範賴卿、軍配團押取のべ、詞抑此度平家の一類たてごもる、攝津ノ國一の谷の城郭といふは究竟の要害ときく、先東は生田の森を追手の木戸とし、らんぐゐさかもぎくはい〳〵たり、西は又一の谷をかぎり、大ばんじやくをたゝんで搦手の木戸口くはう〳〵たり北は大山てつぺきをたゝみ、南は荒海ほんらん山をうごかし、四方ぎゝとしてよん所なし、口せばく奥ひろくぶんないくはうだいなりとかや、偖城の表の高櫓に、四國鎭西の手だれの兵甲冑弓箭をたいして、うんかのごとくなみゐたり、櫓のまへには鞍置馬共十重廿重に引立、すはといはゞ馳出んやうにかまへをき、つねにたいこをうつてらんしやうす、一張の弓のいきほひは半月のむねのまへにかけり、三尺の劒の光は秋の霜、こしの間によこたへたり、高き所にはあかはた多く立たれば、春風にふかれては、靑天にへんぽんしたゞ火焰れつ〳〵ともえ、あがるにことならず、かゝるするどき、城郭に、山陽道八ヶ國南海道六ヶ國都合十四ヶ國を打したがへ、たてこもり軍兵十万余騎、みかたの勢に一

ばいせり、前はひかた後はけんその、てつかいがだけひよどりごへ追手も、搦手も中々、ぐんりよに及ばずいかゝは、せんとぞ仰ける、御しやてい御曹司義經謹で承り、仰は左にて候へ共それ、軍といつぱ勢の多少によるべからず、千尋の堤にしやくすいをそゝぎて洪水をみなぎらし、はんじやうのみねよりゐんせきをなげうつて、大敵をほろぼすのじゆつ是大公望がひせし所、しよせん六萬騎を五萬騎は御はた下にぐせられ、追手ぐちより無二無三にせめ入玉へ、某は殘る壹萬騎をいんぞつし、山共谷共いへ、人間の及びがたきかまてつかいがだけなり共、鳥さへかよふひよ鳥ごへ、平家の城のまんなかへま一もんじにかけおとし、相圖の煙をあげほら押取てふれならさば、追手よりもみ入玉へよし、大ばんじやくをさぐつて幾萬騎こもる共、百しうのほらにもうこが飛入ごとく、みなごろし仕らんとさもいさぎよく宣へば、地色中範頼を始め奉り、諸將此義に同じつゝさあらばはや〳〵打立べし、明日五日は西ふさがり六日はだうこ日七日のうのこくには、必々一の谷東西の木戸口にて、源平の矢合と各一圖に相定め、幸今日は吉祥日と、追手搦手手分をし蒲殿は攝津ノ國、義經は丹波路を山共海共なづみなく、よしやとはする義經の軍慮の、程こそ三重「ゆゝしけれ去程に地色追手の大將軍蒲ノ御曹司範頼卿、五萬餘騎を一圖にしめ一の谷の追手口生田の森に押よせ玉ふ、搦手の大將軍九郎御曹司義經は、壹萬餘騎を二手にし土肥ノ次郎實平に、七千餘騎をさしそへて一の谷の西の木戸へぞつかはさる、我身はわづか三千餘騎にて一の谷の後なる、ひよ鳥ごへを落さんとむかはれけるこそ三重「おそろしけれ、爰に又、地色熊谷平山は六日の夜半計迄搦手の在けるが、熊谷は平山にをくれじとまだ夜ふかきに子息小次郎直家と只二人はたさし一騎召ぐして、頓て打立出にけり、熊谷其夜の裝束にはかちんのひたゝれに赤がわおどしの鎧をき紅ゐのほろをかけ、こんだくりげと言聞ふる名馬に乘たりけり、子息小次郎直家はおもだかを一しほすつたるひたゝれに藤繩目の鎧をきせいろうと云月毛の馬にぞ乘たりける、偖はたさしはきちんのひたゝれに小櫻をきにかへしたる鎧きて、きかはらげなる馬に乘主從三騎打つれて、落さんずる谷をば弓手になし チクリ馬手

へあゆませ急ける、地色まだ夜ふかければ土肥ノ二郎が七千餘騎にてひかへたる陣所をば夜にまぎれ、そつとはせぬけ一の谷の西の木戸にぞ押寄ける、熊谷子息の小次郎に云けるは、詞此手は惡所であんなれば、我も〳〵と先に心を懸たる者多からんいざ地色名乘らん尤とて、かいだてのきはにあゆませより大音聲をあげて、詞武藏の國の住人熊谷ノ次郎直實、嫡子小次郎直家、今日一の谷の先陣ぞやと名乘ける、地色やゝ有てあとより武者こそ二騎つゞいたれ、熊谷たぞととへばいや季重なるか、詞さいふは又たぞ、直實ぞかし、して又熊谷殿はいつよりぞ、よひよりとこたふ、ヱゝ季重も地色頓てつゞいて寄べきを、成田五郎にたばかられ今迄ちゝし無念、至極と語りける、地色角てしのゝめ明ければ熊谷先に名乘たれ共平山が聞前にて、又名乘んとや思ひけん、詞抑以前名乘つる武藏國の住人、熊谷次郎直實同小次郎直家、地色一の谷の先陣ぞやと名乘ける城の内には是を聞、夜すがら名乘熊谷父子をいざ引さげてこんとすゝむ平家の侍には、越中ノ次郎兵衞盛繼上總の五郎忠光、惡七兵衞景清後藤内定經を先として宗徒の兵廿餘騎木戸さかもぎをひらきおめいてこそは出にけれ、地色爰に季重はしげめゆひのひたゝれに、ひおどしの鎧をき二つびきれうのほろをかけ、めかすげといふむまに乘、はたさし一騎打具しつゝたちあがつて名乘ける、保元平治の軍に先懸して高名せし、武藏の國の住人平山の武者所季重參りさふと云まゝに大長刀をふりまはしあたるを幸にきつておとし、熊谷かくれば平山つゞき、平山かくれば熊谷つゞき互に、我をとらじと入かへ〳〵、名乘かへ〳〵、火出る計せめければ平家は手いたくせめられて、城の内へさつと引はしつて門を丁と打、只ゑとれやゑとれと下知をなし、しのをさすが如くさしつめ引つめ三重ゝゑたりけり地熊谷馬のふとばらをゐさせ、弓杖ついておりたてば子息の小次郎は、弓手のかいなをゐさせ是も馬よりおり立て父とならんで立たりける、詞いかに小次郎手を負たるか、地色鎧ずきをつねにせようらかゝすな、やれしころをかたぶけよ甲をゐさすなと敎訓し我身に立し矢共をかなぐりすて、城中をはつたとにらんで大音あげ、詞越中の次郎兵衞上總の惡七兵衞能登ノ守はおはせぬか、此熊谷父子におりあひくめやくめ

とのゝしれ共、地城の内にはをともせずゐるやは雨のごとくなり、されども源氏の兵少ッ共ぎゞせず、しころをかたぶけ鎧の袖をかざし此木戸を乗とれ、乗とれとゑい〳〵ごゑしてをしよする、或は甲のまつかう、草ずりのはづれをゐ付られ手負死人は數しらず、地色中にも熊谷は小次郎が先に立ふさがらんとすれば、小次郎は父をいとひ我先にとかけふさがり、親は子をあはれめば子は又親をかなしみてしばしたゆんで見えにけり、地色中直實たんじて思ふやう、ァァものゝふの道程世にかなしき物はあらじ、我弓取の身ならずばかゝる思ひはあらざらめ、此世の外のくげんまで思ひやられて口惜やと、是にぞ一ねんほつきしてやゝ道心こそきざしけれ、地色中よしやよしかゝれとてこそ生れけめ、ことはりしらぬ心やと、心で心をはぢしめて引は返さじ梓弓、矢たけ心の一筋にこみ入者共ひるむなとおめき、さけんでよせにける是を軍の始にて、追手の大軍どつとよせ軍は花をぞ三重ちらしけるされ共平家の大勢あら手を入かへふせぎしかばさのみよはみも見えざる所に、からめての大將軍義經ひよ鳥ごへてつかいがみねより、平家の城の眞中へさかおとしに落し入、所々に煙をあげ相圖のかいをぞふかれける、是にぞ平家の大軍は一つ時にやぶれ一戰にも及ばずして、前なる舟に取乘て我も〳〵と三重落らるゝフシ荒いたはしや地色中むくはんの大夫敦盛はよひの管絃にふき玉ふ、青葉の笛を城中に忘れ置、取に歸玉ひし間に御座船沖に漕出る、四五反馬をおよがせて、扇を上てまねぎ玉へば大臣殿をはじめ一門の人々、あれよ〳〵と宣へ共其をりふしは引しほにて、大船のかなしさは水主梶取もだへても、さらに其かひわらいそのせんかたなみにこまをひかへフシあきれ、はてゝぞおはしける下詞かゝりける所にうしろより、熊谷の次郎直實、のがさじと追かけたり敦盛も、馬引返してなみの打物ぬいて、二打三打は打ぞと見えしが馬の上にて、引くんでなみ打ぎはにおちかさなり、熊谷取てをさへ内甲をみれば、二八斗の少人の、うすげしやうにかねくろくさもあてやかにらうたけたり、熊谷はつと思ひ、偖々御身は誰人ぞ御名乘ましませ、たすけ奉らんと有ければ敦盛につことわらひ、地やさしの人のことのはや、露よりけなる玉のをの、たへなばた

えね名乘はせじ、地色中とく〳〵くび取て人にみせられよ、あはぬ敵にはよも候はじと宣へば、まうこをあざむく熊谷もたよ〳〵と成て、天晴上臈やないづくに刀を立べきぞ、今朝一の谷にて小次郎が薄手を負たるだに其かなしみのせつなりしに、うち奉らば御一もん嘸なかなしみ玉ふらめ、ア、いくとせのよはひをへて何のみやうもんりよくぞやと、取て引立よろひに付たるちり打はらひ馬にかきのせ奉れば、うしろの山より源氏のぐんぜい是を見て、詞武藏の國の熊谷こそ敵とくみはくんだれ共、うたぬはしれもの二心熊谷共に打とれやとこゑ〴〵にのゝしれば地色熊谷涙をはら〳〵とながし、此上は人手にかゝり玉はんより、某が手にかけ奉り是よりすぐに發心とげ御跡とぶらひ奉らんと、なみだにこゑをふるはしてさも頼もしく申ければ、敦盛も御なみだをさへやさしの人のいひごとや、名乘るまじとはおもへども、我は經盛の末ゝ子無官の大夫敦盛なり、はやとくとくと有ければ熊谷は是を聞、さればこそよのつねならぬ御かたやとなをも涙にくれにけり、地色中敦盛敵のかたを見給ひ事急に候はや〳〵と、にしにむかひ念佛しかいしやくを待玉ふ、熊谷ぜひなく御くびを水もたまらず打おとし、たちをかしこになげすてしがいに覺えずいだき付しばし、涙にしづみしが、地色ヱ、よしなしな無三寶、是ぞしゆつりの門出ともとゞりふつつとかききり太刀もろ共に西へなげ、弓きりおつてつえにつきすぐに發心したりけるは、熊谷の所存の程天晴惡につよければ善にもつよしと世こぞつて感せぬ、人こそなかりけれ

## 第二

熊谷の次郎直實は今度西國の合戰に、嫡子小次郎討死せしよりおんあいのかなしみにやゝ發心におもむきしが、又敦盛を手にかけ申、彌むじやうを觀じ軍の場よりもとゞり切、都黑谷法然上人の御法を受阿じの一刀を引さげ、おんあいのきづなをばふつ〳〵ときりはらひ、おこなひすましてゐたりける心の内こそ三重「しゆせうなれ是に付ても、地中哀いやますむさしのゝ、月よ花よとそだちぬる直實の二人の子、あね清姫十五歲弟小太郎種直は、十三歲に成玉ふが

五つと七つの春の比、父直實國を出源氏がたにつきそひてつゐに古郷へ歸られず、あまつさへ去年の秋母もむなしう成玉へば、今はたよりもなぎさの千鳥よるひるわかぬ涙哉、地色され共父をたのめにてあけくれ待しもいたづらに、父さへうき世をすてをぶねのりのすがたとつたへ聞、なふなさけなやたとひとんせいし玉ふとも、親子のえんはきれまじきに歸りて見もしみへられんと、思召ざる御心底ア、おやながらもだうよくやとこゝろも、おしまずなき玉ふ、地色涙の隙より姉君はいかに小太郎、わらは女の身成共都とやらんへ尋行、父上の御めにかゝり尼法師共さまをかへ、母上の御菩提をもとひ參らせんとおもふなり、おことはいまだをさなければ姉がるすをやし玉はん、小太郎聞もあへずこはうらめしき仰かな、父共母共賴にせし御身にはなれ某が、いかでひとりはあられふぞ、其上我も父上にあひ參らせ度候へば、御供申候はんさあらばしたくましませと、今をはつかの旅姿あはれ、はかなき三重ㇾしだいなり

## きよ姫兄弟道行

あらいたはしや、清姫たねなを兄弟は、都とは西やらん、東共いざしらくものとうざいわかぬたびの空、おぼつかなくも出らるゝ、ヂクリ心の「内こそ、あはれなれあゆみならはぬ、道しばの、露か涙か、袖につらぬく玉川や、あとに霞のせきはあれど、もしやは人のおほいそと、とつかはとしてふぢさはや、薄紫の親子のえん、偖も七世のまごにだに、あへばあふとやうらしまが、玉手はこねの山こへて、西を遙にみしまぢや、弓手はさうかいまん〳〵として、みほのまつばらさゝんざと、ヂクリ嵐につるゝ夕なみに、げにうき嶋がはらからと、爰にふたごの山みへて、手に取やうにあしがらや、フシあしたか山もけをさるゝ、やえまく雲のおびをしてかのこの小袖ゆきながにだてを、するがのふじのやま唐、迄もたかきなを、もつやたごのうら、あづまからげのしほ衣、きてこそみたれ清みがた、かげもはてなきなみのうへヂクリ月の「くまなる、さよちどりともなふ人も、あらいそのあまの、小船か、こがれゆく末はいづくと遠江、はまなの橋の橋柱、立る心もよは〳〵と、と有木かげに立寄て、暫休らひ玉ひける、然る所に

東國方の人商人七八人打つれて跡よりも來りしが兄弟を急度見て、さあたゞ取山のほとゝぎす、しかも津がひをひつかけたかけた〳〵とうたひよる、地色されば共二人の人々はかゝる者とは夢にも知らず、詞なふ都の方へはかう參るかととはるれば人かひ共うなづきあひ、いかにも〳〵かう參るが、都へのぼらせ玉ふならば我々も京うち參り、地色いざ〳〵同道致さんといへば、地色こは嬉しや其儀ならばひとへに頼參らする、めんどうながら都迄送りとゞけて玉はれや、ヲ、少共氣遣し玉ふな、馬に成共かごに成ともすき次第にのせまして、ゆるり〳〵と參らふぞとそらいたはりののせことば馬よかごよと夕暮にあか坂宿にぞ三重一とまりける、宿のていしゆ地色立出さま〴〵にあいさつし、詞あのお子さまがたは御兄弟と打見えしが偖うつくしきお生つき、地色さぞ草臥させ玉はんに風ばしひかせ玉ふなと障子をへだてあなた成小座敷にしやうずれば、人かひ共は次の間に打くつろいでゐたりけり、地色兄弟は草臥よひより休み玉ひしが、人かひ共は悦びの門出をいはゝんと、さま〴〵肴をとゝのへさいつさゝれつさかもりし、互にきげんも四つの比一人が云樣は、詞何とあの兄弟は寺方へうるべきか、ぶしがたへうるべきかといへば一人聞て、いやなふ此比上方に、かふき子といふものはやりあのやう成うつくしきは二三百兩にもかふといふ、姉はむるいのきりやうけいせい町へうるならば、五百兩はした物ぞ、地色兄弟合て八百兩百兩づゝの分取ぞやよき肴ござんなれ、のめやきほへといさめるを姫君始終聞召、大きにおどろきねいりてましますを小太郎をゆすりおこし小ごゑにておそろしやあの者共が御身と我を都にて、うる談合を極めたり、して先何とせふぞいのたとひ忍び落たり共、晝さへうとき道しばの露ももらさじよどごゑの、あみうきめはかなしやと忍び涙にむせばるゝ小太郎、地色おどろくふせいなく、太刀引さげ立玉ふを姉君をさへ、なふ何と心得いづくへぞとの玉へば、いづくとはおろか也かたはしより切てすて、其上の思案ぞとふり切玉ふをいだきとめさりとては先しづまられよ、かれらはいふても大勢也、御身はひとりの小うでにていかでかなはんとにかくに、かれらがねいりし其隙に御身はそつと落られよ、わらはゝ跡に殘りゐて僞たらし間

をとらん、其内一足成共おちのびられよと宣へば、地色小太郎今はしほ〳〵と偖有がたき御心底、もだすはいかゝに候へ共、父共母とも頼にせし御身さまを殘し置、落られふ物なるか、詞只某が殘るべし姉君落させ玉へ、地色いやよわらはゝ世に有ても、有にかひなき女の身、御身は父の跡をつぎ家引おこす身ならずや、あしき事はいふまじき、姉次第にせよと有いやなふなんぼう宣ひても、御身さまを殘しては落じおちよとあらそふを、人がひ共聞付て障子押あけばつと入兄弟を取てふせ高手小手にからめ聲立させてあしからんと、さるぐつわをしつかとはませ、詞エ、都迄馳走してつれのぼらんと思ひしに、いらざる小ちゑがいになりさツてもよいざまなるはとて、地そば成柱にくゝり付今はちつ共氣遣なしゆるりとやすめといねけるはチクリなさけ「なうこそ見えにけれ、地色むざん成哉兄弟は、何のとがもやあらけなきなはめの上にさるぐつわ、なけ共こゑの出ばこそ、地色され共清姫心かしこくつく〳〵しあんし心をしづめ、そばに立たるとぼし火をチクリあしにて「そろそろかきよせて、地色柱の本迄にじりよせ、つなぎしなはをやきければ小太郎も打うなづきなんのくもなくやききつてしばられながらそつとぬけ、うらの方へ出けれ共めざすもしらぬやみのよにやぶかげ高くくらければいづくをそこ共しらねども、のがれ出たる嬉しさにむばらからたちそぎ竹のかゝるもつゝくをもいとはゞこそかほにてをしわけ押くゞり、かなたこなたとまよはるゝはめもあてられぬ風情なり時こそあれ日こそあれ、平山の武者末重は、本國へ下向とて其藪どなりにとまられしが、詞あらふしぎや、うらの藪の内と聞え犬のけはしくほえぬるは、いかさまあやしき物ゝ有と見えしやあ汝等、地色さがして見よとあれば畏て侍共、手々にともし火引ツさげ藪のきはにはしり出兄弟を見付、詞ヤアそれ成は何者ぞととがむれ共、地色とかうの返事あらざれば、若者共かけ入て引立てこそ來りけれ、地色末重見玉ひヲ、物いはぬこそことはりなれ、さるぐつわをはませたり先其轡をとれとて頓てはづさせ、詞して汝等はよし有者の子と見えしが、何のとがゆへかく有ぞまつすぐに申せ、地色清姫夢の心地にて、いやなふ何のとがも侍らはず東國がたの者成が、此八九年以前父上方へ上

られしが、我々を捨置遁世し、都とやらんにおはするよし餘戀しさやるかたなく、是成弟諸共に尋上り候所に、人商人にかどはされかゝるうきめにあひ侍ふ、なふどなたかは存ぜね共、かげをかくして玉はれと涙に、くれて宣へば、地色末重聞もあへず何東國のものとは若武藏の者にてあらざるや、詞ハァいかにも武藏の者にて候、フゥして、其父の俗名はいかに、地色荒恥かしやかく成はつる親のなを、名乘はよしな去ながら、難義を頼參らする身のつゝむ口はゞかり父の名は、熊谷の次郎直實と、いはせもあへず何直實の子達とや、こはいかにと走寄手づから二人のなはをとき、我こそ直實の朋友平山の武者末重よ、何末重さまとや是は誠か夢成かと、兄弟左右にすがり付、嬉しなきにぞなき玉ふ、末重涙ながら偖なさけなや人の親の、心はやみにあらね共子故に迷ふと聞つるに、旁は引かへて、地親故やみぢにまよふかやァ、孝行ふかき兄弟やと、さすりたてゝぞほめらるゝ、地色偖直實の發心の次第語りきかされ、都新黒谷と云所にて蓮生坊と尋玉へ、追付我も上るなれば必其節あふべきなり、詞して又人買共めがとまりし旅宿はいづく成ぞ、地色旁をなやませしとが一々に首をはね往來のみこりにせんいざ〳〵あないせられよと兄弟諸共家來をば爰やかしこに忍ばせ置我身はきんじゆ、地色四五人つれ忍び足して立さけば、内の體さはがしく主夫婦が聲と聞え、こはりふじ〳なされやう一めもしらぬせがれ共を何の故有ッてかおとし申さん夢にも存ぜず候となきわめけ共聞入ず、詞をのれ夫婦ならでたがしらふ、まつすぐにあかさずばつきころすぞきりころすぞと、地色さもあらけなくせちがふ所へ戸を押あけつつと入、詞是々れうじせられな暫またれよ、我々は道通り成が、夜中にことがましくこゑだかなれば樣子を聞てあつかはんため、して先何事ぞと有ければきやつらもしれ物ちつ共をくせず、いやいな所へさしづるもの哉、主人の仰を蒙り大事のめしうとつれ今夜此屋にとまりしに、是成ていしゆ夫婦めが行方しらずおとせし故、角がうもんしてをふ成が何と旁にかまふかと云、ヲ、さもあらば尤なれ共しらぬと云亭主をせめころされてゑきもなし、來りかゝつたるこそふしやう共々尋參らせんして旁の主人は誰人成ぞととはるれば、イヤサ、人頼する我々な

らず、主人の名が聞度ば坂東にかくれなき平山の武者末重と云人よ、何平山の武者末重とや、偖々世には同じ名名字有物哉、某も武藏ノ國平山の武者末重と云者成が、御分達が主人は坂東の内にてどの國成ぞととはるれば、地色人買共けでんしてとかうもいはずしりごみす、詞いやなふ、いかうぶきげんさうにみゆればいで機嫌直しに、地色お尋のめしうとに引合申さん、これ〳〵と宣へば兄弟つれて出らるゝ、詞是々にせ平山殿の御家來衆、是は某が同國熊谷の次郎直實の子共成が、いか樣のとがいたせしぞ承らんと有けれ共、地色只わな〳〵とふるひわなゝきいきたる體には見えざりけり、地色末重めぐばせし玉へば、侍達飛かゝり小手三寸にからめたり、ヲヽ心地よしいかに小太郎、御身いまだ若年なれば人をきつたる事あらじよきけいこぞと宣へば、姫君末重の袖をひかへ御長刀をかし玉へ、わらはも一手はならへ共人を斬たることはなし、耻しながらと宣へば、實さもあらんと長刀を姫君に渡さるれば、小太郎は太刀を拔兄弟互に入ちがへめぐるいんぐわの車斬手を盡してこそ三重「斬玉ふ思ひのまゝに、地はらゐせし偖末重に打むかひ、此度の御おんしやう生々世々に忘るまじ、はやお暇と有ければヲヽ某も在番に、追付上洛いたすなり其節おめにかゝらんと、互にいとまこひこはれわかれ〳〵に成玉ふ親孝行の志、しんめいぶつだの御かごにてあやうき所をのがれ玉ふと聞人、かんにぞたへにける

## 第三

いで其比は建久元年三月中旬の事成に、都の東北黒谷には、源空法然上人他力本願とて、くせう念佛をすゝめ給ひあまねく衆生を御さいど有、是はきたいのしんほうとて諸宗こぞつてなんもんし、黒谷のふもとうせんじにをしよせて日夜論談せられけり、地色爰に熊谷入道蓮生は、上人に付奉りもんだうにせいつかれ、小ゐんに立出遠見してゐられし所に、叡山の小ちご達座主の御供せられしが、蓮生法師を見付あれこそ熊谷入道よ、詞いざ西國の軍物語所望して聞んと云、尤とてつつと寄、なふ、御身は熊谷の次郎直實入道にてましますとな、近比なれ〳〵敷こ

となれ共、西國にての合戰に先御自分の御手柄偖判官辨慶景清なんどの手柄の段、地色一々語り聞させ給へと兩の手に取付かたれ〳〵とせめにける、地色蓮生ほうどもてあつかひ、詞ヲ、然らば愚僧も望有、是よりみへわたりたる名所舊跡ををしへ給はゞ語らんと云、地それこそやすき御事なれさあらば語り申さんと兩人扇をつ取てチクリ名所〳〵ををしへける

## 名所づくし

地まづひがしにたかくそびへ見えけるは、我立ッそまのひえいざんみやこのふじとも、又はうへみぬ、わしのみねとも名にたかし、そも此山と申は、くはんむでんけう御心をひえいして、御さう〳〵有しゆへひえいざんとは申なり、もろこしの天だい四方八千ぢやうの四めいのほらをうつし、諸一ねんみぜんの、きをあらはして、三千人のしゆとををきわうじやうの、きもんをまもり、あくまをはらふ、くも水は、是くはんをんのしやすい、かや、によいがだけより、くろだにのながれは白たへに、せいがい水のけぶりたち、チクリおぼろの、しみづ立よらば、つま木こる身も戀、すりやかげは謠やせのさと人せれうしづはら、おはらのねしやう、ぢんやじやかうはもたねどもにおふてくるはたきもの、おはら木、〳〵かはひかはひ、黒木めされよ、しばめさぬか、たきゞに花を、おりそへて、いふにいはれぬなりふりや、ふりさけみれば、西にきぶねや、くらま山ゆきになだかきひむろ山、したもえ出る春くれど、やまはそのままじろにて、小歌花かと見れば、こぞのふゞきよの、たにのうぐひす一こゑを、まつがさきより小歌二のせにつゞく、二のせつゞきのいちはらや、をの〳〵こまちが、もゝとせに、ひとゝせたらぬつくもがみ、みだれごゝろやくるふらん、ひろふこのみはなに〳〵ぞ小チクリいちね、かしねまてばし井、チクリはしばみ、かや大小かんじきんかんまどのむめ、そのゝもゝ、人まるのかきほのかきやまのべのさゝ、さゝぐり〳〵くりかへす、をとはのたきのしらいとの、いとほそやかにながるれど、ゆふ日あさ日のうつろひに、きらゝとみゆるきらゝざか名所のかずはおほけれど、ことのは草の露計あら〳〵御覽候へと、一々殘らず敎へしは實けう、有てぞみへにける、地色蓮生あく迄

聞すまし、此比のもうきをはらし忝しとていらんとす二人のちごはすがり付、詞何と契約の軍物語はいかに〳〵とあれば、地色今此身に成て軍の事は思ひ出すもけがらはし、あらもつたいなやとふり切て入ければ。二人のちごは興さめて追て奥にぞ三重「入に」ける、かくて日中にも成ぬとてろんぎのかねをつき出せば、諸宗の僧徒我先にとりうせんじにぞつめらるゝ、地色先一番にけんしん座主、しやうしん僧都じやうげんあじやりやうべんなんどを宗として、山門の碩學三十餘人、幷に南都の僧には蓮光坊明へん坊、大勸進の聖俊乘坊重源和尚を先として、此外有智の僧五十餘人、三井の大貳こうゐんを上首として、門徒のがくとう百餘人、法相三論けごん天台眞言五ヶの大乘は、左の方に、着座有、其外聽聞の有智無智數をしらずなみゐたり、法然上人は御弟子住蓮坊、安樂坊、蓮生坊其外少々召具して、左右にもくれいまし〳〵僧中央のヲクリいすに「寄居玉ひつゝ、地色先高聲に念佛を十へん計ぞ申さるゝ、僧東西のなりをしづめ、詞我とんせいの昔よりすいらうの今に至て、ひそかに尺尊御一代の敎文を披情しゆつりのようをあんずるに、げんに付みつに付其さとりたやすからず、事といひ理といひ修行やはか成がたし、只淨土をねがひ他力を賴み、名號をせうずるにしくはなし、有智無智の輩誰の人かきせざらん、佛法修行の中に是よりやすきは有べからず、但有や〳〵と仰ける、顯眞座主問て云、くせう念佛はひとへにくどんのきをかうぶるのみ、まつたく眞言上觀の妙行けごんせんもんのしうしにおよばんや、一もんふつうのぐはんろしやに、ざいごうをせいせずして何程名號をすすむる共、いかでか往生をとげんやいかに〳〵と有ければ、上人答ていや〳〵、くせう念佛は極善さいじやうの大法なれば、いか成極重惡人成共みだの名號をとなへ奉らば、其他力念佛に無量のざいしやう悉めつし、けつぢやう往生なにのうたがひかあらん但有や〳〵と仰ける、永辨なんじていはく、ざいごうまうねんはさもあらばあれ、自專せうねんして必往生すべき事をゆるさば、人皆あッくけんにぢうしてあくごうをおそれず、このんで衆罪をつくりまうねんをおこしかへつてあくしゆにだすべきなり、しからば一往先惡をせいし、妄をやぶるをもつてあんじ

んのおもてとし、そこうのつみをおそれしむべけんや上人こたへていはく、しよあくまくさしよぜんぶぎやう是佛のつねのいましめなり、しかるにざうあくのぼんぶも、念佛往生するとて全くあくごうをつくりまうねんをおこせと云にはあらず、ぐちのぼんぶさらにあくごうやめがたき事なげきてもあまり有、ァ、恐るべし〳〵、爰に彌陀の本願かくのごとくの凡夫をすくはんため、行ひやすき名號をもつて衆罪をてんせしむるのやから、事を他力によせこのんで大罪をつくるべけんや、忝も念佛は、しごく大乘にして萬善の妙體なれば、名號の六字にごうじやのくどくそなはるなり、地色只みだの本願を頼て他力名號をとなへよ、やあとなへ玉へと有ければ智海ゐだけ高になつて云、詞凡大乘眞實の理をあきらむるこれを實教と名付、又是心是佛のむねを存ず是をば頓教と名付、今此宗生佛一如の道理をもあかさず、ひとへにゑんりゑどのあんじんをすゝめ、じやくめつむじやうのじつぎをものべずして、わづかに欣求淨土の行ひをしごく大乘とは心得ず、地色天晴御坊はいづくの山の天狗ぞやそれは我執候なふ我執〳〵と、惡口して罰れば座中一度に口をそろへ、ヲ、我慢偏執のぐひんばうよとあざわらふ、地色蓮生腹にすへかねて、脇座よりつつと出から〳〵とわらひ、ェ、ふびんやな旁は、剃髮染衣はのせ事にてぐちまうまいの凡夫よな、己が自力にじばくせられ他力の大乘なる事をかつてしらず、げに井の內の蛙夏の虫にせいれうとや、忝くも他力の大道は廣太にして五ぜうひとしくつうにうす、ゑん〳〵ぐく〳〵むさうむねんの上においてむ方なんしの大用をおこし、うさうしゆ因よりぢきにむさうの樂果に入、是廣太の念佛大乘にあらずやと、地色血眼をいからかし、懷中より大なたを取出し振廻し〳〵、ゐぎにおよばゝ一々になぎたをさんずいきほひなり、地色俊乘坊おどり出持たるなたに取付給ひ、詞ァ、むかしの持病おこりたり、只今他力本願を大乘とえとくしたる大法師が、是はふしんゐの鉾さきなふ、折てもおれぬかや、地色只此鉾をはなされよとあればイヤサはなさじとねぢあひたり、詞して又是は自力か他力か、蓮生聞てヤ、誠に是は自力なり、地色ァ、面目なやあやまつたり、他力を頼むなむあみだ佛と持たるなたをからりと捨本の座に

こそつかれけれ、地色重源和尚こゑをあげいづれも座中へ申上る、詞凡此上人は凡人にあらず せいしさつたの化現と覺えり、地色さればくはんじんくはんぼうにさとくけうもんあたかもなめらかなり、しんいんまかせう、べんせつはふるなそん行ひはしゆぼだい、三敎一致の上人なれば日本國裏貴僧唐土天竺の智識晝夜こぞつて論ずる共、中々以て及ぶべからず各はともかくも愚僧はへいこう〳〵とよばはり玉へば南都北嶺三五七九の宗門等、皆々閉口〳〵といく同音にな無阿みだ佛、〳〵とがつしやうすればふしぎやゐきやう御だうにくんじ上人の御身より、金色の光さし勢至薩埵と拜れさせ給ふ、各はつと驚き眼をひらけば上人なり、彌不審の思ひをなし、又めをふさぎ禮拜すれは光かゞやく薩埵なり偖はうたがふ所なしと智者、愚者共にをしなべてくはんぎゆやく念佛す是ぞ誠の生如來、有がたし殊勝なりたうとかり共中々申、計はなかりけれ

## 第四

熊谷の次郎直實の二人の子、清姫小太郎種直は都にも成しかば、新黒谷に尋行御寺の僧衆に近付て、我々は武藏の國の者成が、熊谷ノ次郎直實發心まし〳〵、此御寺にと承る、あはせてたべと宣へば役僧こたへて、詞ヲ、其直實は蓮生坊と改名し此寺におはせしが、修行のためとてさいつごろいづく共なく出られ、地色今此寺にはおはせずと語りて奥にいられけり、地色いたはしや兄弟は父にあはんといさみぬる心も今はきえ〴〵ととはうを、うしなふ計なり、地色姫君涙にむせびながら、なふ我々は何のとがめに佛神の、御にくみをかうぶりて行さき〴〵の物思ひ、はるばる上る其かひも情なの親子の中、こはいかにせん種直と袂をひたしてなげかるゝ、地色され共小太郎力をつけ、心よはし姉君さましゝて別れし道にこそ、命だに有ならば日本國をめぐりて成共などかはあはで候べき、先々都の内に出人に尋て見申さん、必なげかせ給ふなとそれより都に立出て、かなたこなたと尋れば東國方へ下られし共いひ、詞或は又善光寺へ千日詣といふもあれば、地色若さもあらんと兄弟は、しなのぢさしておもむかるゝ哀、はかなき三輩うき思

ひ、黒染衣、地色偏へに西方極樂を、願ふのみにや蓮生法師、都あたりはかしましと、江州粟津の松原に、草引むすぶ庵の内、地みだくはんせいの像をかけ、土釜の煙にすゝたれしを、ようらくけまんと觀念し、我敦盛を手にかけずば、菩提の道には入まじきに長地思へば〳〵善知識安樂國にゐんぜうせんとの佛菩薩の化身かと、猶いやまさるくはんぎのなみだ、是に付ても捨る身は、心やすき物かはと思ひつゞけていにしへの、よろひにかはる紙子さへ、風のゐる矢は、とをさざりけり、かくつゞけたるよしあしも小チクリたれに、かたらんかたいとの、よりそふ物は松のとの、すきまもりくる、さよ嵐、是も無常のをしへかと、只ひたすらに稱名をチクリ怠る「まこそなかりけれ、地色偖も清姫種直は又立返り近江路や、松本のあたりより種直心地あしとて、あなたにたゝずみこなたにやすらひいたくなやませ給ふにぞ、地色姉君悲さかぎりなく、ゆみづをもとめほ口藥さま〴〵あつかひ給へ共、さらに其かひあらずして顔色をとろへ見えければ、地色なふいひがひなや小太郎萬の病も心から、心で心を取なをしせひにと思ふがを立れば、

をのづからよきものぞ心をはつたともたれよと涙ながらに宣へば、地色種直くるしき餘りにも姉の歎をかなしみて、いや先程よりよほど心地もよく候、爰はとちうのことなれば、旅宿迄そろ〳〵と參らんと有ければ、チ、嬉しや其義ならばわらはがかたにすがられよ、宿有方につくならば如何樣にも養生せんいざと手を取かたにかけ、猶し力やつくつえもよはりゆくこそいたはしき、粟津の原に、着給へば、日もはやくれてほのぐらし、地色もはやせたへはちかけれ共種直くるしみつよく成今は足手もかなはねば、こは何とせんかなしやと姉君とはうにくれながら、めでの方を見給へばともしの光ほのかなり、人すめばこそと思召、かい〳〵しくも種直をせなにおひあせ道を、たどり〳〵とあゆまるゝチクリ御有「さまこそ、哀なれ庵になれば、地色しづかに小太郎をおろし置、とばそに立寄いかに此屋の内へ お案内申候、詞旅の者にて候が、をさなき弟を召つれて候所に俄に煩なんぎに及びそれゆへ爰にて日をくらし候、地色近比わりなき御事なれ共今夜をあかさせたび給へと、さもしほじほと宣へば蓮生聞給ひ、詞ヲ、安き間のことなれ

共、地色獨坊主の庵室なれば女人はけつかい〳〵ときごつなげにぞ返答有、地色御仰はさる事なれ共妾ひとりの身にもあらず、殊更あたりに家もなく、いづくを頼まんかたもなし、且は後生の御爲にもなり參らせんと宣へば、蓮生くつ〳〵と吹出し、詞わごせ達に宿をかし後生のために成ならば、汗水ながしせいをはり申念佛はあだ事よ、地色ならぬ〳〵と言捨フシ念佛申おはしけり、地色むざん成哉種直は五ざうなふらんするやらん、どうの内にてにようふ音さも絶がたく聞れば、こはいかにと姉君いだきあげひたひをさへ、詞何といかうせつないか、やまふはともあれかくもあれ、親故かゝるうき苦勞よもや佛神三寶も、見捨させはし給はじ頼もしく思ひ、心ををくれ給ふなといさめながらも何として、たまるまじきと思ふにぞ心も亂れ身もふるひ前後、ふかくの涙かな、地色いたはしや種直さもくるしげなる息をつき、ァかなしやもはや命は候まじ、定業とは云ながら、姉君の御身の上、御行末が思はれて、よみぢの迷ひと成侍ふ、誠にか程氣を盡し、心をつくすかひもなく、今一度父上に、あはで過ゆく殘念さあら戀しの父上や名殘おしの姉君と是をさいごの詞にて、こときれはつれば姫君はきもきへ心きやうらんし、しがいにがばといだき付わつときへ入給ひしが、地色やゝ有て心付、傳淺ましくもしゝたるよなァ、實ことはり生れてより、おちやめのとにかしづかれすきまの風をもいとひし身のあゆみもならはぬ旅の空嵐にもまれ、露にぬれ、心つかれしそのつもり、こよひにせめて此里の、土と成行はかなさは迚かへらじ此上は、わらはを跡に殘し置うき物思をさせんより、ともなひゆけややれつれゆけや小太郎とりうてい、こがれてなき給ふ、地色親としらねば我子共夢にもしらで蓮生は、念佛をやめてやゝ不便や、詞さいぜん病人といひし者がしんださうな、地色傳定なき世中やと、とぼし火たづさへ戸を明て立出見ればしゝたるは十二三のをさなき者姉と見えしは十四五なり、詞なふ〳〵其子はしゝたるか、さいぜんきけば御身が爲には弟となァ、然らば愁歎尤なり、地色定て京内參りか參宮ならんか、所の親達聞ならば嘸や歎きかなしまん詞して國里はいづく其子が名は何といひしぞ、改名を付過去帳にうつし廻向して得させんとあれば、地色姫君暫

なみだをさへ、今迄はどうよくしんの御僧やとおもひに存しが、しをあはれませ給ひての御心ざしこそ有難けれ、此上は何をかつゝみ參らせん、我々は武藏の國、熊谷の次郎直實の子共わらはが名は清姫、死人は小太郎種直と聞より蓮生たましゐきへ、五たいもしびれ眼くらみどうどたをれて、なき給ふ、地色偖あさましや凡夫の身の、はかなさは親子の間をしらずして眼前しするをしりながら、一言詞もかはさずし物うき上にうきめを見せ、しかもするどき詞のすゑさぞや無念に思ひつらめ、せめてむなしきしがいに成共我こそ親よと名乘て聞せん、詞いや〳〵、はあ忘れたり迷ふたり、かやうの所をまよはぬこそ道心とは云べけれ、地色あらもつたいなやと心で心をなだめ、詞是々旅の姫、偖は旁は熊谷入道の子成とや、都黒谷にて愚僧も別るに語しが、誠各のうはさもさんげせられし、嘸父の發心を恨にも思はれんが、重重至極の道理始終をかたれば事ながし、生とし生る物子をかなしまぬはなしまして人間の身の上をや、され共其おんあいをふり切ておこす程の道心なれば、よつく道理あつてこそと思ひ必恨に思はるゝなと、地色よそのやうには語れ共、いきて有もしゝたるも我血を分し子と思へば、切てもきれぬおんあいの涙、墨の衣もしらむべし、地色姫君つく〳〵聞召、偖はわらはが父上とわりなくなされし御中とや、御物語を聞に付、御顔ばせを見るに付、をさな心に覺えにし、父上のおもかげに似させ給ふと思ふにぞ、他人のやうに思はれず猶なつかしう侍ふと涙いやますぢの有さま思ひ、きれ共わくのいと又くり返しみだるれど、地色はをくひしばつて心をしづめ、いかに旅の姫、もはや歎てかひあらじ、幸あたりにむしよあればと庵のとを押はづし、涙ながらにしがいをうつし誠に姉として弟のしがいをかく事は、道にそむける事なれ共たれを頼ん方なければ、御身さきをかき給へ某跡をと有ければ、こは有がたき仰なれ共わらはゝいふてもちのわかれ、御身様は他人と云殊に又御出家なり、勿體なや自がおひて成共いだきて成共參らんと宣へば、詞いや〳〵か様の死人を手にかけて念佛申とぶらふこそ、すゝむるくどく共に成佛なれば人のためとはぞんぜぬなり、地色いざ〳〵さらばと手をかけて、さきを姫君かき給へば、跡をば蓮生

かるめヲクリつゝのべの「送りぞ哀なる、地色今はふつつと思はじと思ふうちにも世の中の、子をさきだつるはならひなればあへてかなしむ道ならねど、親をしたひ身をすてゝ千里をしのぎきたる子に、さらば廻りもあはぬ身か、見えつ見へられ詞をかはし他人成と僞るは、法儀おきてといひながらさりとはむごき次第なり、よし姉こそはしらず共、死靈は知ていか計うらみん事のはづかしやと、思へばめもくれ手もなへてしがいをはたとおとさるゝ、姫君はつとをどろき何となされて候ぞ、詞いや〳〵別の事ならず、各の父蓮生とはわりなくかたりしちなみゆへ、地色子はもたね共旁を我子のやうに思はれて、不便さも又哀さもこつずいくだくる涙にくれ、取おとしては候へ共もはやむしよは爰なり、と土を漸うがちのけしがいにむかひ手を合、しゆつり生死とんせうぼだい、な無阿みだ佛と廻向して、もはやうめんと有ければなふ情なや今しばし名殘をおしませ給はれやと、引とゞむればいや是なふ、迚かくても歸らぬ道、ふつつと思ひ切給へと、樣々けうくんしがいをうづみ涙の玉の數々に、夜すがら念佛申さるゝヲクリいたはし「かりける風情なり、地色かゝる所へ平山の武者季重は、賴朝よりの仰蒙り院參の上洛とて、此所を通られしが馬上より急度見付、詞なふそれ成は直實入道にておはさぬかと、地色馬より飛おり偖も久しや先以恙なき道心近比殊勝にこそ候へ、就ては國本の子共衆御身を尋上られしがそれ成は姉姫か、して弟小太郎はととはるれば、地色姫君涙をはら〳〵となが し、先以おかげ故、兄弟命をたすかりそれより方々尋廻り、ふしぎに是迄參りしに情なや只今迄父と名乘聞されず、剩小太郎は物うき旅のつかれにや、夜前爰にてしゝけるがなふ鬼にもせよ蛇にもせよ、幾年逢ぬ子に逢て親となのらぬ事あらじ、どうよく至極の父上さまやと人めも、わかずなき給ふ、地色季重驚き何小太郎は病死とや、詞偖是非もなき次第去ながら清姫、父のそれと名乘られぬは是御道のをきてなれば必恨と思はるゝな、いかに入道殿、御身の心底千萬察し申せしとあれば、地色蓮生衣の袖をひたし何事もかごとをも推量なされて給はれと、云捨てこそ歎るれ地色ヲ、見事成辛棒佛意にかなひ給はんと、彌殊勝に覺え候、清姫も對面し一旦望叶ふ上は、

向後親子と思はるゝな、且は父への孝行ぞ我國本へともなひて、幸一子とめあはすべし然るうへは蓮生も、心にかゝる事あらじ彌道心堅固なれ、偖々過分何が偖、ほうゆうのよしみには偏に頼參らする、氣遣し給ふな某にまかされよもはや姫は我子なり、いざ〳〵都に同道せん嬉しゝ、〳〵めでたしと打つれだちて上らるゝ歎の中の悦びとは、かゝる事こそいふべけれ前代未聞の次第なりとてかんせぬ、人こそなかりけれ

## 第五

飛鳥川けふ有とても定なき、人の命はあだ波のうつつときゆる蓮生法師、よみぢにおもむき給へ共、しやばにて日比造り置罪障の霧立おほひ、そこ共しらずくらきより（チクリくらき）「道にぞ出らるゝ、（地五色の鬼共をつ取こめだごくの人とぞひしめきける、蓮生少もさはがず只念佛をのみよねんなく申さるゝ、其時あをき鬼つのをいからしあかゝねのつめをとぎたて、くろがねのはをならし天地もひゞくこはねにて、（詞汝一生の間殺生のつみをばいかゞははたさん、蓮生聞給ひ、ゝ、それな、それはなむあみだ佛よ、（地色き成鬼ほこふりまはしいかりをなし、汝一生ちうどうのつみをいかゞはする、（詞ヲ、それもなむあみだ佛よ（地色あかき鬼おどり出はねまはり、色にそみかにめでしじやいんの罪はいかに〳〵、（詞なむあみだ佛〳〵、（地色白き鬼きばをかみ、紅ゐの舌をたれまうごきごはとせむれ共、たゞなむあみだ佛と計にてさあらぬ、ていにてゐられけり、（地色中にもくろき鬼、眼は銀をみがきたるごとくにて、やあをんじゆの罪はいかに〳〵とのゝしれば、（詞はてやかましい木のは鬼共哉、（地色なむあみだ佛な無阿みだぶと、空うそぶいてゐられける、（地色五色の鬼共呆れはて、偖も〳〵しつはく成念佛者や、もはや地ごくへ歸るなりゆきたいかたへつつとゆけと、いふかと思へばたちま地に南無阿彌陀の五字と成、こくうにすはりこんじきのひかりをはなつて見えにける、（地色蓮生是を見てあら有がたやさりながら、佛の一字のなき事はいかゞと思ふ我身より、こんじきのひかりさし、佛といふ文字あらはるれば、偖は佛果に至るよと彌、念佛三重

「申けりふしぎや黒雲、地さつとはれしうんたなびく方よりも、觀音勢至の二菩薩は、金の天がい青蓮花中央にそなへられ、微妙の御こゑをそろへつゝ影向「有こそ有がたき

## 九品の淨土

地それ、げぼんげしやうのわうじやうは、六だう四しやうのくげんをやゝのがるゝ計にて、十二こうが其間れんげちうにはらまればう、〳〵ぜん〳〵としてあかしくらし、やう〳〵其こうみつるときれんげひらけてやゝ、ちうぼんにちうしやうす、偖中ぼん中しやうこそ、よに有がたき大往生のそくはいなれ、上ぼんれんにいたるまは、一たんじちやう六十よせつなとて此、この〳〵つまはじきする間に、たちまち地中ぼんの、蓮げひらけて上ぼん上しやうに往生し、むしゆのよらくをうくるなり、先其身をみづからかへりみれば、しまわうごんのはだえこまやかに、三十二さうあらはれ、やうらくしやうごんのけさ衣、出入いきは、せんだんのにほひくんじ口にはしやうれんげのくきをふくみ、ないげ共にしやう〳〵にくはうみやうへんぜうかくやくとして、ゆう〳〵じざい雲にのり、ふうごしては、こくうにざせしめ、中をかけり心のほつする所にゆく、偖又つねのくうでんは、こん〳〵るり、はり、しやこめなふさんごこはくすいしやうを、みがきたて〳〵、玉をいろゑてつくりたてたるうてなには金のほうちやく銀のふりやう、ちやうらくがじやうの風ふけばチクリみめう「めうをん、れい〳〵と、めうほうののりをとく、偖又大ほうれんげのもと、八くどくちはかんろの水、せい〳〵ときよらかに、妙法蓮花がさきみだれ、ゐきやうよもにふん〳〵たり、ふがんゑんわうさへづりて、しんいのけがれをきよむなり、そのには玉のこずゑをつらね、八しき五しきの花ひらけ、くじやくあふむや、びんがてう、色々のねを出せば空にはかぶの菩薩、むりやうのけぶりあらはれてをんがく天に、ひゝくなり此ほうこくの、たのしみはたとひ百千くでいなゆたごうをへて、百千萬なゆたの舌の上にむりやうのこゑを出し、一々以ほむる共淨土のしやうごん、ほめ盡すことあたはずかゝるたうとき九ほんれんだいへやれ、ぐすべきぞ蓮生とてゐんぜ

うあらたに三重」見えにけり淡路がた地色通ふ千鳥のこゑきけば、ねざめもすまのせきもりはたそ、いかに蓮生敦盛こそ待うけて候へうたてやな一念みだ佛そくめつむりやうの、ざいしやうをはらさん稱名の法事を絶せずとぶらふくりきに、何のゐんぐはありそうみの大夫なみにたゝよふまうしうの、くもきりなをもはれやらぬヲキ思ひをすまの、大夫うらめしや諧同うらみは人をも世をも、〳〵、思ひ思はじうき身のゐんぐは、とは思へども、わすれがたゝのうらみの波うみやま、一とうにしんどうらいでんひら〳〵〳〵、ひらり〳〵とひらめくいなづまさら〳〵さつと風をちこちの、みねにはげしくたにゝひゞきてしやぢくをながす、雨はやさき、つちはせんけん山はてつちやう、雲のはたてをひつさげ月毛のこまにむちう地くるり、〳〵くる〳〵くるりとのりこみ、乘あげのりおろし、ひくなのがさじきたなしさもしゝ、かへせ返せとよばはりかゝつてかたきはこれぞとうたんとするに、あだをばおんにてほうじぬ念佛してとぶらはるれば、しんゐのほむらもばつときへうせおなじはちすの蓮生法師、あらありがたやといふかとおもへばたちま地じやうぶつ三重」とげらるゝ、うてなのうへに、地れんしやうはうつるとひとしくこんじきの、によらいのさうがうくはうみやうへんせう十ぱうせかいにかゞやきてめうもんたがはぬせつしゆふしや、すなはちわうじやうあんらくこく有がたかり共なかなか申計りはなかりけり

右此本者依小子之懇望附秘密音節自遂校合令開版者也　筑後掾

二條通寺町西へ入町　山本九兵衛刊

念佛往生記終

# 清水觀音利生物語

松本治太夫正本

## 第一

偖も其後、序それ諸佛の大悲まち〳〵なれとも、じよく世末代の時にいたつて、能救世間苦の德をあらはし、一切衆生の利益の達心、大慈大悲の觀世音菩薩にしくはなし、誠なるかな、爰に洛陽音羽山清水寺の觀世音の由來を委く尋るに、本朝人皇五十代の帝桓武天皇の御治世にあたつて、正二位の中將坂上の田村丸とて武將一人おはします、然に田村丸内には武略の道をたしなみ、外には仁義禮智信の五常をたゞし、ことにくはんぜおんぼさつをしんじ、朝暮に御經讀誦有、誠に大悲の威神力卽得求男の御利益有て、若君一人持給ふ、御名を清若丸とて十三歳に成給ふ、其きりやううるはしく絲竹の道に心をよせ、實やんごとなき少人也、偖又家の執權には淺井入道玄寛とて、吳子孫子が秘せし所我物と得たる勇士なり、侍どもには羽根川刑部友滿宮部七郎氏晴松島九郎川村内記眞野藤太とて、智勇を兼し兵共強をやぶり弱をすくひ、慈悲をもつて治むれば天下の政道穩かなり、其外とざまの大名共日夜の出仕ひまもなく、此君の御くはほうめでたかりける大三重「しだいなり引、是は偖置、ことは其比又やまとの國こじまでらのぢうそうを、ゑんちんしやもんと申てちゑじんゑんのかくしやうあり、此そうはゝのたいないにありし時、つねつねぜんじゆのしんごんをとなへし事しよ人のみゝにみてしゆへいかさま出家とくだうして、しやくもんのほうたうをもかゝぐべきものならんと、しゆつしやういごしやうじんけつさいにてこじまのでらの一くはしやう、ほうおんほうしのでしと成、七歳より出家をとげさせ給ひける、ようがくのはじめより取わけくわんぜおんをしんかうし、てうぼのらいねん隙もなし、ある時ゑんちん思召は、我此年月くはんぜをんをしんずるといへ共、いまだしやうじんのそんようをおがむ事なし、我一つの大せいぐはんをおこし、しやうじんのくはんぜおんをおがまずんは、たとへ命はおはるとも、此ねんぐわんをみてんとて、地よるひるのわかちもなく、地おこない給ふぞ有がたき、ことばあまりに思ひつかれつゝ、御きやうをま

くらとしてすこしまどろみ給ふ時ふしぎやせい天のくもまよりいくわんたゞしきにん一人くだらせ給ひ、いかにゑんちん、汝やさしくもくはんじざいぼさつをおがまんとや誠さやうに思ふならばよあけて後きづ川に出、三十三度のこりをとり、一つのきどくを待べし、汝が心のふびんさにかやうにはつげしらするぞまことは我はほうさうおうごのかすが大みやうじんなりと、地の給ふと其まゝに、御身よりひかりをはなちみかさ山へぞとび給ふ、地ゑんちんあまりのうれしさに、はるかに御あとらいしつゝ、をしへにまかせそれよりもきづ川、さしてぞ三重いそがるゝ、地川にもなれば、かゝり三十三どのこりを取、ことばなむや大じ大ひのくはんせおんぼさつ、それふしゆしやうがくの御ちかひ今以はじめならず、くわこくをんの大ひのひかりいづくかいたらぬ所あらん、しかるにわれようせうのむかしより心にはくはんおんのゐじんりきをねんじ、口にはせんじゆのしんごんをこたらず、今一つの大ぐはんをおこし、一しんのまことをいたす、ねびくわんおんのめうちりきにわがくわんみてしめ給へと、かゝりしん〳〵きもにてつし、一時ばかりはいし給ふ有がた、かりけるしだいなり、地されば此や大じ大ひの御ちかい、まことに有けるぎやうにんを、あはれみまします御ぐはんにて、ことばふしぎやよど川のみな上より、こんじきのひかり有水一すじながれ來る、ゑんちん此よし御らんじて、ことば偖も〳〵有がたや是こそ大ひのふしぎなるべし、此みなかみにしやうじんのくはんせをんのましますらむと、地くわんぎのなみだをながしつゝ、こんじきの水のいでとを尋つゝみなかみ、さしてのぼらるゝ、地心の内こそしゆしやうなれ、ことば此水ながれとおくして、おとはの山のふもとなる、ゆせんのたきより出にける、ゑんちんあまりの有がたさに、なむくはんせおんぼさつと一しんしやうめうのまこと凝し、おとはの山を見あぐればくさ引むすぶいほり有、こはふしぎやと山にのぼりて見給へばびやくゑのらうおう一人有、ゑんちん此よし御らんじて、御身は是いか成人ぞ、おきなこたへての給はく、我は是ぎやうゑいこじといふものなり、我心にはくはんおんのゐじんりきをねんじ、口にはせんじゆのしんごんをとなへ、此地にかんぎよする

事年久し、汝をまつにおそくきたれり、われゆくことあつてとうごくにいたる、其間汝よろしく我にかはつて此所にすむべし、我に一つの大ぐはんあり、此木は是くはんをんのみそぎなり、われもしおそく歸り來らば汝せんじゆのぎやうさうをつくり、まツた口人のだんなをまち、大がらんをこんりうすべしと、地かゝりの給ふみこゑの内よりも、おんがくきこへ花ふり、いけうよもにくんじはくうん一むらたなびけば、やかて打のり給ひつゝ、地ひがしのそらへゆき給ふ、ことばゑんちん此よし御らんじて、こは有がたき御事や、是くはんおんのすいじやくならん、へんじもはなれ參らせじと、地がゝりしん〳〵ふかくがつしやう有、ぎやうゑいののり給ふ、くもの上にとびのり給へば、地誠に大ひのしんりきにて、ゆめぢをたどるごとくにて、こくうをとびゆき給ひしはふしぎ、なりける三重しだいなりかゝる所に、ことばとうぼうよりほうれんくもゐにとゝろき、天どう二人さゆうをおしたて、せつなが間に山しなや、うしのお山の上にては、ぎやうゑいこじの御まへに、むかいのくるまをさし口せしはなふふしぎと、いふもあまり有、地かゝりゑんちんよしを御らんじて、ことば偖も〳〵有がたや是ぞ誠につたへ聞、ふだらくせんの御むかいにてんどう來らせ給ふらん、いかにぎやうゑい大じ大ひの御ちかいに、われをも召つれ給はれとうれいふしなみだをながし申さるゝ、ことば其時ぎやうゑいふりかへり偖も〳〵汝とをくもしたいきたるかな、むじやうぶつ一によなれ共まのあたり其ぼんしんをわがじやうどへはともなひがたし、いそぎいほりにかへりつゝわがゆいかいをまもるべし、いかに〳〵との給へば、ゑんちん今はちからなく、涙と共に御そばに立より、さあらば御めにかゝるしるしには何にても御かたみを殘し給はれとさま〴〵なげき申さる、ぎやうゑい聞し召、聞にやさしきしんていかな、もとよりかんきよの事なれば身にたづさへたる物もなし、是ぞ此世のかたみぞとうへにめされししろきじやうゑを下されければ、かゝりゑんちんてづから御かたみをいたゞきとれば、地何うたがいの有べきぞ、かゝりやがてぶつたいあらはれて、正じんのくはんせをんとおがまれ給ひ、くだんのくるまにのり給ふは有がた、かりけるしだいなり、かゝりゑんちんかん

るいきもにめいじ、御あとをらいし立給へば、たちまちひかりかゝやきて、くもの内よりまんだらげ、まかまんだらげふりぐだりひがしのそらへゆき給ふは、ふしぎなりける、「次第なり、偖も〳〵有がたやと、ずいきのなみだをながしつゝ、大ひのをしへをまもらんと、おとは山を心がけ、涙と共にかへらるゝ心の、内こそしゆせうなれ、ことばやう〳〵山におりさせ給へばふしぎやそばなるくち木のやなぎより、くはうみやうかゝやきいけうくんじ、地さくらにあらぬ草木までみなしろたへに花さきける、偖こそせんじゆのちかいには、かれたる木にも花さくと、今の世までも申なりかのゑんちんの心の内、しゆせうなり有がたし、誠にきたいのめいそうやとみなかんぜぬ、人こそなかりけり

## 第二

「去ほどに、ことば比はゑんりやく廿年はるも中ばの事なるに、せいしうずゝが山おびたゝしくやけあがり、川かみくれなゐのごとく也其ひかりきんちうにとび來りぎよれんの内へさし入れば、みかどおどろかせ給ひつゝやがて御なふと成にける、くぎやう大じんあつまりていかゝあらんとせんぎ有、時にいでの大じんもろゑこう仰られけるやうは、是はいかさまへんげのしよゐと覺へたり、此比おとはのたきのうへにゑんちんとてたつときそうのましますよし、此そうを召れつゝ、ぎよくたいあんせんの御きたうを仰付られしかるべしとそうもん有、さあらばゑんちんめせと地有承り候とすなはち、ちよくしを立らるゝ、ことはゑんちんはちよくしと打つれさむだい有、其時もろゑこういかにゑんちんたゝ今めさるゝ事よのぎにあらず、さくやのらくちうのひかり物御てんのうちにひらめき、ぎよくたいをなやまし奉る、それにつきわ僧はしんりきけんごにしてまのあたりくはんをんさつたにまみへしよし、上ぶんにたつせしゆへ、御かち申せとの御事なり、いそぎほうりきをもつてぎよくたいをやすんじ給へと有、ゑんちん承りこは有がたきちよくぢやうかな、さりながらぐそうがほうりきにては中々もつてかなひがたく候へども、もとより大ひの御せいぐはん、しんねんふくう

くはの御りやく、いかでかむなしかるべきと、地四めんのたんをかざらせておこない三重給ふぞ「有がたき、かゝりゑんちんだん上なされつゝ、五ひやうに花を立とつこさんこれい花ざゝ、ねんじゆしやくじやうおつ取てせんじゆせんげんくはんせをんの、ひほうをおこなひ、給ひける、そも〳〵忝くも、くわんせをんと申は、くはこにしやうがくをとなへてはしやうほうめうによらいとがうし、今又しよぶつのじひにかはつて、くはんせをんとあらはれ給ふ、千じゆ千げんと申奉るは、くおんがうの其むかし、せんかうわうじやうおうによらいの御まへにて、大せいぐはんをおこしつゝ、一さいしゆじやうりやくのため、うけさせ給ふ御さうがう、地しゆ〳〵の御手の其中に、地やぎのゑだの御てにては、地かゝり身のうへのやまいをはらい、たからのみはちの御手にて、ふくちうのしよびやうをのぞき、ほうけんの御てにてもろ〳〵のきじんをがうぶくし、たからのゆみやの御手にて、一さいのおんできをほろぼし、ほつすの御手にて、あくじさいなん、はらひ、のけ、しやくじやうの御手にて一さいしゆじやうをじひをもつてあいみんじ、ひやくれんげの御手にて、しゆ〳〵のくどくをほどこし、かしみのてにてたもんをさとらせ、しやうれんげの御手にて、らいせをじやうどにゑんだうし給ふ此たびのみかどの御なふへいきんならしめ給へやとせめかけせめ掛、祈らるゝ、こまのけむりはだいゑんにみち、しんれいのおとはゑきでんにひゞきいか成あくま御物のけも、しやうげをなすべきやうぞなき、ことは時にろだんの其上にくろくも一むらたちきたる、こはふしぎやと見る所に、たちまちあつきのすがたあらはれ、いかにゑんちん、くはんせをんの神りきにてせひなくこゝはたちのくなり、さりながらいわきりおとすすゝが山、かゝりみねをふさぎたにをうづんで、せきのひがしへ人はとをさじ御ばうとてせいしうさしてとびさりしはなふおそろし、かりけるしだいなり、ことは其時ゑんちんだん上よりおりさせ給へば、みかどの御なふ本ぷく有、地御所中の御よろこび何に、たとへんかたもなし、ことはかさねてゑんちん申さるゝは、此たびのへんげきうもんやふうじいたし候へ共、せいしうすゝがにとりこもりこくどを

なやまし候てすこぶる大事に候へし、きりやうのぶしに仰付られ御たいぢ候へとつゝしんでそうもん有、内よりのせんじには、たれかれとあらんより、時のぶしやうたる間たむらめせとのりんげん也地かしこまつて候とてやがて、ちよくしを立らるゝ、ことはとしひとは何事やらんとちよくしと打つれさんだい有、其時みかどとしひとをぎよれんちかくめされいかにとしひと、此たびらくちうのそうげきは、せいしうすゞがにすむ所のあつきのしよぎやう成間、いそぎ汝はせむかひちうばつし、ばんみんをやすんぜよとのちよくぢやうなり、たむら承り、ちよくめいにては候へ共、めにもみへぬへんげのぎいかが心もとなく候とおそれ入てぞ申さるゝ、其時ゑんちんもつともなりさりながら、此あつきは大ひのひほうにせめられて立さりたり、此こゝのへの御まもりをはたじるしにさゝせめ入給ふ物ならば、かゝりの何のおそれかありあけの月のみやこの道ひろう、おとはすゞがの山おらしも、ふきしづめたるみよならんとげにたのもしくの給へばたむらいよ〳〵ちからをゑ、有がたし〳〵と、御前を立てそれよりもわがやを、さしてぞ三重歸らるゝやかたになれば、ことは家のこらうどう召あつめ、かやう〳〵のしだいにて大事のちよくめいかうぶりたり、いかゞあらんとの給ひておの〳〵いけんをとひ給ふ、あざゑのげむかん申やう、誠に君の御大事此事なり去ながら、かのまつげにすをくふなるしやういのごとくちいさくて、やがゝりたちがゝりもなからん物はいざしらず、まなこにさへぎる物ならば、きまんごくのきわう成共あましはやらじさりながら、へんげの物の事なれば大せいにてむかいなばくさ木ちりあくた共へんずべし、小せいにてはせむかいてづめのせうぶあそばされしかるべしとぞ申ける、としひと大きにゑつき有此義尤しかるべし、さあらばようゑ仕れ、かゝりかしこまつて候と、おの〳〵しやうぞくあらためて三重しだい〳〵、に出らるゝ、儕御ともの人々には、あさゑの入道げんかんはね川ぎやうぶともみつ、みやべの七郎うぢはる、まつしま九郎川むらないきまの藤太、かゝりふしつがうしう〳〵八きにてすゝみにすゝんで出らるゝ、ことは儕今度みかどより下し給つたる、にしきの御はたに日くはう月くわうを金銀に

て打て付こゝのへの御まもりをはたがしらにかざらせ、一ぢんにさしあげ、かゝりゐんりやく廿年二月十八日、みやこを立てそれよりもせいしう、すゝがへ三重いそがるゝ是は偖置せいしうすゝがの大たか丸、けんぞくどもをよびあつめいかにかたゞ〳〵、偖もみやこよりたむらとしひと我々が打てにむかふと聞て有、たとへきやつばらがいく萬ぎにてむかふ共、何のしさいの有べきぞ、らつくわみぢんになすべし、ゆだんをするなかたゞ〳〵よ、是ぞ一つのなぐさみと今やいまやと三重待ゐたり、偖其後に、人々は、すでにいせぢの山ちかく、地きうばの道もさきがけむとかついろみせたるむめがゑの、花ももみぢもいろめきて猛き心はあらがね、の、地かゝりつちも木もわが大君の國なれば、いづちかおにのすみかなるべきいさめや、〳〵〳〵もの共と、さしもけはしきれいろくさん、みねをわけ、たにゝ下りみ給へ共、ことはもとよりへんげの事なればきじんのありかはなかりけり、あざゑのげん申やう、偖はわれ〳〵がいせいにおそれかたちをかくすと覺へたり一まづなのりて御らん候へ、其時としひとこだかき所につゝ立あがり、只今此山へわけ入たるつはものをいか成ものとか思ふらん、うりんしやうぐんさかのうへのたむら丸とはわが事なり、いかにきじんもたしかにきけ、むかしもさるためし有、ちかたといひしげきしんにつかへしおにも、わうゑをそむく天ばつにて、ちかたをすつればたちまちほろびうせしぞかし、ましてやまぢかきすゝか山、いづくかおにのすみかならんと、かゝりひきめのかぶらや打つがひ、きゝり〳〵と引しぼり、かぶらぎはまでひつかけ、ことはしばしかためてきつてはなつ、其時ふしぎや、かゝりあのゝまつばらむらだちきたり、こくうにてつくはをふらせつゝ、らいでんいなづま、しきりなりとしひと此よし御らんじて、ことはすはやもの共まなこをくばれとさゆうにげぢしての給ふ時、きじんはあらはれいかにたむら、やさしくもきたる物かな、其ちかたがもうしうはらさんため大たか丸とあらはれたり、いかにけんぞく共あれ引さきすてよといふ、其時そらよりけんぞくあまたとびきたり、かゝりよくこそきたれおのれらと、もとよりひぎやうじざいにて、人々にみだれあい、ひじゆつをつくしてたゝかいしは三重すさまじ、

かりけるしだい也まつしま川むらまの丶藤太、此三人のもの共をあるいは引さき人つぶて、ことは又はこくうにつかみゆき、のこるしう〳〵四人の人、是はいかにとあきれはてかたづをのんでぞいたりける、くだんのけんぞくいかりをなし、いきおいかゝつてとんでかゝる、是にふしぎやこくうん一むらむらがつて、すまんのやさきとふりくだる、あつき是をみるよりも、かゝりあがるやをばついくゞり、さがるやをばおどりこへ、まん中さしてくるやをば、のこらずきつておとしけるは三重おそろしかりける三重次第なりもはや人々ちからなく、ことはすでにかふよとみへし所に有がたやいづく共なくしらはのそやふりくだり、まつさきにすゝんだるふうりきがむないたにはつしと立、ヱ、もの〳〵しやとかなぐりすつる所を、うぢはるともみつゑたりやおふとひつくんだり、くわでんき是をみて、大手をひろげあますまじととんでかゝる、時にくだんのやさきくわでんきがふとばらに立所を、げんかんすかさずつつとよりむかふさまにむんずとくむ、のこるおに共むらがりきたるを、としひとこゝをばわれにまかせよと、ゆんでにあいつけめでにうけしやりんのごとくきりまはればむら〳〵ばつとぞにげにける、其ひまにげんかんともみつもろ共に、くびをとつて立あがる所へ大たか丸とびきたり、としひとをひつさげてこくうを、さしてぞ三重あがりける、かゝりとしひとこは、ことはいかに、あく、ぢしきやうぶしさいの大ひのせいやくこもうと成、あつきにとらるゝむねんやと、なむくはんせおんぼさつ〳〵と、かうしやうにとなへ給へば、ふしぎや都のかたよりも、かゝりしうん一むらとびきたり、くはんせをんはあらはれ給ひ、大ひのゆみにちゑのやをはげはなち給へば、ことばきじんのみぎのかたさきにはつしと立、ひるむ所をたむら丸たちをぬき、そらさまきじんのくびをてうどきれば、むくろと共にとしひとは大地へどうとおち給ふ、きじんのくびはわれ此たび大ひのしんりきにてほろびうせたり共、いきかはりしにかはり、此うらみをはらさんと、口よりくはゑんをふき出しひがしのそらへとびさりける有がたし〳〵誠にしゆそしよとくやくねひ、くわんをんのちからをあらはしすなはちげんじやくおほんにんすなはちげんじやくおほんにん

のかたきはほろびにけり是、くわんおんのぶつりきなり、有がたし共中々申ばかりはなかりけり

## 第三

かくて其後、ことは田村しやうぐんとしひとはせいしうすゞがのきじんをばことゆへなくたいぢあり、ゑんちんをともなひいそぎさんだいなされつゝ、一々しだいにそうもんある内よりのせんじには今度としひとがはたらきにてとういをはろばし申事、ばんみんのよろこびとゑいかんはなはだかぎりなし、やがてじよもくをおこなはれせいゐ大しやうぐんににんぜらるゝ、偖又ゑんちんはほうりきけんごのいとくにて、大ひのしんりきあらはれみかたしやうぐんしやうてきのりをゑたりとてすなはちおとは山に大がらんをこんりう有、清水寺とがうし天下あんぜんのきぐはんしよたるべしとてあきすはうをふしんりやうごくによせらるゝ、かゝりゑんちんとしひと諸共にこは有がたしと御前をたちおの〳〵したく〳〵三重かへらるゝ是は偖置、ことはそれ人がいのならいとて八くの道はのがれずしとしひとの一子きよわか丸もつての外の御いれい、御みやくにたのみなきよしてんやくのかみおどろき申、みうちとさまの人々いかゞあらんとひやうぢやうある、地げにやたかきもいやしきも、へだてはあらじ人のおや、地心はやみにあらね共子ゆへにまよふならいにて、いたはしやはゝうへは、人のみるめもしら玉の、地つゆもいとはぬふぜいにてはしちかく出給ひことはいかにめん〳〵きよわかゞいれいいかゞあらんと仰ける、其時わけのたうしやう申やう、わか君の御ゑれいそれがしも身にとつての大事と存、さま〴〵りやうぢをめぐらし候へ共、此御みやくと申はしきのあくれうほうかいの風と成しんないにみだれ入、しんかんをさいだんす、かるがゆへにしよくきをとゞめづつうをおこし、ふうきかへつてねつしやうと成、いじゆつをうしなふ所なりと申上る、時にたんばのほつきやう申さるるは、爰にしんのうせんきやうをかんがみるに、どうねん同月同日のむまれし女のいきぎもを取、ほんはうにくわへあたへなばほんぷくやすきに候と手にとるやうに申上る、からうのめん〳〵申さるゝは、

若君は十五歳三月十八日の御たんじやうなれば、此年月の女を尋ね、君のいれいを救はんと申、地みだい此よし聞召、おゝ尤なりさりながら、地きよわかいか成ゐんぐはにて、地かゝるやまふを身にうけて、うきふしなやみしづむさへ、そばに有けるおや心、身もたへなんとかなしきに、たとへいやしきものなりと、思はぬ事に身をうしなひ、いのちをとられば其人や、おやきやうだいやゆかりのもの、うらみかこたんつみとがは、きよわかいかでのがるべき、おもふにかいなきくすりかな、さてもかなしき世の中とうれいふしふししづみてぞなげかるゝ、ことはどうざに有あふ人々も、いろふしあたるだうりにせまりつゝおの〳〵そでをぞぬらし、ける、ことはげんかんともみつ承り、御だうりしごくせり、何とぞはからい申べし、それ〳〵と有ければ、地女ぼうたちは立よりて、なく〳〵みだいの御手を引かはりおくりれんちう、さしてぞ入給ふ、ことはげんかん申けるやうは、みだいの仰もさる事なれ共、かゝる大事の御わづらいさしおくべき事にあらず、いかんとなれば此君は天下の大しやうこつかのとうりやう也、もし御ふりよの事あらばたむら一けのめつばうなり、下らうをころし大人をたすくる事其みちなきにあらず、又むたいにいのちをうばはゝこそ、こくちうへふれをなし、身にのぞみの有ものをいのちのかはりに其ねんぐわんをかなへなば何のうらみか殘るべき、かた〳〵や我々が命をせんじやうにてかろんずるも、是みな身ののぞみをかなへむため也、いかにともみつ御身はかたちをやつしゝあき人にさまをかへ、まづ〳〵君の御れうぢなればやまとかはちいづみきいの國をまはり、くだんの女しやうをさいかくあれ、此義尤しかるべしと地はね川ぎやうぶはそれよりも人々にいとまをこひあき人にさまをかへくに〴〵、さしてぞ三重下りけるなをもあはれをとゞめしは、ことは大和の國うたのこほりにおはします、まさひめきやうだいの人々にて、地しよじのあはれをとゞめたり、ことは其ゆいしよを尋れば、父はたむらしやうぐんの御うちに、かげゆざへもんゆきはるとて人にしられしものなるが、よしなきものゝざんげんにて君の御かんきかうぶりつゝ此さとに身をかくしじせつを相まち給ふ所に、みとせいぜんにはかなくならせ給ふゆ

へ、地はゝを頼てつらき世に、おとゝのせいじん待にける、地いかなるつみのむくいにや、地すぎにしなつのはじめ比、のりのたもとにころもがへはゝさへむなしくなりければ、何とわくべきかたもなく、たよりなぎさにあらいそのなみだにくれておはします、ことはもとよりひんじやの事なれば、てうさんぼしのかてもなく、地人のなさけによりいとのあさのころもを手はざにし、ひるはあたりのさとにゆき、てわざの物をあきないて、地れいしやうじよがあとをおひ、日もくれぬれはいほりにかへり、わかもろ共になきくらす心をくりの、うちこそあはれなれ、こゝとは小次郎申やう、偖も〳〵あねごさまかくうきわざになれ給ひ、我をはごくみ給ふ事、思へば〳〵かなしやな、何とぞして我ひとゝなり、いか成方にもみ仕へ御身をはごくみ申つゝ、ことは世にいとをしきちゝはゝのごせぼだいをもとひまいらせ、あねごの御おんのをくりなば、かいなきいのちはおしからじとなみだをながして申さるゝ、まさひめ此よし聞召、おゝよくこそいふたれ小次郎よ、我も御身がせいじんを、月よ花よと待ゆへに、なれぬ手わざもくにならず、いろことはさりながらいとけなき身にかゝるわびしきうきすまゐ、みせぬる事のふびんやとうれいふしふししづみてぞ、なき給ふ、地物うき月日かさなりて、地又くるなつになりければ、ことはいかに小次郎あすははゝうへの一しうきになりたれど、もとよりまづしき此身にてくぶつせそうのちからもなし、此くはんぜおんは我々が父左衛門殿、一とせくまのまうでの時ごんげんの御むそうにて、なちのお山のたきつぼよりしゆつげん有しくはんおんなり、ちゝはゝ子のなき事をかなしみて、此くはんをんにねがひをかけ、われら兄弟をもふけ給ひし御ほとけなり、地かうげをさゝげとぶらはん、地水くみ参れ小次郎と、かうをもり花をさし、さま〳〵とぶらひ給ひける心の、いろおくり内こそしゆせうなれ、地偖ぶつぜんに参りつゝ、御きやうどくじゆましませ共、おつるなみだにもじきへてうれいふしよみわづらひてぞなげ、かるゝことはり、せめてぞあはれなりことはかゝりける所にはね川ぎやうぶともみつは、君のおれいをすくはんとはう〳〵尋めぐれ共、さるべき人もあらざれば、なをやまとぢにさしかゝり、やう〳〵ゆ

けばほどもなく日もくれぬればともみつ、いづくかやどりなるらんとあたりをみれば山かげにともしびかすかにみへければ、いほりのあたりに立よりて、此内へ物申さん行くれて候へば一夜のやどをかし給へ、小次郎立出、是は人やどりにてはなく候、今すこしさきへおとをりあれ、おゝもつともなり、さりながら、いろことはゆきさきしらぬよるのみちひらに一夜と申ける、いや〳〵何と仰候共おやどはかなひ申まじ、まさひめ聞召何と申ぞ小次郎、さん候道ゆき人のおやどゝ仰候程に、かなひがたきよし申候、ひめ君かきごしにみ給ひ、いろことは誠にたび人とみへたりとしもいそじにあまる人、御身の父もましまさば此たび人のとしぐらい、おもざしもにたるぞや、何かくるしかるべき、はゝうへのぼだいのたね共なりやせん、一夜をあかさせ參らせよ、其時小次郎立出さあらば御入候へと、内へしやうじ奉る、ともみついほりの内に入、つく〴〵とみまいらせ、いかに上郎かゝる人ざととをき所にわかきかた〴〵計にてあるじはいづくにましますぞ、姫君は聞召されば此やのあるじは是成おさなきものにて候、ともみつ偖偖さやうに候はゞやどかし給はぬもことはりなり、さいさん申候だんさぞひほう成ものとおぼすらん、さて父母はいかゞならせ候ぞ、さん候父にはようせうにてわかれ候、いろことははゝ一人をたよりにてとし月おくりさぶらひしに、こぞのなつはゝにもおくれしかも明日が一しうきにて候ゆへ、さやうの事も思ひ出、かくみぐるしきいほりなれど、御やど參らせ候ぞや、いろことは御心有かたならば一ぺんのねんぶつをも御ゑかうあつて給はれとうれいふしなみだと共にぞ申さるゝ、ことはおにをあざむくともみつも、いろふし人のあはれを身にうけて共になみだをながしける、ことは偖かた〴〵は御としはいくつにならせ給ふぞや、まさひめ聞召小次郎は十一歳、わらはゝ十五に成申が共に三月十八日のむまれにて、くはんおんのめぐみふかきよしつね〴〵はゝの申せしゆへ二人共に此くわむせをんを父共母共たのみつゝ、いろことはうれしきにもかなしきにも此くはんおんのみなをとなへてくらし候、ともみつはつと思ひ、すはや是こそほとけのつげ何とぞしてたばかりつれのぼらんと思ひつゝ、げにいたはしき御事かな、都のか

たへおのぼり有御みやづかへはなされぬぞ、もつ共さやうに存れども、ふりよにはゝにおくれしゆへ、とはうにくれてとし月をけふよあすよとくらし候、偖々ふびんの御事や、それがしは都のものにて候が五十にあまり申まで子とてももたぬものにて有、かたゞ〳〵の御物がたりよにいたはしく候へば、こよひのおやどの御ほうじに都へともなひ參らせ御世に出し申べし、うばにて候ものもなさけ有ものなれば、さだめてよろこび申べしと誠しやかにぞ申ける、地まさひめよしを聞召、なふうれしき人の仰かな、いろことはいかに小次郎たび人の我々を都へともなひ、御みを世に立るさせんとの給ふぞ、よろこびようの仕れ、小次郎聞てうれしく候さりながら、きのふふもとのさと人がおくよりあき人ののぼりたり、おさなきもの共心せよと申候、まづ此事は御しあんあれとぞ申ける、おゝよくこそ申せ小次郎よ、いろことはさりながらいづくいか成國までも此くわんをんをもり奉りのぼりなば、よもさいなんにはおちいらじ、かやうに都へのぼるとてわが身のためにあらばこそ、御身を世に立ゝはゝの御ぼだいをさへとふならば、あるかひもなきみづからが、命はさらにおしまぬぞ、いかにたび人あけなば御とも申べし、さりながら此年月二人のものねんじ奉るくはんせをんの御はします、此御ほとけをもり奉りたく候いかゞあらんと申さるゝ、ともみつしすましたりとよろこび、何事もそれがしに御まかせ候へ、其外手ぐそく何にてもようのもの候はゞ都へとゞけ參らすべし、地かかりさあらばようの有べしと其夜のあくるを大三重待給ふ、地つれふしあらいたはしや、ひめ君は、地人のことばをたのみつゝ、おさなき人の手を引て、くさのはしげきむぐらやの、地あれたるいほりを立出て、地みやこをさしてのぼらるゝ、こゝろの内こそはかなけれ、地けふたちいづるたびごろも、かはくまもなきそでのつゆ、たれかあはれとみよしのゝ、山ぢはるかになが むれば、あとはとをちのさとをすぎ、人をはつせの山風にむらさめしげくふるのみや、もみぢのにしき神のまに、ぬさをたむけの山道に、うき身はなにとならざかや、このてがしはのふたおもて、とにもかくにもおさな子の、ゆくへを思へばむねの火も、とぶひののもりきへやらで、あはれ、は

か、なき、身なれども、すへをたのみにみかさ山、みへつかくれつしの丶めに、月をかこちてゆくそらのもとの、身ながらやつれはて、いとゞ思ひはますだのいけ、おさなき人はあゆみかねゐれいふしたちやすらいておはします、大夫こゝはいかに小次郎すみなれそめしふるさとを、とこはなれ行かなしみも、二人おやかう〳〵のためなれば、くるしき心をなぐさみていろおくりしばし、うれしささほの川、地わたりくらべてわれ〳〵も、いつかはよにもいでのさと、げに玉みづはなのみして、わけてながむる身ならねど、しらぬめいしよのかず〳〵、地をとふにつらさのまさりつゝ、なみだにくもるあさひやまめぐり〳〵てたきのみづ、いとくりかへしゆくほどに、野くれさとくれ山をこへ、月のみやこにつき給ふかの、ひめ君の御ありさま、たゞ世の中の物のあはれは是なりたゞ是なるはとみなかんぜぬ、ものこそなかりけり

## 第四

かくて其後、ことはね川ぎやぶともみつは人々をともなひ、いそぎ都に上りつゝすぐにわがやに立歸れば、女ばう立出、偖きやうだいをみまいらせ、さても〳〵よにいつくしき人々かな、いづくの國いか成人の子成ぞや、姫君聞召さん候われ〳〵は、やまとの國の者なるが、是に御ざ有御方の都へのぼりいか成かたへもほうこうさせ、よきにはからひ申さんとよにあはれみましますゆへ、それをたよりに是までのぼり候ぞや、たゞ何事も〳〵かた〴〵をたのみ奉るといろふしいとしほ〳〵とぞ申さるゝ、女ばう心におもふやう、偖もじやけんのわがつまや、いかにしうめいなればとてかくいとけなき上らうをうしなはんとはふびんやとしのび涙をながしつゝ、ことは誠にすみなれ給ひしふるさとをはる〴〵のほらせ給ふ事、さぞたよりなく思召さんさりながら君にみやづかへましまさばめでたき事にて候はん、地まさ姫は聞召、うれしき今の仰かな、ことはおとうとさへよに出ば、みづから女の事なれば、いろことは何たるくらうをいたす共、いかにもつとめ申べし、只御ふうふの人々をひとへに頼み奉ると、うれいふし涙をながして、申

さるゝ、ことは女ばう聞て偖もやさしき御心、地とふにあはれはまさりぐさ、かれ〳〵に成事共を、いろに出さでしのびねにうれいふしなくより外の事はなし、ことはともみつきつとみていかにそれ成女ばう何とて人々にきうそくはさせ參らせぬぞ、おくへつれ行候へとあいさうなげにぞ申ける、女ばう何共ことばなく、地こなたへいらせ給へやと、地人々をともなひてみうち、さしてぞ入にける、ことはともみつつくづくと思ふやう、今の女のていたらく、おさなきもの共をふびんに思ふとみへて有、もしもよしなき事をかたらばこうくはひす共かなふまじ、とかくこよひの内にじつぷをたゞし申さんと、おもひこふでそれよりもひそかに内に立入、何となく姫をよび出し、こごゑに成て申やう、いかにまさ姫、御身をかやうにつれのぼる事よのぎにあらず、さきに申たく候へ共おさなき人につゝむゆへ、とかふのことを申さぬなり、かやう〳〵のしだいにてわが君きよわか殿れいにかはりしいれいゆへ、てんやくのかみ申せしは、同年同しやうの女をがいし、其いきぎもをもちゐなば御ほんぶく有べしと申ゆへ、さいわい御身はわか君と同年同しやうの人なればこよひの内にがいするぞ、かまひてうらみ給ふなよ、其おんしやうにはおとうと小次郎にくわぶんのしよちを下さるゝとにが〳〵、しくこそ申ける、地まさひめよしをきゝもあへず、なふよは誠かかなしやとうれいふしなみだにくれてぞおはします、ことはともみつ大きにいかり、何をなげき給ふぞやさいせんより御身の給ふは、あの小次郎さへ世に出なば一命とてもおしからじと、たび〳〵御ぶん申されしは、あゝ偖はいつはりにてましますか、少もいはいの有ならばまづおさなきものをうつてすて、其後御ぶんをさしころしともにうきめをみせ申さん、せひの二つはこゝなりと、八はうをにらみつけ、さもおそろしく申せしはなふはるをとしなさけ、なふこそ聞へける、いたはしやまさ姫は、何とわくべきかたもなく、さて〳〵じやけんの有さまや、とくにもかくとしるならば、なにしに是まできたるべき、又みづからが命をおしみ申なば、わかもろ共にころさんとは、是はむたいの御事や世の中に〳〵、かみやほとけはおはせぬかと、うれいふしふししづみてぞ、なげかるゝ、ことはともみつなをもい

かりをなし、いかにまさ姫、さあ〳〵とくと心をさだめ給へ、もしもいはいの有ならばまづ小次郎をがいせんと、ずんと立ておくへ入、まさ姫あはてゝすがり付、なふさてみづからいなと申なば、二人ともにうしなはんとや、うらめしき御心、しばらくまたせ給ふべし、おもひさだめて候ぞや、かゝるじせつにあふ事も、ぜんせのゐんぐはといふゆへ、恨みとさらにぞんずまじ、いろことはさはさりながらおとうとをかならず世に立たび給へ、地かれだに世に出申なば、きへん命はをしからじとおとなしやかにはの給へ共、さすがわかれの事なればうれいふしぜんごふかくになげか、るゝことはり、せめてぞあはれなり、ともみつもさすがふびむに思へども、わざとことばをあらゝかにいかにも〳〵御身さへ命を君にさしあげ給はゞ、わかは世に出申ぞや、心やすく思はれよ、地ひめ君よしを聞召なげきの中のよろこびとは、かかる事をや申らん、いろかんことはもはやこんじやうに思ひおく事候はず、さいごをきよくいたすべし、偖みづからをいか成ものとおぼすらん、今は何をかつつむべき、われ〳〵が父うへはたむらしやうぐんさまの御内に、かげゆさへもんゆきはると申ものにてさふらひしが、さるものゝざんげんにて君の御ふしんかうぶりて、いろことはやまとの國うだの里に身をかくしじせつをあいまち給ふ所に、いろことはいたはしやちゝうへいまだ御しやめんなき内に、ふりよにあいはて給ふゆへ、地わらは女の事なれば、せめては此小二郎を、十五歳までもりそだて、其後はいか成かたをも頼みつゝ、是はさへもんがわすれがたみで候と、君の御しやめん申うけ、すぎさり給ふ父うへの、しごにねがいをかなへんと、心をつくせしかいもなく、あいみる事もこよひばかり、偖もはかなき世の中とうれいふしふししづみてぞ、なけかるゝことはともみつよこでをてうど打、偖はゆきはるのわすれがたみにてましますか、御身の父とそれがしはしたしみふかきはうばいなり、人こそおほき其中に、かゝるよしみの人の子を、我手にかけてころさん事、あゝしなしたる事共やと、いろ地かゝりなみだにむせびうちしほれうれいぜんごふかくに、みへにける、ひめ君よしを御らんじて、なにいろことはみづからがよそがましき物がたり、偖は此御やかたはたむらしや

うぐんさまにてましますか、其若君きよ若さまの御いれいに、みづからがいきゃもをめされとや、おろかなりともみつ殿、地わらは女の身なり共、其いにしへはあづさゆみ、やたけ心の我からと、思ひしものゝ子にて有、おしうの命にかはる事、あつぱれくはほうの我身かな、くさのかげなるちゝうへも、うれしくこそはおぼすらんと、ひとりごとにいさみをなし、ことは偖さいごは只今にて候か、ともみつ聞て、いや〳〵此あかつきが御さいごなり、まさ姫聞召偖はしばらくのじこくにて候、我等國もとよりもり奉るくはんおんは、はゝうへさま御さいご迄もおがみ給ひ、めでたくわうじやうなされたる御ほとけ也、みづからも今をかぎりの事なれば、御いとまごひ申たく候、ともみつ聞てげに有がたき御事かな、いかにもはいし給ふべし、かまひて〳〵小次郎に此事しらせ給ふなと、やがて内にぞ入にける、地あらいたはしやまさ姫は、是ぞ此世をかぎりぞと、地まづ御佛に參らんと、地いろなく〳〵おまへに參りつゝ、なむや大ひのくはんぜをん、ちゝはゝのごせぼだい、よきにみちびきたび給へ、べつしては小次郎のゆくすへまぼらせおはしませと、ふかきねがいをかけ給ひ、ねがはくはぶつりきにて、只今きへゆくみづからを、ちゝはゝとおなじうてなに、すくいとらせたび給へと、ふかくねがひをかけ給ひ、かくきうせんにかゝるみづからが、らいせのくげんぞかなしやと、うれいふしふしまろびてぞ、なき給ふ、地やう〳〵心をとりなをし、ことは小次郎がそばちかく立より給ふ、地ふびん成かな小次郎は、地ならはぬたびにつかれはて、ぜんごもわかでふし給ふ、いたはしやまさ姫は、おとうとのかほを御らんじて、偖もふびんや小次郎が、只今きへゆくみづからが、さいごのほどをしらずして、よねんなくふしけるぞや、世の中に〳〵、わらはほどうたてかりけるものはなし、ちちはゝにはようせうにておくれ、みなし子と成はて、野に出山を家として、兄弟より其外は、たれをたのまんかたもなしおさなきものゝ事なれば、さぞや心のみだるらんと、思ひやられてあさましやと、あとまでも思ひやりうれいふしのび涙はせきあへず、しよじの、あはれと聞へけり、ことはかゝりける所にはね川きやうぶともみつは、家の子二人めしぐしじぶ

んはよきぞと立より、いかにまさひめさあ〳〵出させ給ふべし、地ひめ君は思ひわけたるかたもなく、なみだにくれてぞおはします、ことはともみつそれ〳〵と有ければ、承り候とて、やがて立よりひつたて、いろ地にはのおもてにつれ行しはなさけ、なふこそ三重みへにける、さて其後に、ことはいかにまさ姫さいごなるは何にてもいひおき給ふ事はなきか、いろことはひめ君涙の内よりももはや此ごにおよび何ののぞみもなく候かへす〳〵も小二郎がゆくすへたのみ奉ると、なみだと共にぞ申さるゝ、ことはともみつ聞て其だんはそれがしに御まかせ候へ、いかに汝らじこくうつるにそれ〳〵と有ければ、かゝりかしこまつて候と、こほりのごとく成かたなをぬき、すでにかふと見へし時、ひめ君あはてゝ取付、なふしばらくまたせ給ふべし、さり共と思ひしに、是がさいごで候はゞ、今一どおさなきものに申おきたき事のあり、やれ小次郎よ〳〵、是が此世のわかれぞや、など詞をばかはさぬぞ、いづくに有ぞ小次郎と、うれいふしこゑをあげてぞさけばるゝ、ことは二人のものとつておさへ、ゑゝ是みれんなりやひめ君と、心もとにをしあつれば、あつとばかりをさいごにてつゐにむなしく成給ふはうれいおとしめもあてられぬしだいなり、ことは僧二人のものきもをそろりと取出し、うつわ物におさめつゝ、ひめ君のしがいにきぬ引かづけ參らせ、三人のもの共はたがひにかほを見あわせ、いろことは僧も〳〵世の中にせまじき物はみやづかへ、われほうこうの身ならずば、かゝるうきめは見まじきものをと、さしもにあらきもの共もうれいふしぜんごをぼうじていたりける、ことはあらふしぎやみづしのうちよりも此うつわ物にひかりさす、こはいかにとふりあをのきて見てあれば、くわんおんの御むね二つにさつとさけ、ちのながれ出る事ひとへにたきのごとくなり、ともみつをはじめつゝいかさまふしぎはれやらずまさしく姫君の御むねをさきたるに、今みほとけよりちの出るは是はいか成事やらんと姫君のしがいを、きぬひきのけてみてあれば、ひめ君はましまさず、ともみつ大きにおどろき、まづくはんせをんをおがまんと、地とる物も取あへずいろおくりぶつせん、さしてぞまいりける、ことはこはふしぎやきやうだいもろ共せんごもしらずふし給ふ、

ともみつ大きにあはてつゝ、僭は此くわんおんの身がはりにたゝせ給ふと、きやうだいの人をおしおどろかせば、二人共にめをさましたゝばうぜんとあきれゐたり、ともみつよこでをてうどうち、ことは僭も僭もしやうじんの御佛にやいばをあてちをあやしつる、五ぎやくのとがをいかゞせん、まつぴらゆるさせ給へやと、うれいふしずいきのなみだをながしつゝ、ことは僭も〳〵御身はたゝ人と思ひしに、是ぞ誠のくわんせおん、姫とあらはれ給ふかや、只今つくりしつみとがをたすけ給へやおゆるしあれ、なふ姫君と申つゝ、なみだをながしらいはいし、かゝるきたいの御事を、いかでかさしをき申べき、いそぎ君へうつたへんいざこなたへ〳〵と、御所さしてあがりける、かの姫君の御有さま、きたい千萬尤あやうき事共やと皆かんぜぬ、ものこそなかりけれ

## 第五

かくて其後、ことはたむらしやうぐんとしひとはみだい所をちかづけ、いかに申さん聞給へ、きよ若がびやうなんとやせんかくやあらましと心をこめて思ひねに、すこしまどろみ申内にこんやふしぎの御れいむをかうぶりたり、たとへばつねにみなれ奉らぬくはんせをんのそんよう、清若がまくらがみに立給ひ、御むねのまんじより大くわうみやうをはなち給ひ、其ひかり清若が口中に入らせ給ふと思へば、たちまち清若ほんぶくすとゆめにみる、ふしぎなりとの給へば、みだい此よし聞召れ、僭もふしぎの御事や清若がいれい、ゆふべうしみつのころよりやまふしづまり、すこし靜にふしたるとめのとのかたよりつげたりしが、けさはやうすも聞へぬぞ、やあたれか有、みて參れとの給ふ所に、清若丸御ふんぶくにて出給ふ、ふうふの人は取つき、いろことはなふおことはかる〳〵敷もほんぶく有こそうれしけれ、いろふし是もひとへにくわんをんの御じひと、うれいふしうれしなみだを、こぼさるゝ、ことはかゝりける所にはね川ぎやうぶともみつは姫君をともない、急ぎ御まへに參りつゝ、くだんの御佛ならびにうつわ物をさゝげつゝ、有ししだいを申上、いろふし御せんともはゞからずなきふしかんるいそでをぬらしける、ことは大將

よしを聞召、むさうといひじげんといひ、是たゞ事にあらずいそぎうつわ物をひらくべし、承つてふたをとれば、あら有がたやいけうくんじて、其内よりぶつしんじやだいじひとあきらかにもんじすはりこくうに、あがらせたまひける、ことはとしひといよ〳〵かんたんし、大じ大ひの御りやく今にはじめぬ事ながら、かゝるきどくあらはし給ふ、御身は神か佛かと、おの〳〵かうべをかたむけて、ひめ君をらいし給ふ、げにことはりとぞ聞へ、ける、地としひとふうふの給ふは、ことはいかにまさ姫、御身しん〳〵誠有かく有がたき御佛の、御心にかなひ給ふ、そのぎやくゑんにひかれつゝ清若ほんぶくいたす事、しやう〳〵せゝのきへんならん、かゝるきどくをあらはし給ふ、御身はいづくいか成人の子なるぞや有のまゝになのり給へ、其時姫、こは有がたきじやういかな、地今は何をかつゝむべき、みづからは、ことはたう君の御家の子に、かげゆさへもんゆき春が子共なり、あらぬざんじやのしはざにて、君の御ふしんかうぶりつつ、三とせいぜんにあいはてられ候、地わらは女の身なり共、君の御かんにあつかる事、くさのかげなるちゝゆうれいも、さこそよろこび候はんと、なきふしなみだをながし申さるゝ、いろふしとしひとふうふもろ共にはつみふしそでをぬらさせ給ひ、ける、地やうやうなみだをとゞめつゝ、ことは偖も〳〵ゆき春はちうかうふかきものなりしが、ねいじんのことばを誠と思ひ、むじつのりにしづめたり、めしかへさんと思ふ所にあいはてぬればちからなし、今又汝にめぐりあふも、三せのぎゑんくちぬゆへかゝるたつときまさ姫を、清若とふさいのゑんをむすばせ、我ゆいせきをゆずるべし、又小次郎は清水寺ゑんちんそうづのでしになし、出家をとげさせ、御身たちがちゝはゝや、われ〳〵がぼだいをとぶらひ申べしと、かり地一か一もんめしあつめ、しゆかうのしな〳〵とゝのへて、ちよばんせいの御しうげんのいろおくりぎしきの、程こそめでたけれ、ことは偖其後に、としひとはいかにかた〳〵、こんど清若がびやうちうにとりまぎれ、久々せいすいじへ參らず、いざやさんけい申つゝ、かゝるふしぎの事共を、ゑんちんにかたらばやと申さるゝ、其時まさ姫げに有がたき御事や、かゝるおりふしにて候へばせいすいじのくはんぜお

んの御まへにて、まんどうゑをとりおこなひすぎさり給ふ父母の、ごせぼだいがとぶらひたく候いかゞあらんと申さるゝ、としひとよしを聞召、偖も〳〵思ふにまされるしんていかな、いかにもとゝのへ參らせん、せん、いかにからうのめん〳〵、清若ふうふはじめての物もふでなれば、ぎしきをとゝのへ申べし、かゝりかしこまつてそれよりも、しだい〳〵に申つけ、きおひ三重きよ水さ、してぞ參らるゝみだうとなれば、ことはおやこ四人の人々はまづぶつせんに參りつゝ、げんせあんおんごせうせんしよとねん比にふしおがみ、偖ゑんちんにたいめん有、ありししだいをかたり給ふ、ゑんちんかんるいまし〳〵て、ぐそうようせうのむかしより、すいらうの只今までずいぶんしん〳〵をこらせ共、かほどのきどくはおがみ申さず、有がたき御事かな、又ちゝはゝの御ためにまんどうゑをおこなはんとはいよ〳〵やさしき御心、ずいぶんとぶらい參らせんとの給ふ所に、ふしぎやとうざいより、かゝりしうんたな引、なんによのすがたあらはれ給ひ、手にとうみやうをさゝげつつ、きたらせ給ふぞふしぎなる、地やう〳〵ちかくなりければ、ことはいかにまさひめめづらしや、われ人げんに有し時、ふげんしきしんのとくをあらはし、かりにちゝはゝとげんじたり、今又かゝる御はうべんにてけちゑんの人々をまことの道にゑんだう有、ありがたく存るゆへ、とうざい二佛の淨土より、しやう〳〵の火をもちきたりたり、いざまんどうをとぼさんとの給ふ時、二つの火とうざいへさつととびされば、一まんのとうみやう皆一どにはつととぼりしはふしぎ、なりける次第なり、ことは人々きゑの思ひをなし、かうべをかたぶけらいはい有、其時二人の人々いかにゑんちんとしひと、我々は是くわんじざいそんのさゆうのけうしなりとの給ふと其まゝに、ちゝうへはせうてきびしやもんとげんじ給へば、母うへはせうぐん地ざうとあらはれ給ふ、其時姫君の給ふやう、御身たちしん〳〵の誠をこらし我をしんずるとくにより、かたきをほろぼしやまふをたすけしゆ〳〵のりやくをほどこしたり、今はほんどに歸るべしととちやうの内へいらせ給ふ、其時ゑんちんいかに姫君、是はいか成御事ぞや、ふしぎさよとの給へば、姫君おろかなりゑんちん、おういちやう

じやさいくわんぶによしん、とくどしやそくげんぶによしん、にゐせつぼうといふめうもんの有をわすれたるか、汝一人の大だんなとしひとが一子清若丸、あつきのなやみにくるしむをすくはんためのはうべんなりと、の給ふみこゑの下よりも、四はうのみちやうさつとおるれば、としひとゑんちんこはいかに、まさ姫と思ひしに、僧は大ひくはんせおんにてましますか、とても大じ大ひの御ちかひに、今一たび誠の御すがたあり〳〵と、いろふしおがまれさせ給へやと、うれいふしなみだと共に申さるゝ、ことは其時こくうにおんがく聞へ、花ふりくだり、かぐりいけうよもにくんじ、ふしぎやみちやうの内よりも、めうをんたゞしきみこゑにて、今ぞ誠のそくげんぶつしんにゐせつぼうとの給ふと其まゝに、せんじゆせんげんくはんせをんとあらはれ給ふ、じげんじしゆじやうの御りやく、ふくじゆかいむりやうなり、たむら一家の人々はさても〳〵有がたやと一度にはつとかんじける、偖こそ洛陽清水寺は田村將軍の御願にて圓鎮僧都の御開基此尊像に願ひをかくる人々は、現世安穩ふつきじざいごしやうせんしよの御ちかい今にたへせぬ、御めぐみ、もつとも日本第一のくはんせをんと今の世にいたるまできせんぐんじゆの參詣あり大慈大悲の御誓願有がたしともなか〳〵申ばかりはなかりけり

清水觀音利生物語終

# をぐりの判官

## 第一

扨もその〳〵ち、中比の事かとよ、ひたちの國とつはた村といふ所に、正八まんむすぶの神といわゝれおはします、由來をくわしく尋るに、都三十六人の其中に、三條高倉の大納言、かねいゑとの〳〵御ちやくし、おくりの判官まさきよとて、高家壹人おはします、去程におくりとの、くらまたもんの申子にて、八わた八まんのゑぼしおやにてましませば、ちからの程は數しらす、うへこす人はなかりけり、扨又家のこうけんには、池のせうしと申もの、おくりとのにおとらぬかうの者、其外とざまのしよさふらひ、主君とあふきたてまつり、ゑいくわにさかへ給ひけり、しかるにおくりとの、くらまにしゆくくわん有故に、いけのせうしを御供にて、くらまをさしてそ三重參らるゝ、御前になれば、うかひにて身をきよめ、わに口てうとうちならし、よきにきせいをかけ給ひ、扨有へきにあらざれば、こしよりようでうぬきいだし、かくはさま〳〵おほけれど、そうぶれんといふがくを、しばしふきてぞ三重おはしける、かかる所にみぞろか池の大じやは、たちまちりうによと身をへんし、がくをてうもんしたりけり、小栗御らんじて、それなるはいかなる者とそ仰ける、大蛇こたへて、さん候みづからは、はるかいなかの者成が、なさぬ中のざんにより、身の置所なきまゝに、是迄參り候と、げにありそふにぞ申ける、おくり聞し召、扨は左樣に有けるか、こなたへ來り候へとて、つれて御所へぞ歸らるゝ、御所にもなれは、秋の蟬のから衣、うすき世なれどちきらるゝ、今ははや、つぼねもくわいにんと成給ひ、詞有時小じやを召れ、いかに小蛇、われ人けんとちきりをこめ、只ならぬ身にて有、後にはあらはれおひいたされんはぢてう也、みづからがいらん池あらは、見て參れと有けれは、小じや承り、御前を罷立、南おもてへ打こゑ、かなたこなたを見まはし、それよりも取てかへし、さん候是よりみなみおもてに、しんぜんゑんと申いけの御ざ候、是へいらせ給ふべし、つほねよろこひ、やがて大蛇とさまをかへ、南おもてに三重いりにけ

り、かゝる所に、しんせんゐんが池にすむ、八大りう王、おどろき出させ給ひつゝ、いかに大蛇、なと人間とちきりをこめ、我すみかにはかなふまじ、もとのみぞろにもどるべし、大蛇こたへていわく、人間とちきりをこむれば、ふつたいの身と成ゆへ、此池にいるへし、いやかなふましとのせんぎにて、七日が間は雨風しきりにしんどうして、御てんもくづるゝ三重ばかりなり、是は扨置、みかどには、くげ大臣を召れ、とり〳〵のひやうでうなり、内よりの宣旨には、はかせを召、うらなわせよとのせんしなり、かしこまつて候と、やがてはかせを召れけり、おくよりのせんしには、いかにはかせ、かやう〳〵の次第なり、はかせ承り、ひとつのまき物取出し、しばしかんがへて申様、是は三條の大臣、かねいゑとのゝ御ちやくし、おくりのはんくわんまさきよどの、みそろが池の大じやと、ちきりをこめさせ給ふゆへ、扨こそしんどう仕る、おくりをるにんたるへくは、天下めてたかるべしと、見どふす様に占て、はかせは我家に歸ける、みかどおどろかせ給ひ、其儀にて有ならは、父かねいゑ召せとの宣旨なり、かしこまつて候と、かね家をぞ召れける、かねいゑ何事やらんと急き參内なされける、おくよりのせんじ、如何に兼家、ふびん成事なれど、少ししさいの有間、此たびおぐりをひたちの國へ、るにんとの宣旨なり、かねいゑちよくめいかふむりて、こはふしきとは思へ共、せんしなればちからなく、畏て候と、やがて御てんを罷立、やかたをさしてぞ歸らるゝ、やかたになれば、おぐりとのに近付て、いかに正清、とがは何とはしらね共、きみよりのせんしには、御身をひたちへ、ながしをけとの宣旨なり、若木の花を流人させ、跡に殘る老の身は、何と成へきものうやと、まづさめ〳〵と泣給ふ、おくり聞召、扨は左様にましますか、せんしなればちからなし、より〳〵そうもん申べし、おいとま申てさらばとて、互にいとまこひこわれ、十人のとのばら達を打つれて、三條の御所をば、夜半にまぎれて出給ひ、ひたちにるにんと三重聞えけり、ひたちになれば、しんそうにやかたを立、くろきの御所と名付、ゑいくわにさかへおはします、ある日雨中の事成に、殿原たちを召あつめ、酒ゑんをはじめ給ひけり、酒も半の事なるに、何國

共しらすあき人壹人來り、門外をあきなふやうのおりしろや、御たしなみの道具にはじんを召れ候へ、や、きやらを召れ候へと、たからかにそ賣にけり、おくり聞召、あのあき人召との御でうなり、畏て候と、おもてに出て、如何にあき人、こなたへと御前ちかく召れける、おくり御らんじて、いかにあき人、汝かうしろにおふたるは、何成ぞととはせ給へば、あきひと承り、さん候、是はくすりの品々をもとめ賣るにより、せんだひつと申候、おくり聞召、左様の藥を賣ならは國はいかほと廻つて有そ、扨又汝か名をば、何と申と問せ給へば、あきひと承り、かうらいへは第七度、およそ日本は三度迄めくり候と申、扨又それがしが名は、まづつくしにおゐてはさめがゐの後藤、都においては三條にむろ町の後藤、かやうに申はさかみの後藤と申て、凡そ日本には後藤の名字つく者、我ら三人ならでは御座なく候とぞ申ける、おくり聞召、すがたを見ればあづまえびす、心は花の都なり、酒をくめや殿はらとの御諚なり、池のせうし承り、何國もしらぬあき人に、そゝろにさけをぞしいられける、酒も中ばの事成に、池のせうし申さるゝは、いかにあきひと、此御所は心ふでうにまし〳〵て、いまた定る御前なし、よきひめあらば仲人せよとの給へば、あきひと承り、なきと申ものならは、國をめぐりしかいもなし、あるやうに申なし、通らばやと思ひ、爰にむさしさかみのぐんだいに、よこ山殿と申せしは、五人のきんたちおわします、おとのひめ君は、下野日光山の申子にてましませは、則御名をば、てるての姫と申て、かたちをみれば春の花、姿は秋の月十はら、とをのゆび迄もるりをのべたるごとくなるひめ君にておはします、此ひめ君こそは、當御所様の御臺所にてましますと、ことばに花をさかせ、べんぜつたつして申ける、おくり聞召、まだ見ぬ戀にあこがれて、いかにあき人、其姫を仲人せよ、仲人するものならば、くんこうけしやうは望によつてしたがふべしとの御諚なり、あきひと承り、御仲人とはおゝそれおゝく候へば、一ふで召れ候へ、ふみの使と申けり、おくりよろこび、うすやう取て一重、思召るゝこと共を、さもぢんでうにあそばして、まつかわやうにおしたゝみ、あき人にたまはりけり、後藤玉つさうけ取て、御前を罷立、さかみをさしてぞ三重、急ぎける、さかみになれば、て

るての姫のおわします、いぬいのつぼねを、あきなふやうのおもしろや、女郎達のけわひ道具には、べにやをしろひたとう紙、尺のかもじは召まいかと、たからかにぞあきなひたり、折ふし女ほうたち出給ひ、いかにあき人此方へと、御みすちかく召れける、其時あきひとつゝらをおろし、品々を取出し、あれかこれかとあきなふたり、女ほうたち見るよりも、是はいつものあきなひ物、何にても珍ら敷ものはなきかとあれば、商人うけ給り、時分はよしと心へて、かの玉つさを取立し、いかに女ほう達、それがしひたちの國を、三日あきなひ申て候が、うつくしうしたゝめたる文一つう、ひろうて有、よくばてほんあしくは當座のわらひ草にし給へと、たはかり文を參らする、女ほう達はうけ取て、さつとひらき見給へば、何上成は月にほし、下に雨あられとめされしは、何樣心きやうらん成人か、すじなき事を、もじあるやうに書なして、途中にすてたはぢてうとて、一字をもわきまへず、一度にどつとぞわらわれける

## てるてふみ之段

去程に、てるてのひめ、七重八重のみすよりも、しつ〳〵と出給ふ、何をわらわせ給ふぞや、面白きことあらば、姫にもかたり、心をなくさめ給はれや、上郎達と仰ける、承りて、やがて玉つさ奉り、てるて玉つさうけ取て、先上書をほめ給ふ、ひつせいのけたかさよ、すみ付のみごとやな、主はたれ共しらねども、筆にて人のまよふとは、爰のたとへを申なり、地いかに女ぼうたち、それ百やうたつしても、一やうとてもしらざれば、人とあらそふことなかれ、何さまにも此ふみは、ぶんのよみこゑ有べきに、みつからようてきかせんとまつ、文の紐をとき、何成らんと見給へば、いせものかたりにことよせて、さもじんでうの此ふんや、大和ことばでよむべきか、又はぎにてもよむべきか、あら面白のこのよみやま、まつ一ばんの筆立に、みねにたつ鹿うすもみち、ねざゝあられと書せしは、先立しかのたとへをば、秋の鹿にはあらねども、つま戀かぬるとこれをよむ、うす紅葉のたとへをば、いろにだすなとよむべきか、ねさゝにあられとかゝれしは、花のたもとかさはらばおちよと是をよむ、池のまこもと召れしは、ひく手に

なびけと是をよむ、尺長帯とめされしは、さて此戀か戀かしゆみをへたゝて、あればとて、いちごに一度はめくりあひ、むすびあはんとこれをよむ、つかなき弓にはぬけ鳥、うずみ火とかゝれしは、此戀を思ひそめにし此かたは、ゐるもゐられず立にもたゝれず、我こゝろもえたつばかりと是をよむ、戀を七つにわけられた、見る戀聞戀かたる戀、逢ての後にわかるゝ戀、くもにかけはし中たえて、およばぬ戀をこひといふ地发にひとつの奥書あり、戀する人はひたちほうでうたまつくり、おくり殿にておはします、こひられ人はみつからなり、扨今迄も〳〵も、よその事かと思ひしにわが身の上にて有けるな、もし此事父よこ山あに殿ばらに聞えなば何と成なんかなしやと、かの玉つさを二つ三つにひきさきて、みすより外へふわとすて、れん中、さしていり給ふ、てるてのひめの御有さま、ものうかり共中々、申ばかりはなかりけり

## 第二

去ほとに、御前成女ぼう達、是はいつも參るあき人かと思ひしに、人商人にてかどわかしにて有けるぞ、時のはんしゆはなきか、あれはからへと有ければ、後藤此よし承り、よしなき人に賴まれ、しなしたりとは思へ共、发はひとつおどす所と思ひ、ひろゐんに上り、いかに女ぼう達、只今の玉つさを、ものをしつてやぶらせ給ふか、又はしらひて御やぶりあつてましますか、いて〳〵筆の始りを、かたつて聞せ申べし、まつ天ちくにては、だいしやうもんじゆのふではじめ、唐土にてはせんだうくわしやう、わが朝にては高野山におわします、弘法大し、四十八字のいろはのもしをつくらせたまへば、文字を一字やぶれば、こうほう大しの命を取たるごとくなり、二字又やぶれは弘法の十のゆひをもぎおとすごとくなり、てるてのひめ女ぼう達のごうの程、おそろしやと板ふみならしておどしたは、身のけもよだつばかりなり、てるて此よし聞召、あらおそろしの事共や地色扨もはかなやなみつからは、むさしさかみ兩國諸大名の方よりも、文玉つさの通ふ事、ふる雨したふかごとくなり、いづれも引さきすてけるが、皆みづ

からが後のごうとや成申さん、たとへば此事父よこ山、兄とのばらにもれ聞え、いか成うきめにあふとても、ふみの返事申さんとて、うすやう取て一かさね思召ことのはを、さもじんでうにあそばし、まつかわやうに引むすび、ひやうごのつぼねにわたさるる、つぼね玉つさうけ取て、やがておもてへ立出て、かのあき人にわたさるゝ、詞後藤王つさうけ取て、かわこのかけごにしつかと入、れんしやくつかんてかたにかけ、へいち門をつゝと出、といきを一つほつとつき、とらのををふみどくじやの口をのがれたる心ちして、ひたちをさしてそ三重歸りける、ひたちになれば、やかて御前に參りつゝ、殿ばらにたいめんし、是々御返事とて奉る、せうじうけ取我君に奉る、おくりよろこびいそぎひらきはいけんある、何何木曾路にかけしまろきばしと召れしは、返さはおちよあはんとの事成べし、ひめがりやうでううたがひなし、とく〳〵むこ入との御でうなり、いけの庄司承り、奥方は使者を立ねばむこにとらぬと承る、某使者に參らんと有けれは、おくり聞召、おろかや庄司我よこ山にむこにきらはりやう事にてなし、使者には我が參らんに、何のしさいの有べきと、十人の殿ばらをうちつれ、いかにあきひとろしの案内せよと仰ける、商人承りさきにたちてぞあゆみける、ほどなくゆけばさがみの國に著給ふ、後藤は高き所に上り、あれ〳〵御らん候へや、あれにむねかとの二けんならふたるは、五人のきんだちの御家かし、ゐぬいの方のつぼねこそ、てるての御所にておはします、あれに御うつらせ給へ、もはや某は御いとまとぞ申ける、おくり聞召それ〳〵商人に引手ものとらせよ、畏て候と、數の小袖を下さるゝ、後藤よろこび、わが屋をさしてぞ歸りける、それよりおくり殿いぬゐにうつらせ給へば、時のはん衆は出あひ、是はととがむれば、是はいつも參るきやく成が、そんぜぬかとさしてものでもなく、いぬゐにうつらせ三重給ひけるふしいぬゐになれば、てるて立出たいめんし、女ばう達の御しやくにて、御酒もりとぞ聞えける、此人人の御中、ひよくれんりの御ちきり、げに淺からずと三重聞えける、此事横山たちにもれ聞え、五人の子共を近付て、いかに汝ら、いぬゐのつぼねに始てきやくらいの聲がする、汝らはぞんせぬかとあれば、

い丶や我らもそんぜぬ、人もしらぬとばかりなり、よこ山大きにはらを立、我も侍人も何かし、いつしよとかまへし其内へ、使者をも立すこうきのむこ入、何より以てきつくわいなり、むさしさかみのせいをもよほし、つめばらきらせよとの御諚なり、時にちやくなんゑほしのまねきを地に付、いかにち丶ごに申べし、いぬゐのきやくらいは、たしか都のおくりと承る、父は三條高倉の大なこん、母はひたち源氏のながれをくみ、くらま寺の申子、ゐる矢をも中にてとる、神通の者なれは、まづ此度は一門しらぬ由にて、むこに御取有て給れや、いかにち丶ごと申ける、よこ山いよ〳〵腹を立、只今迄は汝らもそんぜぬかと申せしが、扨は姫といつしよと覺たり、みれば中々はらも立と、十のまくらをなけ打に給りけり、三郎がおしとゞめ、是は父うへまたれいのたんきおこり候な、某かたくみいだして候、あのかや原に丶なき置せ給ふ、鬼かげは何のためにて候ぞ、かやう成者をまぐさにかわんためぞかし、先明日に成ならば、むこしうとのげんさんとて、使者を立させ給ふべし、おぐり參らんはぢてうなり、其時酒をさま〳〵にもてなし、三ごんめといふ時に、何か都のきやくらいに、肴を所望との給ふへし、その時おぐり申さんは、弓かまりか包丁か仕らんと申べし、時に某罷出、いやいや父子はわかき時より馬をすかれて候、只一ばゝと所望せん、よこ山聞ていしくもたくむ三郎、其儀ならば汝いぬゐに使者に參れ、畏て候と三郎は、いぬいをさしてぞ參ける、いぬいになれば、殿ばらにたいめんし、よしをかやうと申入る、おくり聞召、參まじと思へ共、三郎殿の御出しう着申て候と安うりやうてうなされける、三郎悦び、我屋をさして歸りける、それよりもおくり殿、十人の殿ばらじんじやうに出立せ、よこ山殿へと急れける、よこ山たちに成しかば、大まくつかんてうちあけ、座敷のていを見給ふに、一だん高き所は、我しやうくんと思ひむんずひらりとなをらるゝ、十人の殿ばらも、ゆん手めてをあらそひ、ちとりかげにそなをられける、時によこ山立出、めつらしのおぐりどの、まつむこしうとのげんさんなれば、酒をさま〳〵にそもりながす、はや三ごんめといふ時に、よこ山の御諚、何か都のきやくらいに、さかなを所望との給へば、おく

り聞召、侍のげいならは弓か鞠か包丁か、力わざかはやわざか、はんの上のなくさみか、仕らんと有ければ、時に三郎すゝみ出、いや〳〵ちゝごはさやうの事はすかれず、若き時よりも馬をすかれ候、爰にふじさんのふもとより出たるあら馬を一疋求め候、さかなに一ばゝ所望と申けり、おくり聞召、馬をさかなとはふしぎやとは思へ共、じたい馬にはすいつ、日本をめくり蛇になわを付たり共、一ばゝのらんと思召、やすふりやうでうなされ、よこ山殿にいとまこひ、はかまのもゝ立高く取、馬屋をさしてぞ急ける、何れよこ山も馬すきと見えて有、四十二間の馬屋には毛色を揃へつながれたり、馬屋のべつとうを召れ、某がのる馬はあれか是かと宣へば、別當承り、さん候、あれにてなし、是にて候はず、きやくらいの召るゝ御馬は、こなたへと八町のかや野をさしてそゝや三重いそがるゝ、鬼かけか馬屋のみちと申せしは、去年はうだるしらかふべ、ことしはふだる生かうべは、さんをみだしたごとくなり、殿ばらたちは御らんじて、我君さま、是は馬屋の道にて候はず、人を送る野部と見えて有、御かくごあれとぞ申ける、おくり聞召、げにまこと奥方は手にあまる侍をば馬草に飼ふと承る、それがしはまぐさにはかはれまじ、心安かれ一馬場のつて見せ申さん、先鬼かげが馬屋のていを見給ふに、あゝらげう〳〵しの有様や、山出しならは一千人計にて出しそふ成楠を、四方へ八本どう〳〵とよりこませ、まはしらにはくすの木をすきまなく立られたり、人まくさを天井よりいるゝやうにこしらへ、鬼かけを八方八つのくさりにてじつとつなきて見えたりけり、鬼かげ馬屋の別當をみるよりも、又いつもの人まぐさをくるゝよと心得て、まへかきし只ゐなゝいて八方八つのくさりをしつととのし、只國土地震のゆるごとく、殿ばら達は御らんじ、こしの刀に手をかけ、いかにや鬼かげ、汝主君おくりを一口成共ぶくするとみるならば、五人しては五刀十人して十刀にて、汝かひら首打おとし、返すたちにてよこ山へみたれ入、一門と目釘をかぎりと打あふべし、運命つくるものならば、我君に御はら召せ、我々もじかいして、死出の山ぢを、主君おぐりと手にてを取てこさんに、何のしさいの有べきぞ、我くちとらん御馬に召れ候へと、きしよくほうたる

心ざし詞いか成てんまやく神も、おもてをむくべきやうぞなき地色ことばをくり聞召おろかやな殿原達、それは人間にむかつてのけなげわざ、ちく生にはかなわぬ迄もせみやうをふくめのるときく、某かせみやうをふくめんに、心安かれと殿はら達をば、しゆべやきのそとへおい出し、その身は壹人貳ばんのかうしによりそふて、せみやうをふくめ給ひけり

## せみやうの段

ふしいかに鬼かけきくかとよ、うしは大日によらいなり、馬はばとうくわんをんの、けしんのものときくからに、地よなる馬と申するは寺もんせんにつなかれて、經念ぶつをきく時は、人こそしらねつねにぶつみやうとのふる、汝は又角かや原につながれて、經ねん佛と聞されば、ちくせうの中の鬼ぞかし、是はたとへにあらね共、昔大國きやらそふこくのさつた王、ふぼけうやうの其ために、たんどくせんにのぼらるゝ、おりしも寒風はげしくして、ゆき高山に降つもり、とらがるもつなかりける、とらわうじを見るよりも、ぶくせんととんでかゝる、皇子御らんじ、いかにとら、しばしのいとまとらせよとて、によせちくせうほつたいしんとうしやうぶつと、とき給ふ、とらはほとけに成とかや、其身も成佛とげて有、汝又一馬場のらするものならば、汝か姿もくざうにきさませて、ふじのすそ野に一間四面にこかねのとうをくやうし、ばたうくわんをんといわふてこそはるさすべし、おにかげいかにと仰ける、もとより鬼かげ名馬のことなれば、おくり殿のひたいに米といふ字のすわり、兩がんにほとけ四たい立給ふを見るよりも、のせんといわぬ計りにて、前ひざ折てうやまふたは、只人間ものをしらぬなり、おくり此よし御らんじて、是はいかさま鬼かけがのせふけしきと見えてあり、さあらは鬼かげに力のほとをみせんとて、つゝと立よりゑび錠に手をかけ、ゑいやつとねぢ給へば、鐵金つよしと申せ共、はらりときれてのきにけり、くわんぬき取てかしこにすて、戸びらをひらき、其身は馬の平くひにいだき付、やうもん三べんとなへ給へば、ちつ共子細はなかりけり、八方八つのくさりを一つ所に御取有、ゑいやつとねぢ給へば、是もはらりときれてのく、二すじ取て中をきりゝと

ねぢ合、是をかつしとはませ、やがて馬屋を引出しすでにのらんとし給ふか、まてしばし、かやうに心あるむまを、むでにはのるまじ、ひとほめほめてのらんとて、馬引たてゝほめられたり、のふ御馬候様や、よき馬のきつさうや、むねは出はつてはりもあり、さうのおもかほしゝもなく、ほうがいあれてうわくちつゝて下口たれわたつのくびのごとくなり、はなあらしのやうだいは、年々へたるほらの貝を二つとつてほしあわせ、中よりぼたんを出すがごとくなり、眼は紺に黒して、赤がねのめつきをさし朝日に向ふがごとくなり、耳はちいそうわけ入て、八ぢくの御經を二巻おつ取作り付たるごとくなり、しめの髪は山すけか、谷の嵐に一もみもふでふわとなびいたごとくなり、どうの骨はつくし弓のじやうはり、つるを恨み一そりそつたるごとくなり、尾は山中の大瀧かたぎりにたぎつてさつ〳〵と落るがごとくなり、後のもゝはからのびわを二面追取作りつけたるごとくなり、前足のやうだいは、大から竹根引にして、有との節をさせごはんの上に作り付たるごとくなり、しかもけいしのほねあれて、鳥のにほねになれあひて、せいては下りまひては上り、毛なみほねあひよめのふし。爪はあつうてつゝたかけれ共、龍の毛にてちり打はらひ、天晴此馬にうちのり、千里萬里をかくるとも、何國にかは此馬の、つけうすやうはなかりけり、あつはれ御馬候とほめ給ひ、御身かろけに三重召れけり、馬屋の出し口さつくとかけてはしとゝとめ、しとゝ留てはさつくとかけ、まる木ばしをとく〳〵とのり出し、茅野に出させ給ふか、然るに此馬つないてより此かた、出たる事のあらざれば、いさみにいさむ有様は、ゑんこうかこずへをつたひ、あらたかがとやを破てきじにあふたるごとくなり、八丁のかや野を欠つ返しつのらせ給へば、十人の殿ばら達、あまりの事の面白さに、ゆんでめてよりたちわかれ、大こゑ上てぞほめられたり、是は地扨置よこ山は、いざやおくりかさいごを見んとて、敷皮もたせ茅野をさしてぞ出らるゝが、是は是はと計なり、それよりもおくりどの、先ひろにはにのりこうで、はのりをはしめ給ひけり。太郎あまりの面白さに、からかみせうしを取出し、是へ〳〵とのそみけり、乗てみせんといふまゝに、せうしの上のし

めのり、ほねおもならずかみをも破らず、とつくとつくとのりおろす、次郎あまりの面白さに、ごばん一めん取出し、是へ〳〵と所望する、是も乗てみせんとて、ごはんの上にのり上て、四そくを揃へのり給ふ、三郎あまりの面白さに、のぼりはしごを取出し、しゆでんのやばなにかけ、是へ〳〵と所望する、これものつてみせんとて、はしこの上をとつく〳〵とのり上て、あなたのやはなこなたのやはな、かけつ返しつのり給ふ、がんぜきおろし、むちのひしよにて、もとのろくぢにくりおろす、惣じてたづなのひしやうには、さしあいうき舟うらの波、とんぼかへり水車、ひきよくをつくしのらせ給へば、大かう一の鬼かげとは申せ共、まさるおくりの判官に、どうのほねをはさまれ、しらあわはふでぞうやまふたは、只にんげんのわさにてさらになし、それよりもおくり殿、御身かろげにひらりとおり、鬼かけをば櫻の古木につなぎ置、それより座敷へ出給ひ、よこ山一門にたいめんし、かうげんことはにかく計り、のふいかによこ山との、扨々あのやうに口やはらか成馬を、何とて鬼かけと付給ふ、あのやう成馬あらば、此馬のむこ引手に、五疋も十疋も給れや、ひたちにかへりあさ夕十人の殿ばら達に、庭のりさせて見物せんと有ければ、よこ山一門おかしうはなけれ共、にがわらひといふ物に、いちどにどつとぞ笑けり、鬼かけ我をわらふと心得て、櫻のこほくを根引にしてこくうをさして欠出る、よこ山はあきれはて、今ははやむこのおくりに手をさぐる所と思ひ、のふいかにおぐりどの、あのむまとめて給れや、御とめなき物ならばむさしさかみ兩國に、人だねは有まいとの給へば、おくり聞召、さやうに手にあまる馬をば、かわぬがほうよと申度は思へ共、それはなにがしか何某にちぢよくをもとふかと思召、心安かれとゝめ申さんと、居たる所をつゝと立、ひろゑんに立出て、しばつなきのやうもんを、三べんとなへひらり〳〵とまねかせ給へは、こくうをかけしおにかけも、ひらりともとり、おくりをうやまふたり、汝ろうせき成との給ひて、御身かろげにひらりと召、もとの馬屋にのりこうで、むかしのごとく八方八つのくさりてしつとゝつなぎ置、それよりもおくりは、てるての姫を伴ひて、ひたちに歸らせ給ひなば、末はめでた

かるべきに、又乾のつほねに移らせ給ふは、おくりどの運のすへとそ聞えける、とにもかくにもおくり殿の有さま、きせん上下おしなべて、皆かんせぬものこそなかりけり

## 第三

さる程によこ山は、三郎を召れ、いかに三郎、都のおくりをまくさにかわんとすれとかなわず、いかゝはせんと仰ける、三郎承り、某又こよひのうちに、よき事をたくみ出して候、先ひろまにほうらいさんをかざり、ほうらい山座敷に、ふたへてうしをからくみ、どくとくすりの酒をつぎ、おくり十一人にどくの酒、我ら一門のむ酒は、くすりのさけをつぎわけて、きのふの馬の御しんろうに御酒一つと申て、使者を立させ給ふべし、大こうのおくりでも參らんはちてうなり、其時某しやくに立、おくり十一人にもるならば、たちも刀もいらずして、やす〳〵とほろぼさん、此義いかにと申ける、よこ山聞て其儀ならは、今度もなんじ使者に參れ、かしこまつて候と、三郎はいぬいをさしてそ急きける、いぬゐになれば、おくり殿にたい面し、よしをかやうと申入る、おくり聞召、安うりやうでうし給へは、三郎よろこび、我屋をさしてそ歸りけりオクリさる程におくり殿、すでに出んとし給へは、てるての姫はずがり付、とゞまり給ふべし、それをいかにと申せしに、みづからこよひ一度ならす二どならす、くわしき夢を三度見た、はづかしながらも夢もの語申べし、先一ばんの其夢は、我つまつね〳〵御てうあひなされけるむらしげどうの御弓、天よりわしかまひさがり、三つにけおれば中はくわるんともえあがる、うらはずならくに沈むなり、又もとはずはうわ野かはらにそとはに立と夢に見る、次の夢もさのごとく、みづからが十二の手はこの其中に、からのかゝみのましますか、母上さま迄六代、今みづからか手にわたり、七代つたわる此かゝみ、みつから身の上に大事のあらん其時は、おもてかくもりうらにしつとゝ汗をかく、あせの事は扨置ぬ、是もわしがまひさかり、二つにけわれば、かたわれならくにしづむなり、又かたわれは主は誰共しらね共、うわのがはらに、そと

はかゝみにたつと見た、第三はんのその夢は、わかつまも殿はら達も、つねのゐしやうを召かへて、白きしやうぞくを召れ、つゝゐしけのこまに打のりて、北へ〳〵と出給ふ、みづから夢心に、北はものうきかたうわのが原へこさあると、跡をしたふて出けるか、かなしき哉や、天よりくろくもまひさかり、つまの姿をみうしなひ、いぬゐのつほねにないて歸ると夢にみる、ゆめにさへ夢にだに、わかれとなれは物うきに、もしも此夢あふならば、みづから何と成へきぞ、とゝまり給へとの給へば、おくり聞召、おろかや女の夢見があしきとて、かつべきいくさにまけふでなし、いとま申てさらばとて、夢ちがひのようもんを、三べんとなへ殿はら達をうちつれて、よこ山殿へと急がるゝ、よこ山に成しかば、大まくつかんでうちあけ、座敷になをらせ給へば、十人の殿原達ゆんでめでになをらるゝ、其時よこ山立出、おくり殿にたいめんし、きのふ馬の御辛勞に、御酒ひとつとの給へば、おくり聞召、今日は某はきのみや精進にて酒はたべぬとの給へば、よこ山はあきれはて、いかゞはせんと思はるゝか、しばらく有てちやうだいへつゝといり、みのなきほらの貝を取出し、みぢんはらひてだいにのせ、いかにおくりどの、それ貝呑はむさしさがみ兩國をまいらせん、菜も給り御身もひとつまいれとて、思ひざしにそさゝれける、おくり聞召、しうとの方よりさす盃に、諸領をそへて給るうへは、いづくにこゝろおかるべきと、引うけ三ごんほし給ふ、殿ばら達は御らんじて、君のまいる此うへは、何のしさいの有べきぞ、いざのまんと、我も〳〵とのまれける、何がとくの事なれば、ゆんでへかつはとふすも有、めてへどうとふすも有、おくりどのゆんでめてにさんをみだしたごとくなり、殿はら達の其中に、いけのせうじと申せしは、おくりとのにおとらぬごうの者、君の御まへにかしこまり、いかに我君さま、いつのむ酒のさわなくて、只今ほしたる此酒は、身にしみ〳〵としみわたる、是はどくとおほへたり、御かくごあれや、君の御奉公是までと、是をさいごのことばにて、ついにむなしく成にけり、まだもつよきはおくりどの、弓手のひざをおし立、たちのつかに手をかけ、ひけうなりとよ横山、おくり程成弓取を、よせてつめばちはきら

せずして、どくにてころすひけう也、よこ山出よはらきらん、三郎出よさしちがゑんと、心は高砂のおのへの松といさめ共、何がとくの事なれば、天井の大ゆかも、ひとりくるりとまいかゝる、おくりさいごのことばには、ひとはうんめいつきぬれば、ちゑのかゞみもかきくもる、又さいかくの花もちる、ぐにん夏のむし、つまゆへとんでひに入、あへなく死をする事と、是をさいごのことばにて、ついにむなしく成にけり、ことはよこ山立出御らんじて、あつはれ今こそ氣はさんして有、いかに三郎此者共をどそうにやせんくわそうにやせん、はかせをよびよせ占よ、かしこまつて候と、やがてはかせを召れける、いかにはかせ、かやう〳〵の者なり、占と有ければ、はかせ承り、しばしかんがへ申やう、さん候おくりの壹人はどそう、扨十人の者共は主にかゝつてひぼうの死、是はくわそうになさるべし、おくり一人はどそう、火そうと占わけしは、おく〳〵殿すへはんじやうと聞えける、よこ山聞て、侍共に仰付けられ、やがてかくこそ三重おこなひける、扨其後によこやま思はれけるやうは、人の子をころし、我子をたすけおくならは、都の聞えもあしかるべしと、おにつぐ兄弟を召、いかに汝ら、夕ざりいぬいに參り、あのてるてを引立、さかみ川おりからか入うみに、しづめにかけて參れと、れん中さして入にけり

## かたみおくりの段

むざん成かな兄弟は、とある所に立よりて、くとき事こそ哀なれ、只よの中に〳〵、すまじきものは宮つかひ、我ほうこうの身ならずば、かゝるうきめによもあわじ、しんたい爰にきわまりて、せひをもさらにわきまへず、思ひばよわき心哉、身をかけわけしおやだにも、思ひきれは切給ふ、ましてや我々たもんなり、思ひきらんは安き事、先ひめ君へ參らんと、扨それよりも兄弟は、いぬいをさして三重急きける、さていぬゐにも成しかは、ひやうごのつほねにたいめんし、扨も都のおくりどの、ほうらい山のざしきにて、御はら召れ候なり、扨ち〻上の御でうには、夕さりさがみのふちへ、ひめ君さまをしつめにかけ申せよと、おにつく兄弟是迄參りて候なり、此よし上へ申させ給へと、なみだにくれてぞ申ける、つぼ

ね此よし聞よりも、しはし涙にくれけるか、やう〳〵と〳〵め、それに御まち候へと、御前さしてそ參ける扨御前に成ぬれは、かやう〳〵の次第にて、おにつぐ兄弟是迄參り候と、始おわ。かたりける、てるて夢共わきまへず、それはゆめかうつゝかと、きえいる計りになき給ふ、おつるなみたの下よりも、何わがつまおくり殿、ほうらいさんの座敷にて、御はら召れ候とや、さしもみつからか申たる事共を、御せうゐんのなき事よ、ひとはうんめいつきぬれは、ちゑのかゝみもかきくもり、又さいかくの花もちるとは君の事、けさしのゝめのむつことも、みな僞りのかねことは、にしきの床きやらの枕のうつりがも、又さめやらぬ其さきに、はや御さいごとは何事そ、あらうらめしのよの中と、もだへこがれてなき給ふ、され共なみたをおしと〳〵め、いかにつほね、其兄弟はいつくにぞや、ちかふ參れとの給へば、みすより外へ出給ひ地いかに兄弟、我つまのおくりどの、御はらめされ候とや、姫は夢にもしらぬそや、わらはゆめ程しるならは、つまのおくりにはらきらせ、かへすたちにてじかいをし、しでさんずの大河を、手にてを取てこさんもの、のふ兄弟とかきくとき、きえ入ばかりなき給ふ、おつる涙をおしと〳〵め、いかにつほねふかくなけくは、是三がいのまよひなり、扨兄弟と召れ、しばしのいとまゑさすへし、いまたうきよにある内に、かたみを送り申さんと、十二の手箱のふたをあけ、雪見の窓のおれ竹の、世はさかさまの事なれど、びんのかみとまもりをば、はゝ上さまに參らせよ。扨又からのかゝみをば、ふぢ澤の上人さまに奉れ、ひめがなからんあと迄も、よくとふらわせ給はれと、念比に申へし、そのほかなかいの女ほうたちにも、品々小袖を下さるゝ、扨又うへにめされし御こそでは、是兄弟にゑさするなり、ねんぶつとなへくれよかし、いかに女ほう達、是かわかれに有けるぞ、姫が顔もみたまへや、御身たちをも見おかんと、たがいにかほを見あわせて、もだへこがれてなきたまふ、時に兄弟見るよりも、こばみれん成女ほう達、姫君の御ためには、ねんぶつ申させ給へとて、しもとを以打はらひ、なく〳〵はまちに出にけるはなさけなふこそ聞えけれ、時に女ほう達ひとつ所にあつまりて、いざや姫君の御さいご成と

見おかんと、我も〳〵とうちつれて、はまぢをさしてそ三重急きける、さて兄弟は色詞姫きみをろうこしにのせ參らせ、くがに向て大おんあけ、いかに女ほう達、沖にてたいまつふるならは、すはやひめ君の御さいご成と思ひ、念佛申させ給へとて、舟々にかいをよこたへて、さすやさほ、こぐやからろのおとにおとろきて、おきにかもめかはつと立、あのかもめさへちどりさへ、ともをこふかややさしやな、われ又たれをとふへきそ、いかに兄弟わかつまの、さぞやまちかね給ふへし、はや〳〵さいごを急やと、きえいるばかりになけかるゝ、時に兄弟承り、爰にてやしづめん、かしこにてはしつめんと、さすがにいまはしづめかねてそいたりける、時におにつぐ申やう、いかに鬼王殿、是はあまりにいたはしき次第なり、ひめ君さまをしづめ申てあればとて、千ねんのよわひかや、又まんごうをたもたんや、いざ兄弟が情にて、御命たすけ申さんと思ふは如何にと申ける、鬼わう聞て、おとたかし〳〵、我もさやうに思へ共、汝が心を引かねて、今迄しづめかねてあり、いざやいのちたすけ申さんと、ろうこしをほと〳〵とをとづれて、いかにひめ君さま、兄弟か情にて御命たすけ奉る、いつくの浦にも吹つけられ、御よがめでたくましまさば、兄弟が其方へすて文壹通たまわれと、いふよりはやくこしのさしぞへするりとぬき、しづめのいしばかりはらりずんと切てうみへたんふとなけいれ、ろうこしをはとある所へつきながし、たいまつばつと振たつれば地くがに有ける女ほう達、すはやひめ君の御さいごと心ゑて、はつとさけびし有樣は、是やこのしやくそんの、御にうめつの御時に、十弟みでしてうるいちくるいにいたる迄、佛のわかれをなげきしも、是にはいかでまさるへき、扨それよりも兄弟は、しづめたていにもてなして、わが屋をさしてぞ歸りけり、かの兄弟か情の程、頼もしき共申計りはなかりけり

## 第四

去ほとにかのろうごし、風にまかせてなかれゆく、ほとなくゆきとせうらへなかれ付、浦の者共是を見て、ふしぎ成もの哉と、立よりてみれど口もなし、

くちがなくはわつてみよとて、ろかいをあげて打わつて見てあれば、中より十五六成ひめ君、何共物はいわすして、涙にくれてゐたりけり、うらのもの共是をみて、此ほどりやうのきかざるは、かれがわざよいざ打ころせといふまゝに、ろかいをあげてうちころさんとせし所へ、むらきみの太夫きたり、いかにかた〳〵あれはけいほの中のなかされ人と見えて有、汝らがしるごとく我はいまた子をもたす、やうしにせんわれにくれよと有けれは、うらの者とも是を聞、此事においては叶ふまし、只うちころせとひしめいたり、太夫聞てさなせそ、やかた〳〵我にゑさするものならば、酒をもろふと申ける、浦の者共是を聞さけとだにきゝぬれば、げこも上戸もろかいをすて、太夫のやうしに参らせたり、太夫よろこび名をよりひめと付、おくりつれて我屋に歸りけり、わが屋になればあるじを近付、ていかにうばごせ某は、はまにてやうしをひらふて有けるぞ、萬事はたのむとの給へは、うばはことはの下よりも、もはやりんきことはにもてなし、のふいかに太夫との、それやうしと申せしは、十四五成わつはか山へ行てはたきをこり、はまへ下りては太夫のあいろをこすこそはやうしとは申へし、むつらか沖へつれ行、壹貫文にも賣ならは、よきやうしにて有へしと、あいそうすてゝそ申ける、太夫聞て扨々御身は子がなければほしいといふ、又やうしをすればうれといふ、御身の樣成じやけんのひとゝちきりをこめ、つれてまどうへおちんより、某はよりひめと諸國しゆきやうとの給ひて、おもてに出んとし給へは、うば太夫にはなれてかなわじと、たもとにすがり、いかに太夫との、只今はみづからわかき時のざけうことばで候ぞ、いかによりひめこなたへと、誠しやかにのたまへば、正直成太夫にて、是を誠と思ひ、ばんじはたのむうばごせと、いつものことくつりをたれに、沖の方へ出らるゝ、太夫留主にも成ぬれば、うはは姫君をつく〳〵と見て、かれをそのまゝにて置ならば、後にはみづからをおもひかえんはぢてうなり、ひとまづふすべてみんと思ひ、しほやくかまへおひ上、あをき松葉を取くべて、飛すはねつふすべける、何が姫君、しもつけ日光山の申子にてましませば、せんじゆくわんをんのかげ身にそふて守らせ給へば、さの

みけふくもましまさす、姥は四つ時よりも八つ時分までふすべ、さだめて色もくろう成つらんと、かまよりおひおろして見給へは、白き顔にうすけふりがたなびき、ひときわすぐれて見えにけり、うばはいよ〳〵腹を立、あさよりもみつからは、むだびのほねをおつたりと、しほやく松のゑだ追取、しねよ〳〵と打たりけり、いたわしや姫君は、うたるゝ杖の下よりも、うき名の立なのたゝぬなの、名取川とよ、そこもにごらぬみづからを、さのみにうたせ給ふなと、涙にくれてぞおわします、姥はいよ〳〵はらを立、所せんかやう成ものは、此家には叶はしと、いづくへ成共うらんと思ふ所へ、人買か一人きたり、うばよろこひ此ひめを買てゆけとあれは、人かいひとめ見て、貳貫にかわんと申けり、うば聞てあたいがなくはたゞもゑさせんと思ひしに、貳くわんりやうそくひろいものと打うつて、うばゝさらぬていにゐたりけり、然所へ太夫沖よりも、釣をたれて歸りより、ひめを尋給へどましまさず、うはを近付て、いかにうばごせ、よりひめはいつくへ行て有けるぞ、姥はとうざにはつたとこまり、さればより姫は、御身の跡をしたふてはまぢにゆきて有けるか、定て御身の舟に有らんと思ひしに、扨は人かどはしにかどはされて有けるか、このとしに成迄、思ひも戀もなきうばに、おもひをかくるよりひめと、先そら涙をなかしける、太夫聞ていかに姥御、身がなげく涙はよりひめを壹貫文か二くわんもんにうち賣て、よろこひ涙とみえて有、御身に出よとはそれかしが欲、ざいほう御身に參らすると、諸こくしゆぎやうに出たるを、ほめぬ人こそ三重なかりけり、是は扨置、ひめ君はあたいがまさばうれやとて、かなたこなたとうる程に、後にはみのゝ國おふはかの宿よろつ屋の長のみうちに代つもつて二十五貫文に買とむるは、しよしの哀れと聞えけり、長はよろこび姫君を近つけて、汝か名をは何と申と問せ給へは、ひめ君は聞召、扨みづからはあなたへはしろもの、こなたへもあきなひものと定る名とては候はす、よき名を付てつかわされ候へ長殿との給へば、てう此よし聞召、其儀にて有ならは、國名を付ん、國をなのれと有けれは、姫君は聞召、ひたちの者と計りなり、長此由を聞よりも、其儀にて有ならは、けふよりしては汝

か名をばひたちこはぎと付るなり、明日よりもいろよき小袖をきかへ、おもてのこうしに立出て、のぼり下りの旅人の袖を引、長ふうふをはごくむへし、こはぎいかにと有けれは、てるて此よし聞召、もはやみづからはなかれの女郎と成たよな、今ながれを立る物ならは、ばさのかけにおはします、つまのおくりどのさぞやうらみにおぼすらん、是に付てもあらこひしのわがつまと、きえいる計りに泣給ふ、おつる泪ともろ共に、しよせんたゞ偽りを申、ながれのみちはたてましものと思召、いかにてう殿扱みづからはみめかたちよきとてあたいをたかくかわせさぶらふが、みつからには内にくるしき病ふ有、左様のみちを立れは、忽やまふあらわるゝ、何方へもうらせ給ひてなかれのみちはゆるさせ給へ、長殿いかにとの給へはことはてう此よし聞召、此女はおもふおつとにはなれ、ていぢよのみちを立るとみえてあり、おどして立させばやと思ひ、其儀にて有ならば、是よりもさきへうればゑぞかさどへうるべし、ゑぞか嶋と申せしは、うをさめのゑにかふなり、又さどか嶋と申せしは、手あしの筋をたち切、日に手一合のあわの飯をしよくさせ、あわの鳥を追するが、此所にうれうかはや〳〵申せと有けれは、ひめ君は聞し召、それはせんせのゑんくわなり、ゑぞへ成共さどへ成ともうらせ給へ、ながれのみちはゆるさせ給へ長とのいかにと申さるゝ、ことは長は此よし聞よりも、しよせんかやう成ものにはあたはぬ事を申付れは、ながれを立ると聞て有、其儀にて有ならは、某か下のみづしを十六人にていとなむべし、上るむまも五十疋、下るぞうだも五十疋、あわせて百疋の馬にぬかわらかい、百人のながれの女のおびんに參れ、七所のかまのわらびをきえぬやうにたき、そのあいに七つのををうむべし、それをしまふて有ならば、是より十八町あなた成し、みづを七おけくみ、長ふうふをはごくめと、しよしよくの道具をゑさせ、れん中さして入給ふ

## しみづのだん

いたわしやてるてのひめげしよくの道具をうけ取て、十八町あなた成し、みづをくみに出給ふ、心のうちこそ哀なれ、やう〳〵しみつになれば、おけを

おろしつゝさんふとくんではおけにいれ、くんだるしみづでかげをみれは、南無三方〳〵やつれはてたよ、わか地姿、つまにはなれて此かたは、前だれたすきにひまもなく、髪にくしのはいれざれば、おどろをみだいたごとくなり、是もたれゆへつまのため、思へばうらみとさらに思はれず、さがみの方へ打向ひ、念佛申つまのため、又申ねんぶつは、殿はら達へとゑかうして、くんだるしみづをかたにかけ、てうとのさしてそ参りける、てう此よしを見るよりも、又りやうそくを取出し、いかにこはぎ、此れうそくにて世の中の市に出、とうなんせいなんうごもりかごもりかいろういちじ、扨なみのをのつれおのこ、七いろ買て歸るべし、是七いろのかいものか、壹いろちがふ物ならは、なかれを立ると思ふへしと、長はおくにそ入にける、いたわしやてるての姫、とある所へたちよりて、くどきことこそあわれ成、さがみに有しその時は、百首の歌をつらねつゝ、おちやめのとにいたるまで、から名を付てつかひしに、かく成はてゝ候へば、ちゑのかゝみもかきくもり、もはやからなをわすれたり、いやまてしばしわが心、是ほとやすき事なしと、てう殿さしてそ歸りける、いかに長殿、是御らんぜよ、先とうなんとは、はるのはしめのつく〳〵し、せいなんとはせりの事、うどもりとは山のいも、かごもりとはところなり、かはろうとはゑびの事、いちしとかいてひともしよ、さてなみのをのつれおのこ、ことのはらにて御ざなきか、是七いろの買物かひといろちがふて候共、なかれをゆるさせ給へとて、涙なからに仰けることは長此よしをみるよりも、何さま此女はゆへ有者と覺たり、下十六人のみつしの下女、一度にさつとおいおろし、情をかけてつかわれける、てるてのひめの御しうたん、あわれなり共中々、申はかりはなかりけり

## 第五

さるほどにおくり十一人の人々は、ゑんま王くうの御前に出らるゝ、わうぐう御らんして、日ふんの帳を取出し、常張のかゝみにうつし見給ふに、おくりしやばにて善といへは遠のき、あくにんなれはしゆらどうへおとすべし、十人はしやばへもどり給へと

仰ける、殿原たちは聞召、我々しやばへもどりてもせんなし、主君はしやばにかたきの候故、我々にめしかへおくり壹人しやばにもとし給はれと、皆一同に申さるゝ、王ぐうは聞召、扨もかた〳〵はめいどこうせん迄、主にちう有人々哉、其儀ならば十一人なからもどすへし、いかにみるめどうし、しやばにしがいが有かみて參れ、畏て候と御前を立てほこさきにあがり、三千せかいをひと目にみわたし、わうぐうに取てかへし、さん候十一人はくわそうに仕り候へば、からだは御座なく候と申、王ぐうは聞し召、其儀ならばそれがしわき立に頼んと、十王十たいといわい、其後おくり殿手の内に、此もりをくまのゝ本ぐうのゆのみねにつけてたべ、こなたよりくすりの湯を出すへし、藤澤の上人へ參るわうぐうはんとあそばし、にんげん生ずるとうたせ給へば、うわのが原にせうがかわる、是は扨置、ふち澤の上人は、うわのがはらにとびからすかわらふ比立よりて見給ふに、古のおくりのつか二つにわれ、中よりがき壹人顯たり、立よつて物とひ給へど物いわず、手のうらひらいて見給へば、何々此ものをくまのゝ本ぐうゆのみねへつけてたべ、こなたよりくすりの湯を出すへし、藤澤の上人え參る王ぐうはんとかいて有、扨はいにしへのおくりにうたがふ所更になし、かさねてよこ山へ聞えなば、又ころさんはぢでうなり、ひそかにてらへつれて參れとヲクリ御寺をさして歸らるゝ、てらにもなれば、名をばがきあみだぶつと札を付、つちの車をつくらせて、此くるまを引ものは、ひとひきひけば千ぞうくやう萬ぞうくやうに成へしと、むねに木札をかきそへて、いかにこぼうし、車のたんな付ん迄、引て參れとの御諚なり、畏候と道行「去ほとに、こぼうしは、車の手なわに取付て、藤澤を引出す、大いそ小いそ引過て、小田原宿に車つく、ゆもとのぢそうをふしおがみあけてはこねをいづの國、三島の明神ふしおがみ、原よし原を引すぐる、折ふし富士のねかたにくるまつく地ふし參りの同者達、いざや車をひかんとて、二親のために引も有、つま子のためとひくも有、ふじのねかたを引出し、ながれはげしきふし川や、かんはらゆいの宿過て、みほの松原せいけんじ、ふちうのしゆくをはる〳〵と、けあげてわたるまりこがわ、うつの山へのつた

のほそみちを、ゑいさらゑいとひくほどに、一夜とめぬかおかべの宿、まつにからまる藤枝や、四方にうみはなけれ共、島田の宿をはや過る、一夜にかわる大井川、かみに祈りをかなやのしゆく、さよの中山はる〳〵と、につ坂こゑてかけ川や、さきをいづくととう〳〵み、三川にかけし八はしを、ゑいさらゑいとひくほどに、おわりの國に入ぬれは、あつたの明神ふしおがみ、今ははや、みの丶國大はかのしゆく、長の門ぐわいに、三日車かとまりけり、是は扨置、ひたちこはぎは、がきあみくるまを御らんして、むねの木札を見てあれば、萬ぞうくやうとかいて有、哀れみづから三日のひまの有ならば、一日はつまの御ため、また一日は殿原たちの御ために、車を引てまいらせたや、さりながらつまの事といふならば、隙とては給はらじ、いまだうきよにおわしまず、二しんのためと僞りて、申請んと思召、てうどのさしてそ歸らるゝ、長の御前に成しかば、いかに長どの、此もんぐわいにかきあみ車のましますが、むねの木ふだをみてあれば、萬ぞうくやうと書て有、みづからは父におくれて七ねん、母にはなれて三年なり、父母の御ために車を引てまいらせたや、三日のひまを給はれと、泪をなかして申さるゝ、長此よしを聞よりも、おろかやこはぎ、いま成となかれを立るものならは、三日は扨置十日のひまもゑさせんと有ければ、てるて此よし聞召、こはなさけなき御でう哉、物を語らは聞召、三日のひまだに給はらば、長とのふうふの身の上に、しぜん大事あらん時、みづから身かわりに立まいらせん、哀れと思し召ならば、三日のひまを給れと、またさめ〳〵と泣給ふ、長は此よし聞召、扨もやさしきこはぎ哉、其儀にて有ならは、三日引たる車みち、二日にはもどるべし、上下五日のひまをとらするぞ、頓てかへれこはぎとて、長者はおくにそ入にける、てるてあまりのうれしさに、其まゝおもてに走出、車を引んとし給ふがいやまてしはし我心、此まゝくるまをひくならは、町屋宿やせき〳〵で、あだな立んはぢてうなり、こころは物にくるわねど、姿をきやうぢよになせやとて、たびのしやうぞく

## 車のだんてるてのひめみちゆき

なされける、いたわしやてるてのひめ、長にゑほしを申うけ、かたをむすんで下にさけ、すそをむすんでかたにかけ、さゝのはにしで切かけてふりかたげ、もんくわいさして出給ふ、めづなおづなに取付て、ゑいさらゑいとひくほどに、てうのもんぐわいはや過て、宿やまちやのせき〳〵を、ひけよ〳〵此車、おんどを取てひかせうぞ、ひめが涙はたるいのしゆく、ふわのせきやの板ひさし、月もれとてやまばらなる、みのとあふみのさかいなる、ねものがたりやさめが井の、あらし小がらしばんばふけとて袖さむや、ゑち川わたれはちとりたつ、おの〳〵しゆくとや、すりばりとうけのほそみちを、ゑいさらゑいとひくほどに、みよはめでたきむさのしゆく、かゝみの山に付たよな、やつれはてたるわか姿、おもかけうつすかかみ山、雨はふらねどもり山や、がきあみかむねの木ふたに、つゆはうかねとくさつのしゆく、山田下田を見わたせば、さもいつくしきそうとめの、さないおつとり田歌をこそはうたひけるさうとめぶし「田をうゑいざうとめ、うゑい〳〵さうとめ、さつきののふをはやむるは、かんのふの鳥ほとゝぎす、山からこから四十から、此とりたにもさわたれは、さつきののふはさかんなり、こぐさわかくさなわしろを、うちながめゆくほとに、なをも思ひはせたのからはしを、とんとろ〳〵とうちわたり、石山寺かやかねかすかにみゝにふれけり、あわつまつもとはや過て、あれに見えしはからさきの、しがのうらはに船とめて、あの山みさいこの山みさい、からろのおとにおとろきて、おきにかもめがばつとたつ、いたはしやてるては、みのを立出けふははや、三日と申には、のほり大津せき寺や、玉やがかどに車つく、べつにやどをとるべきか、いやまてしばし我心、かきあみにそふもこよひ一夜の事なれば、ともに夜をあかさんと、車わたちに立よりて、よもすから〳〵ないて其よをあかさるゝ、扨かきあみが耳がきこゆる物ならば、めいどのことかきゝたやな、目だにみゆるものならば、ひと筆かきてみせう物、みゝはきこゑずめはみえず、思ふにかいなきがきあみと、ないて其よをあかさるゝかのおんじやうしのかねのこゑ、月も數そひて、百八ぼんのふの夢をさますや法のこゑもしづかにて、玉屋殿に參りつゝ、すゝりとふでと取給ひ、

がきあみがむねの木札にそへかきこそはなされける、此たびかきあみが車のたんなおゝくく共、中せんどうはみのゝ國大はかのしゆく萬屋てうが下のみづしにひたちこはぎと申せしは、上下五日のだんな也、くまの本ぐうのゆに入て、しゆもくあきらかにへいゆふつかまつり、かならすげかうに尋候へと、ことねんころにかきとゝめ、筆をかしこにからとすて、よこ手を一つてうど打、あらふしきやかきあみと、ふうふのきゑんなさね共、いつぞやさがみにてつまのおくりにはなれしも、いまかきあみにはなれたも、なにたるきゑんつきずして、いづれの思ひはおなし事、あわれ身かな二つやな、壹つはみのへかへりつく、又ひとつはがきあみと、もろ共にくまのほんぐうのゆに入て、やまふへいゆふつかまつりなれのはてかなみたいよな、心は二つ身はひとつ思にかいなきがきあみと、みのゝ國に歸りしか、あまりの事のつれなさに、また立かへりする〳〵と、はしりよりかのがきあみに取付て、是かわかれかかなしやと、なく〳〵そこを立のきて、みのゝ國へと歸らるゝ、てるてのひめの其有さま、あわれ成共中々申はかりはなかりける

## 第六

さるほとにがきあみを、車のだんなおゝくくして、大津のうらを引出しひのおかとうけをはる〳〵と、都の町を引過て、山ざきせんけんたから寺、はやつの國に入ぬれば、てんまのもりをうちなかめ、はや天わうしをふしおかみ、さかいのうらをはる〳〵と、いそぐ心のほともなく、ごんけん坂にそ著にける、扨是よりもがきあみを、車にては叶はしと、がきあみかごに入、かわり〳〵におひ給ひ、ほどなくゆつぼに成しかは、へいゆうなれやかきあみと、皆々家ちに歸りけり、はやゆつぼにも成しかは、忝もごんけんは、あらはれさせ給ひつゝ、おくりかいしやくし給ふに、一七日いらせ給へば、みゝも聞ゆる目もみゆる、二七日はひやうほうはやわざ、三七日と申には、もとのおくりとたんぜうならせ給ひけり、おくりゆめのさめたる心ちして、是はまさしく熊野三つの御山と覺えたり、あら有かたやとふしおかむ所

に、又ごんげんは山かつと身をへんし、こんごう杖を二本御切有、いかにそれ成きやくそう、こんがうつゑをめさぬかとあればおくり聞召、某此かいどうをがきあみとよばれしも、なんぼうむねんに思しに、こんごうつゑかへとは、我をてうぶくするかとはつたとにらんでの給へは、其時にごんげんは、いかにきやくそう、此つゑになんほうゆらいのましますなり、一本はおとなし川にながすれは、しゝての後めいどにおもむく時に、ぐせいの船とうかふ也、又壹本つきふもとに下向ましまさば、侍ならば所りやうをえるなんほうめて虔此つゑ也、あたひがなくはゑさせんと、かしこになげすてごんけんは、けすか如くにうせにけり、おくり御らんじて、扨は只今のはごんけんにてましますかと、御跡三度ふしおがみ、教のごとく一ほんは、おとなし川になかし置、扨壹本つきふもとに下向ましますが、是よりすぐにみの國へとは思へ共、一まづ父母の御じゆめうを、おがまばやと思召、都をさしてぞ三重上らるゝ、都になれば三條高倉御所に行、もんぐわいに立よりて、くま野へ通るに山ふしに時れうたべと乞給ふ、おりふしおぐりとののはゝうへは、こん日はおくりがめいにちになれば、あのきやくそうを召、時れうを參らせよ、承候とおもてに出ていかにきやくそう、時まいらせんこなたへと、御前ちかくそ召れける、母うへは御らんじて、いかにそれ成きやくそうは、くにはいづくにましますぞ、おくり取あへす、ひたちの者とばかりなり、はゝうへは聞召、ひたちときけばふきくる風もなつかしや、我子のおくりもひとゝせ、ひたちの國にるにんと成て有し時、さがみのくによこ山とやらんへ、がうぎのむこ入し、どくしゆにてもりころされし由をかせのたよりに承、ひたちの國のきやくそうにてましまさば、おくりがさいごのていを御そんし有へし、かたらせ給へきやくそうと、まづさめ〳〵とそなき給ふ、おくり聞召、つゝむにいろのますふせい、今は何をかつゝみ申へき、某はいにしへのおくりにて候、めいどよりよみかへりし有さまを、いち〳〵にの給へはふし母はゆめ共わきまへす、おくりとのにすがり付、是は〳〵と御よろこびはかぎりなし、かゝるめでたき事を、かねいゑとのに申さんと、やがておくに入かねいゑとのに近付

て、かやう〳〵との給へば、かね家大きにおどろき、おろかやみたひ、しゝたるものゝ何とてかへり申へし、それは御身のあけくれおくりをこひしとなげくにより、たばかつてやきたるらん、某たいめんせんとの給ひて、ざしきへ立出きやくそうを、はるかばつざにめされ、いかにきやくそう、御身はわが子のおくりとの給ふ、我子のおくりは八わた山にておしゑしひやうほうはやわざあり、此矢をめされ候へや、御取なきものならは、きやく僧の命をとらんと仰ける、其時おくり眼をふさぎ南無正八まん大ほさつ、いにしへのはやわざを只今あらわしてたまわれと、まなこをふさきくわんねんしておはします、其時かねいゑよつひきひやうどはなす、一矢をゆんで、二の矢をめて、三の矢けわしくきたりけれは、こんがう杖にてはらいおとし、我いにしへのおくりなり、かんどうゆるさせ給へとて、さしうつふひておわします、かねいゑ夢の心ちにて、御よろこびはかぎりなし、かゝるめで度おりからを、さあらば御かどへそうもん申さんとおくりどのゝしやうそくを改め、だいりをさしてそ三重あからるゝ、みかどになれは、かねいゑはさんだいし、はしめおわりをそうもん有、みかどゑいらんまし〳〵て、しゝたる者の歸る事、ためしすくなき次第也、ほんれうなれはとて、ひたちの國にするかのくにをあいそへて下されける、おくりかたじけなしとて、三度てうたいなされ、おなしくはみのゝくにゝあいかへて給はれとそうもん有、りんけんはあせのことし、みのゝ國は馬のかいりやうにと重て御りんし下されける、御まへを罷立、やかたへ歸らせ給ひ、父母にいとま乞供人あまた引ぐして、みのゝ國へと三重急かるゝ、みのにもなれは、大はかの宿よろづ屋てうがもとにいらせ給ふ、てうはよろこひあまたのなかれの女を御しやくにこそ出しけり、おくり御らんじて、いかにてう、なかれの女は何かせん、汝か下のみづしに、ひたちこはぎとて有ときく、そのものをしやくにいだせ、杓に出さぬものならは、長ふうふが命をとらんと仰ける、てうは大きにおどろき、ひたちこはぎに近付て、いかにこはぎ、汝はくわほうのものぞかし、御身がみめよき事を、都の國主の聞召、しやくに出よと有けるぞこそでをきかゑはや〳〵出よと有しかば、てる

て此よし聞召、おろかの長の御諚かな、かやうのしやくに出ましきためにこそ、十六人の水仕をば、みづから壹人にていとなみ申候へば、此事においては御めんなされ候へやと、さしうつぶいてぞおわしける、てうは大きにはらを立、うれしき事をもはやわすれ給ふかや、いつぞや此もんくわいにがきあみ車の有し時、三日のひまと申せしを、かなふまじといひけれは、なんし某ふうふの身のうへに、しせん大事ある時は、身がわりに立とは申さんか、なんちしやくに出ねば、某ふうふがめいがなきぞ、はや〳〵出よとの給ひて、れん中さしてそ入給ふ

## てるててうしのだん

こはきどうりにつめられて、たゞともかくもとの給ひて、てうし取もちそれよりも、なく〳〵さしきへ出給ひ、ひとまのせうじのかけよりも、都のこくしゆを御らんじて、扨もふしきや此君は、我かつまのおもかげに、よくもにさせ給ふよな、是につけてもわがつまは、くさのかげにてみづからを、さそやにくませ給ふべし、さてもせひなきよの中と、なく〳〵座敷へ出給ふ、てうしに手をかけおわしますことばおくり御らんじ、御身はひたちこはぎといふ人か、我は都のもの成が、なさけをかけてまいらせん、扨又御身はいづくの人成ぞ、せんぞをかたり給ふへし、いかに〳〵と仰ける、こはぎ此よし聞し召、おしうの仰おもけれは、御しやくにこそはまいりたり、ざしぎさんげにまいらずと、座敷をたゝんと有しを、おくりつゞいてたもとを取、おふあやまり申たり、人のせんそをきく時は、わがいにしへをかたるとや、さだめて見わすれ給ふべし、いせん此かいだうをがきあみ車といわれし時、御身なさけのくるま三日ひいて給りのぼり、大津はせき寺や玉屋かかどにひきつけられしむねの木札は是なりと、やがてざしきへいださるゝ地こはぎつく〳〵御らんじて、扨もめてたき此君や、是につけてもわかつまはしゆらだうにおち給ふか、またがきだうにましますか、めいどの人ときくなれば、みづからせんぞかたりつゝ、つまのありかを尋んと、はづかしながらみづからは、さがみのくによこ山太郎がおとのひめ、てるてのひめとなのりもあへぬに、おぐりどの扨御身はてるてか

や、われこそいにしへのおくり成はとの給へば、てるてゆめともわきまへず、扨は君にてましますかと、おもはずしらずいだき付、こゑをあけてぞなき給ふ、おつるなみたの下よりも、なさけなきはちゝごさま、みづからをさがみのふちへしづめ申せとて、おにつく兄弟に仰付られ、すでにこうよとみえし時、かの兄弟かなさけにて、いのちたすかりかなたこなたの手にわたり、今此てうにかいとられ、なかれを立ぬものゆへに、下のみづしをつかまつる、是も君ゆへなればうらみとさらに思はぬなり、のふわかつまとかきくどき、もたへこがれてなき給ふ、おくり聞召、それ〳〵長めせ、かしこまつて御まへに出にける、おくり御らんじて、いかに長なんし人をつかへばとて、かやうにむごきつかふほうやある、それはからへと仰ける、てるてやがておしとゝめ、あのてうがみづからを、かい取てあればこそ、ふたゝび君にあふてあれ、長が命みづからに、御めんなされ候へとことはをつくし仰ける、おくり聞し召、其儀にてあるならば、今よりして此ところの庄屋かしらになり、かずのほうびくだされける、長有かたし〳〵と、やがて御前を罷立、さてそのゝちにおくりどの、よこ山せめんと仰ける、これもてるておしとゝめ、むかしがいまにいたる迄、子おやに弓をひくためし候はす、なに事も三郎とのゝしわざなり、それ〳〵とやかてさがみに使をたて、三郎を御前に引出す、おくり御らんじて、みれは中々はらも立、それはからへと仰ける、かしこまつてやがてかくこそおこないけれ、扨そのゝちに、おくりどのてるてのひめをともなひて、都にかへらせ給ひつゝ、ふたゝひゐくわにさかゑ給ふせんしうばんせいめでたし共、中々申はかりはなかりけり

をぐりの判官終

# 隅田川

山本土佐掾正本

## 第一

夫身を觀ずれば、岸のひたひに根をはなれたる草、命を論ずれば江の邊につながざる船、のりえて彼岸にいたらん事をねがへ、爰に堀川院の御宇かとよ、都北白河に、吉田の少將是定とてヲロシ世上に其名、かくれなし、地内には五かいをたもち外には神祇をもつぱらとし、何に付てもくらからず、御子二人おはします、嫡男梅若丸十二歳、次男松若丸十歳にて、御器量けだかくましませば、父母のてうあいかぎりなし、然るに是定ばだいゑんにおもむき給ひ、ある時北の方に宣ふは、うゐむゐやうをくわんずるに、朝がほの露いなづまのかげ、くらきやみぢにまよはんも、さやけき道に至らんも、御身と我が心から、いざや二人の子共の内、一人は出家になし、なからんあとをもとはればやと言へば北の方聞召、こは有がたきおぼし立、わらはもさこそは存じ候と、いさませ給へば少將殿なゝめならず思召、調しからば梅若丸は惣領なれば、吉田の家をつがすべし、弟松若はをさなけれ共、知學の器量そなはれりと、やがて松若殿をお前にめされ、おことを出家せさせんため、えいざんにのぼすぞかし、諸教諸論に身をゆだね、世上にほまれをとられよと、いと念比に仰られ、御家臣山田三郎を、御かいしやくにつけ給ひ、吉日をゑらばれて、ひえいざんへと三重のぼせらる、去程に、松若丸東谷の妙法院日行あじやりの御弟子と成、もとよりりこんそうめいにて、一と聞ては萬をさとり、内外のさたくらからねば、必定大師のけゑんぞと、うやまはざるはなかりけり、あまり諸人のそうきやうに、をさなけれ共がまんゑんの有けるにや、いづく共なく山伏一人來り、さぞや晝夜の學文につかれさせ給ふらめ、いざ〳〵我等が住家へともなひ申なぐさめんと、いふよりはやくすがたを引かへ、こくうにつかんで上りけり、各驚きこはいかにかへせもどせとさはげ共、もはやゆくゑはなくならで、せんかたもなくゐたりけり、地色日行十方にくれながら、こはいかゞせんと宣へば、山田三郎承り、はてせひもなき次第なれば、先某は都に歸り、便なきながら

是定に、かくとゑらせ申さんと、北白河にぞ三重歸りける、其折節に地色少將殿風の心地におはせしが、此四五日は重らせ給へば、北の方をはじめ梅若丸、御ゑつけん粟津六郎としかね、晝夜おそばをはなれず、さま〴〵あつかひ奉る所へ、山田三郎參上し、右のあらまし申もあへぬに、何松若は天狗にとられ、行方ゑれず成しとや、こはそもいかにとあきれはて、なげかせ給ふぞ道理なる、地色御いたはしや是定殿、御病苦おもき其上に、御きもつぶされたる故にや、たちまち五たいすくみつゝ、御いきさへもたえ〴〵にて、名殘おしげに北の方、梅若君を打ながめ、つゐにはかなく成り給ふ、各ゑがいにいだきつき、是は何たるいんぐわぞや、ゆめかうつゝかまぼろしかと、こゑもおしまずなき給ふ、地色涙のひまより北の方、アゝさためなや此殿に、みのゝ國野上の宿にてなれそめしより此かたは、をしかのつのゝつかのまも、はなれもやらぬ身なりしに、けふをかぎりと成けるかや、ちよもといはふ松若は、いづ地共なくとらはるゝ、いきてかいなき我身やと、りうていこがれてなき給ふ、梅若君を初とし、少將殿の御舍弟、松井源吾さだかげ、御家頼下部に至る迄、うれひにゑづみゐたりけり、されどもかなはぬ道なれば、御さうそうの用意有、よきにとぶらい給ひける、さだめなかりし三重夢の世を、それと見こりぬあさましや、少將殿の御舍弟松井の源五定景は、どんよくぶだうの男故、もつく〴〵とゑあんして、ある時山田三郎を、我屋にまねき、詞内々御身を頼み度事あれ共、とやかくと打過しが、なにとたのまれて給はらんやとあれば、安近聞て、こは今めかしき御仰、何事にてもあれゐへん仕らじと申けり、ヲゝ祝着〳〵、其一言からはつゝまずあかさん、我吉田の家の末子とはいひながら、甥に惣領職をつがせん事、近比無心に思ふなれば、いざ梅若をなき物にし、吉田の家督を我つがん、此事同心においては、おんゑやう望にまかせんと、いへば安近につことわらひ、思召の段尤ゑごく仕る、御末子とてもお主筋、お主にお主かはらねば、ともかくもにて候去ながら、詞粟津六郎が心底はかりがたし、ことさらかれは仁義だてをいふものなれば、ふかく御思案と申せば、ヲゝ思案は別になし、是へよびよせ頼まんに、とかうゐぎにお

よぶならば、そくざに討てすつべきに、何の子細か有べきぞ、先々御身は歸られよと、扨侍一人ちかづけて、詞汝としかぬが方にゆき、少し内用の事有と同道致し參るべし、畏て候と粟津が方へ急ぎつゝ、使口上のべければ〻何事やらん覺束なし、さあらば參り申さんと、使と打連來りけり、定景立出能こそ能こそ來られし、詞此比は法事のいとなみ彼是御苦勞に思はれん、扨只今よび請る段、我思ふ子細有て、山田二三郎にも内談せしかば、成程同心致せしが、何と御身も同心して給はらんやとあればとしかね聞て、樣子をも承はらでお請申はいかゞなれ共、安近お請と有からはともかくもと申けり、ヲ、過分〳〵去てとしかね、御身は少將相果られても、吉田の家を眞實大切に思はるゝか、侍のきよごんは有まじけれ共、つゝまずあかされよとあれば、是は近比新敷仰哉、我君逝去致しますとて、いかでおろかに存ずべき、大切のあまりにこそ、朝にはきりをはらひ、夕にはとりをきゝ、諸事に心をくばり候、但をろかなりと思召も候哉、詞いや〳〵さにてはなし、とかく吉田の家をせつなく思はるゝと見ての談合ぞ、去らるゝ通り梅若が母は、みのゝ國野上の宿にて、賤敷遊女なりしを、兄少將さいあいす、其血をわけし梅若なれば、をさなけれ共うそをいひ、心賤敷くみれんのふるまひ、成人せば何事をかし出さん、當家のはめつぢやうなれば、去よせんかれを討てすて、つゝがなく某が家をつがん思案、何と同心あらんやといへばとしかねけうさめ、暫うつぶきゐたりしが、さはがぬ躰にて、詞仰をもだすはいかりなれ共、母はいか程つたなくても、胎内はかり物とて、父の筋こそ用ゆなれ、まだいはけなき御心に、何のえやべつかましまさん、いふても當家の御嫡孫、御ゐけんをくはへられ、もり立させ給ひなば、草葉のかげにて我君も、いくばく悦び給はんと、涙をながし申けり、定景面色かはりうでをまくり、詞ム、扨はこのこと同心せぬ躰と見えたり、弓矢八幡かくいひ出すからは、同心してもさするせいでもさする、サア、とかうの返事はやくきかんといへば、としかねくつくつとわらひ、あらこはや、いやといはゞ斬給はん所存よな、ヲ、サくどい〳〵、其座を一寸もにじらせもせぬはといふ、ハアづないりきみなれ共横車はおされ

ぬもの、おちの身として甥を討、其跡をとらんと云、犬にをとりし談合に、先此としかねはえのるまじ、誠のせたくばサア、我首斬てのせよやと、大だちひらりとぬきければ、詞は主のはぢをもゑらず、わつとわなゝきにげいるを、ゑやをくびやう者、かへせ〳〵と四五間餘り、追懸しが、いや〳〵龍にもつまづき有、若あなどつてけがしてはと、ひとりつぶやき太刀をさし、やかたをさして立歸る、けなげにも又頼もしき、定景非義をかへりみず、又安近を召よせて、ゑよせんこよひ夜討にし、本望をとぐべきに、用意せよやと云まゝに、上を下へと三重返しけり、去程に、粟津六郎としかねは、急ぎみたちに立歸、定景の惡逆初終を申上れば、北の方も若君も、こはそもいかに成事やらんと、あきれはてさせ給ひけり、としかね重て、仁義不道の惡人なれば、夜討にやよせ申さん、御親子共にいづかたへも、御ゑのびと申ければ、梅若聞もあへず、こはふかくなりとしかね、たとひ敵がよすればとて、一せんをも見分ずし、落行法の有べきか、かなはぬ節こそ落もせめ、只々用意と宣へば、としかね涙をはら〳〵とながし、かくおとなしき御詞、君御存生にて聞召さば、さぞや悦びましまさん、さあらば母上ばかり御落ましませ、幸ひ西坂本に某存の者の候へばと、石田ノ藤太とてかひ〴〵敷下部の者、御供に付申急ぎおとしそれよりも、御家人五十餘人右のあらまし語りきけ、軍のゑたくする所へ、あんにたがはず定景、洛中のあぶれ者、百騎ばかりをかたらひて、北白河にどつとよせ、ときのこゑをぞ上にける、本より期せし事なれば、としかねやぐらにあがり、詞定て是へよせたるは、松井ノ源五定景ならん、おのれがやうなる人ちくるいに、いひきかするはむやくなれ共、數年のよしみゆへなるぞ、耳あかを取ってよつくきけ、夫天地萬物一つとし正道にもれず、いはんや五常をむねとする人間においてをや、親兄の禮を守らざるはきちく木石にをとりたり、此上ながらも先非をくひ、引きゑりぞけとぞよばはつたる、時に山田ノ三郎かけ出、何かくいふはとしかねか、いらざる汝が賢人だて、いやはやかたはらいたし、かうしも時に粟津ノ六郎、いくさにまけてかうさんせん、よりあしもとのあかき時、とうとう出て命をつげとぞのゝゑつたる、としかね聞も

あへず、やれ山田のふるだぬきめ、詞悉くも三代相傳のお主のみたちにむかひ、法にもれたるふるまひ、いで天ばつをあたへんと、いふよりはやくとんでをり、はゑりかゝつてむづとくみ、ちつ共はたらかせずとつてをさへ、首ふつゝとかきおとし、立あがらんとする所へ、田原ノ九郎となのり、ぬきかざしかゝりしを、よこになぐればもろあしおとされ、のつけにどうとたふれけり、是をいくさの初とし、敵みかたは入みだれ、一足さらずに三重たゝかひけり、うんつき弓の、やみ〳〵と、みかた殘らず討るれば、力およばずとしかね、若君のおまへに參り、うんにかなへば非も理となる、され共時節こそ候はめ、一先西坂本へ尋ねおちさせ給ふべし、某は殘りゐて落のびさせ給ふ程、詞だゝかひ矢をゐかけ、ゑぶんをうかがひ御あとより、追付參り申さんと、思ひもよらぬ所より、ひそかにおとし參らせて、又やぐらにかけ上り、さしつめ引つめ矢だねをおしまずさん〳〵に、ゐらして、詞只今若君ゑがひまします、某も御供ぞ、かうなるものゝ自害のやう見ならひ手本にせよやとて、よろひをぬいでなげ出し、ゑい〳〵とそらばらきり、屋のむねつたひておちゆきける、よせてはいくさにうちかちしと、かちどきどつと作りつゝ、いさみにいさんでひいたりける、彼定景が惡逆を、老若男女押なべ、皆にくまぬ人こそなかりけれ

## 第二

痛はしや梅若丸あやうき所をまぬかれ北白河を落給ふが、比は二月末つかた、くらさはくらし道見えずいつしかゑらぬ野中をば、心ばそくも只ひとりたどりまよはせ給ふ程に、夜もほの〳〵と明方に大津の浦に着地色給ふ、かゝりける所に奥白河の人商人、喜藤次と云し者此比都に日を送り、今朝夜をこめて下りしがうんのつきにや梅若丸、かくとはゑちずなふものとはふ詞西坂本とやらんへはどう參るぞをしへて地色たべ、商人天のあたへと悦び某こそ西坂本の者にてあれ幸哉同道せん、いざかうゆかせ給へやと、あとに成さきに立ヲクリあづまぢさしてぞ下りける、地すでに横田川の邊にて梅若宣ふは、詞なふ〳〵つれの人、今旅人のいひて通るは、いつかあづまに下

り着都の咄せんといふ、其上西坂本はか程遠き道とはきかず、地色ふしぎさよと宣へば喜藤次聞て、詞ふしんも道理遠きも道理、汝をば大津の浦にて人買がもとより買取、奥へつれて下るぞといふ梅若はつとけうさめ、何人買が本より買とるとや、扨々無念やあ商人、たとひうるにもせよかふにもせよ、地色某がてんなき上は中々思ひもよらず、をさなきとてあなどりこうくはいすなと、太刀に手をかけ宣へば、やなまごしやく成わつぱめと、飛かゝり取てふせ太刀ねぢ取ようゑやなくさん〳〵にちやうちやくす、痛はしや梅若丸大の男に打ふせられ、氣もたましゐもあら口惜やと前後にばうじておはせしが、地色やゝ有てこゑを上をのれ人買め、賤敷ものゝ子ならばこそ、我はよしある者なればかやうにはぢをあたへられ、中中いきてはゐぬぞはや打ころせ人買めと、わゝりかからせ給ふを又とつてふせ、ェ、人聞わるし口をあけをく故なればと、くつわをはませ追立〳〵あゆめあゆめとさいなむは、あはうらせつがざいにんをかゑやくの躰もかくやらん、前世のごうとはいひながら扨も、せひなき三重有さまなり、かくとはゑらず、粟津六郎夜にまぎれ山づたひに西坂本へ參りしかば、北のかたはしり出なふ來られしかとしかね、ゑて梅若はと宣へば六郎はつと驚きい、詞や若君は某よりさきへ渡らせ給ひしが、今迄見えさせ給はぬは道にまよはせ給ふらん、地色扨氣づかはし心もとなとけうさめ、はてゝぞゐたりける、母上聞召あらうたてやそこ共ゑらずふみまよひ行つらん、淺ましや昨日迄は只かりそめに出けるにも、馬よこしよといひし身のけふはいつしか引かへて、供をもつれずすご〳〵とゑらぬ國へや行つらん、若も此子が行方なくは、いかゞすべきぞやれはやく尋てたべやととてもだへ、あこがれ給ひけり、地色としかねむねにせまりながらいや〳〵、遠くもおはすまじ、某尋參るからは追付御供し歸るべし、よし又めぐりあひ奉らずば、六十余州の山々里々浦々嶋々へめぐりても、尋出さで有べきか御きづかひあそばすなと、云捨其まゝかけ出しは忠義、ふかくぞ三重見えみえみ、ゑる人地色さへもいく遠き、道さへ有に梅若丸なさけなや夜もさらに、ねられぬ程にさいなまれ身ふしもくだけつかるれど、漸として今ははや、武藏と下總の堺なる隅田川

にぞ、着給ふむざん成哉、地色梅若丸ならはせ給はぬ道といひ、つえにはいたくあてらるゝ今は一足もひかれねば、よはりはてつゝ川岸にたふれふさせ給ふにぞ、地色人買大きにはらをたてやあ何とてゆかぬぞ、あゆめと取てひつたつれどうつぶしにがはとふし、引おこせどどうどふしいきもはやたえ〳〵に、まなこもくらむばかりなれど情も去らぬ人買人、又つえふり上さん〳〵に命もうせよと打ふせて、ェ、腹立や此程の長旅に、はませし物のおしさよとそこに捨置下りしを、にくまぬ人こそなかりけれ、地色在所の人々寄こぞりこは情なき有さまや、よし有人の子と見えしがいづくいか成人なるぞ、有のまゝに申させ給へ古郷へとゝけ参らせんと、ゆみづを参らせさま〴〵にいたはりこさいをとひにけり、地色今をかぎりの梅若丸、よにくるしげなるいきをつき、ァ、うれしくも、とふらい給ふものかな、かく成はつるうきみのはて、なのるはよしなく思へ共、若も都へつてあらば、母の一人ましませば此有様をつたへてたべ、我は吉田の少將是定と云人の嫡子、梅若といふ者なるぞや、むなしくならば此、道のほとりにつきこめ、去るしに柳をうへてたべ、都の人の足手かけもなつかしければと、宣ふこゑもよは〳〵とつゆにはかなく成給ふ、在所の人々一同に扨いたはしき次第やと、こゑを上てぞなきにける、いざや死人の望にまかせ爰にはうぶり参らせんと、老若立より土をうがちよきにつきこめつかをつき、去るしに一木の柳をうへ無縁の人にて有間、いざ弔て参らせん尤と同じつゝ、大念佛を催ふして、よきにとぶらひ申せしは實頼もしくぞ三重見えにける、猶もあはれをとゝめしは、地中梅若丸の母上にて諸事の、哀をとゝめたり、其年も漸暮、明る春に成ぬれ共とかくのさうさへあらざれば、あまり待わび只ひとりかいだうに立出て、行かふ人は多けれ共、順禮こそ諸國をめぐり若も見聞し事もやと、三人つれたる順禮に近付様子をかたり尋給へば、詞されば我々は奥州の者なるが、去年二月の末左様の兒を、東國の人買があづまへつれて下りしが、地色若もさやうの人やらんとかたり、すてゝぞ通りける、母上聞もあへ給はずなふそれこそは我子なれ、尋こぬこそ道理やとたふれふしてぞさけばるる、いとをしや母上は一とせあまりの思ひ草、夢も

むすばぬなげきのうへに今又はつと思ひみだれ、心もきやうじさだめなくあなたへはしりこなたへかけ、ないつわらふつゐゝ、謡中戀しの昔やな、や地色人こそわらはめゑやうだいなや、とはいひながらことはりなりあのてうるいやちくるいだにも、親子のあはれはゑるものをましてや人のおやごゝろ、爰にてなげき死せんよりはとたづね出させ二重

## きやう女道行

「たまかづら、かくれとてこそむまれけめ、ことはりゑらぬ我涙、ふつと思はじなげかじと、思ふもよしなはやわきかへる、涙のたきつゑら糸の、みだれ心やくるふらん、實や人の身の、あだ成けりと、誰か云けん空ごとや又思ひには、ゑなれざりけりと、讀しもさもとゑら雪のまだ冬ごもり花の兄東とかやに行雲の、跡を大津のうら山しくも、つれてこしぢに歸るより、やゝもへ出る若草に、露おきそふるゑのはらを分行野路になくきじも、子ゆへにこがす見かみ山、このもかのものかげよりも、もれ出る月の、鏡山、ゑばしくもるは我からの、袂のゑぐれ水くさもまさる越川おのゝ宿、地すりはり峠のほそ〳〵ミフシ道たどり〳〵とたどりこす、地すへの一村醒井を、ゑのぐひぢがさ美濃の國、のがみと聞ば今更に、カル昔こいし古郷へは、にしきを着てとつたへしに、我は引かへあかづける、かたを結んですそにさげ、地色すそを結びてかたにかけたる笹の葉に、ゑでやたんざく、數〳〵きやうかゑどけないこしおれ、よみてかけたるねがひこそ、我子の行衛あんおんに、逢せてたべといのる成、ちかひあつたのやつるぎや、さす汐どきとゆふはやて、沖に男浪のとん〳〵〳〵と、いそ岩なみがゑ、どうどなる見のいよ、濱ちどりやちり〳〵ちり〳〵〳〵ちつて亂れて、泣てこがるゝ我姿、やれ物狂ひよと聲ごへに、笑ふわらはへ、跡になり先に走りて小歌のおもしろさ、歌爰にはやらぬかごしまにはやる、三十振袖四十ゑまだほいさ〳〵、ほんに若いが花の顔、おともきやうじて袋井や、かなしき金谷子ゆへとは、ゑらで色めくむらさきの、花のゆかりか藤ゑだを、はじめて三保のまつばらや、田子のいり海そこはかと、なきおほぞらにくゆる成、富士のけぶりも我ごとく、物お

もふにやせめていざ、歌くらべ三島の宮たちも、あはれ亂れて玉ぼこの、道もさがしきおざゝはら、登り下りの箱根山、尋る我子に大磯と、聞と其かいあら情なや、只世には神やほとけはましまさぬか、うきをことはり給へやと、天にあこがれ地にふしたけのよるべさだめなき、是やまことにうき世の中の物のあはれはこれなり、たゞこれ成はとかんせぬものこそなかりけれ

## 第三

粟津六郎俊兼は梅若の御行衞、名にのみ聞て見ぬ國國浦々島々里々迄、心をつくし尋れどそれとにたりしうはさもなし、地よしや命のあらんかぎりと、或時は山にふし、又或時はいそまくら袖ももすそもやれやつれ、手足もかほもくろく成、かみはけづらずひげぼうぼうと、さながら鬼形のごとくなり、月日を重ね行年も、明る二月末つかた、あづまぢにさしかゝり、謡爰はいづくと遠江、はまなも高き、足がらやはこねとうげに、成しかば、日もはや西にかたぶきみねにさけべるさるのこく、いはねにこしを打かけて、ゑばしやすめば、ぶら〳〵、とねぶさゑきりにこたへかね、松がねまくらよねんなく、高いびきしてふしにけり、地色有べき事か去年の春、松若丸を誘ひ行比叡山の横河坊、松若をはがひにのせ大唐四百餘州殘りなく見せ廻り、けふ歸るさに此山のフシ松の梢におり立けり、地色本より天狗の通力にて俊兼がふしたるを、はや夫とはゑつたれ共ゑらぬふりにて是松若、詞あれにふしたる男はいかさま強力者と見えし地色御身は爰にて見物せられよ、なぶつて見せんとひらりと飛おり忽山伏姿と成、前後もゑらずねいりたる俊兼がそばにそつとふし、是もねいりしふせいにて兩足どうどもたせたり俊兼はつとめをさまし、むつくとおき見てあれば六尺ゆたかな山伏の、ねごとまじりの高いひぎのつけにそつてたはひなし、きやつは同行なき山ぶし成が、某をたよりにし草臥てねいりつらん、正體もなき有さまやと、そろりと足を押おろし、又打ころびふしたるはふてきなりける次第なり地色やゝ有て山伏うんといひてねのびし、俊兼がかうべのうへに兩足をもたせたり、ぎ

よつと驚きはらひのけおきなをり思ふやう、必定山賊強盗の作り山伏、旅人の心を引見をし取と覺えたり、をのれあごをくひちがさせんとそばなる大石引おこし、はらの上に置けれ共おもげもなくをしおろし、大あくびして立あがり、詞ヱ、能ねいりしにめをさまさせしは汝よな、地色天晴力自慢と見えしいで此石を返さんと、押取てなげかくる俊兼中にてちやくと取、詞やあら御坊も大形の力かな、とてもの事に今少大きなを參らせんと、地色右の石にばいせしを四五間隔てなげかくる、客僧かた手にをやんと請くるりくるりと押まはし、地色中々御身は強力なれば成まじとは思へ共、返さでは殘念なりさあ、もどすぞとなげ返す、心得たりといだき取、又なげかくればなげもどし二三度四五度せりあひしが、俊兼今はせいつかれをばしたゆんで思ふやう、きやつはづもない強力と見ゆれば、力業にはかなふまじ、だましよつてうたんと思ひ是々お山伏、詞我力だめしに國々を廻れ共、御身に似たる程の者にもつゐに出合ず、ほとんどがを折て候へ地色ば、いざ此上はかたらひて、何樣にも其方の心にをたがひ申さんと、ををやくして寄ければ客僧くつ〳〵とわらひ、詞其手も大方すいしたり、力業にかなはねばだましよつてうたんとな、ヱ、夫はさもし、去ながら地志のやさしければ望をかなへん斬て見よと、ちつ共たぢろく氣色なく二王立にそ立たりける、地色ヲ、能推量かないで一打にとするりとぬき、とびかゝつて丁どきるひらりとはづし中にとび、うしろにつつくと立て有、こは無念とふり返り横にはらへばかいくゞり、すそをなぐればおどりこへ弓手をきればめでに有、めでをはらへば弓手に飛ひらり、〳〵といなづまの影計めに見えて、きれどはらへど手にたゝずさしもの俊兼あきれはて、たらり〳〵と大あせながしフシ只ばうぜんとたゝずめり、客僧から〳〵とうちわらひ、詞をて〳〵是はどうめさるゝ男たる者の太刀をぬきちを見ずはさゝれまじ、露程成共血を付てさゝれよとはぢしむる、俊兼かぶりをふつていや〳〵もはやふつつとならぬ〳〵、ホヲくたびれ地色たとどうどすはり、あせをしのごひゐたりけり、地色客僧扇をひらきそばへ立よりあふぎたて詞なふいかうあつさうなればとつくとあせを入、地色も一はげみはげまれよ、所望〳〵とあざ

けれ共いッかな事〳〵およびおりないあらもつたいなや、よしないほねをおりたりと、もろ手をくんでめをふさぎ大いきついでかまはねば、詞是々それはひけて見ゆる、我身鐵石ならばこそ斬にきれぬ事や有、地色ひらに所望是俊兼といへば、俊兼けうさめかほをながめ、詞やあらふしぎや、我名を知て俊兼とはフゥ合點たりだまされたり、扨々どうよくな御身様ははねのましますお山ぶしよな、なふ申、日比はあはれおめにかゝり一勝負もと思ひしが、いやはやいかうちがふたものふつゝとがを折候といへば、ヲゝさもさふず〳〵、自餘の者ならばとくに引さきすつべけれ共、主故にるらうする其忠厚をかんじ、且又思ふ子細有てかく近付し、地色中かなしい哉汝が尋る梅若丸、人商人にとらはれ武州隅田川の邊にてむなしう成、母はかく共ゑらで跡をゑたふて下りしと、聞も敢ず何若君は死去なるとや、是は夢かや淺ましやと地にふしゑづみて、なげきけり、地色落る涙ともろ共にア、はかなや神ならぬ身のかなしさは、かゝるべきとは露ゑらでうき身をつくせしこうくはいさ、誰を頼みにながらへんと太刀押取をゑばしとをさへ、尤なり去ながら、餘り存念不便なればなげきをとゞめよ悦びをさづけん、されば梅若が弟松若は、父存生の折から出家せさせんため叡山にのぼせしな、此松若は前生にて、地色法花りやくの果によつて三寶佛隨のみやうかんにかなひ、出家相續するなれば天臺傳教にもすぐれ、我道のさまたげをなすものとゑり取かくす、ゑかはあれど父少將なく成、梅若も相果れば今松若を汝にかへさん、彌主君とあふぎ吉田の家をつがすべきや、俊兼大きによろこびこは有がたき御事哉、何が扨松若を御返し給はらば、吉田の家つゝがなくもり立かしづき申さんと、地かうべを地につけなげくにぞふびんいやます鏡のごときまなこに涙をうかべつゝ、忽天狗のはだゝきしもとの梢に乘じしが、松若丸をかいゑやくし又ろく地におり立俊兼に渡さるれば、ゑゝたる人の二たびよみがへりたる心地して、是は〳〵と斗にて嬉しなきにぞなきにける、時地に天狗宣ふは名殘おしくは思へ共、いとま申ぞ人々と夕立空の、雲や霞も嵐と共に、うせにけり地俊兼ゑばし禮拜し、此上はとかう申に及ぶまじ、片時もはやく母上の御跡ゑたひ申さんに、いそがせ

給へといさめつゝあづまぢさしてぞ三里いそがるゝ、漸として地藤澤のこなたなる野里のやかげに着けるが、若君つかれ給ふと見て、ゑばらく是にて御休息とゑづが軒端の竹えんに、諸共腰を打かけて旅の物うき咄など、せめて慰めゐる所へ男一人來りしが、人々をきつと見て用有さうに立とゞまり、いかう我もくたびれしに休てゆかんとよりけるを、つく〳〵見れば梅若君のお家重代さじて有、俊兼さとき男にてちやくとすいし、梅若君をきやつめがかどはしゆくにまがひなし、をのれ一ひしぎにと思ひしがいやいや、かふたもゑらずもらふたもゑらず、そつじゑてはいかゞとさあらぬ體にて、詞なふ其方は此道中にて折々見つる人成が、いつもは女か男かの子共をつれて通らるゝが、今度はなどや不仕合かといへば、さればいの、去年七月の末より上方をめぐれども、よろしきものにもあたらぬ故是非なく國へ立歸るがして、御身のつれられしは若はなし子にてはなきか、どうぞ談合せふ物といふ俊兼彌とひおとさんと思ひ、ヲヽ我とても同商賣、金銀次第や、それに付、去年の春其方はよい子をつれて下られしが、定て仕合しつらんの、フヽそれを見られたるか、いやはや大きなはまりいの、ゑやうごは者のふてき者にてせる斗こく故に、ちやうちやくすれば手むかひし猶いぢばつていごかねば、逆物にはならじと思ひ地色是此刀をもぎ取て、隅田川のほとりにて死する斗に打ふせ、捨置かへるといひもあへぬに取てねぢふせどうぼねを、くだけよおれよとふみ付て、やい大罪人詞もつたいなくも某が三代相恩のお主成に、よくも此うでにて打けるな、扨腹立やをのれめを、料理のしやうこれなしと彌つよくねぢつくれば、詞なふいたや悲しやもはや息もたえ候、左樣のお方とゑるならば何しにいたく仕らん、もはや返らぬ事なれば眞平おゆるし遊ばされ、地色命を助け下されよとフシさもせつなげにぞなげきける、俊兼聞て何ゑらぬといふとてたすくべきか、詞いかに松若樣、畜生同前のやつめを御敵とはもつたいなし、只兄上への御孝養に、さいて成共きざんで成共御手向と申にぞ、若君太刀をするりとぬき、此うでにて兄上を打擲やゑつらん、めぐる因果を思ひゑれと左右のかいなを打おとせば俊兼はさしぞへぬき、みゝはなをそぎあしのすぢた

ちながら木にからみつけ、お家につたはる御太刀の不慮に御手にかへる事、御運ひらける瑞相といさみにいさんでくだらるゝ、ちうこうふかき俊兼ゆへ、天のめぐみやありがたしふしぎの、うへのふしぎなりとてかんせぬ、人こそなかりけれ

## 第四

隅田川のほとり成在所の人々あつまりて、けふは彌生中の五日去年都のをさあひが、此川岸にてゑゝたりし忌日にて有なれば、いざや弔ひえさせんと色々供物を調へて、花を立香をもり灯明四方にかゞやかし、既に月出川風もふけぬさきにと面々に、しやうこをならし聲を上念佛申ぞ三重太夫殊勝なる、花の色香も、地あだとなる梅若の母上は、くるひめぐりて行水のフシ隅田川にぞ着れける、地色折節出舟の有ければ、なふ〳〵我をものせてたべヲキ詞船頭聞ておこととは狂女と見えしが、詞のしなのやさしさ都人と聞えし、おもしろふくるはれよくるはずは舟にのせじといふ太夫地色うたてやなたとひひな人成共、各所にすまば心あれ、あれ〳〵あの、水にうつる月を見給へ、風狂じ波を立眞如の影をくるはする、狂人とは情なや狂人笑へば不狂人は猶わらふ、是我よりは物狂よ爰は所も、各にしおふ隅田川の、渡守ならば日もはや暮ぬ、舟にのれとは宣はで、舟にのるなとおせあるは名にも似ずさりとては船謡こぞりてせばく共、のせさせ給へ渡守さりとてはのせ、たび給へ地色ヲキヲ、あやまつたり狂女、さすが都人程有けるよ、何かおしまんのり給へとフシさほさしよせてのせにけりッレ同船の僧俗等むかふの方を見渡しなふ渡守、詞あのむかひの柳のもとに人多くあつまるは何事ぞと尋ればヲキされば、あれは大念佛にて候、誠此なかにゑらぬ人のみ多かべし、此舟のむかひへ着候はんまにいはれを語ッて聞せ申さん皆々御聞ましませ、扨も去年三月十五日、ゑかもけふにあたつて候、其比奥白河の人商人、年の比十二三成をさなき人を都より、買取奥へ下る、彼をさなき人ならはぬ旅のつかれにや、以ノ外にゑれいし、今は一足もひかれずと此川岸にひれふし候を、なんぼう世には情なきものゝ候ぞ、彼商人散々打擲し、此川岸にすて置奥へ下る、此邊の

人々立寄をさなきものゝ姿をみるに、よし有げに見え候故、色々にいたはり候へ共定業にてもや候ひけん、たんだよはりによはり既に末期と見えし時、おことはいづくいか成人ぞと委尋て候へば、我は都北白川にて、吉田の何某と申者の子にて有、父にをくれ母斗にそひ參らせしを、人商人にかどはされかやうに成行候、都の人の足手影もなつかしければ、此道のほとりの土中につきこめ玄るしに柳をうへてくれよと、おとなしやかにいひ置終にはかなくなられて候、見申せば船中にも少々都の人も有げに見えて候へば、逆縁ながら念佛を御申有て弔らはせ給へ、や、よしなき長物語に舟が着て候、地中とう〳〵御上りあれといへば船中の人々、扨も不便の次第かないざ我々も逆縁ながら、跡弔らひて通らんと皆々舟より、おり行けりフシされ共狂女太夫地色一人はふねよりもあがらずし、只ふなばたにふし玄づみ前後もわかず泣居たりワキ詞船頭見ていかに狂女、何とて舟より上られぬぞはやとく〳〵といへば太夫地色なふ只今の物語はいつの事にて候ぞワキ詞されば とよ去年三月十五日太夫玄て其兒の年比名をば聞召ざるかワキヲ、兒の名は梅若丸、年は十二三と見えて候太夫扨父の名はワキ吉田の何某太夫それより後親とても親類とても尋こざるかワキ中々思ひもよらず、狂女も都の人ならば急ぎ舟よりあがり、共に念佛申され候へ、あらふしぎや、只今の物語を聞愁傷の躰、若狂女は某ゆかりの人か太夫地色なふ親類とても親とても尋こぬこそ道理なれ、其をさなき者こそわらはが尋る子にてあれ、是は夢かや現かともだへこがれて泣給ふワキ地色船頭けうさめ扨も〳〵今迄は、よその事と思ひしに御身のうへにて候かや、あら痛はしやと諸共にさほさす袖をぞ玄ぼりける、地色誠に御心底思ひやられて候へ共、もはや返らぬ事御歎をとゞめられ、なき人の御跡を弔ひ給へと手を引て、なく〳〵いざなひ參らする、チクリ哀といふもをろかなり、つ太夫地中かのほとりに成ぬれば、母はひれふしあこがれて、地色なふ今迄はさり共あはんと思ひしを便にて、玄らぬあづまへ下りしに、はかなや此世になきあとの玄るし斗を見る事よ、フシ扨もむざんや玄のえんとて、生所去つてあづまのはての、道のほとりの土と成春の草のみ玄げりたり、此塚の下にぞ有らめさりとては人々、此

土を返し此世の姿を今一度、わらはに見せてたび給へなふ見せてたべ人々と消入、斗に泣給ふ地色ワキ念佛回向の人々も、ゑごくの涙にくれながら實御歎き尤なり、去ながら母の弔ひ給ふをこそ亡者も悦び給はめと、鉦鼓を參らせ御念佛をすゝむれば太夫我子のためと聞からに母は漸おきなをり、せきくる涙と諸共に、地色南無や西方極樂世界三十六万億、同號同名阿彌陀佛、なむあみだ、〳〵、南無阿彌陀佛なむあみだ、南無阿彌陀佛、なむあみだ太夫詞なふ〳〵人々、只今をさなきものゝ聲として御念佛の聞えしは、正敷我子のこゑなるか此塚の内とはおぼさぬかワキ中中我々も左樣に聞て候、ゑよせんこなたの念佛をやめはゝご斗申させ給へ地色太夫猶なつかしき都鳥今一こゑこそきかまほしけれなむあみだ、南無阿彌陀佛なむあみだぶととなふるこゑともろ共に、ゑるしの柳の陰よりもうつゝのごとく あらはるゝ太夫母はあまりのうれしさにやれ梅若かとはしりよりいだきつけばこはいかに、其きゝえてあともなし、扨情なや今迄愛に有けるがと、ひだりへめぐりみぎへまはり只、うろ〳〵と尋れば、つきなき所に立おもかげあれは我子が、母上にてましますかと、たがひにこゑをかはすにぞ、思ひはなをもますかゞみかぎろふいなづま水の月、とらんとすれどかげもなし、見えつかくれつ、する程に、はやゑのゝめも明ゆけば、我子と見えしはあとたへてゑるしばかりぞ殘りける、太夫地母はあまりのものうさにかひなき柳にいだきつき此世のなごりに今一度、ことばをなりともかはさぬかやれ梅若よさりとてはと、つかのうへにふしまろびフシおめきさけばせ給ひけり、今はかなはぬ御事なればと人々漸なだめつゝ、さま〴〵いたはり參らする前世の因果といひながら、かゝるあはれは又よにもあらいたはしやと見る人聞人をしなべ、袖をぞゑぼりける

## 第五

實や生て有子にさへまよふおやごゝろ、ましてやゑしてなきかげを夢にもあらす見てしより、思ひもふかき涙川ふちせに身をもゑづめんと、既にあやうき折から粟津六郎俊兼は、松若君の御供申足を斗にか

け來り、母上と見るよりはやく是々俊兼こそ、松若君の御供申參りたりと聞も敢ず母上は、何俊兼とやなふ是は松若か、夢か現かまぼろしか誠とさらに思はれずと、人目もわかずいだき付なくより外の事ぞなき、地色俊兼見參らせ先以つゝがなく渡らせ給ふ珍重さよ、某も梅若君の御行衞、國々島々尋廻りうき身をやつすに思はずも、松若君にあひ奉りうれしき中にもかなしきは、梅若君の御さいごとや扨うらめしき世やとフシたもとを、ひたしなげきけり、地色チヲ我とても梅若が、あづまのかたへと聞し故はるばる下りしかひもなく、去年の春此野邊の露ときへつつなきあとの、フシ玄るし斗が殘りしぞや、地色語るに付てよしなけれ共、世に人多き其中にみづから程物思ふもの又もあらじ、少將殿には玄ゝてわかれ、松若はいつ地共、ゆくゑ玄られず俊兼は、かりそめながら出てより、をとづれとてもあらなくに又梅若はむなしうなる、いくえの思ひせんかたもなき身とならんとさだめしに、せめては天のあはれみにや、おもひもよらずかたゞ〳〵が、あとを玄たひてあはんとはとかく時節を松若を、見るに付ては玄にたくもなき梅若こそ戀しけれとなげかせ給ふぞ道理なる、地色されども松若おとなしやかに、御くやみ玄ごくせより去ながら、もはや返らぬ道なればおそれながら某を、兄上とおぼしめされ御なぐさみおはしませ、いかに俊兼、いざ先御ついせんのいとなみ何とぞと宣へば、其段は御心やすくおぼしめせと、すなはち妙義山北法寺の源流上人を賴つゝ、隅田川のほとりにて御弔ひとぞ三重聞えける去程に、源流上人は寺僧殘らず召つれられ、河原に出させ給ひ松若親子俊兼にもよきに弔ひ給ひつゝ、扨梅若の御はかのうへに出離生死の高そとは、玄きみにをけるあかの露、玉のかずある法のこゑ玄んををすます斗なり、地色既に法事もおはる比、梅若丸の亡魂そとはのかげにあらはれて、あらたつとの御弔ひやな、卽往安樂世界阿彌陀佛、大井衆園遠住處の文にたがはず、決定往生すべき身の母の玄うぢやくふかきゆへ、りんゑの雲霧おほひかさなりもとの中有に立返り、ア、かなしやよるとなくひると涙のふちに玄づみ、うかみえがたく候へばこひしゆかしと思召、御歎をひるがへしぼだい玄んをおこされ、我あととひて給はれと涙に、く

れて立給ふ、地色源流此有様を御覽じ〻、さぞあらん去ながらおんあひへつりのなげきは是人界のならひ、御身かゝるほうみをうけいかでりんゑにまよふぞや、ゑゆゆしけんそくとくきやう、あのゝぼだいと、宣ふ御こゑの内よりもきなるかなこくうより、をんがく聞えゑうん一むらつかのうへにまひ下れば、亡者はくはんぎの氣色にて、柳のもとよりよぢのぼり、枝葉かき分紫の雲のかけはしゑづ〳〵と、ゑたひゑたはせ給ひしはきどくといふも三重あまりありつゝくもまに月の、かゞやくごとく八十ゑゆかうのさうげんじ、ゑやうれんげにせうじつゝにしの空に飛行ある、地かゝりける所に西南の方よりも、俄に魔風ゑきりにて黒雲うずまく三重内よりも地大天狗横河房、松井源五定景をもろ手にさし上飛來りいかに松若、詞年月なじみのゑるしには上洛出世の門出いはゝん、さあらばうけとれわたすぞと、大地へどうどなげ給ふ俊兼中に取てふせ、ェ、みやうがにかなはせ給ふ若君哉、御伯父ながら御敵はやあそばせと引おこせば、松若君太刀をぬき自業自得果是ぞとて、水もたまらず首を討千部萬部の御經より、兄梅若への孝養は是にゑくべき事あらじと悦び、いさみ母上諸共すぐに上洛なされつゝ、あとめの參内づゝがなく四位の侍從にけんにんし家門ときめく御代万歳、めでたかり共中々申斗はなかりけり

## 隅田川終

# 善光寺

## 第一

山本土佐掾正本

さてもその〳〵ち序ことはそれあみだによらいのほんぐはんといつは、しよくあくのぼんぶぐちたんさいにしてやうかううかみがたきをあはれみ、五かうにおよんでしゆいし、てうさいの御しゆぎやうじやうじゆ有てあみだ佛とあらはれ、今げんざいに御しゆつせし玉ふ、しなの〵國ぜんくはうじゑんぶだごんのみほとけの御ゑんぎをたづね奉るに、ほんてう三十五代、じよめい天王のぢてんにあたつて、ゑちぜんの國つるがのしやうのあるじをば、ほし川右兵へのぜう、いろふしひでとしおろしとて、じんぎたゞしきけんじゆ有、地しかるにひでとし、内には五じやうをまもり外には佛神をそんきやうす、さるにより家とみさかへめでたうし、姫君一人おはします、御名をやよひのまへと申て、いまだ二八の春の花、ようがんことにうつくしく、地かすみをわけてさくむめの、かごと計りの御よそほひ、およぶもおよばざりけるも心をおくりかけぬはなかりけり、ことば偖又ひでとし公のおいに、やだの藤平國ひでとて、けつきさかんのわか者なり、ようせうにてぶもにおくれみなし子と成しを、おぢひでとしのかいほうにて人と成、其外家の子らうどう共、れいぎをまもり相つむる、然るにしなの〵國川中島といふ所は、ひでとしのりやうないたりしが、かの所の民に、本多よしみつといふ者、あけ二さいのこまにつの一つおひたるをじ〵んに引つれ、ひでとしへ參り御前に罷出、是はすぎしとし某が馬やにて出生仕候、あまりめづらしく存し君へさし上奉るとつ〵しんで申上る、大將御ゑつきかきりなく、偖々きたいのめいば、きゑつほとんど淺からず、かのもろこしのゑんたんが、親かう〳〵のごとくにて、こまにつの〵できたりしとつたへきけ共、今さらにめに見る事ははじめなり、たぐひなきめいばなれば、いそぎ都にのぼせだいりへさ〵げ奉らんと、則名代としてやたの藤平國ひでに、そうもんの趣一々申わたさる〵、時によしみつおそれがましく候へ共、某をも御供に召つれられ候へかし、四をんの中にすぐれて、たつとき王城の地

へ參り度候と、思ひこふてぞ申さるゝ、ひでとし聞召尤やさしきしんてい哉、さあらはよう〳〵仕れ、忝しとお請を申、地かくて藤平は供人あまた引ぐして都をさして、そ、大三重のぼらるゝ都になれば、ことは時のてんそうを以てかのめいばをさし上、一々そうもん申上る、はるかに有て内よりのせんじには、はる〳〵參上仕り、ことにたぐひなきめいばさし上るのでう、ゑいかんはなはだ淺からずとのちよくぢやうなり、國ひで有がたし〳〵と、地かゝり御いとまを玉はり、いそぎ御前を罷立、ことは偖侍共に打むかひ、いざ此ついでになんばの京を一けんし、偖本國へ歸るべしと、かゝり供のよういを申付たつたごへにぞ三重かゝりける其中によしみつは、ことはさきのやくをかうふり、くだんの山にさしかゝる、風はげしくもたつた山、ゆきかふ物はしらなみの、よたうの者におかされて、手おひ死人はこゝかしこさんをみだせしごとくなり、ことはよしみつやさしき人なればあゝ偖ふびんの有さまや、此死人の親兄弟、かゝる事とはしらずして、地まちやこがれてなけかんと、人のうれへを身のうへに、しみ〴〵と思ひとり涙ながらにしがい共、よく取おさめるかう有おとし心の内こそしゆせうなれ、ことはかくて藤平はくだんの所に來り、此よしを見るよりも大きにいかりをなし、やあいかによしみつ、汝はいか成事にけがれたる死人を取あつかひ申ぞや、我此たびはじめてさんだいせしめ、國元へ歸る迄は諸事けがれをいむ所に、なんぞやゆへなき死人を手にかけ身をふじやうにいたすこと、中々もつてきつくはいなり、汝がやう成者をさきにたつれば道すがらのいみと成、はるかにさがり跡より來れと、以ての外にりつ ふくしおくりなにはの、うらへぞ出にける、地ふるき都殘りなく、こゝやかしことけんぶつす、ことは然る所にせい〳〵たるいけ水に、時ならぬはちすばの、露はさながらしら玉かと、打ながめ行所に、ことはふしぎや水中よりけしからぬひかり物、十方にへんまんす、國ひでをはじめ侍共、たゞ事ならぬひかり物、是さいぜんよしみつが死人を手にかけ、けがれたるとがめ成べし、かゝりいろあらもつたいなやと足はやにくだんの所を三重さりにける、然る所にことはよしみつはたゞ一人跡より來る、時に水中より有がたやあみだ如來、ことはし

まわうごんの御よそほひにてうかみあがらせ玉ひける、よしみつはつとかんたんし、かうべを地につけらいはいす、其時によらい誠にたへ成御聲にて、いかによしみつめづらしや、我汝とくはこしやうよりふかくけいやくいたせしゆへ、年月久しく此所に尋ねたり、それ三がいるてんの内は、きやくしやうそくもうとて、生をへだつればかならずさき生をわするる、汝くはこみやうのむかしは天ぢくにてぐはつかいとよばれし長者たり、じせつはしやかぶつざいせの時我をねんじてりうぐうより、ゑんぶだごんをこひうけ、則二佛のくはうみやうにて西方ごくらくのあるしあみだ佛をこんりうす、今がんぜんに我なり、そんようは天ちくにてゐ奉るぶつたいなれ共、しんは誠の西方のあるしあみだの大念大ひのしん、少もうたがふことなかれ、其後汝わうゐをのぞむ心ふかく、われにねがひをかくるゆへ、たいたうのせうめい王と生れ出る、こゝにても我汝に付そひぐはんをみつる、其時汝今其身と成、ぐぐはん有ゆへによつてよしみつと生をうくる、ことは一世ならず二世ならず生々世々のやくそくたがへぬゆへに今こゝにめいはくにあらはれたり、一とせもりやの大臣がぶつほうはめつなすべきと此いけに我をすつる、然れ共佛法のゐりきふかき故、もりやの大臣めつぼうし其後しやうとくたいし此所に來り、我をあがめ奉らんとふかくしうたんいたすといへ共、汝にけいやくふかきにより、此いけ水にとし久しくも待わびて有けるなり、いそぎ本國へつれ行、むぶつの物にあんらくのほうどのゑんをむすはせよと、地くはこ生々のいんゑんをくはしく語らせ玉ひける、ことはよしみつかんるいきもにめいし、ことはとても大じ大ひのちかひなを〳〵あはれみ玉へとかうべを地に付がつしやうす、地其時いけ水うずまきあげ、雲のなみよりきしかげは、地こがねのまさごと色へんじ、によらいのそんようよしみつが、かたにうつらせ玉ひしは有がたかりけるしだいなり、かゝり本多あまりのたつとさに、天にもあがる心地にて、かのみほとけをおひ奉り國もと、さしてぞ三重かへりける、偖其後に、ことは右兵衛のせうひでとしは、此度都のやくぎをおいの國ひでにつとめさせ供の侍つき〳〵迄、けんごにきこくいたせしこと中〳〵悦びかぎりなし、有時北の

方に打むかひ、我こよひふしぎのれいむをかうふる、語り聞せ申さんとの玉へば、北の方聞召、みづからも夢とやいはんうつゝ心に、あらた成御つげをかうふりて候、ひでとし彌ふしぎにて、されば我見し夢のつげは、くはうみやうかくやくたる佛らいりんまし〳〵、かの本多よしみつに我が姫を引合せゆいせきをゆづらば、ごしやうおんらく成べし、かのよしみつがくはこみしやうのむかしはぐはつかい長者、其後たいたうにてせうめい王と出生し、今日のもとにて本多よしみつとあらはるゝ事、ふかき願心有ゆへなり、儕汝が姫のやよひのまへはよしみつがくはこ、ぐはつかいが時のつまたり、又たいとうせうめい王の時は一のきさき、かやうに生々世々のえんふかければ、いそぎ其けいやくなさしめよとの玉ひ、たちま地夢さめぬとかたらせ玉へば、北の方儕々ふしぎやなみづからも其ごとく、ひかりかゝやくみほとけの、あらたに御つげおはします、儕よしみつは此たひ都けかうの時、さしもたつときみほとけをもり奉り候とや、かゝるきどくもおはします、よしみつを是へ召れ、かのみほとけをおがませ玉へとの玉へば、ひでとし尤哉、それ〳〵よしみつに此度都よりあんぢいたせしみほとけを、もり奉れと申すべし、侍共承り、御まへを罷立、やがてよしみつに此よしかくと申げる、召にしたがひよしみつは、かゝりかのみほとけをもり奉りおくりいそぎ、おまへに出らるゝ、ことはひでとしふうふ御ほぞんをおがみつけ、儕も〳〵有がたや則我らふうふの者、夢に見奉りしみ佛にまがひなし、此うへは何をか儕佛のおしへにまかせんと、儕姫君にも夢の御つげ語らせ玉ひ、佛の御つげにまかせ申事なればせけんのひはんはともかくも、いかによしみつ、おことはけふよりしては某のそうりやうたるべし、諸事けんごにはからひ玉へとの玉へば、よしみつしゆめいなりことに身の大けい忝しとやがておうけを申さるゝ、姫君はふうふの仰もれ玉はずはやしうげんのぎしき有めでた、いろおくりかりけるしたい也、ことは所へ國ひではくだんのざしきへしこうある、ひでとし御らんじいかに藤平、よきじせつに參りたり、我等ふうふ過し夜ふしぎのれいむをかうふり、つげにまかせよしみつに姫を得させゆいせきをゆづる、きやうから御へんも本多ともろ

共、いよ〳〵家をあんおんにまもるべしとぞ仰ける、藤平聞てつね〳〵やよひのまへを心にかけ、又は家のそうれうを我ならでつぐものあらじと思ひしゆへ、大きにいかりをなし、こは何事を仰候ぞや、あのいやしきどみんをめし上姫にあはせ、ゆいせきをゆつらんとは、御きばしちがひ候はずや、其佛のれいむとやらんは中〳〵おかしきそらごとなり、そうじてあのよしみつめは都げかうの折節も、身ふじやうにけがすゆへきつねたぬきがわざをなし、あらぬ事のたぶらかしを誠になされ候かや、返す〳〵も淺ましや、しよせんきやつめが有ゆへに、人の心をまよはする、討てすてんと一もんじにとびかゝるを、人々取ておしとむる、其隙によしみつは佛をもりて内に入、ひでとし大きにりつふく有、やれ〳〵おのれこそ大あくま佛のあはれみおはしますよしみつを討んとは、佛てきのだいばもりやがしよゐならんと、たちに手をかけ玉ふを、こはもつたいなしとおしへたて、むたいにおくへともない、かゝり國ひでをかたはらへひらに〳〵と三重なだめおくかゝり儕よしみつは、ことは如來をしゆごしひとまにかへり、つく〴〵物をあんずるに、我此所に有ゆへに人のうらみをうくるなり、此みほとけだにましませば、うきよにのぞみあらばこそ、たゞ何方へも立こへ、ごせ一へんにねがはんと、地み佛をおひ奉り、そこ共しらず出玉ふ、ころしもさつきのするなれば、うの花くだしにふる雨をしのがんためにかさをさし、やう〳〵として今ははやはづみふしいはた山にぞつき玉ふ、ことは所へ藤平はよしみつしのび出けるを、ほつかけ討てすつべしと、跡をしたふて來りしが、こゝにて見つけ、いつく迄かのがさしとはしりかゝつてちやうどきる、ふしぎや黒雲へだゝり姿をはつたと見うしなふ、國ひでをはじめらうとう共、たゞこくあんにまよふがごとく、とはうをうしなふ計りなり、かゝり是ぞほとけの御りしやうなり、あら有がたやよしみつは、かゝり如來をしゆごし申せしゆへ、あやうきなんをまぬかれて、ことはかうざんのうへに我しらず、佛をしゆごしゐたりけり、所にふしぎやいづれの山共しらぬ雲の、たな引つゝき一もんじによしみつが立ゐたる、山のうへにかけはしをわたしごとく立つゞく、かゝりよしみつたつとさ身にあまり、ほんぐはんふしぎの

びやくだうを、わたる心にしん〳〵と、佛をしゆごしわたりしは、きたいなりける、三重しだいなり國ひでをはじめらうどう共、ことは此有樣を見るよりも、やれあれへ行はおつかけよかへせもどせと聲〳〵にのゝしれ共、ぶつりきふしぎに叶はず、たゞ此道よりさきへまはり討てすてんと、かゝりそはをつたひにあらぬかたへとあふてゆく、地偖よしみつは山よりうへのくもぢをば、ろくぢをふむよりなをやすく、あゆむ共思はゞこそ、ひぎやうじざいに成にける、ことは有がたや本尊はみ聲あらたにいかによしみつ、かう〳〵たる雲ぢ心うく思ふらん、我なんぢをしゆごさん間、すこしきうそくのためかたにかゝれとの玉へば、よしみつこはもつたいなや、ことは何として佛の御かたにいやしき此身がかゝり申さん、御ゆるし候へとふし涙をながし、申ける、ことは時に如來の玉はく、いや〳〵ならくのざいにんの身にさへかはるぐはんなればくるしからずとの玉ひ、かゝりよしみつがかたのうへよりおりさせ玉ふは、誠にたへ成御ぐはん、ことは偖よしみつは夢共なくうつゝ心に、かんことはもつたいなや佛の仰にしたがふと思へばたちまち地に、かゝり如來はよしみつをかたにあげさせ玉ひしは有がたかりける次第なり、ころしもさつきのするその夜の事なれば、かゝりゆくさきは見へね共、佛のくはうみやうほがらかに、てらさせ玉へば一天もかゝやきわたりあきらかにひるはよしみつ如來をおひ奉れば、よるは佛よしみつをおはせ玉ひ、かゝりがゞたるけんなん山のそは、風にしたがふうき雲の、天にもあがる心地してはる〳〵見こしの國つゞく日かず程なくしなのゝ國、川中島に付玉ふ、くはこしやうじやうのむかしより、まもらせ玉ふ御れいげん今もくぜんにあきらかなり、有がたし共中〳〵申、計りはなかりけり

## 第二

去程に、地右兵衞のせうひでとしはみだひ姫君もろ共に、ことはよしみつおち行玉ひしを、國ひでおつかけ行し事、心もとなく思召さま〴〵へうぢやう有所へ、やかたの藤平一もんじにかけ來り、とかふによばずひでとしにとびかゝつて、やがて取ておさへ、

ひざの下にひつしき、刀をむねにおしあつるを、はねかへさんとし玉へば、是はどこへ、せまい〳〵といかりける、みだひ姫君女房たち、是は〳〵とさはぎ玉ふを、藤平いかつておのれらよつて見よ、取ついたらばたちま地にひでとしをさしころし、有あふやつばらも一々になぎたをさんと四かく八めんにいかりければ、おぢてちかづく者もなく、たゞけうさめてぞゐたりける、ひでとしも御心は中々はやり玉へ共、やいばをむねにおしあてられ、何とはやせんかたもなく、是は國ひでいか成事ぞ藤平聞もあへず、やあおろかや某をさし置、あのゆへもなきよしみつめに此家をつがせんとは、よくも〳〵思はれしぞ、今さらこうくはいたるべし、あまさへ某を手打にせんとし玉ひしはさだめて覺への候はん、かた〴〵以てうらみこつずいにとをつてやむことなければ、しよせん御身をさしころし、偖其後はみだいも姫もかちうのやつばら、一人も殘さずなで切にして、ほし川の家をだんめつさせ、うき世のもうしうをはらし、我もはらかきやぶつて此世の事は偖置、めいど迄もうらみをなさんと思ひきつたるしんていなり、今がさいごぞくはんねんあれと、大きにいかつて申ければ、ひでとしもさしあたつて何共へんたう出ずして、とかふいひかねおはします、され共やよひのまへちゑふかうして心さとく、なげきの内にもさま〴〵としあんをめぐらし玉ひ、國ひでをなだめ父上の命をすくひ、其後何とぞはからはんとむねをとつくとさだめなふいかに藤平殿、さやうにあらぎをの玉はず共、御心をしづめ玉ひみづからが申ことはり聞召せ、此たびのやうすは父母の御計らいにていさゝか以てさふらはず、佛のれいむましますゆへ、よしみつとみづからが、わりなきむすびのけいやくを、なすと計りにゐ枕ならべし身にてもはんべらず、殊によしみつ行方なくおちうせしことなれば、わがつまならぬ人にて有、さあれば又此家をたれか有てつぎ申さんや、御身ならでそうりやうをしり玉ふべき人もなし、みづからもつね〴〵さやうに思ひくらせしに、ふりよの事ゆへ父母や又みづからに至る迄、御うらみをかうふる事一しほかなしく候、あはれ偖ねがはくは右のうらみをふりすてゝ、父上をゆるし家をたてさせたび玉へ、父上とても此段をいかでいなとは思召ん、

さあればなみ風世にたゝず、よろづたゞ御身の心のまゝならんと、ことばをつゝしみをわけて、そとゐに思はぬそらごとを誠しやかにぞ申さるゝ、ことはさもよこしま成國ひでもやよひのまへのべんぜつに思ふまゝにのせられて、大いきをほつとつぎ、偖々御身の申さるゝ段、女性ながらも一々りにあたつたることば哉、さりながら某とてもさ程のりをわきまへぬ者にてなし、御へんの心ははや一ごんにてしれたれ共、とにかく父母のしんてい中〳〵とつくとしれがたし、此上はひでとしのそこゐを承り、其へんたうによつて何が偖某も、げんざいのおぢおやなればいかでせつがい仕らん、何と姫のしんていと一所にて候か、たゞしかはりやましますかいかに〳〵と申ける、ひでとしも姫君のちりやくのことばとすいりやう有、やあおろかや藤平、何とてちがひ有べきぞ、さいぜんより其段をわけていわんと思ふ内に、姫が心のはやくつき我かへつてゐんいんすまさしき汝はおいといひ、ことにおさなき時より某がかいほうにてそだてあげたる事なれば、おことに家をゆづらん事何か以ておしからん、内々さやうに思ひぬれ共、此度は思ひよらざるさいなん今以てくやしゝ、かゝるうへはたんりよの心をひるがへし、わがゆいせきをつぎ得させば、何のそこゐか殘るべきと、さも有さうにの玉へば、藤平聞て其義ならばとてもの事に姫の義は申におよばず、ゆいせき殘らず某に玉はるとのせいごんにて承はらん、ひでとし聞召おゝ中〳〵弓や神もせうらんあれ、まつたくきよごんこれなしとあれば、ちゐの淺き藤平にて誠に思ひ、先こゝはしおふせたり、偖みだいけらいはいかに、何が偖君の御意をいかでそむき申さん、かはりないな、あゝ偖は其しんていにて候かとむいきに取しむなどりを、手持あしくそつとはなし、あゝ偖おぢ親たる人に慮外をいたし候、まつひらゆるさせたび玉へと、太刀をさやにおさめしはめんぼくなふこそみへにけれ、地北の方も姫君も、しゝたる人のそせい有、かへらせ玉ふ心地して御悦びはかぎりなし、女房たちもいさましく君をいはふてすゑながき、てうしかはらけ取〳〵におくりしうぎのぎしきとゝのへて、地すぐに盃おさまれば、ひでとしふうふもろ共に色おくり皆〳〵、ひとまに入玉ふ、ことは藤平一人ざしきに殘

り、心の内に思ふやう、偖〳〵是は思ひの外の仕合哉、家のそうりやうつぐといひ、日比のぞみをかけたりし姫をさい女にさだむること、我身ながらも某は、あつはれくはほうものやと行末しらぬ身の悦び、おかしかりける三重しだいなり、すでに其夜も、ふけゆけば、みな〳〵しん所に入玉ふ、さればにや藤平は、姫君のひとまに入、とし月こがれしうさつらさ、地かたりなぐさみあはさんと、人をはゞかるていもなく、上なけぶしどけなげに、あゆみをはこび、あいのしやうじを、ほと〳〵地かりほと〳〵とおとづれて、なふいかにやよひのまへ、ことは國ひで成は是、こゝをあけられよ、はやとく〳〵と申せ共とかうのへんじもましまさず、藤平あきれて是は偖、まづ〳〵よくもねいられたり、あゝよし〳〵さらばひそかに立いらんと、しやうじをそつとおしあけみれば、姫君はよるのゐしやうを引かづき、ふかくねいらせ玉ふてい、さしもにあらき藤平も、見るに心のたよ〳〵と、はるおとしひざわな〳〵とぞふるひける、ことはやう〳〵むねをじつとしづめ、なふいかにやよひのまへ、さいぜんはことの外あらけなきていを見せ、さぞ心うく思召ん、今は中〳〵こうくはいに存る、去ながら又某が心をもよくはからふて見玉へ、日比ふかく戀わびたる御身を、あのいやしきよしみつめにそはせ、手をむなしくながらへて何とうか〳〵くらすべき物か、命が有てもおもしろき事もなく、其うらみむねにせまつて、ふかきおんをかうふりたる、おぢ親といひことには又、いとをしきわ君が父上に、ぶれいをはたらき申たれ共、しかしそれゆへに思ひしねがひ叶ふたれば、近比まんぞくに存るなり、偖今より後はかならず〳〵心をちつ共へだて玉ふな、行末ながくいつ迄もとかく情を頼むぞ〳〵なふ姫君、〳〵やよひのまへ、〳〵ととへ共さらにへんじなし、あまりの事に國ひでよるのゐしやうをおつ取みれば姫君はましまさず、藤平はつとおどろき、是は偖我をあなどるふるまひか、何たるしよぞんにかくはせしとあんじゐたる所を、姫君びやうぶのかげよりも、たちぬきそばめねらひすまして、右のかいなを打おとす、是はとあはてふりかへるを、ゆんでのかたさきはたときれば、かしこへかつはとまろびける、姫君嬉しく、やれいかに藤平、

みづからさいぜん申せしこと誠と思ふか、ゑゝおろかやな、父うへたすけんちりやくのためたばかりしをしらざるか、一度ふうふのけいやくせしよしみつをよそになし、おことがやう成悪人に何ゆへにしたがはんと思ふぞ、ゑゝ淺ましきしんていや、なふいかに父上、悪人切とめ申たり來らせ玉へとの玉へば、ひでとしふうふおどろき、あはてさはいで出玉ふ、右の有さま語らせ玉へは、ひでとし大きに悦び玉ひ、やれ國ひでめげんざいのおぢにてきをなし、佛のあはれみましますよしみつをなやましたる、天ばつまさにあたりたり、よくもさいぜん某をさしころさんといたしたな、思ひしれぐにんめと、くびちうに打おとし、あゝよくも〳〵はからひたり、我子ながらもたのもしや、女性ながらもわごぜは偖なんしにまさる心ていやと、あふぎひやうしたて〳〵〳〵悦びいさみ玉ひける、姫君の御ふるまひ誠にけんぢよのたしなみやと皆かんぜぬ、ものこそなかりけれ

## 第三

かくて其後、ことはらうせうふちやうの世のならひわかきとても頼なし、ひでとしのそくぢよやよひのまへ、すぎし皆月中比より、地いろゑれいくるしくましましてすへふし打ふしなやませ玉ひける、ことは父母一もんかちうの人々、ちうやかんびやう取〳〵にさまざまれうぢなさるれど、さらにげんきもなかりけり、ふうふあまりのかなしさに、なふいかにやよひのまへ、何共御身の有さまは頼みすくなきふぜいなり、心で心を取なをし、今一度ほんぷくあれと色々いさめ玉ひける、其時姫君くるしげに、地是に付てもよしみつ殿、何とかならせ玉ふぞやよこしま成國ひでゆへ、行衛もしらず成玉ふ、佛のちかひ夢のつげ、地よしみつ殿とみづからが、わりなきいもせのやくそくも、今生一世のゑんならず、くはこ生々のふかきゑん、わらはがねがひはいかにもして、つまの有かを尋つつ、地によらいをおがみ奉らば、よみぢも心やすかるべし、あゝ偖戀しきよしみつ殿やとぐつゝみかねたる思ひのたね、色にあらはしぅれいふしくどきなげかせ、玉ひける、地いろ夫婦めのと女房たちはづみふしおの〳〵袖をぞしぼらるゝ、地ひでとし涙と諸共に、

ことはおゝ心やすかれよしみつが、行衛をすいぶん尋出すべしと、さま〴〵かんびやうなさるれど、さらにげんきもあらずして、地文月下旬の比よりも次第におもらせ三重玉ひける、是は偖置、ことは本多の小太郎よしみつはしなのゝ國川中島に、しばのいほりをむすび、月日をおくりておはします、ひんじやのすまゐの事なれば、かのみ佛をうすのうへにすへ奉り、ちうやおこたる事もなく念佛申ておはします、其としずへの事成にやはん計りにたれ共なくしばのあみどをおとづるゝ、よしみつふしきに思召、たれ成らんと立出てあみどをひらけば、わかれて久しきやよひのまへ、なふ是はよしみつ殿にてましまさぬかや、あらなつかしやとうれいぶしすがりついてぞ、なげかるゝ、ことはよしみつ大きにおどろき玉ひ、是はいか成御事に此所へ來らせ玉ふ、姫君涙ともろ共におろかのつまの仰やな、國ひであらざる心ゆへ御身ゆきがたましまさず、あけくれ戀しゆかしく打なやみ、有にもあられずなげく身の、父母にしのびつつ命かぎりに尋んと、思ひさだめて人しれず遇にし秋のすゑつかた、一めもしらぬ國さとを、はる〳〵尋こゝ口ひしも、此山中へまよひ來て、かやうに御めにかゝる事、ひとへに是も三佛の私生にてましまさんと、かゝりの玉ふ聲もよは〳〵とうれいふし打しほれてぞ、なげかるゝ、ことはよしみつも姫君の、地いろたがひにふかき心をかんじはづみふし共に涙はせきあへず、地やう〳〵涙の隙よりも、ことは偖々我らごときのかひなき身を、それとたがひにかけをびの、むすびしゑんをきらさじと、はる〳〵來り玉ふ事、誠にせつなる御心、何ともことばにのべがたし、まづ〳〵こなたへ〳〵と、地ふうふたがひに念佛を、ちうやつとめてあかさるゝこゝろの内、こそ三重しゆせうなれ

## ひでとし夫婦道行

こゝにあはれを、地とゞめしは、つるがのしやうにおはします、ひでとしふうふの人々は、天共地共思ひ子の、やよひのまへははかなくも、地すぎにし秋のすゑつかた、むなしくならせ玉ふゆへ、夢のうきよにまぼろしの、身もたへなんとなきくらし、地せめての事に國々を、殘らずめぐりわが姫のござぼだ

いをいのらんとしよしのざいほうふりすてゝ、しよこくしゆ行に、出らるゝ、心の内こそあはれなれ、地其いにしへは我も又ちよぞといはふつるがのしやう、今はあきぢの里と成はづみふしおとはあらちの山をこへ、かい地津のうらよりながむれば、戀しき人にあふみ成、まん〳〵たる水うみに七ツかゝりぎよふがいとなみしがのうら、地むかしながらのめいしよぞと、まのやかたゝに引あみのめにもたまらぬわが涙つらねしうたも身のうへに思ひつゞけてあはれなり、山田やばせのわたしぶね、たれまつもとにうちでのはま、あふさかこへて山しろのめいしよ〳〵をじゆんれいし、我子のためにといのるにぞ、秋のよすがら聲たてゝなくやおしかのつの國や、地なにはのことも夢のうち、しらぬゑんごくはたう迄、みとせあまりのたびごろもくり上ふしきそめて思ひ信濃ぢや、地有明山のそなた成さらな、さとにぞつき三重つき玉ふ是は偖をき、ことは本田の太郎よしみつは、やよひのまへにあひなれ、きのふけふとは思へ共、四とせの月日をおくる身の、おんあいの其中に一子をまうけ、其名をよしすけとつけ玉ふ、ふものてうあいかぎりなくはや三さいに成玉ふ、秋風身にしむよひのまに姫君はおさなきわかをいたはりて、地共にまろびておはします、ことは然る所へひでとしふうふの人々は、とまりさだめぬたびのそら、よを日にそへてわたりを得たるふなばしや、川中島につき玉ふ、とあるいほりに念佛の聲ぞ聞へける、あらしゆせうやと立より、あみどのひまより内見れば、ひころ戀しきよしみつはしぢかく立出玉ふ、夫婦おどろきよしみつ殿にてはおはせぬか、是こそひでとし夫婦成はとの玉へば、本多大きにおどろき、なふ是は是は〳〵、うれいふし是は〳〵はと斗りなり、ことは偖よしみつ申けるは、こはもつたいなき御有樣やな、人をも召つれ玉はずなんじよをこへて來らせ玉ふは、やよひのまへの御事にて候はん、とく此方よりたよりを申べきにゑんいんいたし候、四とせいぜんにやよひのまへ某をしたひ此所へ來られしが、日をかさね今ははやふたりの中になんしを一人まうけ、今三さいに罷成候、たとひ御うらみ候共御ゆるしなされ候へ、四とせが間御たいめんなくさぞ御なつかしく候はん、先々おくへいらせ玉ひ、いそぎたいめ

んおはしませ かんおとしはやとく〳〵とぞ申さるゝ、ことは夫婦の人は聞もあへず、かんことはあゝ是は思ひよらずのよしみつの詞かな、我々夫婦しよじざいほうをふりすてゝ、かくしゆ行者の身と成は、あゝかなしきかなやわが姫は、四とせいぜんの秋のするゑ、ことはなふあゝしかもけふ廿三日がめい日にて候、御身の事をあこがれむなしく成て候ゆへ、すむかひもなきうき世ぞと一すぢに思ひ切、かやうにまよひ出けるが、姫がぼだいをとはんため、其上御身とわが姫とは、生々世々のゑんふかく、今はの時迄御身の事を戀わびむなしく成ぬれば、何とぞ尋めぐりあひ、せめては姫を見ると思ひ、わかれしつらさを語りつゝ、共にぼだいをねがはんと思ひし心かなふ身の、今此所にめぐり來てかくたいめんをいたす事、ひとへに佛の御たすけ、あゝ偖御身を見るにつけ、今一しほ姫が事の思はれて、いとゞかなしく候はと語りすてゝぞ、なげかるゝ、ことはよしみつなをもふしぎをなし、是はきたいの仰かなまさしく此屋に罷在〻、しよせんはやとく御入有て、やよひのまへに御たいめん候へ、夫婦の人は聞召、あらうらめしや一たびしゝたる我姫の何とてこゝに有べきぞ、いろことはさは去ながら若も佛のふしぎにてましますか、たとひへんげのわざにても姫ににたる物あらば、一め見たく候との玉ふ内に、よしみつはおくに入、いかにやよひのまへ、國もとより父母御身を尋來らせ玉ふははやとく〳〵たいめんおはしませ、姫君若もの共まどろみておはせしがかつはとおき玉ふ、夫婦立より、なふおことはやよひのまへか、姫君もあらなつかしの父母や二たび御めに懸る事、ふかうとや成申さん、淺ましやときぬ引かづきふし玉ふ、ことは夫婦あこがれそばにより、なにしにふかうに成べきぞ、一たびむなしく成し身の、佛のりしやうかふしぎやな、此世に有こそ嬉しけれ、なふおき玉へと、きぬ引のけて見玉へば、あらはかなやな姫にはあらずむなしきゑはいにておはします、よしみつも夫婦の人も、是は夢かやうつゝかと、ゑはいに取付いだきつきなふ是は〳〵、うれいふし是はと、斗りにて聲を、なくふしあげてぞなげかるゝ、地やう〳〵心を取なをし、ひでとし夫婦の玉ふは、偖も〳〵我々は、何たるくはこのむくひにて、かゝるうきめにあふことぞや、

いろことはなふよしみつ是はふしぎのしだいかな、姫君がしがいをわが國のぼだいじへおくり、ぶつせんにゐはいをたてをきとふらひしが、是こそぼだいじのそなへ置しゐはいなり、又此小そではやよひのまへが今はの時迄身にまとひしが、あゝ偖ふひんやまつごにおよび、たゞよしみつを戀わびしが、其身はむなしく成ぬれ共、はくは此世にとゞまりて、かりの姿は戀しと思ふよしみつに、そひなれけるこそむざんなれ、おやこは一世夫婦は二世の契り成と、つたへし事こそだうりなり、四とせいぜんにしゝたりし姫は今迄こゝに有、今父母が來りしゆへ、はくれいの姿と成、せんなきかたみを見る事よと、夫婦もろともかきくどきうれいふしうていこがれて、なき玉ふ、ことはよしみつもぜんごをばうじ玉ひしか、むさん成かなおさなきもの、なげきのころにおどろきて、なふ母上樣母よ〳〵と尋ける、よしみついよ〳〵かなしくて、やれよし助こなたへ來れと涙ながらにいだきあげ、やれ御身が母はおことをふりすてゝうつゝときへてなきぞとよ、今よりしては母を尋る事なかれ、よるのふしどにやすむ共、父にいだかれいねよかし、むざんやなおさなきもの、いなやちゝにはいだかれまじ、なふ父上、母はいづくにましますぞと尋したひてこゝかしこ、はしりめぐりてかつはとふしうれいふしなくより外の、ことはなし、地ひでとし北のかたおゝいとをしやおさなきものは、やよひのまへがおもざしに、よくも〳〵にたるよな、おことがためには我〳〵はおうぢやうばにて有けるぞ、母こそ此世にあらず共、我を母と思へやと、なくなくいさめ玉へ共、おさなきものは中〳〵に、おうぢもうばも何ならず、なふ母うへさまとなきさけぶはうれいふしめもあてられぬ、しだいなり、ことはよしみつあまりせんかたなく、ゐはいにきぬ打かけ、やれなげくなよし助、母は是に有けるぞ、おさなき者は悦び、なふ母上のましますかと、父のひざよりかけをりてなふ母上さまといだきつけばゐはいなり、あゝ情なの父上や、母上にてはなき物をとうれいふしあしずりしてぞなげきける、地ひでとし夫婦よしみつも、ぜんごふかくに取みだしうれいふし聲をはかりになげかるゝ、しよじののりふしあはれと聞へける、地ひでとし涙ともろ共に、ことはいかによしみつもは

やなげきて叶はぬ也、あいべつりくの世のならひ、あふはわかれの始め也、がゝるふしぎにあふ事も、ひとへに佛の御はうべん、夢の間の夢の世に、いかでなげきしづむべき、此上は我々も猶々念佛けだいなく、誠の道をねがふべし、なげき玉ふなよしみつ、本多も是に力を得、ふつつと思ひあきらめしが、おさなき者がなげくを見て、たがひにかほを見合せ、おゝだうり也ことはりやと又さめ〳〵とぞなげかる、おやこの人の御有さま、世の中の、物のあはれは是也是成はと皆かんせぬものこそなかりけり

## 第四

かくて其後、ことはすでにことさり其時のみかどをば、くはうきよく天王と申て女ていにておはします、御まつりごとおだやかにおさめ玉ふといへ共、せんしやうのごうぬんにや、にはかにほうぎよならせ玉ふ、然れ共ぎよくたいつねのごとくほとほりさめず、しよきやうせんぎ有て、折ふしはくさい國よりわたりし、きんりやうといふさうにんを召出され、きよくたいの御なやみかんがへ申上べしと仰ける、きんりやう畏てしよでんをしばしかんがへゐたる所に、ふしぎや御てんの内よりもがりけてう一はとび來り、さもやさしくもさへづりて、こくうにこそはの三重とびさりける、御てんに有あふくげ大臣、ことは是はきたいの事共やと色々ふしぎをなし玉ふ、時にさうにんたゞ今とりのさへづりしこと、ごうんふさん六こんふゑとんしそめいとさへづりて候、此義は追討そせいいなさしめ玉ふべし、先ぎよくたいをはうふり玉ふ事御むようにと一々そうし申上る、げつけいうんかく御うらかたにまかせ、ぎよくざをしゆごし御きたう有、がりきん中の御さはぎ何にたとへんかたもなし、是は偖置、本多の小太郎よしみつはひてとしふうふもろ共に、しん〳〵ふかく念佛し、年月も今ははやよし助十さいにあまりける、心のつくにしたがひむなしき母をこひこがれ、ばんしのゆかにぞふしにける、よしみつ枕によりそふて、おことは偖はかなく成し母が事、今にわすれずなげくてい、かへすゞ〳〵もおろか也、もはや此世になき身也、あらざる事をなげかんより、念佛申ゑかうせよ、みら

いは佛のちかひにて、ごくらくにてかならずたいめん申べしと、さま〴〵いさめ玉ひける、地あらむざんやよし助は、父上に打むかひ偖はもはや此世にて、戀しゆかしの母上に、たいめんは叶はじとや、あら淺ましの我身やとうれいふしきへ入やうにぞ、なげかるゝ、ことはよしみつもおうぢうば、やれよし助御身がやうにこがれては、命もさらに有べきか、なげきをとめよと引おこし見玉へば、なむ三ぼういきたへてなかりけり、やれよし助〳〵としがいにかつはといだき付、かゝりよべとさけべとかひぞなき、何と成べき淺ましやとうれいふしうていこがれてなく計り、地よしみつ涙の隙よりも、あゝ偖ふびんや此若が、過しなつの比よりも、地やせおとろへ申せしを、ただゐれいのわざよと思ひしに、偖は母を戀こがれ、命のうするも思はず戀わびて父が事をば思はぬか、あゝ情なのよし助やと、むなしきしがいをおしうごかし〳〵うれいふー我もきいよと、なく斗りげにこと、のろふしはりとぞ聞へける、地あまりの事のかなしさに、佛のおまへにひれふして、くはこしやうより付そひて、あはれみまします某に、歎きをかけ玉ふは、佛も見はなし玉ふかと、ないつくどいつさま〴〵とうれいふしうらみかこちて、なげかるゝ、ことはあら有がたやあみだ如來、誠にたへ成御聲にて、尤也然れ共くはこのごうのがれがたき道のするぞ、まよふ心でなげく也、我ほんくはんの誠には二たびそせいなさしめんと、かゝりの玉ふみこゑもろ共にこくうに、あがらせ玉ひける、かゝりよしみつをはじめ夫婦の人、是はいか成御事ぞや、よし助にわかれなけくうへ又佛にもすてられて、此身のはてはいかならんとうれいふしふかくの涙は、せきあへず、地され共佛の御ほんぐはん、又よし助が身のほとほり、さめぬも如來の御かごと、世にたのもしく念佛申、佛力きどくを待おはします心の、うちこそ三重あはれ也、是はしやばの物語、地むざん成かなよし助は、母の事のみ戀わびて、かりのうきよをはかなくも、地めいどのたびにまよひゆく、うき身は何としでのやま地今ぞはじめてみつせ川、すへはいづくと、しらなみの、こころぼそくも打わたり、地ひろきかはらにびやうびやうと、行道さらにわきまへず、あんかんとしてゐたりける、ことは然る所にやんごとなき、御僧一人來ら

せ玉ふ、よし助見奉り御そばに立より、かんことはなふ御僧さま、こゝはいづくにておはします、みづからはようせうにて、母上さまにすぎおくれ、覺へずあこがれ申せしが夢共なく此所へまよひ來り候、若も母上の御行衞しろし召れ候はゞ、おしへて玉はり候へとうれいふし涙にくれてぞ、おはします、ことは御僧聞召、おゝ偖ふびんのおさなきもの、むなしき母を戀わびて此所へまよひくる、汝は佛のあはれみましますゆへ、此たびはしやばへ歸るぞ、母戀しくはなむあみだ佛とみやうがうをとなふべし、我六たうのゐんだうし、地地ぞうぼさつとの玉ひてすかすふしけすが、ごとくにうせ玉ふ、かゝりよし助心ぼそくもしほ〳〵と、涙にくれてゐたりたり、地猶もあはれをとゞめしは、ことは一天のあるじくはうぎよく天にて、ことのあはれをとゞめたり、いつしかしやばのゐんつきて、めいどくはうせんのたびにおもむき玉ふ、涙を道のしるべにて、よろぼひ玉ふ其ふせい御いたはしきしだいなり、ことはよし助見參らせ、我も母の御事をこがれはてにし身のなけき、一しほあはれいやまして御そばに立より、是はいか成御かたぞや、かく物すごき道のするゐ召つれ玉ふものもなく、まよはせ玉ふいたはしさよ、其時みかど御かほばせをあげ玉ひ、あゝ偖やさしきおさない哉、いか成國の人成ぞ、ことはされば某はしなのゝ國川中島と申所に、本多よしみつが子によし助と申者成か、母の事のみなけく身の、ふりよにまよひ來り候みかど聞召、偖々ふびんの有さまや、ことは偖みつからしやばにてはくはうぎよく天王とて、一天のあるじなり、日比はけいしやううんかくにうやまはれし身なれどもめいどの道とてたれ人か、付そひ來るものもなく地こゝに來りて有けるは、猶此するゐはいかならんとうふれいしぎよいをしぼらせ玉ひける、ことはよし助も天王の、地御しうしやうを見奉りはつみふし共に涙はせきあへず、偖々もつたいなき御有樣やな、さいぜん御僧の來らせ玉ひ、みづからに此度はしやばへ歸んとの玉ひて、行がたしらずうせ玉ふ、某みかどの御供申しやばへ歸り申べし、いざこなたへと申所へごくそつ二人はせ來り、おそし〳〵天王、はや〳〵いそげといふ聲のかゝりいかづちのごとくすさまじくいたはしげもなくひつたて、あゆめ〳〵とさいなみ、行が

たしらすつれ行しはおそろしかりけるしだいなり、ことはよし助此よし見參らせ、かんことはなふおそろしやとばうぜんとしてゐたる所へ、有がたやあみだ如來こくうよりらいげん有、いかによし助汝しやばをさりしゆへ、父よしみつおほぢうば、しうたんはなはだかぎりなく我むかへに來りたり、はやとくそせい致すべし、よし助承りこは有がたき御事かな、しかしたゝ今一天の君くはうぎよく天王とやらん來らせ玉ふを、さもおそろしき物參り、ならくとやらんへしづめんとひつ立つれ行候が、御いたはしきしだいなり、あはれ佛の御ちひに、かのみかどをも諸共に、ともなひかへらせ玉はれと、うれひふし涙をながし申さるゝ、ことはにによらい聞召れ、されば其みかどは生々世々のつみふかく、地ごくにださいせしむるたすくるけちゑんなきぞとよ、よし助承りむざいごうふかきゆへ地ごくにしづみ玉はんが、何とぞ佛の御ちかひに、御たすけ候へと涙をながし申ける、佛かんじ玉ひ、偖々汝はおさな心にじひふかきしよぞん哉、さすがよしみつが子程有、ふかき心をそむくは我ほんぐはんむなし、叶はぬ迄もゑんわうにことはつてたすけ申べし、かゝりいざこなたへとの玉ひて、よし助と諸共にゑんまの、てんへぞ三重らいげん有かゝりかくてゑんま王ぐうには、十五十たいあきらかに、ことはきよくざにうつらせ玉へば、くしやうじんさゆうに立、こんさつてつさぜんあくのあさきふかきをたゝし玉ふ、然る所へごくそつ共、みかどをひつ立ていしやうに引すへ、なんゑんぶしう大日本のあるじ、くはうぎよく天王と申惡人召つれ參り候と申上るゑん王はつたとにらませ玉ひ、汝しやばに有し時身のゑいぐはにごせをしらず、地獄極樂も、こんじやう一たんと打やぶり、月ごとのさい日に佛くやうの心もなく、しきしやうこうみそくほうの六ツの道におこりしざい、たとへがたき惡人なり、しゆごう地ごくにおとすべし、ごつそつ共承りあらけなくひつつかみ、ほのほの中へなげ入しはめもあてられぬしだいなり、ことは然る所へ有がたやくはうみやうかくやくとてらし、あみだ如來よし助もろ共らいげん有、ゑん王も十王共に、ことゞくぎよくざをたつてがつしやうある、時に佛の玉はく、日のもとのあるじくはうぎよく天王は、生々世々のつみふ

かく、悪道だざいの人たり、然るに其人をへんしが間くげんをやめてたび玉へ、ゑん王承り、かれは大悪人ゆへ、只今しゆごう地ごくへしづめ候、それ〳〵少の間引出し佛の御めにかけ奉れ、ごくそつ畏てこつぼう取のべほのほの中をかきわけ、さしつらぬき引あぐれば、たゞやけずみのごとく成を、大地へどうどなげつけ、くはつ〳〵ととなへければ、たちまち地天王となり玉ふ、あはれ成けるしだいなり、ことは時に如來の玉はく此天王は悪ごうさかんにしてせんの心なき人なれば、悪しゆにたざいれきぜんたり、然れ共我はうべんを以てかれが悪心たちまち地善心とてんじ、まつせの衆生のけちゑんなさしめん、此度はそせいなさせ玉へとの玉へば、ゑん王さき立て佛のきんげんゆはい申はもつたいなく候へ共、此天王は一生の内、佛みやうとなへしこともなく、じひぜんごんはかりにもなし、たゞちうや悪ごう計りつみかさぬる大悪人にて候へば、御りやくにももれ申さん、すておかせ玉ふべしと、たつてしたいぞ申さるゝ、其時よし助おとなしくもゑん王に打むかひ、何かどのざいふかくまし〳〵て御たすけ成がたく候はゞ、みづからを替りに是に殘し置玉ひ、天王様をしやばへ返し玉はれや、いかんとなれば一天のあるじ、此君そせいましまさばはんみんの悦び、又みづからはしやばに有てもかひなき身にて候へば、みかどのくげんに替り申さば、しよにんのため身の悦び、はやとくかへして玉はれと思ひこふでぞ申さるゝ、ゑん王聞召、やさしくも申たり去ながら、かうげひんふくはしやば一たん、めいどの道に王もなし、たつときいやしきにかぎらず只善悪をわかつなり、汝が父のよしみつはつねに如來をたつとみ、念佛ふかくしゆするゆへ其くどくはうだいにて、汝もまた悪道におとすべきゑん少もなし、又此天王はしん〳〵しごくの悪人なれば、如來の御ちかひも叶ひがたしと、大きにいかりの玉ひけるはなふにが〳〵しくこそみへにける、ことは其時天王よし助に打むかひ、偖も偖も御身は佛のちかひにあづかりて、地めでたうそせいし玉ふかや、我はざいごうふかくして、かくおそろしき地ごくに殘る、おことやさしくもちんをたすけん心ざし、かへす〳〵も嬉しけれ、しやばへ歸り候はゞ、はやく都へ上りつゝ、くぎやう大臣に此有

様を語りきかせ、跡とふらふてくれよとて、ねんごろに申てたべ、あゝうらやましのよし助やとうれいふしふかくなげかせ、玉ひける、時にゑん王よしなき事にじこくうつる、はやと、地ごくへださいせしめよ、ごくそつ承りすでにみかどをほのほの中へおとさんとす、時に如來しばしとおしとめ玉ひ尤なりことはりや、然れ共此天王はぢやうごうならず、あまり悪ごうつもるゆへ我はうべんにて、まつせの衆生さいどのため、かくのごとくひごうにおとす、其うへよし助四おんをおもんじ、身がはりの心ざしもせつなれば、此上は天王の替りに我地ごくへださいせん、すみやかにみかどをゑんぶへ返し申せと、あらたにきんげんまし〳〵て、ほのほの中へとび入玉へは、みやうくはへんじてりやうふうと成、しやうれんげにすくひ奉るはなふ有がたかりけるしだいなり、みかどあまりの忝しけなさに、しん〳〵ふかくなむあみだ、佛〳〵とかうじやうにとなへさせ玉へば、かゝりさしもにあらきゑん王、十わう十たいくしやうしん玉のかふりをかたふけ、一念ほつきぼだいしん、かく有がたき念佛のきやうじやとならせ玉ひたるみかどをば、地ごくへおとさん事もつたいなし〳〵、とくとくしやばへ返し玉へと、かゝりの玉ふと其まゝに、まのあたりこと〳〵く地ごくやぶれてしやうじやう成、じやうどと成げに有がたきしだいなり、然る所へ、かゝりこくうにおんがく聞へ花ふりくだり、ゐきやうよもにくんじ、しうん一むら立來る、ことは佛はみかどよし助をいざなひ、いそぎしやばにかへり、ぼだの道をすゝめんとかの雲にせうじ玉へば、みかども共によし助も、如來のさゆうにいざなはれ、雲にせうじおはします、一しやうふかしぎ念佛の、くはうたいむへんのくりきにて、悪しゆのなんをまぬかれ玉ひ、ふたゝひそせいおはします、みたてうせの大ひぐはん、有がたし共中〳〵申、計はなかりけり

## 第五

かくて其後、ことは都だいりにはみかどほうぎよならせ玉へど、うらのおもてにまかせ日夜しゆごしておはせしが、三日と申たつの一てんにみかど御夢のさ

めたる心地にて、よみがへらせ玉ひける、きんちうの御悦びたとへんかたはなかりけり、ことはしばらく有てみかどりんげんなされけるは、ちんすでにしやばをさりめいどくはうせんのたびにおもむき、しゆごう地ごくにださいせしを、ふしぎのゑんにてそせいす、それに付しなの丶國川中嶋、本多よしみつ其子のよし助、かれ両人を尋出しいそきさんだい致べし、はやとく〳〵とのせんじなり、中なごんゆきさだきやう、かゝりせんじのおもむき承りはやしなの丶國へぞ三重いそがる丶是は偖置、ことは大じ大ひのみほとけよしみつがぢぶつだうへいらせ玉へば、よし助やがてよみがへりおの〳〵悦びかぎりなし、去程に都よりちよくし來らせ玉ひ、よしみつにたいめん有、せんじのおもむき相のべ玉へば両人お請を申上、忝じけなき御事と、かゝり悦びいさみそれよりもやがてちよくしと打つれだち都を、さしてぞ三重のほらるるきんりになれば、ことはゆきさだの卿先立てかやうかやうとそうもん有、其時みかど忝くもぎよれんを高くまきあげさせ、親子の者をゑいらん有、いかによし助めづらしや、汝めいどにてたいめんせし時、ゑん王のまへにてちんが替りに立て、地ごくのくるしみをうくべしとなげきわびたる心さし、生はかはるとわするまじ、其上佛の御ちかひにて、二たびしやばにかへし玉ふも、ひとへに汝らがかげなり、ゑいかんのあまりにぎよいをしぼらせ玉ひける、ことはけいしやううんかく諸共に、皆かんるいをぞなが さるゝ、かさねてのせんじには、いかによしみつ、何たるしゆくせんにて汝おやこの者共は、佛の御じひにあひ奉るぞ、しさいを殘らずそうもん申せとのせんじなり、よしみつ承り、畏てなにはのいそべよりもり奉りて今迄の次第、いさいに申上ければ、みかどゑいぶんまし〳〵て、偖々有がたき御事や、さやうに成御れいぶつおろそかにしては叶ふまじ、いそぎみだうをこんりうし、まつだい迄も念佛の、せうこにあがめ奉らん、先よしみつおやこの者はしなの國にて八百町下さるゝ、偖みだうこんりうのじせつはちんもぎやうごうなし奉り、御れいのためはいし申さん、とく〳〵ようゐ仕れと、御れんにゐらせ玉ひければ、くぎやう大臣いさみをなし、かゝり六ゐの臣に仰付られ、山々にそまを入、かちばんじやう、

ふしんけんごにしなの丶國、川中嶋に、みだうこんりう有けるは、有がたかりけるきほひ三重しだいなり
偖大がらんさうぞくの、ち引の右はしらだて、むね上さま〳〵いはひごと、ことはた丶みのたうりやうそくたいの、それ〳〵のおしやうをちやくし屋のむねにあがり、しよてんじん地じんしゆごじんちしゆごじんへ、そなへしみきを奉り、偖日本の御神のこらずなふじゆまし〳〵て、みだうあんをんならしめ玉へと、めでたきむねのつちのおと、ちやう〳〵と打おさめ、かゝり偖屋のむねにそなへたる、いはひのもちいとり〳〵に、きせんくんじゆの其中へ、花めづらかにまきにける、ぎしきの程こそ三重ゆ丶しけれ、かくて其後、かゝりみたうのふしんけつかうに、いらかを見がき出來す、すでにわたましあるべきと、忝くも天王は、けいしやううんかく、もろ共に、ぎやうがう、有こそ三重有がたけれかゝりおんごくはたうのらうにやくなん女、袖をつらねてさんけいす、かくて如來のみづしをば、ないじんふかくうつし奉り、七ぢうのみちやうをかけ其外てんがいはたけまん、百八のとうみやうは天もか丶やく計りなり、ことは其時みかどはぎよくざを立て、佛前にあんざまし〳〵て、偖々有がたきじせつに參りあひ、か丶るたつときみほとけにあひ奉り、めいどあくしゆにしづみしを、たすけ玉ひて佛道に、みち引玉ふ御ちかひ、有がたきみのりかな、此度のごしやうあんをんにごくらくじやうどへむかへさせたび玉へ、なむあみだ佛との玉ひてす〳〵ふししばしらいはいなされける、かゝり然る所へふしぎやな、のどか成ける雲まより、天人やうがうまし〳〵て、ことはみかどにむかひ奉り、心にねんずる佛のざ、あたへて歸る西方の、一たびふんじんふかとくの、つげを待へて歸り玉へと、ひかりか丶やく玉のざを、みかどのおまへにそなへ置、いかによし助みづから誠は御身が母成が、よしみつしんじんふかきゆへ、父母諸共佛道のゑんにひかれて其くどく、身にうけてみづからも成佛す、西方ごくらくじやうどにて、親子三人諸共に、さとりのたいめん致べし、いよ〳〵念佛けだいなく、如來をたつとみおはしませ、かゝり是迄成との玉ひて、しまわうごんの姿をげんじすかすふし雲ゐはるかに上らる丶、かゝりよしみつ親子おほぢうばかんるい袖をしぼら

る丶、ことは其時みかどよしみつに打むかひ、ちんすでにくはんかうせん、御いとまごひのため今一度佛をおがみ奉らん、それ〳〵とのりんげんなり、かゝり畏て佛前に立かゝり、七ゑのみちやうをしだい〳〵に三重まきあくるみかどをはじめ奉り、きせんくんじゆのらうにやく男女一どにばつとぞかんじける、ことは時にみかど佛前に向ひがつしやう有、誠にちん此所にとゞまり、かゝるたつときみほとけを朝夕ねんじ奉らば、身の悦びに候へ共、ばんみんの爲なれば、都へくはんかう仕る、ごせをたすけてたび玉へ、ひとしほ御なごりおしく候と、ぎよいをしぼらせ玉ひける、ことは時に如來、みめうたへ成御聲にて、わかれをおしむ心をかんじ、明らかにらいりんす、一たいふんじんのつげをまつ、其けいやくにぢさんせよと、の玉ふとひとしく如來ゆるぎ出させ玉ふ、かゝり誠に西方ごくらくのあみだ佛の御ないぢん、こもらせ玉ふ御そんよう、げにもたへ成きどくなり、ことはみかどあまりのたつとさに、偖も〳〵みやうがなやと、偖ないぢんを御らんずるに、よしみつあんちの御佛は、みづしの内におはします、今迄あらぬ御そんよう、ぶんして出させ玉ひしはふしぎといふもあまり有、かゝり偖天人のぢさんせし、玉のたいざに御佛をすへ奉り、ことはないぢんの御ほとけと今此二佛をおがむにぞ、すこしもちがいはましまさず、それよりもみかどは、ぶんじ玉ひし御佛をちやうだい申くはんかうある、今のらくやう如來寺のほんぞん是也、かくてよしみつその名をしがうとさだめせんくはうじとかうしちうやねんぶつけだいなし、ぶつほうはんじやうありがたしともなか〳〵申計りはなかりけり

善光寺終

# あこぎの平次

## 第一

さても、そのゝち、ことはいせのうみにあこぎがうらにひくあみも、たびかさなればあらはれぞする、そも此ゑいかのたいがいをいかにとたづねもとむるに、にんわう四十九代くはうにんの御よにあたつて、たんばの國あまだごほりのぢうにん、山ぶきしやうげんたかのぶはきんがうをうちしたがへ、あまたのこほりにじやうくはくをかまへ、地一かちうぎゞどうどうとしてをくりかたを、ならぶるものもなし、ことは偖いゑのしつけんには、あら川だてゑもん時とを、むらかみかげゆのすけゆきはる、此ゆきはるはきよねんちゝにおくれしゆへ、じやくねんなれ共げんぶくし、おやのゆづりを取おこなふ、さいちきりやうのじんたいなり、ころはほうき四年菊月下じゆんの秋のたや、地かりほすいねもいつのまに、たはらかさねて殿さまへ、御ねんぐおさめとざゞめいて、ことは御りやうないの百しやう共、ぎうばになうまい付大手の口にいちをなす、其時じやうないよりだてゑもんかげゆの介大手の口迄出給ひ、百しやう共に打むかひ、おゝたいぎ〳〵、たうねんはいつ〳〵より五日の風十日のあめが下、まづ十ぶんの世の中ちんちやう〳〵、いそいでおくらへ おさむべしと、地かんぢやうにんにいひわたし、みくらのとびらをしひらけば百しやう共は我さきにと、むら〳〵のはたじるし、ことは是はそんじやう其むらとたからによばはりて、はるかにひろき大手より、地すまんのたはらをはこびしはにぎはし、かりける、大三重しだいなり其日もすでにたそがれ時、おくらおさめの御ねんぐも、殘りなくおさまれば、ことはかげゆはあら川にむかひ、先もつて御ねんぐまいつゝがなくおさまりて、一しほめでたく御ざ候、某は御前へ出御きげんをうかがふべし、御じぶんには御くらうながら御くらをとくとしめさせ、あとより御こし候へと、地れいぎをのべてゆきはるは御せんをさしてぞあがらるゝ、ことはしかる所へしづのおの二人、ほうかぶりにてかほをつゝみ、地あさのころもを身にまとひ、たはらおふせしうしのつなしづかにおふて來りける、

ことはだてゑもんきつとみて、やあ、それへくるどみんばら、みればなうまいとみへしが大手口におろしもせで、御じやうない迄うしを引こみあまつさへ日くれにおよんで來るは何事ぞ、今日のなうまいは殘らずかんじやう相すんだり、明日さう〳〵もちて來れと、ことばきびしくとがめられ、二人おくするけしきもなく、いや我々はかげゆの介さまの御存のもの共也、かげゆさまにおめにかゝりかへりたく候と、じやうないさしてゆく所を、あら川あとへ引もどし、聞わけもなき百姓めら、かげゆの介計が此くらのしはいするか、かくいふ某はだてゑもんとて御くらの事は偖置、一かちうはたてふとふせふと我しだい、いらざるうぬらがかげゆよばはり、いそいであとへ立かへれと二人をとらへほうかぶり引ちぎれば、二人共に女也、あら川あんにさうゐして、おのれらは何ゆへおつとにはさまをかへしと、よく〳〵みればこはいかに、一人はお姫さま、一人はめのとなり、こはけうがる御ふぜいと、地たがひにかほを見あはせて手もちぶさたにみへにけり、ことはあら川打うなづき、ゑゝがつてんたりすいしたり、偖はぬれをやらせらるゝな、きこへたり、此たはらはなうまいにてはあらずして、かげゆをつりだすつりばりよな、人こそおほきに此時とをが見付しうへは、もはやぬけてもぬけさせじ、兄殿さまへ申上御れうけんにまかせ申さん、とはいひながらお姫さま、さりとてはきよくもなや、某日ごろ心をかけ、一めいをなげうつてとやかう申上つるに、つれなきおことば計にてかへつてじめんをあたへ給ふ、今にても御心しだい、わが心にさへ入給はゞ、只今の事共はおんみつにいたし申さん、いやかおゝかの御へんじを、はやうきかんと御袖にむつれてぜひにくどきける、ことはちか姫はつとかほ打あかめ、なふはしたなのいひ事や、げにや戀ぢのならひにてたかきいやしきかぎらね共、思ふと思はざりつるとあひゑんきゑんが有物を、にくふていやとは思はねど、はづかしながらはじめよりかげゆの介に心をよせ、地とけぬ思ひはみだれがみいひかひなくは思へ共、地是も世上に有ならひ、ことは御身の戀はかなふまじ、ふつ〳〵思ひ切てたべと、地さはりさはらぬ御ことばに、ことは時とをさらに聞入ず、此上はいつ迄もおゝと仰の有迄はと御手

をとればふりはなち、又取つけばつきたふし、はぢしめらるれど時とをはなをしなだれてぬれかゝる、ことは所へかげゆ立歸り、やあ御倉のまへにて何ものなればたゝずむと、とがむることばに時とをは、はつとひいてとうわくし、かなたこなたとうろたへまわり、くらの内へにげこんで、内よりとびらはたとさしためいき、ついでゐたりけり、ことはかげゆいよいよあやしみて、何やつなればへんじをせぬと、姫をひしととらへ、御かほをきつとみてはあ、是はととびしさり、めいわくさふにうぢ〳〵ともみ手をしてこそゐられけれ、ことはちか姫御らんじ何御身はかげゆの介なふつぼねあれ見給へ、偖々いんぎんらしいていかなと、つか〳〵と立よりかげゆのせなに打もたれ、ことはゑゝ戀しらずどうよく人、思ひ〳〵てみづからが日比おくりし玉づさの、一どのいなせも涙川、君ゆへしづむわが心、あはれをくみて給はれと涙ながらにの給へば、ことはかげゆわぢ〳〵身ぶるひし、こはもつたいなや姫君の、かゝるいやしき御すがた、人めもいかゞ候へばはや〳〵おかへりなさるべし、某ふぜいにもつたいなしとつゆせういんするけしきなし、めのと見さらせ、是申かげゆ樣、かく計姫君の御たいせつに思召、兄樣のめをしのび是迄御出候に、つれなき今の御返事や、此戀かなはぬ物ならば二たびおへやへ歸らじと思ひ切てましますに、御心にしたがひ給へとことばをつくして申ける、ことは其時姫君只今めのとがいふとをり、返事しだいにしあん有かげゆいかにとの給へば、はてぜひもなし此上はあすにも殿へもれ聞へ身はいかやうに成とても、仰はもれじと申されば、姫君うれしく、それでこそ本望なれ、しからばいつ〳〵の夕さりがたこなたよりもたよりせん、かならずあふせのけいやくと、たがいに手に手を打かけてとちうのゑんこそふしぎなれ、ことはめのと此よしみるよりも、うしに付たるたはらより御小袖うすぎぬ取出し、誠に戀には身をやつせとよくも申ならはしたり、地いざおしやうぞく召給へと其身も、共にぬぎかへて、地人めもいかゞお歸りと、御供申て立かへれば、ことはさいぜんよりだてゑもんくらの内にて聞すまし、くらのまどよりさしのぞきこりや〳〵かげゆの介、もつたいなくもお姫樣をそびき出し、ふぎをはたらくりよぐ

はいものせうにんは此だてゑもん、後日のためにことばをかはした、おぼへてゐよとよばはれば、かげゆおとろきなむ三ぼう、侍みやうり是迄と、じがいとみゆるを姫君あはておしとゞめ、ちつ共きづかひし給ふな、さいぜんより時とをがわらはにふぎをいひかくれど、其戀かなはぬへんねじにおのわるがうを聞てたべ、かげゆ聞もあへず、偖はさやうに候か、ゑゝおのれ人でなし、只今是へ引出し打てすてんはやすけれど、あつたらしき御からう殿にやいばをあてんもいたはしゝ、ゑゝくつきやうのしあんこそ、此とびらにぢやうをおろし、四五月も此内にてたいくつをさせ申さんと、ゑびぢやうをぴんとおろせば、時とを内よりこゑを上、なふ是かげゆ殿、今申せしはしんじつには申さぬなり、こゝをあけて給はれと大ごゑ上てよばはれば姫君めのとおかしくて、いはれぬ事をいひ偖よいなりのとわらはれて、はぢしらずのだてゑもん、まつびら御めんとわなゝけば、かげゆ立よりとびらをひらき、お侍のきよごんはあらじ、お歸りあれと申さるれば、時とをおづ〳〵立出て、申お姫様、只今某申せしをかならずおきにかけられな、わるい時は有ならひと、いひすてにして行所を、かげゆしばしと引とゞめ、いよ〳〵さいぜん申とをりいごに此事あらはれば御じぶんをあひてにいたすぞ、あれまだくどいといひすてゝたがひにわかれて三重立かへる偖時とをは、ことはわが戀かなはぬ其上にかげゆにぢめんをあたへられ、むねんいやましこらへかね、大將たかのぶの御前に出、偖もかげゆの介行はるは君の御めがねをかすめ、御妹ごちか姫様をそびき出しふぎをはたらき候を某たしかに見とゞけ候、此事打すておかせ給はゞ、世上のひやうぎも口おしゝ、只姫君にとがはなし、ともかくもかげゆの介義を仰付られ候へといこんをふくみざんげんす、將げんりつぷくかぎりなく、ごんごだうだんのしだいなり、先々姫がめのと、はやとをめせとの給ひてをくりやがて、つかひを立らるゝ、何事やらんとはやとの介、御前に參上す、ことは將げん御らんじいかにだゞ秋、汝を姫に付をくは何のためぞ、よくも姫にふぎははたらかせし、おのれきつといひわけせよ、さなくば其ざをたゝせじと、たちに手をかけの給へば、はやときもをけし、こは御上ゑ共おぼ

へぬ物かな、姫君様にふぎ有とは何人が、申上候といへば、時とをざを打ていふまい〳〵はやとの介、姫君にふぎ有とは某が申上たり、かばかりの一大事をめのとをかうぶる其身として、しらぬといふて一ぶん立か、あのうろたへ侍がとあつこうすれば、はやとの介たちのつかに手をかけて、やあら川殿、とかうの事はおつてのせんぎ、うろたへものとは聞にくし、いぬたかとてもはうばいならずや、八まん御身がしつけんがほ見たくをりない、さあ今一ごんいふて見よと、とびかゝらんとする所を、人々是はと引とゞむ將げんいかつてやあはやと、おのれがおちどをおしかくしわがまへ共はゞからず、すいさん千万手うちにと思へ共、かたなけがし此上は、七生迄のかんだうぞ、あれ引立よとの給へば、はやと涙をはら〳〵とながし、はあさましや日比はちりよ有大將なれ共、ねいじんにきをうばはれ、御家のめつぼうとをからじ、よし〳〵かゝる世に有て何を頼みにぶゆうをはげまん、是迄なりといふまゝに、さしぞへぬいてもとゞりはらひ、いとま申と其ざより行がたしらずに成にけり、ことは大將大きにはがみをなし、かげゆをめせとの給へば、時とをこゝは大事と思ひ、仰にては候へ共、御いもうとごのあくみやうはまつだい御家のかきんなり、某の存るには此御せんぎはさしおかれ、何とぞかげゆになんだいを仰付られせつぷくいたさせ候はゞ、お姫様もつゝがなくことおんびんに候はんと誠らしげに申にぞ將げんげにもとどうしん有、しからばない〳〵聞およびし、かげゆがひさうのひれう丸といふたちを所望せんにいなといはゞそれをつみに取ておとさん、地此義よろしく候はんとかげゆが、たちへつかひ立、今やおそしと待所に、ことはかゝるたくみとゆめにもしらでかげゆの介は、ぢうだいを取もたせやがて御前へ出らるゝ將げん見給ひ汝をよぶ事よの義にあらず、かねて聞つたへしめいさくを某望に思ふ間、いそいで我にさし上よと、詞もいまだおはらざるに、時とをすゝみ出、偖々めいさくは持べき物、殿様の御所望とはねがふてもなき所、さう〳〵さし上候へと、そばからいはれぬ付やきば身より出たるさびとかや、ことはかげゆすいりやうせしか共さあらぬていにて、あら川殿の御取なし、近比しうちやくには存れ共、

おやせんぞよりつたはりて某迄は七代、一代に一どならではひけんのならぬたちなれ共、ぎよゐおもきによつて是迄はぢさんせり、御所望と有だんはまつぴら御めんかうぶらんと、しきつてじたい有ければ、時とをいよ〳〵かつにのり、こはあたらしき一ごんかな、たち刀をたしなむはたゝかひをはげまんため、一代一どのたちならば、何のやくにか立申さん、先其たちをはいけんせんと、ゐたる所をずんと立、かげゆにしきのふくろよりくだんのたちを取出し、さいぜんもいふとをり、ひれう丸と申にはいはれ有たちなれば、おろそかに見給ふなと、時とをにわたさるゝ、あら川うけ取なんのいはれか有べきと、いひもあへぬに此たちおのれとぬけ出て、ひれうのごとくひら〳〵と、其ざをひらめきまはりしはすさまじかりける三重しだいなりさしもの大将はじめとし、時とを殘りの侍共、皆々其ざにたまりかね、おくをさしてにげ入れば、くだんのたちはひら〳〵ともとのさやにぞおさまりける、ことはかげゆうれしくをしいたゝき、やあひけうなり時とを殿、とくと御ひけん候はで、いづくへしのびましますぞ、こともおろかや此太刀はゆうりやくていより相つたはり三ごくふ二のめいさくをけんゐをもつてとらんとは、思ひもよらずおよびなし、忝くもひだりには、正八幡のぼしすはり、右にはくりからふどうの姿あくまかうぶくをんできたいさん、いとま申てかた〴〵とわがやをさしてかへらるゝ、誠に一しよけんめいの、あやうきなんをのがれしは只此たちのゐとくなり、こゝんきたいのめいさくやと上から下にいたる迄みなかんぜぬものこそなかりけれ

## 第二

さるほ、どに、地山ぶき將げんたかのぶは、ことはかげゆがたちにきをとられ、行春打べき手だてさへ思ひの外にしぞんして、いよ〳〵りつぷくかぎりなく、御いもうとちか姫をよび出し、偖々おのれにはいか成天まが入かはり、あのいやしき行春に何とてふぎはなしけるぞ、我家のつらよごし只今手にかけ打てすつるぞ、かくごせよとの給へば、姫君おくするけしきなく、こは思ひもあへぬ仰かな、我身にふぎの候は

ばともかくも成申さん、それにはせうこばし候かとあれば、たかのぶ聞給ひ、おゝせうこ迄もなし、だてゑもんがちきに見たる此上はのがれはあらじとの給へば、姫君かさねて、何だてゑもんが申せしとや、ゑゝはら立や此上は何をかつゝみ申べき、かね〳〵あの時とをがみづからに心をかけ、たび〳〵ふみをおくれ共、いふても久しきからうやくおみゝに立じと思ひしに、其戀かなはぬはら立に、とがなきかげゆとみづからとみつつうと申せしかや、時とを召よせ今一ど、とくとせんぎし給はれと涙にくれての給へば、ことはたかのぶ聞給ひ、何と其詞にいつはりなきか、時とをがふみを付しは誠成か、其時めのとつつと出、しよせん誠かいつはりはこよひにてもお姫さまより時とをへおとづれあれば、さつそくしのび申べし、それをせうこに御せんぎといへば、たかのぶとくと御しあん有、しからばひそかにはからふべし、皆々をゝへとの給ひて打つれおくにぞ三重入給ふすでに其日も、地くれしかば、うつゝなくもだてゑもん姫君よりのおとづれに、ふはと打のるこひかせは、地わが身ながらもぞつとして、うすぎぬふかく引かぶり、姫君の御ねまへしのび入こそあやうけれ、ことはかねてあひづの事なれば、めのとのこがうつゝと出、なふおそやさいぜんより待わびて候に、おとせでこなたへ〳〵と、姫君のふし給ふ、一まの内へ手引して、しつぽと口ばせ給へやと其身はかつてへ入にけり、ことは時とをはうすぎぬ取、びやうぶ引のけみてあれば、ともしびほそくそむけつゝ、地らんじやのかほりたきしめて、よるのゑもんを引かづき、ゆたかにふさせ給ふてい、たとへいか成あらゑびすも心たゆたふ計にて、ことはさしもの時とをむねとゝろき只わち〳〵とぞふるひける、され共心をおとしつけ、姫君の枕により、いつ迄心をおかせ給ふぞ、誠にあけくれ戀こがれちづかのふみを參らせしに、御返事もなかりしゆへ、うらみは君に有そうみのふかきかくごをきはめしに、こよひしのべの御しらせ誠とさらに思はれねど、せめてはゆめに成共と、是御らんせよ時とをが女のていにさまをかへ、是迄しのび參りたり、今はなさけのおことばに、あづかりたふ候と思ふ入てぞくどきける、ことはされ共とかうのいらへなし、時とを今はたへかねて、うへ成きぬを

引のくれば姫君にてはあらすして主人たかのぶにておはします、時とを何共せんかたなくすご〳〵と立のきてあたまをかいてぞゐたりける、ことはたかのぶ御らんじいや是御からう殿、けつかう成有様や、かずならぬ某ふせいのいもうとに御心をかけらるゝだん、忝しとや申さん、又ぶさほうとや申べき、かやうのふぎはおしかくし、ゆへもなきかげゆの介をこゝろさせんとはしけるよな、おのれ何共おこなひやうのない悪人めと、たちに手をかけ給へば、時とをまなこをはつたといらげ、何と下人が主へ心をかくるが是がうきよにないならひか、今迄こそ主と思ひてかんにんしつ、もはや今が百年めと、ぬき打にてうど切、たかのぶはつとぬき合せ、打あはさんとし給ふを、たゝみかけて打程に、ことはいたはしやたかのぶはやいばの下にふし給ふ、おつぎにふしたる侍共たちおとにおどろき、我も〳〵とかけ出る、時とをたちをふりまはしおのれらあしくよつてけがまくるな、たかのぶは悪人ゆへ某が手にかけたり、おのれら我にくみせぬと一々になぎたふすと、たちひらめかしとんでまはれば、たれかはいぎにおよぶべき、皆時とをにぞくみしける、ことは時とをみておゝしんべう〳〵、先たかのぶがしがいをかたづけおけやとて、おくをさしてぞ入にける、姫君かくと聞よりも、長刀ひつさげ出給ふを、ことはめのとすがりおしとゞめ、ゑゝこは何事ぞお姫さま、兄上の御さいごは申てもかへらぬ事、此おこりは何事も御身さまより出ぬれば、かへつてとりことならせ給はん、一まづこゝをしのび出、じせつを待て兄うへの、かたきをうたせ給ふべしひらに〳〵といむれば、ことはいやとよめのと兄うへをみづからゆへにころさせて、へんじもながらへあられふか、たとへ女の身成共せひ一たちとかけ出給ふを、さま〴〵にとめ申、うら道より御手を引、かげゆが方へとおちて行心のうちこそきほひ三重たのもしき、偖其後に、ことは時とをは姫君おちさせ給ふと聞、さだめてよかたへはをちゆかじ、かげゆが方へ行つらん、ついでにおしよせてかげゆめにはらきらせ、姫をうばひ帰らんに、馬にくらをけものゝぐせよ、時をうつすな汝らと、手せいかりせい百五十きあまだの城を打立てゆきはるやかたへきほひ三重おしよするさる程に、ことはゆきはるはきのふ

大將の御前にてあやうきなんをのがれ出、立かへれ共おちつかず、いかゞと思ひゐる所へ、姫君めのとあはたゞしくかけ來り、をくへつゝと入給へば、行はるおどろきこはさう〳〵しき御ふせい、きづかはしやと有ければ、めのと右のしだいをかたり、殿のうたれ給ふゆへ姫君是までいらせ給ふと、いひもはてぬにかげゆの介、何殿樣は御さいごとや、偖しなしたり〳〵ととはうにくれて、みへ給ふ、しかる所へ時とをは、一どにどつとよせ來り、ことは時をどつとぞ上にける、かげゆ一けはきもをけし、上を下へとかへしける、され共かげゆかひ〳〵しく、先姫君をしのばせ申、其身かるげに身じまひし、けらい共に打むかひ某しばしふせがん內汝らはやくものゝ〳〵せよと、かのちうだいのひれう丸、ゆんでのわきにかいこみ、大もんひらかせ切て出、ことは只今是迄よせたるは天めいしらずのあら川ならん、をのれはしゆをうち奉り、天に上り地に入共其つみやはかのがれんや、某が手にかけてみらいのくげんをかけさせん、じんじやうにせうぶをせよと、二王立にぞたゝれたり、時とをこまかけよせ、ゑゝ何さいふはかげゆの介か、くはんたいすぎたるざうごん、それ侍はな、しゆをころしおやをも切て國こほりを切取がぶしのこのむ所なり、ことにおのれにはせんじつのいこん有、命おしくは姫をわたしやしきを出てかうさんせよとさもにくていによばはつたり、かげゆ聞て何と申ぞ、先日のいこんとはくらの內へはひかゝみ、某に出あひて手をすつてわびたるをむねんに思ふは尤なり、いで〳〵むねんをはらさせんと、ちうだいのひれう丸まつかうにさしかざし、くもでかくなは十もんじ、あたる所をさいはいにはらり〳〵と三重なぎ給ふかたなは名におふつるぎなり、ゆきはるはがうのぶし、此たちさきにあたるものいきて歸るはなかりけり、ことは時とをしきつてざいふり上、ゐとれゐとれとげぢすれば、すきをあらせずゐかくるやに、ことはかげゆたまらず立かへり、はしつてもんをちやうどさし、いかに汝らとてもせうりかなひがたし、某やかたをまくらにして打じにせんはかくごなれ共、さあらん時はたれ有て姫君の御せんどを見とゞくるものもなし、かなはぬ迄も姫君を御供申おちゆかん、其まにすいぶんふせぎぬけ、跡より來れと有

ければ、さすがかげゆのけらいとて皆一どうにことばをそろへ、何がさて命かぎりに切じに仕らん、はや〳〵おちさせ給ふべしとことばすゝしく申にぞ、おゝでかしたりかた〴〵、めのとも一所と思へ共、女中二人はあしまとひ、跡より同道して來れと、其身に立やをかなぐりすて姫君の御手を取うら道さしてぞをちらるゝ、じこくうつればかたきのせい、大もんをおしやぶりおめきさけんでみだれ入、やかたのつはもの十七口、口口さらずにはたらけ共、大せいに取こめられ皆こと〴〵く打じにす、かたきはかつにのり入のりこみ、ことはこゝかしこと尋れ共、姫もかげゆもみへざれば、偖ははやおちつらん、さあおつかけよ汝らと、たにをわけみねをこへかげゆをしたふてきほひ三重おつかくるさる程に、ことはかげゆの介ふかでの上に女づれ、心計はいそげども、あしよはぐるまのちからなき身の成はてぞ、あさましき、ことはやう〳〵にげのび山かげのあんじつを見付つつ、まづ〳〵あれへ立こへて何とぞかげをかくさんと、いほりの内へつゝと入、御めんといへばあるじの僧、たれ人成ぞと立出るをみれば、姫の御めのとはやとの介入道なり、たがひに是はとはしりよりさき立物は、涙なり、かげゆ右のしゐうをかたり、さだめておつてかゝるべし、我事はともかくも姫君様をかくしてたべ、はやと〳〵と有ければ、はやと入道聞もあへず、さこそあらんとおぼへたり、成ゆかん世をみんためにわざと國のかたはらにためらひてゐたりしに、あんにたがはぬしあはせかな、御身は中々に其ていにてはふせぎあふ事成がたし、お姫さまもろ共にへんじもさきへおちのび給へ、ぐそうあんないいたさんと、うしろの山のこのまをわけ、おちゆかんとする所へ、ことはおつてのせいむらがり來り、すはあれにこそあますなと、一どにどつとかけよるを、入道今はのがれぬ所、かげゆずいぶんはたらき給へ、心へたりと姫君をうしろにかこひ、ほうしもろ共むかふかたきにわたり合こゝをさいごと三重はげまるゝかたきはあらてを入かへ〳〵、我おとらじとたゝかへば、さしもの兩人つかれはて、ほうし姫を取かこひ、しばらくいきをつぐ間に、かげゆかたきをふせがるゝかげゆたゝかひつかるれば又ほうし入道かはり、ふんごみ〳〵切立れば、よせてさう

なうちかづかず、二のあしふんでみゆる所を、兩人一所にわつて入、じうわうむぐうに切てまはれば、こととはだてゑもんはかなはじと、馬引かへしにげ行を、兩人つゞいておつかくれど、かたきはめいばにのつたれば、おくりくもをかすみににげて行、ことはほうしかげゆを引とゞめ、いふてもかたきは大せいなり、やたけに思ふとかなふまじ、先姫君をかたにかけいづく成共おちられよ、もしやかたきのおひ來らん、某是にふみとゞまり、跡よりおつ付申べしはや〳〵といさむれは、げに尤とかげゆの介、某ゆかりの候へばいせぢをさしてをち申さん、跡よりおつ付給へやと姫君をかたにかけいせぢをさしておちらるゝ、かげゆの介のなんぎのてい、はやとほうしがたのもしさ、誠に出家侍とは、かゝる事をやいふらんと、しるもしらぬもおしなべてかんぜぬ、ものこそなかりけれ。

## 第三

かくて、そのゝち、地ひくはらくゑうはかぜのまへ、よのせいすいはたれとても、おもひかけぬぞはかなけれ、ことはかげゆの介ゆきはるは先年國のさうどうゆへ、姫君をつれおちのびて、いせの國あのゝこほりしまがさきといふ所に、少〻のゆかり有明の、地月日をかさね姫君とかはす、まくらのいつとなく、ことはあねたけ姫十二さい、弟とも若七さい、二人の子供をまうけつゝ、地かたはふく成うらのやに、つま木をりたくけぶりさへ、たへまがち成わびずまゐ、むかしのけみやう引かへて、地あこぎの平次となをよばれ、ことばするどきうら人に、なるればこゝもおのづから、かはらですめるよはの月、我ひとりのみすみかねて、ことは有時平次さい女に近付、偖々世がよの時ならば御身はみだいちか姫共人々にうやまはれ、かうしたうらのかたほとりはうたにならではよまぬ身の、さらば下人も有事か、地あさのころもにやれてゐら、むかしのかたちもなきていを、みるも中々あさましや、せめては家のぢうだいを、かやうの時のことわざに、ことはたからは身のさし合せとひれう丸の一こしを、うりしろなしてと思へ共、らうにんものゝたちがたなばかりかひはつとゝいひなして、取つぎくるゝ人もなし、地是に付てもつたへ

置、むかしのつるぎ引かへて、今はよしなきながたなとは、かやうの事をや申らんとかたり出して、なげかるゝ、ことは北のかた聞給ひ、あゝよしなきつまのことばかな、かく成はつるもせんせのごう、玉のうてなもやへむぐらはへらんやどに、いもとすまばと聞時は、何をかなげく事あらん、ことはうさもつらさもわびしさも兄弟のおさあひにまぎれて月日をおくり候、かならず〳〵かへらぬむかしをくやみかなしみ給ふなと、心づよくはいさむれど、つまのやつれしていをみてそゝろに涙をながさるゝ、ことはゆきはる涙をおさへ、是に付ても侍のしすべき時にしなざれば、しにまさるはぢ有とはわが身の上にてしられたり、かゝるむねんのうきすまゐいきて物を思はんより、しよせんじがいと思ひつめ、いくたびかいくたびかこしの刀に手をかけしが、二人の子供に心くれかひなき命いきのびしと又さめ〳〵と、なげかるる、地いたはしや竹姫は、ちゝのかほを打まもり、我々兄弟有ゆへに、ちゝうへ様母上にかくうきめをみせ参らする此おんを何とてほうじ申さんと、おとなしやかにの給へば、おゝよくいふたり竹姫よ、さすがはちゝが子にて有、おつ付世にも出たらば、今のうさをもむかしがたりになすべき物、あゝよしなき事に時うつる、もはや日もくれこよひは月もさへわたりさこそれうの有ぬべし、なんでもこよひはしあはせし、おつ付かへらん竹姫と、出させ給へばとも若は、ことはなふちゝうへ様いづくへゆかせ給ふぞや、我もゆかんとすがり付、平次すかして是とも若、ちゝはいつものうらへ出うをゝ取て來るなり、こよひも又おことがすきのゑびを取てゑさせんとあれば、おさな心に悦びて、あのゑびとあかいかにとを給はれや、よく〳〵るすをいたさんと母のそばへ立かへれば、平次につこと打わらひおゝせつかくるすをいたすべしと、立出んとし給ふを、北の方はしり出、ことはあとせいとはいひながらいつ〳〵よりもこよひは扨、御すがたを見おくれば、何とやらんあられぬ事が思はれて、心ぼそふさふらふぞや、ことは是と申も何ゆへぞ、此ふたみがうらやしまがさき、あのゝこほりの其内は太神宮の御りやうぶん、せつしやうきんせいと聞つるに、よな〳〵せつしやうなさるゝ事神のとがめもいかならん、とかね〳〵心にか

かりつゝ、地よひに家ぢを出給ひ、よふけてかへらせ給ふ迄、いくせのあんじいたすぞや、され共ひんじやのかなしさは、ことは是をしろなしうらざればおや子がうへにつかるゝゆへ、今迄はとめ申さず、こよひはことさら心にかゝり候へば、せひにこよひの御出は思ひとゞまりたび給へ、たとへばおやこもろ共に、うへにつかれてしする共、せんせの事とあきらめん、せひ〳〵とまり給はれとたもとにすがり、とめ給ふ、ことはゆきはる袖をふりはなちあゝをろか成いひ事や、我も人もつゆの命をつながんため、それ侍のをちぶれてはつじ切がうどうなすとても、二たびほんちをあんどしてなを上るこそほんゐなれ、あすよりはともかくもこよひ計りは立出ん、はやくしまふて歸らんに、それとも若には夕べきうをすへたればきうかせひかせ給ふなよ、あねも御身もふかよなべをし給ふな、よひよりやすみ給へやと、地いほりのほとりにつなぎたる、小舟にさほをさす迄は時引しほ時にゆられ行、是をばながきわかれとは後にぞ思ひしられたり是は扨置、ことは其比せいしうのそうまん所こばやしうこんの太夫もりなをは、手下のもの共よびあつめ、扨もたうしよふたみがうらしまがさきは、こらいより此かた太神宮御せんのみにゐてうじんのれうばにてせつしやうきんだんの所成に、何ものやらんよな〳〵あみをおろし、せつしやうするとふうぶんす、むかしよりもさやうのともがらをからめ取、則かのおきにふしづけにするおきてなり、こよひは汝ら心を付からめとれと有ければ、承り候と、方々へ手わけをしあひづをきはめひそかにしのびてばんをぞまもりける是をばしらで、地あこぎの平次は、いつものれうばへのり出し、あなたこなたへあみを置、なみのおもてをたゝき立、やごゑをかけておひまはし、ことはあみ引上ればうれしやな、ざよこうさいりんとしにかける、命まつゐのはつすゝき、おひれをうごかしかゝつたり、さあこそこよひは仕合よしと、又あみおろすおりふしばんのもの共是を見て、あひづのひやうしぎ打あはす、すはやくせものあますなと、ことは大せいどつとをりかさなりひし〳〵と取かこむ、平次心へたりと取付もの共引よせて、取てはなげ〳〵、ろかいふり上打あひしがこゝかしこよりはせあつまり、いやが上におち

かさなりつゐになわをぞかけにける、ことはうらのもの共立よりて先其男がつらを見よと、たいまつさし上よくみればいやしからざる男なり、やあ此あたりにてはみぬ男、いづくのうらの大ぬす人、神のはつとをしらざるか、天ばつにてあらはれし、いきぬす人の大がんどう、むかしよりのしきれいにて此浦へしづめにかけ、いせのもくづとをこなふべし、先なをなのれそれつらくはせとこゑ〴〵にこそどよめきける、あこぎ涙をはら〳〵となが し、あゝ口おしきていに成はて候、此ていにおよびなをなのる迄もなし、せつしやうきんだんの所とはゆめ〳〵存候はでふとあみをおろし候、かさねては來るまじ、先此たびは御たすけ下されよとかうべをさげて申さるゝ、ことはばんのもの共是を聞、むやくの事をいはんよりなをなのれとぞひしめきける、平次かさねて此上は有のまゝに申べし、某は此しまがさきにてあこぎの平次と申らうにんもの、神のおきてをそむく上は命はつゆもおしからず、去ながら某一人を賴にいたすさい女やせがれ御ざ候某相はて候はゞかれらもうへにつかれ申さん、神も炎ひのめぐみよりせつしやうをいとひ給ふと承る、人を一人たすくるはくはうだいのぜんこんぞや、某一人たすかればおやこ四人たすかり候、事のだうりを聞わけ給ひ、某が命をたすけ下され候はゞ、しやう〳〵のおんならめと涙にくれて申さるゝばんのもの共聞とゞけ、げにさる事も有べきが所のほうはそむかれず、はや〳〵ほうにおこなへと、むざんや平次がいしやうをはぎ、あかはだかにて手あしをからめ、大竹のすにまき立、大石あまたくゝり付うずまくなみのおちあひにいきながら、しづめにどうどかけゝるはめもあてられぬしだいなり、ことは扨まつだいのみせしめと、平次がきたるいしやうをばなみ打ぎはにつかにつき、其上に高札立、みな〳〵わがやにかへりしはなさけなふこそ三重聞へける神ならぬ身のはかなさは、あこぎのつまはかく共しらず、ことはやあかつきにおよべ共わがつまのかへらぬは、いかにとしても心へず、思へばよひにわかれし時炎にわかれも有やうに、心ぼそく思ひしが、心もとなやきづかはしと、地はやしのめもあけゝれば、二人の子供の手を引て、はまべをさして出給ひ、こゝやかしこと見給へば、ことはよ

ひにあこぎのゝり給ふふねはゆられて有ながら、のつたる人はなかりけり、ないはう心もおちつかず、かしこをみればあたらしきたかふだ有、さしよりて見給ふに、なに〳〵此あこぎの平次と申もの、せつしやうきんだんの神地にてせつしやうしたるとがにより、せんれいにまかせふしつけにおこなふ物なり、ねんがう月日としるして有、きたのかたよみもおはらず、こはそもいかに平次は、わがつまはしゝ給ふか、なふなさけなやかなしやと其まゝそこにたをれふしきへ入やうにぞなき給ふ、地やう〳〵心を取なをし、ことはやれ兄弟の子供よ、ちゝの平次はせつしやうなされしとがぞとて、此所へしづめにかゝりし給ふは、なふ竹姫とも若、こは何とせんあさましやとふしゝづみてぞ、なき給ふ、ことはおとなしき兄弟にて母のなげきをつく〴〵聞、ちゝうへは此うみへしづめにかゝり給ふかや、さりとてはちゝうへに、何とぞあはせて給はれと、とも若はあしずりし身をもだへてぞ、あこがるゝ、地あねは弟にすがり付あはかなやとも若よ、一たびしゝたるちゝうへの、何とてかへり給ふべき、今よりちゝうへなきぞとよ、あねが心を思ひやれ、こはそも何たるゑんぐはぞと、なみ打ぎはにひれふして命もたへよと、なげかるゝ、地とも若やう〳〵聞入て、ちゝうへのましまさずば、ゑびをもかにをも今よりたれか取くれん、ちゝうへ戀しちゝこひし、戀し〳〵とかけはしり、母にひしといだき付、わつとさけぶ時にこそ、母はいよ〳〵みだれがみ、かゝる事のあらんとて、よひに出させ給ふ時、みづからひらにとゞめしをあね竹姫や弟が、うへにつかるゝふびんさと、さすがことばにの給はねど、御かほばせにあらはれし、月の出しほを待かねて、出させ給ふおもかげを、今見るやうに思はるゝ、思へはよひにわかれしが、ながきわかれで有し物、さらばなごりもおしまずし、はなちやりぬるかなしさよ、つまにわかれて今よりは、我々おや子三人は、何と成なんあさましや、さりとてはあこぎ殿、おもかげ成共今一ど、みせさせ給へとくどき立ころを上てぞなき給ふ、去よじの、あはれと聞へける、地いたはしや北の方あまりなげきにたへしづみ、其まゝきやうきと成給ひ、かつぱとおきてゆびさしゝ、ことはやれ兄弟のもの共よちゝのあれにましますがわらは

をめされさふらふぞや、たいめんせよやとも若よ、なふうれしや竹姫よ、こゝはいづくぞいせのうらいそべ〳〵はんまちん〳〵〳〵、ちん〳〵ちどりが、ふうふ打つれ行時は、我をもつれてゆけ、はんまちどりのともよべかし、地あらおもしろやおかしやと、地ないつわらふつし給へば、兄弟はかなしくて、ゆんでめでに取付て、何をの給ふ母上樣、ちゝはむなしく成給ふ、御身はきやうきに成給ひ、我々何と成申さん、ことはあれなふ人がわらふぞや、はや〳〵いほりへ歸らせ給へ、何人がわらふとや、わらはゝわらへちつ共そつ共大じもない、戀よ〳〵わがなかぞらになまなかに、わがつまがきてはおもかげに立けるはなふこひしのわがつまと、ないつくどいつさまざまとたをれふしてぞ、おはします、地兄弟あまりかなしさに、まづ〳〵いほりへ歸らせ給へと、涙ながらに立よりて、かひ〴〵しくも御手を引、なくなくいほりへ歸らるゝ心のうちこそあはれなれ是は扨置、ことは一とせたんしうあまだの城に召つかへ、ふりよに出家とんせい有はやとの介入道は先年かげゆの介にかせいして、たがひに立わかれし後、いせぢのかたへと有しゆへ、せいしうに下りつゝかげゆの行ゑを尋れど、いづくをこそ共しれざれば、それよりよこくを尋んと、おはりみかはやとをとうみ、むさし迄もふさあはかづさ、みちのくのはてし迄尋めぐりておのづからしゆ行のこうもつもりつゝ、さいれんほうしとほうみやうし、さすがにこきやうなつかしく、都のそらへと心ざし、地やう〳〵今はいせの國あのゝつにこそつき給ふ、地日もはや西に入あひのゑんじにつぐるかねのねも、ことはしよぎやうむじやうをしめせぞと、御念佛を申つゝかたはらをみ給へば、ほのぐらき道ばたにくさばう〳〵とはへしげり、何やらんたかふだ有、立よつてみ給へば此あこぎの平次といふもの、せつしやうきんだんの神地にてせつしやうしたるとがにより、かくおこなふ物なりともじもさだかにしるして有、さいれん立とゝまり扨々ふびんのしだいかな、もゝよりむゑんをたすくるは出家のねがふ所也、こよひはこゝにくさ枕、念佛申てとをらんとよすがら、地念佛申つゝ御ゑがう有こそしゆせうなれ、地よも玄んかうに成ぬればたびのつかれにさいれんは、衣のそでをかたしきて

しばし、まどろみ給ひける、ふしぎや此つかうごきしが、けしたるすがたあらはれ出、御僧の枕により、なふなつかしの御僧様ぜんせのかいぎやうつたなきゆゑ、ぐれんのうみにしづゆぬる、いんぐはの有様御らんぜよと涙にくれてたゝれたり、ことは御僧かつばとおき給ひ、此ていを御らんじて、やあ御身はかげゆの介ゆきはるにてはなきかと有、さればとよはづかしながらわそうにわかれし其後に、此所へ立こへて姫にちぎりをこめし内、二人の子供をまうけつつ、わがなもむかしに引かへてあこぎの平次となのりつゝ、うら人にまじはれば、何いとなみのよすがなく、さいしをはごくむたよりとて、もつたいなくも此うらの太神宮の御りやうないせつしやうきんだんの所にて、よな〳〵あみをおろしうをゝ取、それにてさいしをはごくみしが、され共あこぎがうらに引あみも、たびかさなればあらはれて、所のものにいけどられ、あのなみのみなぞこへ、ふしづけにせられつゝ、それより今にあくみやうを、するのよ迄も引あみのあこぎと申は我也と涙と共に、申さるゝ、ことはさいれん聞給ひ、扨はいにしへのかげゆ殿にてましますか、いたはしの御事や跡とぶらひて参らせん、其時の有様をざんげにかたり給ふべし、あこぎうれしきかほばせにて、げにや誠にざんげには、ちうざいをめつすとかや一念ほつきみだぶつのくりきにうかべてたび給へ、それいとなみのかなしさは、よるにもなればはまべへ出、つたへきくゆうしはくやうは月にむかつてちぎりをこめ、地ふうふ二つのほしと成、我はそれには引かへて、取わけ月のよごろをいとひつゝ、此はまべにあみをおろせば、おもしろの有様や、おどろくうをゝおひまはし、かづき上すくひ上、ひまなくうをゝ取時はつみもむくひも、後のよも地わすれはてつゝおもしろや、地なふ御僧様ことはもしやわがつま子にめぐりあひ給はゞ此かたみをみせてたべと、あさのかた袖引はなし、則つま子はやまとの國うちのこほりと尋てたべと、御僧にわたさるれば、さいれんもしるしをうけ取、心やすかれたしかにとゞけ参らせん、あさましな御すがたや、うかみ給へなむあみだ佛との給ふ所にごくそつ二人あらはれ出、やあおそし〳〵、ざんじのいとまといひつるに、時こそうつれこなたへとひつ立行よ

とみへけるが、あつきもろ共有つる平次みやうくはと成てうせにけり、さいれんきゐの思ひをなし、なむゆうれいしゆつりしやうじ、とんせうぼだいと一しんにゑこう有、なみのおもてもほの〳〵と、よもあけわたるあさぼらけ、へんじもはやくやまとへ行、もうじやのかたみをといけんと、なごりおしくも御僧はしるしのつかをふしおがみ、やまとぢさしていそがるゝかゝるふしぎのしゆくゑんはためしすくなきしだいやとみなかんぜぬものこそなかりけれ、

## 第四

かくてそのゝち、ことはつらきよりつらきにうつるよのならひ扨もあこぎの平次おきてをそむくとがによりふしづけに成しゆへ、其さいしとてころさるべきにさだまれ共女子共の事なればしざいをなだめあのこほりをおひ出され、竹姫とも若母上もろ共やまとの國かすがのさとにしるべして、地なげきながらもをぐるまのおくり月日にせきもりあらざれば、ことはあね君は十六才、弟は十一さい、やゝおとなしく成給ふ、され共まづしきあばらやにてうさんぼしのかてもなく、人のなさけによりいとの地あさの衣を手わざにし、ひるはあたりのさとに行、手わざの物をあきなひて、其日のかてをもとめつゝ、母うへやとも若をよきにはごくみ給ひける、地はかなかりけるとせいなり、いたはしや母うへは、つまのさいごときゝしより、たゞきやうらんと成給ひ、ねてもさめてもつまこひし、ゆかしのあこぎや、いたはしの平次殿やと、こがれしたふがやまふと成、ゆみづものんどにとをらずし打ふしなやませ給ひける、地竹姫とも若かなしくて、あとや枕によりそひて、ことはなふいかに母うへさま、こゝちは何とましますぞ、心で心を取なをし、枕を上させ給はれ、なふちゝにわかれませしより、地たのみすくなく思へ共、御身様のましますゆへ、きやうきと人はあなどれど、よにたのもしく思ひしに、今又やまふにおかされて、もしもむなしく成給はゞ、とも若やみづからは、何と成なんかなしやとこゑもおしまずなき給ふ、地子供のなげきに母上は、少こゝちづき給ひ、おゝいとをしの兄弟や、母はつまのわかれゆへ、かくきやうじん

と成たれば、さぞやさぞ御身たちを所の人もあなどらん、さは去ながらおとなしくも、あねが手わざにけふ迄は、みづからをはごくみて、つらき命をつなぎしが、けふはしきりにめもくらみむねぐるしう成たれば、此ていにてはしばらくも、よもやながらへあられまじせめて扨兄弟が、よにも出て有ていを、一めみて相はてばよみじも心やすからんに、其日其日のくらしさへ、まどをがち成其上に、母がむなしく成ならば、二人はなげきに打ふして、うへにつかれて有らんと、思へば是がやまふと成、みらいのくげんもしられたり、かならず〳〵みづからが、むなしく成し其跡にて、弟のとも若をよきにはごくみ給はれや、御身とても弟も、としよりはおとなしく、人のあいれんふかければ、今一とせもすぎて後、いか成かたへもみやづかへ、ゑんをもとめ何とぞし、おぢごの敵討すまし、二たび家をおこされよ、みづからとてもたれあらふ、たんばの國にかくれなき、あまたのあるじ、山ぶき殿の娘なり御身たちも殿の孫、必たねがはづかしきに、わらはむなしく成とても、ひけうな心を持給ふな、なごりをしの兄弟やと、あねや弟を打まもり、よにくるしげ成かほばせに、つらぬきとめぬ涙のつゆあはれと、いふもおろかなり、地竹姫あまりのかなしさにたもとを母のかほにあて、こぼるゝ涙をひたし取お心、よはや母上樣、弟が事はともかくも、先々心を取なをし、ほんぶく有て給はれと、いさむる心もよは〳〵となくより外の事ぞなき、ことは弟とも若涙をおさへ、あゝおやなればこそ母上の御身のやまふはさし置て、あねうへやみづからをくらうに思召るゝぞや、此上はみづからがいか成かたへも身をうりて、おふたりをはごくまんに、きを取なをし給はれと、地おとなしやかにの給ふ内、母うへ心くれ〳〵と、頼みすくなくみへ給へば、ことは竹姫かなしさやるかたなく、せめてあたりへはしり行くすりをもとめ參らせんと、いほりのそとへはしり出、こゝやかしこともとむれど、さとばなれ成もりかげのざいけ迄は程とをし、其まに母やしゝ給はん、とやせんかくやと身をもだへ、行ては歸り歸りては、行も歸るも母のため、あゝ物うのわが身やと、其まゝそこにたをれふしこゑを上てぞなき給ふ、地かゝるあはれのおりふしに、ことはやと入道さいれ

んはまうじやのおしへにまかせつゝ、しるしの袖を取持てやまとの國へ立こへ給ひ、此所をとをらせ給ふ、竹姫御僧を見付つする〳〵とはしりより、ことはなふ御僧樣わらはが母の候がやまふにおかされ今をかぎりにましませ共、くすりとても候はねば見ごろしにいたすなり、もしやくすりを持給はゞ、少しあたへて給はれと涙ながらに、の給へば、ことはさいれん見給ひ何御身が母のわづらひゆへくすりがあらばくれよとや、成程くすりはくはい中せり、やすい事參らせん、してびやうにんはいづかたにましますぞ竹姫悦びあれ成はにふのいほりなり、とてものおじひに御入有、くすりをあたへ給はれや、おゝともかくもと打つれていほりの内へ入給ひ、ことは竹姫母をよびいけて、なふたびの御僧のくすりをもたせ給ふゆへ、是迄ともなひ參りたり、枕を少しあげ給へと、地いだきおこされ母上はくるしきいきをほつとつき、ことは何たびの御出家のわらはにくすりをあたへんとやこはうれしやと御僧を打まもり、やあ御身ははやと入道にてはましまさずや、みづからこそかげゆがさい女と仰もあへぬにさいれんはつと手を打て、やあこれはむかしのお姫樣か是は〳〵なふ是は、是は〳〵と計にてさき立物は涙なり、地涙の下よりさいれんは、あゝ扨何事も皆むかしには成はてたり、地あやゝにしきのしとねをしき、けんもんきんくはの御よそほひ何くらからずあけくれと、玄いかにくらさせ給ふ身の、かくあさましき御すまゐ御かほばせをみるに付、かやうにならせ給ふかと衣の袖をかほにあてきへ入やうに、なき給ふ、地母上いきの下よりも、ことはたがひに命さへあれば又めぐりあふうれしやな、みづから御身にわかれてよりいせの國にとしをへて、かげゆ殿になれし内是成二人の子をまうけ、かひなき月日をすぐる内、ことはなさけなやわがつまはせつしやう有しとがぞとて、しづめにかけられし給ふ、其ゆかりとて我々も所のすまゐかなはずし、此かたほとりに有明の、月をみかさの山ざくら、あはれと事とふ人もなく、其上わらはゝきやうきと成、あまつさへ此比はばんじのやまふを身にかけて、かやうにくるしみ候はとかたり出してはき給ふ、ことはさいれん聞て扨々くらうをなされしぞや、某かやうの身と成しよこくをめぐり候所にいせの國あのゝこ

ほりにて一しゆくいたし候所にかげゆ殿のまうれいあらはれ給ひ、よしなき事ゆへひごうのしにをとげて有、此くるしみのせつなさを何とぞさいしに尋あひ、くはしくかたり跡をとはせてくれよ、我さいご迄のなはあこぎの平次となのりしが、則是をたかみにと衣のかたそでとき給ひ、ぐそうに給はり候と有しかた袖取出し、きたのかたにみせ給へば、母はゆめ共わきまへず、あらうら山しの御僧や、あゝみづからも今一ど、ゆめに成共わがつまの、おもかげにあひたやな、思ひ出ればわがつまの、今はの時迄めされたる、あねが手をりのあさ衣、是こそつまのかたみよと、衣のかた袖かほにあてうていこがれ給ひしがことはやことされていきたゆる、さいれんこれはとよびいけて、くすりを口にそゝげ共、はをくひつめて手あしをうごかし、つゐにむなしく成給ふ、竹姫兄弟さいれんは、是は〳〵と計にてたがひにめとめを見合てむなしきしがいにいだき付共にきへよとなき給ふ、地是やあはれのかぎり成、むざんやな竹姫は、あへなきからをおしうごかし、今迄物をの給ひしに、はや事きれさせ給ふかや、今一どあねか弟かと、ことばをかはさせ給はれなふゆかでかなはぬ道ならば、我をもつれて行給へ、さりとてはよの中に神や佛はましまさぬか、是は何たるあんぐはぞと、兄弟しがいに取付てくどき立てぞなき給ふ、ことはさいれんも兄弟の、なげきのていをみるからにともに心はみだるれど、地心よはくてかなはじと、ことはいかに兄弟の人々、何程なげき給ひてもしゝたる人は歸らぬなり、そこのき給へはうぶらんと、母のしがいを取かくせば、兄弟はころを上、なさけなしとよ御僧樣、かた時そばをはなれざる、母上の御しがいを、いづくへはなちやるべきぞとすがり付てぞ、なげかるゝ、ことはさいれんいさめてあゝおろか成仰かな、おふたりのなげきゆへかへつて母ごはまよひ給ふぞ、かならずなけきをやめ給へまづ御しがいをはうぶらんといほりのとびらにしがいをのせさきをさいれんかき給へばきやうだいはあとをかき、涙ながらにたつあしも、しどろもどろによは〳〵と、地いほりのそと成やぶかげのおくりつちを、うがちほりうづみ、地小石をひろひつかをつき、かきふしゝげき竹花いけ、しきみのつゆのはかなくも、一本のしる

しゝやうぜんとなはとゞまつてかたちもなし、四しゆてんとうはまなこのまへこゝにいたつてよの人のへいせいをあやまると、とうばがかきし九つの、すがたも思ひあはされてたゞつきせぬは、涙なり、兄弟しるしを見もわかず、いたはしや母上の、此つちのそこはかと、うづもれ給ふかなさけなや、是が母ごのしるしかと、一木の松をゆすり上こゑを、そろへてなき給ふ、ことはさいれんやう〳〵けうくんし、母を戀しく思ひ給はば只念佛を申させ給へと、御はかに水をたむけつゝ、さいれんしやうごを打ならし、くはうみやうへんせう十方せかい、念佛しゆしやうせつしゆふしやなむあみだ佛と申されば、竹姫とも若もろ共に、なむあむあみだ佛みだ佛と、涙と共にゑかう有心の内こそ、いたはしき、ことはさいれんしもくをとめ、かやうにつらく成はつるも、何ゆへなればもとは皆たてゑもんめがなすわざなり、ぐそうしやもんの身なれ共やつめをあんをんにくらさせては、中々むねんはれやらず、御きやうだいの御供しひそかにたんばへしのび入、じせつをうかゞひだてゑもんめをうちおふせ、二たび御よに出し申さん、お心やすく思召せと、よに頼もしくの給へば、兄弟ことばをそろへ、さればとよ其事よ、母上もまつご迄くれ〳〵申おかせ給ふ、ひとへに御僧をたのむとあれば、おゝ何しにそりやくいたすべき、とかくなげきはいつ迄も、へんじもたんばへ立こへん、先々用ゑをいたさんと、有しいほりへ立歸り、かいがいしくもさいれんは、兄弟もろ共いさめつゝたびのしやうぞくなされける心の内こそ中三重たのもしき

## たけひめともわか道行

人はなさけの、地下もみぢ、れんりにやどる兄弟に、かさふか〳〵とさきにたてわらぢのひもをしめおしへ、地あとにほうしのうつゝなや、うすふぢぞめのあさごろも、ひとへなる身はむもれぎの、地なこそはづかしやゑざくら、かすがのさとを立出て、こゝろぼそくもたどらるゝ、地御有さまこそいたはしき、道のちぐさにおくつゆに、すそもこづまもしほるれどそではなみだになをぬるゝ、地わが身のしぐれはげしくも、よをあき風のふくからに、のべのす

すきはほに出て、地みだれ〳〵てあふなるに、いかなればかぞいろは、よをはやうしてすぎのまどあけて一よのゆめまくら、地思ひ出ればうかりける、人をはつせの山おろし、はげしくをちてすげのかさ、ひらりひら〳〵ひら松の、みどりにみゆるたかねこそ、地はる一しほのよしの山よしの〳〵山を、雪かとみれば、みねのしらくも、かへろ〳〵となくしかの、つまこひかねてたつた山、地からくれなゐにそめなせる、ぬさをたむけの山道に、つゐつく〳〵とながむれば、ふもとのさとにしづのめが、しづのいもせに子を引つれて、かりたのあとにまくむぎの、たねは一つにかぎれ共するにわかれてわかくさのわれ〳〵ふたりのこしをき、はゝはさき立給ふぞと、きやうだいかほを見あはせてなくより、外のことぞなき、ことはいたはしや竹姫はいかにともわか、つかのまなり共はゝうへのこひしさをわすれんと、の山におもひまぎれしに、とすればかくしかくすればはゝごの事が思はれて、あとへはあしがひかるれど、さきへはつゆもすゝまずと立わづらひて、おはします、地とも若あねの手を取て、我も思ひはおなじ事くひて、かへらぬあだなみのきへてし、人はせひもなしかならず思ひ切給へ、地みづから御手を引申さん、あれ御らんせよ山々に、もみぢ色どる其ふせい、物のなさけはあきこそと、地よみしもげにやことはりの、ゑにうつす共中々に、ふでもかぶろに、くちぬべし、ゆうぎりのたへまにかりがねのあとやさきやにつれとぶを、地かきにになれとやさほ川にはさぬ涙の玉水や、いつか思ひは山ざきの、ふもとをすぎて行すゑに、はゝそのもりと、聞からにいとど、戀しさますかゞみ、地くもりつはるゝ月かげの、かつらの川をうちわたり、よろづよふべきかめ山も、わが身のうへにくらぶれば、あすの命もしらまゆみ、やそせのもりやゆげのさとめいしよ、こせきをうちながめ、わがちゝはゝのふるさとやあまだごほりにつき給ふ、かの人々の御有様、たゞよの中の、ものゝあはれはこれなりたゞこれなるはと皆かんぜぬ、ものこそなかりけれ

## 第五

かくてその〳〵ちことはたからさかつている時は又さかつて出るとかや、扨もだてゑもん時とをはあまだごほりをおうりやうし、くはつけいくはんらく日をおつて、色におぼれしゆにちやうじけうのおごりをきはめける、しかるに手下の百姓ら時とをがまへに出、扨も御領内あをもり山の木のこ、今をさかりに御ざ候、もし近日にうてんならば御なぐさみもいかゞ也、今明日の内にお出もやとうかゞへば、時とをゑつぼに入て、おゝいしくも申來る物かな、しからば明日もよほさん、道の程もさうぢさせようじんきびしく供せよと、侍共にいひわたし、はやたけがりのもよほしと上下ざゞめき三重わたりけりかくて手下のどみん共、我も〳〵とかいだうに立出て、ことはけふは殿様のあをもり山へ御出ぞ、いそぎくさ取さうぢせよと、はうきひまなく立すな持、道のしばくさきよらかに、ことは水打まはしてひしめく所へさいれんほうし此所をとおりかゝり、是々いづれも何事なればかやうにさうぢなさるゝぞと何心なくとはるれば、百姓共聞もあへず、何御坊はしらぬか、此所の殿だてゑもん様のけふあをもり山へたけがりに御出ゆへ、かやうにさうぢするなれば、うろたへまはつて立ずなふみ、とがめられてめいわくせんより、さう〳〵そこをのかれよと、やくにかゝりしにんぶ迄、だてゑもんをかうにきてゐせい風をぞふかせける、ことはさいれんかくと聞よりも、是こそ天のあたへなれ、けふ本望をはらさでは又いつかはと思ひ取あしをはやめて立歸る、じこくうつればだてゑもん侍あまただうぐをつかせ、さきをはらつてはい〳〵めかし、馬上ゆたかに出來る、ことはかゝる所へ竹姫とも若兄弟は、さもじんじやうに出立て、弟はめかごをになひ、あねはかだみをたづさへて、すゝきおしわけとをらるる、侍共ごゑをかけやあ〳〵汝ら殿様のお馬さきのきませい、わき道へよけてとをれとわめきける、時とを二人をきつとみて、やあらくないひそ汝らと、馬よりひらりととんでをり、是々汝ら是へ參れと兄弟をまねきよせ、扨々二人共によいきりやうな生れ付、八まんあつた物でない、みればめかごをたづさへしが其中は何ぞといふ、竹姫につこと打わらひこはい殿様や我々は此山のふもとにくらすしづ成が、其時々のいとなみゆへ、是御らんぜよ此山の木

のこをひろひしろなして、よわたるたつきとなし、さふらふ、何成共木のこは有召てたべとぞ申さるゝ、時とをあねに見とれつゝ、何木のこを取てよわたるとや、成程〳〵かふてやらふ、扨うつくしいきりやうやと、竹姫の手をとれば、姫君ちやくとふりはなし、何わけもない事を、弟が見るめも有物をとかほ打あかめての給へば、ことは時とをほれ〳〵と成て、ゑゝあのものは兄弟とや、あねといひ弟といひ、いやはやふりを二つとや、此上は兄弟ながら殘らず木のこをかふてとらせん、木のこは何々持たるぞ、さん候ちよの松たけうらわかき地袖にひろひてしゐたけや、戀をしめぢにならはねば、今はつだけのはつかにも、何といはたけさゝめたけ、地いとによるてふはりたけやゐくちべにたけねずみたけ、地ひらたけなども候といとやさしくもうり給ふ、ことは時とを聞て扨々あまた持たるよな、たけは付たり兩人共にね引にかふてとらせんと、あねにすがればふりはなち、弟にくどけばつきのけて、我々さやうのものならず、只御なぶりあらず共たけを召れて給はれとおもはゆげにぞの給へば、ことは時とを打うなづき、おゝそれもさう去ながら、たゞ今のたけの内にわらひたけはみへざりしが、但ないかといひければ、竹姫聞給ひ、なふおそろしいとひ事や、たけの中にも取わけてわらひたけはどくたけとて手に取人も候はぬに、よしなの仰との給へば、何わらひたけはどくたけとやゑゑよしはどくにもせよ、其方連ゆへならばびやくらい命もすつるきと、なをしなだれてぬれかゝれば、兄弟さうへのき樣に、かごのぼうにしこみたる、たちをてんでにするりとぬき、おぢごの敵おぼへたかと打付るを、引はづし兄弟を取ておさへひざの下にむずとしき、おのれらは何ゆへに某をうたんとする、有ていになをなのれ、いはず共いはせんとねぢふせねぢふせせめ付れば、兄弟涙をはら〳〵とながし、ことはゑゝ口おしや手の下にうたんと思ひ、むざむざと手ごめにあひ、此まゝはてんかなしやと手あしをもだへて、なき給ふ、ことはかゝる所へさいれんほうしかけ來り、時とをゝ取てつきのけ、やあめづらしやだてゑもん、某を見しつたか、いにしへのはやとの介入道してさいれんとはわが事なり、是にましますに兄弟はちか姫かげゆのわすれがたみにてわたらせ給

ふ、いかに御兄弟あれこそおぢごやおやごの敵なり、一たち打て御けふやうに入給へと、二人一所に切てかゝれば、時とをが侍共かけへだて入ちがへひばなをちらして三重たゞかひける其ひまにだてゐもんことは姫君をひつつかみねぢころさんとする所を若君すかさず切付給ふを、引はづして両人共に取てふせすでにかうよとみゆる所へ、いつく共なくしやくじきの玉とび來り、おつるとひとしくかげゆの介とあらはれて、時とをがたぶさを取て引すへ、しうねきかほにてはつたとにらみ、ことはるゝうらめしやだて右衛門、おのれが悪心ゆへ某よにをちぶれて、つらきさいごのくるしみもあけくれ口おのれにうらみ有そうみ、うかみもやらぬわがしうしん、思ひしれとねめつくれば、時とをはめを見つめ、手あしもすくみもんぜつし、つゝ立てゐる所へさいれんほうし侍共をおつちらし、やがて跡へ立歸り、やあそれ成はかげゆ殿かと有ければ、ゆうれいは涙にくれ、子供があやうくみへしゆへ某是迄あらはれ出、悪人をふうじたり、たとへ敵はめつしてもわがまうしうはゝれやらず、あはれとおぼし給はれと涙にくれてたゝれたり、ことはさいれんもかんるいながら兄弟に力をそへ三人たちをふり上て、おぢごの敵おしうの敵、思ひしれと時とをが、ほそくび兩うで打おとし、日比の本望此時と、おどり上りとび上り、らつくはみぢんに切ちらし、ことはあたりをみればふしきや今迄みへしちゝのゆうれい、有し姿を引かへて、五たいを竹のすにまかれ、かしら計をあらはして、地さもくるしげ成いきをつき、ことは此年月のまうしうは今まのまへにはれしかと、是御らんせよあさましや、ふしづけにしづみぬる有しあこぎがうらめしや、よに三ど日に三どさいごのていを後のよにうきふしだけのすにまかれ、ぐれんのこほりにとぢられて、かしやくのせめをうくるぞや、此くるしみをたすけてたべとなげき給へば、兄弟は、地こはあさましの御姿や、ことはなふさいれん様ちゝの姿をみるに付なか〳〵有にあられねば、何とぞしてあのくげんを、はらしてたべや御僧と、兄弟かつぱとたをれ伏命もきへよと、なげかるゝ、ことは時にさいれん、おゝ尤也、ことはりと、まもりふたつより御みやうがうを取出し、いかにゆうれい、是はわしうはせでらのかいさん、口口上人のかゝせ給

ふしやうぶつむぎのみやうがうなり、たとへいか成悪人成共此みやうがうをさづかれば、たちまちぶつくわにいたるなり、はや〳〵じやうぶつとげ給へと、まうじやの口へふくませ給へば、有がたや今迄からみしうきすの竹、一どにはらりとさばけゝり、時にふしぎやはくうんまきあげ、こくうはるかに上りけり、人々一どに手を合、なむあみだ佛との給へば、、こゑの下よりたちまちにぶつたいと成給ひにしのそらへぞ、あがらるゝおの〳〵御あとふしおがみ、扨それよりも若君は、二たびほんちをはいりやう有、ロんゆゝしきときつ風せんしうばんせいばん〳〵せいおさまるくにこそめでたけれ

阿漕平次終

（薩摩外記正本の序文）

家傳の一曲祕密たりといへども書林橋本氏白水世に弘めん事をねがひ所望有に依ていよ〳〵章句を改め我が流をくむ人の爲に惑なからむ事を思ふ若外にまぎらはしき類書あらんかと此書の初に名印を顯し置もの也

薩摩掾外記藤原直政印

往昔より上瑠璃の一曲家々の音節多しといへどもわけて外記の音曲は當世に叶ひ上中下に學ぶ人すくなからざるも又妙音の至德ならんか幸哉我に一流の寫本を與へらるゝに依て一字一章の誤なく開板せしむるものならし翫び給ふ人右の印を以て御もとめあるべきものなり

正德四甲午年仲秋吉旦

書林　白水印

# 出世太平記

薩摩外記正本

## 第一

偖も其後、とうい九代の、花の代も、げんかうの、風に破られ、せいさう、四十の春秋を、やゝ安んずる、隙もなし、詞爰に、足かゞ將ぐん、尊氏公しせんに、武家の大將と成、今ははや、新田の一ぞく、ゑんばにひやうはくなさしめ、うんほうのゐを、たましく、御一門には先、御舍弟左兵衞の督直義、御家の執職には、高の武藏の守師直、きら上杉畠山、仁木細川の一ぞくたち、晝夜うやまい奉るは、ゆゝしかりける、次第なり、かゝる所に、氏家、中務の丞重國は、尾張の守高經の手にしよくし、越前のあす羽にて、宮方の上將、新田義貞を打とり、よろひ幷重寶鬼切、鬼丸、二ふりの太刀、金らんの守袋に、よし野の帝の被成たるしん筆のりんしをそへ、御まへにさし置、くんしは、けいじんに近付ず、勇將の首、そんせんの御つゝしみ偖こそじつけんなし申さずと、いさいに言上なしければ、尊氏御ゑつき限りなく、其時のくんかうには、いせの國、わたらひの郡を、一かうなんじにゑさするとて、御座を立せ給ひけり、有あふ大名はら〳〵と皆〳〵、三重宿所へ引「かへらるゝ、是偖置、爰に又、しの塚いがの守重廣は、義貞ふだい相傳の者成が、去る頃大だち、左馬の助の手にしよくし、都にとゞまりいたりしが、ふりよによしさだ、うたれ給ふときくとひとしく、先當の敵なれば、主をうつたる高經、又は氏家が首引ぬき、其後じせつとうかゞいて、尊氏をも一太刀うらみ、又は新田のゆかりをも、ひそかに尋申さんと、北國さして急しが、道にて聞ばさがのゝくを往生院の上人な、ぼだい所のゆかりとて、義貞の御首を、やうやうに申請、とむらひ給ふときくからに、有がたき御事や、さいわい通る道なれば、立よりて御びやう所を、拜まばやとそれよりも、下あみがさ入ひつこみ義貞の、御びやう所さしてぞ、參りける、かゝる折ふし、むかふを見れば、よし有げ成大おのこ、是もあみがさひつかふで、御びやう所へ立合を、たぞと見ればこはいかに、くりう左衞門よりかたなり、あつぱれきやつめは義貞の、御さいご迄、御供と聞ける

が、當敵を手のびにし、にげ來るひきやうもの、こ
とばをかくるもよしなしと、見ぬかほして、御はか
に向ひ、花たてまつり水たむけ、ゑゝ口をしの御事
や、人らしき侍が、せめて一人御供せばかくやみ〳〵
とはなり給はじかゝ申しのづかゝ、有合ぬは御うん
のすへさてくりうとかや云、をくびやうやつ、大ご
しぬけとしり給はず、頼に召つれ給ふゆへ、ふかく
の御さいごせひなしと、かんにんならぬあてことば、
よそ目ににらむまなこより、泪をはら〳〵とながし
ける、くりうめんしよくかはりしが、さあらぬてい
にて、かうげをさゝげ、是も御びやうに打向ひ、口
をしの御事や、ふしぎなる夢のつげ、又御馬のつげ
すまい、かれこれふきつに思ふゆへ、かうりやうせ
んしよにあそばざる、かんげんをなしけれ共、御せ
ういんなく少勢にて、打て出させ給ふゆへ、あへな
くも、ぬししれぬ、流矢のためうせ給ふ、我もとう
ざにはら切て、御供とはぞんせしかど、しは安しな
がらへて、何とぞかたき高經や、重國が首引ぬき、
尊氏をも打とらんと、かくのていには候へども、若
君立は御幼少、御下人共はちり〳〵に成、有かいも
なき、しの塚と云うつけ者、いづくへかにげかくれ、
玉しいくだれば、せひもなし、たゞ口さきのこうげ
んにて、をくびやう者の大ごしぬけ、何の用にも立
申さず、思へば御うんのつたなさと、同くよそめに
にらみつけ、ことばをあらしてぞ申けり、重ひろ又
御はかにむかい、せきとうにみゝなく、そとば物云
ぬとて、ぬかぬ太刀の高名は、さこそをかしくおぼ
されん死は安しと申せ共、其高經や重くにゝ、羽は
あらじ、命をすつるほどならば、打にうたれぬこと
や有、去ながら、ぶしと思へば、はらも立、牛馬に
はおとりたる、人外と思召せ、本意はそれがしとげ
申さん、南無阿みだ佛と申ける、くりう大きにはら
を立、さきほどよりのぞうごん、それさへ有に今云
し、人外とはたが事ぞ、をゝ犬ざむらひとはくりう
がこと、よりかた今はこらへかね、ぶしにむかいて
犬とはいかに、今一言かへして見よと、太刀に手を
かけ申けり、しのづか聞て、やあきづくわいとは人
がましや、むやくの太刀をぬかんより、犬にこやい
しおゝふれと、兩方りきむいやいごし、太刀のつか
もくだけよとをしにぎり、たがいの心をさぐりあふ、

ぎせいの程こそ、たのもしけれ、其時くりう、からからと打わらひ、いゝがひなきおのこと、しゝても何のゑきあらん、此うへは名將の御はかを、こしぬけ共にゑかうさせ、けがらはしやと云まゝに、高そとばを引ぬいて、かたにひつかけて出ければ、しのづかつゞいてとびかゝり、君のしるしはわたさじと、しつかと取て引とむる、日本國にかくれなき、大力の名をふれし、しのづかいがの守重ひろが、しゝわうのいかりをなせば、くりう左衞門よりかたも、りうはつかうが力を出し、ゑいや〳〵とあらそふ時、うでばねひざばねこしのほね、つがい〳〵はからくれなひ、ちばしりかへつてふしあがり、五百五拾の力すじ、きうちうのふじかづら、松をからんでこけむせる、岩ほにをひしがごつとくなり、其時しの塚云やうは、いかにやくりう、先年三井寺の軍の時、かくのごとくの大そとば、御へんとわれがひんぬいて、はしにかけしも、むかしよな、いかさま御へんとそれがしは、そとばにゑん有ほうゆふの、力だめしは是なりとゆんでねぢりめでねぢりそうこちりうのゆうもふに、八寸四方の角そとば、中よりふつつと、ねぢ切て、こをどりしてはつとのき、双方にらんで立たりしは、鬼か人かとうたがはる、時にしのづか云やうはあゝたのもしやくりう、心ていはあらはれたり、うたがひしくやしさよ、ゆるし給へと、いければ、をゝ御へんが心も見とゞけたり、最前のぞうごんも、皆忠せつのあまりなり、たがいにしゆくいはなき物を、此上は心を合、何とぞして尊氏を、打とらんにしくはなし、思へばつたなき義貞の、御うんのすへやと兩人なしばらく、泪にむせびけり、されどもかなはぬことなれば、先こなたへと兩人な北國がたへといそぎけり、此もの共がしんてい、たのもしき共中々申、ばかりはなかりけり

## 第二

偖も其後、調高の武藏の守師直は、氏家中務の丞重國を、ひそかに近付申やう、まことに御へんが忠せつ、たにこへたる所なり、我又折々御前のぎを御取なし申べし、されば義貞の舍弟、わきやうきんご義助も、過し頃病氣とて、いよの國にてはてしときく、

然ばうきよに將ぐんの、世をさまたぐるものはなし、したがつて重國、御へんに頼事の有、義貞の北の方、こうとうのないしはせんていより給はり、淺からぬ中ゆへに、義貞ひたすらこひしたい、越前のあすはより、向いのこしをのぼせしに、其内に義貞は、御へんの矢さきにて、しをとゞむ、きけば此頃其女も、京ぢかくにしのぶと、きくかねて片桐彌七郎宗清に、上いとがうし尋るに、いまだ行へもしれぬなり、其上ないしのはらに、兄弟なんじ有ときく、をんびんにさしをきなば、千里にはなつ虎のごとし、ずいぶん尋出しつゝ、我に中立し給へかし、内侍の心にしたがつて、兄弟の若共をば、其まゝにもさしをかん、ひらに頼と申ける、重國承り、もとよりじつしの仰といひ、とうじかうけのおせいには、とぶとりをつることなれば、御心安かるべし、そう〳〵尋出しつつ、御心ていにまかすべしと、りやうじやう申し重國は、ざい〳〵の町かうじを、のこりなくふれければ、名も尊氏のいきほいに、なびく草ばのかけにだに、かくるゝ所は三輩なかりける行くれて、この下かげをやどゝせば、花やこよひの、もてなしに、なほ袖ぬらすふせいして、空にしられぬ、雪の色、あらしや、よそになをもらす、うき身の花と、もろ共にちりかい、くもる春のよの、月はむかしの、丸かがみ、おぼろ〳〵として、せひもはけなの、道のべに、しだり柳のたよ〳〵と、いともてつなぐ白玉の、ひかりうつろふ、きしかげに、すみれまじりの、やさつばな、住しうてなの、床に見しむかしの色は、かはらねど、をもなや〳〵なをもかげをかくす、をがさのすげはあれ共、さてもすげなの、べにがのこ、人にいわれしたもとより、今はこぼれて、世におちて袖の玉水、むらぎへの、露とこたへて、けふ迄ももとのしづくと、をくれにし、種はいもせの、ほだしとや、かたみの小松つらなりし、枝はひとしをあいらしく、妻のことのみ思ひねの、夢をば母がふところに、なきねいりせし、いとしさよ、兄はたびぢをならわしの、あづまからげにはぎ高く、先に立たる其ふせい、さながら父のをもかげに、新田と、人やとがむらん、いとゞかたむくかさの内、又ふりかへり、ながむれば、こしぢにかへる、ならいとて、あのとりならば、我も又、あいた見たさは、とばなわ

て諸國の秋をつみのせて、みよのみつぎの牛車、けふのなごりにとゝろかば、我心をも打のせて、をくれ見、おくれよびかへせ、かへらぬ水のうたかたに、みだるゝかはずせわしくも、ばつとちらせし山吹は、こがねを浪や、たゝむらん、小弓にそへし八幡山、守らせ給へと、ふしおがむ、兄を見まねに地弟若も、母上のふところにて、いたいけしたるてを合、まだわけしらぬ其けしき、内侍は見るにたへがたく、げにたぐいなき若共を、母が、たもとの下にのみ、むもれ木と、なすべきやと、むかしをしたい行末を思へばつきぬうき涙、わが身ひとつの、雨ぞかし、古へ人の浮名立こひの百夜の、深草山、あまぎる雲に、道くらく、よし、くらく共みだ佛、みらいは妻と、はちすばの同うてなに墨染の櫻の寺を心ざし、みさとにたらぬたまぼこの、いたつがはしきそうあいの、あしたを待てやすらはん、宿はなけれど里のなは、ふしみに行くれ三重給ひける春雨の、おとさく程に、しづかなる竹より内の一つゐほ、妻こふねこの跡つけし、只一筋の道細く、ともしびほのかにかき立て、女のわざかしどけなき引さき、がみをむすびつきなかば、上たる、いよすだれ、こちふく、かぜに、ともしびのまたゝくかげもせわしきに、内侍はよすがうれしくてやまとへくだるもの成が一やの情とこひ給ふ、二八計の女房の、しそくたづさへゑんに出、おやこの人をつく〴〵見て、おやど申度候へ共、都よりのさたとして、新田殿の御ゆかりを、つよくせんぎの候が、人々の御有樣、とがめんなじでうなり、みづからはしろたへとて、わたり新左衞門はやかつが、いもふとにて、新田ふだいの者なるが、ふしぎのゑんにて、足かゞ殿の侍、かた桐彌七宗清が、妻と成候なり、今にも彌七來りなば、うきめを見させたまわんに、情なしとな思しそよ、わらはかづらきはいとしさゆへ、いづくへ成共をはしませとて、ねん頃に申つゝ、しそくふきけし入にける、内侍も今はたのみきれ、しだいにくらき里はづれ、あとへも先へも、道みへず、本ふしうんにまかせて、とも、かくも、こよいは爰に明さんと、すこしかせよくのきかげに、小袖のつまを打敷て、昔はすいてう、かうけいに、すきまのかぜもさむかりし、身はならはしと思ひすて、兄弟にふる雪を、打しのぎ給ふにぞしだ

いにふくるさよあらし、はだへを通すつるぎかとみにしむ計すさまじく、あゝたへがたやとふしまろびぜんごも、しらずに、なき給ふ、兄子はおどろきなふ、いかにせんかなしやと、ひたいをおさへ手をさすり、さぞ母上のさむからん、せめては是をとの給ひて、詞世にをちうどのみせばなる小袖をぬいて母上の、枕のかぜをいとはるゝ、其身は雪にぬれ立て、はだへあらわに是や此、もろこしのおうせうが、氷にふし〳〵かう〳〵も、かくやと、ばかりあはれなり、母は此よしを御らんじて、偖いたはしの有様かな、かばかりをやを思ひ子のイロ詞いかにかう〳〵なればとて、さやうに御身をなやませて、わらはゝみやうがにつきやせんかまへてかぜばし引給ふな、只今御身の心ざし、りやうらより猶あつければ、母は中々さむからじ、はや〳〵小袖をき給へと、きすればぬいで母にきせ、いや〳〵我はさむからじ、それ侍の習には、いか成あらし雨雪にも、さんやをいとはずいくさして、よきかたきとくまんとき、さむしつめたしなんどゝて、敵にうしろをみすべきかと、こぶしをにぎりこたゆるてい、はゝはきもたへ目もくらみ、あばれとむらふさよちどりないて其よをふかさるゝ、かゝる所へ、片桐彌七宗清は、女の庵に忍しが、竹に、うつろふ人かげは、何ものかあやしやとからかさ、かざし、よくみれば、内侍おやこの人々なり、あじろのうをご、さんなれ、からめ、とらんと、思ひしが、いたはしの御有様や、今、人々をたすけしと、て新田のうん、すへならば、ついには、さがし出されん、よし又、からめとつたり共、つきんず、とうけの御くわほうの、長久にはよもならじ情しらぬは、ひつぷのゆう、其上われつれあいし、つまのためには、主君なり、かれ是たすけおとさんと、しらぬかほにて立けるが、いやまてしばし、我心、じつしの仰をかうむり、尊氏卿の目がねにて、ゑらまれたりし宗清が、たすけては道たゝず、からめ、取ては、情なし、とやせん、かくやとあんじゝが、さらぬてひにて、とをたゝけば、女房待かね立出て、やがて内にぞ、入にけり、やゝ有てしろたへ、こよひはことなふひへさむらふ、先盃とあたゝめて、さいつさゝれつ、さかもりす、女房申けるやうは、みづからは新田の者、御身様はあしかゞなり、もし、只

今にも、新田ゆかりと聞給はゞ、いかゞ、心へ給ふぞと、よそながらうらどへば、宗清偖こそと思ひつつ、をふの給ふ迄なし、いかに御身がしうなりとて、やうしやはならず、めにかゝらば、からめ取てちうしんせん、たゞ何事も、みぬが佛、きかぬが、ごくらく、なりと云、さればをやこの人々の、さむきをしのぎ、あらそふこへ、手に取やうに聞へしを、女房、はつと思ふかほ、宗清少、きをつけて、やれ、小鳥共が、のきに、やどつて、かしましきに、あれ、をつぱらへとぞ申ける、白たへきいて、なふ、ふくらすゝめのはをなやみ、雪に、おれふす、しの竹の、さゝに一よのかりのやど、さのみ、いたくはなの給ひそ、はやよもふけぬ床さむし、をとせでおよれと申ける、むね清がこれを、聞、いや〳〵、われはせつしやうずき、小鳥のこゑをきゝ付ては、せひに、とらではおかぬなりはや、おつぱらへとぞ申ける、女房更に心へず、よな〳〵とまる鳥なれば、打ても、をふても、たゝぬといふ、宗清、かしらをかきながら、ゑゝ、もどかしやいで、それがし、をひのけんと、弓やをつとり立出で、そらや、四五本、さしとり、引つめ、いるほどに、内侍はおどろき兄弟を、まへうしろにかきいだき、ほう〳〵にげさり、給ひける、宗清、はるかに、見をくりて、あれをみよや女房よ、すゝめ共が、にげつるを、其まゝおきて、某が、せつしやうを、いたしなば、御身がちうせつたつべきや、たゞ何事も、みぬが佛、きかぬが、ごくらくなりと云、しろたへとかふのことばなく、あら、たのもしの心やと、たもとに、すがり、なげきしが、イロ調さるにても此おんの、ないし様にもきんだちにも、かまへて、わすれ給はじと、いはんとするを、おしとゞめ、やれしばらく、ないしといへるなを聞ては、某が、分たゝず、只いつ迄も、すゝめ〳〵と、うなづきあいし弓とりのいもせの、道こそたのもしけれ、爰に白たへが兄、わたり新左衛門はやかつは、内侍きんだちにめぐりあい、はじめをはりをきゝ届、偖は宗清がはなつ矢は、妹めがふた心が、まづ〳〵、こととをたゞさんととばそに立てきゝけるが、よこ手を一つ、てうど打て、なふこゝ、あけ給へ彌七殿、われこそわたり新左衛門はやかつにて候が、御身の心をきゝとゞけ、妹をさしころし、うつぷんを、さん

せんため、是迄來り候が、わすれがたき、情のほど、一禮のため、たいめんせん、いかに〳〵とぞ申ける、宗清が、是を、聞、ゐ〳〵、又も、ゐしれぬ、すゞめきたつて、よしなきことを、さへづるよな、我、尊氏のけらいとして、新田かたの禮をうけ此宗清が、立べきや、うろたへたる、はぬけどり、道を立るも時による、東西に眼有、南北にみ〳〵ちかし、ゆんでもめでもかり人の、おいとりがりの天のあみ、たかに、とられて、かうくわいすな、ゐ、さ、し、に、さゝれ、て、あさましく、ちうしんの、なをくださばたれ有て新田の世を、昔の春にさかゑんや、つるの、ちとせをながらへて、一ぞく四十八たかのすゞをならべてこまどりの、くつばみをそろゆるこそ、是、めいてうのまことなり、ふるすのひなを、かいそだて、はつね、上よと、い、ひ、ければ、を〳〵、たのもし〳〵、たのものかり、はるはこしぢに立かへり、新田の一ぞく共ちどり、大將ぐんのなをあぐる、はたの手、白きはとのみね、くわいげいざんのすだちして、うへみぬわしのほまれをば、ふゆふのつばさにあらわさん、げに、尤なり、たのもしや、急げや、〳〵、あし引の、山鳥のをの、しだりをの、ながいはおそれ有明の、月よ、がらすの其形羽黑といへばでわの國、あぶしう迄も、かりまよふし、西は、ちんぜい、かうがもり、とりのはかたもをしなびけて、やがての内に、本もふを、たつとり、あとににごりなく、かう有ことはやすかたの、あふむの鳥の、なにしあふ、あづまぢさして、とぶ鳥の、とぶが、ごとくに、わかれける、彌七が情のほど、女房が心ざし、げに、たのもしきしだひなりとて、きせん上下をしなべて、みなかんぜぬものこそ、なかりけり

## 第三

偖も其後、新田一ぞく、畑六郎左衞門時よしは、義貞しやうがい有て後、わきや義助の御ちやくなん、式部の太夫義春を、世に出さんと思ふゆへ、山伏すがたにさまをかへ、先とう國を心ざし、いそぐ心はあらがねの、土山こへて、すゞが山、ふりさきみれば、我袖も入日にそむる、心ちして、なにあふとうげの、さかしきに、めざすも、しらぬくらき夜に、

ふもとをさして三重「急ける、是は偖置、爰に又、くりうしのづか兩人は、あづまぢにはいくわいし、新田の、ゆかりをたづぬれ共、月をかさねてあふことなし、此上は中國へはせこへ、なわ小島のともがら、西國には、きくち、松らの、宮方に、心を合、今一度、本望をたつせんと、ばんせいさしてぞ、いそぎけり、時に、栗生、しのづかに申やう、もとより、忍ぶ世のすまい、ろう〳〵、ゑんせつのごんじやに、ひんきうこどくのかしやくを、うけ、長道を、しのぐたよりなし、いかゞせんとぞ申ける、しのづか聞て、はてしさいらしきことばかな、かくらう人の身となりて、かうもうしやくしのいひ草は、もちゆるによしなし、只さんぞくの道ぞよし、ろせんがなくは、なき迄よ、日比互に、持合せし、力は何のためなるぞ、行あふものをかいつかみ、むたいに、はぎとり、がうどうして、心のまゝに、いそがんに、なんぢやうことか候はん、くりう聞て、おゝいわれたりをもしろや、人のおしまぬたから物、我、うでばねに、有物を、是ぞ、御へんが、一代、一せの、できしあん、たびは、道づれ、世は情、ふびんや、通たび人は、かれのにさはぐやせうづら、我らがたかのすゝが山、是くつきやうのかりばなり、先、こなたへと兩人な、ゆきゝの人をぞ、待いける、かゝる所に、義春公、畑もろ共に、とをらるゝ、もとより、よるのことなれば、くりうしのづか、此人々とはしらずして、やあ、それ成たび人、我々は此山にて、人の寶に、世をわたる、風の神と云物なり出合ものはふうんぞや、きたるいしやうや太刀刀ぬいて、こなたへ、わたされよ、みればくわいこくほうゑのそう、命ばかりはたすけんと、ばうじやく、ぶてんに申ける、山伏きいて、偖はすずがの白浪の、はげしかれとはいのらぬに、風の、神とは古への、品かへ人にておはすらん、あしくへんとうなるならば、いか成とがめのましまさん、さりながら我々は、くわいこく執行の僧なれば、他力をもつて、世をわたる、品こそかはれ我々も、同じ仲間のあくそうなり、ねがはくは其方に、ぬすみ、取たるかてあらば、ぎやくゑんながら法師めにも、そと、ときりやう、たべとぞ申ける、しのづか聞て、ゑゝすいさんなり、くび、引ぬかんと、とびかゝるを、くりう、しばしとをしとゞめ、され共山伏、おどろ

く、けしきは少もなく、何、我首をぬかんとな、尤ぬかれとう候へ共、ちと此方に入用なり、其上おやのゆづりの首、そこなひ、やぶるはふかうなり、ましてよしなき法しの首ぬすみとりて、うりたりとて、酒てのたりにはよもならじ、いかに浮世をわたるとて、あくがう至て高き事、しゆみかへつてひくからん、たとへをのれ、身に八千のつるぎをうへ、はんくわいかううがいきほひ有共、法しも、法しによるぞかし、とうざのひぎはゆるすべし、ぐそうがことばを古への、ゑんの行者と、三拝して、そこ、立されとぞ申ける、くりうしのづか、いで物みせんととびかゝるを、又かしこの山かげより、男一人かけふさがり、のふ方々、ぬかんと云もぶてうほう、又ぬかれんと云人も、よしなき、互のざれことば、ひらに双方かんにんして、ふもとへ下るたびならば、けがなきやうにおり給へ、ぬす人たちも、是よりは、手にあひたるゆきゝの人、心のまゝにはぎ給へ、是にしやういんなきならば、中よりけんくわを某もろふて、しやうくわんいたすべし、くりうしのづか、是を聞、こよひの仕合十分なり、一人づゝも、ふんずるこそ、我等がふくのいとくなり、いで物みせんと、とびかゝれば、二人もやがてとびしさり、互に、劔をぬき合、火チクリ花をちらして三重「たゝかひけり、義はる、此由、御らんじて、すけだちせんとかけよるを、時よしはつたとにらんでさばかりの大将にあはぬこと、それにひかへましませと、又欠合たゝかひしが、よれくまん尤とおしならべくんだりける、いづれも、ふつうの大力、上になり、下になり、ゑいや〳〵と、ねじ合しは、さすがにすゝがの大山も、くづるゝ計しんどうす、され共しやうぶつかざれば、両方互に、もぎはなし、あせをしぬぐうて、休ける、時に、くりう、しのづかに云様は、凡あきつしまが其内に、我々にかほどまでほねをおらせん者は覺なし、しのづかいかにと云ければ、六郎左衛門聞あへず、何それ成はしの塚とや、もし重ひろにてはなきかと云、尋る者はたれ成ぞ、我こそ畑六郎左衛門時よしと、いひもはてぬに今一人、さては一家のほうばいよ、我こそわたり新左衛門、げに、尤なりわれ〳〵は、くりうしのづか成けるは、いづれも一けのほうゆふの、あつぱれあやふきたいめんやと、よろこび

あふはかぎりなし、時よしが云やう、は、則、これに、ましますは、わきや殿の御ちやくなん式部太夫義春公、しう〳〵、一家のゑんつきず、新田の家の御うんめい、くちぬ所と悦し、誠のすがたぞ、たのもしき、時に、わたゞ新左衛門、義春公に申やう、義貞公の北の方、かうとうの内侍をも、伏見にて相まゐらせ、しばしが間やまとぢに、かくし置候と、片桐彌七が心ていを、殘さず申上ければ、義春は聞し召、偖はないしの御行衛、心もとなく思ひしに、よくこそはからい申たり、去ながらかた〳〵、一人ならず四人迄、ふだいのかしんにあふことよ、我も、せいわのうてなを出、げんじのばつようけんぜんたり、されば其かみ、我々がるいそ、頼光あそんは、あしがら山にて、つな金時、定光末竹、四人の者、しう〳〵のゑんをなし、喜悦のあまりに、しゆみの四天のかたどりて、四天王と付給ふ、思へば、昔のかれいなり、今よりしてはかた〳〵を、新田の、四天王と名付て、ぼうふのはぢをきよむべし、四人の者共承り、偖名將の御心ね、たのもし、〳〵、此君いかで頼光の、武とくにおとり給ふべき、われ〳〵四人の者共も、其いにしへの四天王、心にくしとぞんぜぬなり、所は何あふ御やうがい、いざこなたへと四人の、者よしはるの御供して、なを山ふかくぞわけ入ける、此人々のその有様、まことにゑん有ためしなりと、てきせん上下をしなべて、皆かんぜぬ、者こそ、なかりけれ

## 第四

爰に又、男色の、梅のこ立はやせてだに、とくにこゑたる、德じゆ丸、吉のゝおくに、ふみわけて、何とぞぎへいを上べきと、思ひ、立より、都に出、よの有様をうかゞふに、わつばとあらば、みとがめて、からめとれとのさたきびし、元服して男になり、其上具足の一両も、もとめてきばやと思し召、松ばや通に、立しのび、龍左衛門がもとへ行、具足もとめん、なふ、よろひ、あつらうべしとの給へば、女子共立出て、かざり、立たる、具足の内、何が御所望候ぞや、よきもあしきも、そらねなし、望しだいに召れよと、よに、しほもなく申ける、龍左衛門がひとりひ

め、のあきは、見るに戀車、引るゝ心立出て、のふぎごつな人々かな、商と云物は、賣にも、買にも、品ぞ有、御用あらばみづからにと、する〳〵と立よりて、なふ鎧は何が御所望ぞや、御よそほひのあてなれば、人の思ひをむねにたく、火おどしながら、是とても、紫すそご、假初の、かりに結ふ高ひもや、せめて甲の忍びのお、打、とけ給へと、有ければ、德じゆ丸も色なれし、吉のゝ山か、小櫻の、しばしあからむ、貌をあげ、誠に、やさしきことのはの露の、めぐみにほころびて、同じしとねに伏なわめ、もれてや、よそに白絲の、鎧の緣に上帶を、結心の草ずりは、あだ成、露の置あへず、早ぬれそむるこての內、しつかと、しめて、ほのめけば、覺へず心うかうかと、の秋の風の、今ははや、身にしむ計に、成にけり、かゝる所へ、親龍左衞門立出て德じゆ丸をみるより、いか樣是は、此程、大しゆの御せんぎこはかりし、新田殿の若成べし、ことのやうをうかゞい、師直殿へそ人して、過分のほうびに預んと、若君に近付、傍、少人は、具足望とみへて有、御好を尋ば、若君は聞給ひ、をふ、此わつぱがちやくせん鎧は、絲を、五色に入ませて、こ金ざねのためし胴、所望なりとぞ仰ける、龍左衞門傍こそと、思ひながらも、あら、にあわざる御望かな、こ金、さねにためしのどう、當代召れん其人は、中々はむしやの用ならず、いか樣御身は一方の、大將ぐん共成べきとの御心ねのふしぎなりよしそれはともかくも、御望のためしの胴、只今有合申さねば、なんばんてつをきたいつつ、ずいぶんためして其後に、よろしくをどし參らせん、先、四五日も、此所に、御とうりうと云ければ、德じゆ丸聞給ひ、其儀ならば立歸り、又こそ參り申さんと、立出んとし給ふを、野秋、しばしとおしとゞめ、父も御やどと申さるゝ、幸なれば鎧をも、御望次第にしつらいて、御心よくきせながの、御祝儀いわい參らせん、ひらにとすがり、とゞむれば、うしろかみや上卷の、情の、絲につながれて、とも、かくもとの給へば、龍左衞門悅びて、おふでかしたり野秋、たじなく御ちそう仕れと、口にはいへど心には今の內にからめとり、御ほうびに預らんと、悅いさみそれよりも、師直方へぞハヤ三重「急ける、野秋は、鎧に甲をそへ、てうしかはらけ取持て、御鎧、出來迄

の御しうぎと、御まへにこそなをしけれ、徳じゆ丸御らんじて、偖々、うれしき情の程、つゝましけれど我こそは、新田義貞の次男、徳じゆ丸と云者なり、足かゞ一家を打亡し、ぼうふの恨をさんせんと、偖こそ、具足をもとめしなり、我世に出ば此おんを、ほうずべしとの給へば、偖は、左様に、ましますか、いたわしの有様やと、しばし泪にむせびけり其時徳じゆ丸、幸なれば某も是にて元服致べし、我等がせんぞよしいへは、八わたにて男になり、八まん太郎と申なり、我も夫をかた取て、ぐそくおやは正八まん、吉のゝざわう大權現、則太刀と刀をば、八まんざわうとくわん念し、床の柱に立置て、鏡て甲ををしいたゞき、偖なのりをば、何と付べき、をゝ義與と付申さん、千秋万年と、ひとりごとしていはゝるゝ、御有、様こそ、あわれなり、野秋もやがて心へて、御元服をいはゝんと、おくの、一間へ立入、かねて、用ゐやしたりけん、あまたの鎧甲をば人のごとくに三重「作なし、式は弓矢太刀刀、鑓長刀を、持せつゝ、御まへにならべさせ、のふめでたやな古への、御一ぞく、其外、諸國の宮方共、御みかた申さんと、手せいを引ぐし、御悦に參りたり、末はんじやうの其しるし、御酒、一つとぞ、いはひける、よしおき御ゐつき限なく、げに珍しや面白や、先東國には、新田よしみのあづさ弓、とりつたへたるものゝふの、けめうは何と云やらん、野秋、鎧に立そふて、是こそは、ゐだ兵部の太夫行義なり、一門さかへるい廣し、かずならね共某が、御みかた申さんに、近國、殘者あらじと、つゝしんでこそ申けれ、次にざしたるものゝふの、くはがた打たる星甲、こん絲おどしの鎧、菊水の金物、重藤の弓持て、さも、大様に、みへしはいかに、さん候、是こそは、楠木、判官正成がちやくなん、たもん丸、正つらなり、竹馬に、むちを打しより、ゆふりよく、めいよの若者にて、四さうをさとるじねんちは、おやのゆづりと白露を、玉とあざむく計ごと、いながら萬里のかたきをさつし、戰して勝理をゐ、天地を働し目にみへぬ、きじんをかんなふなさしめて、文武をさうのつばさのしん、うきよにたれか、久きと、義をおもんずる正成が、心の花の櫻井より、庭訓を、とゞめしも、かゝる時節を末代に、ほまれを殘す程ぞかし地偖、一ぞくにはわだ

おんぢ、はやせ、北辻、しぎ渡部、あんま橋本二井川とう、地其外手せいかず多、御先手にと相つむる、つゞいてなみいし人々の、紫、火おどし黒絲に、色々のぢんばをり、思ひ〳〵の甲の色、どいとくのふの、人々か、其名、ゆかしと有ければ、抑々あれこそ、一年後だいごの天王、ほうきへすべらせ給ふ時、忠臣をあらはし二心なく打死せし、なは、ほうきの守、長としが舍弟、小太郎左衞門長持、同小二郎長高ぞござんあれ、偖、其次にひかへたる、卯の花おどしの鎧、風折ゑぼし引込しは、たれ、成らんと有ければ、是こそは、うたかたの、あわたのくわんばく道かねが末孫、ばんどう一の大力、宇津の宮ぢぶの太夫きんつななり並したがふ郎等には、はつた大とべはか南、紀清兩とう皆以、義を、金てつになぞらへて、大かうの兵なり、偖其次にひかへたる、白絲の鎧をちやくし、大様にざいおつ取てひかへしに、同様成印にて、甲に、しかをいたゞき、四尺あまりの大太刀は、いか成人ととひ給へば、是こそは、西國にて、無二の、みかたと頼れし、菊地、ひごの守武重、同ちやくし武政なり、此武政と申は、平家たて人のすくねか、ちんぜいの八郎爲友にも、をとらぬ程の精兵打物取ては名も高、かの、さつまの氏長にも、まさるきりやうの大ゆふまふ、遊色歌道はしらね共、敵にあふてのはたらきは、たとわゝ、かうもんきびしくと、かたてに、かけて打やぶり、つゝぬきどう切人つぶて、らつくわみぢんになすべきとべんぜつ流源の、よどまぬ御代は末廣き、扇、おつ取くわん〳〵と、大ひざ、くんでぞひかへける、偖其外の諸ぐんぜい、家々の馬印、風にみだるゝ、一よふの、浪地をはしるほかけ船、ふんの左に右巴、くるり〳〵、くる〳〵と、もんどりかへす風車、十二十三四八かう、納國の四かい浪、打納れば、かたきもなく、さかへん君の御行末、ちよにやちよをさゞれ、石いわほとなりて苔衣、重々の御しうぎとことばを、つくし、こたへしは、偖、おもしろかりハヤメ三重ける、次第なり、かゝる所に、龍左衞門、師直にそにんして、にら山、六郎取手と成、具足屋さして來りしが、せうじのすきよりはるかにみれば、鎧甲をきながして、大の男、す十人、なは、楠ゑだ、大だち、西名、かすかべ、どいとくなふ、一の井、木口宇津の宮と、のゝしる聲に、に

ら山、ははつと、わなゝきをうしない、手足もこしも打ふるい、せんごをぼうずる計也、龍左衞門きつとみて、のふおくれたまふかにら山殿、ふみこんで取給へ、にら山聞て、やああれを見よ、與力のせい、いつのまにかははせあつまり、うんかのごとくと言ければ、龍左衞門も、さしのぞき、みれば、大せい鎧武者、れつと引てぞなみいたる、是も同きもをけし、二人はまけじおとらじと、ふるいわなゝく有樣は、みぐるしかりける次第なり、かゝる所へ、船田長門守經政は、都の内に忍びしが、いづくにてか此由を、聞とひとしく、とぶがごとくにはせ來り、あんないなしにつゝと入、六郎みかたと心へて立よりみれば船田なり、南無三ぼうとにげんとするを、とびかゝつてかいつかみ、龍左衞門諸共に、ゆんでめてへ打たをし左右にふまへて立たりけり、龍左衞門わなゝきて我等は何もぞんぜぬなり、ゆるし給へと云ける間に、義をき野秋もろ共に、をくより立出給ひつゝ、こは、つね政か、船田かと、初めをはりをかたらるゝ、經政聞て、をのれ、たすくるものならねど、娘が情にたすくるぞ、罷しされといかりつゝ、偖にら山六郎を、むげに、ころさば情なし、己が主の師直に、罷歸りて此かたち、よろこばせよと云まゝに、みゝはなそいでおつぱなせば、みぐるしかりける次第なり、偖其後に經政は、義をきに打向ひ、思へば當家の御出世、今日の御きとう、一さし舞めでたやと、そばなる、ゑぼしひつかふで、袖をかざして立上り、あゝ、をさへた〳〵、敵を取ておさへた、天下は新田の家ならで、外へは、やらじと思ふ三重舞納め、偖それよりも、經政は、とく〳〵、あづまへ御くだりと、いざなひ申それよりも、東國さしてぞいそぎけり、かの、經政が、其有樣、尤たのもしき次第なりとて、きせん上下おしなべ、皆、かんぜぬものこそ、なかりけり

## 第五

偖も其後、片桐彌七宗清は、妻の白たへ新田のゆかり有故に、義貞の北の方、かうとうの内侍をもたすけてをとし申せしが、其身は足かゞ尊氏の、ふだいの侍なまじいに、弓矢取こともづかしく、足利新田

のあらそいの、納迄は、身をしりぞけ、浮世をよそに、見なさんと、こぞの秋より、びやうきと云、て勤をひしてきばらしに、夫婦もろ共京遊、の本ふし山をめぐれば、をのづから、心うかるゝ一ひようの、うつわ物に酒入て、こしにつけつゝ地主のゑん、花の下かげ行くるゝ、そこを其日の宿となし、詠つくして、遊ける、かゝる折節、十五六成小童の、忍ていにて通ける、夫婦は、きつとめぐわせして、つゝとよつて袖を引、是見申に御姿、まがふ所は候はず義貞の御ゆかり、徳じゆ君と見うけたり、かく申某は、片桐彌七、宗清とて、尊氏のかぼくなり、ちと、申べきことあれば、なのり給へと、ひそやかに、こへをかすめて申ける、少人は聞召、をゝ、某こそ徳じゆ丸、定て我をおそふらん、今はのがるゝ所なし、はや首打て尊氏が、げんざんに入れよとて、すゝしくこそ申されける、彌七郎手を打て、そなふにうへても紅いの、さすが源氏のねざしなり、まつたく某若君を、打奉る心なし、是成者はわれらがつま、たへと申て、新田ふだいの御かぼく、わたり新左衛門、はやかつが妹とにて御ざ候、其ゆかり故過し頃、かうとうのないしをも、みのがしたすけ申たり、今とても某、せけんのとなへ候へば、御みかたこそ、申さず共、などや、打留申べき、御やすく、おとさんため偖こそ尋申たり、少人いかにとぞ申ける、少人は聞給ひ、偖はうれしき心ざし、今は何をかつゝむべき、わらわゝ徳じゆ丸ならずらくちうの具足かぢりう左衛門が娘、野秋と申女也、おやにて候龍左衛門、とんよくの心にて、足かゝへそにんせしを、船田の經政が來り合、あやうきなんを、つゝがなく、御供申それよりも、東國方へ落給ふ、聞ば、にら山六郎が、みゝはなそがれて、立かへり、又々打手を相もよふし、竹ざは九郎が向とかや、本ふし一夜の情に、百年の命も何かおしからん、われこそ、新田義興となのりて、敵に、出合、打るゝひまには若君の、一足成共をち給はんと、偖こそか様にすがたをかへ、是迄參りて候と、かたりもあへずなきいたり、宗清、大きに、かんたんし、そのことならば女房よ、是成野秋と同道して、隨分、おつ付御供せよ、某爰にい殘て、竹澤に出合、何とぞ、手だてをめぐらし、隙をつくさん其内に、早とく落よと言ければ、白たへ悦、

しからばわらはも身をかへんと、つまのはをりにあみがさき、さしぞへさいてそれよりも、ハヤ三重跡をしとふて、おひかくるたのもしかりける次第なり、あんのごとく、おつ手の大将、竹澤九郎、てせいすぐつて二百よき、もみに、もふでぞはせ來る、彌七郎きつとみてろうせきものと、かけよつて、馬より、取て引をとせば、竹澤ゑたりとむんずと組、上を、下へとせし所を、郎等共をち合て、彌七を、取ておつぶせ、抑々、己は何者にて、かくろうせき成ふるまひ、念佛申せと云まゝに、すでに、あやうくみへし、時、彌七下より竹澤が、右のうでを、しつと取、是、お侍、われらは、名もなきのぶしなり、ふと大酒にたべゑひて、かくろうせき仕、すじなき者を、ころしても、御てがらとはいはるまじ、其かはりに御身に、よろしきことををしゆべし、お侍、とぞ、あざむきける、竹澤聞て、よろしきことゝは何ごとぞと、取て、引立めを見合、いや、其方は片桐か、彌七、是は竹澤か、先以久しやな、さりとは、ふりよのふるまひかな、もし、あやまらばかうくわいせん、そこつ、さよと云ければ、宗清聞て、いやいや、それは人による、御へんはきこゆる大力、某などがくみ打は、中々、以て叶まじ、持合たる酒きげん、おどけて、ろうせき致て有、して又是は、あわたゞしく、いづくへ行ぞととひければ、をゝ、ふしんは尤、新田德じゆ丸義興、船田經政兩人が、おつ手のやくを承て、只今、きうにおつかくる、其方は病氣とて、か樣にらくをし給ふは、あらうらやましやと云すてゝ、かけ出けるを、宗清が、まづ〳〵、まてと、おしとゞめ、ちか頃、大義千万なり、さりながら侍は、息才にて勤こそ、一生の手がらなり、隨分、忠をはげまれよ、幸是に酒の有、門出いはゝんのまれよと、こしのひようたん取出せば、是は、誠にきが付たり、しからば、じぎ申さぬと、互に、三どくみかはせば、いや〳〵、六こんかずわるし、今、三ばいとむりじいに、つぎかけ、〳〵てのませたり、竹ざはあく迄ゑひちらし、是迄成と、立所を、あゝ、さりとては竹澤よ、のみにげするは、手がわるし、此頃打たへ參會せず、しばしはつもる物がたり、今、少とて引とゞむる、竹澤聞て、やれ、ときも時、折も折、大事の打手に行者に、はなしせんとはわけもなし、爰を、はなせといひければ、むね清かさ

ねて、いやとよ竹澤、あたらしきはなしの有、ちよと、はなさんきけと云、竹ざは大きに、はらを立、わどのが樣成隙ではなし、重て、きかんと立けるを、いや〳〵咄かゝつては、はなさでいかに置べきと、ねぢあい、引あい、とゞむれば、竹澤ほうど、もてあつかひ、さあ、それならば、早々に、はなさば、はなせ、宗清とふせうがほにて立どまる、心の內こそおかしけれ、彌七はどうどひざをくみ、是は、大事の物がたり、むざとは言ぬこと成と、八方を見廻して、やあ、それなる者共よ、主を、さし置立ながら、いそがしげにきかんとは、不禮とやいはん、くわんたい也、下にいぬかと、はつたとにらんで、いひければ、あつと、こたへてぐん兵共、畏てぞ聞いたり、其時彌七ゆう〳〵としさいらしくこはづくろひ、昔昔、有所に、おゝぢと、うばと、あつたとさ、をゝぢは、山へといはせもはてず、やれ、うろたい者さりとては、人をたぼらかす、酒にゑひしか宗清、相手に成な兵共、いそげと云て、立けるを、彌七わらつてをしとゞめ、尤なりさりながら、あまりにそちがせきがほ也、それを、しづめん露はらひに、今のやうにはいひし也、しかし、わどのは義興の、をつ手に向と、聞けるが、同ならば御無用と、眉を、ひそめて申ける、竹澤聞て、近頃是は聞所、して某が分にて、義をき船田を、うたんこと、叶まじきと云ことか、彌七うなづき、をゝいかにも、すいりやうは違なし、およそ、かのとくじゆ丸、少年とはいひながら、吉のゝ山のせつてうにて、ひやうじゆつ、むるひの天狗の弟子、殊更、船田長州とて、鬼の樣成、あらおのこに、わどのが、いか程はげむ共、出合がふうん也、忽つ、かみひしがれんいひにくきことばをも、云は、なじみのほうゆふ、あしかれとてはいはぬと云、竹澤聞て何とやら、しんしやくきげんにみへけるを、彌七いよ〳〵のつ取て、其上きけば道すがら、新田ふだいの郎等、くりうしの塚、畑わたり、名張、八郎なんどゝて、一き、當千の、あら者共、へろ〳〵むしやの、五十や百、手、だ、まに、取て、せつてうする、けつき、さかんのくせ者ども、付したがふと聞て有、しぜん、きやつらに出合ば、そも、此刀がぬかれう、やあ、此こしが立べきや、咄は是迄今一つ、酒が殘ればきがゝり也、てうし、ぎりにとつぎかへれば、ゑひても、

本性有習、今の、咄のこわくなり、おく病風はさそへ共、それとはいはず、ひぢをはり、のふ、を心入は、忝、おさへた、あいよと盃の、數をも、しらずのみゐひて、かしこに、どうど、たおれふす、彌七みて、こはいかに竹澤よ、大事の、打手に行者が、ふかく成有様かな、やれ、をつかけよと引をこせば、是、何をする、宗清、討手はふるい、そんじもよらぬ、たのしみは只一すいの内也と、云こへ迄もしはがれの、しどろになつて、よこにねる、彌七、わらつて、偖も、しめたる討手かな、やあ、侍共、あれ、ひつ立よと、いひければ、皆々、あたりへ、立よりて、立ざるこしを、をし立〳〵、跡をもとめてをひかくる、宗清、はるかに、みおくりて、あつぱれ、語すましたり、咄はかうこそする物よ、昔まつかうさるのつら、あかきは、酒のしこなしと、あく迄わらつて、立たりける、忠かう、武かう、りかうもの、べんぜつ、たつせし侍やと、きせん上下おしなべて、皆、かんぜぬ者こそなかりけれ

## 第六

偖も其後、德じゆ丸義興は、いせの國にて御いとこ、脇屋義治にたい面し、其上ふだいの御かぼく、くりう、しのづか畑渡り、船田諸共付そひて、此上はごせずして、尊氏をおびやかし、吉野の君の、しんきんをも、やすめ參せ申さんと、日夜に、ぐんりよをこたらず、船田經政が申樣、聞ば、義貞の御首を、ひろひし、うぢへ、中務の丞重國、當ごく、わたらひの郡を給はり、其上內外の神宮領、ことぐ〳〵くかすめ、取、わが、ま〳〵を、ふるまふよし、にくさもにくしことに又、神慮を、あざむく大あく人、其上新田の勇將を、我、矢先にて留たりと、ぼうじやく、ぶじんにの〳〵しるよし、草のかげにて義貞公、さぞ、口をしくおぼされん、御かど出にうぢへめを、打取、給へと申けり、時に、はた六郎左衞門時よし、すゝみ出て申樣、きけばかのうぢへめは、しんしよくをかすめんため、津の市へ立出て、ことのやうをはかるとかや、いざ我々も品をかへ、市人に出立、折もよくば討取ん、はく中にて我々が面をあやしむ程ならば、二人の女にたはむれさせ、きやつがふしどをうかゞはんもとより

好色第一の氏家めがことなれば、てもなくふしどをしらすべし此義いかにといひければ、くりうしの塚新左衛門、船田を初、兩大將、をゝたくんだり〳〵、是に過たるてだてなし、さあらばひそかに出立んと、おの〳〵用意をイロ三重したりける、去程に、中務の丞重國は市に立出詠れば、名にあふ國のいせ櫻、花をつくしてかざりける、その中にをそざくら、さかり、今はの女房と、いざよひ月の、かげきよき、女はらから打つれて、立は浮名か市のなか、あきなふ品の面白き、ことばの海のそこはかと、硯に向ひ筆をそめ、戀初見初思ひそめ、淺ぎにあらで紅ゐの、もみぢ重の薄やうの、忍ぶとすれど色紙に、あらはれ、絹ののりいれや、一もとならで二もとの、杉原通ふ夜あらしの、をとせばおとす忍び妻、月のかつらの夜な〳〵にすゝきはらむとゑいじけん、是ぞおぐらのみねかみや、西の内、青きは土佐のかみなれや、幾程村をしら紙の、流よるせや漆がみ、よしやこひには我國も、もろこし紙のひとへなる、よしのゝかみは薄く共、君が情のあつがみに、つゝむ小菊のうつりがは、奉書のけむり、横をれし、空にしられぬうちぐもり、あふ夜は、心ときめきて語る思ひの尺長も殘ることばのきぬ〴〵にこゑもせわしき鳥の子や、大高小高十文字さすがいはきにわらざれば、心よわくもまにあひの、跡はづかしき布目がみ、イロ調あだになすのゝ紙迄も、取そろへ持候と、こへもあやにぞ賣にける、もとよりうぢへは好色に、我をわするる者なれば、二人の女のそばにより、偖わちよたちは、うるはしく、よしありげなるふぜいなりおとゝひ共におやあらば夫を立てもろふべし、それ迄もなし、我心に、したがひ、なんやといひければ二人聞て、おやは他國へばい〳〵に罷こし候へば、此所にはさむらはず、しゆごの仰は一天の、君のめいにもひとしきなり、誠に、仰し候はゞ、此身は君にまかすべしと、よりそひかゝりて、たはむるゝ、氏家は心雲鳥の、とび立、計うき立て、其ことならば、此夕ぐれ向ひをつかはし候べし、必、いつはり給ふなと、めひきながらも立別れ、宿所をさしてぞ三重「かへりける、わがやになれば、よひよりもひとりねやに、引こもり、其人をそし、と、松風の、そよと、むねをぞなやみける、かゝる所へ、向ひののこ、足河

太郎立かへり、かの女房はらからを、召つれ申候と、二人をともなひ出しける、うちへ、大きに悦びて、下人をばつれざるか、さん候下の者、四五人そうと申けり、しからばへいのかたはらに、敷物あたへてやどらすべし、なんぢも休と言ければ、足河ひまあけたりとかん所に入てぞ、休けり、時に、重國申様、誠にひるのことばの、露もたがはず御越は、待に、かひ有さゝがにの、いとも、うれしく候なり、酒一つ參らせんかすける絹を、取給へと、絹、おつ取てみてあれば、女にてはあらずして、少人二人のさ〳〵と、物をも、いはず立給ふ、重國おどろき、たゝんとするを、義おき氏家が小がいなしつかと取、しらずや我こそ、新田左中將の次男德じゆ丸義をきと、名乘給へば、次にふしたる足河めをさまし、すは、しれものとはせよるを、義春是に有やとて、同樣に、取てふせ、おのれごときのかりむしやを、かたきとはをもはねど共、日頃の、口のにくければ、をこなふなり、との給へば、うちへ、足河こへをあげ、やれろうぜき者と、よばはれば、すいさんなりとの給ひて、一一くびを討おとし、引さげ、ざしきを立給ふ、氏家がらうどうす百人、あまさじと、かゝりしを、くりう、しのづかはたわたり、船田もろとも聞付て、ひとへのへいををしやぶり、一もんじにわつていり、火ばなをちらして、ゝヤ三重「たゝかひける、手先まかせに、打たつれば、じうわう、むじんに討ひしがれ、むら〳〵ぱつとぞにげちつたり、偖、それよりも人々は、是ぞ出世のちまつりとて、ひがしをさしてぞくだらるゝ、せんしうばんぜい目出たしとてきせん上下をしなべてみなかんぜぬものこそなかりけれ

出世太平記終

（土佐淨瑠璃總目錄及序文）

六段物目錄

酒呑童子　和田酒盛
なごや山三　鹽屋文正
現在松風　大しよくはん
紅葉がり　楠湊川
色小町　光源氏袖鏡
難波物語　源氏十二だん
當世薄雪　融大臣
遊覽揃　定家
土佐日記　一の谷八島
女眉間尺　中將姫
三世二河白道　大塔の宮
小野道風　全盛くらべ
せみ丸　美人櫻
花鳥大全　お國かぶき
殿飾難波鑑　萬歲賴政
博多露左衞門　洛陽壽
蓬萊源氏　源氏六條通
同續源氏　柏木右衞門

泰平篁　芳野內裏
皐月十二段　相生源氏
對面曾我　牧狩曾我
兵揃　養老
傾城三國志　ぞく三國志
平がな大全　大だけ丸
今川かづら　花月十二段
末廣榮源氏　櫻小町
一心二河白道　世繼曾我

家傳秘密の奥旨は木下氏に傳て章句を世上に弘是一流を翫ふ人まきらはしきにまとはず正風なれと願ふものならし

土佐少掾橘正勝

近來土州の一曲は俗を離れ風をたて聲は梁の塵をたたしめ節は利休の茶杓よりもしほらしく都鄙なべて風をなすも亦樂しからずや予も此道を數寄て今高德の太夫にちなみ章句を弘むる事數年に有身をたて名を發すは一藝の德なり書は萬代の鏡一字の違百萬の誤を恐れ千度校合し百度琢磨して清濁を撰ふも道を思ふが故也然に頃日數板の塵芥街に滿或は筆跡紙數を減少し値の輕きを以てあやぶめんとす其書たるをみれば筋章の誤かぞふるにたらず依之愚が板行の正本には今改印如斯印出之歟

小傳馬町三町目
木下甚右衞門

# 名古屋山三郎

## 第一

序「扨も、其後、それけいせいけいこくの、むかしを鳥羽の御代の時、嶋のせんざい和歌の前、それよりもこと舊て、むろ君、あるひは江口の女、かりのやどりにたのしまんと、彼まどひこそ色なれや、イロ詞こゝに山城の國、九重の都五城より、コトバにしにあたつて、七條ゑゆしやかに、なさけの玄なを道として、とまり定ぬあまをふね、イロ詞夜々にそひ寢は川竹の、流れの君に世の人の思ひに、くゆるむねはふじ、本地すそに心は、浮嶋原とて、わけを立たる里のあり、此さとに、上林道順とて、みちならぬわざなれ共、あまたの女郎かゝへおき、我子のごとくかいそだて、らうにやく都鄙の人々の、心をなぐさめけうをなし、おのが世渡るたすけとなす、カ、ルその中に取ても、其名高間のかつらきとて、イロ詞ちら共人のよそにのみ、みてやゝみなんよそほひを、戀したはぬはなかりけり、ならひにこのて柏木とて、おとらぬほどの女郎、此二面ふたりをば、とにもかくにも世の人の、かつらきのかほばせと、カ、ル袖を引みん手がひの庵、女三の宮のおもかげも、見し柏木の花のゑもんかチクリ我も〳〵と通ひ路の、せきの、戸さゝぬ御代なれば、イロ詞きせんくんじゆのたわむれに、道順日々に富さかへ、ゆたかにうき世を本三重「暮しけり、是はさておき、其比北野のゑやにん、梅津の掃部といひしおのこ、神職は家のふう、同三十一文字の、ことの葉で成うき世もの、神前のつとめ過ぬれば、もみぢのみどりと名を付て、やうありげ成ゑばのいほ、庭にはかけひ、やり水の、ながれの君の御事を、すゞりをならし筆をそめ、わけを吉田のけんこうが、つれ〳〵くさのねをとりて、うき世つれつれといふ事を、一ッ二ッ書つゞり、カ、ルさびしき床のともとして、あかし暮して居たりけり、こゝに禁中、ほくめんの侍、なごや三郎左衛門正春が一子、なごや山三郎としはるとて、きりやうすぐれし美男にて、立ふるまひも風流の、色ある人に見せばやな、小袖のつまのつたしあらは、この年春にはぬれごろも、氣も當風の若男、ならびにふしみの里に、

ふわの伴左衛門かげみちとて、是もおとらぬだて男、金銀ざいほうくらからず、富貴成牢人あり、山三郎とたゞもなき、ねんごろなる友として、春の花見なつ河はしの、すゝみの床のとことはに、イロ飼かたりなぐさむ中なりけり、ある時両人うちつれて、北野のやしろにまふでしが、げかうだうの頃しも、山三ふわのにいふやうは、聞ずやこゝにちんせつ有、此所の女や人、梅津の掃部はこの頃しも、うき世つれつれといふ書をかく、我ゆい女よ有知る人、いざうち越てつれ〳〵の、心を聞ん伴左衛門、かげみち聞て、さいわひなり其かもんに、ちかづきにならんとて、しか〳〵と案内す、かもん立出、あんないとは誰人ぞ、いやとし春にて候なり、なになごやの君か、これよそ〳〵しきあんないかな、とし春かさねて、つれの候故により、まづはあん内申たり、さつそくながら引合せん、これこそ此屋の御あるじ、かねて申梅津氏、又こなた成御浪人、ふわの伴左衛門かげみち、いづれも我に御ねんごろ、たがひにわかき事なれは、向後かたり給へとて、ともに女きだいすぎぬれば、よものはなしに成にけり、伴左衛門申やう、貴公、うき世つれ〳〵草、かきむすび給ふよし、山三はなしにうけたまはり、御ちか付にも成申、かの書も見聞いたしたや、かもん聞て、つれ〳〵くさのあだことば、人に見せんためならず、只いちぶんのたのしみと、一つ二つつゝりしが、かく御意を得し上は、御わらひのたねともならん、是もたう座のたはむれと、かの一札をとり出し、いまた清書仕らず、とてものことに我よみて、聞せ申さん聞給へ、両人聞ていよ〳〵以てかたじけなし、いざや是にてうけたまはらんと、かしらをたれて聞居たり、時にかもん書をひろけ本讀つれ〳〵成まゝに、筆をそめ心に移るよしなし事、太夫の位を本として、女郎のたねならぬ、それより下つかたのうかれめの、手などつたなからぬ御返事、下戸ならぬこそ君にはよけれと、詞いひ續たるせいたひにも、色ある事を書つゞりさて、戀の段こまぐ〳〵と、三重聞に心もチロシ「うかれける、此つれ〳〵を、聞からに、かの里に打越、梅津氏の、おしへのごとく、女郎を呼よせ、此人數にて酒ゑんせん、山三聞て、申されたり伴左、ゑかしかもんに御出なくば、おもしろき事もなし、つれたち

給はゝ一座せん、かもんももとよりうき舟の、よき追風そいざさらば、れんぼをあげてかの里の、ツナギ地戀のみなとのよるせをも、定んものぞふわの君、なごやの殿も打つれて早三重鶴原さしてぞ上「急ぎける、かしこになれは、山三郎はかつらき、伴左衛門は柏木を、今日、やくそくの酒盛はイロヲクリ上下さゞめきわたりつゝ、本フシかくたのしみの、たはむれは、外にはいかでなつ山の、ゑげれ松山、さゝんざと、こと〻やみせんの、音にかよふは三重よにおもしろき上「けしきなり、實世の中は、花に風、月には雲のさはりにて、山三郎がこもの、あはたゝしくはせ參り、禁中の御用、きうなる事の候へば、御歸りましませと、いさいに申通しける、山三聞て、大事の御用に候へば、我はだいりに上るべし、梅津氏にも伴左にも、くるしからぬが申ても、かつらきの御方には、けふしも初てあひ申、いまだ互の心底を、かごとばかりも申さずし、うき別れ申事、言葉にいはれぬきのどくさ、思し召もいかゞぞや、とをからぬ内といひすて、たゝんとすればかつらき、けふはふしぎの御ゑんにて、ふりよに御げんを存し申、まだ打とけぬみゑのおび、ちかのむすひを待參らす、なふいかに梅津さま、夜道もいかゞに侍らへば、あのかたさまとうちつれて、御歸りましませと、道すがらの事までも、ゑみ〳〵と申にぞ、イロシチリなさけのふかきかつらきと、ふと思ひよる戀の道イロヲクリあくゑんちぎりふかくして、本フシ身にそふ敵と、成ぬるは三重後にぞ思ひ「ゑゝれける、片チロシ去ほとに、伴左衛門とかしは木は、酒ゑんのけうをもよほす時、ていしゆ用ありげに手をつがね、何共申にくけれ共、かしは木さまの御なじみ、明日ゐなかへ御こしゆへ、御いとまごひ有べしとて、にわかに御いであそばされ、何とぞこよひかしは木さま、もらいてくれとの御事なり、いかゞあらむと申けり、伴左衛門聞よりも、とかくこよひの仰せは、かく有事のはずならぬ、申ても我々は、又あふ事もありそ海、ふかきなじみの御方の、いなかへ御こし有ゆへに、今宵にわかの御出に、かしは木どのをもらはんとや、いかにもそなたへおくりなん、いそひであなたへ御こしあれ、かしは木もさすが又、なじみのすゑの事なれば、仰に〻たがひ候はんと、いとまをこふてかしは木は、

なじみの袖にぞうつりける、去ほどに伴左衛門、かしは木をもらはれしを、能事に思ひつゝ、人ゑづまつてかつらきがふしどのあたりに立忍ぶ、イロ調かつらきはねやの戸に、イロクドキ人有とだに白雲の、そなたの雲を打ながめ、こよひあひみし山三様、いかゞおやどの御ゑゆびの、心もとなや世の中は、イロ調いやな人にもよるせの有、フシヲツリ思ふはならぬ此身やと、打あんじてこそ居たりけれ、伴左衛門時分はよしと、あひのふすまをさつとあけ、やがて内につゝと入る、かつらきはつとみてあれば、よひにあひにし伴左衛門、こは何とての御出ぞや、伴左衛門聞よりも、何事ぞとはきよくもなや、いはねど色に見へなまし、かつらき聞て、いはねど色にゑるゝとは、さら〳〵以て心得ず、伴左衛門、なにしにさのみつゝむべき、かやう〳〵の次第とて、はじめよりの思ひのたけ、いろ〳〵とぞくどきける、かつらきにつこと打わらひ、流れいやしき身なりとて、御なぶりての仰かや、あゝこなたさまにはにあわぬなり、挨拶も申せばこそ、御心にやさはりなん、我身もつもらは腹立んと、とこの内をづんと立て、おくにいらんとせし所を、伴左衛門すがりつき、こはなさけなしかつらきどの、何しにいつわりなぶるべき、神かけてまことぞや、ゑたふになびくあをやぎの、おおいとをしらしき御返事を、只たのみ申これ女郎、かつらき氣色かはつて、伴左衛門を突倒し、我もこなたを侍と、見申たるに道ならず、くどき給ふは何事ぞ、流れの身とこそ成ぬ共、心迄はさにあらじと、はぢゑめてぞ申ける、伴左衛門腹をたて、すいさん成女、花も色あればこそえだはおれ、それになんぞうんでいも、ちがいたることば、此上はいやにても、むりに心にまかせんと、かつらきにいだきつく、かつらき伴左衛門がわきざしぬき、打て懸れば伴左衛門、はつといふてにげながら、人はなきかおりあへや、らうぜき有といひければ、あげ屋の者共繰寃、かつらきに取つき、是はいかにととゞむれば、わらはをいやしめ伴左衛門、かやう〳〵のていたらく、とても身も、ともにやいばにかゝるべし、あまさじ物をとおつかゝる、先はかんにんましませと、おくにいざなひ入にけり、げにかつらきがなさけのほど、心中はためしなき、ながれの君の手本やと、きせん

上下おしなへてみなゑたはぬ、ものこそなかりけれ

## 第二

其後、ィロ地ふはの伴左衛門かげ道、いらぬ思ひにちじよくをかき、ほう〳〵宿にかへりしか、ち※よくのほども口おしく、又忘れぬかつらきが、そのおもざしを何とぞして、心よく手にいれんと、あんじほれてぞ居たりける、よし〳〵本を尋るに、なごや山三にかつらきが、心をかよはす故により、我戀もじやう※ゆせず、又ははぢもかきぬれば、なごや山三に白中にて、ち※よくをあたへばかの里に、かよふ事成まじ、さもあらばつるやのていしゆ、又は上林道順、其ほかの者どもに、金銀をまきちらし、其上にてかつらきを、我手に入ばかの君、たとへ心に合ず共、元はながれを立し身の、いかで我手にいらざらんや、何とぞ山三がゑまばらへ、通ふ時節を待んとて、つねに用意を上「ゑたりけり、是はさて置、山三郎がおや、なごや三郎左衛門正春は、山三郎が里通ひ、晝夜にかぎらず通ふよし、もつともわかきものなれば、有間敷事ならねど、身の勤をもうちすて、色にまよふは侍の、本意を失ふ所ぞと、おり〳〵いけんをなしけれとも、一ゑんこれを承引せず、けふもゑまばらに通ふよし、三郎左衛門立腹し、此うへは我直に、かの嶋はらにたちこへ、きつとかんげんすべきとて、供せう〳〵うちつれて三重ゑまはらさしてぞ上「急ける、去ほとに、ィロ地山三郎年春は、通ひなれにし道芝の、露のなさけのわすられず、本地晝も人目をゑのびかさ、よるの、ちぎりはいわはしの、ィロ地かつらきが心ざし、互にふかくなるとのおき、身はしつむ共、君ゆへと、心の竹のつえをつき、あみかさまぶかにひつかふてィロチクリ島はらさしてぞいそぎける、かゝる所に伴左衛門、山三郎を見つけて、何心なく立むかふ、いや久方や伴左衛門、頃日内はかれこれと、互のせわに取まぎれ、參會もなかりしが、かはる事も候はぬか、伴左衛門聞て、何打絶し久しやとは、おことはいづくいか成もの、我ゑる人にはなきものを、世にはおかしき者ありと、あざ笑てぞ申ける、山三聞て、こは心得ぬ云事や、たゞし酒にも醉けるか、伴左衛門聞よりも、ゑる人なら

ぬおことが、何方にて酒をもりしぞ、よし〳〵それも心得たり、きやつがてい何様にも、ばい〳〵のものなるか、能けいせいにおもはれんと、さしつけもかたなをさし、侍のまねをして、島はら通ひするゆへに、身のくはんくはつをとがめられ、はぢをかゝんがめいはくさに、ついせうらしく我に向ひ、かくらんぼうのあいさつ、さいはず共此男、なんぢらていのかせものに、かまふ事はさらになし、はやく通れ若きもの、とは云ながらかさねては、ついしやうけいはくも仕れ、いつもかやうと思ひつゝ、見ぬふりをして通りなば、田の中へたゝき入ん、とにもかくにも此おのこ、きげん次第ぞはや通れと、にが〳〵しくぞ申ける、山三聞て、こは心えぬ雑言かな、ゑゑ思ひ出したり、日外のちじよくを、今此時にかへさんと、思ふ所存のかく迄に、ざうごんにおよぶかと笠、取てなげすて、實我ながらそこつかな、よくよく見れば玄る人ならず、この比かつらき山の白雲の、つよき風にふきたてられ、そのにげあしの白雲が、我まなこにおほねつゝ、見ちがへ申ゆへにこそ、れうしを申て候なれ、ことにばひ〳〵の者なるが侍にすがたをにせ、玄まはら通ひするなどゝ、能見立たる其まなこと、我見違たるまなこに、取かへてもらふべし、けふはきげんよろしきとの、仰を聞ばいよいよなり、まなこをぬいてくれ給へ、もしもいやとの事ならは、首共にもらふべし、早〳〵返答仕まつれ、伴左衛門、なに我まなこをくれよとや、又くれざらはくびとらんと、口にまかするくはうげん、はじめゆるせし故により、かつにのつたるざうごん、おのれがくびをとるか又、わがくびをとらるゝかと、刀をぬいて切てかゝる、山三柄にてうけとめ、つけ入にすつと入、伴左衛門かもちたる刀の、柄をにぎつてやあ、命を玄らぬくせもの、是にても伴左衛門我にてきたひ仕るか、いかに〳〵と申ける、伴左衛門はせきめんして、物をもいはず居たりけり、伴左衛門か若とう、主の難をすくはんと、刀のつかに手を懸る、伴左衛門ふりかへり、れうじをするな玄ばらくまて、偖山三始より申せしは、皆ざれ事ぞ誤りたり、ゆるし給へと申ける、山三郎打笑ひ、何はじめよりのらうぜきは、みなざれ事とのいひ事や、いやいや御邊もさがの人、かくこはざればしたまはじ、

伴左衛門、いやすは八まんも正らんあれ、まつひらゆるしてたひ給へ、山三聞て、かく請文の上からは、たとへ偽りにもせよゆるすべし、かまへて以後をたしなめと、かしこへかつはと突倒し、いらぬ事にひまをとり、さごそや君の待ぬらんと、立別るゝ所を、伴左衛門刀をぬき、主従三人切てかゝる、心得たりと渡し合、おつつかへしつきりむすぶ、され共山三、力量有て太刀打も、名を得たるおのこにて、一所にまくり打なぐれば、伴左衛門主従、かなはじとや思ひけん、跡をもみずして逃にけり、いずくまでもと思へ共、さしてふかき意趣なしと、刀をさやにおさめつゝ、三重ゑまはらさしてそ上「急ける、去ほとに伴左衛門、はじめの言葉もちがひつゝ、はぢのうへにはじをかき、むねんながらにかへりける、かゝる所に、三左衛門正はる、ゑまばらさしてぞいそぎける、伴左衛門見るよりも、あれに見えしちやうちんの、もんはともへと見えて有、正しくなごや山三がもん、ふしぎさよと立よれば、おやの三郎左衛門なり、伴左衛門見るよりも、かさね〳〵のちじよく、せめておやを打取て、むねんをはらさんわかとうと、めくせして刀をばぬき、さきにすゝむちやうちんを、まん中より切ておとす、すはらうぜきものあまさじと、刀ぬきもち切て懸れば、同小者兩人も、わきざしぬひて渡合、こゝをせんとぞ切むすぶ、三郎左衛門わかとう、伴左衛門にきらるれば、伴左衛門がこもの、三郎ざへもんにうたれけり、ちやうちん持し小者は行方しらず逃たりけり、ばんざへもん主従、三郎左衛門を引つゝみ、こゝをせんとぞ戰ひける、三郎左衛門正春、心は矢竹にはやれども、すくやか成伴左衛門、ことに貳人に切たてられ、請つ流ひつたたかひしが、すかゑよのきずをかふむり、こはむねんと倒れしを、伴左衛門主従、たゝみかさねて切つくる逃たりし小者、山三にかくと云ければ、とぶがことくにかけ來る、伴左衛門主従かなはじとや思ひげん、早三重あとをもみずして、上「逃にけり、いづく迄もとおつかけしに、伴左衛門がわかとう、かけ隔たつてむずとくむ、すいさんなりおのれめと、かしこへだうと打倒し、くびかき切て立上れば、伴左衛門は見えざりけり、ゑゝ口おしや〳〵、せんなきやつにくみとめられ、かたきをにがしゝむねんやと、

さて正春を見てあれは、數か所きずをかふむり、つ
いにむなしく成にけり、山三郎なみだをながし、よ
しなき色にまよひつゝ、おやをうたせし口おしや、
命を限りに伴左衞門、一太刀うたで有べきかと、な
みだながらに山三郎、ふしみを指てかへりけり、か
の山三郎が心のうち、むねんとも中々申はかりはな
かりけり

## 第三

「其後ィロ詞なごや山三年春は、おや正春を思はずも、
伴左衞門にうたれしより、牢人の身となり、こはた
の里に居たりし事、世上にかくれなかりけり、され
ばかつらき此事を、きくとひとしく身もそらに、こ
はさていかに其人は、ィロクドキ心にもなさぬふかうぞ
や、是もたれゆへ我からのもにすむ虫の、音に立て、
ィロ詞まがきや袖をひたすらん、ィロクドキあけぬ暮ぬ
と思ひねの、枕ならではしる人も、なき身としれば
何事も、世におそろしき事はなし、しよせんくるわ
を忍び出、君を思へばかちはだし、こはたの里に尋ね
行、とにもかくにも成なんと、思ふ心を一すしに、
へいをのり越かつらきは、忍ひて三重(ママ)こはたへ上「急
きける、去ほどに、なごや山三とし春は、牢人の身
となり、こはたの里に引こもり、おやをうたせしむ
ねんと云、一度かたきをうたんとて、思ふ内にもか
つらきは、いかゞしてこそ有つらめと、かなたこな
たをかこちつゝむねんながらのなみだかな、かゝる
所にかつらきは、やう〳〵いほりにたづねきて、と
ぼそをほと〳〵と音づるゝ、山三ふしぎに思ひつゝ、
刀押取たそ、ィヤたれ成らんといひければ、山三のこ
ゑと聞よりも、のふ、なごやさまにてましまさずや、
上カ、ルかつらき是迄參りたり、爰あけ給へといふよ
りも早ばし、涙にむせびけり、山三大きにおどろき、
やかてとぼそをおしひらき、先こなたへと内にいれ、
何としてかは來りけん、かつらき聞て、何としてと
はきよくもなや、君かくならせ給ふもたれゆへぞ、
よしなき我をひたすらに、ィロクドキあらそひ給ふ仰
せにぞ、只何事も〳〵、みなみづからが故なれば、
命さかんとたれ人に、ィロクドキ相見えながれを立申
さん、御身の御手にかゝりつゝ、此世を去て後の世

に、かならず廻りあふべしと、思ひ定て参りたり、御手にかけさせ給へとて、ゑはし涙にむせひけり、イロ詞山三郎もなみたをながし、なかれの水のいさぎよき、心ざしこそうれしけれ、とはいひながらいかなれば、御身をころしそれかしが、かたきをうつてあればとて、世にありがほにながらへん、まつ〳〵くるはに立かへり、それがしに一へんの、ゑかうをたのむかつらきと、いろ〳〵とぞいさめける、かつらき見て、あゝみれんなる有様かな、其心と知るならば、ひとり死なんに是迄は、たづねきたりし念なさよ、いかなるふちにも身をなげて、後の世にこそ待申さめと、ふり切て出ければ、山三たもとにすがりつき、あゝあやまつたりかつらき、いかにもおことが心ていに、まかすべしとのたまへば、かつらきもとゞまりて、たをれふしてぞなけきける、やゝ有て年春、さて爰にてがいせんか、かつらき承り、我君とそひまいらせたや、行すゑ久にあひ申さん、ちかひを北のゝ御神に、かけて一度は御庭を、ふみ申さんと立願せし、こよひ北野へ忍出、願をほどき其後に、七本松にて心よく、せうがひをとげ申さん、



山三聞て、此上はいかやう共、御身の心にまかせんと、七本松にと心さし、三重其用意をそ上「ゑたりける、實や戀路に、まよふ身は、やみのうつゝの夢とのみ、今は此世をすぎの戸の、あけぬうちにとかつらきの、久米寺のはしのかけてげに山三と、共に立出る、こは誰ゆへぞ君かため、おしからざりし命ぞと、おき別れさへものうきに、ふしみの里をいつかまた、見んと思ふにむねの月、くもる夜ふかき道すがら、明ぬ空さへ五かうのみや、そなたの方にふしおかみ、野原の露にすそ濡て、ぬれて染にし君とわが、ゆかりの色やむらさきと、さくふじのもり淺からぬ、本フシ中ふかくさの秋風は、いなばそよ〳〵いなりのみや、イロクドキほうへい申行さきを、東福寺をも打過てげに數ならぬ我々が、身をなけかまじと思ひ出の、せんゆうじの御寺には、下イロ詞何れの天子もほうむりて、今にたへせぬ法の聲、ちかひたつとき佛舍利の、むかしを聞は、そのかみそくゑつきのげだう、佛ゑやりを、ぬすみ取て、逃んとすれば御しゆご神、いだてん追かけ給ふにぞ、外道は下界へおちはしや、二たび御寺のほうぶつは、今に絶せじいま

ぐまの本フシくはんせおんをいのるにぞ、大慈大悲の弓のつる、道引給へと一すじに、八十島心の名を殘す、三十三間よそに見て、十六丈の御佛を、念比にふしおがみ、音羽の二ッ三重嶺の、瀧つ瀬に心も、すめる清水寺、八坂の塔を打すきて、イロクドキぎおんのやしろにまふでつゝ、ふかくちかひを夕玄での、みしめ繩手をはる〳〵とイロチクリ三條通りにさしかかり、やう〳〵あゆみ北野のみや、七本松にぞつきにける、かつらきやしろに打むかひ、ねんころにふしおがみ、もはやさいごも近付ぬ、かならずしも年春さま、みづからむなしく成ぬ共、みれんに見えさせ給ふなよ、いかにもしてかたきをうち、御親のもうをう、又みづからが思ひをも、はらしてたばせ給へやと、思ひ切たる言葉にぞ、いとゞ亂るゝ計りなり、山三聞て、なにとしてかはおくるべき、只今がさいごぞや、念佛申せかつらきと、刀ぬき持立まはれば、心得侍ふなむあみだ、なむあみだふつととなふれ共、打つけがたくぞ見えにける、かつらき見て、あゝひけう也、年春さま、さほどにおくれ給ひては、本望はとげ給はじ、とはいひながらにくからぬ、水からを討んとは、いかゞ覺しめさるべき、所詮玄がいを仕らん、かげをかくしてたひ給へと、山三郎がわきざし取て、玄がいせんと玄たりしを、山三あはてゝおしとゞめ、あやまつたりかつらき、いかにもさいごをいそくべし、じがいはまて、いや死なんと、あらそふ心もよは〳〵と、玄ばし涙にむせびけり、かゝる所へ北のゝ社人、梅津かもんは公家方より、むさうびらきの連歌有て、すでに百ぬんみてければ、席を去てかへりしが、七本松のほとりにて、人聲をきくよりも、ちやうちんをよせさせ、ちか〳〵と見てあれば、なごや山三とかつらき也、是は〳〵と引わけ、いかなる事ととひにけり、つゝむべき事ならねば、ありのまゝにぞかたりける、掃部聞て、さてもあやうき仕合かな、そこつのふるまひあるべからず、聞ばかたき伴左衞門、西國方へのきたるよし、さいわひそれかしが伯父、美作に罷有る、山三はそれへ立越て、伴左衞門をねらふべし、かつらきはそれがしと、一先くるわに立歸り、うきながら、右のつとめをなし給へそれといつは、伴左衞門御身に心のこるゆへ、山三の親を討し也、山三美作へおもむかば、

かたき伴左も都に來り、わすれぬはゑうじやく、又島原にかよひきて、御身をだにも見るならは、色にまよひてあいなまし、其時よつくもてなし、内證をゑらせ給へ、早々丸國へ人をこし、山三をよびよせ相談し、かたきうたんはかり事、此上は何事も、只それがしにまかすべし、こゝはとちうの事なれば、まづ〳〵ゑたくにともなはんと、かつらき山三を伴ひて、家路をさして歸りけり、山三かつらきが有さま、あつぱれあやうき事共、梅津のかもんがたのもしさを、きせん上下おしなへて、皆かんぜぬ、ものこそなかりけれ

## 第四

「其後、梅津の掃部の方よりも、かつらきを送りしゆへ、上林道順、よろこびながらも腹立の、よの女郎の見せしめに、色々とせつかんす、なをもはらにすゑかねて、めしつかひに云つけ、所詮あのかつらきを、右のつとめに出さんは、よその聞へもいかにせん、下の肩へ追さげよと、むざんやなかつらきを、つぱねのつとめにおいさげしは三重なさけなふこそ上「聞えけれ、去程に、かつらきは本地もとよりつとめのあさましきうちよりも、みはしちかきつぼねにおり、あるかなきかのうきすまひ、なみだや袖を、ゑばるらんとはおもへ共、君ゆへと、本地思ひ定し心には、浮もつらきもわすれぐさ、局の内も住よしの二ッ三重きしの姫松いく世まで、かくうらめしき川たけの、ふしては夢にその人を、本地見まくほしさようつゝにも、レイゼイわすらればこそとひたすらに、かわくまもなきたもとかな、イロ調さるによつて浮世人、かつらきこそは道順が、はからひゆへに思はずも、つぼねへおりしと夕ぐれの、門立ゑげき、イロナカシおざゝはら、戀風慕ふにかつらきは、つや〳〵なびくけしきなし、本地とにもかくにもかつらきは、なさけのふかき、女郎と三重ゑたはぬものこそ上「なかりけれ片チロシ去ほとに、下イロ地梅津のかもんは、かつらきが局に尋ねまほしく、色々と、やつす姿はすみ衣、人目をゑのぶあしろがさ、ゑづくにぬるゝかの里の、下イロ地其かつらきのかみの町、あまたの局をよそながら、三重心にかけてぞ「通りける、その折ふしに、

かつらきは、わびしきまゝに門立し、そなたをなが
め居たりけり、折しもあたりに人はなし、かつらき
どのかといひければ、なふ、梅津さまにてましますか
と、まつさきだつは涙かな、イロ地かつらきなみた
をおしとゞめ、山三どのゝ御ためと、仰によつてか
へりしに、かくうらめしき身と成し、イロ地みづから
が心のうち、思し召てたび給へと云ばし、なみたに
むせびけり、かもん聞て、もつとも也、さりながら、
にくからぬ山三と、思ひすてゝおくりなば、かく淺
ましきつとめをも、いとはじものをそれがしも、此
ていに成給ふと、人々のうわさゆへ、心もとなくお
もひつゝ、早々たづね來らんが、掃部と道順知なら
ば、また御ためもあしからんと、かく身をやつし參り
たり、聞ばふわの伴左衞門、山三西國へおもむくゆ
へ、すりちがふて此ほどは、都あたりに來るよし、
さるによつて西國へ、急々に飛脚を立、山三を此方
へよびこさん、少の中のつとめぞや、此事申さん其
ために、かく身をやつしきたりたり、イロ地かつらき
は聞よりも、嬉しき今の御たづね、ゆかりのするとて
てかたじけなし、とは思へ共かの人の、御事のみを
わすればこそ、なふ、梅津さまかもんさま、いつさて
あはんとくどくに、そともに袖をぞぬらしける、か
もん聞て、今申通り也、遠からぬうち便せん、もし
もや人の見とがめば、おためにもあしからんと、い
とまをこふて立出れば、かつらきたもとにすがりつ
き、こなたさまをせめてもの、その人のゆかりぞと、
思へは心もなぐさむに、今しばしとて押とゞむ、い
や〳〵時こくうつるほど、萬事ゆびのあしければ、
又ちかき内參りつゝ、こま〳〵とかたらんと、カヽル
ひかふるたもとをふり切て、三重かもんは家路に上
「歸りけり、片チロシそれよりも、かつらきは、うつゝ
なき心となり今は人目もはゝからす、まかきの外に
はゑり出、里がよひの人々を、見付ると何としてか
はなごやのどの、見ぬふりはつれなやな、こなたな
る忍びかさ、つほねのつとめと成ぬれは、もはや替
らせ給ふかや、いかに我つま其人と、ひたすら、早三
重狂女と「成にけり、去ほとに、道順いよ〳〵はら
をたて、所詮あのていにては、つとめの道はかなふ
まじ、にくさもにくしかつらきを、きせん往來の道
ばたに、おいはなしすつべし、かた〳〵と云つくれ

ば、やぶれたりしのり物に、かつらきをうちのせ、大坂口にすてけるは、なさけ早三重なふこそ上「聞えけれ、是はさておき、かつらきに付そひける、かめといひしかいぞへ、おさな立の比よりも、付參らせし事なれば、せめてはいかゞおはするかと、言葉に成ともとぶらはんと、只ひとりすご〳〵と、大坂口へぞいそぎける、よどの邊に成しかば、かなたこなたと尋れば、あさましきのり物の、道のほとりに捨て有、是なるらんと立寄て、さしのぞきみてあれは、本地あわれ成かなかつらきは、ふしをづみてぞなき居たる、はつと思ひ戸をひらき、カヽルなふかつらきさまにてましますか、こは淺ましきすがたやと、まづさきだつはなみた也、イロ詞かつらき聲を聞よりも、のり物よりよろぼひ出、さて久かたや山三さま、イロ詞君ゆへにこそかく迄に、淺ましき身とはなれ、我思ふほど其かたには、思しめさぬがうらめしやと、聲をはかりになき、居たり、あゝうつゝなき御有さま山三さまにて候はす、みづからはかめにて有、こはそもいか成御事ぞ、なふ心ををづめ給へとて、いろいろとぞいさめける、かつらき心ををづめつゝ、よく〳〵みればかめにて有、イロクドキ御身をだにも見わすれし、みつからが心のうち、思ひはかり給へとて、又さめ〳〵とぞなきにける、げに理り成御心、みづから尋ね參りしも、あまりの事のいたはしさに、いざなひ申いかやうとも、いたわらんためぞかし、かならず心を取なをし、御そくさいにてましまさば、一度は戀しき其人に、めぐり合申さんと、かたりなぐさめ居たりけり、かゝる所に、山三郎年春、西國へ打越、其器量はつめいゆへ、りつをんの身と成、かたき都に有よしを、掃部方よりつけ來れば、首尾よくいとま申うけ、供人あまた召連てイロチクリ都をさしてぞのぼりける、道のほとりに破れたる、のり物に付けるは、見たるやう成女ぞと、かごをよせ見てあれば、かつらきに付添し、かめと云女也、こはそれ成はかめなるかや、山三さまにてましますか、かやう〳〵と申ける、山三かごより飛おり、扨は左樣に有けるかと、頓て戸をおしひらき、なふかつらき山三こそ、只今都へ上る也、こはそもいか成有樣と顏と〳〵を見合て、もろきは今の涙也、山三かめに云やうは、かく白晝にてこま〴〵と、うきやつら

さを語らんは、人の見るめもいかゞ也、まづ〳〵たびやに立入、つもる思ひをかたるべし、それ〳〵と云ければ、山三がのりし乗物にかつらきを打のせ、宿やをさして急きける、實や括せぬちぎりこそ、ふかきなさけと聞えけれ、かつらき山三がうれしさを、きせん上下おしなへて、みなかんせぬものこそなかりけれ

## 第五

「其後、なごや山三とし春は、戀しゆかしきかつらきに、大坂口にて廻りあひ、よろこびいさみそれよりは、北野をさしていそぎけり、梅津が方にあんないこふ、かもん立出、山三郎にたいめんし、むかし今の物がたり、かつらきを見るよりも、よろこぶ事はかぎりなし、其時かもんいふやうは、さてもふはの伴左衛門、此ほど島原に、また通ふよしを聞付たり、道順がふるまひ、にくさもにくしことに又、伴左衛門も通ふよし、ひそかに里に打こへて、道順にあひ申、かたきをうたんはかり事、かくはからはん山三郎、げに〳〵是はもつともと、前後のしゆびをいひ合、島はら三重さしてぞ上「急きける、去ほどに、なごや山三年春は、むかしに替らぬ出立の、忍びあみがさまぶかにきて、上の町上林、道順がたちに行、先あんないをこひにけり、どうぎゆんふうふたちいで、こはめづしらき御出と、やがておくにせうじけり、その時山三云やうは、それがしきたるは別義なし、かつらきをつれ出し、ふさいにせんと思ふ故、其心得にて參りたり、是は當座の音物とて、道順ふうふ下々迄金銀をつかはしける、道順よろこぶ内よりも、かつらき其まゝ有ならば、いよ〳〵の事成に、せんなき事に追出し、こうくはひすれどかひぞなき、おい出せしと申ては、いかなるうらみかうけぬべし、いつわらんと思ひ、わざと涙をながし、かくけつこう成御みやげを、うくるに付て我々ほど、くわほうすきものはなし、御まへさまおもはずも、御牢人となり給ひ、ことにさいこくへ御こしを、かつらき聞とひとしくやまふとなり、いろ〳〵かんびやう申せ共、ぎやうごふなればかなはずして、むなしく成て候也、まつごのせつもひたすらに、只御まへの事

をのみ、申出してふびんやな、むなしく成て候と、カ、ルまことしやかにいつわりて、そらなみだをそながしける、山三おかしさ身にあまれど、わざとおどろくふせいにて、さてはさやうに候か、せびもなき仕合なり、かつらきが住たりし、此家の事なれば、いかでおろかに思ふべき、さいわひ西國より、ゑやくはい成人伴ひしが、同心し來りたり、道順聞て、御心安ければ、こなたへ御入あそばすべし、山三聞てそれ〳〵と云ければ、かつらきかもんもろ共に、大小をよこたへふかあみかさにふくめんし、やがて內にぞ入にける、道順見て、みぐるしき所へ、能こそ御入あそばしたれ、山三さまはむかしより、わけて御目を下さるゝ、さておもてには御忍び、わたくしが家にては、いかでくるしう候へき、御かさをもとり給ひ、御きうそくあそばすべし、山三聞て、道順申もことはりなり、何かくるしう候べき、かさとり給へといひければ、心得て候と、兩人かさを取ぬれば、梅津がかもんとかつらきなり、道順ふうふきもをけし、カ、ル物をもいはずあきれはて、さしうつぶいてぞ居たりける、梅津も山三も云樣は、いや〳〵おどろき申さるゝな、申てもかつらきは、御身のやしなひ有し身の、よの女郎の見せしめとて、かくつらかりしはことはり也、もつともうらみも有つれ共、かくあふ上は別義なし、かつらきが身のしろも、しかるべく送るべし、いかに〳〵といひければ、道順いきをほつとつき、げに有かたき御心てい、さやうにおぼしめされなば、いよ〳〵もつてかたしけなし、けふはゆる〳〵御酒盛、御なぐさみましイロチクリませとて、いろ〳〵もてなし申ける、山三梅津道順を、ひそかに招きいふやうは、山三はねらふかたきあり、聞ば此ほど其男、此地へ通ふと聞て有、此里のおさなれば、うき世を忍ぶ人々の、そのふるまひをば見しりなん、道順承り、よからぬ事に候へ共、島原に住なれて、うき世人の風流は、自然と覺申たり、あら〳〵かたり申べし、是も當座の御なぐさみ、しかたにいたし申さんと、あふぎおつとりそれ〳〵の、忍ぶ戀路のふりすがたを三重いち〳〵次第に上りかたりけり、先此里と申は、方六町にかこひをなし、あまたの君をかざりたて、よゝの人のなぐさみに、袖引つるゝゑやみせんの、いとおしらしき、言の葉の、

露の本地なさけのぬれ衣、七重八重九のへの、花の都なれは、なかめもあかぬ風流、通ふうき世の人々の其有様こそ色々なれ、夢とみじかき世の中に、さす長かたなゑやんとして、はつばと袖をふる雪の、おも白小袖ほのめかし、うわぎ〳〵は物すきの二ッ三重うらは明石にすまちかく、ちん鳥あしべの立なみを、けまはしにぬいかくす、かくれかさにも床しきは、ときめく人の風ぞくなり、又は夜々こと通ひきてあなたのまがきを、立のぞきこなたの、格子にやすらひて、いつのまゝ成御事そや、イロシチリ遠からぬうち相生の、まつ斗りなりよしや松、ときはの色のかはらずに、おはしますこそうれしゝと、心とゞめぬあだ人も、あまた此地にありはらの、むかし男におとらじと、きりやうをおもてにあらはして、君にあふせの人も有、かたちは山のかせきにも、心の花は、有物を、ひかはひかれんあつさゆみ、やさしき言葉をもとゝして、ゑのびくるわに通ふもあり、あるひは君に青柳の、風流成し色このみ、すがたに色やこのむべき、心ざしこそ道なれど、あるに任する人も有、又人しれず君と我、ふたりぬるよをたのしむに、あまたの友をさそひきて、女郎たちに人よせの、さいつさゝれつたわむれて、うきをなぐさむうき世歌、手びやうし人にはやさせて、ねよげに聞ゆつゞみぐさ、たいこのはやしに興をなし、ことをのそむも候と、品ふりかたちそれ〳〵に、物かたりゑたりしは、さて、げにおもしろふぞ聞えける、梅津も山三も一同に、これにては去れがたし、いかゞせんとそ申ける、道順が女房すゝみ出て申様、此ほどふしぎの人人の、夜る〳〵此地へ御こし有、夜中にもふかあみがさ、一やうにふくめんし、せいかつこうもなりふりも、紋所大小、同じやうに出立五六人つゝ打つれて、まがき〳〵を見物有が、さしていづくの女郎にも、あひ給ふていもなし、もしかやうの人にても、伴左衛門にて候はずや、山三梅津聞よりも、あつはれそれこそふしぎなれ、かた〳〵は見ゑるまじ、さて又今宵も來らんや、女房承り、毎夜來り候へば、今宵もさだめて參るべし、山三梅津日本一、うたがひもなき伴左衛門、あんおんにて置まじき、日比のうつふんはらすべし、萬事は頼むといふまゝに、心ゑづかにしたくをする、道順かしこまつたりとて、やが

て座敷をずんと立、下々をまねきよせ、そのもの共のきたりなば、町のものに申つけ、大門をさしかため、もれぬ様にいたすべし、我又よからんおりからに、おもてのかうしを、ほつと、ほと〳〵たゝかばすわはやと心得て、用意せよ、さて又時分をはからいて、壹人つゝ、忍び〳〵に出べきなり、かまひて〳〵あわてゝことばしゝそんすな、うむのふたつはこゝなりと、やがてようゐをしたりけりかの、道順が心ざし、時に取てのちうこうやと、きせん上下おしなへて、みなかんせぬ、ものこそなかりけれ

## 第六

「其後、すでに日もはやせい山に、かたぶく比にも成しかば、家々のまがきの内、ともし火をかゝげつゝ、あまたの女郎きらびやかに、かざり立てなみいれば、きせんくんじゆの色々に袖を三重つらねて上「通ひくる、げに世の中の、なぐさみかな、かゝる所に、ふわの伴左衛門かげ道、おなじやうに出たち、以上五人友なひ、ふかあみかさにふくめんし、まがき〳〵を立のぞき、けんぶつして通りけり、道順がまがきに、やすらふ所に、うつせみといふ女郎、かうしのほとりにたゝずむを、伴左衛門いふやうは、あつぱれ見事の御すがたや、しかし御名の聞まはし、うつせみ聞て、名はかずならぬものなれば、申てもそのかたに、何とてしろしめさるべし、つれたる男いふやうは、あれこそうつせみの君とて、まがきに光〃源氏だに、おもひそめにし君ぞかし、伴左衛門きくよりも、げに聞およびし御かたぞや、我たましゐもぬけのきぬ、うつせみさまの事ならば、いのち成共おしからし、うつせみにつこと打笑ひ、いつわりにもせよ嬉し、御ゑる人になり申さん、伴左衛門よろこび、御しる人に成ても、偖かなはぬ我々、去ながら、今生の思ひ出に、御しる人に成らんとて、まがきにひしと立寄を、うつせみとくと、御知〃人に成申さんが、しかし御おもて見ゑらでは、かさねてのためなればと、まがきの内より手を出し、伴左衛門があみがさ、押取てすてければ、ふくめん共にとれにけり、伴左衛門こは女郎、人目忍ぶの通ひ路に、あからさまなる事共は、きのどくに候へども、君なら

ずしてたれか又、取べきものも候はずと、たわむれし所へ、山三郎立よつて、久しく候伴左衛門、おことを待こそはるかなれ、かくごせよといひければ、伴左衛門はつといひしが、今はのがれぬ所ぞや、尋常にうちはたさんと、兩方へ立ならぶ、所のもの共、かねて用意の事なれば、門々をさしかため、高ちやうちんを出しければ、早三重只まんどうゑの上「ことくなり、日比たのみし、事なれば、伴左衛門方くみせしは、以上五人かためける、山三がかたには、梅津のかもんならびにかつらき、以上是は三人にて、こゝをはれと、切むすぶは、早三重花やか成ける次第なり、去ほどに、山三郎が方にては、身命をなげうつて、秘術をつくしたゝかへ共、伴左衛門が與力のもの、一たんかわせし事なれば、逃じたくの心にか、四人のつれのこらず、みな手の下にうたれけり、伴左衛門切て出、山三郎とわたし合、ゑのぎをけづりつばをわり、切先よりも火ゑんを出して早三重こゝをせんとぞ上「戰ひける、うんのきはめの、かなしさは、山三が太刀をうけはづし、かたさきを切つけられ、たぢ〳〵とする所を、山三やがてつゝと入、伴左衛門をおしふせ、たゞ今がさいごぞや、ねんぶつ申せ伴左衛門、なむ、たむけ申父ゑやうれう、とんしやうぼだいと首中にうちおとし、今は本望とげたりと、ゑやうこのため、梅津かづらき、くるわの者どもうちつれて、所のゑゆごにうつたへ、本領あんど相違なく、かつらぎと二世かけて、さかゆくすゑとはんじやうせり、せんゑうばんせいめてたしとて、きせん上下おしなへて、みなあをかぬものこそなかりけれ

名古屋山三郎終

# 京四條おくに歌舞妓

土佐少掾正本

## 第一

序葉手「おどりきそへや、らくやうの花の、ちよらうの、なりふりは、うき世ぼうしをゑやんときて、歌はやす拍子のそろふた、江平おまへに畏り、いざよひながら月かげも、まだ宵なりと存ぜしに、明わたるぞと夕がらす、カヽルあげ挑燈もゑら〳〵と本フシはやゑのゝめとみへ候、みたちの首尾もいかゞなり、カカルはや御立といさむれば本節おくにはなごり、をしまれて誰かせいせんみたちのゑゆび、とうじ天下にかくれなき、今川の仲秋と、申す御身もうき世ふう、世はわざくれぞ今ひとつ、舟歌ヤッシをんどを肴に御酒あがり、それより向ふの茶やのみせィロ地つかのま計り夢をみて、おかへりまし〳〵候へと、とゞめ申せば江平は、つね〳〵わが父大道寺、鐵山と諸共に、ほんぎやくのくはだてなし、鬼にこぶもと思ひゑに、おくにが詞にちからをゑて、我もさは存れ共、内々御ぞんじも候はん、御かろうあら川刑部、同一子小六郎が、いらざる御いへ重代の、賢人だてにへんくつの、かんげんほとんど耳にあき、我々ゑきさへふ忠のせめ、刑部がきげんそんじては、おいへの奉公成がたし、ぜひ〳〵おかへりあそばせと、そやしたつれば仲秋公、扨は汝はあら川を、此仲秋にもかへじとな、あら川とても某が、かゑんなれば明日より、役義をけづり下さんも、又は所領をもつしゆせんも、我らが心次第なり、重をんをゑし某に、ちゑよくをあたへ當分の、あら川がゐを恐るゝは、まづ〳〵汝を今よりして、かんどうなりとせき給へば、江平かつにのつ取て、仰はしごくに候へ共、今あら川がいせいには、御家中一とうとぶ鳥も、只一言に吸物の、わんにもとびこむはね切なり、今川の兩家老、あら川刑部大道寺、鐵山がせがれなる、此六どうじ江平が、おためをぞんじはゞからず、くわんたい申上し段、まつひら御めん下さるべし、御をんの主君へふた心、有べきやとの御目がね、君共をばへ申さずと、遠手にまはす猿猴の、そらうそぶきしざんげんに、わかげのいたり、仲秋公のせられ、給ふも理りや、やゝもすればあら川めが、かんげんだてにあきたれ

共、我身のかうせきよからぬゆへ、かくいふぞと思ひしに、扨は主君のゐをかつて、がいにまかするをごり者、きつとせんぎをとぐべしと、仰あれば江平は、御せんぎ有てはかへつて又、いか成る逆意かいできなん、只何となく大やうに、少のをちどに事よせて、けいくはにをゝせ給ひなば、ゑだいにせいうすくなり、おのづから其上は此方の、自由ゑざいに成申さん、君一國の御あるじ、かく計なる御遊興、かうせきあしくましますと、申にてなど候はんや、皆あら川がかたくなにて、氣一ぱいなる御酒さへも、きこし召ゑぬ御きづまり、其儘にては置がたし、ゑかし先今日は、御かへりまし〳〵候へと、すゝめ申せばせひもなく、さらばよおくにあすの夜と、クドキ立出給ふ名殘の袖、古めかしくもまゝならぬうき世なりけり夕ぐれの、お出をまたばけふの日は、嘸ながからんとためいきのかこちてをくるやるせなさ、仲秋公もふりかへり、あら川をさへ追こめなば、跡は千よも心まゝ、少の内のふせうぞと、カヽルゝ戀にはやみのよも明て本三重やかたをさしてぞ「かへらるゝ、ながれあらたに、今川の、いべにつたはる寶藏の、御

虫干も花やかに、大どうじ江平は、御ばんの役に相つめて、色〳〵の珍物を、大ゑよゑん小書院に、一めんにかざりをき、下番の者共が、障子をへだて、とざまにつめ、けいごきびしくゑたりける、かゝる所へ、大だうじ法眼鐵山は、虫干の吟味のため、御書院に出けるを、幸あたりに人もなし、江平そばに近付て、仰付られ候義、昨夜をどりの折からに、かやう〳〵のついでよく、あら川をや子があくじ共、ずいぶんりくつに云たてゝ、仲秋公をも此方へ、まきこめ申候へば、此上はあら川がをちどを見出す計なり、先めでたきぞ、打給へと、逆意をいはふ、手の内も、かべに目はなの淺はかや、丹波の次郎時ひでは、御書院に用有て、行かゝりつゝ兩人がひたいとひたい押合、相談何共のみこまず、ゑつとかたへにさし足して、やうすをうかゞい聞いたり、あら川小六ゑげかつは、大廣間に詰いたりしが、とけいの八つ打ぬると、書院をさしてくる音に、すはや人ぞと鐵山は、かたへさしてぞかくれける、小六はふすま押明て、うんきの時分先刻より、扨々御太義千萬や、八ツのとけいも打ぬれば、御ばん替りに參りたり、

御待遠に候はめ、いざ御きたく候ひて、御休息なさるべしと式臺すれば江平は、御念入たる御口上、くるしからずゆる〳〵と、御出も候はで、をしつけおゑまひ候へと、カヽル御道具一〳〵引わたしチクリ宿所をさしてぞかへりける、イロ地小六はひとり廣ゑんの、長もうせんのくれなゐに、背きて白き、つまはづれ片ひざたてゝたばこぼん、うすき煙にあつき日のきをくつろげて、いたりけり、かゝる所へ、仲秋公のいもふと姫、かほるのまへと申せしは、つね〳〵小六重勝に、心の底のみだれかみとくかたなくて、おはせしに、けふは幸虫干の、つめばんなりと聞給ひ、カヽルうかゝひみんと忍び足さし覗きてみ給へば、なを戀風の、かほるひめたへずもそつと、忍びよりゑりへ手をさしいれ給へは、小六ははつとふりあをのき御目を見合、をどろきて、立ゑりぞきてさしうつむく、其時姫君なふ重勝、兄君より虫干のてうど共、わらはにひそかにみせよとの、仰ぞやとのたまへば、小六いよ〳〵謹で、畏り候と、爰やかしこへ御供しチクリて唐のやまとのたぐひなき、本フシてうとゑよゑやくに、名作は、ごうの御たち其外の、御きせながの數〳〵色チクリをいち〳〵御めにかけにけり、されば共姫君身にそまず、何ぞによそへ思ひの色、ゑらせばやと思召、小六にはなれずつきまはり、色〳〵ゑたひ給ひしが、むねとゞろかせ給ひつゝ、もだしてすごし給ふ內、思ひ切てものゝぐの、品にたよつてなふ小六、かざり置れしものゝぐの、ほまれはくちぬこがねざね、うつくしうみへがたければ、いかなる思ひの矢さきにも、通りそうにもなき物や、いつかな〳〵ものゝぶの、ゆうきを守るものゝぐを、かたきなどゝは淺ぎ糸、うすくれなゐを引まじへ、をどしたてたる御きせなが、春のよろひと、召れつつ、御せんぞよりつたはりて、地關東關西たび〳〵の御たゝかひにさきをかけ、數萬のてきをゑたがへて、龍と雲にのぼるより、なをすみやかに官錄の、すゝませ給ふ御いへに、なんぼうめでたき御ものゝぐ、本フシ扨その次の金小ざね、染ぬさきなる白き糸、花色まじへさはやかに、草ずりながの、御ものゝぐ、色もなさけもなし打の、かぶとをそへてかざられた、ハヤ三重名のるこはねも、高々と、はつ山かくる時鳥、ひとこへよりもさきがけて、卯の花をどしと申つゝ、

夏のよろひに是をめす、扨三ばんにかざりしは、鍬がたけだかふかゞやきて、ｻｯﾏｯｯ半月のむかふたて、あたりまばゆき金銀にて、つま戀かねしさをじかの、やさしつのもじつらからぬ、かな物打てつけたるは、それは我から夏の虫、其身をこがす火をどしは、秋の鎧に御ざ候　はるか上座にくろ皮を、こんの糸にてをどしつゝ、頭巾頭の老人がほ、八枚ぎころかたくさり、八まん殿の御よろひ、牛のひざ皮千枚をきたひ〳〵ておどしたる、御きせながにて御ざ候、されば奥州十二年、御かせんの其内に、馬あらふしてでき城へたゞちに、かけ入たりける時、すまんのてきぐん押取まき、さし取引つめゐる矢さき、あめあられとふりかゝれど、うらかく程の事もなく、うつたちつける長刀の、此かつちうにあたりては、岩にくだくるさゞ波の、みぢんに成てちりてんげり、ぎうわうむぎんに切たてゝ、殘る奴原はら〳〵〳〵、むら〳〵ぱつと追ひちらし、かごみをのがれ出給ふ、ところ〴〵にはつれ雪、銀にて打てつけたれば、多のよろひと申なりかく代々の名將の、すどのてうてき、あくまをたいらげ、一天四かい波、ｶﾀｨ打をさめ給へば、國もうごかぬあらがねの、きたひつめたる御ものゝぐ、當家御武運長久の、御守りと申ては、此上にや御ざ候はんと辨舌、清く立まはり、いち〳〵をしへを奉り、あふぎさす手に姫君は、ひしといだきつき給ひ、じんぎを立るお侍、いかにぐそくのき心はと、につことゑみてのたまへば、重勝こはそもはしたなや、いかなる公卿高家にも、かし給ふべき御身なり、もしもや人の見とがめば、御身のさはり御いへの、御かきんはや〳〵をくへといさむれば、姫君猶も聞給はず、そちがきらはゞそれ迄よ、只今をことが見るまへにて、此通ぞとがうのたち、するりとぬかせ給ひしを、小六はつと飛かゝり、御たちをもぎはなし、もつたいなや此たちは、がうの名劔世の人の、見る事もなきつるぎなり、御けがあらばいかゞせんと、せいし申にふしぎやな、御てん俄にぎんどうし、此たちをのれとひらめきて、四方八めん、切廻るは、ﾊｬ三重すさまじかりける「次第なり、此たち風に、姫君の、うす手をおひ給へば、小六大きにおどろきて、たちのとがめと心へて、たてなしの御甲、はづしてたちにうち付れば、めいきの印一同

に、たちもをのれと云づまりしは、ふしぎ也ける、しだいなり、此物音に仲秋公、あら川刑部大どうじ、鐵山をやこ御供にて、あやしやと入給ひ、此體に驚けば、姫君小六諸共に、はつとかたへに指うつぶき、せんかたなくぞをはします、仲秋は御らんじて、こはいかにかほる姫、何とて爰へは來りしぞ、重代のてうほう、名劔ぶくをかざり置、殊にがうの名劔は、女の近づく事かたし、それゆへたちのとがめにて、思はぬけがも有しよな、先御たちをおさめんと、いたゞきおさめ給ひつゝ、いかに重勝、かくみだらなるふるまひは、詞にたらぬ大惡人、かほる姫をば大道寺、鐵山をやこに預るなり、きびしく一まに押こめよ、小六は我手にかくべしと、はかせに手をかけ給ひしを、あら川刑部押とゞめ、云ばし御待下さるべし、君の御手をおろされずと、父の刑部が罷在る、きつとせんぎをとげ申、いよ〳〵ふぎに候はゞ、某が手にかけ、きやつがかうべをはね申さん、先一てうの御いかりに、そつじあそばし候な、勿體なしといさむれば、江平ゑたりとすゝみ出、やゝをいにほれたか刑部殿、まのまへにてふぎ者と、見とがめられてせんぎもはや、云れたるとがにん此上に、何のせんぎか候はん、まだるし〳〵江平が、たち取をせん小六郎、腹をきれやと、わめくにぞ、刑部笑てやかましい、わどのけつきにまかせつゝ、むほう破りは犬侍、ひかへられよとねめつくれば、犬侍とはたが事ぞ、舌ながなるくはんたい、此上は某、ごぶんの相手に罷なる、小六が事は扨置、先其方が首とらん、ぬけや〳〵とつめよる時、床にかざりし御きせなが、ずつとつゝたち江平が、はなのさきに立出れば、江平大きに肝をけし、いづれもたちに手をかくる、時に甲をはねのくれば、いつのまにかは入たりけん、丹波の次郎時秀、見たぞや〳〵とこへをかけ、此たくみは大道寺、鐵山をやこが逆心なり、あら川ふしをばなき者とし、心のまゝに此國を、押領せんとのはかり事、御ゆだんあるなといらゝげば、そら〳〵云くも鐵山、何われ〳〵が逆心とは、せうこばし有けるか、せうこも〳〵さいぜんに、おや子がよつての内談を、とつくと聞ていたりしぞ、何と鐵山見どをしかと、つめかけ〳〵云ければ、鐵山をやこきみわるげにいや其せんぎにてはなし、あら川をや子のせ

んさくぞと、まぎらかすを飛かゝり、取てふせんとする所を、仲秋大きに立腹あり、某きつとせんぎして、ざいくはに申付置しに、いらざるおのれが忠義だて、汝も共にかんどうぞと、ヵゝル鐵山江平御供にて、をくをさしてぞ入給ふ、次郎いかつてゐゝめんどう、ゑゆくんも何もいらばこそ、鐵山をやこがいけ首を、引ぬき捨んと飛出る、刑部すがつて引とゞめ、そつじをなすなはやまるな、爰にてなせば重々の、をちどを身にうけ皆かへつて、惡人原がりとなるぞや、ゑばらくまてと引とゞめ、むねんの泪にむせびしはことはり、すぎてぞみへにける、刑部いかつてゐゝ淺ましし、世にたくましき今川のいへ、てんせい才ちの名將も、邪臣にくもるむねの月、頓て後悔有べしとこぶしをにぎりきばをかみ、三人目とめを見合てないついかりつ忠臣の、國を思ひ君思ふ手本は是なりゝとて貴賤上下押なべて皆かんせぬ、者社なかりけれ、

## 第二

「其後、大道寺鐵山は、江平を近付て先以仲秋を、すかしおふせて氣がゝりの、丹波二郎諸共に、あら川をやこをひつそくさせ、日比の本望たつしたり、されば仲秋在京の、きんやくを御めんにて、近日國へ入部ときく、此折こそは究竟一、何とぞ、手だて有べきぞ、江平は聞あへず、それこそ候ゑ仲秋、城中へいる所を、思ひがけなく追かけて、ふいを討んはあんの內こゝろ、やすかれおやぢ殿、かゝるかうなる子を持て、をい木に花をさかするは、此うでさきにと押さすり、ゑまんなしてぞ申ける、おなじ心の古入道、ゑつぼに入て、げにまこと、汝があればことわざの、子ゆへのやみもてるぞかし、ゑかしはやまり仲秋を、討たる跡にてかみよりも、とがめのあらばいかゞせん、こはゑちくどし其事も、此江平がむねに有、其時言上なすべきは、されば主君仲秋、わかげの至我まゝにて、きうこうのかしん共、あるかなきかに追下し、其上此程四條なる、おくにが方にて日々夜々、酒興にをほれ候を、かしんあら川をやこのもの、見かねていさめたりけるを、きつくはいなりととがもなき、兩臣をかんきなし、追失ひて候な

り、とかく狂氣と存るまゝ、ゑばらく押こめ我々が、いけんをくはへ正氣となし、ちうきんなさせ申べし、其間は關東の、城はをやこに御預け、下さるべく候はゞ、有がたからんとざんげんせば、何の手もなく此いへは、カヽルヤとる山の時鳥うへみぬわしとくらすべし、心づかひをゑ給ふなと、すゝむる惡の上ぬりに、みがきをかくる鐵山が大きに悦び、打うなづき、萬事はよきにはからはん、こなたへ來れとそれよりも、三重ひそかに用意を「なしぴけり、さればにや、仲秋公、在國の御いとま、けふゑよち入のかゑまだち、其行れつも、花やかに、皆一やうの旅でたち、花をかざりてつゞきたり、虎や吟扨其次は花やかに、一ッ三重數の馬をぞ、ひかれける、あしげ水あほひばりけや、をぼろといはんさび月げ、すへつむ花や、べにくりげ、すみすりながすくろの駒、引立〳〵打過るこがねちりばむくらかいぐ、日かげもへたつあつぶさや、くれなゐ紫水淺ぎ、もみぢを染る夕時雨、さつとふりだす大鳥げ、本節だいかさたて笠あざやかに、其跡よりも仲秋公、風もすゞしきもじィロチクリかごやゑづかに召て通らるゝ、跡につゞける御供は、カヽル思ひ〳〵の旅衣のりかけ馬のさま〴〵に、ゑきろの鈴のいさぎよく、三重關東さしてぞハヤメ「ゑゆこくある、去程に、鐵山をや子の者共は、跡をゑたふてせめ來り、カヽル城にもなれば押取まき、ハヤ三重時のこへをぞ上にける、城にはごせざる事なれば、上を下へとかへしける、され共みそばの御小性、一角ちから是をきゝ、二人やぐらにかけのぼり、何者なればろうぜきや其名をなのれと呼はつたり、其時鐵山駒はせいだし、やあ我々は大どうじ、鐵山をやこの者共なり、然るに仲秋ふぎにして、道にあらざる御ふるまひ、上ぶんにたつしつゝ、我々に仰あり、此城を御預け、仲秋をばいづくへも、追失へとの御事ゆへ、君臣の道にそむけ共、おもき上意にちからなく、只今爰にはせむかふ、命はたすけ申べし、城をいそいであげられよ、さなくば一矢仕らん、いかにいかにと呼はつたり、二人は大きにはがみをなし、君をざんするをこの賊、あれ追ちらせと下ぢすれば、みかたのせいはものゝぐし、カヽル御もんをひらき切て出、ハヤ三重火花をちらして「たゝかひけり、かくてみかたの其中にも、てきへ一味の多ければ、

カ、ルかへつてみかたのうら切に、皆ことぐ〳〵く討れにけり、され共一角ちからの助、今ははや是迄と、手々にゑものを引さげて、きほふかたきにはせむかふ、ゆらのくはん八まつさきに、ちからの助とわたしあふ、ちからはゑてのくさりがま、請つひらいつ諸共にハヤ三重ひじゆつをつくして「たゝかひける、もとよりちから手きゝにて、くはん八がうつたちを、はつしと請てくさりにて、たちをからんでかなぐりとり、飛でかゝればくはん八は、こは叶はじと逃行を、すかさず追かけうしろより、たぶさを取て引かへし、首かきをとし立たりけり、後藤の善太はかたの九郎、二人一度に切てかゝる、一角すかさずつゝと出、カ、ル兩人にわたしあひハヤ三重ゑがばしたゝかひ「たりけるが、善太九郎を、弓手めで、けさに切てぞ落しける、され共敵は大勢にて、城に入べきやうもなし、是迄なりと兩人は、たせいの中へわつて入、四方へはつと追ちらし、其後ゑがいの手本よと腹かき切てぞゑしたりける、今は手に立者なければ、我もと城中へ、ゑいやごへにてこみ入たり、仲秋せんかたましまさず、御ゑやうがいの障なければ、いかがはせんと思せしに、實究竟の事有と、寶藏にはせ入て、御いへの寶共、取出し大庭に、なげだし給へばもとよりも、カ、ルよくにめのなきかたきのせい、ハヤ三重あらそいひろふ「其内に、御きせながを、ぬぎ捨て、ゑがいせんとゑ給ふ時、あら川刑部はせ來り、かたきの大せい追ちらし、是はいかにと、押とゞめ何と某つねぐ〳〵に、御いさめ申す事共を、今こそをぼしあたるらめ、此ゑぎほのかに承り、はせさんじ候なり、はやまり給ふな此所は、ひとまづ落させ給ひつゝ、時節を御待有べきなり、跡は某ふせがんと、申上れば仲秋公、泪をうかべ其方がつねに申せしことのはを、カ、ル用ひぬゆへにかくのてい、めんぼくもなき次第かな、只とにかくに此上は、汝諸共討死せん、刑部いかつてこはいかに、爰にかぎれる御うんかは、急ぎ落させましませと、さいさんいさめ奉れば、心よはくも仲秋公、然らば爰を落ゆかん、必其身まつたふし、討死すなとのたまひて、いづち共なく、落給ふ、心やすしと、それよりも、刑部打物ぬきそばめ、せめいるかたきに、わつて入、ゑゝふゑんこらんにう、ひてうのかけりの手をくだき、爰を

さいごとたゝかひしはハヤ三重すさまじかりける「次第なり、深手あまたに、よはりつゝ、是迄なりと大をんあげ、かうなる者の玄やうがい、こうせいにかたれやと、城の内へつゝといり、急ぎ矢ぐらへかけ上り、腹十もんじにかき切て、たちをくはへさかさまに、カヽル矢ぐらの下へどうどをち、つゐにむなしく、成にけり、鐵山をやこ悦びて、勝時つくつてそれよりも、城の内へぞ引たりけるかの、あら川がさいごの玄ぎ、あつぱれかうなる忠臣やと貴賤上下押なべて皆かんせぬものこそなかりけれ

## 第三

「其後、大道寺江平は、本城をのつ取、大どうじを改めて、今川かげゆの助カヽルてるはやと、其名をかへ世にはびこりてくらせしが、しがらきうんじ難波の浦波、蘆まのかに若、くもじのらい八を近づけ、偖も天うん順くわんし、今仲秋を追をとし、先一城のあるじとなり、かゝる槃花にほこる事、天のめぐみと云ながら、何と果報の我ならずや、殊にあら川刑部めは、心やすくも失ひて、心にかゝる事もなし、併小六めと、たんば次郎を打もらし、是きがかりに思ふなり、汝ら四人が内、兩人づゝ立わかれ、都と江戸へたちこへて、かの兩人の奴原を、さがし出して打てすて、こゝろの本フシ月の、くもりなき、うき世となせや爰に又、我仲秋が妹なるかほる姫に心をかけ、さま〴〵とくどけ共、一向なびく色もなし、こよひはうむの戀定め、をして思ひをとぐべきなり、汝らははやとく〳〵、罷たてと申つけ、おくを指て入ければ、四人の者共一同に、畏てそれよりも、らい八うんじはあづまの空、浦波かに若兩人は、引わかれ行道のべや三重都の方へと「出てゆく、池のふぢ浪、玄づやかに、本フシヤッシあまのかはらの、ほしとのみかぞへ、つくさじ、色まさご、本地色なとのごの色文は、いとまきかへし、くり石や、思ひはとんとすて石の、かたひは玉の盃のそこよ、こゝよと、枝ごとに、本地けしきをかしきすね松の、すねたふうこそにくら玄や、こなたには何春ならば、吉野もいかではきくらの入日、すゝ玄き、ひむろかげ、本地玄げりあふたるくま笹のいなのと、よみし有間山夕二ッ三重

風そよぐ、ふせいをば、レイゼィ又もきてみんまつ島や、をしまのとまや、波よせて、クドキうつすやり水岩くみも、心をつけしにはのをも、ゑばし心をはらさるゝ、めのとの藤がへ申やう、こよひは文月七日の夜、七夕姫のあふせ川、ふかくいのればあふ事の、かなふとやらん承る、いにしへ歌を梶のはに、書連ねつゝ星まつり、たむけまゐ〳〵候へかし、姫君は聞召、うき世のうさをかさねたる、ィロ地身はろうてうのくもをこふ、クドキ心も色にあらはれし、今みづからが思ひをば、いのらん物をとそれよりもみぎわに、うかむさゝをぶね、本地めのとともろともそれよりもやがて三重ふねにぞ「めされける、かくてふぢがへ、筆にそむ、其いな舟や梶のはに、硯をそへて参らする、かほる取あげまし〳〵て、すみすりながし、水ぐきに、いにしへよりのたむけうた、本地ふかくそめなし一〳〵三重にゑいぎんなしてぞ「うかめける、こゝろにこむる、ねがひの品、本フシャッシ筆にむすびて、ふたくだり、取上てまづ七夕の、心の内やいかならん、待こしけふの夕暮の、本地空と吟じて此ぬしは本フシたれかはふかく、思ふ君、本地待宵なりしけしきをば、いのるうたぞと、をもひとる、こなたには又天の川、まだ初秋のみじか夜を、などたなばたの、ちぎりそめけんと、かきしはまこと、諸ともに、本地あふよの數のまれなるを、うらむこゝろよ、そのつぎはなにごとも、いのるとはいさゑらなみに、二ッ三重かきながせしはたなばたの、とわたるふねの、梶のはにいくあきかきつ、露の玉づさなをもつゞきて、契りけん、本地心ぞつらき七夕の、年に一たびあふは逢かはとかき、つらねしはたぞや此、歌の心の人ならば、あこぎが浦のあまりなり、男をゝなの中はたゞあふ、事のみをいふ物か年に一たび、まれにして、こよひ計のいもせ川、深き、中こそ、戀ぢなれ、誠をいはばこゝにまた、淺からぬ契りをぞ、思ふ天の川あふせは年の、一夜なれ共、かくつゞけたる歌はそも、姫君樣と覺へしと、申上ればかほるのまへ誠にそれはみづからが、ィロ地浮身をなげく言のはの、はやくも色に出しぞや、星は一夜も天の川、われはちら共、あふ事は、あまのもしほ火たきそめて、むねの煙の立まさる、思ひよりして織姫の、中をうらやむ心ぞと、打そばみつゝのたまへば、舟もこぞりて取〳〵にィロチクリ云、

ばしはかんじあひにけり具外、ハヤ三重わたる、かさぎや、もみぢの橋をかけてだに、つまむかへ舟こがれゆくまたは、かしつるいとはへて、年のをながき戀心、別れをゑたふ歌も有、或はすゝきをぎはきや露をたむけし心も有、カヽル實さま〴〵のたむけ歌ぎんじ、あふたるありさまはやさし、三重かりける「次第なり、かゝる所に、かたへなる、すさきの松の木かげより、かげゆの助は只一人、み舟に近づき打わらひ、こは姫君の御遊興、御きげんよろしくみへ給ふ、御いたはりはいかゞぞと、頓て舟にのりうつれば、日比つれなくをはします、姫君いかゞをぼしけん、誠に水からかく迄に、世に捨らるゝ浮身をば、さまざまの御かいほう、なんぼう心にうれしけれ、地今よりしては御心に、叶ひ申て水からはとにもかくにも、成申さん、是は寺からさとられぬ、御ことのはやそれはそも、御ゑん炙つか但は又、御僞りての仰かや、姫君爭いつわらん、もはや我身はたらちねを、さきだて申あふうへにも、はなれ申せば見なし子の、よにたのむべきその人もなくねにくらす、我なれば、此上はゑう〳〵のかたき詞をやはらげて、君こそ二世のとのぞかし、我身はまかせ參らするたのみ、ましてと指うつぶき、ゑなだれかゝりてのたまへば、てるはや大きに打悦び、こは忝き御心體、御心さへかはらずは、カヽル萬々年は扨置てみろくの出世に、いたる共、我が心はかわるまじ、然らばけふより、君とわれ、はや祝言をいそぐべし、かための盃いただかんはやとく〳〵と喜べは、本フシ引取姫ぎみさかづき、取上て、かげゆの助にさし給ふ、てるはや盃押いたゞき、つゞけて三ごんさらりとほし、いざ盃は事すみし、舟より上りて涼のちん、こすにもり行そらだきを、互の袖にとめなんと、姫君の御手を取すゝめ申せば姫君は、いや今ゑばしわすれたり、今宵は殊に七夕のあふせのよはと聞物を、時もあひたり我契り、かはらぬ印に水からが、是を參らせ候と、守ほぞんを取出し、取かはす手のあやまりて、川へざんぶと取をとし、是は、いかにとおどろけば、かげゆも共に驚きしが、よし捨給へ其ほぞん、千も二千もつくらせて、まいらすべしと云ければ、姫君は聞召、いや〳〵さには侍らはず、水からが守ほぞんは、あいせん明王の尊像、母上より給はりて、けふ迄はだを

はなさずし、たいせつにせし事なれど、君を深くも思ふゆへ、地契りの印にまいらせしに、カヽル取落せしは何とやら、氣がくりになり侍ふぞや、よし〳〵水から水に入、命にかへてももとめんと、とびいらんとし給ふを、こるはや急ぎいだきとめ、さほどにおぼし給ひなば、カヽル某が取出してまいらせんと、頓て小袖を、ぬぎ捨て、かの水中へ、ざんぶと飛入爰かしこハヤ三重たづねもとめて「およぎける、某いまに、姫君、めのとを近づけうれしやな、先てるはやをば、僞りて、手だてはゑをくせたる物を、いかゞせんとのたまへば、藤がへさあらば此所を、忍び御出ましまして、いづかたへも落申さん、はやとく〳〵とかひ〳〵しく、舟にさほさし押行を、かげゆの助はうき上つて、舟に手をかけなふ姫君、是取出し候ぞや、悦び給へとさし出す、ひだりのかいなを姫君は、そばに有けるたち引ぬき、ずんど切てぞ、おとさるゝ、はつと驚きてるはやは、逃行んとする所を、さんざんにぞ切たりける、すかさずめのとてるはやが、たぶさを取て引よせ、舟ばたに押つけ少も更に、はたらかせずさあころさせ給へや姫君樣、心へたりとかほる姫、たちをさか手にてるはやが、のどぶへにをしあて、思ひゑつたか大惡人、時にてるはやこへを上げ、やあ〳〵姫君さいぜんに、つまよおつとゝ云かわす、此かげゆめは姫君の、おつとなるぞや其おつとを、ころし給はゞ天ばつはいかでかまぬかれ、たまふべきぞやおろかやをのれ主君たる、仲秋公を追失ひ、いへをうばひ水からに、よこしまのれんぼをなし、をつとよつまと思ふこそ、をもきが上のおもきとが、かさ一ツ三重ねかさぬる、惡心のまぬかれざる天ばつは、今ぞむくふと思ふべし、念佛申せてるはやと、首かき落し捨給へば、上カヽル ゑがいは波に水の色、あけにそみたる明がたに、めのとがかほをきつと見合、地ゑすましたりとうれしくも、二人手に手を取くんで、あづまの方へ落給ふ、かほる姫の心の中うれしき共中〳〵申計はなかりけり

## 第四

「昔男のかぶきふう、ゑかへてゐもんいしやうつき、大小さしたふり迄も、都難波津むさし野の、三ケの色

にをいてふろ、彼丹州の御門前、丹前ふうと世の人の、カヽル姿をまなぶしなしぶり、をんなごゝろの、だいたんにふるや、やつこの、なががたな、どて八丁のはる〳〵と、けぶりかすかにみへわたる、本フシむかふのもりの、色〳〵に、本地せんじゆ金杉里のめの二ッ三重正月はまづ、つくばねのみね、ゑろたへは、さながらに、江天のぼせつみやぎのゝ、田のもにをつる、歌かりがねは、へいさのらくがん見かへれば、里の通ひをまつち山二ッ三重きせん男女の、うき世びと色のねがひをむすぶの神、聖天宮へさんけいの、よねの名による茶やのてい、さんしのせいらんなんど共、かやうの所や云つべし、うつすに筆も及ばれず、ゑ師の上手がはけ取て、本地さつとひいたるすみだ川、なみまにうかむゆふせんはゑんほの、きはんやなぎかげ一ッ三重つりする、おぶね、とあみぶね、夕日にいそぐ、早小船二てう三てう、かず〳〵の、色めきよする、花川戸、漁村の夕照、よみせをとこゝろにこむるうかれをのなじみ、〳〵に、あふせ川ゑるもゑらぬも、ゆきちがふ、袖すりいなり草深く、扨もやさしの、ほたるのむしや、かよふなはてに火をとぼす、こりずもかよふ、たんぼみち、風にも行雪にも行、ぬれに打こむ若ざかり、色でゑのなら深草の、是しやうせうのよるの雨、ふつゝふられつきぬ〳〵の、なごりをおしむわかれざけ宵にむすんで、夜明にたゝむ、土手のばんする身はやすし、夢の此身とわざくるゝ、道哲の念佛は、ゑんじの晩鐘かの里の、色をならべて見るごとく、極楽せかい洞庭の、ゑやば目前の秋の月、實ゑやうにも榮花にも、又此上や有べしと、詠めつゞけて、是だんな、命の君に大門口茶三重やのまへにぞ「つきたまふ、かはるすがたも、おかしげに、あれゃ三重にあれたる、ものゝふの、うき世をすねし、風俗や、くろきをきらふ赤ゑぼし、まゆ半にきて大紋の、はかまのすそをくゝりあげ、大だちはきてゆふゆふと、牛にのり行有様は、おふさ、きるさの色人も、ゑばしは爰に立つどひ、笑ひすぐなるゑもんざかをとこの、たちしまむかふに、遠慮なくのりかくるを、こなたへよくれば猶のりかけ、かなたこなたとかまふにぞ、供なる男こらへかね、きしよにはみればれき〳〵の、御方と存るが、所もあしく候へば、けんくはをもとめ給ひても、某が主人は、御相

手には成申さじ、太郎聞て、我はけんくはゝこのまね共、横にあゆむは牛のくせ、よけてとをれと云捨て、猶もむざんにのりかくる、男今はすいさんと、刀に手をかけあみ笠を、取て捨るを能みれば、姫君樣にてましますか、さいふはいかに御家人の、丹波次郎時秀、是は〳〵と計にて、しばし、なみだにくれにけり、姫君かゝる樣は、いかなるゆへぞさん候、何とぞ君の御行衞、尋出し奉り、大どうじをほろぼして、世にたて申さんはなかりごと、あち川小六と云合、此所に罷ある、然るにかたき大どうじ、京都なにはづ關東へ、討手を付をき我々が、こうせきの善惡みて、折あらば打とれと、申付候よし、それゆへかくもこしらへて、あら川小六は世の人の、關東にならびなき、だての小六とあだ名たち、某をば、丹波の助太郎と名を呼かへて、かくはうらつのていたらくも、てきの心をうばゝんため、わざとみせかけ候なり、幸小六重勝も、此里に通ひきて、罷有候なり、某御供申べし、君又かゝる御ふせいは、されば自大とうじ、かげゆの助をば手に懸て、がいしやかたをのがれ出、當國へ落來りしが、名高き氷川明神へ、カ、ルさんけいなせし下向道、色ある文をひろふたり、名がきをみれば小六の君、勝山よりと書たりし、扨は重勝此里に、通ひくるわを尋んと、めのとの藤がへ諸共に、姿をかへて來りしと、委く仰有ければ、時秀大きに悦びて、へんじもはやく思しめす、小六にあはせ奉らん、カ、ルこなたへ御こしましませと姫君のハヤ三重御供してあげやをさしてぞ　舟歌ヤッシ色をのせくる二上りの、こゝろも、そらにうきぐもゝゝは、れて、月見の、あげや町、うつりが玄たふ、梅の花色こそみへてかやの内、外にはなにと戀ごろも、しゆすのたてがみつや清き、二ッ三重小六も今は、かつ山に、のぼりつめたる、はこばしご、てうしもてくる、かぶろ共、本地しやくをとらせて、しづやかに、歌ふたり與あるさかづきは、深き色とぞみへにける、かゝる所へ、あみ笠まぶかに引かふで、ゑしやくもなげにつゝといる、小六かつ山驚きて、何人なるぞととがむれば、くるしからず某は、けふ始ての者なるが、名もいや高きかつ山の、君の御げんを願ひつつ、ていしゆを賴候へ共、御さはりのみ候て、御めにかゝる事かたし、よつて某けふぢきに、御めにか

かゝ申さん爲、座敷へすいさん仕る、情をかけて給ばれかし、かつ山聞てこはいかに、高しの濱のあだ波のうちつけなりし、御方や、さはさりながら數ならぬ、みのゝおやまの夕しぐれ、ふるかひもなき水からを、さ程に思召れたる、深き御しんはいか計、身にあまりて忝し、さかしこよいは相馴し御方と、深きさはりに候へば、御かへり候へし、いや〳〵さはる事あり共、こよひはぜひにもらふべし、小六はせいてあんないなく、ざにふみこむさへあるうへに、ぜひもらはんとの我まゝは、おこといかなる者なればと、つゝとよつてあみ笠を、引取みればかほる姫、是はいかにとあきれはて、とほうにくれてことばなし、かほる姫はさげかつに、イロ地わらはかく迄うきくらう、惡人の大どうじ、てるはやを打取、あやうき所をのがれ出、あはん計を力にて、女の身にあはざる、男の姿にさまかへて、此所迄尋しを、哀なりとは思はずし、あの女郎に相なれて、わらはをすてしは情なしと重勝にすがりつき、深くなげかせ給ふにぞ、さ、おぼしめすも御理り、まつたくさやうの事ならず、此かつ山と申は、都四條に名も高き、お國と申すかぶきをな、然るに主君仲秋公、通ひなれさせ給ひつゝ深き情に預りし、御をんのお志う仲秋公、此度の亂げきに、本城を御立のき、おくには君をかいほうなす、らう〳〵の御身いたましく、此むさじのに二どの花、ちゝのこがねに身をかへて、かくうきつとめをいたせしも、仲秋公の御爲と、かつ山が心てい、肝にてつしてたのもしく、わざと相みるていにして、とかくはかたきを打とらん、評議いちつにけいりやくなす、日本の諸神をかけ、まつたくさやうの事ならずと、かつ山諸共一心に、やいばをみがく血判の、きしやうを取だし姫君の、御めにかくればかほる姫、扨はさやうの志んてい、いかや、たのもしき人々や、カゝル今のうらみはわがとがぞゆるし、たまへとのたまへば、小六かつ山諸共にこはもつたいなき御事と、三人めとめを見合て、志ばしなみだにむせばるゝ、かゝる折ふしかざりをく、月見のだいをけ破て、男二人飛でいで、我々は大どうじが郎等、うんじらい八兩人なり、かねて小六此里へ、通ひくるよし幸と、手だてをめぐらしきづまりなる、だいの内にかくれいて、やうすはとつくと聞たりし

ぞ、命をしくば繩かゝれ、さなくは一〳〵打とらんと、懷劒引ぬき打てかゝる、さしつたりと云げかつ、そばにたてたる云よくだいにて、打くるたちを請なかし、姫君勝山押かこひ、カゝルかなたこなたとふせぎしはハヤ三重せんかたなくこそ「みへにけれ、丹波の時ひで、かけ來り、先うんじをかいつかみ、取てなぐればうんといひ、身もだへするまにらい八を、取て押ふせ引立て、うんじが五たいへ打かさね、胴ぼねふまへてつゝ立上り、をさへた〳〵をつさへた、かたきを外へはやらじとぞ思ふ、をもふまゝにぞいけ取ける、頓て二人を引立て、かうべとかうべを打合、みぢんになさんはやすけれ共、すぐにきやつ原都へひき、かたきのやうすを尋べし、かつ山をば請出し、都へ諸共御こしと、ていしゆをよびて云わたし、小六ほ二人のやつばらを、云よくだいにてさん〴〵に、たゝきたてゝぞいそぎゆく、適かうなる者共やと貴賤上下押なべて、皆かんぜぬ者、こそなかりけれ

## 第五

「其後、大道寺鐵山は、仲秋公を追失ひ、おのれがまにくはんらくし、あんどの御敎書請ん爲、在京していたりけり、かゝる所へ、鐵山が郎等、芦間のかに若罷出、承るにかぶきおな、都おくにが名にしあふ、四條がはらにさじきをたて、見物貴賤くんじゆなす、君にも忍び御出あり御見物あるまじきや、鐵山聞て打悦び、幸かなやそのおくには、仲秋の思ひ者、色におぼるゝふせいして、深くなじみを重ねなば、仲秋のありかを、云らせん事はぢでうなり、其用意すべしとて、供人あまた引ぐして三重四條さしてぞ「いでにける、貴せん男女の、見物はきりを、たつべきせきもなし、中にも左り正めんのおもさじきには大どうじ、法眼鐵山ゆふ〳〵と、郎等左右に云ゆごなさせ、三重見物なしてぞ「いたりける、かくて云こくに、なりしかば、色のもなかのはやし方、上げまくさつと淺づまの、あたりかゝやく出立に、はしがゝりより云づ〳〵と、心もいとゝ、ふかみ草、花のかんばせほのぼのとひむくのしたぎゑもんよく、浮世はまこと、よしあしも、なには入江の立波に、こがれて過るあま小船、カゝルつなぎとめたるみをづくし、むねのほむ

らもけしかのこいはでの山のいはつゝじ、櫻ちりしく花園や、本地まがきが島の初霞、はつとして猶はでらしく、かい取小づま吹上て、懐にいるふへ竹の、よにしほらしくぞいでにける、本フシつゞいて出し、やまと歌、本地ていかといへる女郎の、其風俗は秋津すに、又ありがたき容色の、見るに思もますほのすすき、おばなの袖や白露の、イロ地たまさかにだにあふ人も、ふかき、をもひをいかでかは、あだになすのをみなへし、くねる計の、ふせいにて、本フシをるひとゆかし藤ばかま、其紫のゑらべには、ゆかりを見する小つゞみのせうぎに、こそはなをりけれ、つぎにみへしは、大づゝみ、本地かはらぬ松や柏木と一ッ三重名こそ立れ、さくら色なさけのもなか月のかほ、ゑやんと出たるしなもよく、本フシ柳のまゆに、花のゑみ、いとし取なりはでもやう、きむくうつろふかさねづま、舟歌ヤッシ八ゑ山吹の玉川に、なかれ立田のもみぢかり、本地きやらの指ぐしくろかみの、いとつや清くしとやかに、思ふ人には大やうに、是もせうぎに、なをりけり、たいこの役は其名さへ、なを若草とねよげにも、みへてや露の白むくに、白かねのやうがいのさしかゝりたる有さまは、げにたぐひなきふぜひかな思ひ〳〵の、出立にぶたいくんずる有さまは、三重心ときめく次第「松の位もときわなる、松の位も常盤なる夕まの隙ぞとばしき、諷女郎の數にさへいらで、水しのうきつとめ、やう〳〵ゑばし夕方の、すきを求て此屋の内、わけよきかたの御出に、色大よせの候よし、數ならぬ身もまじはらんと、サヅマヅッリかうしのきはに立よれば、數の女郎押留て、いや此内へ外よりして、色のならひはなき物を、叶ふまじとてとゞむれば、いやしき水しの女なれば、くるしかるまじさもあらば、つねにこのみて手なれたる、まりの拍子を一かなで、こゝにて御めにかめ申さん、げに〳〵是は興あらん、さあらば急みせ給へ、女はうれしく立よりて、キッ山入あれにまします、女郎の、うはぎの小袖かりにきて三重既にきよくをぞ「かなでける、ゑもんながしの、まりの曲、ゑもんながしの、まりの曲、いざやけ上て、なぐさまん亂拍子そも此まりと申は、ふぢ原の、本地まさつねまさ道の、いへをおこして此かたは、世にことふりしもてあそび、本フシ大宮人の、御ゆふにも、本地ゑうきくのにはのをもよ

もとのこかげ枝たれて暮に數あるくつの音二ッ三重柳さくらを、こきませて、にしきをかざる、もろ人の、花やかなりやこすのひま、くる〳〵まはるからねこのざれるもすそをふり切て、上がへ下がへ引かさね、かぶろは袖の、ふりはじめつく、つく〳〵には手まりつく、ひいふう三よ、みよなら〳〵、松をかざして、梅のをり枝だ、それすいたしやみの手、中の町、あげや町は色くらべ、かくて、月をち、鳥もなき、かのかうそくの一曲は、本フシあけやにたいして、カカルうつゝをぬかせばよき隙ぞとて、かしこにつりたるとうがいの、だいわに手をかけとぶぞとみへしがハヤ三重引かづきてぞ「かくれけり、數の女郎、をどろけば、ていしゆあはてゝ、飛で出、かやうの事の有べしと、思ひしゆへにさいぜんより、外の女郎きんせいと、申付ては有ぞかし、とうがいは女郎の、忍びてあへる客の爲、カ、ル心中たつる女郎は、ふかくうらみし此あかし、いで〳〵なげしに引上んと、かうしにひける二上りの、てうしにつれてうたひける、色かへつて此さとの、地あそびの數はつくる共、手くだの數をつくべきか、てうぼわすれでをくる文、ちかひしせいし心中に、ゆび切も、皆僞りぞと聞時は、ゑつにうらみは有明の、とうがいこそ、すはすはうごくぞはやせたゝ、拍子ひけや手〴〵に夜明のさはぎ、ふり手の名人かけ手の上手、心をくだきてはやしける、謡はやしたてられひかねどとうがい、うごきいでふしぎやあかし、のとぼるよとみへし、ほどなくなげしに引上たり、中におくには只ひとり、いとゆふ〳〵たるふせいにて、かい取小づま、しほらしく、ずんと立たる容色は、よしの丶櫻のだの藤、立田のもみぢならべても、けをされぬべき其いろに、よねんをぼうして鐵山は、棧敷よりぶたいに出、扨も誠に久方の、天津くもいを立へだて、あづまの空にたいりうし、此程かへられ候とて、今日の御まねき、忝しや殊に又、ひさしぶりにて、御一曲、げにむさしの丶色風に、もまれて歸京有しゆへ、其御ふせい、一入に、詞にあまりて覺たり、其方もわが果報、定て聞も及ばれん、今我國のつかさをば、此鐵山ににんぜらる、何と仕合ならざるや、其方をね引して、ときはの松の千世かけて、をいのたのしみござんなれ、いかにや〳〵とゑなだるゝ、おくにはゑてにほ

かけ舟、よるせをまちし折からに、今の詞のうれしくも身は山里の姫小松、ひく人もなき水からに、今の仰は御うれし、こゝははしぢかこなたへと、相づの所へともなへば、時分はよしと時秀、釣とうがいを切落し、取たと云ておさふれば、鐵山驚きこへ上て、はねかへさんともみあふに、少も更にはたらかせず、鐵山が郎等あまさじと押取まく、小六姫君打物ぬき、四方へばつと追ちらす、丹波次郎大をんあげ、しゆくんをなみせし大罪人、カ、ルいざさいなめと左右よりつきつらぬきてぞ「さしあぐる、鐵山くるしみ、もだゆるを、小六時秀一同に、天はたい釋地はけんろう、主君をかすめし、惡心は、カ、ル爭あんをんなるべきぞ、思ひ知れやと、飛かゝつて、さんざんに切ちらし、首打落しそれよりも、かち時つくつて立たりけり、カ、ル前代未聞の次第やと貴賤上下押なべて、皆かんぜぬ、者社なかりけれ

## 第六

「其後するがの守仲秋は、てつさんが叛逆に、都のそらにをち給ひ、内縁のちなみある、今出川大なごん、きん直卿のかまへらる、北山の山庄に、深く忍びておはせしが、此程妹かほる姫、丹波次郎時秀、小六諸共あづまより、尋のぼりてめぐりあひ、御悦びは淺からず、然るにけふも逆心の、大どうじ鐵山を、はかりうつべき計略は、いかゞとあんじおほせし時、小六時秀はせかへり、かやう〳〵の手だてにて、さしももういの鐵山を、たやすく討取候と申上れば人人は、御悦喜はなはだかぎりなく、きん直仰けるは、然らばへんじもはやと〳〵、某ぢきに御所へゆき、御かんき御めんの御そせう、申上べし此上は、心安かれ人々と、云やうぞく改めそれよりも、仲秋公を伴ひで三重御所をさしてぞ「あがらるゝ、其比天下の、武將をば、源の右大將、よしまさ公と申奉り、ぶとく四かいにあまねくし、そうめいるいちの名將なり、けふしもは御ちやくし、左中將よし直卿、御げんぶくの儀式とし、御まへにはふだいの云ゝ、仁木細川上杉等、カ、ル國中の諸大名ざせきを、かまへて仕公せり、かゝる所へ、今出川きん直卿、いぎをたゞしく入給へば、よしまさは御悦び、先こなたへと上座

にせうじ、ゑきだいをはればきん直公、先以今日はよし直卿の御げんぶく、うゐかうむりなる御粧ひ、はなはだにあはせまし〳〵てめでたく存候と、仰あればよしまさ公、猶悦びの色みへて、それ〳〵と有ければ、ながへのてうし御かはらけ、カヽルぎゑきおわつてそれヲクリよりも既に、御酒ゑんはじまれり、時にきんなをのたまふやう、扨も某此間ふしぎなる一巻、相もとめ候なり、是は御かしん、今川入道りやうしゆんが、つね〳〵しそく仲秋へ、ていきんの一ぢくなり、あらかた一見申せしに、中々世上のきやうかいにも成べき物にて候ゆへ、よし直卿へまいらせん持て参れと有ければ、みつぎに有しみずいゑん、かの一巻を持まいる、よしまさ是へと取給ひ、ひけん有しに其詞、皆せいけんのをしへなり、よしまさ御らん終て後、誠にさりし了ゑゆんは、ぶんぶの忠臣たりけるに、子はかれににぬ仲秋が、不道のふるまひなせしゆへ、かのいへだんぜついたせし事、ざんねんに候との、仰にのつ取きん直卿、ゑやく取直しのたまふは、さん候仲秋事、まつたくふぎにて候はず、仲秋かゑん大どうじ鐵山がざんげんゆへ、御かんきかうぶり、ちつきよせり、某びんなふぞんじつゝ、ないゑんのよしみにより、かくまひ置て候と、一々仰有ければ、よしまさおどろきさもあらば、仲秋急ぎ召出せと、カヽル上意もいまだをはらぬに、仲秋御せんに出らるゝ、時によしまさやあ仲秋、きん直卿の仰により、召出して有けるが、其身にくもりあらぬとの、せこもあるやと御でうある、仲秋つゝゑんでうけ給はり、有し事共ごん上有り、それぞれと有ければ、小六時ひで両人は、色里にて召取し、うんじらい八、二人のものゝなは取して、御ゑらすに引すゆる、時ひでこへをあらゝかに、やあおのればら鐵山が、ぼう逆一〳〵言上せよ、其時両人一同に、皆鐵山が領地を、うばはん爲に仲秋を、ざんげんいたし候なり、我々かれが郎等にて、うんじらい八と申者にて御ざ候、小六時秀両人をうつべき手だて顯て、かくのていとは罷なる、あはれ、かみの御ゑひに、命をたすけ給はれと、一〳〵申、上ければ、よしまさ扨はとがもなき、仲秋をくるしめたり、此上は官祿も本のごとくと有がたき、ほんりやうあんどの御げうゑよを、なし下されて入給へば、仲秋は

つとてうだいなし、二人を引たてちうりくあり、それよりもすへながくふつきにさかへたまひけり、千ざう万歳めでたしと貴賤上下押なべて皆あほがぬものこそなかりけれ

京四條於國歌舞妓終

# 土佐日記

## 第一

「偖も、其後、爰に仁王六十代、だいごていと申は、古今まれなる賢王にて、まつり事すなをなれば、内にうらみのおんななく、外にむなしき男もなく、天下太平長久の目出度、御代とおさまれり、さて又時の人々には、びわのさだいじん仲平、右大臣たゞひら、あふしかうちのみつね、大内記きの友のり、御所には、玄番の守紀つらゆき、かゝる賢人多ければ、はまのまさごの數々にわかの、あそひそやごとなき、かゝるところに、大和國うだ野のれうしゆ、むらとりのちかね、さんだいせしめ申やう、さてもそれがし、けうなる鳥をもとめゑて、すなはち持參つかまつる、きつけういかゞ心得がたく、御うかゞひの其ために、さんだいいたし候と、五しきのふなるきんけいを、やかて御せんにさし上る、みかどゑいらんまし〳〵て、それもろこしのせいたいには、きりんほうわうあらはれたり、かゝるれいてう出る事、國ばんせいのためしぞや、さればわうじん天わうの御夢に、やまとたけのみこと、しろきとりとけし給ひ、おはりのあつたへ、とばせたまふと御らんあり、さてこそ八つるぎ大明神と、今にたへせぬ神がきへ、さいわひちんれいむあり、ほうへいしをたてらるべし、つゐてわそのちかぬに、もしみやこ鳥といふ、鳥の色ねやぞんせしか、うけたまはれとのせんじなり、仲平かしこまつて、ちよくでうのよしのべらるれば、さやうの鳥名をうけたまはるも、今がはじめに候とつゝしんてぞ申ける、みかどゑいぶんあつて、その鳥のしさいばし、聞出してあるならば、さつそくちうしん申べしと、りんげんあつてそのゝち、きのつらゆきを召れ、なんぢはあつたのみやしろへ、きんけいをちかねにもたせ、しんりよをすゞしめ、こくかたいへいの、ほうへいをさゝぐべし、はやとくとくとありければ、つらゆき、かしこまつて御せんをたち、ちかぬをはじめ下ほくめん、はしとみの貞沖、家のしつけんみぶのたゝかつ、そのほかの人々まで、ろしのぎやうれつはなやかに、もみぢをかざすかしまたち三重めてた、かりけるヲロシ「次第なり、

爰にまた勢州くわなのかたほとりに、李之丞、ふぢはらのつぐかげとて、もとはきんりよみやつかへ、その性ゆゝしき人なれども、時にあわねば家まづしく、たゝまがちなるのきの草、ぎよそんの宿の、たのしみにたいこうぼうがつりあれと、只わくらはにみゆきする、ぶんわうのなき世の中をうちなげき、うらみて暮し給ひしが、つらゆきのさんけいに、此事をつたへきゝ、あねに八ゑかき十六歳、次男、多門丸拾一歳、さうでんの郎等に、近藤みんぶきよひて、女はうはまおぎもろともに、ひそかにまねきのたまふは、此たびちよくしきのつらゆき、あつたのやしろへしよてうをはなち、みやこ鳥といふとりを、御たづねなさるゝよし、そも〳〵、みやことりといふ事は、かだうのひみつ、日ほんのたからなり、むかしなりひらの中將、すみだ川にて見たるより、おそらく世上にしる人なし、されどもそれがし、ふしぎにこれをつたへたり、今御たづねある事は、それがしがぶうんの花、ひらくべきさうなれば、尾州へたちこへちうしんし、花さく春にあふべきなり、こととおたづねの有ならば、らうがんのつう路いかゝ、さいわいあねの八ゑかきに、つね〳〵つたへておきぬれば、ひめをともなひまいるべし、多門ことはふうふのもの、よきにたのむとありければ、きよひでふうふうけたまはり、しからばゝとを御まかせ、おやこは御出ましませと、御ことぶきのさかづきに、はやしのゝめも、ちかつけは、つくかけやゑがきおや子の人、ひでんの一くわん、まもりぶくろへいれたまひ、おつつけめでたくかへらんと、たち出たまへば人々は、門出いはふいとまごひ三重あつたをさしてそヲロシいそがるゝ、さればにや、ほうへいしに立給ふ、きのつらゆきはあつたにて、みかぐらののつとうに、しんりよものうじゆましますてい、きんけいをみ山にはなち、なを當國のきうせきを、ながめんためにおはします、されば、はしとみの貞沖は、さうだ一人めしつれて、なるみがたのかいへんに、つりをたれんと出けるが、おりからなみもしづかにて、かいへんのつりをふね、かなたこなたをうちなかめ、みぎわにたゝすみ居たりけり、かゝる所につぐかげは、ひめぎみにいざなわれ、みちよりこゝちあしきとて、やう〳〵としてきたらるゝ、なるみの

いそのまつかげにて、今ひとあしもひかれずと、こちわづらひ給ひけり、やゑがきはたびといひ、ことに女性の事なれば、のふちゝうへさま、心はなにとましますぞ、もしもの事のあるならば、わらはゝいかになるべきとなみだ、くみてぞおほせける、つぐかげはきこしめし、いや〳〵きしよく心よし、しばらくあしをやすめなば、よからむものをさないひそと、かさ打かたげおいの身の、なやみ給ふぞうとましき、ひめぎみはせんかたなく、かなたをみやりましませば、きんへんの人と見へ、みぎわにつりする人のあり、あらうれしやと立よりて、詞わらははたびのものなるが、つれたる人にわづらはれ、くすりとてもさふらはず、御しよぢもあらば御じひに、たまはれかしとのたまふを、貞沖はつく〳〵みてさてやことなき、上ろうや、御らんのごとく我とても、つりにたち出候へは、さやうのようゐも候はず、家にはくすりも候なり、たびはものうきものなれば、その御つれをともなひて、わがすむかたへ御こしあれ、上ろういかにとうちかたる、やゑがきはきこしめし、こはかたじけなき御ことば、さあらばそのよし申さむと、そこをたゝんとしたまふを、貞沖御てをしとゝとり、そなたのやうをきくからに、またこゝ元の用事をも、さこそかなへてたまはるべし、なるとのいそによるなみのうちつけかましく、候へど、見る〳〵君にこかれふねよるせ、なぎさの我なれば、詞そなたのおこゝろ次第にて、七夕姫のちぎりをは、なかくむすばんほしゐの、コトバいもせのゑんはいかゝぞとしなたれて申にそ、やへかきはなむさんぼう、わけなき人にものいふて、心にそまぬむらさきの、ゆかりのきかせ給ひては、こなたのいろと御らんせんあらよしなやと、たちたまふ、もとよりかうしよくぶとうなる、貞沖が事なれば、ひらに心にしたがひて、つれの人にもきうそくを、せさせたまへとだきかゝゑ、はや引立てゆかんとす、ひめ君これはらうぜきと、よばはりたまふにつぐかげは、すこし心をとりなをし、こはらうぜきもののがさじと、太刀おつとつて出たまふを、それさうだといふこゑもまなく引立、いそぎける、さうだは太刀をひんぬいて、討てかゝるをつぐかげは、しさつてさうだがすそをなぐ、のつけにたをるをのりかゝつて、すかさ

すといめをさしとをし、ゐゝむねんやといふこゑも、まなこくらみてたちもゐず、かゝる所に、むらとりのちかぬ、これもとせんのあまりにや、貞沖といひあわせ、つりさほかたげきたりしが、このありさまを見るよりも、引たてくすりを口にいれ、何ものなれば人をがいし、そのみもきしよくのふせひこそ、おぼつかなしときをつくれは、つぐかげやう〳〵心つき、さて〳〵人にせんあくあり、かやう〳〵のしだひとて、ひめの御事かたりつゝ、只今の心さしありがたふもとうとけれ、これは此たびみかどより、御たづねおぼしめす、みやことりの一くわんなり、もしもちよくしへつてあらば、このまきものをあげたまひ、われらがゆへをもよきやうに、御とりなしをたのむなり、そのおりからは名もなのり、このをんだくをもほどこさん、萬事はたのみたてまつると、てをあわせてぞ、おゝせける、ちかぬもとよりぶとう人、てんのあたへとよろこびて、さてはみやこどりの、でんじゆをのするいちくわんとや、まづ〳〵それがしあづからんと、ひだりにもちて右に太刀、ぬきうちにはつしとうつ、つぐかげこれはととびしさり、おのれもおなじとうぞくよな、いゐのうんめいきはまつて、てんのはつするところなりと、またたちだちとより給ふを、ちかぬ太刀にひつかけてさそくをふんではねかへせば、みぎわのいそへどうどをち、うづまきて見へけるを、ちかぬはまきものくわいちうし、なをひめぎみの御あとをしとふてこそは、いそきけれ、このたち風にぎよふ一人、いそべにふねをさしよせて、にげていゐぢにかへりしが、つぐかげすいれんゐたりしや、やう〳〵浮上り、かのふねに手をかけて、ひらりとのつてかつはとふす、おりふしなみかぜたちさわき早三重いづこも、しらすにチロシ「ふかれゆく、斤チロシされば」にや、貞沖は、やゐがきをいざなひて、あつたのみやゐもりかけの、人なきところにおろしをき、のふひめ今はそのかたの、つれたる人もうたるれば、たよらんものもあるまじきぞ、われにしたがひましませと、いろ〳〵とかきくどく、八ゐかきはきこし召のふ〳〵其、つれたる人はちゝうへなり、ちゝをころせしそのものに、いもせをかねむ事やある、ちゝのかたきのがさじと、さしそへをぬかんとしたまふ御てをとり、ひざの下

にひつしき、さて〳〵だいたんなる女かな、さあしたがわずは此太刀にて、さしころさんとひしめくとき、つらゆきのかうけん、みぶのたゞかつ、けふつらゆきのだいさんに、みやゐにまいりかへりしが、はじめよりのしだひを、しげみのかげよりよく聞て、つゝといでまづ、さだおきをかいつかみ、七八けんなげのけ、ひめきみをかこひつゝ、二王たちにぞたつたりける、さだおきこれはとどうてんし、やあいかにたゞかつ、此女はわが下人、すこししさいあるにより、かくせつかんをくわふるを、りふじんにばいとる事、いかなるゆへぞと立かゝる、たゞかつがこれを聞、あふめづらしやしうつらゆき、此たびちよくしかふむりて、此みやへさんけいに、きでんともしてきたりし身の、女をつれての神まふでか、むたいのれんぼと聞たるなり、まづたゞかつがあづかりて、しうつらゆきのりやうけんを、うけたまはらぬそのうちは、そくかの土はこんぢくゑ、くだけて入ともわたさぬぞ、さ何うけとつて見たまへと、太刀にてをかけつめかくれば、いやそれほどにはおよばしと、あとしさりするところへ、むらとりちかぬかけきたり、このありさまを見るよりも、しらぬ顔にて中へいり、これはいかなる御事ぞ、かくたいせつなる神まふで、しんりよもはゞかりましませと、りやうはうをせいしたる、心の内こそ、ふてきなれ、たゞかつがこれを見て、やあいかにちかぬ、おもひもよらぬ御出は、さては貞沖とだうしんか、すけだちあるはおもしろしと、つめかけ〳〵云ければ、何とてさやうの事あらん、こゝをばそれがしあづかると、手をさげいふにたゞかつは、あまり申もいかゝなり、いしゆはつらゆきわけ申さん、いざゝせ給へとそれよりも、ひめをかこふてかへりけり、善あく二どうわかれたる、そのめいきやうはたゞかつときせん上下おしなへて、みなかんぜぬものこそなかりけれ

## 第二

「其後、きのつらゆきほうへいし、事ゆへなくたちかへり、すぐにさんだいなされつゝ、神りよなうじゆありしだん、つぶさに申あげたまひ、さてそれがし

にそへられし、はしとみのさだおき、たびのおんなにあくぎをなし、そのぎろけんなしたるとて、ちくてんいたし候だん、それにつゐてそのおんな、つらゆきかくまい候よしいち〳〵そうもんなされける、うちよりのせんじには、さだおきかゆきかたを、くさを、わけてたづぬべし、さてつらゆきが事は、とさのくにゝくだりつゝ、國のせいとうなすべしと、げんばのかみをかねさしめ、とさのかみになされつつ、そう〳〵にんこくいたすべしと、やがてちよくのおりければ、つらゆきつゝしむでうけたまはり、人おほきその中に、かゝるちよくでうありがたしと、つのうらよりみふねにて、とさのくにへぞヲロシくだらるゝ、おりから風なく、なみおさまり、まともにはしるふねのあし、ゑんほのきはんそれ〳〵に、げにうなばらも、なかめなり、さればにやつらゆきは、やゑかきひめをもこのたびの、ふねのやかたにのせまいらせ、いろ〳〵なくさめたまへども、たゞちゝうへの御事を、つゆわすれさせたまふまも、なみだにしづみておはします、かゝる所へ、小船一そう、浪にうかびてたゞよひしが、御ざふねちかくながれよる、つらゆきは御らんじて、それとめよやとおほせける、すいしゆかんどり、御ふねをそばへよせければ、つらゆき御らんなさるゝに、いそじばかりのおのこ一人、おもやせたるふぜいにて、せんごにひうをこのみのるひ、とりちらしありけるを、いかなるものぞととひたまふに、おのこやう〳〵おきあがり、それがしはおもひよらざる、とうぞくのなんにあひ、すでにうみにしづみしに、此つりふねにたすけられ、つゞうら〳〵によるといへども、のちのなんぎをおもふにや、かゝるしよくじを入おきて、みなと〳〵をおひ出す、さるによつてなにとなく、おしからぬみをなからへて、うきねのちどり、もろともに、コトバなみにたゝよふおひの身を、あわれとおぼしめされよと、なみだながらに申さるゝ、あひちかければやゑがきひめ、ちゝのこゑときゝしりて、なふちゝうへにてましますか、われこそひめのやゑがきよ、なふつぐかげはわれなりと、たがいのふねにとりつきて、よろこびなみだはせきあへず、さてつぐかけをかきいだき、やかたのうちへ入申、ひめぎみはたゞかつの、みちある心にこのみをば、

たすけられまいらせたる、やうすをかたりましませば、つぐかげはとうぞくに、みやこ鳥の一くわんを、とられて入水したるよし、御ものがたりましませば、つらゆきはきこしめし、さてはきやうの事なるか、大内のまじはりも、ほどへだゝりし事なれば、つぐかげをも見わすれしぞ、いかなるものかひみつのしよ、うばいとりてやありつらん、さりながらこのひめの、ちゝにふたゝびあひたきとの、ぶつじんへのたんせいゆへ、ふしぎのたいめんありがたし、我にんこくの事なれば、親子の人にふちすべし、かならずなげかせたまふなと、いとたのもしくのたまへは、おやこの人は手をあわせ、あらありがたきみこゝろやと、うれしきにもかなしきにも、なみだのうみの、袖のうら、じゆんふうにまたほをあげて、とさの三重くにへそヲロシ下らるゝ、すてにとしとり、春すぎて、なつきにしげる青葉山、おしうつりゆく世の中の、そのとりさたもとをざかれば、むらとりのちかぬは、折からよしとやおもひけん、うばいとりたるみやことり、ひみつの一くわんけつかうし、やがてさんだい申つゝ、きよねんそれがしきんけいを、さしあげたるおりから、ちよくでうのおもきによつて、かの都鳥の事こゝろにかけ、せんぎつかまつり候ところに、ふしぎにこの一くわんを、ゑ候によつて、さし上申候とまことしやかにぞさうしける、左だいじん仲平、こはめづらしきさゝげものと、ゑいらんに入ければ、みかど大きに御かん有て、さんぬるころもきんけいをさゝげ、しんりよなうじゆありしにより、すなはち五こくもぜうじゆせり、またこんねんは大内の、たからともなりぬべき、この一くわんをさしあぐる、もつともほうびあるべきなり、大せうをあておこなふべし、いづれのちなりとも、のぞみ申せとりんげんなり、ちかぬしすましたりと、つゝしんで申やう、いせの國あさげのこほりは、せんぞのちにて候へば、かの地を下したまはらば、生せんのめんぼくとつゝしんでぞ申ける、仲平はきこしめし、さいわいかなかのところ、にんこくのしゆあきたり、ちかぬにくだしたまはるなり、はやとくとちよくでうある、ちかぬつゝしんでおうけをなし、御ぜんをたつてそれよりも三重あさげのこほりへヲロシ「入こくする、くにゝもなれはこくしゆげかうま

しますとて、こくみんおほくはせさんず、さればにやさんぬるころ、あつたをおちしさだおきは、ひそかにちかぬをたのみつゝ、つねにしのびてきうじなす、さるほとに、ちかぬは、こくみんにたいめんし、さても此ところに、ふぢはらのつぐかげと、いひしものゝゆかりあるべし、きんりへたいしむほんにん、きつとざいしよをあらわさば、ほうびはのぞみたるべしと、相ふれよとぞ申ける、かしこまり候と、ぶんこくのくち〳〵へ、つぐかげゆかりをしらせよとの、高札を懸たりしは三重あじろのうをの「ごとくなり、去ほとに、つぐかげの郎等、近藤民部きよひては、このことをきくよりも、女ぼうにいふやうは、ずいぶん君をかくせども、かたき四方をとりかごんで、かへつてこなたをうたんとす、身をおくにところなし、事のび〳〵にてかなふまじ、手だてをめぐらしうつべきなり、二人がうち一人は、かたきちかぬにかうさんせん、さりながらわれ〳〵が、心ざしをさつしつゝ、きをゆるす事あらじ、しからは我子のまつわかは、生年は十一さい、多門きみは十二さいふうがちうをみがくべき、天のあたへこれなるべし、たきんきみといつわりて、二人がうち一人は、すゝか山にこもり居て、わか君をはわが子になし、かう人の身となりて、二人がくびをうつならば、いかでかこゝろおくべきぞ、そのとき敵をうちとつてしゆくんのおんをほうせんは、いかゝあらんとかたりける、女ぼう此よしきくよりも、すこしもいなむげしきなく、我いひ出んとおもひしか、御身をはかりひかへたり、いしくも申させたまふかな、はやとくとくとぞいさめける、きよひで聞て、さすがみんぶか女ぼうかな、さればいのちながらへて、のちに事をとぐべきは、遠ふしてかたし、今しゆくんといつわり、ともにしなんは、ちかふしてやすかるべし、しかれば此きよひでは、ぐわんらいじんぎをまもるゆへ、かりにもかたきへかうさんし、あれこそしうのかたきよと、おもはゝいろやあらはれん、よつてやすきにしたがつて、我さきにしすべきなり、御身はしゆくんのやういくし、ほんもうとげてたまはれかし、はまおぎ聞て、なみだなからにともかくも、おほせをいかでそむくべき、しするものこるもおなしちう、まづ此事を聞せんと下ヲクリおくのひとまへ

たち入て、ともなひてたち出る、ちゝは我子をちかづけて、かみかきなでゝ申やう、われはしゆくんの御ために、なんぢをきみといつわつて、ちゝもろともにじがいして、はゝにほんゐをとけさせんと、いづちにかくごきわめたり、しうのめいにかわりつゝ、きみをあんぜんならしめよ、おやなればとていきのこり、そひはてぬべき身にしなし、かならずらいせは一れんに、はんざをわけむといひければ、まつわか此よしきくよりも、こたへもなくてさしうつむき、しばしへんじもせさりけり、はゝはこのよし、みるよりも、あゝみれんなりまつわか、なんぢはや十一さい、ゆみやとる身はおさなくても、ものゝ心はしるぞかし、みぬ世の人のかきおきける、じんぎのみちはみざるかや、いかに〳〵といさむにも、せきくるなみだをおししつむ、げにことはりとそきこへける、そのときまつわかかほふりあげ、いのちおしむに候はず、まことにそれがしがいちめいにて、きみとちゝとの御ために、しせんいのちはおしからねど、此しんたいをそこなはざるをもつて、これたいかうと申なり、ふかうたんめいなる事を、くゑかしてのなみだぞと、こゝをひきたる一ごんに、ふうふたがひのかほみやはせ、つゝめどこぼるゝそのなみた、よそのたもともぬれぬべし、ときにきよひでやあ女ぼう、なごりはつねにあるものを、まつわかを引ぐして、すゞか山にこもるなり、御身はあとにてわかぎみへ、親子がけいりやくかたりつゝ、かたきをうつてたむくべし、しでのやまにてよろこばん、女ぼう聞てもつともなり、いゑに生るゝ武士のみち、すぐにわかぎみ我子となし、この一心のやいばにて、かたきちかぬをうちとつて、しうおつとへのいきどおり、たつせんものをいしにたつ、やたけ心よひくなきみ、おくるなつまと門いでを、につことわらひまたはなき、つまはかたきへきよひでは、心のこまのすゞか山、いさみすゝんでいそきしを、あつはれぶしの手ほんやと、きせん上下をしなへて、みなかんぜぬものこそなかりけれ

## 第三

其後、むら鳥のちかぬは、さだおきをちかづけ、さ

てもつぐかげが一ぞくの、ゆくゑのしれぬ事こそは、心がゝりにおもふなり、ずいぶんありかをさがすべし、はしとみいかにと云ければ、さだおきうけたまはり、此うへは君も御馬をいださるべし、それがしも立わかつて、さがし出してうち申さん、此義もつともしからんと、はやたち出んとする所へ、さふらひ共まかり出、御たづねのものゝさいしとて、かう人のよし申ける、ちかぬ大きにうちよろこび、それこなたへと有ければ、かしこまつて候とぜんごをかこんで出にけり、ときにちかぬ、さてはなんぢは、きよひでがさいしよな、何とてたゞ今、かうにんには出けるぞや、はまおぎが是を聞、すぐにいはんとおもひしが、ちかぬがさうのおろかさを、心にふくみちんずるやう、仰のごとく兩人は、つぐかげがいゑの子に、こんどうきよひでが、つまや子にて御ざ候、おつとのきよひでをば君、くさをわけてのおたづねゆへ、きよひではしうの子をいだきつゝ、あたりなるかいちうへ、じゆすいいたし候なり、わらは女の事なれば、さまでの事は候まじ、めしつかはれて給はらば、しやうぜんの御おんならめ、またこの子をばほうし共なし、人々のなきあとを、とふらはせたくはんべると、おもはゆげなるおもざしに、ちかぬはまことゝおもひより、さだおきはさいぜんより、まなこをくばつてやあさふらひ共、それ取まけ、かしこまつておつとりまく、女ぼうさはがずこは、ぎやうぎやうしやかた〳〵、おさなき者と女なり、あまりさはがせ給ふなよ、偖いかにやととひけるを、さだおきが見ていや〳〵、つぐかげがてうせきの、けふりのたゆるらうすいまで、心ざしをはこびたる、きよひでが女ばうの、おつとしうの子しゝたるとて、かうにんに出すべきか、いこくのほうじがゑみをなし、ほうくわをこひしためしもあり、さあきよひでやしうのありか、はや〳〵申せさもなくは、その子もろともくびきつて、ぐんもんにかくるぞ、いかにいかにと云よれば、はまおぎとこをはたと打、さてもせひなき御がんりき、しうつまの事なれば、何とぞ、たすけたふさふらひて、申たるにて候へども、さとき心のおそろしや、なるほどしゆくんとわがつまは、しん山にかくれすむ、わらはこの子が一めいを、たすけたふ候ゆへ、そにんに出んと申せしを、

ひけうなるおんなとて、ころさんといたせしを、やうやうにいつわりて、たゞ今まいり候なり、此子がいのちつゝがなく、おんたすけ候はゞ、しうつまのかくれがを、わらはてびき申べしと、なみだながらに申けり、ちかぬさだおきかほ見あわせ、きよひでをさへうたせなば、なんぢも子をもゆるすべし、はやおしへよとありければ、さあらばうつてをむけらるべし、かのきよひでは一人、とうぜんのきこへ有、さだおきむかへ、かしこまつて、ゆふしすぐつて五十よき、ものゝぐひつしとかためさせ早三重はまおぎをさきにたて、すずか山へそヲロシおしよする、かくれ所の、しるしの松早三重時のこゑをそヲロシ「上にける、かねてごしたる、きよひでか、身はころもなき世なれどもくちぬ所はさふらひの、こかねざねのよろひをぎ、おなじけのかぶとに、ちうだいのたちはいて、さてはつまのそにんゆへ、今こゝによせたるな、まちもふけたるなぎなたの、かねを心み給へやと、こおどりしてかけむかふ、日ごろの手なみをきゝたれは、そうなふかけよるものもなし、松戸の五郎ゆきむね、一ばんにはせかゝるを、しとゝうけてはらふてに、こしのつがひをきりはなつ、わたらひ善次善六、是はといふておつとりまく、いしづきにてめてをつき、ゆんでの善次がかたさきより、はらりずんと切すへたり、津山のゑん八あきすみとて、すきまもなくかけよるを、こむてなぐてひらくてに、すかさずくびをかけおとす、五ばんにかゝるたかわの九郎、かぶとの天へんうちくだき、右よりかゝるやすくにが、あへなくはらふなぎなたに、両足ながれ大ぢにふす、心やすしやすくにと、くびをしらはにのせすつる、あとにのこるぐんびやうども、はらはらとかけよるを、なぎなた水くるまにまわし、切てかゝればこらゑ早三重すしてあきのこのはとヲロシ「ちりみたる、さるほとに、うつての大しやうさだおきは、たかき所にこまひかへ、かゝれや〳〵とげぢなせど、おそれてちかづく、みかたなし、きよひでも今ははや、すか所手をおひたぢ〳〵と、なぎなたをつゑにつき、ふんぢがつてぞ立たりける、ときに女ばう、ゆみやをさげてはしり出、のふいかにきよひでどの、さこそにくしとおぼされん、さりながら、きよひでをうつならば、松若をたすけんとの、かたき

けいやくあるなれば、よしみのやさきにかゝつては
て給へやと立むかふ、まつわかはゝのこゑときゝ、
山上にあらはれ出、かたきにいろをさとられじと、
やあいかに女ばうよ、たとへきよひでが、しんぢう
はかわるとも、なんぢはおさなきときよりも、ちぶ
さをあたへし事なれは、わか子もしうもどうぜんぞ、
それをわが子にかへんとは、日ごろのことはにたが
ひたり、それもよしなや女なり、たのむまじや人心、
されとも一子の松わかへは、いひおきたきことのあ
り、あひかまへて此きはの、さいごみれんにあらざ
ると、つたへてはてし、のちの世の、ぼだひをとふ
てゑさせよと、てきへおそれ心にふくみ、外によそ
へていとまごひ、さしもにがうなるきよひでも、おな
し心のはまおぎも、心におつるなみだの玉、つら
ぬきあへぬ、けしきかな、ときに松若、よしなき今
のことばのすえ、これまでなりとおしはだぬき、つ
ぐかけが一子、たもん丸がじがいを見て、こうせい
にかたれやと、ゆんでのわきにおしたつる、ふうふ、
はつとまなこはふさげ共、みゝにきこふるわか子の
こゑ、やう〳〵めてへおしまはし、かたなもぬかでさ
んとうより、きよひてがまへにおちける、ちゝが心そ
かなしけれ、女なれ共はまおぎは、なんしにまさる、
心にて、イロ詞さとき心のさだおきに、見とがめられ
てはいかゞぞと、のふいかにきよひでどの、若君御
じがいあるうへに、なにゝいのちのおしからん、さ
あらばこのやまいらせん、うけてみたまへきよひで
と、そゝろ引てみへけるが、つゆのうらみもなきつ
まを、君のためとてはなさんや、天のおそれもいか
ならんと、おもふ心にてもふるい、むねとゞろきて
はなつにぞ、あらざる方にそれたるやは、げにこと
はりとみへにけり、きよひでいや〳〵、ふかくなご
りをおしみては、たくみし心もむだなりと、若ぎみ
じがいましませば、きよひで御とも申とて、はら十
もんじにかきやぶり、わが子のしがいにかさなつて、
いだきつきてぞしゝにけり、さだおきがこれを見て、
くびうてとげぢをするを、女ばうはおしとめて、み
づからかくてあるうへは、他人にくびはとらせじと、
おつとゝ我子のくびを打、さるにても人々よ、ひと
りはおしうまたはつま、おつとのくびを女ばうの、
身として打ける心のうち、おしはかり給はれと、今

は人めもいとはずに、こゑをばかりになげきけり、げにことはりと、うつ手のせい、とうおんになげきしは、むしんにあらぬしるしなり、今ははやこれまでと、はまおきをかいしやくして早三重ちかぬがやかたへヲロシ「かへりけり、されはにや、むらとりのちかぬは、きよひでた門がくびじつけんし、やくそくなれば一子をば、ほうしのためにゆるしつゝ、心にかゝるくもあらぬ、うき世のあきの風のこる、あつさにねまの、戸をあけて、しんやの月の月かげに、よねんなくこそいねにけれ、さればにやはまおぎは、おりをうかゞひむらとりを、うたんものおと思ひたつ、しんゐのほうくわのたちのほり、ゑゝしうつまのかたきぞや、中々まつにまたればこそ、しよせんうんはてんにあり、こよひうたんとおもひたつ心のうちこそふてきなれ、はだのきごみにくさりかけ、白きこそでにはらまきし、きよひでさいごのじせつまで、はなたずさししたちをさし、多門ぎみをもかいがいしく、かろきすがたに出たゝせ、かきをやぶつて大にはより、しのび入こそあぶなけれ、このちうしんの心ざし、てんもかんをうありけるにや、とのゐのものもよくねいり、ことにしやうじをおしひらき、さしいる月にてきちかぬ、ぜんこもしらすふしゐたり、はまおぎはうれしやと、そのまゝかてうきりおとし、わがしうをかみにたて、その身はあとへまわりつゝ、たがひにかほを見合て、二のいきをほつとつく、さすが若君おさなくて、ひざうちふるふてみえけるを、物をもいはすはまおぎは、はつたとにらんではがみをなす、この氣にはぢてたもんまる、こゝろをしづめたちをぬき、すでにうたんとしたまふを、やゝあまづしばらく、いねたるものゝくび取ては、かたきうちとはいはれまじ、いかにちかぬ、おのれがぐあんに一しやうを、しあふせたりとおもふとも、もとよこしまの口はかど、そのわざはひのしもがつき、一ッ三重てんのめいきやう、あきらかに、たゞ今うつそぶたう人、おきあへやつとよばはれば、心へたりとおさんとす、かてうにまかれどをうしなふ、はまおぎゑたりとおさへおき、はやうちたまへと申にぞ、十二さいなるたもんまる、たちかゝつてぞ切たりける、せめてはうつてたむけんと、しうゞゝしてうつたちに、さんをみたせしごとくなり、やがて

とゝめをさしとをし、あらうれしやとのたまふを、はまおぎおさへて、うちのかごにやとのゐのもの、せんごもしらす候へば、はやおちゆかんとかい〳〵しく、若ぎみをおひまいらせ、とらの尾をふむ心ちして、とのゐのまへに氣をいため、どくじやの口にもんついぢ、おんどりこへてぞおちたりける、なにはのあしのあしはやき、まことにいせのはまおぎを、せんだいみもんのけんぢよやと、きせん上下をしなべて、みなかんせぬものこそなかりけれ

## 第四

「そのゝち、くわうゐんはとゝまらず、さればきのつらゆきは、あがたのをさへとしたちて、ゑんぎ五つのなつのころ、たいせんをようゐなし、すいしゆかんどりろをそろへ、みやこへかへるときつ風、ひやうしをそろへてこぎ出す、そこともしらぬわだづみの、ふかき心をくみてしる、人のくにまでまじわりの、そのなさけこそ都なれ、八日の月の海にいる、山のはにてとよみたるは、さりしむかしのなりひらなり、このうみべにてよまなんには、なみたちさへていらずもと、よみてましやとおもひよる、つらゆきひめにのたまふは、いかに八ゑがきこゝこそは、むろ津のはてといふ所ぞ、あのとを山をうちながめ、心をはらし給へとある、やゑがきは聞まいらせ、一しゆのうたにかくもなんまことにも、名にきく所はねならは、とぶかごとくにみやこへもかなと、口すさみましますを、人々かんじたまひけり、かくてこきゆくうらなみの、くろざきの松いろあをく、いそのなみまはゆきとのみ、はこのうらなみたゝぬ日は、うみをかゝみとたれもみん、いし津のいそきすぎゆくに、ふきくるかせのあらければ、かぢとりが申やう、此すみよしの明神は、靈のかみにてましませば、いのりをかけさせ給へやと、大あせに成てかぢをとる、つらゆきはきこしめし、うしほをむすびいろ〳〵の、きせいしますそのなかに、やゑがきはもち給ふ、かゝみをうみに入るとて、ちはやふる神の心のあるるうみに、かゝみをいれてかつみつるかなと、よませたまひてかのかゝみを、なげいれ給へはこのうたに、しんりよもなふじうましましけん、なみかせお

さまりおいてよく早三重なにはの、うらにてヲロシ「船よする、これはおき、いせのあさげのこほりにて、ちかぬをうちしはまをぎは、津のくには、おつときよひでがしやうこくにて、ゆかりをたのみゐたりしに、らうどうのさだをきが、此ところをもさがすゆへ、今ははやせんかたなく、日もくれかゝれば、すみよしのこがくれに、若君もろともたちしのび、ひそかに事をうかゞひしは、はくへうふむがことくなり、わかのこゝろをみちとして、あらきなみ風おさまれは、このうらへふねよする、よつてつらゆきよろこびの、御ぐわんをとかんためにとて、やゑがきひめもろともに、すみよしへさんけいある、かんぬしくにはるたちむかひ、たゞ今じやうきやうましますか、かゝるおりしもならではと、さま〴〵もてなしたてまつる、しのびてありしはまおぎは、やゑがきひめと見るよりも、大きによろこび、わかぎみもろともはしり出、のふやゑがきにてましますかや、さいふはおとゝかあねうへかと、人めもはゞずにいだきつき、よろこび給ふはかぎりなし、やゝあつてはまおぎ、きよひでがさいごのしぎ、かゝらんまでのうきくろう、こま〴〵と打かたれば、ひめぎみもつらゆきに、やしなわれまいらせたる、御ものかたりまし〳〵て、さてつらゆきにうちむかひ、かやうかやうの御事と、はしめおわりをかたらるれば、つらゆきはきこし召、さてはさやうかめでたやな、これもとうしやの、ひきあわせ、ことにはしよぐわんをかけぬれば、しんりよをいさめのまひのそで、かなでゝ神をそうせんは、いかゞあらんとのたまへば、くにはるはうけたまはり、もよとりかぐらさいばらは、もつとも神のもてあそび、神をすゞしめましまさば、などかなふじうならざらん、そのうへみな月つごもりは、とうしやの神事で候へは、みやこ人にはめづらかなる、このさいれいを御らん有、しかるべうとぞ申ける、つらゆきはきこし召、げに〳〵かかるおりにふれ、こゝのまつりにあふ事も、一かたならぬきゑんぞや、まづしんせんへまいらんと、たてせ給へばやゑがきは、たもん丸をひきぐして三重やがてよういとヲロシ「きこへける、はなにこてうの、まひのそで、はらからゑもんつくろひて、たまかつら、うちかづく、まゆのにほひやらんじやのけふり

くわんしとゑめる、かほはせは、かのくわうめうのの
のちのよを、さとりのうたにもろこしの、山のあな
たにたつくもは、こゝにたくひのけふりなりと、ご
だうのゑみもかくやらんびんの、こぼれのくもとな
り、よしふりよしこゑもよき、されは花もみち、ニッ
三重そのあきつくになれや一けひらけておもしろや、
むめのはな、やがてはるぞと白ゆきの、さしてのい
そのさよちとり、つきぬことばの此うらの、はまへ
のたづのもろこゑに、ばんぜいをよばふひめこまつ、
ゑたもさかへてときわぞと、しんりよをすゝしめ給
ひけり、身はならはしのうき世にて、ひなにこゝろの
なぐさむる、わらひのたねとこと人は、ながめ給は
んふうぞくを、此身にうつすなりかたち、すかたま
ばゆき夕つくひ、あかまへだれについのかさ、中に
かさほこ、いろ〳〵の、うちわあふぎのもやうよく、
いろもわか木のさくらはな、いまはあをばとおしま
るゝ、うみはなかめのはるくれて、またさなへとる、
さみたれも、あきにははやきとし月の、ゆめもむす
ばでくれがたの、ゆあみとはるゝ夕からす、あつさ
しのがんかたさとの、しばしとてこそひとやすみ、
御じんじなればうち出て、まだてにいらぬおどりふ
り、かみのみまへのしばのうへ、ふたつひやうしに
そろふこゑ、四しやのおまへの、そりはしは、たがか
けたやらなかたかに、さあすみよしのきしのひめま
つめてたさよ、さとはまつりのうちつとひ、あから
めもせて高むしろ、こまつの、かげのしたつゆに、
そよの袖までしつほりと、ぬれてはまべの、いそち
どり、おきにかもめがともよびかわす、はんまちと
りが、ちりやちり〳〵ちり〳〵や、ちり〳〵ともと
ぎ出せはからころのおとがからころり、からころも、
思ひをぬきにこひをたて、なさけのおさの、めをこ
めて、しつがておりやぬのびきの、たきのしら絲、う
ちはへてあまつ、おとめやさらすらん、ほしか川べの
ほたるかと、かのやさ人のうたのたね、よむやまさ
ごの、かす〳〵に、なみとなみだに身をはたす、そ
のますらをが、ますかゝみ、なみになりたやいそう
つなみに、めなみおなみの、ぬれにぬれたる中ぞゆ
かしき、あらうら山しいかなれは、かた山ざとに生
れきて、とをきこしぢとすみのゑの、うら山くにを
へだてゝもすめば、みやことおもひとる、いつれす

みよきすみよしの、おどりつまふつよろこひつ、さあすみよしの、きしのひめ松めでたけれ、おもしろや〳〵、やゑがき多もんもろともに、扇子おつとりたち給へば、てうしにうつるまひのそで、せいかにもきへざるゆき、しうねんにも、つくる事なき風、あきをひゑて、手のうちにしやうずなる、月をかくしてふところに、いるさのかげともろともに、つらゆきこゝをたちたまふ、はらからもこれまでと、神をはいしてかへられけり、まことありけるきみがてに、なびかぬくさもあらしとてきせん上下おしなへて、みなかんせぬものこそなかりけれ

## 第五

「そのゝち、つらゆきは住吉より、ことなくきゝやうまし〳〵て、いそぎさんだいなされつゝ、くにのせいとうつゝがなく、まかりのぼり候だん、つぶさにそうもんなされつゝ、さてまたつぐかげおやこの事、さだおきがあくぎやくを、いち〳〵そうし給ひけり、内よりのせんじには、そのさだおきが事をば、おもきざいくわはおこなふべし、さてつぐかげが子どもは、二人ともにつらゆきに、あづけおかるゝ所なり、かさねて御さたあるべしと、ちよくでうあればつらゆき、つゝしんでおうけをなし、さて人々にうちむかひ、にんこくきやうのうきくろう、につきにつけおき給ひつゝ、かなたこなたのうたまくら、などやうくわしくうちかたらひ、はまのまさごのかず〳〵は、イロ詞あきのよながのものかたりと、いとまをこふてかへらるゝ、これすゑの世につらゆきの、とさにつきと申せし事三重かさなるとしにそヲロシ「しられける、去ほとに、やゑがき二人の人々は、つらゆきのなさけにて、いそのかみのふるごしよに、しばらくすませたまひけり、さればにやひめぎみは、われいとけなふしてはゝにおくれ、いままたちゝにとをざかり、よろしき世ともなさぬ事、女ながらもあさましや、何とぞ〳〵後代に、のこるほどなるさうしをかき、せめてはすぎしやゑかきが、ふでのすさみといわれんと、おぼしめしたち給ふ、心のうちこそやさしけれ、かゝる所へつらゆきは、とも人をめしつれてうす月なりし、ゆふまくれ、この御しよ

へぞ入給ふ、ひめきみこなたへ御いりとて、さま〴〵なりしものかたりに、たもん丸はつらゆきの、ともを人を打つれて、おりからなりしあきくさをなかめんためにそ出給ふ、ときにつらゆき、ひめぎみにうちむかひ、のふいかに八ゑがき姫、おんみもさかりのおみなへしくねるはかりの、ふせひぞや、てんじやうひとの内にして、いもせのゑんをとりむすばん、あかさせ給へとありけれは、やゑがきはさしうつむき、もの申さねばいわつゝじ、いわねはきみのみ心の、イロ詞うちもはづかし申べし、さればにやみづからは、きみの御かげふかきゆへ、斯るみにしもやしなはれ、なんほううれしくはんべるに、ひとつのねがひの候ぞや、かやう〳〵のしだひにて、おもひたちたるぐわんのあり、もと、みやこどりの一くわんは、一とせなりひらあづまのかたに、おもむき給ふみちのきなり、ことにはきみのおしへにて、大かたうたのよみくせも、すこしは心へさむらへば、心ばかりのさうしをかき、世にとゞめんと思ふゆへ、このげちうせうじんし、まいにち水をむすびつゝ、けがれをきよめ候へば、まつこのぐわんのみつるまで、其御ことをゆるさしめたまはれかしとのたまへば、つらゆきはきこしめし、さて〳〵やさしき心ていかな、かんじ入てさむらふなり、ずいぶん心をつくされよ、其うへ一まのかけものは、さりしいづゝがじひつぞや、なりひらの事なれば、御がうもよろしくはんべるなり、やゝよもふけて八つのかね、まづかへらんと出給へはやゑがきは、つまこめに、八ゑかきつぐるものたりに、ひとまにいらせたまひけり、つらゆきはそれよりも、たちかへらんとし給ふが、いや〳〵わかき女なり、ためしてみんとおぼしめし、一むらすゝきに身をかくし三重ことをうかゝひヲロシ「給ひけり、あか月ころのあかの水、月も心やすますらん、さなきだにものおもふ身にし、ならはぬあかのおけ、ひさげの、つゆのたまたすき、やつれくろかみむすぼゝれたれかあくべきたがひきなんまこもくさ、よしといわれん二ッ三重身にしあらねば、つゝいつゝ、井づゝにかけし、まろがたけ、おいにけらしなわがすかた、月をつるべにくみかけて、そてしぼるこそあやなけれ、かゝるおりふしあてなるおとこのけたかきが、あをかりきぬに青きかむり、さも

ほのめける、ふせいにて、きくの花おけ手にふれて、すりちかふてぞとをりける、ひめぎみいづれいろこころ、げにうつくしき花かなと、のたまふにこそかのおのこ、につことわらひさればとよ、はつかしけれどこのはなは、おもふかたへのおくりもの、もとめては候へども、うつろふいろのみへければ、そのみづすこしそゝぎかけたまはれかしと打ふるゝ、八ゑがき此よしきゝたまひ、いとやすき御事なり、さりながらおほしめす御かたへ、おくりたまふその花に、わらわが水をまいらせなば、ふかきこひぢに水をさす、色しらすとやわらはれん、おほせはさにて候へど、イロコトハたゞはなゆへとおぼしめし、なさけのつゆをひとしづく、つもりてふちはすゑの事、そのうへ御身にのぞみ有とは、イロ詞くわしくぞんじ候へば、かならずかなへ世にたてゝ、まいらせんぞやわが思ひ、はらしてたべとくどかるゝ、ひめももとより心ある、おとこのいろのなをさりに、イロ詞わらわがのそみかなひなば、いなにはあらずむさしあぶみさすがに、かけてもかほのもみぢや、なみだぐむ、手をとりかわしつまを引、いづゝによりてそでをかけ、たがひにかけを水かゞみ、おもてをならべづゝいづゝ、井づゝの水もけいやくも、あさからずとこそみへにけれ、このていをつちゆきは、すゝきのかげより御らんじて、うつてすてんとおぼしめし、とび出たまへばかのおとこ、はつといふひところゑにていづゝのかけに、うせにけり、これはいかにとたち給ふに、またこつぜんとあらはれて、あらはづかしのわかすがた、イロコトバさんぬるげんけうねん中に、はかなくなりしなりひらが、そのゆうれいにてばんべるなり、ついにゆく、みちとはかねてきゝしかど、きのふけふとはしらずして、いろにふけりかすかすの、女をおかせしもうしうにて、うかまぬ雲にたゞよふなり、なをちふしんをはらさんため、うかりしこの身のありさまを、さんげにかたり申さんと、うつゝながらにナロシ「たち給ふ、いともかしこきちよくをうけ、大うち山のはるかすみたつや、やよひのはじめつかた、かすがのまつりのちよくしとて、すきひたいのかむりをゆるされてんじやうにてのげんぶくは、たうじそのれいまれなりき、むかしおとこの名をとめて、花たちばなのにほひうつるはい

づれぞや、にたりや〳〵かきつばた、花あやめ、こずゑになくはせみの、からころものそでしろたへの、うのはなになのりてすくる、ほとゝぎす、さつきのすゑのふじの山、ちらり〳〵とみしゆきを、かのこまたらとよせひある、うたも心もあめあられ、とゞろとゝろとなる神の、まぎれにささをおひまいらせ、ふむあしもとはこひのやみ、よろ〳〵〳〵とおに一くち、あくた川をも、うちわたり、ことをとはれてしら玉か、なにぞと人のとひしとき、つゆとこたへてきえなんと、ふかきいろこそわりなけれ、またあるときはこれやこの、女のけしきもゝとせに、一とせたらぬつくもかみ、ひたいのなみやこしのゆみ、やだけのつえのよろ〳〵と、たもとをひかへくどかれて、一夜いねける事も有げにや、まことにしのびねの、月にはめでしこれぞこの、つもれば人のおいとなり、此世をさりてのちの世の、じやねんのあつきは身をせめて、そのねんりきのみちはけわしき、つるぎの山のうゑにこひしき、人はみへたりうれしやとて、行のぼれば、つるぎは身をさきばんじやくの、おちかさなりてきもをうつ、こはそもいかにおそろしや、あらかなしやたへがたやと、よべどさけべどたれ人か、たすけんこゑも、あらしふく、たゞごくそつのいかるこゑ、ほのをにむせぶくるしみを、これ御らんせよといふこゑも、たちまちめうくわさかんにして、ほのほにむせぶとみへけるが、さもあさましきすがたにて、いきつぎあへぬものうさに、くさばのつゆをのまんとて、たちよる所にひとつのつゆ、くるり〳〵とめくりしが、さつとひらけてそのうちより、こてうひとつとび出て、これたかやすのつゆのまへ、われよりほかにこと人を、もたじといふてかさねつま、にくやつらやととびかゝる、まつたこなたにかけおける、たつた山の上の一字、うするとみえてたちまちに、せうじやとなつておろかなり、我つまなるぞとまとひよる、こなたはいつゝかなたこそ、かよひなれにしたかやすの、こてうのりやうとのゝしつて、ゆんでめてよりせめかゝるに、心もくらくあさましや、あゝら心うつゝなりひら、やすきひまなきこの身のせめを、たすけてたべといふこゑも、きへてあとなくなりけるか、すゝきにうけるつゆの玉、はら〳〵とみへければ、またかけも

の〻文じも有、これはふしぎと思ふところに、またそくたいのすがたにて、ゆめのごとくにあらはれいで、みだれ心のじやゐんのつみ、しやばのたのしみめいどのあた、かしやくのせめをうくるなり、此かずかずのたまづさは、あまたの女にかわしまの、水くきのあとなれば、御身これをかきあつめ、さうしとなしてわがあとを、よきにとぶらひたまはれと、ふみのかず〳〵とり出し、八ゐかきにわたさるゝ、つらゆきもなみだにくれ、さてはむかしになりひらの、そのゆうれいにて候か、ともにちからをくわへつゝ、さうしをかゝせなきあとを、よきにとふらひ申さんと、やくそくかたきいしのひか、ほたるのひかりいなつまの、かげよりはやくうせ給へは、のでらのかねにほの〳〵と、はや明わたるふる御しよの、松かぜやばせをばのゆめもやふれてさめにけり、二世を一世に見る事は、ぜんだいみもんのしだいとて、きせん上下おしなへて、みなかんぜぬ、者こそなかりけれ、

## 第六

「そのゝち、ゐんぎ七年八月七日、さだいじんなか平、つらゆきやゐがききやうだいを、ともなひさんだいなされつゝ、なりひらのゆうれい、ひめにまみえ候ひて、かやう〳〵のしだいとて、かきあらはしたるものがたり、御まへにひろうある、みかどゐいぶんあつて、きのとものりにものがたり、よまさしめよと有ければ、とものり御ぜんにまかり出、此さうしをよみわかつ、本讀むかしおとこうゐかうむりしてならのきやう、かすがのさとにしるよししてかりにいにけり、そのさとにいとなまめいたるおんなはらからすみけり、此おとこはなりひらの、うき名をふでにこほせて、かくものかたりにつくりたり、にしのたいの夜〻のむめ、春やむかしの月やあらぬ、わが身ひとつもあるとだに、さだめなき世のおしへにや、しゆつりのやうをしめすとや、ぢしやうさんがうじつそうにもれず、よみおくわかのことのはも、みな大ぜうのたへなるのり、とくにことばもよもつきじ、さればおもふ事、いわでたいにややみなんと、かきはたしたるものがたり、おの〳〵あつとぞ、かんぜ

らる、みかどゑいぶんまし〳〵て、げに〳〵そのかみ、ちかぬがゑさせし一くわんに、はしとあしとはあかうして、いときよらかにしろきこそ、都鳥とみへたるに、この物がたりにそのおもむき、こまやかにしるす事、つぐかげはつね〳〵に、わかのうらに心をよせ、歌のさまをおもふゆへ、ひめまたつらゆきにたよつて、かゝるさうしをつくる事、しんびやうのいたりとて、つぐかげをば、じやうほくめんになされつゝ、たもん丸をば、ゆきゑのせうにふせられ、なをこのさうしをゑいらんあつて、まことになりひらが歌のてい、心ありてことばすくなく、人しれぬ心中こそ、世をさりて後さずけしにうたがひなし、あつはれゆうなるものがたりと、はなはだ御かんあさからず、すなはちひめをば、いせのないしとめされける、さてとものりと、おふしかうちのみつねをめされ、右のしだいをせむじ有、このさうしに、なをつけよとのりんげんなり、兩人ゑぼしをかたむけて、さて〳〵めでたき、さくいにて候ものかな、心内にうごき、ことばほかににほやかに、たけたかくよせいおほく、わこくのしつほう、ためしおほく候へは、すなわちさくしやの名によそへ、いせものがたりとめさるべしと、つゝしんてそうもんある、みかどゑいかん淺からず、すなはちげたひをしんひつに、しよしやごとの御ほうのふ、ちうぐうひめみやないしんわう、つほね〳〵にかきうつし、さてこそ今のよゝまても、ふきつたへたるかみかぜや、いせものがたりは、これなりけり、そのゝちたもん丸には、いせの國をたまはりけり、さてはまおぎには山だにおゐて、いちじこんりうの地をくださるゝ、今のせきでらのかいき、せいしん尼とはこれなりけり、有がたし〳〵と、御ぜんをたつてゞゃ三重それよりも、さたおきたいぢときこへける、かゝる所ゑ、はしどみのさたおきを、たかてこてにいましめて、御まへに引すゆる、たもん丸御らんじ、みれば中々はらもたつ、とくちうせよと有ければ、うけたまはり候とて、かうべをはねてぞすてにける、さてそれよりもたもん丸、むねかとあまたたてならべ、ふつきにさかへたまひけり、せんしうばんぜいめでたしとて、きせん上下おしなべて、みなあほがぬものこそなかりけれ、

土佐日記終

# 對面曾我

土佐少掾正本

## 第一

扨も爾後、あまつこやねのべうゐいに、そがの太郎すけのぶとて、さがみのくにに名をえたるヂクリ弓取一人おはします、右大將よりとも公へ、すどの忠ぎありけるゆへ、同國中村の郷を賜りて、めでたくさかへ給けり、去共世つぎのあらざれば、一とせおくの丶狩ばにて、くどうさへもん、祐つねに討れたる、川津の三郎祐ぢげが子共、一萬宮王兄弟を、こう云つ共に呼むかへ、箱王をばはこねへ上せ、一萬を養立、則祐信かとくとして、そがの十郎祐成と改め、ゆい跡をさうぞく有、今日其祝ぎとして、北條殿を始とし、わださがみの守義もり、其外の諸大名、招請有て、饗應の、びをつくしたるけつかうはおびたゝしくこそみへにけれ、まづとこの正めんには、そがだい〳〵の、重寶、四ほう云ろのかぶとに、鍬形打てからかはおどしの鎧に、五七の桐のさし物、領知でんらいの一通、るいだいぶ云やうのかんじやう有、次に、祐成の兵ぐとして、一かさ增りし大鎧、こん糸にておどしたる、こく云つのどうに、さかおもだかをきんにておかせ、ろぼしがたの金甲に、横木爪のまへだて、かさぼこのさし物、おしたてゝかざられしはげにもびゝ云く、みへにけり、かくてはうらい持出れば、北條殿宣ふは、まづ御ふしの御盃、めでたう相すみ其上にて、我〳〵も給はらんと、わだくどう、いづれもすゝめ申さるれば、さ候はゞと祐信は、盃取上一ッほし、十郎にさし給へば、祐成は押いたゞき、人〳〵に禮をなし、たんぶとうけてさりとほし、かへし申せばみな一どう、ウタヒカ、リせん云うばんせいとがせらるゝ、祐のぶ悦淺からず、ずんと立て盃を北條殿に進すれば、云だい〳〵にくみながしみな〳〵、きやうにぞ入給ふ、ときにすけつね、進出、笏取直し十郎殿、きでんと我とは、一けの事、今更申すもことくどし、其元には今日より、太郎殿の嫡子と成、そがの家を繼給へば、いとうがたのゆづりもの、貯玉ふは道にてなし、ろぼしかたのかぶと、さかおもだかの鎧さし物、此方へ御こしあれ、とういとうの嫡そんは、此祐經にて候へば、ご云あん

迄もあるまじとりに當てぞ申さるゝ、祐成きいて仰のだん、尤には候へ共、あの腹巻はおゝぢいとうの入道より、ぢつふ川津にゆづられたり、さし物は入道殿四代の祖、二かいどう遠江守これちかより、持傳たる重寶なり、某た名をついたり共、弟の五郎と云者有、なんぞき公へわたすべきいはれなしとぞ申さるゝ、祐經いやとよ十郎殿、あしく物をきゝ給ふな、ごぶんた名をつぎ給へば、ぢつがたのけいず、寶物何かせん、ど中のこがねにことならず、我はいとうのいへなれば、其寶をてに入なば、せんぞへのかうといひ、一けはんじやう成ことは、いとう入道そんれいも、嘸や悦び玉ふべしたゞとく〳〵と有ければ、祐成ひざを立直し、いや、さ程一家を思ふ身が、川津を何とて討たるぞ、かく云出すうへからは、ぢつふの敵のがさじと、刀の柄に手をかくる、わだの吉もりあいにいり、尤なり乍去、祐經を討玉はゞ、天下の掟を破とが二ッ有、一ッには祐經の父、くどうむぢやは、御身の父、川津殿に殺て、祐つねの爲には、おやの敵に候へば、川津殿を討れたり、それを又討事は、又討とててうじなり、二ッにはやうしたる者、ぢつふの敵をうたぬこと、是てんがの大法なり、此うへはわぼくして、一家親くなし給へと、詞をつくしせいせらる、さしうつぶいてすけなりはとかうのへんじもなかりけり、祐のぶは手を束、十郎がぶ禮のだん、くがいを存せぬ者なれば、御免を蒙申べしと、ぢやしたまへば北條殿、兩方そこつ有べからず、某よきになし申さん、日もばんけいに傾たり、いざや罷立んとて、祐信に暇を乞、たちいで玉へば人〳〵はぢゆくぢよ〳〵にかへらるゝ、ぢなをつくして、いろをよそほふけはゐさか、その名もたかきせう〳〵の、あげやはもとよりとりたてし、小さくらやに大よせの、花をさかせしゆふきやうは、おもしろかりける、ぢだいなり、上座には工藤さへもん祐つね、次にびぜんの大藤内、そのほか大せい引つれて、ゆふ〳〵とちやくざなす、上やふうふを初とし、みな〳〵ぢゆじの持なしに、其比さたある松の君、袖嶋と申せしは、大藤内約束にて、ひかりかがやくありさまの、おとらぬ女郎さゆうにつれあたりを、はらふていできたり、はら〳〵とゐならびしは、月ゆき花もおよばじと、人〳〵見とれてことば

なし、大藤内は盃を袖嶋にさしければ、取上てくどうにさす、祐つね頂三こんほし、次に並し女郎に、さす盃を押られ、彼におあいこゝにさし、入みだれたる酒もりはいともきやうあるふぜいなり、去共せうせう遅きゆへ、祐つねき色あしければ、ちたびの使ひまもなし、時に男走きて、せう〳〵様御入と、申す詞に人〳〵は、かたづをのふで待けるに、間もおかずせう〳〵は、きん〳〵れうらの色こそで、つまをかさねてゆりかけしは、さながら天女のやうがうかと、おもふ、ばかりのよう玄よくに、三千の女郎も、がん玄よくなきがごとくなり、おめずをくせずそでしまが、玄やうざに、むんずと打なをり、女郎達にゑしやくして、既に盃初て、カ、ルまたわかやぎし酒もりはいとも、興あるけしきなり、時に祐經、せうせうどのゝ慰に、何ぞ興あることもやと、申さるれば大藤内、せんこくきでんあの君を、乍皆天女と宣ひし、御詞にて某が、思ひ付のござ候、せう〳〵殿をば辨ざい天、のこる所の女郎たち、十五どうじに表しつゝ、せう〳〵どのゝ御まへに、品〳〵かざらせ酒のまん、是はいかにと云ければ、工藤手を打扨ごへんは、おゝ才かく候よ、おも白からんはやとくと、すすめ立れば女郎達、わらひさはぎてそれよりもやがてようゑときこへける、花やかにこそみへにけれ、まづせう〳〵はみつぶとんよぎをうゑろに引おほひ、いはやをやつしていりければ、てんによとさだめ、そでしまは、ゑんにやくどうじと打みへてあまたの、かぎをふくろにそへきせるに、かけてぞかづきける、つぎにいでぬるはつ山はひつけんとうじとおぼしくて、かたさまゑるごぞんじとかいたるふみにふでをそへゆるぎいでたる取なりは、やなぎさくらにむめがかの一つに、にほふ三重ごとくにて、いづれいかにとわきがたく、なじみの中の打とけて、むすぶも、かろきみづ色の、てほそを兩のてにもちて、につことゑめる玄んざうはいまはやりでのせんせいに、あふよまれなるたまよのきみ、くはんたいどうじとみへにけり、いしやうどうじは玄まのすけ、にしきのきぬをかたにかけ、かたてにつまをかい取て、ふりかけ〳〵いづるてい、さすがとしまの玄こなしは、みな人ほむる、ほめたこゝろのよければ、ひとつのめとや、とよさきが、てうしさかづきもちいづる、

ゑゆせんどうじや是ならんげにとよ、としはとみくさのほにほが、さいてみのるてふ、きみのみつぎに引きたる、ぎうば、どうじと、おぼしくて、みつゑはは五ゑきなる、ふさをかけたる竹馬をさても、見事に、かざりたて、たづさへいづれば、せんじゆのきみ、せんしやどうじと打みへて花をかざりしふねくるまゑんくのつなをむすびつけひいて出たる其ふぜい、おの〳〵きやうにぞ入給ふ、せう〳〵はすけつねに、一向酒をすゝむれば、いまはざしきにたまりかね、漸くとこにいりければ、せう〳〵は、かいほうなしすかしてとこを「おきいづる、かゝる所に、ゑんのうへ、ものさはがしくどう〳〵と、ゑやうじにうつる其かげはあうんの、二わうにことならず、皆〳〵驚き逃ちつたり、ゑやうじ四五間ふみ破て、五郎朝いな一同に、おどり出たる其時むね、さかおもだかのはらまきに、四尺餘りのたちをはく、義ひではすはうにて、草摺三げんかい抓、ひきすがり、どうと居て、ゑいやつととめた、五郎本より大力、又引立れば引留め、くる〳〵めぐるいきほひはたもんぢこくのふんぬのせい是にはまさじとみへにける、せう〳〵さはがずあさいなさま、御せはな、やき給ひそ、はなち給へととゞむれば、義ひできいて、某御所よりかへりの道にて、見れば五郎、鎧引かけ馳けるゆへ、心元なく追つゞき、やうすを聞ん其爲に、是迄一所にきたるといふ、五郎踊てはがみをなし、十郎殿はなどおそきぞ、はや御出候へと、あさいなをふりはなち三重こゝやかしこと「たづねける、かゝるところへ、十郎は、ものゝぐかため馳來、やうすはいかにとのたまへば、時むねうれしさかぎりなく、みゝにさゝやきかくといふ、兄弟悦びぬき足して、すけつねがふしたりし、くだんの床に立かかり、ねいりしものをきらん事、ゑにんにおなじ、いざおこせと、三重あとやまくらに、たちよりて、いかにすけつね、だいじの敵を持たる身が、ふかくにみゆる物哉、おきよ〳〵とよばゝれどこたへなければ時宗は、うへ成衣を引はづす、祐成たちをふり上れば、くどうにてはあらずして大とうないぞふしてける、きやうだいめと目を見あはせて、あきれはてたる計なり、十郎たちを扱持て、そ首を抓引出し、やあいかに、大藤内、祐つねが有所、眞直に申べし、少も包物な

らば、いけてはおかじとたち突付れば、わなゝきこへして大とうない、何も存ぜず、祐經は、たゞ今いでゝかへるうち、そこにねよとの事ゆへに、いねたるにて候とふるひ〳〵ぞ申ける、時宗は少將を、引立刀を胸に當、いかに流の身なればとて、祐經が大名ゆへ、早も我に思ひかへ、よくもおとして有ける な、のがれはなしといふときに、てしゆ遽て走出、全是少將のわざにてなし、工藤樣涼(すがの)ぶし、そこを覺て少將にも、色をみせずにおち給ふ、はゞかりながらせつしやめが、こゝはうけあひ申なり、工藤樣は大磯の、きぢゆと申す女郎に、心をとれて在せば、是にさしこみ此御願、押付叶はせ申べしと、少將を引のくる、朝いなはかけ來、おしわけてつゝといり、なにをさはぐぞわかもの共、靜れ〳〵此ていしゆが、とつくとやうすをうけごふたり、是は當ざの花なりとて、みつ引れうのもんつきを、ていしゆにこそは與けれ、ていしゆはこ袖を押戴、我ぢそん迄家名をば、三浦と名のり、此ごもんを付申さんと悅びて、こよいのことは知人なし、先隱便にと申すにぞ、朝いな祐成時宗は、よきに賴とそれよりも大藤內を引出し、せめてはきやつを、さいなめと、おきればふみ、よろべばけたをしすきもなく、三人笑てゆびざしして、宿所〳〵にかへられけり、遖祐經長居せば、あやうかるべき次第やと貴賤上下安詫皆かんせぬ者社無けれ

## 第二

「其後、朝日向三郎義秀、そがの五郎時宗は、いづ境にて行逢、互にそばへはしりより、是はいかにととひければ、よしひできいて去ばとよ、先日、けはゐ坂にて噪の事、父義盛が聞付、以の外に腹立し、某をかんどうなす、力不及立いでゝ、一先田舍に身をかくし、免許の旨を願んと、ゆかりのかたへ參るなり、是といふもごへんらが、身のうへをおもふゆへ、父の心に背しと、日比にかはるあさいなが、打ぢほるるこそまことなれ、時宗はつと手を打て、扨はさやうかせひもなし、我らとてもさのごとし、ほうしになれとの母のめい、背て男に成たるとて、母のかんきを蒙れり、某はかねてより、かく有べしと思ひし

に、こへんは笑止千萬や、義秀聞て、扨はさやうに候か、舍兄はいかにと云ければ、去ばとよ十郎は、わだ殿のかんげんに、やうしと成ては、ゑつふのあだ、討には叶はぬと、宣ひしその日より、祐信がやかたを出、ちうや大磯に罷有、ゑよぞんの程はいはず共、すいさつあれとぞ申ける、義秀聞て、あゝたのもし〳〵、又こそあはんさらばとてたがいに、見おくりそれよりも、ゑるべのかたへぞいそぎける、さるほどに、鎌倉の御所には、侍所の別當、工藤さへもん祐經、今日出仕のめん〳〵へ、申渡けるやうは、偖も我君賴朝公、右大將に任ぜられ、其御ゑうぎとして、來月十日御能あり、諸大名諸役人、幷にかまくら中の町人共、見物仰付らるゝ、男は白洲に相詰べし、女は棧敷ごめんある、うの上こくにいづれも、相詰べしとの御事なり、有合めん〳〵一同に、畏て、おうけをなしわがやをさしてぞ「かへりける、さだまる日にも、成しかば、かまくら中の老若、こゝを晴と出立て、われも〳〵とまいりしは、おびたゞしうこそ「見えにけれ、こゝにまた、へいけの侍、主馬の判官盛久は、此序に忍入、より朝を討取、くまのに忍て御座、重盛の公達を、大將と領、再へいけのみよとなし、亡君の御仇を、むくいんと思ひたち、かまくらにきたりつつ、きせんにまじはりうかゞへ共、女はごてんへ呼上られ、男は白すに殘ゆへ、力及ずこゝかしこやうすを、うかゞひゐたりけり、としのよはいは、ゑづはたやはたち計のにようぼうの、いとあてやかにみへけるが、ともにはなれてたゞ獨、ぼうぜんとしてたちいたり、盛久は促て、なふ御身は何方より、來給ふぞいかなれば、ひとりイましますと、いとむつまじくとひければ、女房聞て躬は、雪の下の者成が、御能見物いたさんと、是迄參侍へ共、つれたる者を見失ひ、あさまだきより此所に、立疲て侍ふと、かたりければもりひさは、さていたはしやそれがしが、伴て參せん、わが行かたへ、御こしあれいかに〳〵と云ければ、女房聞て面煩げに、かほ打傾何方の、お人さまかはぞんぜね共、御心入の程、忝なうは侍へど、今にも連の參なば、章を尋申べし、ゐこそおうけは申さねと、たちかへらんとゑたりしをもりひさそでを、ひかへつゝ、尤には候へ共、ほかへ伴ひ申さばこそ、人の尤も有べけれ、御所へ參に誰有て、い

なみ申さんやうもなし、我等に任せ給へかし、かゝるすがたの上郎と、ゑばしなり共御つれだち、申すことも、すぐせのえんはやとく〳〵と手をとれば、おんなはにつこと打わらひ、何樣是もごゑんなり、さあらばつれの來る迄、頼まいらせ侍ふと、さきにたつをもりひさは、うしろさまに、むずとだく、女房是はと驚を、帶を解小袖をはぐ、こはとうぞくかかなしやと、もがくところをだきすくめ、みぎより左のわきつぼを、こぶしも通れと刺通し、かしこのほりへざんぶとなげいれ取たる、こそでをうへにきて、かづきにかくす男がほ、もとより盛久ようがんは、よにかくれかき事なれば、さながらおうなのごとくなり、いかに主君の爲なりとて、思へばひどうの行跡哉、あゝなむあみだぶつととなへつゝ、ゑばしねんじゆをなしにけり、かゝる所に、梶原平三かげ時は、見廻りの爲出たるが、世上にさたある色好、もり久を見るよりも、誠の女と心へて、ゑと〳〵とたちよりて、さてそのほうは何として、かく行いたるぞや、見物の者ならば、こなたへ參れとめを細め、いと懇に云ければ、盛久はかぢはらを、見るより嬉しく幸と、ごらんのごとく自は、御能見物の者成が、つれなる人にはなれつゝ、そのうへこゝちあしければ、一足もはこばれず、御藥の侍らはゞ、給はれかしとかげ時が、たもとにすがり申けり、かぢはらいまはたまられず、こひかせぞつと、むねさはぎ、邊を見合某が、惡やうには致まじ、ずいぶんかんびやうなしゑさせん、まづ片かげにて休そくし、よきゑぶんに某が、さしづして面白き、所をみせんいざまいれと、かたに引かけ立けるが、ふりあほのきて、上郎は、打見たるとはさうゐして、さて〳〵おもしこはいかにと、いへば盛久さもあらん、こゝちあしく侍へば、身を引立る事叶はず、ごたいぎながらはやとくと、すゝめければかげ時は、もとよりうでさきつよければ、心へたりと云まゝに、はや御能始りて、ふゑやつゞみのこへ共に、ごてんのかたへにいそぎけり、のうもなかばの、比成に、ゑぶんはよしと盛久は、かたへにゑのび、ものゝぐし、あいづのたいこを、打にけり、忍びいたりしいちみの者、こゝかしこよりあらはれて時のこへをぞあげにける、すまんのけんぶつ、さうどうして、うへを下へと、かへしける、

去共御所には、おの〳〵一人當千の、物になれたる兵共、ものゝぐかため切て出こゝをせんとぞ三重たゝかひける、かゝる所に盛久が郎等、久遠久住兩人は、大だちをさしかざし、たゞいのなかを、こと共せず、わりたて〳〵切ちらせば、あたりにちかづく、みかたなし、こゝに、玄なのゝくに、うんの小太郎、行氏が郎等、薙刀かいこみ馳向ひ、ひさずみにわたしあひふた打三うちてう〳〵と、合けるが久住に、なきなたを、打おとされ、かたさききられて引ている、安西のや七が郎等、逃さじと打てける、心へたりと久とをは、以開て打たちに、みけんのぶかに切こまれよろり〳〵と引ている、平くの、へいまの丞が郎等、久とをがうしろより、たゝ一打とする所を、久住すかさずかけ合、兩方より切たつればせんかたもなく、うけだちにて、かいふつてにげゆくをいづく迄もとおつさまに、ひさとをが打たちの、きつさきをほろつけに、切こまれて引ている、臼木の、八郎が郎等、すきまもなく打てけるを、たゝみかけて切付れば、ゆんでのひざを切われ、かなはじとや思ひけん、ひかんとすどれひきも、ゑず、すでにあやうくみへける時、くどうさへもん祐つね、走いでゝ大をんあげ、何へいけのざんとう共、御所へ亂入すいさんなり、いで物見せん大だちぬき、まくりたつれば、追かへし、二三ど四五どいどみしがさすが、名をゑし、すけつねに、何かは以たまるべき、久とを久住兩人は、ゆんでめでに、切ふせられ、おなじまくらに玄ゝにげり、玄のびゐたりし盛久は、逃ぬ所と切て出、おゝ珍しやくどう、いざまいらんとわたしあふ、すけつねゑたりと云まゝに、兩方めいよの兵にて、玄のぎをけづりくはゑんをたてこゝをせんとぞたゝかひける、もりひさかたより、きの七きの八兄弟、祐つねに切てかかる、祐經が郎等、あふみの小藤太八はたの三郎、玄うを討せて叶はじと、おしへだてわたしあひ三重こゝをせんとぞたゝかひける、そのひまに、もり久は、此度こそは空く共、おし付本望たつせんと人だまいにぞまぎれいる、祐經主從三人は、きの七きの八兄弟を、ゆんでめでに切伏て、もり久をのがさじと三重あとを玄たふておひかくる、わだのよしもり、追欠て、長追むやくと引留め、祐經師友それよりも、御所をさしてぞあがら

れける、遖ときのちんじやとて貴賤上下安詫皆かんざぬ者社無けれ

## 第三

めでたきみよに大いそや、ゆき〳〵の人もうかれぶね、色のみなとの中になを、せんせいのかいさんとやまと、のみかは、から竹の、せんりに名たかきとらごぜん、其風俗の艶くて、又よはからぬだて姿、千花が中の一花と、かうけもぢげもおしなべて玄たはぬ人こそなかりけれ、けふしもやよいみかのくれ、かのその人にはあひもせで、如月の半より、世の人嫌かぢはらが、けふ迄も上詰の、せひにあはんと認共、一よの枕もかはさねば、平三かげ時持あつかひ、いかゞはせんと夕ぐれに、玄るべのちや屋へきたりしが、とらごぜんに行あひて網笠あふのけ玄と〳〵より、めもなく笑て是はそも、我らが迎に御出か、有がたし〳〵、大かたさやう有べしと、思ひおもつて來りしに、あんにたがはぬ嬉やと、せなかを打て手をとれば、とらはその手をふりはなち、いらへなにしにおむかいに、まいり申さんやうもまた、せうつきなくはき給ふぞ、おきに玄給へかぢはらと、いふ名を、きくもいやらしと、あいさうなげにいひければ、さすがのかぢはらせきめんし、ほかのみるめもはづかしく、いはんことばにさしつまり、よくおぼへてござあれやとばかりいひてたちけるをわらは三重ぬものこそなかりけれ、はるはまづとよ、のも山もたゞそれのみの、さくらあめ、てごとにかふていへづとに、なせやむかしも、ひさかたのあまつかみよの、にゐまくら、みとの、まぐばい有けるも、是に、ならひてあきつすの、めでたくなりしせきれいとう、それより、いまにめおの中かはすなさけのことのはも、うすきはいやよ、こくせんや三〳〵はんあめは、めいぶつと、きせんらうにやくおしなべて玄ろきを見ればふくるよの、月に二ッ三重玄げれる、かつらあめ、とう玄んゐがく川口よりも、わきてながるゝ水あめや、くむ共つきじかんろすい、里の子共よ、とくはやくかはゞこい〳〵こんぺいとうもあるぺいぎうひ玄な〳〵のはとやすゞめやからなすび、からふりからもゝ、うつくしく、かぞへならべてうたひしは、

おもしろかりける〻だいなり、とらはにつこと打〻みて、かさもいしやうもよくにあふ、うまれながらのから人か、きかま、ほしやと有ければ、商人は打笑て、上郎様とて正ろやな、飴さへめせば何程も、てんぢく〻どのほめことば、わがてうこゝんのはやりうた、ご〻よもうあれとぞ、申ける、梶原聞てやあ商人、とら其いはるゝ上郎が、己が歌が聞度とて、其飴をかふべきか、よくさへうたはゞ金銀は、いか程も此客が、まきちらしてとらすべし、わつとうたへと云ければ、商人聞て先それは有がたし、乍〻去ずい一の、太夫さまにて在せば、ご〻やれの上にはそうなき物、少上て見ませんと、飴一袋さし出す、とらはわらふて手にとるを梶原大きに涌上て、我にあてて其飴を手自取て有けるかと、ばい取てかしこへすて、扨は此商人が、びじやくの色に思はくか、きくはいなりと云まゝに、ぼう押取て商人の、はこをみぢんに打くだくは、ばう〻やくぶじんにみへにけりかかる所へかまくらより、急の使馳來り、御所よりきうに御召と、一通をさし出す、かぢはら急拜見し、君の仰のきうなれば、ぜひに及ずはがみして、すべきやう有り其商人、留置べしとけらいをそへ、つぶやきながらそれよりもやかたを、さしてぞかへりける、とらはおかしく商人の、とめられ給ふも一ご〻ゆのかげ、よと共かたり、申べし、こなたへきたり候へともなひ、内にぞいりにける、とらがざしきは花かざり、びをつくしたるものすきの、けふのものとてひなあそびかゝやくまでにかざりたて、さま〴〵なりし、もてなしにいざあき人にもご〻やうぞくとり、酒ひとつ進ぜん、はやとく〳〵と有ければ、商人は畏て、ご〻やう束ぬげば其よはい、十六七のび少年、とらは驚なふ御身は、どう三郎殿なるか、あらめづらしやなつかしや十郎さまはいかゞぞとすがりついてぞなきにける、どう三郎も諸共におつるなみだをおしとゞめ、日比せつなるごしんぢう、存申て候へば、此程の御きづくし、さつし入て候なり、扨此間十郎殿、御行かたのご〻れざれば、定めて此やの内に、忍給ひて有らんと、存乍も今程は、人に尋んやうもなく、かやうに粧を引かへて、御めにかゝることうれし、へんじも早く十郎殿に、あはせて給はり候へや、とらは聞てさにてなし、今見給ふと梶原が、其せいとう

のつらければ、内からせくも一入に、御めにかゝる事叶はず、こよいは御身をかのかたのゆかりと、思ひむらさきの、ふかきいろかになぐさまん、どう三郎はあれなりしいかうに、かけしかりぎぬに、かむりをそへてかざられし、去さいはいかにさればとよ、はづかしながらかたるべし、自が父上、伏見の大なごん、さがみにさすらひ給ひし時、母の長者に戀草の、假初臥の其中に、童を儲給ひつゝ、都へ上り給ふ時、此裝束を賜て、三月三日は年毎に、是を飾ておがみしに、こぞのけふは祐成に、是をきせましひなごとし、ならべし、そでのうつりがも、いつしか夢と成はてゝ、まゝにならぬはうきよかな、さりながらつゝがなく、ましますことのうれしきに、わざと祝て御身にきせ、十郎樣と思ふべし、去からば仰にまかせんとかむり、かりぎぬ「ちやくしつゝ、さてもひいなのはじまりは、あはしまのおゝんかみすみよしの、明神になごりを、おしみかたちをかみにて、つくり御そばに、ならべ置給ひしよりおうなの是をもてあそぶは、男を去たふならひとやさればせいせうなごんがふみにも、こしかたゆかしきもの、ひいなあそびのてうどゝ有ましてやいはん、そがの君、よろづのゆふびなるのみか、ぐんりよきうばゝいへの物、去うきくきんぎ去よぐは迄も、ならぶかたなき身なれ共はるの花には、山おろし秋の月にはむらくもの心にあらぬ世のさはり、ふたつゝれだつかげみれば、うら山しくも行鳥と、あふぎさす手にとらごせん、ひしとすがりてむねのひは、ふじやあさまとわかれ共、もゆる思ひはおなじこと、けぶりくらべん去づが身の、かゝるつとめのかなしやとなみだに、くれてふしゐたり、是見たまへと、其ひまにかむりかりぎぬゝぎかへて、なが大小にまきばをりとこに、かけたる花入の、あみがさ取て引かぶり、一ふりふつてふりかへり、あの山みたか、はつざくら、此谷みたかもゝの花げにうぐひすの花をみて、ほゝうとほむるこへはいとけしきに、うつりおもしろしとたがいに、三重かはす、おしのはの、ふかまの水のそこきよく、むすびし中も理と、夕つげ鳥のなかぬ日は、あり共きみにあはぬよはなふおぼへぬと、諸共に、かたにもたれて立ゐたる、すがたはさこそよそめには、色と思はぬ人ぞなき、かゝる所に祐成は、忍ひ

來て此ていを、ゑやうじのひまより見給ひて、つゝと入て其まゝに、ふたりをさゆうへ突倒、にらみつけてぞ立給ふ、是はいかにと團三郎、君のおゆくへ尋ん爲、忍び參て候と、申ければ十郎は、いや何とてまづ此ざしきに今のふぜいは何事ぞ、己たゝぬか此うへに、何の云わけ有べきぞ、にくきはとらに留たり今更いふも腹立と、持たる扇を取直してう〳〵と打たゝき、せきつのりたる有樣なり、とらは泪にくれながら物のりひをも聞わけず、さりとはつらき御ゑかたと、起直るを又打すへ、今ははや是迄と、立かへらんと、ゑ給ふを、團三郎押留、まづ〳〵お心おゑづめ、とつくとことを聞給へ、それがし是へ參事、とらごせんに御なづみ、敵の事をわきへなし、一向色にそみ給ふ、去に依時宗樣、さま〴〵心をつくされて、何とぞしてとらごせんを、わきへゆういん申なば、おのづから里通を、御留り在んと、某形を刷て、此所へまいりたり、全ふぎに候はずと、くだんの裝束取いだし、祐成にみせければ、祐成一々聞給ひ、扨はさやうに有けるか、かく迄思ふかた〴〵の、ゑんていさつして恥や、全我が誤なり、はらばしたつな此うへは、時宗にたいめんして、わがゑんていをあかすべし、まづ〳〵汝はかへるべしと仰ければどう三郎、何を申もお爲なり、畏て候といとま、申てかへりける、とらは涙を押とゞめ思ふが、中のいさかひとやきげんなをしに酒のまんとみづから、てうしかたぶけて、十らう殿にさしければ、祐成盃取上て、ほさんとせしが堰上て、ゑきりにおつる泪のたま、つらぬきあへぬごとくなり、とらはあやしみいかにやと、とひければ祐成は團三郎が申すでう、時宗が心體の、肝にてつして恥しく、思ひ切んと思ふ程、なをきれやらぬぼんのうの、いぬよりもなをおとりたる、祐成が心の中、我ながら口をしと、こへ打ふるふて申さるゝ、とらもたもとをゑぼりつゝ、扨もうれしきおゝせやな自浮世にながらへて、御身樣の御ために、ならぬと聞てつかのまも、いきてせんなし此うへは、ゑゝてみらいのちぎりこそ、わすれ給ふな是迄と、守刀をすらりとぬく、祐成押留且まて、御身を殺某が、ながらへて何かせん、いや〳〵御身はたいせつの、のぞみをもちて御いのち、すて給はんとはおろかなり、我は命ふたつ有り、弟五郎がある內

は敵をうたで置べきか、かく迄思ひつめたれば、共にいのちをうしなはんも、かしこゝにて相果なば、上やの噪いかゞなり、かやう〳〵とさゝやきて、おび二すじを取いだし、二かいの柱に結付、たぐりてそとへおちこちの、みちもさだめずいでけるはあやう、かゝりける、だいなり、いろはにほへと、ちりぬるをわがよたれぞつねならむとおさなき時の、てならひにかきおそはりしわざなれど、よそのことゝやいたづらにすぐる、月日はおほけれど、はな見る春のすくなきを、むかしの人はなげきけめ、それさへ、あるに我はかく、いかに君ゆへ、なればとて、かゝるうきみのはかなさをこしぢに、かへるかりがねも人に、つぐるな、たのむによ、うぬのおくやま、けふこえて、あさきゆめみし世の中と、ゑらでやふかく思ひいり、人をうらみ身をなげき、かなしむまじと思へ共、我らごときの、おろかの身さんがい、くはたくと、聞時は、いか成里にかくれても、かくしてやどるいほもなし、是もたれゆへかた様のにくからぬよりかくまでに、身をすてゝこそうかぶせもありてふ物をいさぎよき、此世にまさるのちのよと、いさめられてはいさみつゝ、ゑのびていづる、ゑゆとなれば、こよみはあれどゑひもせず、けふといふけふ大いそをいでこしゆけば心なき、身にも哀をゑるといふ、鳴立澤にぞつき給ふ、それよりも人々は、心靜にうはぎをぬぎかたへに打ゑきむかひゐて、かほとかほ見あはせて、みらいは必、ひとつはちすのうてなのうへ、ふかくかたらひ申べし、みれんにわたらせ給ふなと、申すことばもそゞろにて、又うちふしてなくばかり、祐成いや〳〵歎つゝ、殿ば人や見尤ん、はや〳〵さいごを急んと、ゑみづを結念佛し、刀ぬきもちいかにとら、いまが此世の限りなり、ねんぶつ申せとのたまへば、とらは心へさふらふと、まなこを、ふさぎくはんねんす、祐成すかざす心もと、さし通せばつばもとよりほつきと、おれてぞとびにけるとらは驚こはいかに、祐成につこと打笑、其心ていをためさんとたくむ思ひの劔ばゝ、木だちにはくをおしどりの、色けをさりしゑつの程、おゝたのもしゝ〳〵、すへの松山愚なり、ふじのたかねになみこす共、たがいの中はかはるまじ、二のみやかたへ立忍び、いさいはあれにてかたらんと、二人手にてを取くみて

ふかく忍びてぞゐたりける、げにあさからぬかたらひときせん上下押なべて皆かんぜぬものこそ無けれ

## 第四

わたるいたばし、とんどろといろ、ゑどろもどろの、あしなみを、物くるわしのすがたやと人のはやすがみづからはなを、おもしろふさふよの、はやせや子ども、はやさぬかさゝにつけたるふりつゝみ風がさそへばからころり比は、やよいの夕がすみ、立いでてみねのくも、花にやあらん白たへのゆきかと、のみぞうたがはる、その花よりも、〳〵、いざよひ過てつぎのよや、見しかほばせがめにつきのすみまゆかみの、おもかげが、身にゑみ〳〵と二せかけて、かはりたまふな、わすれじと、かたくむすびしふうじめの、ふたりが中にかよふかみ、くもゐにかぜの、そよそよとよもに、くんじてちる花はさら〳〵さらり、さつ〳〵と、ふりかゝりたるこぼれかみ、かきあげかきあげばちに懸りてもつれてよれて、とけぬ、思ひはうやつらやうきよにあきか、はるながら、ゑぎたつ澤の夕まぐれ、おゝちみ月に松のはの、かずはよむ共君思ふ、こひしき事の、かず〳〵に、いかでおよばんまつ人も、こぬよあまたに成ぬれば、ひとりかたしく、たまくらに、ふけゆくかねのこへすごく、あらしにつたふひゝきには、ゆめやぶれておき見れば見しよの人の俤が、とこのかけ物ふすまのゑに立そひ、いだきとめんとすれ共かげきへて、かしこのつまど、こゝのすみ〳〵、かけりめぐつて、物くるはしき、らんびやうし、すはこそ松ふく風にさそはれ、いはうつなみのどう〳〵とあだし、こゝろの、みだれかみゆふてうらみを、はるのくれ鳴立澤にぞつきにける、さる程に、是は、三千風と書て、みち風となづきたる、行脚の者にて候、くばんゐゑくどく平等施一切同、ほつぼたいしんゑやけんの眼もゑほらしき、色のめもともふさぎては、おなじのばゝの塊に、なるとは誰も知やうに、ゑらぬはゑゆらのけんぞくと、なりぬる事こそ、はかなけれ、こゝに、大磯のとらごぜん、全盛又なき身なりしに、そがの何がしとかやいふ客に、互に結ぶ心中の、あへなく

も此澤にて、廿日斗いぜんに、及の下に身をちゞめ、ついにはかなく成候、ぐそううへんの者なれば、こゝに葬石碑をたて、諸人のゑかうを請ん爲、形を刻かやうに負、大磯邊をくはんぢんし、たゞ今かへり候なり、いやあれ成、とらがつかにこしかけし、狂女はいかゞと立寄て、みればこはそも少將か、五郎樣にて在すかとたがいにひしとすがりつきまづさき、だつはなみだなり、やゝ有て少將は、二せとちぎりしみづからを、ふりすてゝとらごぜんの、ほだいの爲に出家なし、此あんぢつにゐ給ふは、有べき事共思はれず、かく身をやつし忍出、とにもいかにも成べきと思ひさだめてさふらふぞや、時宗もうすを取てすて、是見よや、出家はせず、かねてわ女も知ごとく、かの工藤祐經が、却こなたを討んとす、たせいにぶせい力なく、兄十郎はとらごぜんと、心中してゑゝたると、世にひろうなし時宗は、母の仰に隨て、ほうしに成しと人々に、ゑらせん爲の策、祐成とらは先立て、二のみやかたに忍びゐる、かまへてあんずる事なかれと、打かたらひてゐる時に、物おとまぢかく聞ふれば、時宗は少將を、かたはらへ、ゑのばせをき、其身もかたへにかくれゐて、ことのよしをぞうかゞひける、まだ夕月の、比成は、ついのてうちん、かゞやきて、見れば庵に横木瓜、ゑや、祐經ござんなれ、奴こゝに來る事、ゑゝまつ所の狸、打てとらん嬉やとたちぬきそばめて、まちかけたり、まぢかくなれば、てうちんを、切ておとすを供のぶし、はら〳〵と押取まく、なんぞ五郎にたまるべき雜たて切はらへば、のり物を捨置て、四方へばつとぞちつたりける、時宗急駕の戸をふみ破祐經を、かいつかんで引いだし、すかさず押伏のりかゝり、とし比ねらひし、おやのかたき、けふめぐりあふうれしさよ、くさのかげなる父そんれい、たゞ今たむけ奉ると、跳上り飛上りさん〳〵に切ちらし、切たる首の髻取、塗たるちを押のごひ、靈ぜんにたむけんと、月にすかしてみてあれば、祐經にてはあらずして、名もなき者のくびなりけり、時宗はつとひざをうち、ゑゝむねんや淺ましや、か程に心をつくしたる、おやのかたきを時宗が、打そんじたりといはれんは、世に口おしきゑだいぞと、たいぢにどうとざをくみて、ゆみやのかみもいかなれば、いとうが

ゑそんをか程迄、にくみすてさせ給ふぞとおぼへず、そゞろにおちかゝる、むねんのなみだはせきあへず、かゝる所に時宗が、うしろに工藤祐經、ずつと立ていかに五郎、此祐つねを打事は兄弟よつても叶まじ、向後心を飜せ、五郎佐にらみ付、うれしや天の與なり、くはんねんせよとたちおつ取、切てかゝれば祐つねも、さゑつたりとぬきあはせゑのぎをけづりてたたかひける、かゝるおりふし、七尺ゆたかな大男、預たりとわつて入り、双方を打留る、時宗怒て大切成、敵討のゑやまなさば、討て捨るぞのけといふ、時に彼者網笠を取て捨れば、朝いなむずとざをくんで、ゑばらく〳〵、すけだちにては、さらになし、ことのどうりをとつくときけ、やゝ祐つね、一らう別當たる其身として、何しに是へはき給ふぞ、まつた時宗、ごへんは祐經を狙ゆへ、母のかんだう蒙しに、それをやぶるか大ざいにんそこ立されと、云ければ、時宗聞て、くんふの仇をば、共に天をいたゞかず、たゞ打にと飛かゝる、朝いな尚も引とゞめ、さ程口きく其方が、兄十郎と師友に、討てこそは父川津の、靈こんも悦れん、五つや三つの比よりも、心をつくせし兄弟が、兄を指置うつならば、惣領の助成は、たんせいむになすのみならず、臆病もの、名を取て、ふかうのつみ遁なし、わどのばかりか、川津が子か、いかに〳〵とつめければ、涼の五郎一ごんの、へんとうにも及ずして、さしうつぶいてゐたりけり、時に祐經立上つて、いかに時宗、某是へ來る事、十郎は大磯の、遊女を偸で逃たりしに、置所なくさし殺、せひなく其身もゑぬといふ、五郎は坊主に成ときく、扨はゑごくのこし抜共、一けの名下と人〳〵に、唱られては此工藤が、ぶゆうの家のかきんと成る、打て捨んと思ひしに、今のゑはざ心ばへ、存のほかたのもしゝ、我も一子を持けるが、汝がやう成るこを持事、遖川津はくはほう人、隨分腕に力をいれ、ふたりにても三人にても多くかたうど催して、此すけつねが首をうて、汝が刀はくどうが身に、立べきはがね覺なし、是はおぼへのある劔、いざとらするぞとさし出す、時宗をくせずつゝとより、人に刀を授るには、つかをこそ出すべき胡やはさきを出す事、請取べしと祐經が、持たる拳をみじと取、ちから任にゑめつくれば、ねんりきうでにかたまつ

て、祐つねが拳より、ながるゝのりは紅のきぬ引はへたるごとくなり、朝いなみて取あへず、こしに付たる大さんにて、やがて、此ちをたんぶとうけ、五郎が手を押はなし、一口飲で工藤にさしいこくには、會盟とて、ちをすゝつて、双方の、約をたがへぬ誓となす、此義ひでが證人ぞ、御身呑で五郎にさせ、はやとく〳〵とせめられて祐つね、まなこくらめ共さあらぬていにて一口のみ、五郎にさせば時宗、盃請取押いたゝき、唐土の會盟は、犧のちをすゝる、押付我ら兄弟が及をゑん上仕らん、たがへ給ふな祐つねと、悦勇ずつとほす、工藤は克心へたり、ずいぶんうてよとにらみつけ、やかたへかへれば時宗は、手に握たる其敵、のがす事の有べきかと、追北出るを朝いなとめ、一人にて討てはたゝず、兄祐成兄弟して、討て本望を遂られよと、せいせられつゝちからなくはがみをなして、立たりける、武道を立るぶしの身の、ぎは金てつにひとしゝとて貴賤上下安詫皆かんぜぬ者社無けれ

## 第五

曾我兄弟の人〳〵は、一所にさし郡祐成仰ける樣は、いかに時宗、頼朝公かねてより、武州淺草の觀世音へ、天下太平のきせい有り、願状をこめられしに、程なくせいひつ成けるゆへ、代さんとして祐經が、ぶゑうへ行由聞て有り、何とぞ忍び年來の、ほんもうをたつせんは、いかゞあらふと有ければ、時宗うけ給はり、嬉げに打笑て如渡得船とは是ならん、早々ごゑたく有べしと、兄弟師友それよりも、やがてようゐをなし給ふ、さくらちる、ゑがのうらはに、あらね共、たまちるなみの、花川戸らうにやくきせんくんじゆなす、ゆへをいかにとたづぬるに、世に弄はいかいの、女點者に朝日とて、わこくのことにくらからず、世上にひろきまんくよせわれも、〳〵とつどひよりにぎはし、かりける、ゑだいなり、かゝる所へ、けはゐ坂の小櫻やは、朝いなに家名をもらひ、今は三浦と改て、淺草に來りしが、あんないこふて立入ば、朝日は上にしやうじつゝ、いか成ごようとひければ、去ば候此度、ちゝぶどのゝくんかうに、此入間の郡を賜り、色里なくては叶じと、新に是を

取立らる然べきちを某に、望申せと仰により、當所に來て候なり、就夫て其かたは、是に久しく御栖ゐ、所のやうすも御存なり、いづかたを郭とし、然べく候はん、殊又其元は、江口の君の御ゆかりと、承候へば、便宜く此事を、相だん申さん其ために、是迄、まいりて候なり、其上とこのかけ物を、ぎんじて見れば世の中を、いとふほどこそかたからめ、かりのやどりを、おしむ君かな是、西行のゑひつにて、江口に與しゐかなり、をくゆかしやと、有ければ、朝日聞て、仰の如私は、江口の妹、江川と申せし者成が、身まゝに成て所から、うきよのにごりを、すみだ川、みやこどりのふるすにて、うたの事にはよせあれば、くさの庵を引結び、心靜に世をおくり、いとまある身にさふらへば、いかにも其問合、承申べし、色にそみたる若人は、心うかれて亂るゆへ、靜ん爲に昔より、おゝくは是を無常ばの、邊にちかく立おかる、此所にて申さんは、はしばの向さんやこそ、宜からんとありければ、三うら大きに悦て、さあらば其かた能やうに、萬たん賴候と、たゝんとせしがあいさつに、ふで押取てかくばかり、はなよりも、ゑがほまづよき、あさひかなと、せうびゑければ、朝日、添なしと取上て、はしらすふでもうつくしくたがまことから、かすむあの山とつけゝれば、三うらよこでを、てうど打て、おもしろし〳〵、ゑんたくわたましするならば、百ゐん興行致べし、彌色里開闢を、賴いるさの山のはに、月のよざくら、ほの〴〵と、朝日にゑらむ花川戸、あけて三浦はよろこびのまゆを三重ひらきてかへりける、はるがすみ花もまづさく、京まちを三浦のやかたとさだめられ、九十三げんたてならぶつゞきて、たかき山口やあまてるかみの、立給ふ、いせや、やましろ、天まやにふくゑざいある、みやうがやのなをもさかふる、とみをかや、色もかへぬはおゝけれど松や、まつばや、おほまつや、ゑだも、ゑげりて君とわがあふよつきせぬさはぎにはいかによニッ三重ながき、ながつきの、有明の、月もあげやの、のきにそのまゝありながら、きやくにつれなきわかれ酒、さらばさゝやに、やくそくを、又ゑなのやの、ゑな〳〵と、かずかさなりし、かづさやに、いくよはこびてあし引の山やのとりの、ゑだりをのながくもかよふながさきや、こゝろ

の玉やまるやごそ、なじみてよけれ、よつめ、やにかかるかぎやの、ひさしくも、大津つのくにいちもんじふたつ、ともへに、みつどもへ、まんじかたばみ、すゞきやに、のしやひやうごやさどふしみ、人は何共いへだやの、君とわれこそふかくさの里、ならね共うづらやの、こへよきうたにきゝとれてふけゆく、そらの玄らくもにはねを、ハヤ三重ならぶる、かりがねや、とけてまとはる、つたやこそちよもはなれず、あふみやにさゞなみ、よするみぎはやの、花も色あるふぢやがみせ、ふぢのめい玄よはさかいのうらよ、さかいやひしやゑびさがみ、かゞやはしもときりあづまきつかうもつかう大こくや、たからぞつもる山もとや、あげやに取てはいせおはりならぶ、うみづら、ゆくみづの、なかにかけたるはしもとやわかさいづみのとうたらり、どう〳〵たらりたへずとうわきてながるゝいづゝやの、ほとりにちかくうへおきし、きりやが色も、ときはにて玄げる、松ばや立花や、ゑびやふせだや、たてならべ、色のもなかの、さはぎにはいかなる、玄やうのいはやの、おひ玄り様も、三すじのいとに引たてられて、とんと打こむすがゝきの、ひやうしをそろへてゑい〳〵〳〵ゑい〳〵〳〵、あれさのゑい、此やれたのしき、みよこそめでたけれ、かくてぢぎやうも、玄やう玄ゆし、けふ吉日のはしらだて、玄やうとうの玄うぎとして、りうぶしをたてゆみやをはげ三うらが、いへのにぎはひは、何にたとへん、かたもなし、ばんじやうのとうりやうはいしやう、たゞしくあらためて、棟のうへに畏り、きもんにむかひはいをなしくもつの、もちいせいどうを、取て四方へまきちらすは、にぎはしかりける玄だいなり、かくて十郎、祐成は、尋る者を伺ふて、ほうかぶりしてたゞひとりこゝや、かしこと見たまふを、かたへに休ゐたりける、あまたのにんぶ一同に、遁じと押取まく、中に一人進出、いかに、そがの十郎かく云は、祐經が一子犬坊なり、兄弟こゝにて覗だん、祐經はとく知て、早かまくらへ立かへる、汝らを助置ては、父工藤がゆゝしき仇、打とらん其爲に、あふみやはたを初として、大せいを召ぐしたり、彼生取て引立よと、いふより早く一同に、大せいどつと折合、十郎を取てふせ、すでにかうよと、みへける時、おんどの朝日かけ來り、あ

ふみやはたを初とし、促者をかいつかみ、はらり〳〵となげいだすはめをゝヤ三重おどろかす斗なり、十郎おどろき、いかにと問、三浦も是はとかけ來る、其時朝日はかげきへて、やの棟に立現れ、まろをたれとか、思ふらん、朝日將ぐん義仲が、守ほんぞん、鎧の袖に付たりしを、鎧と共に義經が、すみだ川の、川下へ沈たり、是末の世に其川を、鎧の渡と申すとかや、今祐成がゑいこうの、心をかんじ其上又、朝いなはきそが種、守らん爲に出現なす、まつた三浦はゑんを取、心正路のゑといひ、よしひでに此度、志をつくす事、ぶつだにてつしへんほうに、汝がゑそんを守らんと、むねより光明かくやくと、三うらが、そでにとび給ふ、こは有がたし〳〵と、ちたび戴それよりも、朝日の如來とせうじつゝ、つたへてすへのよゝ迄も三うらがいへに、あるとかや、其間に、犬坊丸、あふみやはたも起上つて、大だち引拔打てかゝる、時にむねのうへよりも、ほうかぶりせし大おのこしにはてうなつちのこ切、ゑびらのごとくさしみだし、とんでおりたる有樣は、らいでんいなづまはつたゝがみ、おちかさ、なりしごとくなり、犬坊が是をみて、やあすいさんなり下郎、そこ立されと云ければ、男聞て先、から〳〵と打笑て、大工ゆへに大き成、たくみをなして汝ら迄、此所に引入た、ちぼうまぢよし義ひでが、こゝにゐたるをゑらざるか、めに物見せんと、こおどりし、かけやの大槌かいふつて、むかふものゝ眞甲、にぐるものゝどうごし、ぶちひしぎ打おるはすさまじかりける、ゑだひなり、あふみやはたは、一もんじに、朝いなにむずと組、犬坊丸も祐成に、飛かゝつて引くんだり、犬坊力や增りけん、十郎を取てふせ、既に危くみへし時、かしこにありし番匠の、かごゆさ〳〵とゆるぎしが、木くづ四方へ跋と散、なかより五郎時宗、跳出て犬坊を、後樣にかい抓、七八間投出せば、朝いなも兩人を、ゆん手めでにけたおして、兩ゆうにらんで立たりしはこんがうりきしにことならず、ざんとう大せい押へだて、又三人に打てかゝる朝ひな笑ておもしろし、あじ十方の逆敵を、此小林が拳にて、抓よせて一ひしぎよみじ一切ゑよじかけ引、此すけ成にまかされよ、時宗は、だじ八まん九まん九万十万百千万、てきにばいする力こぶ、かいせあみだの

ゑゆごなれば父そん靈についせんなす、時宗がてがらの程、是見よゑいと彼成、五丈斗の、ざいもくを、押取てふりまはし、ゑんどうして打たつればどつゝヤ三重とくづれてちりにける、いぬぼうたまらず、逃て行、兄弟すかさずぼつゝめ、あふみやはたと引くんで、ひざの下に引ゑいたり、朝ひなは兩人の、間に入て奴ばらこそ、川津殿を手にかけし、大敵成ぞ首とれと、いさみ立れば、祐成は、あふみを取て引かへし、首かきおとせば時宗も、やはたが首にもろてをかけ、かたほねふまへてゑいやと引、つゝぬきにしてさし上る、朝いな悦扇を上ケ、あふぎたてたて、三人打連立かへる、ちじんゆうの其行跡、遖ぶさうの働やと貴賤上下安詫皆感せぬ者社無けれ

## 第六

爾後相模國に御坐、わだの義盛夫婦の人、朝ひなの三郎を、たゞ一たんのこらしめに、赶逐なし給へ共、今は月日も程ふれば、ゆくへいづくにいかゞして、嘸や懶有らんと、あんじわづらひ給ひける、斯所にそがの十郎、祐成同五郎時宗は、とら少將を召ぐして、旅疲にて來らるゝ、よしもりそれこなたへと、よきにもてなし給ひける、互に一禮事おはり、兄弟の人人は、こんど工藤祐經が、淺草寺へ參につき、幸と我〳〵、身をやつし覬しに、祐經さつして、策をめぐらし、くはん音より、直にかまくらへ、引かへす、力及ず、此度も、打もらし候ゆへ、むねん乍もかまくらへ、又立かへり候なり、就夫て朝ひなには、我ら兄弟が垣と成、心ならずもみ心に、背き申せし事なれば、へんじも早くごめんあらば、我〳〵迄生前の、ごをんと存候はんと一同にそ申さるゝ、義盛も懷く、思はれける事なれば、巴のまへとかほ見合、兄弟のそせう、ぞんせつのだん過分なり、いかゞ思はれ候と、宣ふ詞に巴のまへ、御兄弟の御詞、身に餘て忝なし、其義ひではいづくにか、身をかくし候ふと、うれしなみだをはら〳〵と、いとなつかしげにのたまへば、とら少將も一同に、むさしのくにゝ御坐、はや〳〵御迎遣され、然べしと申すにぞ、義盛然らば人〳〵の、わびに隨ひ免べし、迎をださんとのたまへば、そが兄弟とら少將、いづれも悦び限なし、

扨それよりも、いとまをこひ玄ゆく玄よを、さしてぞかへらるゝ、斯所に、かまくら殿より、川ごへの二郎、御使の由申いる、義盛急出むかひ玄やうざに、しやうじ給ひけり、川ごへ申されけるやうは、扨もへいけのよるい、玄ゆめの判官盛久、とゝうを結び身をやつし、君を伺ひ奉る、彼等を急かりたてゝ、たいぢせよとの上ゐなり、おうけあれとぞ申さるゝ、わだはゐばしをちに付て、人おゝき其中に、かゝるごでうの有がたし、押付もり久たいぢなし、み心やすんじ奉らんと、御請あれば川ごへは、禮ぎを厚くざを立てご玄よをさしてぞかへらるゝ、去程に、朝いなの三郎は、さんやのへんにいたりしが、此度父よしもり、主馬の判官盛久が討手の仰蒙由、聞と等く盛久が、隱がを尋るに、つねに淺草觀音を、ふかく念じて淺ぢがはらに、すまゐすると聞よりも、まだほのぐらき曉に、鎧引かけ大だちはきたけなるこまに、打のりて、八尺斗の鐵棒を、めでの脇にかいこふで、せつなの間にのり付て、みれば大堀ほりまはし、一丈餘のきどをたて、こへて、いるべきやうぞなき、義ひで馬よりひらりとをり、此もんひとつもの〳〵し、おしやぶつていらんとて、とびらに左の手をおしかけみぎりのてにてこしおさへ、ゐいうんといふてふんばつた、さしもにかたき大木戸が、ひらり〳〵とあほる事、うちはなんどのごとくなり、ねをびれたるばんの者、すはやよ打といふまゝにうへを下へぞかへしける、斯所に、吉はらの三らうより、三つ引兩の幟を、す十本おしたてゝ、小林の朝いな祉、此攻口蒙たれ、もり久いでゝ尋常に、はらをきれと、よばゝつたり、敵ははたの紋をみて、すはや三浦の大將ぞと、門の內には數百人、押かへされじと扣たり、朝いなものゝ數共せず、諸手をかけておしければさしもの大木戸柱もをれ、ぐわらと崩て倒ける、をしに打れてゞヤ三重玄するものかずもかぎりもなかりけり引され共ざんとう、打てかゝる、義秀いさんで面白しと、てつぼうを押取のべ、なんによにんばの嫌なく、めにさへぎるをかたて打は早三重らりはらりとなぎたつる、何かは以て、たまるべき、盛久がぐん兵共、こは叶はじと引かへし、あとをもみずして、にげてゆく、もり久いまは是迄と、たち拔持て走出、平將ぐん貞盛に五代、越中のぜんじ、もり

としが弟、主馬の判官もりひさが、うんつき今のぞに狂、へいけに於はよき敵ぞや、打て高名仕れと、切てかゝれば義秀は、ねがふ所とわたしあひ、ハヤ三重ひぞゆつをつくして、たゝかひける、もり久たちの、てきゝにて、更に勝負はなかりけり、義ひで棒を投すてゝ、飛かゝつてむずとくむ、もり久ぞゝのはがみをなし、立あはんとしけれ共、日本ぶ双の朝いなに、何かは以及べき、のつけに倒るを義秀は、のりかゝつて取てふせ、ちすじのなはをぞ、かけにける、斯所に、わだの義もりぞそつをぐし、馬上よりも此ていを、見るよりそばにかけ寄て、あさいな成かと有ければ、義ひで悦びもり久を、いましめて引たつる、よしもり悦喜淺からず、卽かんどうめんきよあり、打つれだちてそれよりも、盛久を引立させ、かまくらさしてぞかへられける、千秋万歳目出度とて貴賤上下安詑皆仰がぬ者社なかりけれ

色里開闢對面曾我終

# 芳野の内裡

土佐少掾直傳

## 第一

扨も、其後、およそ天下をひきふるに、じんせいあればたみやすく、みなばんせいと仰ぐもこれ、天のめいずるきみのとくチクりうごかぬ、みよこそひさしけれ、こゝに人王、四十代の帝をば、天むてん王とあがめ奉る、其比の功臣、村國の大將、男依公の妹鴈照姫と申せしは、ぶそうのれいしつ成ければ、君御てうあいふかくして世にときめかせ、給ひけり、ころしもふゆの夕げしき、はやさきそめし、むめつぼにとぎよまし〳〵て御ゆふある、かゝる所へ、村國の大將、玉ざまちかくしこうして、ないそう申されけるやうは、先ていの御子、大伴いがのわうじには、み心あしくましますゆゑ、先立てしが寺へ、御入しつの御事を、御憤り此間、きみてうぶくのきこへあり、御むほんの御心ね、天下の大事と存れば、某ことを伺ひみて、じつふをたゞし申さんや、ゑいりよいかにとそうもんある、帝ゑいぶん有て、然らば村國ことのやう、たゞしみよとのりんげんにて、御れんに入せ在せば、村國、畏ておうけをなしだいりを退出なし給ふぎしきの、ていこそやごとなき、せうさつたりし松風も、おなじうき世のをとそへてくはたくのかどのあけくれと、大伴いがのわうじは、ごまの烟に身をふすべ、てうぶくひほうをしゆせられしは世にすさまじうぞみへにける、かゝる所へいつくしき、女性一人しばのとを、おしあけてたちいりつゝわうじの、みそばにかしこまる、せんげん、たりしようしよくのかつらのまゆずみくものびん、はつ〳〵とあうじはうつゝなくおぼへずだんをおちこちの立より眤何者(あかつき)ぞと、とはせ給へばかの女、みづからは此あたりのさとのしづにてさふらふが地二せとちぎりしわがつまを、うきこといろにねとられて、詞わらはゝよもぎふの、やどりにひとりよをあかし、すてられぐさのねたましさ、所詮今はかの女が、命を取て妄執を、はらしたうさふらふゆへかれをじゆそなしたび給へ、此ことお頼申さん爲、忍び是迄參りしなり、御禮のしるしには、見ぐるしけれど此小袖を、捧進せ候と、なみだと共に申けり、わうじつ

く〳〵きこしめし、扨はしつとの色ゆへに、是迄あこがれきたるとな、誠にわりなき心ていの、理には有けれど、さ程つれなき心の駒、二道かくるつまならば、そのかたも打すてゝ、外のゑにしをたのめかし、さればわれこそ其かほばせ、見しよりかゝる行法の、すます心は徒に、詞身はうつせみのからだこそ、くうのいろゆへけがされたる、われになさけのうきふしのひとよを、こそとかこたるゝをんなおどろくふぜいして、こはそもかゝるごんじやの身、さやうの仰はあさましゝ、いや〳〵しやもんの身にてなし、我はてんぢのわうじたる、大伴いがのみことなり、元よりてんしと成べき身の、かゝる姿の口をしく、かく行法のこうをとげ當ぎんをてう伏なし、我ていわうと成ならば、汝を皇后に、かしづくべしとうつゝなく、心の大じをあかさるゝぐいの程こそつたなけれ、しかる所へ御めのと、はだのすくね友足は、中どみのかなむらじ、そがの赤兄を召つれて、あはたゞしく馳來、此ていをみてされば是そ、とくとく云ければ、そが中臣は心へて、かけよりやにはにかの女を、手ごめになして引すゆる、わうじおどろきこはいかにと、仰あるを友たる、さればにて御ざ候、此女は村國の、をよりが妹、にほてると申すもの、君調伏のみあり樣、伺ふべきためしづのめの、かたちとなしてさしこす旨、一味のかたより告きたれり、去によつてかゝるてい召取うへはしさいなし、扨こよいこそきんりには、ついなのよにて候へば、此紛に忍び入、帝を擒となすべき事、掌の内にあり、右のしぎを申さんため、はせまいり候なりはやとくとくと申すにぞ、大伴ゑつき不レ淺、いそぎしたくをなすべしと、にほてるひめを引たてさせ三重やがてやういを「なしたまふ、はくほうぐはんねん、しはすのはてのみそじ日や、こよいはなにおふおにやらいいともめでたきまつりごと、主上御れんに入給へば、あまたの官女しよきやうたち、そでをつらねてちやくざある、おんやうのはかせすへ明は、まご庇にしこうして、ごへいふりあげうや〳〵しく、まつりごとをぞしゆくしける、それあめながくつちひさしきあまつひつぎのまつりごと、申すもおろかなりけれど、まづはつはるのあけそめて、ほしをとなふる四方はい、とそをくうずるくすりこの、もみのた

もとやひのためし、くむわかみづは、御生きの、ほうがくの井をてんじはるたつあしたひらきそめもんどのつかさたてまつるわかなをすゝむなゝくさや、あほばのせちへあがためし、きよくすいのゑん花しづめ、なつにもなればころもかへ、うづきの中のよつの日は、あまてるかみにさゝげ給ふやかんころも、たんごのけふとみや人は、あやめのかづらかけまくも、さこんうこんのまてつかい、なつのおはりのひとよさけ、なごしのはらひみそぎ川、三重ながれてうつる、としなみの、あきにもなればひさかたのほしのまつりのたむけぐさ、すまひのせちへこまむかへ、てうやうのゑんさかづきに、ちよをくむてふきくのさけ、ふゆのをんがはちはやふる、ないし所のおんかぐらヂクリかゝるぎしきの中になを、わけてこよいはついなのよ、ゑきしをはらふ其ためし、こくどあんぜんちやうきうと、にぎてふりたてじゆもんをなしごてんのよもを打はらふは、三重めでたかりけるしだいなり、かくてとねりのめん〳〵はおにのめんをかほにかけヂクリたてほこかざして立いづる、ついなの役人取々に、もゝのゆみあしのやを、うちつがひ、せんくは門より立いれば、鬼形の役人逆まよふを、やごへをかけて三重とうていをかなたこなたとおひまはし、たき口の、戸におひいだすはいさましかりけるぎしきなり、かゝるところへ大伴のわうじは、玉のかんぶりこんれうのぎよいを、ちやくしてさんだいある、あり合公卿おしとゞめ、君先立てしがてらへ、御入しつの御さたに、かゝるてんしの出立にて、ござんだいはいかにぞと尤れば大伴は、いや我こそは一天の、ゆるしをゑたるばんじやうの、皇なれと仰ある、諸卿いづれも心へず、とかくおかへりあるべしと、とり〴〵にいましむる、時についなの役人に、紛ゑたりしそが中どみ、鬼形のめんを引はづし、てん上へかけのぼり、たちぬきかざしさん〴〵に、諸卿をばつと追ちらし、立かへつて夫よりも、御れんをさつと切をとせば、六尺ゆたかなあらおのこそらうそぶいてぞたつたりける、両人おどろきのつけにそりかしこにふるへにげのきたり、わうじつめかけ何者ぞ、愚や〳〵、天にふたつの日りんなし、ちに又ふたりのていわうは、あらがねの土もきも、我大君の秋津國、天てらすくはうと

うを、うばゝんとなすとても、三じゆのじんきしゆごのしん、村國の大將が、玉たひにかはつて、かゝるろうせき、しづむるうへは叶はぬぞや、たちさるべし〳〵あくとうばらとぞあざむきける、王子いかつてそれもの共、きやつをあまさずいけどれと、あいづのかいを吹立る、忍びねたりしぐん兵ども大ゆかみはしの下よりも、どつと顯れつめかくる、ものものしやと村國は、大だち引ぬきわつていり、なぎ立るいきほひにむら〳〵ばつと逃ちつたり、すきを見合村國はおりふしさんだい有あはせし、吉のゝしゆぎやう、にんかいあじやりを眤(ちかつけ)て、もはや諸卿いちみのうへ、玉たいあやうく候へは、きそうは帝を吉の迄、潜にぐぶし在せと、叫給へば元よりも、かい〳〵しきあじやりの坊、心へたりと君を負、よはに紛ておち給ふは、あやうかりけるしだいなり、心安しと村國は、待かけ給へば敵のせい、あらてをましてのがさじと、ちくいのごとく打かごむ、村國ちつ共たゆまずして、階のらんかん二三間、ゑい〳〵やつとこぢはなし、攻よるたせいに馳向、なぐりたておんまはししばしときをぞ「うつしける、いまはきみにも、道の程、はるかにおちのび給はんに、是迄なりとしたふてき、追拂〳〵御跡求おち行けり、かの村國の其働、遖ぶそうの勇將やときせん上下をしなべて皆かんぜぬ、もの社なかりけれ

## 第二

「其後、吉のゝあじやりにんかいは、主上をれうの御馬に、のせ奉り口をとりあやうきこゝうをのがれいで、みちをはやめてをち給ふ、かゝるところに、跡よりもおつてのせいとおぼしくて、ときのこへをびたゞしくいかゞはせんとにんかいは、一先玉たいを、かくさばやとかしこなる、山のしげみの松がへに、御馬をつなぎ置、其身は道にはせいでゝ、さらぬていにてまち給ふ、さればすへの世此所をくらま、山とは申すなり、しかる所へ村國は、身にたつそやはさながらに、もりのごとくにをりかけてあけにそまりてはせきたる、にんかいそれと見るよりも、かけよりいかにと宣へば、村國はいきついて、扨は君にてわたらせ給ふか、跡より追て頻なり、某もやう〳〵

と切ぬけ、是迄追付奉る、又々こゝに立留り、敵を防申す内、とく〳〵主上を誘申し、おち給へやとすすむれば、にんかい是に力をえ、お馬の口を引たて、馳出んとしたまふ時、流や來て主上の、御背にはつしと立、人々はつとおどろき、立かゝつてそやをぬき、玉たい如何にとみてあれば御はだへにはたたざりけり、こはばんじんのかごなりと、よろこびいさみにんかいは君をしゆごなしそれよりもとぶがごとくにおち給ふ、それよりして此所をやせの里とはなづくるとや、あいもすかさず敵のせいあまさじとおつゝめて三重ときのこへをぞあげにける、まちまふけたる、村國はヵ、ルもの〳〵しやとわたりあひ、ぜんごをはらひさうをなぎ、いそうつなみのまくり切三重こゝをせんどゝふせがるゝ、さすがの大せい、たゞ一人に切たてられ、すゝみかねてぞ、みへにける、そがの赤へとび來て、ゑゝふがひなき者共や、敵は一人手負むしや、おにがみにてはよもあらじと、高言はいて欠向ひ、をしならべ引くんだり、村國是をこと共せず、てもなく取ておつふせて、くびをかかんとする所へ、かなむらじ馳きたり、はつといふて村國が、たぶさを取て引かへす、村國ゑたりと兩ひざにて、あかへをおさへ手をさしのべ、かなむらじがかいなをつかみ、引まはし取てふせ、おなじく一所に引よする、かたきの大せいおどろきて是はと一どにをうかさなり、村國を引立る、兩人ゑたりと下よりも、ゑいやつとはねかへし三重おさへてなはをぞ「かけにける、村國いかり、口おしやと、おどりくるへど大せいにて、手取足取引たてしはむねんなりけるしだいなり、そが中臣はいさみをなし、きやつをからめしうへからは帝はおつて擒とせん、まづまつわうじの見參に、入て御かんにあづかれと、かちどきあげさせて三重みやこをさしてぞかへりける、さる程に、大どもいがのわうじは帝をば追失ひ、村國を擒となす、今は思ひのまゝなりとおして御そくゐおはしまし、ほういつ無暫の御せいとうにが〳〵しうとぞみへにけれ、鴉てるひめの御かたをば、かうひの位にかしづきあげ、御てうあいはかぎりなし地され共にほてる大伴の、御こゝろにしたがはず、あけくれしゆしやうの御事のみ、したひなげかせ給ひつゝ、打しをれておはします、わうじは尚もあこ

がれて、何とぞひめの心をとけ、主上を忘給ふやう、さま〴〵の御なぐさめ、いくさのことをも打わすれチクリ日やの御ゆふかぎりなし、斯折ふし、はだの友たるさんだいと、申上れば大伴は、珍らしや友たる、こなたへまいれと仰ある、かしこまつて友たるは、そのいでだちのことやうにさしぬきのそばたかく、くげうのうへに鍬をすへゆう〳〵ともちいでゝ御まへに、さゝげつゝふんぢがつてぞひかへける、わうじ此ていごらんじて、こはけうがりしそのふぜいしゆきやうなるかとゝひ給ふ、友たるは打わらひ、いかでかさけにゑふべきぞ、是は寔の姿ぞと、ごらん有てしかるべし、わうじ心は扨いかに、おろかなりおろかなり、ぎよくでんかはつてやけいとなるごわうのためし今こゝに、かゝるいみじきほうけつも、くさしげきのらとなり、しかのふしどゝなるべきと、世に心ある者共は、まゆをひそめてうたふよしその消息を拙者めが、みぜんにまなぶ此姿、くさしげゝればみちのつゆしほるゝはぎをたかくとる、さて此くわこそ其時の、たがへすていを學つゝ、けふの御ゆうに、そなへんと儲たり、何と〳〵、おもしろくおぼさずやいかにと申あげゝれば、わうじぶ興の色みへて、にがり切てぞおはします其時に友たるは、せつかくと催たる、此ふぜいはみ心に、いらぬとみへてきのどくなり、いづれもいかにとねめまはせど、みな〳〵かうべを傾て、一ごんの返答なし、友たる重て、寔や君に、ふぎのふるまひます時は、諫るはしんたる道、これに有合狸共、ぶ道をみながらへつらふは、こくぞくと云つべし、あゝ淺ましきかな我君さま、かやうにふりよの御事にて、天下をしろし召るゝ共かくまでびぢよと御たはぶれ、政もなし給はず、ことに又てんむてい、やまとぢに、忍びてわたらせ給ふよし、かゝる道なきごせいとう世のたみうとみをりをへていまにもてんむの、御みかた、申す者もいできなば、忽亡び世の嘲、かばねに殘し給はん事、かゞみにかけておぼへたり、向後み心押直し、其鴻てるをとをざけて、せいとうたゞしく在さば世のあだはしだいにきへ、こくかあんぜんたるべきなり、此事かんそう申さんため、かゝる姿にすいさんなす、かへつて御ゐに違なば、とう〳〵首を召るべしと、泪をながしりをたゞし、まことをつくす

いさめのほどげにことはりとぞみへにけるさすがどうりに大伴もさらにへんとうましまさず、一ざこほりてゐたり鳧、やゝ有て友たる、か程諫を申せ共、御聞入もあらぬてい、然ばこゝを身退、首陽にうへを待べきなり、かへすゞ〳〵もそが中とみ、君の御身に御大事、きたらぬやうに政、計ひ候へこれ迄なり、御暇申すぞと、四かく八方睨付ごせんを退出なしけるはたぐひまれなるちうぎなり、時にわうじのび上り、につくきかれがかんげんだて、たすけておかばおそらくは、かへり忠をもなすべきやつ、追欠て討とれと、大きにいかつて立給へば、そが中臣は畏り、有あふぐんびやう召ぐして三重あとをしたふておひかくる、さればにや、友たるは、やかたをさして立かへる、跡よりあかへかなむらじ、うつての勅定蒙て、馳來るぞや、友たる、といまれとこへかけて、村村と押取まく、友たる笑てさもさふず、乍去己ばら、肝をばそつと冷させて、生がいせんと思ひつゝそばにつみたる大石を、押おこしはねをこし、ちかづくてきになげかけしは三重このはなんどのごとくなり、此いしに、打ひしがれおそれてちかよる者はなし、友たるは是迄と、たちをさかてに取直し、自くびをかきおとし、立すくんでぞしゝたりける、そが中臣は悦て、件のしがいを取もたせ、だいりをさしてはせかへる、かの友たるがさいごのしぎ、わこく稀成忠ぎやとてきせん上下安詫皆かんせぬ者社無けれ

## 第三

三重いざやわかなをつみそろへ、ゆきにぬれたるごろもでを、ふれやふれ〳〵ちはやふる、かつての、かみにさゝげんと、いさみよりくる里のめの、中に一きは吉のなる、カ、ルすゝかの翁がひとりひめなもすずしめのすゝかのまへ、めだつふせいにめのわらは、かずのこしもといでたゝせ、めかごもたせてさきにたて、其身はまきへのおくるまに、五しきのふとんうずたかく、しんくのいとの引つなやのりへしすがたもよしのやま、なつみの川のかみいさめおんどをこそははやしけれ、やんらめでたやたのしきことをみよしのゝ山もかすみてはつそらの、けしきにかほるむめの花、くはつとひらいたかどかざり、ぶり〳〵

ぎてうはごのこを、つくやひとふたみしめなは、しげきみかげと引はへてかやがのきばもあらたまりかみよもかくとおもはるゝ、たのみあるかな、此はるのめぐみも、ふかきみやこだち、いざ〳〵わかなをさゝげよヲ、なる程さふじやいのなつみの神事いそがん、このめはるさめふるとてもなをきへがたきみ山ぢの雪かきわけてつむわかな、大みや人の御ゆふにはけふぞ思ふた君が手をしめつるのべのひめ小松、かた山かげにすむみこそよしなや夢のたまくらに、ひとりねのひのまつ人もなしと、こたへてみやこどり、とをきあづまのよしのにははなを見すつるかりがねも君がかたにときくものをかみにたのもの色こゝろなどかはしるしなからめや、いさめやいさめと取々にかずのわかなをつみそろへヲクリかみのみまへにさゝげつゝ、しばしやすらひゐたりける、おもしろや山花開て錦に似(にたり)、澗水たゝへてあいのごとし、それはやよひのけしきなり、春まだわかく三芳野の岑の白雪花とのみうかれてこゝにたはんのしよもう、いやきやうじんとよそめにはあだにやたゝん、なつみ川、をり立てうろくずをすくひあげてたのしまん、いざやすくひてたのしまんすゝかごぜんは此ていを遙にみるより、扨いかに、しや門の身にて漁の、はしたなきことわざは、いぶかしやと立よりてなふ〳〵御そうさ計の、御身にげなや其ごふぜい、いかに成心在すや、僧は聞て我は是、此川波のくづいをゝ、あみにて救ひたのしむなり、こは淺ましや殺生かい、われらごときも持(たもつ)ぞや、みれば三衣を身にまとひ、カヽルかくも拙なき御ふるまひ有べき事とは思はれず、いや〳〵それは愚なり、ゆく川のながれはたへずして、しかもゝとのみづにはあらずながれにうかむうたかたの、かつきへかつむすぶ、そのてんぺんをたのしめば、はれゆくむねのくもと見しは、みよしのゝ、みよしのゝ川よどたきつなみの、うろくずをすくひあげ、ゑたるときにはじゆをさづけ、またみなそこへはなしすつ、さとりひらけしけうちうの、あふけばだいきよかぜすゞし、いかんとあればすゞかのまへ、さてはみこゝろおもしろし、とをきけんすが跡をおふ、御身はそもやいづくより、きたらせ給ふ御名をば、何と申すととひければ、其時僧は立よりて、拙僧事は當山のしゆ行、にんかい

あじやりと申すなり、されば此たび、王城のらんげきにて、當今都を御ひらき、吉のに忍びござ有よし、大伴のわうじより、偸に尋召取て、進すべしと某に、りんげんをなし下さる、去共我は出家の身、かせいなくては叶はじと、里人を伺ふに、女性ながらも其かたは、文才有てゆうきをそへ、ことに當所の長といひ、もんようしげきかたなれば、くだんの御一みを頼んと、たよらん手だてかく斗、ことやうなりし出立も、ごふしんをうけんため、さあ拙僧と一みなし、帝を尋召ぐして、大伴へ進らせなば、御身も共に忠せつの、たれかはかうをあらそはんいかに〳〵とよぎなくも、打さゝやきてぞたのまるゝ、すゞか興さめこれはそも、思ひもよらぬ御事を、承り侍ふかな、其事ならば躬は、御ゆるされを蒙るべし、まづおぼしてもごらんせよ、君を失ひ民を攻、その惡逆の大伴の、助をなして一天の、君を檎とせん事は、縦此身は大國の主と成てゐいようを、きはむるとても中中に、ふぎのふうきはうかべるくもかうもうとらざる、ところなり、あらもつたいなしいざさらば、御暇申すと立行を、且と留めにんかいは、扨はさやうかさもあらば、若又君に頼れては、御みかたをなすべきや、それはおろかの仰せやな、かくも王どに住む身にし、爭て勅をば背べしにんかいはつと手を打て、あゝかんじ入たるしんていたのもしゝいまはなにをか、つゝむべき、先程よりのあだごとは、みなみな御身の心中を、引みんためのうら問ぞや、誠はぐそう偸にも、主上をかくまひ奉れど大衆の心ていしれがたく、兒のごとくにもてなして、我坊に置申せど、未あんどの思ひをせず、御身は名に負女性なり、御頼あらんため、是迄ぐぶなすあの兒こそ、すなはち一てんばんじやうの、君にてわたらせ給ふぞと、そんこあればすゞかのまへはつといふてひざまつき、こは有かたや何が扨、いはいにや及べき、女にてこそござ候へ、自おみかた申なば凡吉のゝ十八かう、てをさすものも候まじ、かつてのかみもせうらんあれ、二心なく主上をば、よきに愛奉らんと、申す詞にあじやりの坊、大きに悦び此うへは、君をば御身に預たり、我は又一山の、大衆をかたらひ日をうつさず、御迎にまいらんとれうでうかたきかたいとのむすぶちかひの、たのもしく、あじやりは山

へとかへらるれば、すゞかは君のぐぶなしてわがやを、さしてぞかへりける、色みへて、うつろひやすきむらさきのふりいで、そめしすゞかのかた、地君のたへなるごようほう、おそれおゝくもみちのくのしのぶによはる、おり〳〵は、よに有がたきみことのり、身にしみ〳〵とひたすらにしづこゝろなきこひとなり思ひのたけを夕かぜの、地そよとばかりの御しらせ、申上んといくたびか、日ごとにこゝろなやませど、詞さすがに君はかけまくも、皇の御身にて、わたらせ給へば御まへに、出る事さへ愧く、きのふとくらしけふとをくりて八しれぬ山したみづのこがくれて、せきぞかねつる忍ひ川、こよひはせひによるせぞと、ともしかゝげてながろうかひそかに、しのび御しんじよの、ひとまにそつとたち入て、御ありさまをうかゞへど、もしやちよくでうあだならば、いかゞはせんとあんじわひなみだにくれてぞゐたりける、しゆしやうはそのとき御めさめ、こは何ごとのうさ有て、さのごとく歎ぞと、とはせ給へばすゞかのまへ、ふりそふそでのさよしぐれチクリとゞめ、かねつゝやう〳〵と、おんはづかしや、みづからは、地いやしき此身おゝけなく君にこゝろをそめぎぬのひとへにいまは、およびなきふかきこひぢとなりまいらせやるかたもなき、思ひゆへ、ゐいりよのほどもはゞからずしのびまいりし心ざし、あはれなり共みそなはし、こよひばかりはふしゝばのたゞかりそめのおんなさけ、地かうぶりてきへはつる、うきたまのをゝしばしやは、むすびとめたふさぶらふと、いふことのはもそゞろにてまたさめ〴〵とぞなきゐたる、主上つく〳〵聞召、扨はやさしき色心、こひに高下はなきためし思ひをかなへてゐさせんが、まろは元より十善の、いみじき身とは生きて、未うきよの百性に、少のめぐみも不ゞ施、てきのあらしのつよければはなのみやこをおちこちのちりに此身をけがすこと、地すぐせのかいぎやうつたなきと、おもひこめぬる心より、再ていゐとならずんば、みのりの道に立入て一日成共世をいとひ、ごせの願をみてんため、それ迄は色の道、とゞめんとちかひしゆへ其戀草のねもたへに、思ひきれよとちよくあればすゞかはよしを、うけ給はり、是はつれなきりんげんぞや、地はやかく迄に名取川、せゞのうもれぎ

顯て、そうし申せば命こそ、君の爲ゆへうば玉の、やみ〳〵と此れんぼ、おもひとゞまり申さんや、かくごをきはめ忍びくる、さ程ゑい慮に任ずば、玉たいを失て、わが身も共にじがいなしみらいゑうこう六道四生詞付そひ申て一ねんをはらさでおこうかいかに〳〵とけしきをかへたもとぬぎさけつめよりて、そうし申せばげきりんの御色を顯して、何程に申す共、いでゝかへらぬことのはの、此ぎにおいてはかなはじと、たゝせ給へば口をしやかく迄申せど御承引、在さじとな是迄と、懐中したるつるぎをぬき、とびかゝらんとせし所に、ふしぎや俄にめいどうしいなづましきりにちらめきて、まなこもくらみたちもえずかしこへ、どうとぞ「ふしたりける、此さうどうに、こしもと共おどろきさはぎはしりいで、是はいかにと立よつて、すゞかのまへをおしおこしさま〴〵こゝろをつけにけり、主上此ていごらんじて、ゑゝつたなしやすゞか、汝はちんを侮共、三じゆのじんぎしゆごあれば、其ばつをうけ身をせむる、それにても執心を、思ひとめじやいかにとある、すずかやうやく心つき、かほふりあげておそろしや、地よしなき色に辨ず、玉たいをあやまちて、かく迄にばつとうく是よりこゝろをひるがへし、しうじやく思ひきるべきに、御ゆるしましませと又打ふしてくるしむてい主上ふびんと思召、勅免あるとのりんげんに、忽すゞかしやうきとなり立上れば有あふ者、いちどにはつとひれふしてかゝるきどくをみるうへは、いかでそりやくに有べきといよ〳〵かしづきたてまつる、げにていとくのふしぎのほどをさせん上下をしなべてみなかんぜぬものこそなかりけれ

## 第四

其後とんよくの山たかみ　いたゞきくれぬ人心、すずかのまへがいへの長、龍崎いはほざへもん、つくつく思慮をめぐらすに、所詮帝を擒となし、大伴へ注進せば、願のごとく賞をゑて、ふうき心のまゝならんと、にじゆんに及ぶおいの身の思ひたつこそあさましけれ、偸に玄めし合たる、どみんのぶしを招よせ、こよいはせひに忍入、帝を取奉らん、ごへんらは、道に待受給はるべし、かみよりのごほうびは、

某がよきやうに、わうじへそうだつなすべしと、あたりを見合叫ば、よくにめのなきおくとうら、擧て悦び夫よりも、しのびてやういをなしけるはぶとうなりけるしだいなり、たましくみやの內すまい、地こがねのうてな引かへてかやがのきばのわびしさは御せいのだいに召れたる、とを山里のけしきをも、いまはだおなしごしよのうち、ゑいりよくるしうますらんと、すゞかはおまへにとのいして地さま〴〵なぐさめたてまつれば、れうがんことにうるはしく、地まことにかゝるかいほうを、いつのときにかわすれんと、地たぐいなかりしちよくでうの、有がたし中々になみだのほかはことばなし、かうたけぬらんいでさらば、やすらふべきになんだちも、立入いねよと有ければ、すゞかはお請申上け、明なば參申さんと、御まへを罷立、御次さして出けるが、げにやまことにこひせしとちかふ心もみるたびにいろこそまされくれないの花そめころもそでしほる、くもらぬあめふりさそひ又こそくもれむねの月、はれぬはさてもいんぐはぞや、あゝいかなればわれ思ふ、ひとを思はぬむくひにや我こふ君のつれなさよしよせん又もや、此思ひ、地そうして見ばやとたちかへり、見ればそなたのそらおそろしくこはよしなやと思ひきりせめくるこひをおししづめ、なみだ地ながらにまくらうく、わがねやさして入けるはやるせなげなるふぜいなり、三重しゆしやうはつらきひとりねにゑんじのかねのひゞき迄なみだをそふるなかだちと、ゑいぶん有て世のうさを、おぼしつゞけてしんしんとかべにそむけるとほしびのかげろふしたに色すがたつゝくりとして立ねたり、主上あやしみたそ成と、ごらんあれば鳰てる姫、こはそも御身いかゞして、是迄遁來りしと、地うつゝ心にちよくもんある、鳰てる仰を承り、されば自思はずも、わうじにとらはれまいらせて、あさな〳〵のもの思ひ夕べ夕べのうきなみだ、地かはくまもなくあけくれに、御行すへをいかゞぞと、思ふ一ねんぎよくたいを、しばしのうちも立さらずしゆごしまいらせさふらふなり、扨とよこよひ此所に、御わたり在ては、御身にあやうき事あれば、いざいづちへも御供せん、急ぎ落させ在せと、さうし給へば主上は、大きにおどろき思召、しからばへんしも此所、遁てみばやと御と

こを、出させ給ひ手に手を取、そこはかとなくまよひゆくゑいりよの内こそやるせなき、ゆめかうつゝかまぼろしのそれとさだめもなみだかき吉のゝ川の花いかだいとしき君の御身をばのせてこがるゝさゝふねとたとへていはゞおもひよこひよ、いづれしづまぬ人もさはあらしのつてに聞しよのかた山里はうたまくら、道のき杯におぼへたる、そのふうけいをいまこゝにみるさへあるを山がつのしづが手わざのいかたふねつゝむ人めのせきくだす三重すがたやさしやくれ竹の、さほさすそでの手もたゆくことにちらちらふりくるゆきのしきりにさふき山おろしげにやにしきのてうの内、地すきまのかぜもいとひたる、花のはだへにぞみ〳〵としばしやすらひましませば、地主上はよしをごらんじて、くるしからんと姫君の、御手をとらせおはしまし、御ふところにあたためて、此川なみのすへこそは三重いもせの山に、おつるてふかゝるめでたきゑんにふれやがてくもいに立かへりもろ共に此うさつらさ、ねものがたりになすべしとちよくでうあればにはてるはこは有がたき勅、さりながらゑいしんはます花、そめの色心かはりやせんと御ひざに打もたれつゝのたまへば、いろもなきこゝろを人に、そめしより、うつろはんとはおぼへぬを、世はうきくさのしげりあふ、ふかき思ひのふちなればそこいはいかでしらしやとかこたせ給へば吉の川よしや人こそつらからめ、かねてちかひしことのはゝわすれぬものをこひごろも恨申すもよしなしと又立あがりみなれざほしばしのひまもいとまなみさしてちかよるみねのくもあれこそはかづらきや、くめぢにわたすいはばしのちぎりはいやよたかま山よそにのみ見てやみぬべきゆめのかよひぢさめやらばきへてやのこるおもかげのわが身のほどをなきこふるかたみにそでをしぼりゆく、ふゞきいやます川かぜにいとゞぬれそふ御ふせい三重よそのみるめもいたましき、ゆきはしだいに、ふりまさり、さほさすいかだとゞまりて、跡へもさきへもうごかねば、いかゞはせんとおほせし時、あやしやすゞかがおもかげの君のみそばに立あらばれ、なふうらめしやいかに君、わらはがつよきしうしんは、思ひきれ共いやましにとゞまりがたき、あだなさけ、こよいはせひにと御床に、忍びてみればつれなくも、ふ

りすておちさせ給ふぞやいざうちつれて、くはんかうあれと御衣の袖、ひかふるなかへ鳰てる姫、分入てつきたふし、いや愚なり賤き身の、玉たいをけがさんとや、君に付添自は、いろのときはやれんりのまつほかの思ひはなか〳〵に、そめてかひなきしぐれぞかし、とく立かへり思はれぬ、我身を恨み候へと、仰あればすゝかのかた、大きにせいて立上り、扨心へぬことのはや、それてんしは御きさき十二人八十一の女御ときく、定てそのかたが、れんりの中とはやあおかしや、それはともあれ大君さま、かやうにしたひきたる身は、たまさかにだにあふ事の、なぎさにしよるなみなればうらみてのみや、かへるべき、なをしもつらく在さば、たとへ此身は天ばつのそのせめはうくる共、とてもとまらぬけねんのごう、勅定いかにとけしきをかへ、なみだのあめはらら〳〵とこぼれかゝれるびんづらをとりあげてしとよる鳰てるはすいさんなり、何程にしたふ共、自が有内は、思ひもよらずこなたへと、み袖を取て引給へば、すゝかもまけじと引もどし、玉たいの右ひだりくるり〳〵くる〳〵くるしきほむらはくはえんと成てたがいにあらそふおんねんの、角はくはぼく、ひたいをさきてにらみあふたる有さまはすさまじかりけるけしきなり、すゝかのまへは口をしや、いで〳〵思ひしらせ申さんと、とびあがつて水中へ、ざんぶと入て忽に、廿尋計の大蛇となり、てんちに群なみをけたて、さんか一どにしんどうして、しゆじやうをめがけてとびかゝるは三重おそろしかりけるしだいなり、げにやたがいに、しつとのねん、諍ひ叫そのこへは、時のたいこをうつか夢、すなはち夢さめ御とこにぼうぜんとしておはします、ゆめとはさらに、わきがたく、玉たいしつぽとあせいでて、御むねのとゝろけば、さてもあやしき事共とあんじめぐらしましますときすゝかもめさまし欠きたり、同ごとくのゆめのてい、まだはなれえぬ執着は、ゑゝ淺ましく醜と、さんげにあかすものがたりたがいにこれはと手を打てしばしあきれて、おはせしとき忍びゐたりし龍崎、いはほさへもん御こたつを、すんどさし上け顯出、此ていみるよりとびかゝつて、主上を取ていましむる、すゝか驚こはいかにと、取付袖をかい抓、おつふせたかてにいましめて、さあ

己ばらかくごせよ、大伴のわうじへ、注進の儲物、しあふせたりと悦びて、引たてゆかんとせしときにふしぎやごてんめいどうし、いましめのなはおのづから、ふる〳〵はつとほどけつゝ、忽小蛇と現て、さへもんが首のねへ、ないへやへにまとひつきしめつけ〳〵さいなめば引放さんと身をくるへど、爭かは以はなるべき、忽もんせつびやくちしてかしこへどうとたふれけり、そのときくはうめうかくやくと、ざはう權現出現有、さへもんがからだを三重ほこにつらぬきさしあげて君をなみする、大惡人、めうばつしやりんのごとくぞと、金りんざいへなげ給へば、みぢんに成てぞ失にける、そのときしんたいみこへを上け、色欲の執着は、六道りんゑのきづなを今、切てほんがく眞如の月、くもらぬかげはれい〳〵たり、尚々ほうそをしゆごせんと、よばはり給ふこへ共に三重よはほの〳〵と、あけわたる主上はつと有がたく、御跡三どらいはい有、御悦はかぎりなし、げにしんこくのためしやとてきせん上下おしなべて皆かんせぬものこそなかりけれ

## 第五

其後、地鴈てるの御かたは、大伴のみ心に、隨ひ給はぬこらしめと、一間のでんに押こめられ、うき事つもる御身をも、君かためぞと思ふ身のきへんいのちもをしからじ、地さるにても大君の、くもいをよそに引わかれ、よしや吉のゝ山里に、忍わたらせ給ふとや、それのみ思ふよな〳〵は、玉たいをたちさらぬ、地ことのみ見たるまさゆめの、さめてはのこるうつりがをかこちわびてぞくらさるゝ、かゝるをりふし、わうじみゆきといふこへに、御まへの侍女、急取々立向ふ、時にわうじはのみあかす、宿酒も未さめやらぬ、あそびがさきのちどりあし、よろ〳〵〳〵とさうの手を、官女二人に扶られ、さも凄じき大盃、御跡に取もたせやう〳〵としてゆるぎいで、鴆てる姫(ひめ)をながしめに、佗(きっと)ねめ付うそふきて、我萬乘の位となり、ふてんの下そつとの内、心にたがふ事あらず、是偏にわが惠を、うけぬものなきゆへんなり、若又ちんにいさゝかも、そむかんものゝ有ならば、如レ此になすべきと、さゆう成官女を、一所に

引よせかい抓、片手にずんどさし上て、たち拔持て提切に、むざんやさつと切放せば、ながるゝのりはたきつせにもみぢみだるゝふぜいなり、是をみたるか汝等と、しがいをがはと投給ふ、その形勢に人々は、針の莚にざすごとく、わな〳〵ふるふ計なり、王子は扨もこゝちよし、是を肴にそれ〳〵と、持せの大さん取上て、さらり〳〵と三ごんほし、くはんじと咲てやあ鴉てる、つらくあたるもたゞちんが心に背ゆへぞかし、心をとけよさもあらば、兄村國もろうくつを、遁て共に富たつとく、身のゑいようを極べし、さあ〳〵中直りせん盃を、取上よやとさし給ふ、鴉てる些おそればこそ、盃を取持て、彼成まき柱に、打あてゝみぢんになしさらぬていにておはしますわうじ興さめ是鴉てる、さ程にきらはゞその盃、取上ぬ迄のこと、心ざしたる盃を、かくは計ふ不屈者、すべきやう有それ者共、村國を引出せ、畏てそが中どみ、かくと申せば大せいにて、なほ取なしてむらくにを、てい上へ引いだす大伴は立かゝつて、いかにおより、汝か妹鴉てる姫、丸が心に隨ず、仍今召出す、鴉てるちんに隨ふやう、諫言を加なば、汝も共に免許せん、さもなくは忽に、攻ころさんとざをうつて、はつたと睨でごでうある、むらくにしつとあざはらひさこそあるべしわがいもうと、君の爲にはおやをもすつ、ましてや兄が忠せつゆへ、縦八ざき車ざき、しゝびしほになるていを、みる共いたむ事なかれとおそるゝけしきは見へざりけり、わうじ怒て、憎きこうげんはやとく〳〵、くるしめて命をとれ、いかに〳〵とせき給へば、しうごくの役人共、はら〳〵と欠よるを、村國つゝと立上り、さん〳〵にけたをして、うんといふてたかてこて、ふつふつゝとをし切て、てい上へとび上る、有合者共驚て、かけへだゝるを事共せず、かいつかみ〳〵、カ〻ル人つぶてに打たつれば三重おそれわなゝきにげている、いまはさゝゆる、者もなし、いざや遁ん鴉てると、かたに引かけ門ついぢ、とびこへ〳〵をちたりしはあやう三重かりけるしだいなり、さる程に、天むてい、にんかいあ闇りのはたらきにて、一山の衆と一みなす、然うへは里近き、ざ王どうを皇居として、よきに愛奉る、去ば吉のを古郷と、よしのゑいかによみをくも此ぎようよりの、事とかや、折か

らやよひのころなればかすみたなびくおちの山いづくも、はるの夕げしきこゝろ、のどけきころなるに、地ましてところはみよしのゝ、なにしをふたるさくら花ふもとよりまづさきそめて花もをくあるそのふせい、ゑいかんにたへずしも、かたへなる御ことを、引よせだんじましませば、詞ゆきとけたぎる谷川に、ひゞきをそへしそのけしき心ことばもおよばれず、花のゑんの、夕ぐれおぼれ月よにひくそでさだかならぬちぎりこそ、心あさく、みへけれゆきのあしたの、あらしはこずへの花のちるふせい、チクリなごり、をしきは、とにかくに、まちへし、君のかへるさひよくれんりのかたらひも、かはればかはるよのならひさりとては、うらむまじ、むかしはなさけありしをむめがへにこそ、うぐひすはすをくへ、かせふかばいかにせん花にやどるうぐひすをもしろのしらべやなくものかよひぢ、ふきとぢて 三重こゝにとどまり、ことのねに、こなたもわかをそうせん、あまのはごろもまれにきてかざしの花も折からの、まづせいやうのわかをあげて、きしゆんらくをまはふよ、さてまたなつに、いたりては、いかならんまひのそで、かたへすゞしき川みづにうかみてみゆるさかづきのけんはいらくをまはふよ、あきのよながきかせのをとはたがふむまひのひやうしぞ、おぎはぎすゝきつゆしげくたまをちらしてふぢばかま、しうらくをまふべし、日かずつもりてふゆのよは、くはいせつのそでのまひさてもゝしぎのまひには、大みや人のかざすチクリなるさくら、たち花もろ共に、花のかむりをかたぶけてほくていらくをまふとかや、いままた、君のことぶきにけんじやうらくを、いざまはんしかもところはみよしのゝ、たへなりやおとめこが、おとめさすひもからたまをたもとにまきておとめさすひもうたひかなつるそのふせい、主上あやしみそもおことは、いか成者ゆへ朕をかく、慰るぞと勅あれば、時に天女は被たる、玉のかんざしはごろものそで引ちぎつて我は是、大伴いがのわうじ也、此所に皇居のよし、聞よりはやく伺よる、かくごあれと天皇の、御衣の袂をしつかと取、已にあやうくみへにけり、折ふし村國いだてんの、ひ行かくやと飛來て、わうじをつかんで投出し、君をかこふて立たりしはヲゝすさまじかりけるありさまなり、

わうじ大きにせき上つて、みぢにせんといふまゝに、ざ王どうのゆろうのかね、とびかゝつて引おろす、村國すかさずかけよりて、引おろさせじとむずとゝめた、ゑいとひく、やらじとひいた、もとよりわうじはあしゆらがいきほひもの〳〵しやと引もどす、兩ゆうあらそふそのいきほひ、うほうさひつの兩こんがうがうまの、かたちふんぬのせい、かくやとばかりすさまじく、くろ烟をたゝてゑいや〳〵と引あふにぞ、さしもの鐘たまらばこそ、堂舍佛閣森林に、ひゞきわたつてまつぷたつに、くはつとさゆうへ引わつたり、三重ときにしゆろうの、てんじやうより、むしや一きとびをりて、なぎなたかいこみそも是は、花の吉のにかくれなき、すゞかといへるをんな也、皇居をしゆごしわうじのかく、伺ふていをさつしつつ、かねてたしなむ長刀の、刃の程をばしらせんため、隱てこゝに現たり、いで見參と打てかゝる、わうじ怒てすいさんなり、あれ打とれとげぢあればかくしせい、一同に、顯いでゝ切てかゝる、むらくに笑ておこがましとかたへのたいぼく引たふし、打てかゝるをすゞかのまへ、押とめそれにて見物あれと、なぎなたをおつとり三重のべついてめぐるみづぐるま、なみのうちこしたきおとし、きつてまはればこらへずして、さんげをさしてぞにげかへる、され共てきは、大せいなり、せんぢんごぢんひとつになり、押取まきて攻よする、村國すゞかに引そふて、うつてまはればわうじのせい三重あとをもみずしてにげてゆく、ながをひむやくと、村國は、すゞか師友引かへし、皇居をしゆごして立たりけり、遖ぶ双の働やときせん上下安詫皆かんぜぬ、者社無けれ

## 第陸

其後、吉の山の皇居をば、ふいに伺ふ猛敵を、人々の働ゆへ、一先は追退、玉たいつゝがましまさねば、御よろこびはあさからず、されば君、此山にござ有よし、隱なければ官ぐんの、我も〳〵とさんかうして、さしもにひろき吉ヶ山いはかげ、このまたにあい迄、人ならずといふ事なく、花の夕日もものぐにてりかゞやきし有さまはげにいさましうぞみへにける、主上ゑいかん限なく、とく〳〵出ぢん仕

り、げきとを討りくなすべしと、日月の御はたを、むらくにゝ給はれば、村國勅せん畏り、官ぐんつがう二十萬、三千よきを隨へて、しがの郡におしよする、いせいの程こそゆゝしけれ、さる程に、大伴のわうじは、たくみしちりやく徒に、はふ〳〵に逃かへり、そが中臣を近付て、せいのつのらぬそのさきに、吉のゝ皇居を攻つぶし、帝をがいしにほてる姫うばひかへさんはやと〳〵、ぐんせいさいそくなすべしと、ごでうあればそが中臣、承つて在京の、ものゝふつがう七萬よき、にしきのはたを三重おしたてゝ吉野をさしてぞおしよする、あはづのはらにて、はしたなく、兩ぢんはたと行あふたり、互にそれとみるよりも、そなへをさだめ一どうに三重ときのこゑをぞ「あげにける、みよをさだむる、たゝかひも、けふをかぎりの事なれば、兩ぢん一どにもみあはせ三重こゝをせんとぞ「たゝかひける、され共、くはんぐん、たせいにして、大伴がたのぐんせい共まけいろにこそみへにけれ、そが中臣は踊出、きほひ切たる官ぐんに、ゑしやくもなくわたりあひ、龍虎、の三重いさみすさましくはたらり〳〵となぎふする、さしもの官ぐん、たゝ一人に切たてられ、兩方へさつとひく、かゝる所へ、にんかいのそなへより、きんふせんのうんくはい、かづらきのらいでん坊、ゑたりやおふととびかゝる、そが中臣打笑て、いらぬほうしのいくさのやう、そこを引なとつゝとより、互にむずと引くみて、ゑいや〳〵ともふだりけり、うん悔らいでん元よりも、なにしおふたる大力僧、こと共なさず一同に、そが中臣を取てふせ、こへを合て兩人は、首ふつ〳〵と捻切て、互にさし上立たりしはゆゝしかりける有さまなり、此勢に大ともがたあるいはおちゆきかうさんし、今は大伴たゝ一人、いで物みせん巳ばら、わうじがめいどのぐぶせよと、踊かゝるを官ぐんは、兩方へだて押取まく、すいさんなりとはせむかひ、大手をひろげはむかふもの、つゝぬきねぞ首三重人つぶてはすさまじかりけるしだひなり、いさみほこりし、官ぐんも、わうじのせいに恐つゝ、右往左往に逃ちりける、時にふしぎやこくうより、友たるが首飛來り、大音上ていかに君、某が諫の程、いまこそおぼしあたらんとから〳〵打わらへば、わうじは更にへんとうなく、おもてをお

おひはぢ給ひば、友たるがくびさもさうず、我忠心の一ねんは、けふ迄此ぞに留れり、かゝるうへは潔、御生がいをいそがるべし、せんかにまみへ申さんと、いふこへ計のこりつゝ、風にせうじて飛去けり、わうじ是はとあやしくも、たゞぼうぜんと立給ふ、此ていにうん悔らいでん、すりしよつて引くんだり、わうじ怒てもの〳〵しと、左右に取ておしふする、村國遙にみるよりも、飛來て組付を、同取て引しいて、おしひしがんとせし所に、吉のゝかたより神通の、鏑矢來て大伴の、みつけんにはつしとたつ、わうじは是にゆう力の、たゆむ所を下よりも、三人一どにはねかへし、さし通し指通す、村國首を打おとす、時にふしぎやめいどうし、ざ王權現出現有、朝敵のこらず討ばつし、天下太平成べきなり、カ、ルいよいよこくかをまほらんとひかりをはなつてうせ給ふ、夫よりも天むてい、大和國にせんど有、清見ばらのみやにして、政道たゞしく在けり、千秋萬歳めでたしと貴賤上下安詫皆仰がぬ者社無かりけれ

花筏芳野内裡終

# 源氏六條通

## 第一

「扨も其後、夫天下に名を得ては、徳あれば四海にみち、あやまちあれば人こぞつて、蝕のごとくに是を見る、さるによつてくんしはたゞ、其ひとりをつゝしむとや、こゝに仁王、六十六代の聖主をば、一條の院と申奉り、めでたきみかどおはします、其頃のきり人に、延喜帝の御子、前の中書王の御舎弟に、一世の源氏を賜はり光ル源氏と申せしは、王道ほさの其爲に、人臣と成給ひ西のみやの左大臣、高明公と申つゝ、和かんの才にくらからず、ようぼうゆふびにましませば官女も下女も押なべて、したはぬ者社なかりけれ、又右近衞の大將藤原の、道包公と申せしは、父關白の愛子にて、世の人おもくもてなしける、心ざしふてきにして、ひげたくましきあだ名にや、皆人是を髭黒の大將とぞ申ける、外にはくはをかざれ共、内にはかねて逆心の、くはだてふかくましませば、光ル源氏と常々に、むつまじからぬ中なりき、いで其頃は、永延元年の十二月、さこんの櫻咲みだれ、かいらく枝をあらそひしはけしからずこそみへにけれ、よつて主上南殿に渡御有て、諸卿を召れさま〴〵の、古きためしを御尋ね、ちよくもんあれば人々、しゆ〴〵の古事かんがへて言上有しかば、攝州住吉の神職、庭上に畏り、扨も住吉姫松の本に、さも大いなる石のかろうとひとつ、すてて置て候が、いか樣ばんぶのわざならず、石のおもてに、八ッの文字の候を、うつしてごん上仕ると、いたに書たる一下り御まへに、さし上れば、右大將道かぬ請取てそうもんある、二人一ト、一人入王といふ八字なり、ひげぐろしばしかんがへて、天晴めでたき御事や、二人と書て天の字なり、一トとは下の字なり、一人は大の字、入ると云にうの字に、王の字をくはへては、まつたしと云全の字なり、天下大いに、まつたしとよむ時は、天下大安全の御吉てう、住吉の御つげ、是に過たる悦びなし、いよ〳〵ほうそ長久の、御しるしと覺えしとことぶき玉へば其時に、光ル源氏いや〳〵まつたくあんせんの、御へうじとは思はれず、今太平の時たいへいを、しんれい

のつげなく共しれたる事にて候なり、太平には亂をつげ、亂世には太平を、つげ玉ふこそ明神の、おうご共なり万民の身をつゝしむべきしめしなれ、我おもんぱかるに此文字、二人下つて一人、王は入ルとかんがへ候、二人には仙洞と、當ぎんの御事、一人とは近臣なり、王に入とは王城へ、くわきうにせめ入る大けうじ、もつての外の次第なり、てうてきまぢかに候はん、かならず御ゆだん有まじと詞、きよげにそうもん有、みかどつく〳〵ゑいりよありいづれをわけんやうもなし、高明道かぬ兩人、頼光を召ぐし、事のやうを見てまいれと、時の武將かづさの介、源の頼光を召れて此よしりんげん有、承て人々は神の心のにごりなき住吉、さしてぞいそがるゝ、松のおちばをかきよせて〳〵、木の下かげをきよめん岩がねによせてはかへる白波の立ゐひまなきしづが身の玉もかるなるきしかげに、たちよりて見わたせば水たかふしてべう〳〵とほ計見ゆるおちのふねなみのあはぢの嶋ちどり友よびかよふしほあいに、むこ山おろしはげしくて釣せであまやもどるらんはくらう、ちりて花千べん、かりせい天にてんずれば文字一かうを顯はして、よそに稀なるふうけいをしばしながめていたりける、おとゝのしづは立よりて、いかにあね人此住吉の岸の姫松、ひと本をばなど相生と申らんいぶかしさよととひければ、姉は聞てむつましと、御身しらずや水垣の、久しき代より高砂のをのへの松と此松は、相生のやうに覺しと、きのつらゆきが古今のじよに、のこしおきたるふでの跡よく〳〵心へ候へや、いはれをきけば面白や、かしこは高砂、こゝは住の江、扨は國をへだてゝも、相生の松といひくるしからず候よな、さんせんばんりをへだつれ共互に通ふこゝろづかひの、いもせの道はとをからずまつはひせうの物だにも、相生の名をゑたり、ましてやせうある人として年ひさしくも住吉へ、あゆみをはこびちかひなばいかでのうじゆのなかるべきいざみやめぐり、はじめつゝ、松のおちばをかこふよ、竹のさらへの手もたゆく、かけ共つきぬことのはの、道を守らせ玉ふなるあけの玉垣ひかりそへ四社のそり橋大とりい朝きよめして、松かげにしばしやすらひいたりける、かゝる所に左大臣高明、右大將道かぬ、頼光を相ぐし、住吉へつき玉

へば、津守の國夏あないして、松のもとにより玉ひ、かのかろうとを見玉ふに、高さ五尺ゆうよにして、よこ七尺に餘りたる、大ばんじやくの其おもてに、きゝしにかはらぬもんじ有いかさまあやしき次第やと、兩卿ながめておはします、其時に賴光うらべのくはんじや末たけに、あのかろうとのふたをあけ内を見よとのたまへば、畏て末たけ立よりあけんとせし所へかたはらなる松かげよりしづのめしづのお立いでゝ、ちよくしのおまへにひざまづき、このかろうとの事に付、申上たき旨有と、ごん上申せばらい光、ひかへよとの仰にて、末たけしばらく立しりぞく、時にしづのめ申やう、我々は住吉の、濱のまさごのかずならぬ名もなきものにて候が、おとゝが事は生れ立、力人にすぐれて、心からなる者なれば、かやうの折をさいはひと、都のとのへみやつかへ、ねがひ申て自らが、伴ひいでゝ候なり、此かろうとをかろ〳〵と、さし上させて力の程、ごらん下され候はゞ、有がたかるべく候と申あぐれば、兩卿、ねがひの通りごめんある、しづは悦び松かげより、持つたへたるものゝぐを、さも花やかにちやくしつゝゆるぎ出たる其有樣かぶとのきなしよろひつき、たぐいまれなる武者ぶりは只者ならずとらいくはうは、眼をくばつてやあ者共、もらすなと下ぢあれば、けいごの者どもさゆうより、二人のしづを押取まく、姉のしづのめこはいかに、げう〳〵しき有樣やさまで御ふしんあるまじと、さはがぬていに申にぞ、らい光なんぢらふてきなり、あのよろひは平しんわう正門がてうほう、天ちくやうにおどしたて、ばらもんどうと名付つゝ、びざうせしよろひなり、ひつでうてきの一るいなりまつすぐに白狀せよ、さなくば一々がうもんせんと、はたとにらんで宣へば、しづのめよこ手をてうど打てゑいさすが源氏の大將ぞや、今は何をかつゝむづき、わらはゝ平しんわう、正門がむすめ、加藏の尼と云者なり是なるわつぱは、正門が子、自らが爲にはおとゝにて侍ふなり、父正門朝敵と成てほろびしよりかやうのていにさまをかへ、ようちのおとゝをかいほふし、せい長なさしめ本もうをはらさせん其爲に、正門が子なるとは、ふかくつゝみてじせつをまち、けふらい光にたいめんこそ、そくはいをたつせん時いたりぬ、桓武天皇四

代のそん、平のよし正がちやくし、しんわう正門が子なるぞや、父もちゝたる者の子が、かまへてひけうの働きすな自ら女の事なれば、足手まとひにせんもなし、九萬八千の軍神のちまつりに、只今こゝにてしすぞと、懐劔を引ぬいて、自ら首をかきおとし、かつぱとふしたる有樣はゆゝしかりけるしさまなり、おとゝおどろきいだきつきこはさていかにはかなしと、さすがにたけき眼にも、つらぬきとめぬ泪の玉はつらはらとぞ流しける、今迄我にそれぞ共、しらせ玉はぬうらめしさよ、かくみんかんに人となり、いやしき身ぞと思ひしに、すぜうをきいてまんぞくせり、そぶはよしまさ、父は正門、二字を取て今よりは、我、平太郎良門と名のりて、王城へ攻入りちゝのねがひをたつすべし、又賴光はがんぜんの、姉のかたきのがさじと、大音聲にのゝしる時、ふしぎやかろうとめどうしふたを、こくうにはねかへし、內よりも其:たけ九尺計の童形のとんでいでゝ良門に、立ならんで我はそも、ゑい山のちごなりしが、大天ぐに參會し、まゑんの法を學びつゝ、佛經王法めつせん爲、經ろんを燒はらひ、あまたほうしの命をとり、今市原にすまいなすきどう丸とは我事なり、いかに良門諸共に、力をそへて天下をば、御身が心にまかすべしと、ふたりならんで立たるはあうんのりきしのごとくなり、賴光は兩卿に、御けが有てはいかゝぞと立ふさがつてかこはるゝ、けいごのものゝふ左右より、打とらんと馳よるを、兩人是を事共せず、引よせ〳〵弓手めで人つぶてに打たりしはすさまじかりける次第なり、かゝる所に四天王第一番の大あらもの坂田、會同丸公時、いだてんかくやととび來て、君をかこふてつゝ立けりよく天の大ま王が、生れかはつてせむる共、げんけのしゆじなす其內は、おゝ思ひもよらぬ事成ぞ出物みせんと名に高くきしにはびこる大のまつ、とびかゝつて引たふす、わたりの土七八間、ねよりくづれてのきにけり、かろ〳〵とふりまわし、大ぢもさけよと打立れば、きどうよしかどへきゑきして跡をもみずして逃失ける、公時笑てさもそうず、あくまは去て西の海青さがはらの浪間より、顯れ出たるあら人神、かみすゝしめのほうへいをはやとく〳〵と賴光公、兩卿の御供し、都へかへる公時は、天晴源家の寶やときせん上下押な

べて皆かんせぬ者社無かりけれ

## 第二

「其後、源の頼光は、みたちにかへらせ玉ひつゝ、渡部の太郎綱、坂田の會同九公時、うすいのさだ光うらべの末武を、御まへに召れつゝ、扨も此たび、あやうきちんじつゝがなく、高明道かぬもろ共に、御きらく有し事、是公時がぶこうに有と御よろこびはかぎりなく、此上は四天王、きどう丸と良門を、心を付て尋べしと、御でうあれば人々、畏てお請をなし御前を退出なし玉ふ、去程に髭黒の大將はやかたにかへらせ玉ひつゝ、御そばさらずの郎等、東仙道無三坊、坂西あら波入道、なんかいのうんりうけん、北國の雪道齋、四人の者を近付て、いかに汝等承れ、扨も此度大内にて住吉の神職津守の太夫國夏が、注進申せし事につき、勅を蒙り高明と、共に見聞なす所に、きどう丸と云し者、平太郎良門、共に力を合つゝ、かうめいと頼光を、餘さじとしたりし時、まつたれいゝ坂田めが、大わざをふるまふゆへ、きどう丸も良門も、はふ〳〵逃て行方なし、何とぞかれらが有所、尋出してみかたとなし、かねての所存をおもひたつ便にせんと思ふなりいかに〳〵と有ければ、雲龍軒すゝみ出、仰の趣しごくなり、あの頼光が有内はたやすく御本いとげがたし、先かれを御失ひ然るべく候なり光ル源氏は其内又よろしき手だても候はん、此ぎいかゞと云ければ、あら波入道無三坊、一同に手をつかね、成程其理聞へたり、しからば是へ御招き、どく酒を以せめころし、四天王の奴原をば、我々四人一同に、打てかゝり候はゞ、いかでか以餘すべき、御心安かれと手に取やうにぞ申ける、無道齋すゝみ出、某は御使に罷こし候べし、髭黒大きに悦びて、明後日さはりもなく候はゞ、招請なしたく候と、云付て指つかはし、へんじおそしと待給ふ、暫く有てせつどうさい、立かへり申やう、頼光申され候は、思召よる御使、過分しごくに存るなり、成程參上有べきとの、御へんじにて候と、謹で申ける、皆々悦び手を打ていそぎやういと聞へける、さだまる日にも成しかば、かづさの介頼光は、渡部を御供にて、あしげの駒にくれないのあつふさ

かけて召れつゝ、右大將道かぬのやかたをさしてぞいそがるゝ、かしこになれば馬よりをり、かくとあんない有ければ、郎等共出向ひやがて奥にぞしやうじける、其時大將しづ〳〵と御出有、早速のらいりん悦び入候よし、互にゑしやく事おはり數の名くはやちんせんのしなをつくしてもてなさる、暫く有て雪道齋、入海となづけたる大盃を賴光の、御まへに持いでゝ、手づからてうしたつさへて、すゝめ申せば賴光はひとつうけさせ玉ふ時、ふしぎなるかなそともより白ふのたかまひ來り、賴光の持給ふ御盃の其上をかなたこなたへ飛めぐる、人々あやしみみる所に、賴光は心づき、持給ふ盃を、さし上てかのたかの、口をひたすとみへけるが、忽はをたれおちにけり賴光さはがず此御酒は、鳥のたべたる跡なれば、玉はるまじとて捨給ふ時にゑんの下よりも、男二人飛上つて、賴光を左右より、たてはさんで討んとす、賴光儕とにらみつけ、ならおかしや道かぬ公、かやうの事にて賴光が、やみ〳〵討れんや、おのれらすこしも手向はゝ、まつかうふたつに切わらんと、御はかせに手をかけて、ひざ押たてゝぞ待玉ふ、ぎせいに恐れて二人の者、わな〳〵ふるひおちゑんのらんかんふみをり、どうとおち、ふみ石に打あたり、かうべみぢんにくだけつゝあけにそみてぞしゝたりける、賴光笑てやあひげぐろ、むかしかんのよに、張禹と云し者は、成帝のしはんたり、朱雲といふ者是をねたみ、てうを討んとそうせしに、せいてゑいかつてしゆうんを、きらしめんとし給ふに、しゆうん恐れてらんかんにいだき付ていたりしにひぎをそうせし天ばつにや、おばしまおれて忽に、朱雲は庭におちけるとかや、是よりして今の世に、人の非をせめたゝすを、檻折（おばしまをり）ともじにかき折檻と申すとかやあの者共がふるまひは、よくもにたるぞひげくろ殿、いかに〳〵と宣へば、大將ざしきにたまりかね、をくをさしてぞ入給ふ、あら波入道雪道齋、それ餘すなと云こへに、渡部の太郎綱、しやうじ杉戸をふみ破り、いきほひたけつて欠來り二人の者をかいつかみ弓手めでへ取てなげ、氣色ばうてぞ立たりける、此いきほひに恐れてやあたりに近づくものはなし、いざ御かへりと太郎綱、君の御供仕りみたちをさしてぞかへらるゝ、かくてひげくろ、あら波入道雪道

齋、兩人をちか付て、打もらしたるむねんさよ、此まゝにさし置ては、かへつてことの大事なり、小せいなる其内に追欠て討取べし、と〳〵と宣へば、畏て兩人はよろひ引立かたにかけ、有あふ者共引ぐして跡をしたふて追かくる、程なく追つき、あら波入道雪道齋、兩人駒をのり出し、おくしたるか賴光、我々が有ながら、いづくへにがしかへすべき、手なみの程を見せんとて、くろぬりの大弓に、かなじんどうをくつまき迄、引こふでぞの丶しりける、綱は此よしみるよりも、矢おもてに立ふさがり、おのれらごときのおくびやう者、いらざる長追身のはめつ、いで〳〵ゆんせい心みんと、たちぬき持てひかへたり、兩人聞て渡部が、くはうげんのにくさよと、矢次早成者共が、さし取引つめはなつ矢を中に切てぞおとしける、是を軍の始にて、ぞう兵共入亂火花をちらしてたゝかひける、しばしせうれつなかりけり、右大將のかたよりも、くろがねせんじやう同く、道竹と名のつて出、一丈許の鐵の棒、かろ〳〵とふり廻し、賴光のぐん兵をはらり〳〵となぎ立る、かゝる所に貞光末たけものゝぐして、大いき切てはせ來り、たちぬき持てわたりあひ爰をせんとぞ「たゝかひける、何かはもつてあますべき、ぜんじやう道竹兩人を、弓手めでへ切すへてすかさず首をかきおとす、坂西北國是をみて、おゝ四天王程有けるよ、天晴見事のはたらきや、そこを引なと切てかゝる、坂田の公時欠來り、御兩人の御手がらははや相みへて候へば、こゝをばこのさかためが申請んと云まゝに、鐵棒をかいふつてはんじ計ぞ切むすぶ、され共せうぶみへざれば、さあくまんと云まゝに、二人一所に押ならべ、さうのかいなをむんずととる、公時はあらくるしや、もはや叶はぬ上からはごへんたちがすきにせよ、さかたも今は是迄と、さもよわ〳〵と云ければ、二人のほうし頭をふり、たるみをくれんはかり事、其手はくはぬ公時を、生取たるぞおりあへと、大をんあげて呼はれば、東仙道無三坊、なんかいうんりう折合、手もなく取て押ふせやにはにいましめ引たて丶、是見給へや、おにがみのごとく成る四天王のすい一さかたの會同丸公時を、手ごめに生どるつは者を、いか成者と思ふらん、右大將のみ内なる坂西あら波入道、北國の雪道齋、東仙道無三坊、

南海のうんりうけんと云者なり、源氏にはぢあるぶしあらば、とめて見よとくはうげんはき、はやとくあゆめと公時をたゝきたてゝぞ引立る、半だん計とおぼしき頃、公時しりいにどうとすはつてはやくたびれて是からは、一足もひかれぬぞ、汝等はさきへゆけ、四人は聞て腹をたて、かく迄及ぶかばねして、其惡口はすいさんなり、はやとくあゆめと追立る、公時笑てかた〳〵は四人にて一人を生取たるを手がらとす、いざさかためもそと計、手がらの程を見すべしと、云よりはやくいましめのなわ押切て飛上り、力足をふみならせば、無三坊うんりうけんすはこそと引かへし、逃行を、今しばらくとかい抓、二人一所に押ふせて、首ねぢ切て立上るを、坂西北國すきをみて、ゑたりやあふと引くんだり、やさしやとさうの手に、二人が首ほねかいつかみ、かうべを七つ八つてう〳〵と打合落花みぢんに打ひしぎ、二人を一所にくゝしつけ、ひけくろ殿への音物ぞ、御持參あれとさし上けて、てきぢんへなげ付れば、どつとくづれてのきにけり、それ餘すなとごぢんのせい、百き計一同に、あをりをけたてかゝるをみて、きんときいさんで面白しと、鐵棒を押取のべはらり〳〵と打立る、かゝる所へ暫くまてと割て入り、駒を扣て高聲に、そも〳〵是は關白殿の仰をうけ、けんひいしの介賴光、是迄來て候ぞや、此おこりは右大將、道かぬ公の郎等、酒興のぶ禮をいたせしより、かくじんじやうに及ぶときく、王城まぢかき所といひ、かみをはゞかり此うへは、西ぢんはやく軍をやめ、互に野心あるまじと、ことばをつくしせいせらる、道かぬ公も賴光もよきに御うけまし〳〵て双方いこん有まじと、血判を取かはし、やかた〳〵にかへらるゝ、天晴時のちんじやと貴賤上下おしなべて皆かんせぬもの社無かりけれ、

## 第三

きのふよりふる雪ながらけふたつはるの改めて其名もかはるあは雪を木ごとの花と打ながめ、中河のやどり成る、川邊にのぞむらうたいに、光ゐ源氏ははしちかく、御出有ててうあいの、二人のびどうを左右に召、あたゝめ酒の色に出、興を催す小づゝみ

の、しらべさやけく此ちんは、まれ人をうるなり雪に向へるこぼくは又花にあふ事安きなる其斷も樣々と、浪にひゝきし音曲は面白かりけるしだいなり、田子のうらはの蜑ならで雪をのせくる笹小船、ゆられゆらるゝなみの上、さすさほの手にけおされてゆきもうるみてふるものを、まつ白ひとはなんぞいの、おせやさつ〳〵松風に拍子をそへて程もなくこぐ共なしに行ふねをちんのもとにぞとめにける、高明ふしんに思召らんかんに立そひていかにそれなる女性は、あて成るかたか賤のめか、事のしさいは白雪の、ふるもいとはず舟の上、何しに是迄來りしぞ心へがたしと仰ける、女はよしを承り、こは情あるうへ人の、御尋の有がたさよ、身にし事は六條にてあかしと申流の女、ゐ方まいりの其爲に、ぎおんへまふで侍ふが、雪もはれ行夕日かげ是紅天の暮つかた、餘りけしきの面白く、立寄ながめし折からに、此御ちんの內にして、つゞみの音の聞ふれば、きかまほしさに川ぎしに立やすらひて侍るに思はずも此舟の、あるにまかせて竿さゝせ、是迄こがれ參りしと申ければ光ル君、見しは始と遊君の、今せんせいのさかんなる、色に見とれてしばしやはとかふの事ものたまはず、やゝ程有て其かたは、あかしと云君なるよな、寶もゐん有姿かなしる人に成り申さん其道より上りて、此ちんへ御こしあれ、酒ひとつまいらせん、それつぐはの介あないせよ、承て立所を、あかしとどめて忝なし、寶一節の竹のはも所かはれば御慰、恐れおゝくはさふらへど、賤が伏やに御はこび、さゝ事いたし候はゞ、又一しほの興ならん、袖ふり合候も多生のゑんときく物を、見初し君をいかでかは、よそにのみ見てやみぬべきたそがれ過ぬ其內に、はやはや御入あれかしと詞の花も色取て、よにもわりなく申にぞ、源氏も今はうつり氣の心うかれてうつゝなく、さは思へ共誰有て、伴はん人もなし、殊に我は官おもく、位もたかき身を持て、さやうの所へ行ん事、世の人口もいかゞぞと、仰ければあかしの君、こはおろかなりそらたかくもいの月のいかなれば細谷川にかげやどるらんとゐいきんなせば光ル君、はつと手を打げに誠、姿ににたる歌のさま、しほらしさよと宣ひて、谷川のみづのながれのきよければ、月もかげをばなどおしむべきと、そくせきの

御へんかに、あかし嬉しく打ゑみて、さもあらば是よりして、君諸共に浮船の、浪に竿さし參るべし、はやとく〳〵と申にそげんじも今はたへかねて、しからばひそかに伴はんと、つくばから松兩人に、ばんじを仰ふくめられ、いそぎちんよりおり給ひ、心うきたつのり初に戀風浪風さつ〳〵と六條さしておしけるは、いさましかりけるしだいなり、花のみやこに名もたかき、六條と申はそも流の水をたゝへつゝ初心の關を押破り、心を通す色里にてとうもかうけもおしなべてかよはぬ人はなかりけり、見るたひに又珍らしき、松竹のたてわたしたる春の門、男まじりにつくはねのちら〳〵おちて門松にかゝる折ふし貞光と、末たけ二人一ざにてかよふをよそに忍びがさ、はをり袴も風流に、あゆむ手持かしちくのつゑ、ぞうりにつたふうす雪は、花をふむかと興有てかしこの茶やにぞ入にける、ひかる源氏はゆう〳〵とあかしの君と諸共に、ゆきのあかりのぬりあしだ、跡は二のじの一やうにふみそろへたる八もんじこゝやかしこを見物したゝずみ給へばしるべの茶や、夕風さむし暫くも、こなたへ御入あそばせと、御供申せば八〳〵は、あづまやさしてぞ入給ふ、時に女房出向ひ、御盃を取あへずさま〴〵もてなし奉る、光ル源氏ははしちかく、御出ありて行かへる、貴賤のていをひはんじて、ごらん慰おはします、其頃くるわに名のたかきすまうらと申せしは、あかしにまけぬごせんせい、此兩太夫を皆人の相生の松と口ずさみ及ぶも及ばざりけるも、したはぬもの社なかりけれ、あづまやの前にきてしばし見入て立いたり、あかし內よりさしのぞけば、それを便に須磨浦は、若あかし樣此花の、いとうつくしきさかりをば、獨お詠めましますか、そともへさしゝ一枝を、たをるも花の習なり、下心あしきと思すなよ、御目にとまる事有共大めに見さんし玉はれかし、明石聞てよそがましや、先しばし御入あれ、こは忝なし去ながら、あい近よらば其花を、手折たまふや侍はん、若さもあらばいかゞして花守樣へ申わけ、誰を賴みていたすべき、手のとゞかぬがましじやにと、光ル君の御顏を見つめてたゝずみいたりける、明石打ゑみ、落花らうぜき、くるしからずと云事有、たおらせ給へ須磨浦樣、こは淺々しき御おしへ、さ程の花を手折ても、

おしむ心はましまさずや、さもあれば祉雪上り、ことなふあらき夕風を、御いとひなくみへ侍ふ、此身杯がさ計の、花を一もと持ならば、木の下蔭を宿としして、あらき風にはあてまじに、御逢かたのそまつさと、けせう詞ももどかしくせめくる戀の浦浪の打つけにこそ申けれ、あかしはせいてあひかたの、うときしたしき杯云事、よそにてなどて知給はん、せひ共是へと立いでゝ、ひかふる袖にすまうらは、やがて内にぞ入にける、もとよりげんじの御事は、かうらいのはかせさへ、いこくにもなき御ようぼう、ほめ奉るあまりにや、光ゐ君とあがめたる、御さうがうにてましませば、名におふゆうくんつや〳〵と、見とれてこそはいたりけれ、兩君は左右により、盃かずもかさなりて、明石はれんりすまうらは、ひよくの中と御たはぶれ、共に身請と宣へば、茶やも悦びめでたしと、尚汲かはす盃に時をうつしておはします、千ねん〳〵三千年是はめでたきじゆめうとう松に花さくはるはいつきたる事ぞと七つ子が、里のおきなにとうぼうさく、又うら島が長めいも此あぢはひの德とかやいざやめせ〳〵じゆめうとうかゝる所へ禿の千鳥、あづまやを立出て、急あはてゝかへるとて、此箱に行あたりかしこへどうと打かへす、商人大きにはらをたて、すかさずちどりを引とらへ扨もそさうや此禿、ちにおとしたる品々は、何となにはのあしなく共、望にあらはあたふべしいかにいかにと云ければ、ちどりはかほの色をかへ、さもしき事な宣ひそと、ふりきる袖をはなさずして、しばし時をぞうつしける、あづまや遙に是をみて、飛でいでゝ中に入り、まづ〳〵せひにかんにんして、さのみにな申されそ、幸かな我かたに、わけよき大じん御出ある、かしこにきたり商せば、爲よきやうに取持べし、はやとく〳〵と云詞に、商人悦び大じんときけば床しやそこもとをよきにたのみ候ぞ、いざまいらんと打つれて、かしこに立こへかの商人あづまやの、みせさきにはこをおろして内よりもいとうつくしきにんぎやうを取出しつゝそれよりも既にようをなしにけり、げにや日にそひ月にまし里ははんじやう君たちもなをせんせいのいやましに、したひくるわのはるはまづ初やくそくを松かざりとうどの鳥と日の本の鳥の八こへの七草やひらきて、いはふ

くらのとにすべのとしこし十五日かよひ〳〵てきさらぎは、むすぶにしの、神がきにいなりいはふたはつむまややよいめでたきちよつるのひなのいもせのまさな事ならべし、いその小がいにて、しほひがりせんとこのうみなみのしらゆふうの花月はみなぬれぎぬのころもがへさみだれ月はあやめぐさのきばゆかしき、かをとめて、のぼりかぶとのいさましや、けふばかり社おゝなごのいるになるとよみな月はひむろのいはひふみ月は、其たなばたや、うらぼんの、日かずつもりて八さくのけふをたのものさたすぎて月見ぞ、わけて色里のけしきうきたつこよひなり、きくのせつくや十三夜かた月見をばせぬものといみしは里のならひかや、しぐれもよほす神な月、いの日のいはひゑびすかう、にはのしらぎく色かはりませにすゝめの、あしがたの、つきてやさしきしも月の、八日はほたけそれよりも、しはすになればことおさめ、すゝ取もらゐ其ほかは、京とあづまはかはれ共、かはらぬ色に玄げれたい、すへはめでたき千ねんと、調に花をさかせしはいと興有てぞみへにける、かうめいごきげん、うるはしく、それ〳〵と有

ければかす〳〵のひきで物、はこびいでゝぞあたへける、すまうらは商人が、始よりして下心、かよふめもとのうるさくて、背向にぞい直りける、男たまらず懐中の、さすがをぬいて左の手の、小指をはたと押切て、すまうら様へと投付る、源氏驚きこはいかにと、宣ふこへにかの男、ひかる君を乞みて、つつとよりてかい抓、やがて表に引出し、すかさず取て押ふせて既にあやうくみへける時、貞光末たけ欠きたり、あみがさ取てかしこへすて、うへ成る男をかい抓、曳やつと引かへす、高明は起上り、扨も両人有あはずは、あやうかるべき所なり、去ながらその者は、只さしあたる當前の、戀のねたみとおぼへたり、せんぎもあらばかへつて皆、我身の爲あしければ、たゞ其まゝに穏便に追はらへと仰ける、貞みつ末たけきばをかみ、おのれは命冥加の者、我々が手にかけてたすけかへせし事なけれど、場所あしければ力なしと、目よりたかくさし上げ、十四五間投出し、げんじをかこふて立たりける、時にかの者ほうかぶり、かなぐりすてゝ我は是、平太郎良門なり、父將門が反逆の、跡をつゞいて王城を、のつとらん

とはかれ共、あの高明が才ちにて、あまたの計略空く成る、けふげんじ此所へ、かよひくるよしきどう丸、しらせしゆへに身をやつし、討んとおもひ來りしに、すまうらが色にめで、ふかくを取て其上に、二人の者にさへられし、口惜さよと云まゝに、しこみの大だち引ぬいて打てかゝれば、兩人は、御けが有てはいかゞぞと、ひかるげんじを押かこへば、すはや喧嘩と町の者、我も〳〵と棒提、大もんの戸をさしかためてのがすまじいと「取まくを、よしかどたちの、手きゝにて、いさごをあぐる大風の天をくらますごとくにて、一ほうへまくりたて、むら〳〵ばつと追ちらし、御度社はむなしく共、ついには本望達しつゝ、かさねて首をばかうめいとひとりごとにのゝしつて、大もんをおんどりこへ行がたしらずに、成行けり、遖あやうき事共やと貴賤上下おしなべて皆かんぜぬ者こそなかりけれ、

## 第四

其後、だいりには諸卿を召れ、光源氏の高明、六條へ通ひつゝ、日夜色に身をゆだね、政事をかくのでう、一々に叡聞有、天子のこゆうたるべき身の、以の外の有樣と、逆りん有つてださいふへ、はいるせよとの勅でうなり、人々はつと思へ共、綸言なれば力なく、承て殿上人、みふだをけづり高明を、ごんのそつににんぜられ、つくしへさせん有けるはむざんなりける次第なり、去ほどに、髭黑の大將はむ月下旬のはるの雨、かすみよりふるこゝちしてのきの玉水しづかなる、けしきを友とたゝ獨つねの所に入給ひ、扨も日頃氣がゝりなる、高明思はずるざいして、是にましたる珍重なし、我念願をたつすべき、時至ぬと悅て、火急にとげん企てをば、いかゞすべきとあんじつゝ、ていしやうを打ながめもくねんとしておはします、かゝる折ふし一めんにくろくもおおひ、風おちて、雷雨でん光頑くぜんごを忘ずる計なり、ふしぎやこくうにこへ有て、こくうんの内よりも、さしもめなれぬ異形の者、金色の車にのり、ひろにはにあま下り、抑是は、市原の强童、きどう丸とは我事なり、我ま道の術に達し、佛法はめつをいのれ共世を覆す强將なし、とうじ御身より外、我

道に引入て、みかたとなさん器量なし、つゝみ給ふな心底に、大いなる望有り、それこそこなたの幸ひなれ、はやとく〳〵とすゝむれば、右大將につことゐゑみ、汝が云、詞の下より胸はれて、國家をしゆりに治ん事、さま〴〵計略廻らせり、實面白し此うへは、敎にまかせて行はん、きどう聞てさもあらば、此車をまいらせん、凡是に打のりて、大地を走り候共、人のめにみる事はなし、此車に打のりて、市原野へ出給へ、必まみへみつだんの、力をそへ申さんと、いふこへ計黒雲の、内にまぎれてうせにけり、大將跡を見おくりて、共にのりへし車どう、ひかれているやよこしまのくらきこゝろぞはかなけれ、思ひあかしてつく〴〵と、月のいるさもあかしの君共にうき名もこりすまの、其すまうらとしのびぢの手に手をとりて、やかたをいで、おちこち人のみるめをもいとふ心はつゆもなく、物にくるふも誰ゆへぞかのかたいとしわすられず初會になじむこひごひもうらなくかはす中となり、共に身請と有し時、うれしさ又とあづまなるふじのたかねはしらね共、都の山は、中〳〵にたぐへていはん色もなく思ふ折からあへなくも、遠きつくしのあらいそに、さすらひ給ふも此身ゆへと思ふに、はつときもきへて伏しづみたる、其日よりなげきかなしむおゝなの身、云にいはれぬくろかみの亂心にまよひ出かなたこなたと尋るになれにしわざの、くせとなり昔わすれぬ身ごしらへ小づま取あげしやんとしてなふいづち迄ひかる君、いざかへるさと手をとれば、あかしにつこと打ゑみてせうし人めも有物をあすこそ君のやくそくをわすれ給ふか是々と過しいなせの文取いだしふたりひとつにつどひよりおくよりはしへまきかへし又押かへしながめつゝいさめいさむる身も共に覺ず狂氣と成けるは哀にも又いとやさし、明石はうはぎのすそをおりはをりにまなふ立すがた戀しきとのゝ、あゆみぶり、とふみこうふみふり出す其御姿みるやうの、ふせいにすまうらうれしげに吸付出す煙草あかし手に取顔と顔互に見合こはいかになふうつゝなやうつゝなき我かのけしきはかなやな爰はいづくぞ、戀の山、ふもとにつゞく市はらやおぼろのし水佛もやせやおはらやせれうの里、柳のいづゝ汲上て、ひさげの水とわきかへり諸共しぼる、ぬれごろもきせ

るにつれて立煙きへてむかしに、成けるは、戀しうらめしかなしやとかこちわびたる有樣はやるせなかりしふせいなり、去ほどに、髭黒の大將は、くだんの車にのり給へば、ふしぎやな此車、ゆるぎめぐりて牛もなく、人もひかぬに市はらへといろき行こそあやしけれ、げにしきよくははかりなき、大千がいの龍王を、岩やにこめし通力も、仙女がびにはまよふにや道のかたへにやごとなき女の二人伏まろびかなしむていを右大將見しよりまよふ色の道、雨をふくめるはくふよう、いとうつくしき容色に、忽魔術の通力きへ、ぼうぜんとして車より、おりたちそばへ近付て、いか成る者ぞととひたまふ、時にすま浦我君のましますかたへ打のせて、ゆかふと申かうれしやとあかしも共に走りより車のながへに取付て、はやとく〳〵と申にぞ、髭黒きいて汝等は、狂氣の者と見請たり、やうすをかたれと仰ける、兩女につこと打わらひわけを申せば足引の、八ゑ山吹の花の色身は口なしのしづなれば何とかこたへ申べき、尤なれ共聞からは、我身に叶ふ事ならば聊力と成べきに、かたれ聞んと有りければ女心の淺はかにひかる君に別れにしはじめ、おはりをかたりつゝめぐりあはせて、たび給へと泪に、くれてぞ申ける、色にめのなき右大將、扨はげんじが思ひもの、今は汝等誰有て、はごくむ者も有まじゝ、我住かたへまいるべし、よきにいたはり得さすべし、世になき者をしたはんより、こなたへ來れと手を取て、車にのせんとし給ふ所へ、さかた、會同九公時、武者執行とてさがのに出、此所へ來りしがつか〳〵と欠よりて、やあ是は大將、道包公にてましますか、此御有樣は心へず、承れば此間、ざぜんのゆかに口を閉、めんへきしてよをあかし、人にまみへ給はずと洛中の大評判、我等式迄其さたに、みゝを穿て候に、かゝる色の御修行、やあだいじの所へまいりつゝ、拜見いたすさかためは、遖冥加に叶ひしと手を束てぞ申ける、髭黒兩女をつきのけて、夫本來は、一物もなしくうのたい、三がいむあんのしゆ行者に、極てざぜんのゆかもなく、一所不住の道理をば、車のめぐるにたとへたり、此しゆ行に立入ては、重惡の者なり共、邪はへんじて正と成ル、去に依せんあく不二、邪正一如と云事有、なんぢいかでしるべきや、おろかなりと

ぞ仰ける、公時聞て、高々と打笑て、いか樣さやうあれば社、上を僞り民をしい、仁義の門を閉ふさぎ、かく放埒のふるまひ、よき御かつ手候よ、おゝ貴卿むほんの穩便を、とつく聞て罷有ル、よき所にてきがんをとげ、此さかためが武者しゆ行の、名利にかなひたいけいと、車をしつかとかい抓、賴光かたへ御供せん、さあ〳〵此まゝと引立れば、大將やらじと留給へど、さすが名を得し公時に、何かは以及ぶべき引立られてゆく時に、さんか頻にどうようし、きどう丸飛來て、ゑゝ淺ましゝ右大將、女にたはぶれ給ひしゆへ、かゝるちんじの出きたり、そこのき給へと飛かゝり、雙方聞へし大ちからこと更にきどう丸、天ぐ道の術をゑて、ふしぎの力いやまして既に車を引もどす、公時笑て此さかたを、よの人間と思ふかや、父は赤龍母は又、とがくし山の山神なり、爭か以及ばんと、ふんぢがつてひく程に、左右のかいなの力すじ、さながらりうじやのあれ立て、こぼくをまとふいきほひにうごきわたつてすさまじく、ゑい〳〵と引く力に、車をぐはらりと引わつたり、きどう片わをふり上て、みぢんにせんと打てける、坂田大だち引ぬいて、引はずし打付れば、きどうがめてをひぢぎはより、ずんと切てぞおとしける、弓手にて公時に、抓かゝるを打はらへば、弓手のかいなも切落され、ひるむ所を飛かゝり、やごへをかけて切たりける、すかさず首をはねおとし、髭黑いかにと見廻すに行方しらずに逃失けり、かたちもみへねば、公時踊てはがみをなし、せんなきやつにさへられて、大將のがせしむねんさよ、去ながら、よき我君へのみやげぞと、きどうが首を提て、御所をさしてぞかへりける、かの公時がいきほひは、こんがうざわうまりし天のあれたるけしきもかくやらんと貴賤上下安詫皆かんせぬ者社無鳧

## 第伍

れんぼのやみぢくらけれど、名のみあかしは市原にて、おそろしきめをすまうらと、たがいにかほを見合て、ぼうぜんとしていたりしが、過しよりしていやましに君を戀しと思ふにぞ云ことのはのかず〳〵を狂きと人の云なして都にかへれあらざれば、柏木

やの長順は、高明るざいましませば、憚る所あらずとて、大せい引ぐし兩くんを、こゝやかしこと尋しが、磕(はた)と行あひ手を打て、天のあたへ是也と、大きに悦び走り寄、二人をかごに打のせて六條さしてぞかへりける、六條の、色里には柏木やのすまうらあかし、又立かへる二どの花さくや此はるぜんせいに、引なびけたる有樣は、三千のゆうくんも、色を失ふ計なり、さればにやすまうらは、其頃くるわにさたしたる段と云大臣、けふやくそくの日なりとて、あげまきやどりぎ兩人の引舟女郎諸共にさき立あげやへ立こへて、もてなしの其爲に、興ある、事をたくみける、されば此大臣は、世上を深く忍ぶゆへ、男をざしきへきんせいと、かねてより聞へしが、今大門を御入と、茶やの女房告來ル、すま浦二人の禿(かぶろ)をよび、よういせよと有ければ、關や蓬生立上り、既に柏子をすゝめける、そも此たいこと申はもろこしよりも事おこり物いはずして人をよびわしらずしてきうをつぐ德はさま〳〵有明の、つきぬまさごの、かず〳〵をすきとは、かぞへつくされぬ中に取ても、日の本や、天の岩戸の、いとかたく、色をはなれて世をいとひとぢこもらせ給ひにし、神のむかしに此國のやみと成しをかなしみて八百萬の神樣の岩戸のまへにて御なげきみかづら始給へばとうたふ所へ大臣の御出なりと、のり物をすくやかなりしおゝなごのざのまん中にかき入てみな〳〵かたへにのきにけり、かくあると聞し事ゆへすまうらはさらぬふせいのやうだいにうてやうたふよ曲だいこ、ていつくつく〳〵しつてい〳〵、つく〳〵〳〵〳〵しつてうてう其時大臣こしの戸をすこし、ひらき給へば忍ぶに、つまる氣もはれて一ざ夕日に、かゞやけば女郎のおもて白〳〵と見ゆるおもしろやとこしの戸をはつと押あけゆるぎ出上座にむずとぞ直らるゝ、是ぞ御げんの始めなるちはやふる神を出すもたいこの德かくれし客を見る事も此とくなりと夕まぐれ既に、酒ゑんぞ始れり、さて大じんは、ゆふ〳〵と、すまうらに打向ひ、某がていたらく、嘸げう〳〵しくおぼさんが、敵(てき)を持たる身ではなし、かくるゝ事はなけれ共、皆御存(ぞんじ)の我まゝもの、いつ此里へ來りても、氣がすくまねばのり物より、ないし五日も十日も、出ぬ事も候が、すだれのひまよりそんがんの、眞白なるを

見しよりも、中〳〵今はたまられずかくの通りに、候ぞや、姿はあらび候へど、いまだ若木の花なればと行末ながく相生の松と竹との、中もよくかたり給へとしなだるゝすま浦はにつこどるみいと淺からぬ御おしへ、こなたにおゐかは侍らはず、それ〳〵とければ、つかへの女心へて、さも大いなる盃を、はなをかざりしだいにのせ持出て祉直しけれ、大臣是に興をまし、それ始よと有ければ清は取上ひとつほし大臣にさしければ、引請三ばいさらりとほし、すまうらにさしけるを、一ッ上んと押戻す、さあらばおあいとあげ巻に、さす盃をあげ巻は、お手元みてとつきかへす、是はきうなりさもあらば、やどりぎ樣へ大あいを、頼申すとさす所を、すまうらはあいに入り、其盃はまかひ有、せひに上んとすゝむれば、大臣こまりてやどりぎへ、さゝんと云て盃もち、すんと立をすまうらは、盃をしつかと取、外へはやらじ是はまづひとつ上りて私にさゝせ玉へとおさふれば、ふり放さんとする所を、すまうらはもろ手をかけ、おそらく此六條にてすまうらと呼れ、是程の酒もりに、一ざの女郎、おめ〳〵とつぶさせて、ざしきにはたまられず、つよくしいば請てこぼすか、一口のふですつるか、盃を取おとすか、三ッに一ッはでう八まん、こよいにおいてはのまじ物をと片ひざたてゝぞひかへける大じん酒狂に、のぼりつめ、はなせ放さじのけのかじとあらそふちからに大盃、二ッにさつと引わつて、是しやう〳〵のみだれ足よろよろ〳〵とるふ酒に所さだめぬ足もとを皆一同に笑こへしばしは、なりもしづまらず、清は立寄手を取て、さあ御やすみと大臣をとこの内にぞいれにける、かくてよもふけ、人靜り、うしみつ過る頃おひに渡部の太郎綱、かのたいこの中よりも、押破て立いでて、たいにしこみしたちをはき、なりをしづめてこかしことくとやうすを伺ひて、一味の人をよぶこ鳥あいづのふへをぞ吹にける、忍びいたりし四天王小ぐそくかためはち巻し、てうちんをうしろにおひ、しめし置たるあいことば我も〳〵と忍びいる、其時つな云やうは、かた〳〵は一人づゝおち口をかためめ給へ、我討取候はゞ、引たいこを打申さん、此ぎきびしく、と、公時貞光末たけは、口〳〵をさしかため、まもり有ければもれておつべきやうはな

し、かくて渡べけらいをよび、やたてをいだし筆押(ふでおし)取(とり)一つうをぞ書たりける、謹て言上、かね〳〵御尋の、平親王、將門が子、平太郎良門、既に年たけ名を改め、段の一條軒と申、姿をかへて六條の色里に罷有る、手立をめぐらし付出し候、よしかどは一人と申ながらかれは源家の御あだ、王道の大敵、殊にかたちも、貞かに存候はねば、一人にて討ん事、そこつの至とぞんじ、せうこの爲に、朋友を招きよせ候、尚明早天に、良門が首、實檢にそなへ奉るべく候條謹言、永延三年、三月、廿八日、渡部の綱、坂田の公時、臼井の貞光、浦部の、末たけと連判し、いさい云付頼光の御所をさしてぞつかはしける、じぶんはよしと四天王、打破て亂入る、有あふ者共めをさまし、すはや夜討とさはぎたち上を、下へとかへしける、よしかどかたにもかねてより、父將門がぐん法にて、我ににたる若者を、六人迄一やうにかげもはなさず召つれしが我おとらじとぬきつれて、つまり〳〵に身をひそめはむかふ者をぞ待にける、あかしすまうら、兩くんは、かひ〴〵しく出立て、平太郎よしかどは、ひかる君のあだなれば、四天王の人〳〵より、ぜひ〳〵さきに打とらんもはや君への心中も、けふを限りと思ふにぞせきくる泪をとゞめかね共に、念ぶつとなへつゝ、明石かたにはやどりぎ、すまうらかたにはあげ巻、姉女郎を見つがんと、一やうに身じたくして、風と波との相詞いさみすゝんで待けるは、げにもゆゝしくみへにけり、先一ばんに大男、二かいの上より飛おりて、ぜんご左右を見廻して、かひ〴〵しくみへけるを、すまうらはしごの下よりも、ぬき足してねらひより、はらふ刀にこしをきられ、のつけにかへす所を、すかさず首を打おとし、二のいきをほつとつき、手始よしと悦びてむね押さすつて夫よりも二かいのうへに切上つて、てきをうてやといさみつゝ、あかしははしごをかけのぼる、二ばんにすゝむ、大男、あかしにむずとわたりあひ、火花をちらしてたゝかひける、あないはしらず火はきゆる、二かいの口をふみはづし、どうど下へぞおちたりける、すまうらはこへかけて、風といへ共こたへなし、それ餘すなと切立る、こは叶はじと引かへし二かいをさしてぞ逃上る、あげ巻つゝいて追のぼり二かいのうへにて切むすぶはゆゝ

しかりける次第なり、第三ばんにおくよりも、しやうじからかみ引はづし、しんどうして打立るすまうら得たりと、はせ合てしばし、たゝかひたりけるがたち打おとされ、叶はじと、ざしきの柱に飛つくを、餘さじと胴切に、こしよりしもは下へおちかみはうへにぞとゞまりける、あかしあげ巻二かいのてき、討取下へ缺おるゝ、すまうらてきかとあやまつて、あかしに切てかゝりける、二打三打てう〳〵〳〵うつたち風にはつ〳〵とかほる、とめ木はたゞならずらんじやくんじてよもにみちてき共更に、覺ねば、すまうら風ととひければ、あかし波とぞこたへける、其御こへはあかし樣、すまうら樣かこはいかに、さつてもあぶなし〳〵と、互にたちをそつとひき、御けがもなく候やと、云ことのはにやどりきは、てうしを求め缺來り御いきつぎにまづひとつと、立ならんで汲かはすつめたき酒のあぢはひも、さながらかんろのごとくなり始てひとり切る時は、むね打さはぎふるひしが、なれては安き物よなふ、いざひと勝負といさみつゝ切ていらんとなす所へ、四番のたびの大男、二かいの上より切ておるゝを、あかしあげ巻待請て二かいをさしてぞ切上る、たてはさんで、左右より切付れば、兩の手ともなく切おとされ、たゞよふ所を打倒し、首中に打おとす、障子にみなぎりながるゝ血からくれないに水くゞるたつたの川のいにしへも、か程はあらじとみへにけり、坂田の公時始より、見物していたりしが、物〳〵しやたち打は、めんどうなりと其渡り、二尺餘りのまさかりにて、こもると見へしかくれがを、む二む三に打破る、のこる二人の者共は、恐れわなゝき逃出るを、おこしもたてず打すへて、落花みぢんになしにけり、扨よしかどはいかにやと、こゝやかしこさがしつゝ二かいをさしてぞかり立る、よしかど今は、叶はじと、やねづたひに逃んとす、公時すかさず追つゞき、飛かゝつてくみとむる、良門本より大力、ゑいや〳〵ともみあひしが、こうばいけはしきいたやのうへ、引組ながらのきばより、大路へどうとおちけるはあやうかりける次第なり、すかさず兩人、起上り、ぬき合切むすびひじゆつをつくしてたゝかひける、よしかどいかゞしたりけん、びんはづれを切付られ、眼くらみてたゞよふを、すきをあらせず公時、首中

に打おとす、むくろをば四人の女郎、たゝみかけてうつたちは、のはきの風に白き尾花のおきてはふすにことならず、ずだ〳〵にぞ切たりける、渡邊やがて馳來り、朝敵卽時の誅ばつは、珍重めでたし〳〵と、四人の女郎召つれて、みたちをさしてぞあがりける、天晴けなげのはたらきやと貴賤上下安詫皆かんぜぬ者社無かりけれ

## 第六

「其後、たんばの國笹山に、髭黑の右大將道包公、大軍を以たてごもる、是に依頼光、ついとうしを蒙りて、四天王を引ぐし、ていへいすぐつて三萬よき、大手よりよせ給へば、同國更井の城主、平井の保正搦手より、す萬のせいにて押取巻時のこへをぞ上にける、城の內にも、かねてごしたる事なれば同く時をぞ合ける、其時よせての大將、駒しづ〳〵とあゆませ出、夫我國に有ながら、王命いちよくの輩を、誅ばつせよとのせんじをうけ、たゞのかづさの介、源の頼光、平いの太夫、藤原の保正、罷向て有ぞかし、はや〳〵出てかうさんあれと、のたまふこへを聞よりも、右大將道包、やぐらに上りざい取て、あれ追はらへと有ければ、雨ぢん互に入亂火花をちらして戰ける、こゝにかたきのぢん中より、さつた山の惡太郎、ししが谷の八龍丸、鐵棒をふりまはし、あたる所を幸にはらり〳〵と打立る、うすいの貞光、うらべの末竹、此由を遙にみて、いさぎよき働かな、手取にせんと欠出る、八龍さつた是をみて、通のぞむ所ぞと、鐵棒を押取のべ、みぢんになれとうつ所を、かいはづしむずと取、少も更に働かせず、二人の者ははがみをなし、ゑいや〳〵と引所を、一〳〵にけたをして、たかてこてにいましめ、けふの分捕、しすましたりと悦びてみかたのぢんへぞ引にける、髭黑今は是迄と、長刀かいこみ出給ふを、ぐんぜいすはやと取まくを、髭黑長刀押取のべはらり〳〵となぎたふす、貞光末たけ、是をみて、あまさじと左右より、押ならべてむずとくむ、髭黑本より大力、二人を手もなく取てふせ、首ねぢきらんとし給ふとき、平いの保正搦手より、城中へ忍び入り、うしろより欠來て、たぶさを取て引かへす、兩人すかさず起上つて

かしこへやがて打たふし、生取引立それよりも、はや打入れとげぢなせば、いさみすゝんでぐん兵共、城中へ切て入りなんなく城をぞのつ取ける、頼光喜悦限りなく、勝時作て夫よりも、髭黒を引立て都をさしてぞのぼりける、だいりには光源氏の御事を、諸卿こぞつて訴訟ある、是に依召かへされ、官位本領、本のごとくと有ければ、高明は有がたく、はつと冠を地に付て、御悦びは限りなし、かゝる所に頼光保正、右大將道包を、たかてこてにいしめて、御しらすに引すへ一〳〵にそうもん有る、引さがつて四天王禮ぎたゞしく相つめける、内よりのせんじには、道包がぶ道の段、評ずるにも及ばねば、日向のあがたへながすべし、此度の忠賞に、頼光にはかはちの國、保正には、たんばの國さゝ山を、更井の庄に相そへて給はる也、四天王の者共、いづれもけんじやう給はれば有がたし〳〵とだいりをたいしゆつなし給ふ千秋萬歳めでたしとて貴賤上下安詫皆仰がぬ者社なかりけれ

源氏六條通終

# 定家

## 第一

扨も、其後、我日の本に光りそふ、神八重垣の御歌より、みもすそ川の御ながれ、賤山がつも心をよせ、和歌におさまる此國の久しき、世々こそめでたけれ、爰に、ことばの院と申奉るは、和歌に御身を御ゆたね、七人の歌人をゑらひ、新古今をせんぜらる、中にも藤原の黄門定家は、わかんの才にくらからず、手跡は今に世の人の、ていかやうとてまなひける、かどうのめいてつなりければ、たうぎんの御歌の、御しはんを蒙りてけんだいに歌書を置、しづかになをり座し給ふ、主上をはじめ奉り、后宮の美夫人、近習ちくわの公卿達、ぶんだいに書をひかへ、かふりのこじをかたぶけて、謹て聞給ふ中にも、しよくし内親王と申奉るは、後白河の院、第三の皇女にて、一年加茂の、いつきの宮に立せ給ひしが、かんのりふじんやうきひも、おもてをそむく許なり、無双の容色成ければ、心をかけしあた人の、叶はぬしゆくねの口のさが、色にうき名を立ければ、御歸りおわしまし、此席につらなりて、歌書によねんをほうじつゝ、打かたふひてぞヲロシ「おわします、既に定家は書をひろげ、それ和歌のよみすがた、さま〴〵ならひありそ海、はまのまさごの數〳〵に、ことの葉つきぬ事ながら、定家が一字の題春は先、かすみ、うぐひす梅柳、イロ地わらびさくらにもゝやなしきゞす、ひばりになく蛙、すみれ山吹つゞし藤、夏にもなれは、あふひ草、まがきに白き卯の花や、はつ郭公五月雨に、あやめもわかぬ夕顔や、かやり火螢くいな蟬、いづみ扇に、秋來ては、おぎ萩、露にらんすゝき、月蘆雁に鹿や蟲、うづら鳴桐ふゆの季は、霜やあられに薄氷、みぞれや雪にかもたかの、埋火ふすましゐかけひ、すみかまなどの品〳〵を、姿やさしくたけ高く、心を深くあはれにも、またおもしろく、さくい有、詞に花をさかせつゝ、よみあふする事此道の、かんおうなるよしせんてつの、仰おかれし所なり、猶おくふかき心をば、重てしやくし候はんと、辨舌、きよくのべ給へば、をの〳〵、かんしん、淺からず、しづかに、席を本三重立給ふ、義式

のていこそヲロシ「ゆゝしけれ、それヲロシ「よりも定家は御次さして出給ふ、野わけのかた立出て、御袖を引とゞめ、につこと笑ひ此ほどの、心つくしの御返事、やう〳〵取て參りたり、よろこばせ給ふべし、御吉事にて侍らふと、玉づさをさし出す、ていかおぼへずおしいたゞき、あたりに人もあらざれば、忍びやかに見給ふに、中々、詞にあまりつゝ、あすの夜かならず大内の、はせのみだふに、さんけいし、わに口をならすべし、かならず是をあいづにて、しのび給へとかき給ふ、ていかうれしさかたしけなさ、ひとへに是はそのかたの、御取持による所、御禮申に言葉なし、かの方さまの御前は、只よき樣に夕暮の、くれのあいづを待ぞかし、かならず首尾のたがわぬやうに、たのみ入候ぞや、野わけ承りそのしゆびはみづからに、御まかせ候べし、去ながら大内に、人多き事なれば、人たがひもや覺つかなし、いかゞと申上ければ、定家は聞し召、然らばかくよ年もへぬ、いのる契りははつせ山と、かみの句を姫宮の、吟じさせ給ふべし、おのへのかねのよその夕暮と、下の句をつけ申さん、此歌かつてしる人なし、よく

よく此事姫宮へ、仰あげられ候へと、云かはしつゝ立わかれ、ひとりほゝゑみそゞろ事、つゝみ給へど悦ひの、色外に見る人も、三重みたちをさしてぞヲロシ「歸らるゝ、其比又、きんりほくめんの侍に、平の左近時國とて、好色しやしの惡しやうもの、るいにしたがふ郎等に、岩波龍左衞門なりたか、雲分飛龍之助早風とて、おとらぬ曲者兩人を、つねに前へよび出し、酒ゑんをなしてあそびしが、いつもこのめる大盃、すはいかさねてさしひかへ、今宵は我に大き成、仕合ついてありけるぞ、なんぢらもしるごとく、いつぞや加茂のくらべ馬、內親王にも御出有、御らんありける御こしの、みす心あり山おろし、さつとふきあげほのかにも、見ゑさせ給ふ御ようしよく、是はと思ひそめしより、袖のしぐれのたへまなく、手つぎをもとめいづかたへも、しのび御出有ならば、かならずしらせゑさせよと、しめし置たる方よりも、こよひ大りに立給ふ、はせのみだうへ御忍び、さんけい有よしつげ來る、我〳〵三人心を合せ、忍び待うけくべし、もしも承引なきならば、やにわに引立來るべし、かまへてそのぶん心得て、用

意せよと申つけ、今宵ぞおもふ新枕、われ一代の妻さだめ、ちんせんまふけまつべしと、いわひことふきそれよりも、二人の者と諸共に、三重やがて用意をチロシ「したりける、頃しも春の花盛、皆白たへに梅ならで、やみはあやなしさくら花、本地すがたまばゆく詠め過、空にちら〳〵、ちゝめける、ほしのかげさへ心うく、局の野わけ御供にて、今宵ぞ君に大内の、はせのみだうへ参りつゝ、今のゑにしの戀のしゆび、ねんごろに御きせい有、あいづのわに口てうてうと、うたせ給へばうしろより、物をもいはずいだきつく、局さてわとさし心得、とあるかたへに立忍ぶ、しんわうははづかしく、むねとゞろきてとりあへず、カゝルしめしあわせし上の句を、としもへぬ、いのる契りははつせ山、と詠じ給へど此男、とかふのいらへせざりけり、こはそも戀の人たがひと、袖ふりはなち逃げ給ふを、なさけなしとてすがりつく、猶ふりはなちにげたまふを、かたへに忍びし二人の郎等、一度にとび出姫君を、むたいにいだきとゞむれば、見へかくれに参りたる、定家のかうけん、大江の左衛門忠重、つゝと出て時國が、そくびをつかんで引たふし、すかさずうへにのりかゝる、雲分かけよりうへ成る男を、引かへさんとする所を、やさしきものゝしわざやと、上帯つかんで引よせて、刀を二人がくびにあて、扨おのれらはなにものぞ、しさいをかたれとおしつくる、龍左衛門聲を上げ、ややそれこそは我らがしう、今一人はわがほうゆう、しさい有事なれば、其名をあかさず様子もいはず、只そのまゝにおんびんに、二人共にこなたへわたせ、さなくば又此方にも、姫宮をがいするぞと、刀をむねにおしあつる、男聞てはがみをなし、ゑゝわれ幼少のときよりも、てきたいなせしやつばらを、一人としてそれがしが、たすけかへせし事なけれど、無念ながらもおのればら、命をたすけかへすべし、姫宮をこなたへわたせと、二人を取て引立て、兩方一所に近づきより、互に詞をかけかわし、双方へ取返し、立のかんとする所を、三人ぬきつれ打てかゝる、心得たりとうけながし、ハヤ三重ひじゆつとつくしてチロシ「たゝかひける、時國今はかなはじと、取てかへし逃たりけり、男いづくへのがさんと、二人を左右へ切拂、追かけ行を兩人は、太刀をなげすてむず

とくむ、元より男大力、二人がかいなをかいつかみ、二三十へんふり廻し、つかみしかいなをふりはなせば、まなこくらみてたゞよふを、けたおし一々縄をかけ、早御出と云ければ、定家姫宮御悦ひ、互にちよもの御ちきり、仰かわされそれよりも、大江の左衛門たゞしげが、あく人ばらをば生捕候、爰をばわれに御まかせ、局おんとも申されよと、姫宮くわんかうなしまいらせ、今ははや是迄と、二人の者をかいつかみ、中にさしあげやごゑをかけ、築地のそとへなげ出し、おゝけつこうなる有様と、から〳〵と打笑ひ、定家卿の御供して、やかたをさしてかへりける、大江のさへもんたゞしげを、あつぱれかう成はたらきと、貴賤上下押なへて、皆かんせぬものこそなかりけれ

## 第二

其後、平の左近時國は、ほう〳〵しゆく所に逃かへり、二人の者はいかゞぞや、もし此事のろけんせば、身の上いかゞ成べしと、あんじわづらふ所へ、二人の郎等なさけなく、したゝかにいましめられ、御前にかしこまる、時國おどろきかけ寄て、なわおしほどき小聲になり、様子をいかにととひければ、二人の者承り、くはしくかたりかくの段、めんぼくなふこそ候へと、さしうつふひてぞ居たりける、時國聞て、むねんに思ふはことはりなり、我もむねんに思へ共、此身を忍ふ事なれば、おんびんにしくはなし、主のためにかゝれる縄、まつたく恥にてはぢならず、扨又くだんの男めは、いか成ものにて有哉覧、さてしたゝなる大力や、つかまれたりしかたばねの、今にいたむと云ければ、飛龍之助申やう、姫宮出させ給ひし時、大江のさへもん忠重が、あく人共をば生捕たり、御かへりましませと、申あげ候なり、正しく是は藤原の、ていかゞこうけんたゞしげなり、しさい有てそれかしが、うけたまはり及びしなり、時國聞て、さては藤原の定家と、内しんわうわけ有て、みだうにて忍びあひたるな、ゑゝはら立やしよせんたゞ、戀の敵は定家なり、何とぞ手だてをめくらして、定家をなき身となし、夜前のむねんをさんじつゝ、又姫宮をもうばひとり、思ひのまゝに契る

べし、いかゞあらんと云ければ、龍左衞門しあんして、くつきやう一のけいりやくを、思ひ出し候と、ひそかにさゝやき云ければ、時國聞て打悦び、日本一の手だてぞと、飛龍之助にも云きかせ、誰〳〵といはんより、龍左衞門が弟の、岩波彌七は、忍びをゑしと聞て有、ひそかにたのみゑさせよかし、さもあらば其方をば、よきに取たてゑさすべし、いかにいかにと云ければ、龍左衞門承り、とかくは君の御ためなり、それがしよきにはからひて、本望とけさせ申べしと、互にしめしあわせつゝ、時國わそれよりも、三重攝政殿へと參りける、ヲロシ去ほとに其比又、せつしやうよしつね卿と申奉るは、たぐひなかりし歌人にて、さしも名高きていかにも、手を置給ふ御方なり、有時みなみおもてのみすたかく、ていしやうを打なかめ、歌をあんしておはします、かゝる所へ時國は、攝政つね〳〵むつましく、和歌の御會に召れつゝ、内外へだてずさんぜしゆへ、御前にまかり出、おちゑんにかしこまる、せつしやうよしつね御覽じて、珍らしや時國、何か世上にかわりたる、事もや有とおたづねある、時國うけたまはり、さればさまさまちんせつの事御ざあると、あらゆるうき世のまさな事、いとめづらかに咄しなし、興をもよほす折からに、ゑんのしたより鑓引さげ、大の男飛て出、攝政殿をつく所を、時國すかさずむんずとくみ、ろうせき有と呼はれば、御内の侍數十人、我も〳〵とおりかさなり、高手こてにいましめて、御前に引すゆる、御家臣、今河將監はるかた、たくみありとは露しらで、あつはれ時國ましまさすは、ゆゝしき君の御大事、さてもけなげの御はたらき、何をもつてか此おんを、ほどこし申候はんと、悦ふ事は限りなし、扨將監、めしうとに打むかひ、おのれいか成宿意によつて、君をうかゞひ申せしぞ、まつすぐに申べしと、はつたとにらんで申ける、かの男承り、さん候それがしは、ていかきやうへつね〳〵に、御出入仕る、早川源太と申て、家まづしき浪人者、定家ひそかに御めし有、當時歌道におゐてはそも、我にうへこす者なきに、やゝもすれば攝政に、よみおとるこそほいなけれ、何とそ日比の念比に、我に命をゑさせつゝ、攝政をうしなひなば、しそんは遊々しく、取立て得させんと、わりなく頼ませ給ふゆへ、かく

ぼうじやくのふるまひ、おそれ入候と、時國と顔見合、誠しやかにそ申ける、人〳〵おどろき、とかふの事も宣はず、時國おまへにすゝみ出、誰〳〵とても歌の道、しうじぬものは候はねど、かゝるよこしまふるまふ事、前代未聞の所なり、扨此段を、かみへうかゞひ給ひなば、當きんの御歌の、御師判にて候へば、事おんびんに成ぬべし、然らばのち〳〵御身のうへ、ゆゝしきあだにて候へば、そうもんなく此うへは、うつ手をむけられ候べし、幸かなやそれがしが、參りあひし事なれば、一方の責口をば、仰蒙り候はんと謹でそ申ける、攝政よしつね聞し召、其義にて有ならば、ごへんを頼み申とて、御勢百きそへらるゝ、しすましたりと時國は、手勢合て二百よき、定家やかたにおしよせて、二重三重に、おつとりまきハヤ三重時の聲をそ「上」にける、定家きやうのやかたは、思ひよらざる事なれば、うへを下へとかへしける、され共こうけん、大江の左衞門忠重は、もの〳〵ぐせよと下知をなし、かしこに立出大音あけ、何者なれば此やかたへ、おしよせて有けるぞ、其名をなのれと呼はつたり、時國駒をかけ出し、平の左近時國が、ちよくめいを蒙て、罷向て有ぞかし、ぢんじやうにはらをきれ、かいしやくせんと呼はりける、忠重きいて打笑ひ、何時國とや聞ふれぬ、北めんごときのしきじのれい、さつするに已めが、筋なきしゆくゑに定家を、ざんせしにうたがひなし、あれ打ちらせと下知なせば、兩方互に入みたれ、ハヤ三重軍は花をそ「ちらしける、軍ながばの事なるに、時國が方よりも、熊山五郎と名乘て出、さん〳〵に切たて、四方へはつとおつちらす、定家の方より、ふぢなわめのよろひきて、つかまぎ七郎と名乘て、大太刀まつかうにさしかざし、はしりかゝつて打つ太刀を、くま山さらりと請ながし、すそをはらへばおどりこへ、おがみ打にてうど切る、むさんやなくま山は、二つに成てうせにけり、七郎は打笑ひ、悦びいらんとせし所を、五郎がいとこ、木がらし平太平六、つゝと來て七郎が、もろすねをなぎければ、こはむねんとたをるゝを、甲平六やがて七郎が、首中に打おとし、定家の御内に、我と思はん者あらば、出て勝負をけつせよと、大音じやうに呼はつたり、ただしげ今は叶はじと、定家卿をば先立て、ひそにか

おとし奉り、心やすしと切て出、定家が後見に、大江の左衞門忠重なり、あまさじと打てかゝる、平太平六是をみて、ねがふ所の幸と、忠重を引つゝみ〳〵三重爰をせんとそ「戰ひける、され共たゝしげ事共せず平太がまつかう、唐竹わりにてうど切る、平六是はとつゝと入り、おしならべむずとくむ、忠重が是をみて、やさしやいとまとらせんと、よろひの上帶かいつかみ、ゑいやつとなげゝれば、みぢんに成てうせにけり、岩浪雲分兩人は、過つるいこんをさんせんと、ゑもの〳〵を引さげて、忠重に打てかゝる、たゝしげがきつと見て、いざ參らんと聲をかけ、そばにありける大木を、曳やつと引たふし、無二無三に打たつれば、岩波雲分叶はじと、取てかへし逃行を、いづく迄かのがさんとハヤ三重こくうむりやうに「追かくる、岩波雲分兩人は、とある石にけしとんで、二人一所にたふるゝを、おこしも立ずひた打に、力にまかせて打ければ、みぢんに成てぞうせにける、時國大きにはがみをなし、あれあますなうちとれと、しきつて下知をなしければ、大勢一度に打てかゝる、然所へ、位官たゝしき公卿の、さいはひ白あわはまだは五條の三位かりうなり、いさいの事を承り、これ迄來て有ぞかし、定家とはのがれぬ我、攝政殿よりしばしが內、申預り證人とし、御家人今川將監、はるかたを同道と、高聲にのたまへば、春方馬よりとびおりて、兩陣の中に入り、上意のおもむき相のぶる、春方も忠重も、いさむ人數をおしとゞめ、式禮なしてそれよりも、互にぢんをぞ引たりける、あつはれ時のちんじやとて、きせん上下おしなへて、皆かんせぬ、者こそなかりけれ

せつゝ、しさい有とて割て入り、双方をおしわけて、

## 第三

其後、姫宮はひとりふせやの床の內、さひしき枕をとふ月も、あわれと思へ、さりし夜の、イロ地はせのみだうのあふせをも、花のあらしや月の雲、チクリ立へたでつゝいたづらに、カールなるとの沖の濱ちどり、今わなくねを忍びかね、一首の歌に玉の緒の、たゆるチクリ許の玉つさに、イロ地ほのみしまゝのひとよきり、うきふししれど指そへて、さひしさまさ

るさよしまを、御前に召れつゝ、ひそかに仰ふくめられ、ふかくもいとふ人のさが、つゝむ心の小倉山、三重しぐれのちんへぞ「おくらるゝ、いたはしや定家卿、思はぬちんじにあいそめ川、かりう卿の、はからひにて、しばらく御身もつゝかなく、病氣と號し引こもり、はや姫君にあふ瀬をは、今はおたへのほしちかき、しぐれのちんに姫宮ふり、おくり給ひしひとよきり、御しきしを手にふれて、玉の緒よ、たへなばたへねとくりかへし、またおしかへしひたすらに、ぎんじなげかせ給ひける、御つかひに參りたる、小夜嶋勾當手をつねか、戀はわりなき物なれば、實どうりなる御なげき、何がし琴を仕らん、御氣はらしにあなたより、しんせられたる有竹を、琴にあはさせ御なぐさみ、いかゝと申上けゝれば、定家卿聞し召、いしくも申せし勾當な、さあらは一曲催して、少まきれんそれ〳〵と、御床に侍ひける、にしきの袋の內よりも、一よきりを取出し、音もすみやかにふき給へば、小夜嶋琴をしらへつゝ 三重しばしなくさみ上「給ひける、笠をめせ〳〵都のとのよ、さがはぬれとこ、芳野は色よ、それ〳〵時雨がふりてる、

戀の山がら濡たチクリ「すがたにさしかけさせかけ、君のかへもんもみちのながへ、笠に木の葉のとまりて戀の、さし笠手もたゆく、戀にはよわけ、ないしんわう、うき名をまゝと一筋に、かいやりなげの花小袖、ふりながチクリ〳〵とほそつくり、チクリ男色見せてつかみさし、むらさきぼうしこし羽織、二つ重ねの一つまへ、供のおのこは野わけのかた、うかれて出る取なりは、いつ見ならひてはしたなく、あづま言葉に此所、都にさしも名の高き、小倉の山の、しぐれのちん、しばらくやうすをうかゞひて、あない致し候はんと、とあるまがきに立そふて、しばしチクリたゝすみ給ひける、かくて糸竹ことおわり、ふりみふらずみ定めなき、しぐれの雲のたへまより、ほのかに月のかげさして、誰とはしらす少人の、ちんのあたりに見へければ、定家あやしく思し召、さしのぞき見給ふに、あてやかなりしやうしよくは、ぎんかんはんりの秋の月、すかたをねたんて、五更のきりにやしつむべき、定家覺へず御よそほひ、何にたとへんもろこしの、そうのかうしのいつゝしく、びしかゝ色や、きくにゑむ、周のぢどうの其かほばせ、

漢のみかどのそてをたち、けんび少年、はちすにまがふりくろうや、歌もたへなるりゑんねん、女にて、見まくほしきと、むらさき式部のかゝれけん、光る源氏のおさなかほ、つぼめる花に、匂ひふくみてうつくしと、たとへたりけんなりひらの、ちごのさかりと申共、カ、ル是にはいかてまさるべきと、ほめさせ給へは少人は、こはかたじけなき御縦、折境立よるしぐれのゑん、ゆるさせ給はゝそのちんへ、すいさんいたし只今の、御禮申あげたきと、仰けれは定家卿、げに〳〵一じゆ一河も皆、たしやうのゑんと承る、時雨もはるゝ軒端の月、何かはくるしふ侍らはん、こなたへ御入候へと、はぎの戸をおしひらき、出させ給へば姫宮は、羽織こし物なげ捨て、定家きやうにいだきつき、人の心を忍ふ山、かくすがたをも引かへて、女の身のはしたなく、はる〳〵道をしのぎつゝ、是迄參る心さし、いか許なるしんじつと、おほし召れ候へと、につこと笑ひましませは、定家ゆめの心地して、いつわりのなき世なりせは神な月、たが誠より時雨そめけん、と詠じ給ひて御手を取、打つれちんへぞ上らるゝ、去ほどに野わけは、てうしさかづき持出て、こよひぞ初の長枕、長きちぎりの御ことぶき、御取あげましませと、姫宮に上ければ、姫宮盃御はじめ、ていかきやうへさし給へは、押いたゝきて三ごんくみ、姫宮に參らせて、さいつさゝれつ思ふが中、よそにイロチクリもらさぬ御盃、ねたむ心の色ほかに、野分のかたは定家の、ひかへまします盃を、中にてうばい、おしいたゝき、御まへを立けれは、人〳〵御目を見合て、につこと笑はせ給ひける、御下心ぞはつかしき、姫宮定家によりそふて、かずの見へける小色紙の、イロ地うるわしかりける御すみ色、殿ににせたるやさしさよ、定家これは此人〳〵、一代一首の名歌を、ゑらみたるにて候なり、御なぐさみにみ心に、覺し召れんそのたけを、判をあそばしおわしませ、姫みやいづれも吟じつゝ、及ばぬことに、侍れ共、是こそ花實そうたいの、めでたき歌共申べしと、しばしかんじてこはいかに、みづからが君思ふ、忍ふ心にたへかねし、此玉の緒のとうさをば、此中におかれん事、はゝかり有こと仰ける、ていかきやう聞し召、されば此歌みこゝろの、見ればみるほどふかふして、あはれいやまし覺へし

ゆへ、これ後の世の忍ぶこひ、詠する手本なるべきと、かきいれ申候と、互に道ある歌の時宜、やさしかりける事共なり、されば此御しきしを、小倉しきしと申つゝ、今の世ゆゝしきてうほうにて、百人一首と申せしも、是をあつめしさうしなり、定家卿は姫宮に、花めづらしき色の床、あだ夜をふかしせんなしと、袖引つれてねやの内、あかぬ契りの御むつ事、つきぬ、ゑにしぞわりなけれ、あわぬ夜を、あふ夜の數と思ふ共さてもやかなしかるへきに、戀をしらざるかねつきの、はや明がたを音づれて、なみだはら〳〵とりみだし、打かさねたるきぬ〳〵を、引はなちつゝ人々は、又のよる瀬を云かはし、なみだをそふるたもとより、玉づさほとゝおちければ、姫宮あやしくひろひとり、燈にひらき見給ふに、いはんかたなふかきくどき、ちつかに及ぶにし木々を、數ならずとて捨てらるゝは、あまりといへばなさけなし、色あるいなせなきならば、とても君ゆへ死する身を、うらみのふちにしづみつゝ、一念の惡鬼と成、追付おもひしらせんと、ゆびくい切てあけにそめ、おくりたりける玉づさなり、姫宮はおそろしく、是見給へとのたまへば、定家は御覽じて、此上はせひもなし、何をかかくし申べし、御供に參りたる、野わけたび〳〵それがしに、ふみをつかはし候へ共、終に返事もせざりしが、又恨ての此ふみを、見るも中〳〵いまはしと、ともしにさしあてやき給へば、たちまちめう火もへ出て、煙の内にふしぎやな、色青さめたる女性のすこ〳〵と立顯れて、あらうらめしや君こふる、涙のふちわさうかいも、たとへばなをも淺間山、くゆるけふりの思ひをば、しらせ申せし玉章を、いかで煙となし給ふ、うらめしや恨めしと、いかれるけしきに定家の、御そばに寄けるを、枕に有し御太刀にて、拂ひ給へばそのすがた、たちまちきへて御つぎにて、わつとさけぶこゑぞせる、姫宮ていか諸共に、おどろきたち出御覽あれば、野分の方はあけにそみ、夢打さましこはいかにと、とほうにくれてぞいたりける、姫宮はおそろしや、主の思ひをねとらんとて、人の色をもせいせん身の、うしろくらき心ゆへ、忽むくふ主のばち、今よりしては我まへに、出る事はかなふまじ、かんだうなりといからるゝ、野わけの方は聞まいらせ、こはなさ

けなし姫宮さま、今宵のふみの御はら立、それゆへにこそふしたりし、みつからをやいばにかけ、またあきたらで御かんどう、我人まよふ戀の山、高きひくきも替りなし、御身のうへをも思し召、ふびんとこそはあるべきに、つれなしやうらめしやと、聲をあげてそなきにける、定家はあいに立、かゝるうへは何事も、論じて今はせんもなし、其手をおひしはしさい有、まつたくもつて姫宮の、あそばしたるにてあらさるなり、追つてやうすをあかすべし、まづ大内へは叶ふまじ、是よりゆかりのかたに行、いれうをくはへ候べし、姫宮の御まへをば、よきに取なし申さんと、さま〴〵いさめそれよりも、下部少々さしそへられ、乘物に忍ばせて、ゆかりの方へぞ、送られける、かゝる所に女房たち、あまた打つれ參りつゝ、御約束のときたがひ、くはんぎよならせましまさねば、御首尾のほど覺つかなく、忍び參りて候なり、はや御出と申にぞ、名殘の袖を引わかれ、宮はかちゝをくわんかうある、定家は見おくりて、さらは〳〵の御聲も、次第にとをくよこ雲の、立歸りて露しぐれ、時雨のちんに只ひとり、さびしきねやのうつり香を、かこちわひてぞあかされける、まことにわりなき妹背やとて、貴賤上下おしなべて、皆かんせぬ、ものこそなかりけれ

## 第四

そのゝち、五條の三位家隆卿、ひそかにさがへ、御こし有、ていかにたいめんまし〳〵て、何とそ貴卿と攝政の、御中をわだんなし、事内々にておさめんと、過し一戰大内へ、ふかくおんみつなす所に、平の左近時國、さへぎつてそうもんし、事きはまつて早討てに、時國是へよするなり、時國がふるまひ、何共がてん參らねば、爰にさまよひ討死して、人口にかゝらんより、一まづ爰を御立のき、時節と待て、とがなきむね、申わけ時國を、八つさきにもはからふべし、幸御兄じやくれんほうし、するがの國、よじ川にましませば、是迄忍び御下り、一左右を待給へ、それがし折を見合て、追つけ御左右仕らん、はや〳〵忠重御供せよ、ときこそうつれとく〳〵と、いさめ給へば定家卿、御いとまごひなされつゝ、し

うぐ〳〵二人三重それよりも、ふじ川さしてそ「下らるる、坂わてる〳〵鈴なりて、こまもしづかにのりかけの、下はからあやから嶋の、ふとんかさねてうづたかく、姿やつして商人の、あづまにおもむくふせいにて、大江の左衛門跡につき、馬子のさまもしほらしき、所ならひか女のまご、男と見せてほうかふり、かひ〳〵しくもすそくゝり、名所きうせきかたりつゝ、さますねふりの夢にさへ、すがたたちそふかの方に、いつか、歸京のちよくをうけ、二たびめぐり逢坂の、關もとゝめよ是や此、行も歸るも足とめて、詠め過てふ森の内、是せみ丸のわらやの床、延喜第四のわうじにて、いともめでたふまします身の、さとりの御目をとぢ給ひ、心をすまして此所に、びわをたんじておはせしに、はくがの三位といひける人、風のふく日も雨の夜も、三とせ通ひて三曲を、つたへたりけんきうせさと、馬子はおしへ奉る、さだいへたれも世の中は、むかしにけふもあすか川、せたの長橋打はれて、雲非に高きひゑい山、坂もと山王三重八わうじ、ふもとのこすいへう〳〵と、中にさひしき、松一木、左衛門是は過し夏、山王のさいれいに、舟にて是を見にけらし、唐崎の一つ松、志賀の浦部の釣小船、みぎわにあさる白鷺の、のぞく柳のしなぶゑに、つゝくりとしてかゞみ山、やつれ姿のまはゆくも、笠ついかたむけ、通る馬子がしほらしく、ひらの伊吹の、さつき雨、ばらん〳〵と、ふる音は、のきの玉水ちる木の葉、あれてやさしき板ひさし、窓のかけ戸も、夜あらしに、ふわの關もりとゞむなよ、かく勅かんの身の行衛、何となるみの鹽干がた、蘆のかりねのつかのまも、わすれてこそはありはらの、きつゝなれにしつましあれは、はるはるきぬる旅おしと、詠じたりけん八橋と、おしへ申せば我とても、同じ思ひを三河國、是より馬ををり給ふ、馬子はそばにしとゝより、いだきおろし參らせて、思ひありげにせきめんす、さたいへあやしく思せしが、さりげなくして左衛門と、名所〳〵を詠め歌、よむことの葉は數〳〵の、濱名の橋を打渡り、かゝるてうとのうさつらさ、かひなき命ながらへて三重池田の里にぞ着給ふ、かくて御宿召れつゝ、御まへに馬子をめし、誠に遠き都より、名所きうせき道すがら、語りなぐさめ參るでう、しんべう成事

共と、品々を下されて、御いとまたびけれは、馬子はとかふのいらへなく、涙にくれていたりしが、御袖にすがりつき、こはなさけなしみづからは、野分の前がかへ姿、ふかくも君をあこがれて、思ひきれ共ぼんのうの、つよききづなにつなぐ犬、さがにて御手にかゝりし時、とにもいかにも成ならは、我かゝる思ひは侍らはし、情なしとよ姫宮の、からきいとまを給はりて、うきねをなきてゐたりしに、君さがを落給ふと、風の便に承り、たよらん爲に身をやつし、かゝるばしやくとおそろしき、ならはぬ馬の口を取、屏風の繪にて見覺へし、名所きうせき宿〳〵をつかるゝ事も打わすれ、なぐさめ申はる〳〵と、是迄御供申事、ひとへに君の御情に、あひ參らせたふさまさまと、心をくだくかひもなく、歸れとは恨めしや、今此時にうき思ひ、はらさでいつをごすへきぞ、迚も叶はぬ物ならは、舌くい切てきへ〳〵と、一念の惡鬼となり、此世のみかは生々世々、くるり〳〵とつけめぐり、本望とげでおくべきかと、いかれるおもてのすさまじく、泪をながしさしうつふき、わなわなふるふてゐたりける、定家與さめて、すかさばやとしあん有、さほどわりなき心底を、いかでむになしはつべきぞ、去なから今日は、心にねんずる願あれば、あすの夜はかならずしも、互の下ひほ打とけて、思ひをかたり申べし、さのみうらむる事なかれと、しとゝうしろを打給ひ、今にも忠重來りては、さつする所もいかゞなり、まづ〳〵やすみ候へと、につこと笑ひそれよりも、ひとまに御入ましませは、女心のはかなさは、あすのよるせをたのみつつ、こよひばかりのかり枕、一夜を千夜の心ちして、とあるかたへにふしにけり、かくて定家、左衞門をひそかにめし、右の次第を語らせ給へは、忠重あるしを近付て、かやう〳〵とさゝやき、跡をば賴むと云捨て、しう〳〵二人忍び出、ふじ川さしてぞ急がるゝ、しばらく有て、野わけのかた、定家の一間にゆき、屏風をへだて申やう、夜あけがらすのこゑ立て、おちこち人もおとすなり、御したくもやとうかゞへど、御いらへあらざれは、野わけふしぎやこはいかにと、屏風をひらき見てあれば、定家卿はましまさず、是はと思ひ立出て、忠重がふしどを見、扨はたはかり捨置て、落させ給ふと心つき、ていしゆを呼

て人〳〵は、いづかたへそと問ければ、ていしゆさあらぬふぜいして、人〳〵樣の御事は、いさゝかぞんじ候はずと、おどろくていにて云ければ、女聞て腹をたて、さては、汝も一身よな、ゑゝ恨めしやとはがみをなし、あるじをとつておしすくめ、落給ふはいづくぞや、まつすぐに申べし、少も僞る物ならば、うきめを見せんといかりをなし、けしきかわつて見へければ、ていしゆかなしみ手を合、あつまの方へ御通り、我をばゆるし給はれと、ふるひ〳〵申けり、女聞て打うなづき、ていしゆをかしこへかつはとなけ、やゝおろか也いかに君、いづくへ逆行給ふ共、いかで其儘置べきそ、天はひゞさうひさう天、地は大かいならくのそこ、むけんやうちん、八萬ちごくのそこ迄も、おかけおつつめわがうらみ、いかではらさでおくべきと、髮空樣（そらさま）になる神の、黑雲いなづま地をふるひ、大風こばくを吹たふし、山河草木しんどうして、跡をもとめて追かくるは、すさまじゃ三重かりけるしだいなり、かなやの宿にて、人々わ跡をはるかに見給ふに、いつく迄もと呼はる聲、山彦にこたへつゝ、まぢかくおつかけ來るをみて、大江の左衞門もとよりも、すいれんの達者なり、君を肩に引かけて、東國一の大井川、やす〳〵とおよぎこし、君をば在家にかくし置、道につゝ立ことのやう、しばらく窺ひいたりけり、女いかれるめんしよくにて、すかさず追かけ川ぎしにつゝ立、いづくを越すべきと、爰よ、かしこと見まわせど、日本無双の大河と云、折ふしみかさまさつて、瀨のはやき事さながらに、三つ羽のそ矢をゐることく、こしとどまつてあらされは、身をもだへつゝ川きしを、かなたこなたとめぐりしが、今はたまらず飛入て、さかまく水をかき立〳〵、一念の蛇身と成、ざんじに川を打上り、忠重を、目にかけて、引さきすてんと飛かかるを、てうどきればゆん手へくゝり、しさつて拂へばめてへぬけ、かげろう稻妻水の月、神通ふむるいのじや身にて、さうなふうつべきやうもなし、忠重は心中に、なむ八まん大ぼさつと、きせいをなしてはつしと切る、きられてひるむをかけよつて、指通し〳〵、さん〴〵に切ちらし、大井川になげ入て、扨もあやうしわが君樣、先〳〵しおふせ候と、君をうしろにおひまいらせ、忠義の旅をするがなる、ふ

じ川さしていそぎける、彼忠重がそのありさまを、きせん上下おしなべて、皆かんぜぬ、ものこそなかりけれ

## 第五

其後、藤原の定家卿、時國がざんげんにて、おかせるつみもなき御身、勅かんを蒙りて、無念の山はふじ川の、りうほうじと申せしは、御れんしじやくれんの、みてらにてありければ、かくて爰に御入り有り、月日を送らせ給ひける、有時定家、忠重に宣ふは、おもへば野わけがしうしんも、心にかゝりおそろしや、此事れんしの事なれば、我ちき〳〵には云かたし、なんじじやくれんに語りつゝ、重てせうげなき樣に、はからふべしと仰ありケクリ一間に、御入ましませばたゞしげはじやくれんの、御前に罷出、右の段々物かたりし、万事は頼み奉ると、謹て申ける、じやくれんは聞し召、げにおそろしきしうじやくかな、かゝる事には一切の、女人成佛とくだつの、法花どくじゆにしくはなし、然らば千部をはじめんと、じげ僧御弟子に仰付、扨又番の寺僧を召、明日千部のはじめなり、定て參詣多からん、しさいあれば此たびは、女人はかたく門内に、いるゝ事きんせいと、仰付られそれよりも、三重頓て用意と上聞へける、比しも文月、中半にて、本地なき玉鋪りおちこちに、うかれさまよふ折からに、女性一人、かりもん近く立寄て、もの申さんと有ければ、けいごの法師是を聞、何事やらんとこたへけり、女是は此邊の、白拍子にて侍ふなり、たゝもさへ、女は五障三從の、つみふかく侍るよし、ましてながれの川竹の、一夜許りの手枕に、人の思ひを身にうけて、ざいごうふかき此身なり、せめては近く御經の、み聲を成共耳にふれ、佛果のゑん共なしたふ候、哀たゞけちゑんに、此門入て給はれかし、さもあらばみづからが、年比なれし舞の袖、おもしろふかなでつゝ、御なぐさみを申べし、ひとへにたのみ奉ると、打しほれてぞ申ける、若法師共是を聞、こは珍敷見物ぞや、何とくるしからずんば、一かなで所望して、ひとり計りは入もせよ、いかにも是はよからんと、かしらをふつて悦べば、老僧聞てそこつなり、かく善根の所へは、

寸善尺魔のせうげ有、其上きびしき御いましめ、叶ふまじとぞせいしける、けつきさかんの若法師、耳にも更に聞いれず、しさいな者には舞見せな、苦るしからず我〳〵が、いれておがませゑさすべし、かつこを打て一さしまへ、さいわひ定家此間、御もふきにてましませば、御慰に成もやせん、御目にかけんとそれよりも、かくと申せばさだ家卿、忠重を御供にて、みだうのゑんに御出有、女はゑぼしをかりにきて、三重既に拍子をすゝめける、打ならす、かつこの蒔繪はふし川の、浪のしらへや風のさゝら、とんと打てこきりこと、袖をかざして、曲ばちの、あやとる品のうきしづみ、柳のこしのたよ〳〵と、しなふ手品に、するさゝら、さら〳〵さつと、數〳〵に手をつくしてふ百千鳥、聲ほのかにも、のどか成、春の詠めは花計り、花の外には松計り、松を時雨の染かねて、ひとりこがるゝ紅葉はの色にそみけり、白露を、何ぞととはゞ消し身の、歸らぬはいにしへ、とまらぬわ今のしうしん、三重戀風みだすあま雲にとゞろ〳〵と鳴神の、拍子をそろへ品もよく、ふりくる雨は、さら〳〵と、さゝの小笹の竹のさゝら、うきふし〳〵のよゝことに、思ひは、ふかき川浪の、もとよりかつこは、波の音、〳〵よせては、きしを、どうど打、かのきしにさすのりの、舟歌舞の、ほさつの舞の袖さゝらも、チクリかつこも、ふへひちりきも、みなごくらくのあそびぞと、たう〳〵思ひ聞物を、ほんのふぼたい、もと一つ、雪や氷とへだつれど、万法一如實相の、みのりの庭へどう〳〵〳〵、かつこをならしさら〳〵と、さゝらよりなを手をもする物を、狂言ながらのりの道、ぼたいの門にさりとては、入させ給へ御僧と、打しほれてぞかこちける、かくて舞見し若法師、此上はこなたへと、門をひらいて入にけり、女性は悦び庭に入り、定家卿や忠重を、うらめし貌に打ながめ、君に心をくれ竹の、世のうきふしになきしづみし、野分がおんりやう、是迄あらはれ來りたり、むねのほむらのいたづらに、きへなん事もしら雪の、命の内にせひともと、思ひしものを情なや、あれなる大江の左衞門に、切すてられてしうじやくの、いやまし殘り大井川、涙にしづむ恨の數、いで〳〵思ひしらせんと、ひらりと上へ飛あがり、左衞門を目かけつゝ、杖ふり上てうた

んとす、主從刀に手をかくる、じやくれん驚きはし
り出、是はかね〳〵聞及し、野わけとやらんが死靈
かや、それ五たい五りんはかり物なり、今汝、しき
たいをはなれつゝ、しうじやくのこる、くうきとし
て、たとへ汝がしきよくの、心に定家したがふ共、
いか成たいにて契るべし、もはや執心はなすべし、
おろかなりとぞしめさるゝ、死れう聞て、我色體を
具足して、契らん事を思ひしに、むなしく大江の手
にかゝる、ひとへに、君のつれなきゆへ、しよせん
君を取殺し、おなじくうきとなし申、長きめいどに
ちぎらんため、むかひに是迄來りたり、そこ除き給
へと飛かゝれば、有がたや内陣より、光りをはなち
給へば、おんれう爰にたまりかね、ていしやうに飛
おりて、かなたこなたとかけまわり、あらたへがた
や恨めしや、此度こそはむなしく共、終には本望達
せんと、云聲しゆろうにひゞきつゝ、りうづに手をか
けとぶとぞ見へしか、引かついで八ヶ三重かねの内に
そかくれける、じやくれん此よし御覽じて、たとへ
いか成惡靈なり共、行者の法力つくべきかと、みな
一同に聲を上、いらたかじゆずをおしもんで、東方
に、ごうざんせ明王、南方に、ぐんたりやしや、西
方に大ゐとく、北方こんがうやしや明王、中わう大
日大しやうふどう、うごくかうごかぬかさつくの、
なまくさまんだばさらだ、せんだまかろしやな、そ
わたやうんたらたゝかんまん、ちやうがせつしやとく
大ちろ、ちが、しんしやそくしん成佛と、今の地身
をいのる上は、一念毒蛇のうらみのするぞ、何有明の
つきかねこそ、すわ〳〵うごくぞいのれたゞ、ひけ
やてん手に千じゆのたらに、ふどうのじくのけ明王
そんたい、力を合てたひ給へとて、かんたんくだき
いのりけり、いのりいのられつかねど、此かねひゞ
きわたつて、ひかねど此かね、おどるとぞ見へし、
ほどなくしゆろうへ引上たり、あれ見よじやたいは
あらはれたり、きんせい東方せうりう清淨、きんせ
い西方びやくたいびやくりう、きんせい中わうわう
たいわうりう、一だい三千大せんせかひのごうじや
のりうわう、あいみんのうじゆ、あいみんしきんの、
みぎんなれは、いづくに大じやのあるへきぞと、い
のり、いのられかつはとまろぶが、又おき上て忽に、
かねにむかつてつくいきは、めう火と成て其身をや

く、猶せめつけてほけきやうの、八の巻を大おん上げ、よみかけ〳〵打給へば、ふしぎや二つのつのおちて、おんれうすなはち三重佛果をえて、天上するこそ有難き、實もたへなる、法力にて、則おんれう成佛し、定家卿もつゝかなし、げに佛法の御ねとく、有がたかりける次第とて、貴賤上下おしなへて、皆かんせぬ、者こそなかりけれ

## 第六

其後、五條の三位家隆卿、とうのくわんばく重定へ、ていかのとがのなき旨を、きんりへ召れとう人と、對決の御事を、願ひ上させたまひつゝ、じやくれん定家諸共に、忍びて都へ呼むかへ、ないぎ評定有所へ、侍一人罷出、岩波彌七と申者、御門外へはせ參りじき〳〵に、申上度事有て、參上いたし候よし、申上候が、いかゞとうかゞひ奉れば、かりう卿聞召、何さましさい有べしと、人々をばおくに入、それそれと有ければ、くだんの男を召出す、かりう卿御らんじて、おこといかなる者成ぞと、御尋有ければ、男かうべを地につけて、さん候それがしは、平の左近、時國が郎等に、岩波彌七と、申者にて御座候、おそれながらと一通を、御前にさし上る、かりう取上、御覽有、御喜悦はなはだ淺からず、重てきんりせんぎの節、しいしゆを殘さずのぶべきと、きびしくしゆごし置給ふ、かゝる所へ、藏人來りつゝ、關白とうの重定より、來る十日きんりにて、御評定有間、ていか卿をともないて、急ぎさんだい有べき旨、仰出され候と、いさい相のべ歸りけり、かくてかりうていか卿、じやくれんほうしにたいめん有、右の次第を仰あり、三重既に用意をなされける定る日にも成しかば、三公くぎやう諸司八庄、八座七辨内外のりやう、北面の武士迄も、かいがだうじやうみちみちて、いぎをたゞしてなみ居たり、左のかたには攝政よしつね、はるか引さがつて、平の左近時國、右の方には三位のかりう、定家を御友なひ、いぎをただしくちやくざある、御しらすには、攝政よしつねのこうけん、今川將監春方、ていか卿の御家臣、大江の左衞門忠重、左右にわかつてかしこまる、時に關白しげさだ卿、双方にむかはせ給ひ、申上べき事

共を、はやとく奏し給へと有、攝政よしつね承り、いかに定家、いか成宿意有ければ、我やかたに家人を忍ばせ、我を討んとはかられしぞ、定家は聞し召、まつたくさやうのかんきよく、さら〳〵以て覺へなし、せうこばし候か、攝政はおし返し、せうこそ候へと、平の左近を召出され、其時の有樣を、申べしと有しかは、時國まゆにしわをよせ、なふいかに定家殿、あらそひ給ふとあらそはせし、貴公の家人をしのばせて、もつたいなくもせつしやうを、うちとらんとなしけるを、折ふしそれがし有合、生取ごくやにおしこめおく、あつはれ時國ありあはずは、貴卿の本意たるべきに、さこそほいなふ覺されんと、あさ笑ふてぞ申ける、其時にかりう卿、とかくの論はむやくなり、せんずる所其めしうど、出して實否をたゞされよ、幸かなやこなたにも、たゞしきせうこ候なり、それ忠重と有ければ、畏て候と、くだんの男を召出す、よしつね卿も時國も、あきれてとかふの詞なし、かりう仰けるは、いかに彌七、なんぢわがやへかけこみて、さし出したる一通の、其趣を御前にて、つまびらかに申べしと、さて關白に向はせ給ひ、此度の次第、此者に御尋、事明白に御たゞし、有がたかるべく候と、謹てぞ申さるゝ、くわんばくは聞し召、いかにおのこ事のやう、まつすぐに申べし、少も僞る物ならば、がうごんにかくべきなり、ありやうに申なば、命をたすけえさすべし、男承り、さん候それがしは、あれなる平の左近時國の郎等、岩波龍左衞門が弟、岩波彌七と申者にて御座候、されはあれなる時國どの、定家卿にいしゐ有て、某をまねきつゝ、汝は忍びをゑしときく、何とぞひそかに、攝政殿へ忍び入、よき折からによしつねを、打申てもうたず共、事のせんぎあらん時、定家が家人に、早川源太と名のりつゝ、主にて候定家、攝政殿をいかにもして、うしない申せと頼れて、かくの通りと僞りて、定家をなき身となすならば、妻子をゆゆしく取立んと、かたくけいやく有し故、主のために二つなき、命を捨てそれがしは、きびしきごくやにおし入られ、扨こそ手だてしおふせて、定家卿をはちくてんさせ、本望をとげ給へば、けいやくのそのごとく、殘し置たる妻子共、いかならんおんしやうにも、預るべき身をさはなくて女は口のさがなき

者、おさなきものはするゝの、身のあだなりと情なく、おやこ共にさしころし、あまつさへそれがしを、ごくやより引出し、うしなはんとしたまふゆへ、主君ながらもつらければ、やうゝそこをのがれ出、かりう卿のやかたに行、右の段々申上げ、かくの通りに候なり、重ざいなる我なれば、ともかくも御はからい、然べく候と詞を放て、申ける、時國今はかなはじと、逆行んとせし所を、忠重春方つゝとより、左右のかいなをねぢすくめ、御しらすに引すゆる、みかど大きにげきりん有、前代未聞のくせものかな、心のまゝにはからへと、定家に下さるゝ、また岩波彌七は、洛中を引渡し、追拂へとのりんげんなり、まことにちんがふとく故、とがなき定家つみせし事、はなはだ恥る所なり、そのせうとして大和國にて、三千町を給はると、やがてりんしを下さるゝ、定家は、ありかたしゝと、御前を立給ふ、それより兩家むつまじく、ゆたかにさかへ給ひけり、千秋萬歲めてたしとて、貴賤上下おしなへて、皆かんぜぬものこそなかりけれ

新道成寺卷終

# 三世二河白道

## 第一

扨も其後、御存知の者、誰かあると召るれば、太郎くはんじや是みつと、次郎くはんじやつぐしげが、御まへにかしこまる、御機嫌はなはだうるはしく、われうきだの氏族とし、浮田の左金吾時世とて、人にも少々白川の、長者と呼れいへとみて、萬寶けんそく何事も、心にまかせぬ事もなく、弓馬は本より家の所作、文才詩歌糸竹も、つたなからざる器量にて、心にかなふ事もなく、ひとりふせやに、ほと〳〵ぎす、なくひところに、あくるよを、あかしかねたる、床のうち、すこしは哀とおもひなば、地兼て申せし望みの色やあ、ゆだんはあらじしていかに、見たてつるかと有ければ、太郎冠者承り、大かたならぬ御望み、兩人心をつくしつゝ、隨分尋ね候へ共、中々及ぶ色もなし、さいはいかなや明日は、毎年ぎおんのさいれいなり、とひ遠境の男女迄、つとひあつまり候也、見物ながら御出あり、御見たてましまさば、御心に叶へる色、などかなふては候はん、あゝ此義いかゞとうかゝへば、次郎くはんじやも一同に、是はいみじきしあんなり、くはんくはつに出立て、然るべしと申上れば、本より色にうきだの時世、ゑつぼに入てさりとては、能こそ申せしつぐしげとカ、ル末廣にて打たゝき、明なば出んめん〳〵も、したくいたせとそれよりも三重奥をさしてそ「入給ふ、比は皆月、中の四日のぎをんのゑ、見物きせんみな渡る、おほちにらちゆひ、さじきかまへさま〳〵の、内まくもうせんみすきちやう、風のまに〳〵ほのめかす、らんじやのかほり、色をんないとゞ心も、うきだのさきんご、當世風のだて羽織、ふるやくはんくはつ、長かたな、雪のかんば、せしゆすのびん、是みつつぐしげ御供の、下部のふうも色めきて、弓手やめての桟敷に、尋る色の品姿、ありやなしやと都の町、きをつけ通らせ給ひしをカ、ルかいまみたりし女皆、したはぬ者こそなかりけれ、地色はあやなや名につれしカ、ル錦の小路の中ほどに、女中のさじきと打見へて、みすかけしとみしめやかに、打見ゆかしきさゝめごとカ、ル風ほのめかす隙もやと、しば

しとゞまりさきんごは、ふりあふのけばうへよりも、さしくし一つをちかゝる、いそぎ取上ケ見給ふに、さもぢんじやうなるべつかうを、みがきすかしてしほらしく、金銀さんごにかざりつゝカゝル哀世に、心にかなふ色もかな、月と花とを、ともに詠んと、さもいつくしき筆まきへ、同じおもひの歌もよう、此主心にくふしてカゝルひたすら見まくほしけれは、詠め入てぞおはしける、内よりやさしきめのわらは、いそぎ立出其御くし、姫君さまの御をとし、こなたへ給はり候へと、いと小さかしく云ければ、さきんごにつこと打笑ひ、小ぢよはしらずや櫛などは、落せし主へぢき〳〵に、手つからかへんさほうなり、人づてにては叶はじと、仰ければ桟敷よりカゝル又一やうの女のわらは、いそぎ参りて其御かた、くるしからず御さじきへ、伴ひ申せと姫御前の、仰にて候へは、御通りましませと、申上ればさきんごは、是は當座のたはふれなり、上郎方の御さじきへ爭すいさん仕らん、此くし御あげ候へと、さしだし給ふ御手をひき、むたいにさじきへともなへばカゝルていしゆも出て御供を三重おくのひとまへしやうしける、姫君打ゑみ、くるしからずゆる〳〵と、見物まし〳〵侍らへと、にほやかなりしもゝのこびカゝル色好の左金吾も、心うごきてめかれせず、詠めとれてぞをはします、又姫君も男色のカゝルにのかに見しは中々に、物の數かは是こそは、年月ねがふ色すがた、殿とも見めと戀衣カゝルしのぶのみたれ限りなく、人目のせきを何とぞし、こゝろを通さんはかりこと、ちぢにあんじて姫君は、井つゞと云し名香を、地ひとりこがるゝ芝船の、たきしめしつゝみづからがカゝル心ざしとて出さるゝ、金吾は君が、ことのはの、面白く押いたゞき、六十二種の名香の、品々多き其中に、ねづゝはいかにときくうちに、あんじあたりていにしへのカゝル戀くらべたる、ふりわけかみ、われならずして、誰か又あぐべきとは、有がたしと、れんりといへる名香を、かたじけなさの印ぞと、つがせ給へは姫君は、しばらく聞し召れつゝ、是やうきひとげんそうの、つねにちがへるさゝめごと、君みづからが、其中をれんりのきとは、扨は戀カゝルじやうじゆしたりと人々は、悦びたまふぞ、やごとなき、時に姫の御めのと、石部の藤内罷出、是に候姫こそ

は、たが袖と申つゝ、禁中の上北面、齋藤左衞門よしひろがひとり姫、幼少にて父母にをくれ、おぢ兵衞の尉やしなひたて、定房方に能ある、某きみを見申に、浮田の左金吾時世公、かね〳〵しゆくん兵へのせう、望み申せしむこかねの、けふのぎおんの引合、めでたき折に候へは、ふかきいもせの御ちけいやく、御盃をとく〳〵とチクリすゝめ申せばさきん五は、是は幸ひよき折から、けふしも御目にかゝる事、深きえにしに候と、悦ひ給ふは限りなし、すはや榊の見ゆるぞと、人立さはぐに人々は、いざや諸共みすをろし、見物せんにそれ〳〵と、石部は表へ立出て、かための役にかしこまるカゝル我も〳〵といさみつゝ三重まつり見るこそ上をもしろき、爰に又淀の河部の片ほとりに、梶たへまのづかう勝廣とて、好色ぶ道の惡牢人、いへとみけんぞくあまたもち、ゆたかにくらしいたりしが、けふの祇園のさいれいに、見物のため手の郎等、ちりつかあくたの助、浪次郎たつとび、かれ兩人を召つれて、美々敷出立大かたな、小路一はいよこたへて、喧嘩せんずるあて詞カゝルゆきかふ者共をそれつゝ、中をあけてそ通しける、錦の小路の棧敷の、たが袖姫を一目見て、色には猶も氣みじかもの、御盃成共いたゞかんと、堺をし破りいらんとす、ていしゆあはてゝはしり出、御らんの通りぢよ中方、御用捨頼み奉ると、手をすつて申ける、たへまいかつてやあ、其女中と一座が望み、おのれめと、こぶしをにぎつてそつほうを、火の出るほどはりけれはカゝルかしこへかつはとはりたふされ、かゝへさすりて逃入ける、是みつつぐしげつゝと出、さいせんていしゆが申せしごとく、女中計りのさじきの内、我々とても青侍、おの〳〵方のおあい手には、思ひもよらずひらさらに、他所へ御こし候ひて、手ににあひたるつはものと、喧嘩を求め給へかし、ひらに〳〵とわびけれは、かつにのつて二人のもの、長々しき口上は、さらりとやめてあの女中と、主君に一座をなさしむべし、ちつともいぎに及びなば、かうべみぢんにふみくだくぞ、いかに〳〵と力足、どう〳〵とふみならしカゝル仁王立にたつたるは、おつをおこがましくこそ、見へにけれ、是みつつぐしげ心中に、おかしながらも其けしき、おそるゝていにもてなして、力のつよき御うで

を、ちとわれ〳〵も心見んと、二人がかいなを引つかみ、げに〳〵つよきうでやとて、二人一度にしめければ、さしもじまんのちからうで、ちきるゝ計り目もくらみ、是々ゆるせざきやうぞと、泪ながらにわな〳〵と、ふるひ〳〵わびければ、是みつつぐしげ打笑ひ、はからふやうも有けれ共、命はゆるすと差上て、ふり廻しつゝなげ出す、たへまいかつて大たちぬき、うつてかゝればとびかゝる、町の者共ぼう引さげ、只打ころせとさん〳〵にカヽル一所にむらがり打たつれば三重ころびたふれて逃て行、先さいれいのさまたげは、事なくすみしぞはや〳〵と、めでたくみこし渡しつゝ、千秋樂の時津風、ばんぜいらくの見物はカヽル面白かりけるしだいとて、貴せん上下おしなへて、皆かんぜぬ者こそなかりけれ

## 第二

其後、浮田の左金吾は、去る祇園のさい禮に、禁中の北面齋藤兵衞尉、定房のひとり姪、カヽルたが袖姫に御えにし、たがいにねがひ、ちはやふる地神のむすびの色姿、いもせの川の橋はしら、中立賴みゑんがあり、けふ珍らしき花むこ入カヽル花やかなりし御しやうぞく、たぐひなかりし美色に、月を地ねためる姫君の、まばゆき迄に出立て、あたりも光りかゝやける、金銀のほうらいに、二人むかひて相生の、松カヽルにすをくふひなつるや、みぎはの龜の、さゝれ石、いはほとなりて、こけむす迄チクリ千代にや、千世と御ことふき、兵衞尉も御機嫌よく、カヽル規式終て御盃チクリさいつ、さゝれつ舞うたふ、次郎くはんじやつぐしげ、悦び是にしかずとてカヽルあふぎ押取立上り、ほうらい山をかざる事、龜は本より、よろづ代をふるなれば、長壽をいのる印なり、松は其色ときはにて、とかへりの花もさき三重みどりのかけによる人は、老せぬためし候なり、竹は其かげすぐにして、所ところのふしのまはチクリ花ほとゝぎす月雪の、節をたがへず人もまた、折にあふこそめでたけれ、つるはせんざいたもつ故カヽルかゝるせいたいせいちやうの、德になづきて、舞あそび候と、カヽル詞に花をさかせつゝ、千秋樂と、まひおさむ、これみつも悦びて、めん〳〵も同音にカヽル手拍子打て、三

國一とうたひつゝ、祝ひのゝめきたりけるは、めでたかりける「しだいなり、去程に、たへまのづかうかつひろは、先日ぎおんのさいれいに、大きなるふかくをとり、面目なくも立歸り、匂ひ床敷たが袖の、其おもかげのわすられず、明くれ戀に身をしつめ、あまりたへかね郎等の、あくたの助浪次郎、兩人を招きよせ、さりしぎをんのさいれいに、見初し女は音にきく、齋藤がひとり姫、たが袖姫にて有けるとやカ、ル何とぞ望みむかへ取、いもせの川のわたりそめ、深き契りを結ふべし、汝等は此度、けいやくの使として、兵衞がやかたへ立こへよ、はやとく〳〵と申ける、なみ二郎申やう、さん候君はしろし召れずや、たが袖の義は先達て、むこかねけいやく定り、けうこんゐんのことふきなりカ、ル是はちびきの石にして、もはや叶はぬ御事と、申ければかつひろは、大きにせいて口をしや、よまなか戀ぢとおもひつゝ、人めを忍びつゝみしに、人にせんをこされたり、此上においては、兵衞が館へはせ入て、一家の者共きりちらし、たが袖姫をうばひ取、ぜひ共に某が、妻と定めん者共よ、はや打立んと、ずんどたつを、あくたの助、今しばしとてをしとゞめ、こは氣みじかなる御事ぞ、齋藤一家の奴原は、君の御手をおろされずと、それがし兩人はせ向ひ、一々にふみつぶし、姫を引立參らん事、何よりもつてやすけれど、爰にひとつのなんぎ有り、此度むこと定めしは、先日ぎおんのまつりの場、我々にはむかひし、浮田の左金吾時世なり、そこゝにしてはけがあらん、夜半の時分に見すまして、兵衞がたちへ忍ひ入り、とうぞく一きのふせいして、姫を引立參るべし、若もはむかふものあらば、其時こそは片はしより、しやうぎたふしに切ちらしカ、ル本望とげさせ申べし、此ぎいかにと申ける、づかう大きに悦喜して、いしくも申せしあくたの助、これ究竟の手だてなり、然らば用意仕れ、はやとく〳〵と、それよりも、其夜のふくるをまち遠く、心せきやのくだかけの、聲諸共に打立て、あだなる心はうば玉のハヤ三重にしきの小路へ、をしよする、中に取ても、あくたの助、本より忍びの名人にて、大きなるつなに、くまでをゆひつけねりへいの、むな瓦に打かけて、繩をつたひてよぢのぼり、内のていを見てあれば、人しづまりて音もせず、し

すましたりと飛をりて、じぶんはよきぞ此門を、打破てはやいれや、者共と云ふ聲に、表なる一きの者共、心へたりと云まゝに、かけやまさかり手々にもち、我も〳〵と打やぶり、やごへをかけて切て入るカ、ルこは何事ぞとハヤ三重やかたの内、上を下へと「かへしける、されども物に心得し、さきんご是みつぐしげは、をもてをさして切て出カ、ルやいばの光りを便にてハヤ三重爰をせんとそ「戰ひける、齋藤兵衛定房は、老武者とは申せ共、心たけき人なれば、長刀引さげ松とぼし、らうぜきもの餘さじと、宣ふ聲に片原より、たへまのづかうとんで出、齋藤やらぬと打てかゝる、心得たりと定房はカ、ル長刀を押取のべハヤ三重爰をせんとそ「戰ひける、心はやたけにはやれ共、老武者といひ殊に又、けつきさかんの勝廣に、さん〳〵に切つけられ、かしこへかつはとふしたまふ、とゞめをさゝんとする所を、さきんごは立かへり、はつと云てかけへだて、かつひろとたゝかふまに、次郎冠者は浪二郎と、押ならべて引くみ、ゑいや〳〵ともみあひける、太郎くはんじや是光は、あくたの助が首取て立歸り、是をみて勝廣を、押取まき主從して切立る、づかうはたちを請はづし、みけんをしたゝか切つけられ、こは叶はじと逃行を、餘さじと追懸ゆく、次郎くはんじやは浪二郎を、かしこへかつはと取てなげ、やあおのれらは何者ぞ、樣すを申せとせめければ、まなこもくらむ悲しさに、われ〳〵は、たへまのづかうかつひろ、主從にて御座候、かやう〳〵のしだいにて、今宵是迄押よせたりカ、ル我をばたすけ給はれと、一々白狀申ける、つぐしげ聞て、能こそ申せしほうびには、首をばたすけうでほねをと、曳やつと引ぬき、かしこへかつはとなげ捨て、定所を見てあればカ、ルはやこときれてましませば、あきれ果てぞ居たりける、恁る所へ左金吾是みつ覺束なく、立歸り定房の、御手はいかにと宣へは、事きれ給ふと申ける、ゑゝ無念やしうとは親、をやのかたきのづかうめを、こんりんならくの底迄も、追かけうたであるべきや、たが袖事は二人の者カ、ル万事たのむと云捨て、行方しらずいで給ふ、次郎おとろきこはいかに、君は御出ましませば、いづく迄も御供と、跡をしたふてかけ出るをカ、ル太郎押とめ、汝は跡にとゞまりて、ひめ君へ此事を、

聞せ申せよ御供は、それがしなりとかけ出る、次郎聞ていや、御身は跡にとゞまりて、姫君兵衛の御事を、よきにはからひ給ふべし、我こそは御供とカヽル太郎をかしこへつきのけて、御跡したふて出にけり、かゝる所へ、ひめ君をくより出給ひ、兵へのしがいにいだきつき、しばしたへいりなきたまふ、地是みつも泪をながし、きみの御所存かたりつゝ、敵を追かけ出給ふ、若もをんけが候ひては、某がぶんたらず、御あとしたひ參るなり、敵を討て御本望カヽルとげさせ申候はんと、出んとするを姫君は地のふ侍給へ是光、自らがためにこそ、敵なれやさりとては、一所に伴ひみづからにも、うたせ給へや捨置てカヽル何となれとかをもふぞや、情なしやかなしやと、聲をあげてぞなき給ふ、是光もりにふくし、げに御こゝろわりいざさらば、某御供申べし、御心安く覺し召、左金吾さまに追つきて、諸共に敵たへまを、大地を割て打とらん、いざ御出とそれよりも、兵衛のしがいを片付て、姫君の御供し、かひ〳〵しくもものゝふのカヽルやたけ心の一筋に、あづまをさして下りける、かの是みつが心の中を、きせん上下をしなべて、皆かんぜぬ者社なかりけれ

## 第三

歌をきまるみよもひさかたの、月にカヽル名高きむさしのに、深草の色人の、百夜はいまた、あさぢがすへチクリ其ひとふしも吉原とて、皆人通ふ色里あり、三千地のうかれめの、雛あらそふ花々の、そのふにうへてもかくれなき、くれなゐのはに名をよせし、高尾の君と申せしは、ふたり共なき三浦が内、今せんせいの、君なりき、然るに此女郎、たけはづむ迄深川の、うき世といへる大臣に、カヽルなじみ重ねてつまこめの、いつも八ゑかきいひあはせ、外の客にはつよく出、下紐とかぬ中なりきカヽルけふもゑにしのけいやくにて、今や〳〵と侍あたり、爰に梶、たへまのづかう勝廣は、都にて齋藤兵衛定房を、叶はぬ恨に討てすて、當國に忍びしが、人におもてを見しられじと、髪がつさうに大ひげなで、飼大江のゆふがん鬼つらと、其名を改めだて小袖、あけうらくはつと吹かへさせ、身せばひろ袖大かたな、ちうや

悪所にはいくはいし、ほういつむざんにふるまへばカ〻ル恐れぬもの社なかりけれ、昨夜より居つゝけして、けふの歸りに高尾を見て、あつはれくるわの色つかさ、お名の高尾はもろこし迄、われ我朝にしられたる、鬼つらと云大臣が、たび〳〵御一座ねがへ共、御さはりのみきのどくの、ふかまのかたへむり所望、是さたかをのもみぢかりと、うしろをほとゝ打ければカ〻ルたかをにつこと打笑ひ、おかしき人の詞かな、千日千夜通ふても、叶はぬ戀ぞ其かたに、もみぢかりと出ぬれば、こなたに少もさわがざる、世樣といへる是持ありカ〻ルさし通されな鬼つらよ、おいてたもとをふりきれは、さすがのおにつら詞なく、きつね君やとそれよりも三重なじみのふぢ屋へいそきける、爰にうきだの左金吾は、敵をたづねあづまへ下り、人めを忍び深河の、ゆかりのやしきにかりに居て、うき世の助と名をかへ、ふとこの里へ通ひきて、高尾の君になれきぬの、とめきのかほりなつかしく地朝夕通ひ給ひしが、つぐしげを御供にて、いさむ心もはやおふね、ぬれにうつりし舟男、板ふみならし聲かけてカ〻ルおせさつ〳〵と色里へ、飛が三重ごとくに「こがれゆく、かくてかの地に成ぬれば、身ふりつくらふゑもん坂、人まつ女郎數々の、地中に位も高尾の君、互にそれと三瀬川、いもせにおなし戀衣、きさんし給ふか待とをかと、カ〻ルたがいに袖を引つれて、伴ひ三重内にぞ上「入たまふ、あげや立出、御盃と取々に、一座にぎはしもてなしてチクリ興を催す酒もりは、面白ふこそみへにけれ、かかる所に、さもいつくしき作りはな、花籠にさしみだし、大ぜいにてかき出て、文を高尾に參らする、取上て見る所に、其比くるわのつはものにて、鬼つらとふかくあふ、坂田といへる女郎より、たへしゑにしかなつかしむ、筆に心をつくしつゝ、けふおなじみの御出に、ふかき方よりおくられて、詠めあかざる花ながら、色をも香をもしる人に、見せまいらせたく候ひて、暮に及び候へ共、送り參らせ候なり、こじんにならひしよくをとり、御詠め候はゝ、悦びまさんかしくとゝむ、高尾は思ひよらざりし、人の情の花の色カ〻ル詠めあかざるかへり事、心をつくしかきをくり、かたへのとこに直させて、是をさかなにをひとつとカ〻ル水をもらさぬ花のゑん、酒たけな

はに、面白屋、時にうき世定りの、あだ酒もりは事ふるし、此花につき一景の、あらましほしやと宣へは、高尾げにも御ことはり、いざ打よりて女郎達、ぼたんの花にことよせて、乗てしくみし獅子の曲、よろしからんと有ければ、はやとく〳〵とうき立て、小さつま八橋それ〳〵にカヽル色大よせのゆふきやうは、三重をもしろふこそ上「見へにけれ、うきよをわするゝ色里の、五町の君のかず〳〵に、みな人こがれふしみ町、ひく手あまたのあづさゆみ、君がヲクリこゝろの二丁めの、にほひゆかしき三重八重むめに、しばしうかれて、たゝすみ丁の、戀と恨の境まち、右の方には、にぎわひの、外にはあらぬ江戸町や、情に名をやあげや町、たぐひあらざるしん町の、いちざにぎはふ京まちに、かへるさわするふくろ町、大かうし小かうしに、げんじかうしやあげや茶屋、色をよそほふすがかきは、心もうはのそらたきに、をもひをこがすふせいなり、先せいやうの、雪とけそめて、ほころびいでし梅のはな地ぬふてう鳥の初音の君、聲もかほるは花輪違、ひとつさくらや、三つさくら、櫻木やよひの色の紋、つゝら花笠ひほゆるけきは、初もとゆひの小紫、こがれこがるゝ、花いかた、こゝろも波にうき橋や、若むらさきは藤ともゑ、みどりのまゆもわかまつの、ほねをかはしてだきてうは、千とせまん世もかはらじと、地なじみかはせし夏木立、花おもだかは、世の人の、ゆかりとひくる郭公、聲もたかまのかつらきや、めした姿の色ふかき、もみぢは其名たか尾の君、ちがひかしはや三つもつかう、ちさと津島のほか迄も、たぐひあらさる君達なり、冬とや三重いはんはつれゆき、つもるをもひはたかまつや、三がい松のござかんに、かはらぬ色の、常盤のきみ、其外巴よつめゆひ、むすぶゑにしのあさつまや、わけて小よしのなびき桐山を繪にかくひあふぎや、八ゑ角すみきり、やつはながたとんとけあげし、まりはさみ、かげやひなたの取々に、通ひくるわのぜんせいに、カヽルうかれさまよふ有様は三重けにおもしろき上「しだいなり、色よきすぬひつほをりて、ヲクリしたには殊にすぐれつゝ、ぬふてう糸のふしのまも、しのふもぢずり誰故に、めしゝおしゝをかづきつゝ、うかれて出る取なりは、をもカヽしろくまだ拍子とる、笠をめせ〳〵、

まん丸よふてきよふて、はでなしめをの片むすび、しめてきり〳〵きり〳〵と、皆一やうのとりなりは、水に地ゑをかく其ふぜい、白きを見れは月のいろ、げにしん〳〵とみあれやま、神のひもろぎ物わびて、たれをまつやらよぶこ鳥、いやしほりゆくわが袖は、よれつもつれつもつれつよれつ、きて見よかしのおどりふり、れんぼのふへによる獅子の、アヽちどり足なる花の聲、夢をやぶるやひてうのまひ地身をすくめつゝ毛をふるひ、見だれかゝれる糸竹の、かける小てうにいさみ〳〵て、まはれば廻る車とび、みだれ拍子になる鈴の、ひきよくにつるゝ面白やアヽノヲヽしゝとらでんのふかくのみ、きん大きんりきんのしゝ、かしらうてやはやせやほたんぼう、彼しやくきやうもかくやらん、追廻り毛をふるひ、きばをならして爪をとぎ、花にはひ枝にふし、くるひしていを其まゝに、がくにうつしてしゝとらんでん、いざやなごりの拍子をと、世々も盡せじ松の葉の、ちりうせずしてときわぎの千世萬代のことふきを、かなでゝ舞をぞ納める、人々是に興をなし、いざ夜もふけぬしばしばも、さあ御床と氣をつけてカヽル世之助高尾諸共に三重ひとつとこにそ上「ふしたまふ、げにあやにくや月に雲、花に嵐や世の助の、下部來て都より、きうの御用の御飛脚、急ぎ御歸りましませと、大いきついて申ける、宿屋の者共是をきゝ、つぐしげにかくと云、次郎はやがてをくにゆき、其趣をのべければ、うき世心もとなくて、はからぬさはりぜひもなし、けふにかぎらぬゑにしなり、ちかの御げんときぬ〳〵の、袖引わけて出たまへは、高尾いつよりむつましく、くるしからざる御しゆびなら、夜あけておかへりましませかし、心もとなふ覺ると、とゞめ申せばうき世の助、つぐしげが供すれば、あやうき事はなき間、心安かれ重ねてと、ひかふるたもとをふり切て、心つよくもかへらるゝ、是を限りのゑにしとは、後ヲクリにぞをもひしられたり、たかをはひとりぼうせんと、御跡見送り立ゐたり、すしましたりと鬼つらは、くだんのぼたんの花のかめ、ふみ破て立出、しんにしこみし刀をさし、たかをがそばに立よれば、高尾驚きカヽル迯んとするを、いだきとめ、つれなき君やかく迄に、心をつくす某は、いはずと見しり給ふべし、心に隨ひたまひなばおそ

らくは此いへに、山吹の花さかせ、ねびきにやかたへうつしつゝ、替らぬ中は姫小松、千世をこめつゝもろしらが、いたゞく迄も君とわれ、しつほと語り申べし、かくおもてこそこわく共カヽル心はやさしきわれなるぞ、いかに〳〵とくどきける、高尾大きにせき上り、かしこへかつはとつきたふし、ながれつたなき川竹とて、なぶり給ふか女郎も、女郎によりての事、うき世さまと命をかけ、夫婦の契約なしぬれば、いかほとにのたまふ共、心をみだすわれならずと、耻しめて申ける、鬼つら聞て腹をたて、ゑゝすいさんやけいせい、色なればこそかほど迄、心をつくしとやかくと、いへばいふ程かつにのる、此上はせひ共に、力づくにてなびかせん、あさ返答はいかに〳〵と、りふじんにいだきつく、たかを今はこらへかね、鬼つらがさしたりし、刀を引ぬき打て懸るカヽル鬼つら是はと逃まはる、たか尾ひけうや餘さじと、追つめられてせんかたなく、一太刀うたせつつと入り、刀をうばひ取てふせ、扨だいたんなる女めや、さあさしころすがいかにといふ、らうぜきものとこへ立るに、鬼つら人にしられじと、カヽルむざんやたかをが心もと、ふた刀にさしころし、八立さはぐにまぎれ出カヽル行方しらず逃のびける、あげやの一家驚て、高尾を切たぞそれ〳〵と、曲輪一同さはぎたち上ハヤ三重を下へと上「かへしける、みな〳〵立より、やがてたかをゝいだきあげ、心地はいかゝ何者か、かくはなせしぞいかにやと、さま〳〵に問けれど、はやこときれてみへければ、涙ながらに盛りのはな、思ひをこがすはしば村、戀の煙となしにけりカヽル誠にふびんのしだいやと、貴賤上下をしなべて、皆おしまぬ、者こそなかりけれ

## 第四

旅の衣はすゝかけの〳〵、露けき、袖やしほる覽、太郎くはんじやが申やう、爰は名にあふむさしの國、都に增る花の江戸、敵たへまも此所に、罷あると承る、さきんご樣にも廻りあふ、便に神社佛閣や、名所きうせき御詠め、うきたび忘れましませと、あないのためにさきにたち、あれ御らんぜよ名ところの、花よりさきに唉梅の、ゆしまかんだのみやしろより

地下谷はるかに見をろせば東の　三重みどうむねたかく、くもゐに見ゆる大をん寺、おがみカ丶ゞめぐりて車坂、花のあらしをいとへとて、其名もよしやべうぶ坂、さかりの春は芳野にも、増る上野のながめかな、利益もたかき山王や、きせんくんじゆのふうぞくの、はでな姿や一文字、色のかゝ笠だて染の、もよう品々しなし帯、濡たすがたのやさしくも、深く人目をしのふの岡、またしのはずの御神は、地むすぶの神と聞からに、わかれし人に今ひとたび、廻り地逢せて給はれと三重きせいなしつゝ行するゑの、尋る君ぞ小石川、旅のつかれはうし天神、しばし休らひぬかつきて、名に大くぼの柏木の、ゑもんさくらも春なら て、立へだて行霞か關、思ひはたへぬ玉川の、瀧のながれの糸打とけて、とけてみだれて、いつか青山つまゆへに、こゝろをつくすこんわうの、カ丶ル其舊跡もあとになし、とばには三重あらぬ高繩手、海つら遠く詠むれば、釣する小船、くもまにならぶ、ほかけふね、さながら須磨やあかしがた、朝霧わけてびんせんし、むかふにかすむ安房かづさ、遠見るうちにこがね共、西門跡につく田嶋、三つまたわくるせをはやみカ丶ル露にきらめくしいの木は、幾世へぬらん石原や、戀敷人をまつち山、二丁のおふね名にしあふ、おせやれ男、ういた浪とや花川戸、爰淺草の觀世音、三社權現明王院、朝露むすぶいほが崎、日本堤のはる〳〵とチクリ金杉千壽詠めやり、はし三重ばの方へぞ上ル歸らるゝ、見れはふりたる寺院あり、かたへにもみぢいろつきて、夕日にそむるくれなゐは地二月の花も霧嶋も、及ぶべきとはみへざりけり、其もとに石塔たて、四十計りの僧一人、かね打ならし聲哀れに、念佛申ていたりけり、いかさま是はゆへあらんと、立寄り衣の袖を引、我々は此地始て一見の者なるが、いまだ時より色つきて、かゝるもみぢは珍敷、殊になき世の印と見ゆ、いはれを語り御きかせ、侍へかしと仰ける、僧は聞て此塚にはカ丶ル哀れなる物語、かたりて聞せ申べし、此きういんは、正覺院と申なりカ丶ル是成もみぢは色里に、其名も世上に高尾とて、皆人なづむ君なりき、中になじみも深川に、都方の人なりとや、うき世とかやに身をまかせ、外の客をばふりつけて、あはづの森のくづのはの、恨をふくみし物ならん、去年七月末の比、やみ

はあやなしあへなくも、かいし立のき候なり、なげくにかひなくなきからを、此所にほうむりて、御らんのごとく戒名は、典譽妙信と申なり、常にもみぢをこのみつゝ、紋にも染て其名さへ、たかをとつきし君なれば、印に是をうへ候、カヽル色ある君が印にや、もみぢもたぐひあらざれは、世の人なべてあづまなる、たかをの紅葉と申つゝ、名木にて御座候、拙僧もかの里の、ほとりに近き庵室に、名は道哲と申つゝ、此君のときの僧、いたはしく存そゝ、まいど參りてゐかうをなす、みれば何れもさんゐの身、御けちゑんに打寄て、廻向まし〳〵候へと、委く語ればたが袖はカヽル都といふに心つき、扨哀なる事共や、地其高尾に逢給ふ、深川のうき世とは、いか成る方にや侍らひし、ぐそうひそかに承る、都にてはうきだの左金吾、今此あづまに御下り、御名をかくさせたまひつゝ、浮世の助とは申せしとや、姫君扨はと嬉しくて、そのうき世の介こそは、わらわが尋る妻の事、ふしぎの人に逢參らせカヽル妻の行ゑをしる事も、ひとへに神の引合と、悦びなみだはせきあへず、道哲は心得ず、見れば男子の姿にて、うき世の助を妻とは、爭か仰有けるぞ、さればにて候、其浮世どのこそは、都にてうきだの左金吾、時世とて、わらわが二世と契たるつまカヽル申もいかゝ耻しの、もりてや人にしられんと、廻國修行の姿となり、めくり逢んと思ひこめ、今むさし野の糸すゝきカル、みだれて又もあふ事の、便を聞て嬉しさは、地覺し召ても御らんせよと、裝束をぬぎ捨て、委く仰ありければ、道哲はたと手を打て、扨々いとしき御しんてい、然らば拙僧御供し、深川へ參りつゝ、たいめんなさせ申べしカヽルかりそめながら是とても、多生のゑんとや申べき、地かりそめのうきふしの、一夜つまとは申せども、高雄もひとへにかの方をは、僞りならずいとおしみ、申せし人のむしよなれば、一へんの念佛をも、御ゑかうあれと申ける、姫君もいざさらばと、一所に寄て南無ゆうれい、成等正覺とんしやう菩提アイノ手しやうこの音もすみ渡り、名もなつかしみ宮戸川、都鳥も聲添て南むあみだ、佛みだほとけアイノ手彌陀佛と、淺茅が原のさう〳〵と、風ひやゝかに身にぞしむ、ふしぎやもみぢのかげろひて、塚のうしろにすご〳〵と、たかをがすがたゝちあらはれ、

あら有がたの御追善、申たきこと侍らひて、ゑんわうにいとまをこひ、是迄あらはれ候なり、されば遊女はことなれて、地人のこゝろにつゝむ色、詞の外に通るぞかし地その御かたにはうき世さま、いもせのけいやく候ひし、たが袖姫にてましますかや、耻かしながら川竹の、ながれの身とてみづからも、ふと此君にあひそめ川、深きなじみに身をしづめ、此世からさへおそろしき、鬼つらと云悪性の、つらき恨にかなしくも、やいばに懸りむなしくなる、くるしき此身のありさまを、うき世さまに御つたへ、なきあととひてたび給へ、さなきだに女の身の、五障三じうの、おもきさはりにさよ衣、わがつまならぬかさねつま、うきふしゝげきながれをたて、かたちをよそほひ色有し、詞の露に濡衣の、人に思ひをかけたりし、むくひのせめはひまもなく、はや時きぬといふ聲も、ふるひわなゝき風はげしく、身にしみ渡り、東西くら〳〵、有つる所忽に、かうくはうたりしのへとなり、鳴神しんどういなひかりハヤ三重すさましかりける上「しだいなり、むざんや高尾は、世の人の、思ひをかけし泪のあめ、詞打しぐれつゝふりかかれば、はだへにくれんの氷としみ、たへかねこかげへ立よれば、やいばのせめに木々の枝、つるぎと成て此身をさく、ヵゝルあけにそまりて立まよへば、くろかねのきばある犬ハヤ三重すさましき聲をあげ、きばをならして上「飛かゝる、こはかなしやと、つへをあけ、うて共〳〵ぼんのうの、せめくる犬にせんかたなく、逃んとすれは左右より、のみすてたりし酒の波、人をやきたるほむらは又、めう火と成て、打かけ〳〵わつかなる、父母兄弟のためにうるヵゝル身のぜんこんのほそ道へ、ころびまろびて逃行を、あだにちかひしせいしのからす、くろかねのはしをならし、まなこをぬかんと飛來るヵゝル前後左右より責られて、せんかたなくてふす所を、むらがりよりて引さきくらふ、道哲さはがすがつしやうし、南無や朝日のみだ如來と、名號せめかけとなふればヵゝル有がたや紫雲にのり、ひかりを放て立給ふヵゝル其時高尾は手を合、なむ阿彌陀佛と、となふ聲の下よりも、みだの利劔にあくごうの、皆こと〴〵くおそれたり、たかをもはつとかげきへて、地ごくとみへしは忽に、みだのちかひの有がたき、正覺院と成にけり、人々き

いの思ひをなし、念佛申それよりも、うき世の助へといそがるゝ、あつはれふしぎの事共やと、きせん上下おしなべて、皆かんせぬものこそなかりけれ

## 第五

其後、夏立て、はや秋きぬと文月や、今宵は名にあふ七夕の、いもせをわたすあまの川、まれのゑにしと思へ共、人界の五十年、天上は一日にて、一千歳をたもつとかや、かく限りなき契りさへ、あはれとおもふ世の中に地我ははかなやかはしたる、たが袖姫には引わかれ、また馴そむるもみぢなく、ひとりこがるゝ捨小舟、あしの丸やのかけ作り、琴酒軒と額を打、酒にうき日をゝくるをば地哀と思へ小ぼうしと、しやくをとらせて一つほし、七夕を打詠め、死せし高尾はせひもなし、うつりがわくるたが袖に、逢せてたべと打なげき、しばしは爰に思ひねの、こひ敷夢をむすばるゝ、かゝる所にふしぎやな、ほとりにしげむあしのまに、星ひとつさつとをつ、あやしやと見たほふに、いきやうくんじて風そよき、さもいつくしき天乙女、あしまをわけてかぢのはに、五色の卷筆棹さし出、うき世の助に打向ひ、みづからは織女よ、御使に參りたり、君はこれけんぎうせい、色道を世の人に、しめさせ給はん爲として、いこくにてはゑんしと生れ、わか朝にては光る君、有原の中將、今又びなんたぐひなき、うき世の助と代代顯れ、男女のわけの品定め、今宵そみつる天津そら、定るよる瀬なる間、御迎に參りしと、申ればうき世の助、思ひよらざる御迎、假は過去はそう天の、ひこほしのせいとても、かく人男にへだつる身の、爭で天上成べきと、仰けれは天乙女、此かぢのはに御召あれ、みづから御供申さんと、勸むる心に乘移れば、乙女は忽びんがとなりカ、ルかぢの葉共にいたゝきて三重天上するこそ上「ふしぎなれ、下かいをはなれてくものなみ、霧のまわけてやゝはるかに、のぼると思へば浮世の介、昔に心立かへり、こは古里に近つくとカ、ル悦び給へはけんぎうと三重姿かわるぞ上「ふしぎなる、それ天上と申せしは。此かいより八万由旬、しゆみせんのちやうじやうを、たうりてんと申つゝ、帝釋の喜見城、三十三天だん〳〵に、

限りもしれぬくものうへ、其牛ふくに四王天、四天のいます都にて、日月爰を御めぐり、青うなはらは星の天、ほくしん諸星のわうとして、地是にむかふてでんをなす、中にもわけて七夕は、銀河を中にへだてつゝ、いもせむかふてでんがくあり地白かねのついぢをつき、こがねのろうもん峰かゝやき、けんきうの御かたには、れいかうかくと額をうち、しよく女の方には、てんしやうでんとがくをかく、百官けいしやう出むかへば、けんぎうは久しやと、一禮有ててうあいの、しゆすより黒き御牛に、金のはなつらくれなゐの、打緒を取てゆふ〳〵と、七寶の御ゆかにカヽルなをらせ給へはいづれも皆チクリかつがうなしてぞ悦ひける、其時にあま乙女、おり姫の御かたに、嘸待遠におはすらん、夜もいたくふけぬまに、御入有て打たへし、ゑにしをいそぎましませと、いさめたてつゝさきにたちカヽル夜光のあかりさしあげて三重あまの河邊に上「出たまふ、見渡せば、あまの川なみすゝしくて、めのうすいしやうさま〳〵の、岩地くみ多きひま〳〵に、さんごの枝のをひしげり、五色いろどるしな鳥の、ねをあらそひてさゑづるは、おんがくするかとうたがはれチクリしんにをすますに川水に、たがつま音とは、しら波に、琴の音かすかに聞へけり、七夕はたゝずみて、是はいづくのしらべぞや、おとめにつこと打笑ひ、君待かねており姫の、あそばすなりと申ける、七夕は聞召、こは僞りやさもあらば、妻むかへ舟いかにして、まれのよるせにおそきやと、仰けれは、こはやく、わすれさせ給ひけり、其年毎に品かへて、もみぢの橋や笹小船、こよひはうじやくなりけるか地いかにをそきとふくる夜を、恨みてたちし川波に、一度にさつとむれきつゝチクリつばさをかはし一筋に、橋を渡せはけんぎうは、むかふへわたり給ひしに、打ならびたるかささぎは、雲井三重はるかにとびさりぬ、しよく女のみあやに成しかば、御まへの天乙女カヽル百味のちんにごんずの酒、さカヽルま〳〵もてなし奉る、しよく女盃御取あげ、さゝげ給へは、けんぎうは、御さかづきを取上て、こは珍らしや逢事も、玉の盃相替らず、契りも深きゑんおうの、あひことふきをなすべきに、いざこなたへと顔をよせカヽルひとつにむすぶあひ盃、浦山ざるはなかりけり、織女けんぎうへ打向ひ、

君下かいへ御こし有、凡人と御契り、心かはらせ給ひては、天上かいへ又二たび、のぼらせ給ふ事かたしと、いもふとぢよをたが袖姫、じゆん女を高尾と云遊女に、下して色をふかせがせたり、御めにかけんと御そばの、ヵ、ル天津乙女に仰有、忽兩女を御召有る、ふぢよじゆん女來らるゝを、見ればふしぎやこはいかに、二世と契りしたが袖姫、なじみも深き高尾をなりヵ、ルこはそも夢かなつかしやと、互に左右へ取付て、しばし泪にむせばるゝ、時に順女はからずも、ふとなれそめてもみぢばの、あかぬ別れに露の身も、消る計りに候ひしに、御目に懸るはうどんげの、をりひめさまには年毎の、其文月のよすが有り、こよひのよるせは自らに、まげておゆるしたび給へと、泪にくれてぞかこたるゝ、ふ女は内にねたむ色、外に顯れなふ順女、我は始めのそなれ松、ヵ、ル君にまとはる藤の色、ゆかりの身とてすがりつく、順女はよしや織ひめの、御ふけうは蒙る共、今宵はわらはとしきたへの、袖をかはして給れかし、いざ諸共に、ねみだれて、むすぼふれんとけんぎうの、御手を取て立けれは ヵ、ルふぢよも取付きこはいかにと、地はなちはやらじと引とゞめ、左右に取付引あひて、情をあらそひ給ふにぞヵ、ルけんぎう今はせんかたなく、おもひは二つ身はひとつ、何れといはんやうもなし、いごをあらそひかちたる方、手枕なるぞと有ければ、仰にまかせるりのばん、黒白の石をいれ、金銀のごげそへて、御まへにこそなをしけれヵ、ル順女とふ女のはらからは三重いろをあらそひ上「打むかひ、こゝろをくたく數々は、あまの川せの星のかげ、心にとめてしめやかに、うつや先手は順女なり、ご地手はふ女とぞ定めらる、何れ花もみぢ、ごいしの色はゐんやうの、じやうゐの二手うつ音に、あうんのひゞきそなはりて、生死のめいご目前に、ねはんのさうを顯はせり、うつ手ははまのまさごにて、石のたてさへ女ごの、けんじのまきに三重手ならふて、やさしふもまたうつせみや、のきばのはぎとあらそひて、花を地ちらすやはゝきゞの、其ゐあはせのかちまけに、ねたむ心は竹川の、ふしある所をきりつぼせんアイノ手人のうつ手のつゝめ共、白くみへぬる夕顔の、こなたのはしどみたてよこに、まとひてとらん玉かづら三重つゞかぬ石を卷柱、しちやうにい

ざやかけふよ、色の二みち梅がへや、こうはい、句ひかほる共、わきかぬる手のさりとては、身を盡してやうぢ橋の、こなたへちらと飛ほたる、みだれてせむる責合の、いざ〳〵石を二つ三つ、よゝのふしふし竹のふし、あふせあらそふかちまけは、手をつくしてこそ打にけれ、けんぎう立より見給ふに、碁の手もきれて一石もカヽルさらにたいごとみへにけり、其時けんぎう宣ふは、何れをわかたぬ其うちにも、せん手こそは一石の、順女がかたによはみ有、此碁はふ女がかちしぞかし、カヽルこよひのよるせは御身ぞと、寄そひ給へは悦びて、嬉しや深きゑにしぞと、けんぎうの御手をとり、打ゑみ一まへいらんとす、順女はけしき替りつゝ、ゑゝ恨めしやねたましや、まさしくこの碁はたいごぞや、つらくも今の仰かなカヽルけふのゑにしは叶はじと、めんしよく引かへ忽に、ひたいをつくさくくはばくのつのカヽルごばんの上に立たりしは、扨すさましかりける有様なり、けんぎうは御らんじて、ふ女をかこひて、御劔をぬき、向はせ給へば順女は又カヽルふぢよを引さきすつべしと、くるり〳〵と追まはすは三重すさましかりける上「しだいなり、けんぎう今はせんかたなく、大ひの御經取出し、心中によみ給へば、おんれうしだいに足よは車の、かしこへかつはとたふれしが、又をき上り口をしやと、かくふぢよが命をとらんとカヽル飛かゝらんとしたりしが、御經の光明に、たよらん力及ばずしてカヽルそばなるごいし押取て、はらはらとかみくだき、かしこへくはつと吹かくればカヽルめう火と成てもへ上り、煙の内に立紛れはや明わたるさよ千鳥カヽル川風と諸共に、常の所にふしいたり、かゝる所に、たが袖姫、尋ねて立入わがつまかと、宣ふ聲に目を覺しカヽルは是は〳〵と計りにて、御悦びは淺からず、げにかんたんのかり枕、小てうの夢もかくやらん、あつはれきたいの事共やと、きせん上下おしなべて、皆かんぜぬものこそなかりけれ

## 第六

其後、浮田の左金吾時世はカヽルたが袖姫に廻りあひ、御悦は淺からず、たが袖姫宣ふは、正覺院にて高尾が事、かやう〳〵の有様と、委く語らせ給へは、

浮世之助聞召、我も夢中にかゝるてい、是又一定高尾がれい、追善を請んため、ま見ゆると覺へたり、殊に朝日のみだ如來のれいげん、古今にためしなき、靈佛にて有けれは、三浦が方へ立こへて、此段々を語り、開帳を致つゝ、諸人におがませ申なば、大き成功德といひ、其上高尾が追善はカゝル是にましたる事あらし、此義いかにと申さるゝ、道哲を始とし、是はよろしき御事やカゝルはやとく〳〵と、それよりもチクリ三浦が方へぞ急かるゝ、かしこになれは、あんないこひ、ほうじゆんに對面し、右の段々語らる、芳順承り、扨は左樣の御事かや、かゝる尊き御佛を、諸人におがませ申さんとカゝル口道哲もり申三重開帳するこそ上「ありかたき、我も〳〵と參詣し三浦が館はくんじゆなす、かゝる所にたへまのづかう鬼つらは、うはきにもれざるくはんくはつもの、過しらうぜき人しらじと、忍びあみ笠ふか〳〵と、三浦がもとの朝日のみだ、拜みなからも色姿、まがき〳〵を見物し、チクリすり違ふてぞ通りける、次郎冠者にはたとあふ、おにつらは見わすれしか、そのまゝにてあゆみゆく、二郎冠者は能見覺へ、君の敵ぞござんなれ、是究竟とそれよりも、世の助姬にかくと云、人々悅ひ用意して、ほうじゆんにもかくといひ、歸るを待こそ不うんなれ、是をはゑらて鬼つらは、のさのさと大門口、あゆみ出るを町の者、拍子木合敵打、のがすなと呼はるにぞ、門さしかため押取まくカゝルかごの鳥とや鬼つらが、今身の上にぞしられける、時に人々かけ出て、いかにたへま見わすれはせじ、齋藤兵衞定房がめいたが袖、をつと左金吾なり、のがれぬ所ぞくはんねんせよ、いかに〳〵とつめかくる、鬼つらはつと驚きしが、よし〳〵今は力なし、ぢんじやうに立別て、勝負を決せよ尤とカゝル双方へ立わかつて火、ハヤ三重花をちらしてたゝかひける、されば共左金吾主從は、命限りにたゝかへは、つかうが無二とたのみたる、角田赤堀兩人も、手の下に討れけり、たへま今は是迄と、四尺四寸の大たち、みつけんに指かざしカゝルうき世の助にわたりあひハヤ三重いきをはかりに上「たゝかひけり、本より名にあふかつひろが、まくり立てうつほどに、既にあやうくみへける時、姬君長刀とり直し、因果は廻る車切カゝルはつと計りをさいごにて、ついにむなしく成にけり、さて

左金五、所の者に一禮して、二たび都に歸洛有り、富貴の家とさかへける、千秋萬歳目出度と、貴賤上下おしなべて、皆かんぜぬ者こそなかりけれ

三世二河白道終

# 源氏花鳥大全

## 荊山

所謂、荊山と申はそも、楚國のたいせいをまもり、五湖のせつけいを帶たり、前には海水じやう〳〵として、月眞如のひかりをかゝげ、うしろにはれいしやうぎゝとして、風じやうらくの夢をやぶる、やうたいしもみてり、一聲の玄鶴そらになく、はこう秋ふかし、五夜のあいゑん、月にさけぶ共云つべし、かく物すごき山中に、住なれし身はさもあるに、汝は住もなれずして、嘸心うく有らんな、乍去いにしへも、雪山に薪をこり、あんじんにこぶしを切し人も有、身をぢんがいのごとくにし、心を錬牛にひしてこそ、積功のせいりき顯れん、彼一盃のふんゑは、こゝうの玉札成けると、長房はしらざりき、汝もわれに師匠の禮ヵゝルほうをんをなすべきか、いかにいかにととのたまへば、晴明おくするけしきなく、誠に師恩の高き事、たとふるに物なし、命のつゞかん其ほどは、ほうじやの勤いたさんと思ひ切たる有樣なり、爾時伯道、よきかな〳〵晴明と、持給ひたるしゆじやうをば、數千丈の谷そこへ、だんぶとなげいれ給ひしに、せいめいつゞいて飛でいり、ながるゝ杜杖をとらんとすれば、白浪さかまく水煙、がんせきいはほに、あしもたまらず早き瀨の、どふでもあられと落くる水に、ながるゝ杜杖をとるべきやうこそなかりけれ、ふしぎや川浪立かへり、俄に川霧立くらがつて、杜杖は忽ち飛龍と成てカゝルに浪間に出るハヤ三重其いきをひすさまじかりける上「次第なり、晴明つるぎをぬき持て、飛龍にかゝれば飛龍のいきをひ、修行のいりきにかんをうし、せいめい共にかづき上げカゝルもとのいはほに上りしは、ハヤ三重ふしぎ成ける「次第なり、時に伯道、ぜんざい〳〵せいめいと、彼一卷を取出し、是こそほきの眞傳なり、汝が家につたひにし、金烏、玉兎集といへるも、皆此内にこもりたり、汝は此書をたづさへて、日本へ歸るべし、あやうき大事いで來れり、いそげやいそげとのたまひて、御いとまたびければ、飛龍のかうべにのりをゑて、天にかけり、地にわだかまつて、ちすいをかへしてうせにけり

# 第一

偖も其後、梅花の清くかんばしきも、はなはだやせて事たらず、桃はまだこへたれ共、色ふかふしてなつめるとや、思ふになをくかたちよく、あいすべきもの世にまれなり、爰にくわうとう、六十五世の帝をば、花山の院と申奉る、時の關白藤原の頼忠、まつり事わたくしなく、天子をほさし給ふゆへカ、ル四かいの浪もをだやかにチクリをさまる、みよこそめてたけれ、扨又后宮に后妃あまた有中に、錦のあけもうばふべき、藤つぼの女御、さはらばきゑん萩の戸に、かうきでんの女御とてカ、ル春たちぬれば芳野山、花かとみゆるこびあれば、秋の詠めのたつた川、チクリ錦をさらすみやびをそへ、いづれもおとらぬをんかたち、朝な夕なの御ゆうゑん、なくんはあらざる君達にて歌やっしおしかのつの丶つかのまも、玉座をはなれましまさず、中にもかうきでんの女御には、君御心イロ地ふかければ、藤つぼの御方は、朝夕是をねたましく、うへにはこびを見せ給へと、内には如夜叉の、ごうをまぬかれ給はず、雪のあふぎもきへぬへき、思ひにむねをそこがさるゝ、扨時の武將には、清和源氏の嫡流、攝津の守頼光、誠にゐ有てたけからず、古今まれなる名將なり、平氏には桓武のかういん、是持の舍弟、平の左官重茂、血氣の猛將兩輪として、君をしゆごし奉れば、カ、ル大内山の霞そへ本フシしなをにたゝぬ、日もなくて、誠に寛和の時とかや、こととさらけふは、名にしあふ、うこの馬場の日折とて、加茂の競馬の御まつり、藤つぼ、かうきでんの女御にも、御見物有度よし、御ねがひましますゆへ、御預りにて有ければ、平の左官しげ茂、源の頼光兩將供奉の勅諚あり、はや〳〵みくるまに召るれば、二條を東へ千本を、北の方へとゝゐかし、右近の馬場へと出給ふ、花やかなりける上「次第なり、けいばのぎしきにぎやはしく、カ、ル洛中洛外又畿内迄、きせんくんじゆのけんぶつは、をびたゝしくこそみへにけれ、扨くらべ馬の役人、思ひ〳〵のしやうぞくに、かばのはゝきやきんせんくは、つゆをふくめくふぜいにてカ、ルうわうざわうの追かけ聲ハヤ三重われをとらしと上「はせけるは、世に目さま

しき、見物なり、かゝる折ふし、いそじ計りの男一人ヵ、ルくんじゆの中を押わけて、けいごのゆばへに近つきて、申上たき旨あるよし、重もち頼光立向ひ、事の様子を問給ふ、時にかの者某は、天文のはかせ秦の道満と申者にて御座候、某いへのひみつ書に、金烏、玉兎集といへる、天文の書有、是にて窺ひ奉るに、帝王位をさらせ給ふ、ずいへん顕れ候故、后妃の内、御てうあいの一たる方、たいねしんしとかたゝがひ、てんだう火木の悪性、是國家ぞうらんのもとい、わたくしならぬ御大事、やむ事をゑずして、恐れながら言上と、謹てぞ申ける、右大將かげかた、けいばのちよくしを蒙り、ゆばくの内におはせしが、此よしを聞給ひ、立出て宣ふは、天晴ゆゝしき御大事、后妃のうちに一なるとは、只今に至ては、かうきでんの女御なり、君の御爲國のため、急ぎそうもん申つゝ、里へうつし奉り、カ、ル君御物いみ然るべし、此義いかにと有けれは、平の重茂げに尤と同心す、時に頼光いかに道満、后妃の不吉と申には、たゞしきしやうこ是あるにや、そこつの義を申上け、後悔さきに立べきぞ、時に道満懐中より、一巻を取出し、書の表に顕れ候、勘文の通り、言上いたすと申ける、カ、ルかゝる所へふしぎやな、かたへのまつにしらくもの、かゝるとみへしが中よりも、せいめいはとんで出、人々に打向ひ、某こそをんやうのかみ、せいめいにて御座候、入唐のこうをとげ、つゝがなく歸朝なす、しさいは兼てぞんじ、事を伺ひ罷在候、いかにどうまん久しやな、われ渡唐のきざみ、某が書をぬすみ取、うつすとは思ふ共、非道にくらむがん力の、たばかられし淺ましさよ、ひじする金烏玉兎集は、某是に所持して有、汝がかんがふ其おもて、皆よこしまのぼうけいなり、われ歸朝する上は、中々もつて及ぶまじカ、ルしやうこのあらば汝が書、披き見せよと申ける、どうまんはつと思ひしが、さあらぬていにてあざ笑ひ、抑々此書と申は、文殊ひさうの一巻、我より外にしるものなし、汝が書こそ僞りならめ、いらざる事をいはんより、そこ立されといかりける、時にせいめい、ろんは無やく書をひらさ、勝劣を顕すべし、どうまんをくせず押ひらくに、ふしぎやもじのすみきへて、皆白紙とぞ成にける、晴明いかんと責けるに、どうまんは詞なく、

赤面して逆行を、頼光それあますなと宣へは、定光末武つゝとより、カヽルどうまんを取てふせ、高手小手にぞいましむる、其時頼光、けふはけいばのさいれい、どうまんは某が、宿所へ引てせんぎをとげん、扨女御にはおかへりあり、然るべしとそれよりも、ぐぶのぎやうさう引つくろひ、定光末武堺押破り、御車をとゞろかす、右大將かげかた、こはろうぜきなり頼光、けいばもいまだなかばにて、藤壺の女御にも、御歸りのさたもなし、其上勅使を蒙る身に、一禮もなく堺破り、うらかたのさうろん、尤邪正は顯るれど、をこと獨のさばきやう、さりとてはわが儘なり、しんていあらばまつすぐに、只今こゝにて申されよカヽルさなくは此場はさらすまじと、氣色かはつて申さるゝ、頼光は聞召、しゆごを蒙る某、かくそう〳〵しき祭禮の場、かうきでんの御供して、歸るがひが事候か、但覺しめす儘ならねば、殘念に候かと、にが〳〵敷も宣へば、重茂はすゝみ出、いかに頼光、貴邊の詞何とやらん、ゆへありかほに存るなり、身不肖ながら某も、藤つぼのしゆごなるぞ、ふぢつぼおかへりなきうちは、かうきでんの御車、まつたくさきへは叶ふまじ、我々をおし下さば、この重もちがうでさきにて、車をとめんらいくわうと、いきをひかゝつてのゝしれば、渡邊の綱つゝと出、こはぎやう〳〵しき有樣かな、頼光供奉の御車、とめて見たまへ〳〵と、四方をきつとねめまはせば、重茂いかつて、きつくわいなり、おのれ目に物みすべしと、たちのつかに手をかくる、坂田の金時かけ來り、てきたふ奴原片はしより、つかみひしぎて捨べしと、飛て懸るを綱をしとめ、はやまるな金時と、さま〳〵にせいすれどカヽルもとよりこらべぬあらものにて、せいしかねてぞ見へにける、かげかたも重もちも、此いきをひに肝をけし、すこしちゝする其隙に、頼光みくるましゆごなして、だいりをさしてぞ歸らるゝ、天晴けうのちんじやと、貴賤上下をしなへて、皆かんせぬ、者こそなかりけれ

## 第二

其後、右大將かげかたは、平の左官しげもちと、つ

れだちやかたへかへられしが、小聲に成て宣ふやう、扨も藤壺の女御とは、のがれざるゑんにより、深くも頼まれ道満を、かたらひ事を伺ひて、けふ本望を達せんと、思ひ立たるかひもなく、せいめい歸朝し剩、どうまんをとりことなす、後日にかれを糺明せば、たくみのしだいを云もやせんカ、ルいかゞあらんと大いきつぎ、せんひをくいし御ことばに、重茂眼をいらゝげて、かく大望を思ひたつ、某とても女御を、預り申せしかひもなく、かうきでんの御ゑせい、ひゝにつのらせ給ひなば、頼光今さへぎゞめくに、ほこさきつよく成敗を、只獨にておこなはゞ、中々無念の次第なり、幸こよひの御とのゐ、頼光番にて有ければ、ぐぶよりすぐに大内に、勤あらんはじでうなり、今宵ひそかに頼光が、やかたへ立越へ夜打して、道満をぬすみ取、ひそかにがいし後日のさた、頼光せひをたゝさすして、無せんぎ成ルよしきろく所へ申上ケ、あはよくはかかうきでんをもなき身となし、本望を達すべし、それも叶はぬ物ならは、大内山をよそになし、朝敵の名を立て、ていとをやみになし申されカ、ル御心安かれと、手に取やうにぞ申ける、かげかた二のいきほつとつき、ともかくも此上は、万事貴公にまかすなり、よきにはからひ給ふべし、はやとく〳〵と有ければ、御暇をこひ重茂はカ、ルしたくへ歸り用意して ハヤ三重日のくるゝをぞ上「待居たる、是は扨置、頼光は、晴明諸共參内し、加茂のけいばのちんじの事、どうまんが有様、せいめい歸朝しふんみやうに事顯れし其旨を、いち〳〵そうもんいたさるゝ、主上ゑいぶんまし〳〵て、しつとのねたみは藤壺が、朕を掠るたくみのほど、甚げきりん限りなく、今宵の中に藤つぼを、親里へ送るべし、扨せいめいには、御ほうび數々給はりて、天門の役となし、どうまんをばをんるのつみ、頼光かたくしゆごすべしと、御みすさつとをりければ、カカルせいめい面目ほどこして、有かたし〳〵と、頼光に式代あり、天門屋敷にうつらるゝ、扨頼光は平井の保昌を召れつゝ、こよいは某とのゐの役、おことはやかたに立かへり、どうまんをきびしくしゆごし、其上にもてきたふ者の多ければ、構てゆだんいたさるゝな、早とく〳〵との御諚なり、保昌よしを承り、いさゐ心へ候と、御まへを罷立、やかたにかへり下

ちをなし、門々をかためさせカヽルきびしくしゆごせし其有様、げに三重ゆゝしくこそ上「見えにけれ、既に其夜もごやのころ、平の左官重茂は、三百餘きの兵を、カヽル野ぶしのごとく出立せ、姉が小路へ押よせて、物になれたる忍びの者、二人塀地を飛こへて、ねいりし下部を指ころし、門をひらけば三百よき、皆廣庭へはせ入しが、されとも中門きびしくして、カヽル内へ入べきやうもなく、少ゆうよをしたりける、されとも平井の保昌、いまだいねもやらずしてカヽル近じゆのぶしをかたらひて、物語などしいたりしが、中門のひろ庭にて、大勢の人聲は、まさしく夜盗かしれものか、かた〴〵用意いたされよと、弓と矢つがひ立ければ、始はそゝやくぐんせいの、今は思はず大音上け、門を破れとぎしめくを、保昌少もさはがずして、中門を押披き、指取引つめいたまへはカヽルはやりをの兵ともハヤ三重たふれかさなり上「射ふせらる、扨其隙に、御家人達カヽルものゝぐかため切て出、軍はハヤ三重花をぞ上「ちらしける、軍中ばの事成に、主は誰共しらねとも、六尺ゆたかな大男、大まさかりを引さげて、よあけば何のせんあらん、我につゞけやみかたのせいとカヽルむらがる中にハヤ三重わつて入、はらり〳〵と上「なぎたふす、ひとへにやしやのごとくなりカヽル此いきをひにみかたのせい、ふせぎ兼てぞみへにける、平井の保昌是をみて、天晴てきやよきかたき、そこをひくなと云まに、れいの岩切かいかふで、打てかゝれば引はづし、かくれば拂ひうてばひらきカヽル両方めいよの兵術にて、しばし時をそ上「うつしける、かくてはいかにもどかしゝ、よれくまん尤と、互に打物なげ捨て、おしならべてむずとくむ、只一ひしぎとなす所を、保昌古老の勇者にて、した手に入て四つがいを、ちぎれてのけとしめつけて、ひらいてはたとけたをせば、まつさかさまにたふれしを、何様しれたる曲者と、頓て縄をぞかけたりける、是をみて敵のせい、とりこのあらば後日のさた、カヽル亂入てばひとれと、一度にどつとをしている、かゝる所へ四天王、やかたのさうどう聞付て、我も〳〵と大内より、一さんに欠來り、カヽル敵のうしろを無二無三に、はら〳〵と上「なぎたふす、かくてはいかゞ、叶はじと、重茂馬にむち打てカヽル跡をもみずして逃行を ハヤ

三重のがすまじいと上﨟追欠る保昌しばしと押とゞめ、野ぶしごときの奴原を、おふても何のせんあらん、こなたにしやうこはとめ置たり、まづ〳〵こなたへ來れよと、四天王の人々を、せいしとゞめてそれよりも、夜の明るをぞ待たりける、天晴かう成ル兵やと、きせん上下をしなべて、皆かんせぬ、者こそなかりけれ

## 第三

イロ地沉香亭のよきかほり、なくても色は紫の、はすへに匂ふ藤つぼはイロ地秋かれに見しわれもかう、時しもをとる粧ひを、思ひ出ればかきくもる、ますイロ地みの鏡引かへて、我は恨みでくらせとや、ゑゝ腹立やとみかへれば、獨こがるゝ身のうきに、つれてほたるのあなにくと、扇を上けてはたとうつイロ地げにこよいは文月七日、かのもろこしの王建が、銀燭秋光、ぐはびやうすさまし、けいらのしやうせんりうけいを、うつと詠ぜし詩の心、カヽルそらのけしきと思ひ出の、らんかんに、立盡して、大内山はそなたぞと、中はこひしくうらめしく、詠めをくれと白雲にイロ地妻よぶ鹿の聲計り、我もかはらぬうきねぞと、とはず語りの手枕に、しばしまどろみ、たまひける

## 管絃

歌カヽリ「千年ふる、君の謡山本アシおまへのまつがゑに、ひなつるは、すをくへは、池のみきはに龜あそぶ琴歌天下たいへい長きうに、納まる二ッ二重」御代の、ためしかや、花のはるのきんきよくはチクリくはふう、らくにりうくはゑん、りうくはゑんのうぐひすは、同し曲のさへつり、月の前のしらべは、夜寒をつぐる、秋風雲井に渡るかりイロ三重かねの、琴ぢにをつる、こへ〳〵なみだの露の玉章、いづみ涼しき、夏ぎぬはせみの羽ごろも、夕つゆの、草むらごとに、立よれば、あつさそ增るとこ夏に、いわ井のみつを、むすびとめても白たま、しづくにたへやらんましら玉、雫にたへやらんチクリたへぬをもひの、こひ草に、君かきまさば、むこにせん、みさかなには何よけん、

千世のちぎりを、かねよけん、音羽の瀧のたきの、しらいと、糸〳〵いとしやの、いとしけりやこそあふ事のせん、さんごをくだく一兩曲、こほり、ぎよくばんにをつ千万聲、時の調子にきをそへて、糸竹呂律の、遊興は三重筆も詞も上「およぶまし、今はたゞ思ひたへなんと計りを、人の恨み世のそしりを、つつむに心のいとまなく、いもゝ月にや待らんと、イロ地主上はそゞろに御心せき、左ちうじやう是なりと、頭の本地少將よしかねを、御供に召れつゝ、とゞろかしゆくみ車に、さなくとさゝんしのびの緒、霧のまがきもをぼろにて、月にはあらでゆふづくよ、御てんの邊りへ御車の、ながへをさしよせたりける時ヵ、ルかとりかづきし女房の、そともに寄そひねたりしを、さきにたちたるよしかぬが、此ふせいを見るよりも、君をそしと女御より、御迎の其爲に、つけ置れたる物ならんと、ぢじうのつぼねかすけどのか、たれ成らんと尋れば、ヵゝル女房こたへてそなたにぞ、待人有ていそぐらん、わらわは君にふかさるゝ、難波入江の捨小舟、萩の葉ならば時有て、秋風ふけと音するに、かれにはをとる浦かぜの、ときわのまつと契りし物を、あだに替りし藤壺が、すこしおうらみ申さんため、是迄參り侍らふなり、車のながゑも恨めしと、すがりついてそなきたまふ、よしかねは是なり申樣、扨は藤壺の女御にて渡らせ給ふか、ゑいしんよろしふましまさねば、かさねて叡慮を伺ひ、よきにそうもん仕らんとカゝルかたへにたすけのけ奉り、御車内へ引入れば、イロ地こは情なしかた〳〵と、すがらせ給へはふり放ち、カゝル猶取つくをつきたをし、跡押立て入ければ、イロ地せんかたなくもついぢの外、やまとがたりもからいしき、ひとり敷ねの袂たべなみだや、露けかるらん三重かくて主上は上「入御あれは、かうきでんの女御は、地官女達に打つれて、御迎に出たまふ、主上叡覽まし〳〵て、こよひの月のさやけさの、ことあひたりし詠めをば、あはれ諸共見ばやとて、是迄あこがれ來りし、勅諚あれはかうきでん、わらはゝ君を待佗て、忍びねになき候と、もゝに餘りし御こびは、てんねんみめうの御ようしよく、たぐひあらしと覺すにそ、叡かんはなはたかぎりなく、こやふみ月のしるしとて、その數々をかけられし、きりこたいこのなりもよし、こ

とに色繪をうるはしく、かみに切ばむるやうもじ、いにしへ今のかせんをばヵヽルあり〳〵とこそ寫されし

## 歌仙

二ッ三重「先人丸は、ほの〳〵と、あかしのうらの、朝霧と、本地叡吟あればかうきでん、みぎはつらゆき、さくらちる、本地木の下風は寒からで、ヲクリ空にしられぬ、雪ぞ降ける、げにや、ちる花を雪とまがふとをもしろや、本地いせがよみぬる三わの山、いかにまち見んとしぶとも、たつぬる人も、あらじといへと御身をば、いか成ル山の奥迄も、まろはたつねんいかにやと地勅諚あればかうきでん、げに勅めいなり去ながら、こなたにも又逢みての、後のこヽろにくらふれば、君まさぬ夜のひとりねや、あるは待佗ねもやらで、ふけ三ッ三重行かねの聲、きけばむかしはものを思はざりけりとよみしはげにも、ことはりと、思ひしられ候と、かこち顔にて宣へば、主上は由を聞し召、しかなり〳〵あたらよの、月かたぶかぬそのうちに、いざ〳〵こなたへ〳〵と三重れん中ふかくそ上「いりたもふ

## うはなり打

イロシチリ「くねるこヽろのふぢつぼは、いよ〳〵まさる亂かみ、ほぐれかねだる思ひをば、筆にいはせて、ふた下りみとの、こもりの折からに、御れんまぢかく立よりて、さきつかたより歌仙共、御ほうへん有けるが、此歌の心ばへ、御ひほうならせ給へかしと、御れんの内へたんさくを、なげ入給へはかうきでん、たれやと取上見給ふにヵヽル小野の小町が歌とみへ、色見へでうつろふ物は、世の中の人のこヽろの、花にぞ有けると、吟じさせ給ひつヽ、いともあやしとみ給ふに、思しよらざる藤つぼの、いとろうたけてをはします、かうきでんは心へずや、雲井にくゆる藤つぼの、とかふのつたへもましまさす、御れんに近づき給ふ事、有べき事共おもほへず、藤つぼは聞たまひ、をろかなりとよ大内山、ともに詠めしくもゐの月、ほぞをならへしふようぞと、人にいはれし身の花も、かたえは殘り片枝は一ッ三重秋くる風に、ちり〳〵と、ふり捨らるヽわがそでを、思しもいだ

さでなかまくら、いやかはらしなわすれじな、行末千世との御契り、詞聞も恨めし見れば猶、起ふしわかぬうづみ火の歎跡より戀の、責くれば、せんかた浪に立かねて、是迄參り侍らふなり、主上叡聞まし〳〵て、おろかなりとよ藤つぼ、カヽルまろか心の替らずは、人に恨みは有まじきに、などかくねじけかたくなに、牛のつのもじすぐならぬ、はや〳〵かへれと勅諚有る、藤つぼ承り、地かほど迄になげゝ共、つらきは君に添ぶしのカヽルあふむの鳥のくだかけに、あだこと申もの有て、ますほのそめのゆへならめ、今は早是迄と、守刀をぬき持て、御れんの内へかけいり地らんとし給ふを、かうきでん刀をうばひ、君にはむかふじやいんのつみ、我をな恨み給ひそと、心もとを指通すカヽル差通さるればきも魂も、きへ〳〵と成うせ、朝日うつろふ秋風は、身にしみ〴〵とちんの上カヽル夢は破れて藤つぼは、御目をさまし給ひつつ、あたりを見廻しこはいかに、君を戀しと思ひねの、わが心から見る夢よな、吉にてもゆめにさへ、かうきてんの女御にカヽルけをされぬるこそ口をしや、地猶も思ひは十寸鏡、見よ〳〵今の恨みをば、カヽルヽ牛の時詣して、思ひしらせん物をとて、面色替つてみへ給ふ、カヽルじやゐんの一念ヲツヲをそろしき共、中々申計りはなかりけり

## 第四

其後、陰陽の頭晴明は、源の頼光と、殿下のみたちに參りつゝ、頼忠公に申やう、扨も此日、ほくとのへいていうすくして、かくせいしゐんをおかしつゝ、月をつらぬく、ずいへん顯れ候故、天文地理をくはいがうし、へんくはを伺ひ候に、ほうそをしゆそなす者是あり、ことに今宵は月ちかく、星の位の高ぶりて、くはきうに相みへ候、此由申上ん爲カヽルはせさんじ候と、謹でぞ申ける、關白頼忠聞召、大きにおどろかせ給ひ、おぼろけならぬ御大事、神祇官にてはらいあり、御物忌有やうに、そうすべしと宣へば、せいめい承り、某家のひみつにて、邪魔將來のしやうげをば、はらひ除き奉らんと、白紙を申うけ、神道ひみつの文をじゆし、かなたこなたへ折たゝみ、かたへをきればふしぎやな、たちまちひとつの

鳥となる、時にせいめい頼光に、打向ひ器望の武士をつかはされ、此鳥の落所、見届ケさけ給ふべし、然らば事のしれ申さん、早とく〳〵と云ければ、頼光渡部の綱を召、此鳥のをち所みて参るべき由仰らる、せいめいかの鳥をこぶしにのせて、文をとなへほつとふく、いきにじやうし此鳥こくうにまひあがる、渡部馬にむちをあてヵ、ル其をちかたを追行しはハヤ三重ふしぎ成ける上「しだいなり

## 貴布禰の道行

片チロシ「花さかは、つげんといひし、やま里の其音、づれはあらねども、わがみは出る戀のやみ、かなわに燃る燈火に、猶たきそへ、ししんゐのほむら、むねをこがしてわきかへる、歌ひさげの水はゆとなれと、猶さめやらぬわがをもひ、しばしはるゝと立よれば、かもの川せも我にはつらや、君をまもるとなかれ行本地其水垣の水淺き、替る心のをく迄も、誠たゞすの神ならは、など僞りをゆふだすき、かみはをどろにふりみたし、心の鬼はいつしかに、姿耻かしみぞろ池、いけのはたへやはたひろの、蛇身と成てくる〳〵、くるはたれ故君ゆへと、思へといとゞこゝろうき、一夜とだにもかなしきに、百夜はつらや小野塚二ッ三重市原野邊を見渡せば、ぼたんやはちすのとうろうを、かのもこのものこずへにかけて、にゐたまゝつる、有さまは、本地こや初秋の印かや、君もわらはに秋きぬと、目にはさやかにみへねども、心はよそにふく風の、かぜにもまるゝいなむしろ、しゐてねん〳〵ねたましや、あなねたましやかほど迄、かはる心の有なから、二せかけてとはいつはりや、月もみそかにくらまやま三重くらくとかへらし、馬も車も、なく〳〵そちしほにそみしわらんずも、つゝかんほどは緒をしめて、しめてゆるめて、ねしよはも、今はりんゐのしるへかと、昔戀しく忍るゝ、忍ふ其夜はやみこそよしと、いへど山ぢに行なやむ、なやむ思ひの身は埋木よ、朽てみ谷のちりとなる、谷の水音とん〳〵とゞろ、おつるなみだの瀧ならん、やあおやまつたり吹まよふ本地みやまをろしに夢さめて、みれはよしやなや今更に、恨みられしも恨みし人も、ともにきへ行あだしのゝ、つゆとは思へ共ぼんのう

のつよき、きづなにせめられて、牛の時詣する、我身ながらもつれなしと、よし足曳の山水の、たぎりて夏に落合の、川も龐に見へみ、みへずみ妄執の、カヽルル雲となり、雨となる、心のたけを夕時雨、思ひしらせんまてしばしと、ないつ笑ふつ、悦びつカヽルじやゐんにひかるゝ一念の、うしみつ過る比ほひに三重貴船の宮にぞ上「つきたまふ、かゝる所へ、渡部の綱は、してうの行方、跡を求て追きしが、きふねの山に落ければカヽル則馬より飛でをり、暫く息つき爰かしこ、見廻りたりしに物すごく、朧月夜に人かけの、あやしく見ゆるふしぎさにチクリ事を伺ひしたひより、かくとはしらでふぢつぼは、神前にひざまつき、なむやきぶねの大明神、こよひ七日のまんさんなり、足を空にし詣たる、印をみせてたまはれと、深くきせいし御まへなる、神木に打向ひ、此釘はイロ地かうきでんにうつ成ぞ、にくしつらしの一念は、鬼共なり蛇共なり、終には思ひしらせんと、てう〳〵〳〵と打給へば、大杉より血ながれて、貴船の川もくれなゐに、錦をさらすごとくなり、あらありがたし〳〵と、重て釘を取出し、又此釘はわが國の、あるじには似ず恨めしや、あせのごときの綸言の、出ても詞かゑるうきなみだ、替るましとのむつことは、皆僞りにて有けると、しらでとけにし下ひほの、うらかく計り主上をば、カヽルうつ手の下にちるたまの、きどくをみせてたび給へと鎚押取て神木に、カヽルル既にうたんとし給ふを、渡部頓て飛かゝり、押とどめ、そも先汝は何者ぞ、一天の御あるじにてをはします、君をしゆそする御子はいかに、まつすぐに申べし、さなくは己、目に物見するがカヽルいかにいかにとはつたとにらんて申ける、女御は由を聞召、みづからを何ものとや、汝等ごときの下々に本地名のる共よもしらし、爰をはなせと有けれは、渡部聞てしも〳〵とは、くわんたい成る詞かな、我こそ源の、頼光が郎等、渡部の内舎人綱なるぞ、何うとねりつなとや、わらはゝ藤つぼの女御なり、其時渡部、はつと云てひざまづき、何女御にてましますとや、ぞんじ申さで無禮の段、まつひら御めんを蒙るべし、併、かくかちはだしの御有樣、女御の御身にははしたなや、しつとゝ申は下部の心、后妃の位にましまして、何の御不足候て、君をばのろはせ給ふぞや、

藤つぼは聞召、扨は汝が主頼光、かうきでんのうしろ見故カヽルあなたのみかた聞もいや、あだなるいろのますはなに、見かへさせたまひにし、君のゑいりよのうらめしさに、君共に、かうきでん、命をたちて長き世のカヽルしんゐのむねをはらさんため扨こそ、かくははからふなり、渡部聞てけにや高きも賤しきも、色には亂るヽならひかは、かうきでんへ御恨みは、御ことはりにて候が、君に恨みは候まじ、女御と申も我君の、御恩にては候はずや、今より後は此事を、ふつヽと覺し直させ給ひなば、頼光方へ御供し、互におとらぬ后妃のさた、よろしくそうさせ申べしイロヂクリまづ〳〵、こよいはおかへりあれ、藤つぼは承引なく、はや此ごとく汝等に、見あらはされし上からはカヽルいよ〳〵をもひはとまるまじ、せひ〳〵こよひは過さずして、カヽル命をとらで叶はじと、面色かはりすさまじく、釘押取て神木に、又立向ひたまひしを、渡部をさへてかほど迄、りを盡し諫るに、御承引候はずは、せひもなし御命を、うしなひ申がいかにと云、何カヽルころさばころせきらばきれ、わらはがねがひをさまたげば、汝共に取ころすぞ、渡部今は是迄と、太刀ぬき持てはたと切る、はつと云て藤つぼは、渡部に飛かヽり、持たるたちにかなぐりつき、ゑい恨めしやかほどまてカヽルみてし願ひをかくのみか、やいばにかヽる腹立や、死に替りいきかはりて、まん〳〵劫をふるとても、かうきでんと我君を、取ころさでは置べきかとカヽル御目もちはみ色替り、はがみをなしてぞみへたまふ、渡部是を事共せず、もぎはなつてかきいだき、心もとを指通せば、はつと計に藤つぼは、終にむなしく成給ふ、しがいをきぶねのかは浪に打入て神木に、打たる釘をぬき捨て又立かへる橋の上、中ば渡るとみへしとき、うづまくハヤ三重淵の底よりも、藤つぼのをんねん、忽大蛇となり、橋かる〳〵とかづき上げ、渡部共にみなそこへはカヽルねかへさんとしたりしはハヤ三重すさまじかりける次第なり、渡部少もさはがず、たちぬき持て切拂へどカヽルはたらくべきやうなき所へ、はくしの鳥のとびきたつてカヽル渡部をかいつかみハヤ三重いづこ共なく「飛行は、蛇身はいかり、もだゑつヽ、神木にくる〳〵と、くるしげにつく息は、猛火と成てもへ上れば、みやましきりにし

んどうし、風雨いなつまゝヤ三重天地をかへせば「社人達おどろき、てん手にたいまつを、我も〳〵ととほしつれカヽル川へ來れは執心は、あら腹立やとほのふをふき、こくうむりやうに追かけ〳〵、貴船の川浪しんるんに、とんてぞ入にける、天晴きたいのしだいやと、きせん上下をしなべて、皆恐れぬ者こそなかりけれ

## 第五

其後、關白の御やかたに、せいめい賴光會合し、しゆそする者の其有所、渡部が注進をカヽル今や〳〵と待給ふ、雲井はるかにくだんの鳥、渡部諸共カヽル庭上に、どうどをつ、人〳〵是はと立よれは、鳥は則伯道と顯れ、はるかに有やせいめい、我は是、もろこしの伯道、汝にあたへし一卷の、ひじゆつをしるせし其きどく、今こそ思ひさとるらめ、此上とても其ごとく、妙術をきはむべし、是迄なりやさらばとてカヽル文珠菩薩と顯れヲクリひかりを放つてとびたまふ、何れもきいの思ひをなし、御跡拜したまひける、渡部が申やう、鳥のをちしは貴船の山、しゆそする人は藤つぼ、是玉體の御大事、御いたはしくは候へ共、某が手にかけ、御命をたち申、御さいごの有樣、其かたち異形にて、既にあやうき所に、してう來つて某、命をたすかり、罷歸り候と、一々申上けれは扨々カヽルをそろしき次第やと、何れもかんじたまひける、關白賴忠宣ふは、藤つぼの有さま、じごうなればせひもなし、せいめいが占かた、神に通せし故ならん、そうもんなさんと有ければ、せいめい承り、此上とても御つゝしみ、然るべしと申上る、かゝる所へ日藏人、あはたゝしくはせさんじ、かうきでんの女御、御殿を出させたまひ、いづ地共御行方のしれざる由、禁中の周章、をびたゝしく候と、大息ついで申ける、關白驚き給ひ、其御行方を尋よとカヽル爰よかしこと夕間暮ヤ三重らうがはしくこそ上「見へにけれ、去程に主上は、御物忌の其内、かうきでんの女御さへ、だいりを失させ給ふにぞ、しんきんをいたましめ、殘し置れし御文を取あげ、ゑいらんありければ、吹ちらす萩の露にて、身をしりぬ、うき世のあきに、あはではてめやと、かく計りなる

言の葉は、藤つぼがねたみのほど、思ひ詞つゝけてあぢきなく、身を捨ぼだいの道に入けるかと、叡慮くるしくみへ給ひ、ひそかによしかぬ是なりを、御側近く召れつゝ、思ふしさいの有間、忍びてイロ地花山寺へまふでせん、用意せよとの綸言なり、兩卿目とめを見合て、是はいかゞと思へ共、りんげんなればん力なく、畏てをうけをなす、それよりも主上は、御しんでんを出させ給ひ三重花山寺さしてそ「みゆきなる

## 花山寺御幸

「哀れもよふすおか野邊に、夜すがらとほすほたるひも、きへぬ思ひのあれはにや、虫だにむねをやこがすらん、げにありはらのなり平の、きちうの詠めに飛ほたる、雲のうへ迄いぬべくは、秋風ふくと初鴈に、つたへてくれのかねの聲、百八ぼんのうのねふりさめよとみほとけの、をしへはそれとしりながら、戀のやみちにたと〳〵と、道もさだかにみへわかず、あゆみ兼させ給ひけり、よしかぬ是成申やう、こよいの中に花山寺迄は、中々行幸成がたくましませは、向ふに人家の燈火みへ候、あれへ行幸なし申さんと、御手をひかへたてまつりひ三重かりをしるへにたづねゆく、かゝるうき世に秋のきて、朝げの風は身にしめと、むねを休むる事もなく、きのふもむなしく暮ぬれは、まどろむよはぞなみたなる、あら定めなの生がいやな、かゝる所へ兩卿は、主上の御手を引まいらせ、やう〳〵たどりつきたまひ、しばのあみ戸を音つるゝ、あるじの女立出て、たれにて渡らせ侍らふぞや、其時よしかぬ我々は、道に行くれ足はのそイロ地つじがましく候へ共カヽルしばしつかれを休むるうち、をやどを頼みたてまつる、イロ地女は聞て安き事にて候へと、よにみくるしき芝のいほ、殊によはひも中そらに、またかたふかぬひとりねの、さしもいぶせきねやの内、カヽルみせ申さんも耻しや、おやどはかなひ候まじ、よしかぬ重ねて道はくらぶの山たかみ、せんごをぼうじて候へば、あこぎとはをほさめとカヽルこよい計りはかりねせん、いや叶はじと柴の戸を、さすがをもへはいたはしや、さらばとゝまりましませと、カヽル扉をひらけば人々はチクリ急ぎ立入たまひけり、見なれ給はぬしつがわ

ざ、主上よしかぬを召れつゝ、あれは何と云物ぞ、よしかぬあれこそ賤の女の、いとなむわざのわくかせと、申物にて候なり、主上此よしろいぶん有、しもが下にも此ごとく、やさしきわざの有けるな地いとなみ、見せよと勅諚有、よしかぬあるじに近付て、いざもてなしにわくかせを、いとなふで見せ給へ、女は打ゑみつねにさへヵゝルいとなむわざをましてやは、御なぐさみと成るならばヵゝルいく世もへなんわくかせの三重麻草のいとを上「くりかへし

## 絲繰

「まさうの糸をくりかへし、むかしをいまになぞらへて、君にもつるゝ糸柳、亂てもなを麻ぎぬや、賤がうみそのよる迄も、世渡るわざこそ物うけれ、かゝるうき世にながらへて、明暮隙なき身のうさを、たれにかたらんかたいとの、恨みてかひはなけれ共、めぐり〳〵て月かけの、光る源もじ御げんもじ、五條あたりのあばらやに、夕がほの宿をたづねしは、日かげのいとのかふりきし、それは名高き人やらん、かものみあれにかざりしは、いとけのくるま、引つれてきつれて爰に、いと櫻色も盛にさく比は、くる人多き春のくれ、ほに出し秋の糸、すゝき月によるをや歌待ぬらんァィノテ今はた賤がくるいとの、ながきやみぢやくろかみの、をもひみだれしいにしへを、まきかへしつゝゆひもどし、又ときなをす玉の緒の、むすひとめたよ恨みのせきに、めぐりあひたりめぐれやめくれ、品よくめぐれ小車の、そのくるしみを思ひあかしの浦千鳥、ねをのみ獨なきあかす、ひとりあかせる恨みをば、よその上となをぼすなと、云かと思へは忽に、めんしよく替りつのを出、頭にいただく金輪の足の、ほのふの赤き鬼と成て、あら珍らしの我君や、うらめしや捨られて、思ひにしづむ泪川、詞むくひは今ぞ夕露の、きへなん命いたはしやと、はつたとにらんで立たりしは、すさまじかりける地しだいなり、よしかぬ是成さはがずして、つるぎをぬき持切拂へばヵゝルをんれうさすが恐れつゝ、少ちゝする其隙に、兩人君をかこひつゝ、足にまかせて逃行を、いづく迄かのがさんと、跡をしたふて追かくるはハヤ三重すさまじかりける上「しだいなり、かゝる所へ源の賴光、五人の郎等引ぐして、ものゝ

くかためたちをはき、主上の御まへにひざまづき、あやうき御なんをしゆごいたせと、ぜいめいいしらせ候故、はせさんじ候と、謹で申さるゝカ、ル良兼これなり力をゑて、君をしゆごしてをはします、かゝる所へ藤つぼのをんれう、くろ煙を立てはせ來り、八めんの惡鬼となり、やあ賴光我はもと、山田のをろちが一念、藤つぼねたみの一心に、入替て玉體に、近づきて引さき捨、まこくになさんとはかりしに、せいめいがかぢ賴光が武勇、三種のじんぎに恐れつつ、本望達せぬくやしさよカ、ルつかみさかんと呼はる聲ハヤ三重てんちをかへして上「飛かゝる、八〳〵少もさはがずして、じゆもんをとなへ切立ればカ、ルあまてる神のをうごのかげ、ひかりに恐れてうづまふを、四天王の八〳〵、ずだ〴〵に切たりけり、賴光ずかさず首打をとし、八方にらんで立たりしは、地國增長廣目多門、誠に四天のしゆごなりとて、貴賤上下をしなべて、皆恐れぬ者こそなかりけれ

## 第六

其後、賴光、四天王の者共は、君の御供仕り、だいりに還幸なし申せば、あべのせいめいかうき殿の御供し、急き參內仕り、君しんきんをいたましむるも、女御失させ給ふ故、ひみつをもつて御行衞、尋ね申てかへりし旨、謹でそうもんす、主上ゑいかん甚敷カ、ル誠にふしぎのせいめいやと、おの〳〵かんしたまひける、かゝる所へ、勢州のたんだい、左近の太夫はせ來り、扨も右大將かけかた、平の左官重茂、すゞか山に城郭をかまへ、きんざいの野武士をかたらひ、むほんをくはたて申なり、捨置れなばゆゝしき後日の御大事カ、ル急き討手をつかはされ、然るべしとぞそうしける、內よりのせんじには、急ぎ賴光立向ひ、逆臣ちうばつ仕れとの勅諚なり、賴光おうけを申つゝ、都合其勢三百よきカ、ル都を立てそれよりもハヤ三重せいしうさしてそ上「向はるゝ、すゞかの城になりしかは、カ、ルふたへ三重にハヤ三重押取まき、時の聲をぞ「上にける、城の內にも兼てごしたる事なれば、同く時をぞ合ける、其時賴光、駒のり出し大音上け、ふてんの下に住ながら、君をあざむくふてきもの、賴光上意蒙りて、罷向て有けるぞ、命

をしくは降參せよと、たからかに呼はつたり、重茂聞て物ないはせそ打ちらせとヵゝルてきみかたハヤ三重入亂れ、爰をさいことたゝかひける、坂田の金時、是をみて、ゑゝもどかしゝみかたのせい、某さきをかけんとて、れいのてつ棒引さげて、ヵゝル大勢にハヤ三重割て入はらり〳〵と「なきたふす、何かはもつて、たまるべき、むら〳〵ぱつとぞちつたりける、時に城の内よりも、岩上大六鬼淵、鉄どうと名乗て、一もんじに打てかゝる、金時すかさず引はづし、ゑしやくもなくかいつかみヵゝル一ふりふつてなげければ、みぢんに成てぞ失にける、鐘どう得たりとむずとくむ、ゑゝおこがましやをのれめと、ひざの下に引しいて、首ねち切て捨にけり、重茂今は是迄と、打て出るを、渡部すかさず立向ひ、しばしが間たゝかひしが、いつ迄時をごすべきと、渡部いらつて打太刀に、かたさきよりちの下迄、ばらりずんと切落し、首ちうに打をとし、むほんのちやうぼん重茂は、渡部の綱討取たりと、たからかに呼はつたり、景かた今は是迄と、取てかへし逃んとする、定光末武をりかさなり、高手小手にいましめて、勝どきどつと作りつゝ、都をさしてぞ歸りける、千秋万歳目出度と、貴賤上下をしなべて、皆かんせぬ者こそなかりけれ

源氏花鳥大全終

# 艶色萬歳頼政

## 第一

名のりかけたる、ほと〳〵ぎすなのりかけたる、ほとゝぎす、雲の上にやひゞくらん、是は兵庫のかみ地源の頼政なり、扨も當今、御しんでんの上にして、よごとにあやしきこへ有て、御のうおもくましませば、ひきめを持てようくはいをカゝルたいぢせよとのせんじをかふむり、なし打ゐばしに白あやの、はちまき長くむすびさげ、初もみぢのひたゝれに、うこんの大くちそばたかく、らいじやうどうといふ弓に、兵は水はの矢を取そへおんともには、いのはやた、赤皮おどしの腹巻に、大たちをぬきくつろげ、大の眼をいらゝげて、四方八めんにゝらみつけ、しう〳〵おとらぬ出立にて、よんのおとゞの庭上に、心をしづめこくげんを三重今や〳〵と「待いたり、既にふけゆくみじかよの、うしみつ過る比おひに、とう三でうの方よりも、黒雲一村まひさがり、御てんのうへにおほふとみへしが、大風こぼくの枝を折り、しんどういなつまおびたゝしく、御殿もゞゝ三重くづるゝ「計りなり、すはや是ぞと頼政は、すいはをつがひ高聲に、なむ八まん大ぼさつと、しばしたもつて切てはなつ、何かはしらず雲中にてカゝルあつとさけぶこゑぞせる、すかさず兵はを打つがひ、つるおと高くへうといる、手ごたへと、つがひひやうしに聞へてはつしとたつ、ゑたりやあふと、矢さけびのこゑ諸共にどうどおつる、いのはやたつゝとより、取ておさへこぶしもぬけよ通れよと、九かたなぞさいたりけるカゝル此さうどうにみかきもる、衛士共たい松ふり立て、よくみてあれば頭はさる尾はくちなは、足手は虎のごとくにて、なくこへぬへにことならずゥシ堂上堂下一同にチクリ悦び給ふはかぎりなし、たちまち、御のうへいゆふ有、ゑいかん甚淺からず、此けせうをは清水寺へ、うづむべしとの御事なり、扨關白もとさね公をもつてりんげんには、此度のけんじやうに、從三位にじよせられ、薄綠といふ寶劔に、御衣一重給はりカゝルうぢの郡を一圓に、あておこなはるゝ所なり、又官女の内を一人、下さるゝとの勅定、頼政うれしさ身にあまり、時忠の娘あやめの前

を、申請度候と、言上あれば關白殿、來る五月五日には、御ぶたいにてくはんげん有、いづれなり共其時節、のぞみ申せと有ければ、頼政あつとお請をなす、其比源家の人々に、三位にのぼる人なければ、世に源三位としやうしつゝヵゝル家の面目よの三重聞へ、うら山さるは「なかりけり、玉のかんざしゆらやかにヵゝルゆるぎ出たる其ふぜい金銀、れうら色々の、花をかざりていちやうに、ふたりつれたるまひ姫の、いづれをわけん春秋や、花も色そふ君が代は、千秋樂にするゑとをく、さかへさかふる天が下、天平樂と悦ふなる二ッ三重こてうの舞の袖かろく、せみの羽衣いつしかに、夏たつけさは玉かしは、はもりの神にしめはへて、たむくるしでのたおさとり、やうりうらくに皆月の、あつき比にはわうしきの、しらべにかくるあふぐうらく、きくもすゞしきすいてうナクリ樂水の、綠のせいがいは、秋のしらべの面白や、りつのひゞきを身にしめて、雲井の月の影高く、こゑをほにあけ初鴈の、天の川せやわたるらん、よのまの風に霧晴て、さへこそ渡れ冬はまた、あられ初雪、ふれやふれ、我ふるつまのいとしさよ、みぞれふるよはねやさむみ、きてかさねたる戀衣、うらみてあかす折も有、地君の情はつくはねの、かけよりしげき秋津すのヵゝル外迄もゆゝめぐみの末、何かはもれん道すぐに三重げんじやう樂の「舞の袖、かへすかへすも、大君の御代を祝ふやばんじゆ樂、打やつつみにかねのこゑ、びわ琴わごんひちりきに、せうこゝの度そうすれば、ほうわう爰に舞遊びヵゝルしんにをすますくはんげんは三重心ことばも「及ばれず、かねてより頼政は、あやめの前の方よりも、ちつかにあまる文をゑてカゝルいつみきとてかみかの原、見もせぬ戀にあがれて、思ひなづみておはせしが、けふのふたりの舞姫を、いづれをそれとしらざれば、いかゞはせんとあんぜしに、關白仰けるやうは、いかに頼政、此二人の官女こそ、あやめの前まこもの前、いづれを望候と、仰あれば頼政は取あへず〻十三重さみだれにぬまの、まこもゝ水こゑて地いづれあやめと、引ぞ煩ふとゑいし給へば、元さね公、あやめの前の手を取て、けふは幸たんごにて、軒のつまにもあやめふく、よき折なれば伴ひて、妻にみよとのりん言ぞと、頼政に地給はれは、互に目とめを見

合て、につことゑみて指うつふき、面を赤め嬉しさを、袖につゝむもけふよりは、あらはにみへて夏衣、ひとへにかはす契の末ヵゝルげにたのもしふ人々も、皆悦ひをがし給ふ、頼政はそれよりも、あやめの前の手を取て、退出せんとせし所へ、丑寅のすみにして、物音しきりにさはがしく、人々あやしと見給ふに、大和國の住人石門將ぐんの末やう、石川の次郎秀門、直垂のつゆを取、大弓にぬりつるかけ、十六さいたる白はの矢を、ほろのごとくにときみだし、郎等黒塚江内にヵゝルものゝぐさせて召つれ、庭上に畏り、扨も某、今日とのいに相つめしに、れいけいでんの上に、黒雲一村まひさがるを、只一矢にてゐておとし、是迄持参仕るとヵゝル侍共にかき出させ、御前にぞ直しける、人々立寄見給ふに、頼政たいぢなし給ふ、ぬへに少もかはらねば、又重ての悪霊かと、舌をふるふておはします、時に秀門が申やう、某が高名も頼政が高名におとるべきやう候はねば、我も望の官女有、給はれかしと言上す、頼政はすゝみ出、いかに秀門、其化生はいづこをばしゐ給ひしぞ、矢つぼを見んと宣へば、秀門大きに腹を立、御身を頼んで秀門が、高名をなすべきや、退給へとはつたとにらむ、いの早太もとよりも物をこらへぬ男にて、おゝ〳〵高名はさもあらん、其化生に某がとどめをさしてゑさせんと、つばもとくつろげ飛でかかれば、此ぬへ忽起上り、逃んとするをいのはやた、そくびをつかんで取てふせ、かふりしめんを引はづせば、あんにたがはず大男、すはこそ正たい顕れたれ、やうすを申せとせめつくる、秀門むねんや顕れしと、たち引ぬき打てかゝるを、とのいぶしろうせきものと押取まく、叶はしと秀門はヵゝル江内諸共高ついぢ、とびこへ〳〵逃失ける、人々つゞいて追欠るを、關白せいし給ひつゝ、やうすはしれたりしづまれヵゝル扨頼政にはゆだんなく、いよ〳〵大内しゆごなすべし、先はあやめを伴ひて、退出あれと宣へは、頼政は有がたし〳〵と、あやめの前の手を引て、だいりを退出し給へば、早太は件のくせ者を、やかたへかへりせんぎをとげんと、追立〳〵それよりも、君の御供仕るヵゝル天晴時の高名やと、きせん上下おしなべて、皆かんぜぬものこそなかりけれ

# 第二

其後、石川次郎秀門は、だいりにてのろうぜき、其上にふかくを取、都の住居叶はず、さがのゝへんにちつきよして、かしん黒塚江内を近付、いの早太めがはやり過、いらざる事を言出し、それゆへにこそ剰弟の國五郎秀重をばとりことなし、跡へもさきへもゆかざるなり、もと此いしゆといつは、大内へんげたいぢのぎを、某に仰付られしが、我思ふには目にさへぎらぬへんげのしよい、若も事をしそじなば、弓矢の名おりと思ふゆへ、事をつゝしみじたいなす、是ものゝふの本意ぞや、それにあの頼政が、ゐたりがほに領ぜして、へんげをたいぢなしける事、思へば〳〵むねんなり、しかし是頼政が、武かうにはあらざるなり、かれが家の調法に、雷上動といふ弓兵波水破と云矢有、並なきめいきにて、此弓矢を持しゆへ、思はぬ手柄をいたせしなり、何とぞして此弓矢をカゝルうばひとらん手だてこそ、有やいかにと云ければ、かしん江内承り、究竟の事候、某忍びをゐたりし者、かたらひ置候へば、かれらを頼み一同に、頼政方へ忍び入、うばひ取て秀重をも、御供申帰るべしカゝル御心安かれと、手に取やうにぞ申ける、秀門大きに悦びて、然らば汝にまかするなり、幸こよひやみにて有、用ゐをいそげはやとく〳〵、カゝル畏候とチクリ忍びの上手はたれ〳〵ぞ、いなづまのとびくも、やみのよの鐵太郎、小ぐまおしかをさきとして、つがう其勢三十き、一やうに出立てカゝル其日のくるゝをハヤ三重今や〳〵と待ゐたり、かくとはしらで頼政卿、みたちにかへらせ給ひつゝ、いも早太を御召有こよひはとのゐにさんだいす、汝は宿に殘つゝ、兵は水は雷上動、かねて預けおく所、用心おこたる事なかれとカゝル瀧口を御供にて三重きんりをさしてぞ「あがらるゝ、既に其よの、子の刻計と覺しき時、三十人の忍びの者カゝル人の寶をうば玉の、黒き裝束一やうに、しこみのちやうちん相詞、半弓打物取々にカゝル我も〳〵と頼政の、ついぢのそとにうかゝひより、稲妻の飛雲、ひらりとうゐに飛上りカゝル内のていをみてあれば、人しづまりて音もなし、すはやよきぞと云まゝに、門の貫の木ねぢ切て、相づのふへをふきければ、三十人は一同に、我

も我もと亂入ヵ、ルかしこに有し番の者、こはろうせきとひしめくを、おこしもたてず切てすて、其中に一人を高手こてにいましめて、寶藏の有所をあんない致せ、さもなくは命を取がいかにと云、番人わなゝき何が扨、命をたすけ給はらば、あんない致申べし、寶藏は所院の東に御ざ候、いの早太殿よる〳〵は、きん番致され候と、申ければ引立、さきにあゆませあないさせ、寶藏さしてゆかんとする、かゝる所に長七となふ、物音のあやしさに、うかゝひ寄てみてあれば、すはしれものよと十五そく、大のかりまた引かふで、よつ引てふつとゐる、眞先にすゝんだる男が首ほねゐ切てカ、ル跡に立たる大男、二人つらぬきどうどふす、すはや夜討ぞ殿原達、某是にてふせぐ內カ、ルものゝぐあれと呼はつてハヤ三重指取引つめ「ゐる程に、とうぞく共はたまりかね、とあるこかげへさつと引、かくる所に、頼政のみ內なる、相澤源藏森山七郎、一もんじに切て出カ、ルとうぞく共にわたりあひハヤ三重火花をちらして「切立る、手元にすゝむやつ原をカ、ル六七人切てすて、しばらくいきつきいたりける、こゝによ打の方よりも、六尺ゆたかな大男、まつくろに出立て、八尺計のつげの棒、矢がらのごとくふりまはしカ、ル兩人にわたしあひハヤ三重爰をせんとぞ「たゝかひける、さしもすぐれし者共も、何かはもつてたまるべき、大ちにどうど打すへてカ、ル力にまかせて打ければ、みぢんに成てぞ失にける、かゝる所にいの早太、寶藏しゆごしていたりしが、らいのごとくにかけ來り、ゑゝとうぞくふせいの奴原に、忍びいられし口おしや、たい松出せ者共と、一丈計の鐵の棒、まつかうに指かざし、打てかゝれば大男、しづんですそをながんとする所を、かさにかゝつて打ければ、忽むなしく成にけり、殘る者共一同に、しこみのてうちんふり上て、是こそねかふ敵よと、むらがつて打てかゝる、早太笑ておもしろし、いざ參らんと大せいをカ、ル弓手に相つけめてにうけ、八方拂なぐりたて、たゝきちらしてかけ立ればカ、ルとうぞく共叶はずして、中をあけてぞ通しける、其隙にみ內の人々カ、ル一度にどつとわたしあひ、火花をハヤ三重ちらしてたゝかひける、かゝる折ふしきんりにて、ぬへにたばかりとらはれし、秀門が弟國五郎秀重は、かごみの內に有け

るが、よき幸と思ひつゝ、やがてかどみを忍び出、寶藏にはせ入て、兵は水は雷ト動、やす〳〵と盗取、すはや本望とげたりしぞカヽル跡につゞけや者共と、くもをかすみに逃て行カヽル早太むねんや餘さしと跡をしたふて追かくる、くらさはくらし道みへず、其行方のあらざれば、せんかたもなくたゝすみは、み内のやうすきづかはしく、取てかへせば頼政卿、きんりにてさうどうを聞召されて、とのいのやくカカル御ゆるし蒙りて、急やかたにかへらるゝ、早太はつとひざまづき、有しゝだいを申上る、頼政大きに立腹有、かゝるろうぜきとうぞくは、よのつねの事なれど、わが家のてう寶三つのめいきを、やみ〳〵とうばはるゝことは何事ぞ、きつと尋てわが前に、持來らざる其内は、七生迄のかんきぞやカヽル罷立と、にらみつけ、奥をさしてぞ入給ふカヽル早太だうりの泪にくれ、君の仰はしごくせりカヽル天はひゝさう地はこんりんならくのそこに至共、取かへさでは此御所に、立かへらじと飛上り、おとり上てはがみをなし、行方しらず出たりけり、かのいの早太か心の内カヽルむねん成けるしだいやと、きせん上下おしなべて、みなかんぜぬものこそなかりけれ

## 第三

其後、三重うき世は戀の、ふちなれやナタリかよひくる身は川水よ、まもる人めはいせきにて、まつげしからむ泪川、浪にゆらるゝまこもの前地はづかしながらけふこゝに、やつしてかくも出る身の跡は三重野となれ山吹の、せにかけみれはわがすがた、けうとき計おもやせて、しのぶのみだれひとしれぬ、思ひをつねにするがなる、ふしの高根を音にのみ、きゝ渡りつゝあふ坂の、關のこなたに年をふる地心は我が物なれど、まゝにならぬはいな物よ、つれなきひとゝしりながらカヽルこふる心のおろかにて、すきには身をもうつせみの、ねになきくらし秋くれば、もぬけのからと成はつる、眞如の月の影くらき、むねの思ひのくもきりを、ことのはかせにこよいしも、はらさん事のうれしさに、門出いはふ君とわが、中末ひろにいつ迄も、長く扇を參らせん、あれなるとのよ、そこかあつくは、こなたへござれ、こゝはす

すしき柳かげ、數の扇の風なをすゞし、扇めせ〳〵、うちはもそふよ、ちゞのもやうを三重かざりたて、引やくるまのくるしきも、しんくの糸の手もたゆく、つかれはてたよ君ゆへに、うき名はよもに橘の、小嶋が崎やこゝろせきチクリいつかははやく大村の地里の名をさへたのもしく、思ひながらも皆人の、よを物うぢと聞からは、我身一つにあらね共、戀をする身のくせとしてチクリ命の程もそれ迄と、思ひ切てはつよ〳〵とチクリ笑はゝわらへいはゞいへカヽルふつふつ思ひきりつぼの、ないし所もなんの其、かぐら拍子は聞もうし、鈴ふりすてゝ出るにぞ、ひとへもはかまぬきかへて、染かたびらのはでもやう、すあし高つまひら〳〵とカヽル風にもすそのひるかへる、歸るはいやよ行くれて、戀しき人とふしやなき、夕風そよく下かげに三重しばしやすらひ給ひけり、うぢの川せのかけつくり地うち見床しきそらたきは、のきばにくゆるかやり火とカヽル人やみるらん夕すゞみ、みす上させて頼政は、あやめの前の御杓にて、相盃に顔をよせ、互に御目を見合て、につこと笑はせ給ひしは、いづれ月雪花もみぢ、たとへていはん色もなく、淺からざりしたはふれに、さへつさゝれつ盃の、赤きは酒のとがにして、ひやゝかなりし川風もカヽルいと興有てひざ枕チクリふかき中こそわりなけれ、柳のかげよりまこもの前地此ていをみてたへかね、ひたすらあこがれかく迄に地なれぬ手わざに身をしのぶも、ひとへにあやめがわざぞかしカヽルしよせんあやめを失はんと、ちゝに思へどせんかたなく、きしにのぞめは水の色、あいをそむかとおそろしく、とやせんかくやと身をもだい、岸になびける柳かげ、枝をつたひてへいをこし、せひに思ひをはらさんとカヽルいとはかなくも青柳を、つたひのぼりて見給ひしに、つれなくも柳のゑだカヽルはつきとおれてまこもの前、川へざんぶとしづみけるカヽルされ共思ふ念力の、うきあかりつゝおよきこしちんのもとへと近付て、岸の浮草力にとカヽル取付は川風に、ゆりおとされていくたびかカヽルうきてはしづみしづみては地うきをみるめのかりのよに、もろきは人の命にて、底のみくづと成けるは三重哀なりける「しだいなり、げにおしめ共けふの日も、くれはのいとやぬきみだる、玉かとみへてとぶほたる、そもや

きせんかいにしへは地しかもすみゑてきをすまし、花鳥風月のたのしみも、げにことはりと思はれて、しらぶることのやさしくも、つよからずしてよはからす、おふなの歌のしほらしく、名もなつかしき紫の、雲井の曲やわすらるゝ、わが身の程は思はれて、あだ名たつ、うき人の末のよいかゞ有べきぞ、身はうき舟のよるせなく、便も今はあらいその、岩うつ浪の音つれに、ちゞにくだくるこゝろかな、のきばにおふる八ゑむぐら、歌カ、ゝあめ打そゝぐつれ〳〵に、昔を忍ぶ折から、あわれをそへて草のとを、たたくや松のさよ風に、おとろか三重されてながむれば、ねやの隙さへつれなくて、明やらぬまのひとりねの、夢に計りはよな〳〵、思ふ人を、みちのくの、なこそのせきをたれすへて、うつゝのこともあはざらん、卯の花はちすなでしこ、風ふけば、すゞしくて、水に心をうつせり、そのさん曲の、つま音や、こゑよくうたふひゞきには、ちりも立まふちんの内、かんにたへたる「ばかりなり、かくて物をと打しめり、あやめ仰けるやうはカ、ル川のよ風は身のどくぞ、いざ〳〵おくへと、頼政の、御手を取て立給ふを、しばし〳〵とかたゑより、しと〳〵と頼政の、たもとをひかへとゝむれば、頼政おどろきこはたそと、御らんあれはまこもの前、泪にくれてつれなしや、けふはしめての思ひかは、かねてぞつゝもる身はうぢの、山より高き文のかず、かいやりすてゝうらみしや地過しくはげんの折からに、引すてられし恨をは、君にしらせん其爲に、よはに紛て内りを出地かくはしたなき身と成て、是迄來る情には、思ひを叶へてたまはれと、すがりついてぞなき給ふ、頼政さすが其こゝろ、岩木ならねばさほど迄、わりなき心のうれしさよ地去ながらけふしもは、つまのあやめが見るまへ有カ、ル又折をゑてゆくれの、忍ふとほその手引をば、よきにこしらへ申べしカ、ル先々こよひはかへられよと、さま〳〵詞をつくさるゝ、まこもはせひに承引せず、思ひ定て來る身に、何重てのあふせとや、つれなしやなさけなし、あび大城の底に入る共、みらいやうこう、忘れはせじとはら〳〵と、なく泪に面色替て、せんげんたる雲のびんづらさか立てカ、ルあいじやくしんいのつのするど〳〵、花木のごとくにおひ出れば、あやめは是に驚て、おく

へ逆入給ひしを、いづくへやらじと追欠て、いらんとするを頼政は、まこもの前が乱がみ、むずと取て押すくむるヵ・ルかなしやとさけぶこゑ、もろともにふりかへつて、頼政にいだきつき、しめころさんとする所を、御つぎにひかへたる、渡部きおふ瀧口、此よしをみてつゝと出、たちぬきもつてうど切る、はつといふこゑ弓手にきこへヵ・ルめてにみへつゝうしろへぬけ、波にちらめくいなつまの、かけよりはやく飛めぐるは八十三重すさましかりける「しだいなり、主従たちをぬき持て、なむ八幡大菩薩と、名劔のもんをじゆし、両方より切立ればヵ・ルおんれう今はたまりかね、かしこへどうとふす所を、さん〳〵に切たりしは地さんをみだせしごとくなり、きおふしがいをかい取て、さかまく水になげ捨れば、ついには本望たつせんと、云こゑ計り殘つゝヵ・ルうちの川きりたへ〳〵に、顯れ渡る三重明かたの、跡白浪と成にけりヵ・ルけにおそろしきしうじやくやと、貴賤上下押なべて、皆かんぜぬ者こそ無けれ

## 第四

「其後、源三位頼政は、うぢ川の別ぎやうにて、三日三やの、御歸り有べしとて、みだい所諸共にヵ・ルあまたの供人召ぐして、三重錦の小路へ「歸らるゝ、やたけ心のものゝふの、やそうぢ川による波の、立出ゆけは朝日山、かげさす水の清らかに、ひをのひれふる冷しさよ、面白や此川の、よるにもなれば螢火に、光あらそふうかひ舟地むかふの山はかり人の、ほぐしのあかりほのみへて、あくるもしらず夏くれは、今は青はに山吹の、花もあくたとちり過て、うつる月日のはやきせに、なれても通ふ芝舟の地こがれてこゝに頼政は、あやめの前と諸共に、けふかへるさの道すがらヵ・ルかちゝをはこびみへ渡るヲクリ名所きう跡打ながめ、かたりなぐさみ爰かしこ、手を取かはし立つとひ、とけて亂て君とわが、中よへ、いつへ、なゝへ八重はや九重の、空高き、山のかいよりほと〳〵と、音つれて過る、ほとゝぎす、是もせきかと行やらで、ふたりの、中に二こゑを、きかまほしさに、とゞまりて三重いづくと人に、とばなはて、

さなへとるてふ、さをとめのうたふ田歌のはり上た、こゑもひなびておかしやの、かほはみへねとすげかさの、白くうごきていれちがひ、ゆきゝの人も、立とまり地しばし見るまもいざよりて、あつさ、しのがん笠取山、うすき衣もうるさくて、あふぎの風にそよ〳〵と、ならや伏見の里ちかく、春は花見し藤の森、今はしげりて深草の、深き中をはよもさけし、かしらの雪のふりかゝり三重おもきがうへに、つもるとも、おしのふすまは物かはに、いつもかはらずいつもたゝ、いなりの山の神さびて、きのふも通り京極や、四條かはらにさしかゝり地あとより風のさうさうと、吹くる音に身ふるひし、やゝさむき程ぞつとして、ひざ打ふるひ頼政は、心地あしげにみへ給ふ、あやめの前はおどろきて地いかゞ渡らせ給ふぞや、心は何とましますと、ひたいをおさへうしろをなで、かいほうあれは頼政は地さのみにあんじ給ふなよ、あつさのつよきゆへならん、しばらくつかれをやすめんと、道のかたへにざをもふけヵゝル女ぼう達も打寄て、よきにいたはり奉り、御のり物をすゝめられ、めさせ給ふに目もくらみ、ゝやめもわかずあやめの前、心元なやみづからも、いざあいこしにのり申地み薬まいらせ候はんとヵゝルうつらせ給ひ夫よりも三重ぎをん林を打過て、心をつくしきをくだき、今はとほうにくれ竹の、すゞめ色とき過る比三重みたちにつかせたまひけり、こゝに又、いの早太たゞすみは、雷上動の弓、兵は水はのてうほうを、尋出して頼政の、かんきをゆるされつかへんとヵゝル思ふ心の一筋に、野にも山にもやどる身の、是も一つは武者しゆ行、こよひはむしよに指かゝりヵゝル比はふみ月中のよの、なきたまゝつる折なれば、思ひつづけて世の中のヵゝル無常をくはんじもくねんと、しばし休らひいたりけり、れんぼのやみのくらければ、まよふ心の本來は、むめうのくもにおほはれて、猶立かへすまうしうを、いつかはらさんわが思ひ、うらめしのうき世や、あらうらめしのうき世やと、獨かこちて其すがた、いとなまめいたる女ぼうの、花をかざりしとうろうを、むしよにたむけて歸りしが、早太がそばにしとゝ寄、見申せば其かたには、旅つかれとみへて有ヵゝル此所はれんだい野、いかでわたらせ給ふとゝふ、早太聞て我は旅の者なれば、所の

いとひは候はず、おんみは若き女郎の、何とて獨此所へ、來り給ふはいかにととふ、女はにつことうち笑ひ、よになれ〳〵しき物語ヵヽル御はつかしふ候へどもみづからが、身の上を、語て聞せ申へし、それに付ては其かたを、お頼申事有と、申ければたゞすみは、扨ゆふてふなる女かな、我は思はぬなんにあひ、かゝる浮世のめんどうに、我身ひとつのおきふしさへ、ふすいの床にかるものを、聞も中々かしましとカヽル立さる袖を引とゝめ、こは情なき御詞地みづからは此里の、民のつまにて侍ふなり、御身もとのにて候へ共、男の心の淺はかにカヽルきのふにけふは引かへて、あすかゝはらの川のせの、かはりやすくもことゝいろに、うつるのみかはみづからを、地情なくも追出し、跡はさかりのます花に、れんりの枝と契りつる、かゝる恨の數々を、せめて一たび語りつゝ、にくしと思ふ者共を、思ひのまゝに失ひて、本望とげんと思へ共、あやにくと門札を、とうとくかちして打て有、是をはなしてたび給へ、さもあらば千僧萬僧のくやうより、有がたからんと云こゑも、泪にくもりて申ける、早太驚きこは心へぬ云事や、げにも女中の心には、しつとの深く有ゆへに、理とは云ながら、門に打たる其札を、たとへはなしてあればとて、追出す程ならば、中々内へはよもいれじ、先程よりの事共は、一つとしてのみこまず、外を頼候へと、ずんと立んとする所を、女はいとゞすがりつき、げにも仰は尤なり、我は此世になき身なり、物きゝ給へ、先惣じて、人に用事を頼には詞出家は出家ぶしはぶし、それ〳〵の道による地わらはは御身のみ心を、大かうへと見請しゆへヵヽル女の力に及ばぬを、頼みまいらせ侍ふなり、御身程なる侍が、物頼んと云をきゝ、逆かへらんとはあゝいひがひなし〳〵、かやうの所にふし給ふを、武者修行ともおぼしなば、猶更御名を耻給へ、御身は正しく源三位頼政卿の郎等、いの早太にてましまさずや、いかに〳〵と云ければ、早太詞につめられて、せひもなし此上は、札をはなしてゑさせんが、所はいづくとゝひければ、うれしやこなたと手を引て、半だん計りあゆみつゝ、此所ぞとおしゆるに、ふりむく霧のたへまより、ひとつのかう門みへたりし、早太近くも立寄て、刀をぬいて門札を、こぢはなし捨たりけり、女

悦びうれしやな、我は是まこもの前がおんれうなり、いで〳〵本望達せんと、云こゑ天ちになりわたつてハヤ三重霧に紛れて失にけり、早太驚き、こはいかにと、みるより早く霧晴て、む所とみへしはわが主君チクリ頼政卿のやかたなり、扨はへんげの某を、たばかりよな口おしや、おのれいづくへのがさんとカ、ル追かけ出んとせし所に、駒をかしこに芝つなぎ、其身かろげに忍び寄、へいに手をかけ伺ふ者、さしつたりといの早太、近々と詰かけ、むずと引組引よせて、よはこしをいだきあげ、大地へどうど取てなげ、すかさず上にのりかゝつて、そも先おのれは何者ぞと、首ほねつかんでつきつくれば、かうべもくだくるたへがたさに、ふるひ〳〵、我こそは、秀門が弟國五郎秀重なり、忍び入て頼政をがいせんと思ひしに、しそんじたるむねんやと、はねかへさんと身をもがくを、猶したゝかにふみ付て、扨はおのれは過し比、ぬへにばけて雷上動、兵は水はをぬすみしよな、さあ其弓矢の有所、眞すぐに申べしカ、ルさなくばかたほね引ぬくそと、せめ付とひけれは、秀門が手に有よし、一々に白状なす、早太笑てうれしやな、おのれあんないすべしとて、取て引立馬引よせ、秀重をいだきのせ、むちを押取たゝきたて、駒にまかせていそぎゆくかのカ、ルいの早太が心の内を、きせん上下押なべて、皆かんぜぬ、ものこそなかりけれ

## 第五

其後、江州三井寺に、つゝいの法眼浄昭とて、其行法もたにすぐれ、尊き沙門有けるが、源三位頼政、つねにしたしくましますゆへ、此度の所勞に付、きとうのせい〳〵ぬきんでゝ、守のくはんじゆ取認カカル三位のやかたへいそがんと、まだよをこめて出らるゝ、ながらの橋にさしかゝるに、むかふより其よわいカ、ルはたちにたらぬ女ぼうの、かづきにふかくかほかくし、しどけなげに來りしが、供押わけて乘物の、そばちかく寄ければ、供の者共こはいかに、ろうぜきなりとおし留る、女につこと打笑ひ、くるしからずみづからは、おたのみ申事有てカ、ルわざわざ是へ參たり、さのみあらくな宣ひそ、法眼是を聞給ひ、何者成ぞととひ給へば、さん候みづからが、

お頼申事とては、よのぎにあらず、其かたは源三位頼政の、病氣本腹有やうに、きとうのせいく〳〵つくされて、けふあの方へ御こしと承候ゆへ、わざ〳〵是へ出向ひ、待請て候なり、かまへて〳〵、頼政の病きのきとうをやめ給ひ、お僧は是より三井寺へ、お歸有て給はるべしヵゝルさなくはおためにあしからん、はやとく〳〵と云ければ、供人共是をきゝ、あやしき女が云事や、そこ立のけとのゝめけば、女聞てあざ笑ひ、汝等にはかまはぬぞや、此僧に用有と、云ころ共に風おちて、しんどうらいでんおびただしく、黒雲一村まひさがり、乗物共に淨明をヵゝルと空中にまき上しはハヤ三重すさましかりけるしだいなり、供人共は肝をけし、皆こと〳〵く逃ちつたり、中にもみでしに一らいとて、けつきさかんの若法師、長刀のさやはづし、いづくへやらんと呼はれ共、雲中なればせんかたなく、おどり上てはがみをなし、こくうをにらんで立たりけり、時にふしぎや淨明、ひみつのくじを切てかくれば、うづまふ雲も、ちりちりに、なほよとみへて、あやうくも大ぢへどうど落けるがヵゝルこしはみちんにくだけちり、其身につつがましまさず、一らいヵゝルはつと欠よつて、悦ぶ事はかぎりなし、時にくだんの女すさまじきかたちと顯れ、我は是まこもが一ねん、身はうぢ川にしづむといへども、其靈こんはきへうせず、しんゐのほのほもへまさり、つもる恨に頼政を、取ころさではおくべきかわ、僧がきとうのふうさつは、此おんれうがあだとなる、頼政になさつけそ、はや〳〵かへれさもなくは、みぢんになさんと飛かゝる、一らい長刀押取のべ、口にじゆもんをとなへつゝ、淨明じゆずを押もんで、いのりいのられせんかたなく、よも明行ば山のはの、日かげにしぼむ朝貟の、つゆのごとくにきへ失て、終には本望達せんとヵゝル云ころ計り、河風にこたまの音を聞つゝいヵゝル淨明はそれよりも三重三位のやかたへいそがるゝ、比は文月なかばにて、てりそふ月のかぎりよく、光あらそふとうろうを、とぼしつゝけしかず〳〵は、心々の手をこめて、金銀のだいにのせ、ヵゝル女ぼう達の取々に、御まへにかざらるゝ、然共頼政卿、さりしうぢのかへるさより、御こゝちれいならず、さま〳〵いれうましませ共、更に印のあらざれば、みだい物うくおぼ

し召、何にかなみ心を、なぐさめ申候はんと、めのとのみとりを御召有、此とうろうのあかしよく、ひるにもまさるけしきぞや、何なり共興をなし、殿の御きをなぐさめよヲクリはやとく〳〵と宣へば、承候とカヽル四きの立花をならへたて三重既に用ゐと聞へける、世はならはしの人こゝろ、四きお〳〵りとさきかはる、花に心をなぐさめて、かざりならべしからへいじ、いづれおろかはなけれども、春はまづさく八重梅の、かをなつかしみうぐゐすの、こゑも吉野の山さくら、花見がてらにくる人は、散なん後はさそあらん、ちらさぬために風よぎて、かめにさしたるひと枝は、萬代迄もさかへてふ、てう〳〵とまるかうぼたん、かげにつくばふ唐猫の、すきをうかゞひそらねふり、くはつと飛出とらんとすれば、小てうはおどろき三重ひら〳〵と、まひ上ればつめをかくして尾をふるひ、花のこかげにしづ〳〵と、したれ柳のかた糸を、かなたこなたへよりあはせ、あはずは何を玉のをに、千重萬ゑの岩つゝし、たをりてかへる山みちは、袖を引あいそろそろ〳〵、たらたらおりてやすんで、しばしとゞまる澤水の、流すずしきあふひ草、かうほねおもたか花せうぶ、あきはつゆちる糸はぎの、けさは亂てまつれてとけて、風の吹しくのべみれば、お花浪より夕ざれの、霧立三重のぼる村もみぢ、錦まくうつ長月の、其有明の山おろし、いつしかくものかくろひて、まきの板屋にはら〳〵〳〵、さら〳〵さつとさつ〳〵の三重ころにねざめてきく時は、雨かこのはかきぬたの音か、からころ〳〵しつていつく〳〵、うつ手やさしきたいこのひきよく、亂拍子の面白や、げに面白や白々と、しらけたるよの月ならで、雪のはつかにかいつもる、年のなごりの程みへて殘る松さへ物さびし、雪かき分て尋れば、其名もさむしかんきくや、さゞんくはすいせんやぶこうしヲクリ心をつくし手をこめて、色をかざりし作り花カヽル一々かそへうたひしは、いとやさしふこそみへにけれ、頼政御きげんうるはしく、きうつをはらし覺ずも、心よく候と仰ければあやめの方カヽル御悦は限なくヲクリ皆々興にぞ入給ふ、かかる所にそともよりカヽルこてう一つまひ來り、爰やかしこことはをやすめ、花にあそぶとみへけるが、ばたんの花のとうろうに、ひらりと飛入ふしぎやな、

けしたる姿と顯れて、したい〳〵に頼政の、御そば近くさまよひて、かなたこなたとうかゞへば、忽に頼政卿、御身をふるひ御いれいも、以ての外にみへ給へは、みだい所を始としカゝル人々大きに驚てハヤ三重上を下へと返しける、げにやおゝなはさらでだに、五つのさはり三ツおもく、おもきが上にかさねたる、身は戀衣君ゆへに、あはれはかなきうたかたと、きへにし物を情なく、波のみくづと捨られし、恨をはらさん其爲に、まこもの前がおんれう、是迄顯れ來りたり、とてものがれぬむくひのつみ、くはん念あれと大をんあげ、鐵杖ふつて立たりしは、扨すさまじかりけるしだいなり、頼政は聞召、こはむねんやと宣て、うす綠の御劔をぬき、切はらはんとしたまへば、おんれういかつて、ほのほをふき、みぢんになさんと飛かゝる、弓手をはらへばめてへぬけ、前かとみればうしろへこへ、水月いなつまはッたゝ神カゝル姿はみれ共さながらに、水にゑをかくごとくにて、もとよりくうきの靈なれば、うて共きれ共手こたへなく、おつつかへしつする隙に、ひらりとかたに飛のつて、鐵杖ふりあげ立たりしは、おそろしかりけるふせいなり、頼政今はせいつかれ、せんかたもなくあきれはてカゝル互にゝらんでつめあひしは、身のけもよだつばかりなり、かゝる所へつゝいの淨明、あはたゝしく入給ひ、此ていをみて、さもそうずときねんのくはんじゆ取出し、頼政にさづけつゝ、打物わざにて叶はじと、じゆずさら〳〵と押もんで、なむ大聖ふどうそん、おんてきたいさんなし給へと、カゝル御でし諸共同音にハヤ三重力を合て「いのらるゝ、をんれう今はたまりかね、爰にひれふしかしこにたをれて、又おき上りうらめしやカゝル六道四生がその間、いかであんをんなるべきと、近付よらんとせし時に、ふしぎや守のふどうのしゆじ、明王尊と顯れて、がうまのりけんをひらめかし、向はせ給へばおんれうは、くるり〳〵とめぐりしが、りけんの光におそれつゝ、あらうらめしやくるしやな、此のち又もきたらじと云こへ計り御てんの内、こたまにひゞきて失にけり、時にふどうみこゑを上げ、いよ〳〵行末まほらんとカゝルちかひあらたにまし〳〵て、もとのぼんじと成給ふは、有がたかりけるしだいなり、八々御跡伏おがみ、頼政の御病きも

カ、ル則へいゆうましませば、御悦はかぎりなし、かかる所にいの早太、秀重が首引さげ、兵は水は雷上動、取かへしはせ來り、かやう〳〵のしだいにて、ふたゝひ手に入候と、御まへに上ケれば、頼政御悦喜淺からず、則かんどう御免有、げに主從の御さいくはいカ、ル天晴めでたき御事やと、貴賤上下押なべて、皆かんせぬ、者こそなかりけれ

## 第六

其後、源三位頼政卿、淨明のかぢ故にカ、ルやまふ本腹まし〳〵て、御悦は限なし、頼政仰ける樣は、まこもの前が有樣、ゑいぶんに達し、勅定に任せんとカ、ルそれよりも頼政は、チクリだいりを指てぞ上らるゝ、だいりになれば、まこもの前の有樣、一々しだいに言上ある、みかどゑいぶんまし〳〵て、まこもの前は身よりほろぶるじめつのざい、誰におふせん樣もなし、幸なれば淨明に、とぶらはせよとのりん言なり、かゝる所へみい寺より、大衆打つれさん上し、扨も近江國鏡山に、石川次郎秀門、あまたの郎等召ぐして、たてごもり候が、みい寺をせめおとし、城槨になすべしと、せめ來り候を一まづふせぎ戰て、追ちらし候なり、又うぢ川へしよりをつけ、かの川をよううがいに取べしと、其用ゐ專らなり、事のつのらぬ其内に、早く討手をつかはされ、然べく候と謹でぞ申ける、關白元實大キに驚せ給ひ、其秀門はいづの國え流せしに、いかゞしてかはまぬかれしぞ、誰かれといはんより、頼政向ひ候へと、仰ければお請をなし、手せいすぐつて八千よきカ、ルうぢの川邊に押よせてハヤ三重時のこゑをぞ上にける、され共秀門、うぢ橋を引ければカ、ルさすが難所の大河にて、こすべき樣もなかりし所に、瀧口早太兩人は、もとより馬上の達者といひ、かねて川のあないはよし、小嶋の淺せに乘込ば、陸地を走るごとくにて、八千よきの兵共、一きもなかれずおめいて上れば、秀門が先手の者共、押もどされ、半丁ばかり覺ずしさつて、切先より火煙をたてハヤ三重こゝをせんとぞたゝかひける、かゝる所にみい寺より、つゝいの淨明一らいほうしを先として、まんじの指物押立て、みい寺より頼政に、ごつめをなすと呼はつて、うしろより

押取まく、秀門大キにしうせうし、せんごにてきを請ければ、あじろのうをのことくにてカヽル進退こゝに極て、命限りと戰ひける、かゝる所に一らいほうし、大長刀を引そばめカヽル人馬のきらひあらばこそハヤ三重はらり〳〵となぎたつる、こゝにかたきの中よりも、よこが鳥のふどう丸、黒塚江内、其早わざも名にしをふ、空とぶ鳥のごとくにて、一もんじに切てかゝる、一らいもとより早業の大力、右に相付左に請、おつゝまくりつ戰ひしはカヽル敵みかたのめを驚かすチクヲ誠にゆゝしき働なり、さすが名をゑし一らいに、何かは以てたまるべきカヽル大けさ胴切四つになり、弓手めてにぞたをれける、秀門今は是迄と、大たちまつかうに指かざし、あまさじと打てかかるをカヽル早太瀧口かけ合ハヤ三重こゝをせんとぞたゝかひける、はやだ瀧口こはめんどうと引組、ゑいやゝ〳〵と諍ひしがしばしせうぶはみへざりけり、かゝる所にふしぎやな、白雲一村まひ下り、次郎が上におほふとみへしか、忽五たいのう亂し、かしこへどうと伏にけり、有がたや雲中より、ふどう明王出現有、佛王法の敵をなす、秀門を立所に、めう爵をあたふるなり、是勸善懲惡の、誠を顯す所ぞと宣ふみこゑの下よりも、秀門が兩がん、忽ぬけ出ちをはきて、終にむなしく成けれはカヽル明王はしうんにのり、こくうに上らせ給ひけり、賴政三どのらいをなし、勝とき作つてそれよりも、ていとを指てぞかいぢん有カヽル千秋萬歳めでたしと、貴賤上下押並て、皆あほがぬ者、社なかりけれ

艶色萬歳賴政終

# 和國女眉間尺

## 第一

扨も其後、仁は秋津洲の外にながれ、けいはつくばの山のかげよりも、しげきがもとの猶しげき、君のめぐみそ有かたき、今この時のみかどをば、人王四十五代、聖武天皇と申奉りチクリいとも目出たきすべらぎなり、扨御れんしに、葛城の大君とて、御心さしくはんじんに、みかたちゆふびにましませば、まつりごとをかねおこなひ、天子をたすけ天下をやすんじ給ふ故、くはうたいしにも立給はん、御器量まします君なりと、あふぎうやまひ奉る、同く御弟、すがねひこのわうじとて、其御きりやうたくましく、御たけ七尺ゆふよにして、ばうこへうかの御いせね、かみ公卿より地下迄も、カヽルをそれぬ者はなかりけり、ある時みかど、仰出されけるやうは、カヽル此ほどこくどもをだやかに、民のかまどもにぎはへば、じゆんしうの其ために、江州いぶき山に行幸あり、みかりをゑいらん有べしと、ぐぶの行粧花やかに、あふ本三重みちさしてぞ「みゆきある、けふよりしては、世の人のイロ地みゆきの跡といぶき山、さしもにひろきおのへより、すそにおよんでうつかりや、はりチクリをたてなんらい地なし、扨かしこなる松かげに、ほうれんをすへられて、カヽル數の公卿殿上人、きみをしゆござせ給ひけり、こなたは葛城の大君、まつたかなたはすがね彦カヽルけいひつぜんぐうるはしく、袖をつらねてなみいたり、まだしのヽめより打立て、カヽルすまんにおよぶしヽハヤ三重かせぎ、しだい〳〵に「かり下す、われも〳〵と、さきをかけカヽルぶん取をあらそひしは、世にめさましくぞ、見へにける、かヽる所に、むかふの山のおのへより、二疋つれたるさおしかの、もヽ四つかくす青草を、ふみわけてかけ來る、はだのふしやうはるつね、馬上の達者成ければ、きやうどの弓をまなびつヽ、横切にかけ通り、切てはなせはあやまたず、うしろさまにぞいたりける、今一つのさおしかをば、馬よりゆらりと飛てをりカヽルつのに手をかけひらりとのりハヤ三重せこをあつめて生とらる、扨又こなたのかたよりも兎一疋かけ來るを、少なごん是つね、此由を見

給ひて、是をは某いたさんと、手ほこをかざして飛かゝりカ、ルをつさまにさしつらぬき、かたげてこそは引にけれ、葉山の木末に啼さるを、左少辨かねさだ、よつひきへうどゐたまへは、手ひき猿のこぶしより、三疋つゞけてゐてをとし、せいしを召てとらせらる、かゝる所に山上より、いくとせへし共しれざりし、猪一つ大勢のカ、ルせこを拂てハヤ三重一もんじに、いかりたけつて「かけ來り、ほうれん近くよりけるを、すがね彦のこうしん、右大辨つね高、弓と矢つがひかけむかふを、カ、ル人馬共にすくひ上、はるかの谷へかけたをす、すがね彦は御らんじて、つゝと立て弓矢をはげ、向はせ給ふ所に、みやびたる少人の、いきをもつかず追來り、よつひきへうどはなつ矢の、あやまたず猪の、尾づゝよりお通して、かつはとたをれたりけるを、年來ねらふ親のかたきカ、ル思ひしれと切ちらし、につこと笑つて立のくを、すがね彦は御らんして、某が引ゐたる、弓をおさへてさきをかけ、かみをおそれずはたらく條、はなはだき會のいたりなり、それからめよと有ければ、かしこまつてけいごのぶし、左右より追取まく、其時かづらきの大君、しばしとせいし給ひつゝ、汝は女と見ゐけるが、かゝるかりばの出立は、心得がたしまつすぐに、申上よと御でう有るカ、ル時にかのものさん候、みづからは此山のふもとなる、賤のめにて御座候、ふたとせいぜんにわらはが父、かりに出候ひて、此山の猪に、命をとられ候ゆへ、みづからが兄何とぞして、かたきのしゝをうたんため、かなたこなたとつけねらへど、つゐに見あひ候はず、此たびみかりを幸と、親のあだにて候ゆへ、男の姿にさまをかへ、兄とをなじく罷出、兄をさきほど見失ひ、ほう〳〵たづね候所に、猪を見出し、嬉しさの餘りに、をんまへ共はゞからず、らうぜきに及ひし事ヵカルおゆるし有てたび給へと、涙をながし申ける、大君つく〳〵聞し召、扨々やさしき心さし、いまだびじやくの女の身、親に孝ある心ざし、深きゆへにぞかほど迄たけくいかれる猪も、只一矢にはとまりけん、是天道のみやうかんなり、ざいくはをめんじゐさせんと、かへつて色々御ほうびあり、御暇下さるれば、れつざの公卿一同に、何もかんじあはれける、君もゐいかん淺からず、かやうにたつちうたつかう

の、國に多く出來るも、御身のせいとうすぐなる故、けふよりしては大君を、皇太子とかしづき、とうぐうにたつべしと、りんげんあれば諸卿皆、冠をたれて勅答し、仁なる君のとうぐうに、立せ給ふは是ひとへにヵ、ル國あんをんの印ぞと、いづれも悦び給ひける、すがね彦は手持なくヵ、ル口をとぢてぞおはします、かゝる折節ふしぎやな、はれ渡りたる春の空、忽にかきくもりヵ、ルしんどうらいでんをびたゝしく、ハヤ三重風雨しやぢくをながしつゝ、さんかもくづるゝ計りなり、君をはじめ諸卿皆ヵ、ル木のもと岩のね便となし、雨をしのがせ給ひける、すがね彦はもとよりも、すくやかにましませば、玉座のほとりを立さらず、しゆごなしてをはせしに、いなづましきりになる神のヵ、ル耳にひゞきてほうれんのハヤ三重まちかくはためき落けるを、少も恐れずすがね彦、くろくもに飛入てヵ、ルいかづちと引くんでハヤ三重しばしあらそひ給ひしが、兩のつのを手懸りにヵ、ルうんと引さき給ひしは、すさましかりける次第なりヵ、ル程なく空もはれ渡り、みどりの空にぞ成にける、きみゑいらんまし〳〵て、扨々ゆゝしき勇力かな、やまとたけのみことより、御身程なる勇者はなし、今よりして御身をば、まとりのわうじとよぶへきと、りんげんあれば、魔取有がたし〳〵と謹て勅答あり、喜悦のまゆをひらきつゝ、ほうれんをしゆごなして、都へくはんかうなし奉る、天晴きたいの事共やと、貴賤上下おしなべて、皆かんせぬ者こそなかりけれ

## 第二

其後、伊吹山のみかり、ことゆへなく過けれは、都へ還幸なされつゝ、諸卿何も退散有る、其中に魔取の王子は、常々皇太子の望深く有けるを、葛城の大君にりんげん既に下りし故、二月の梅のごとくにて地そむるいろかはかわらねど、柳櫻にけをされて、ことゝふ人もなく〳〵ぞヲクリ過行春ををしむにも、げにおもひ内にわだかまればヵ、ル外のけしきはさほど迄、面白からずとひろゑんに、つく〳〵立て庭のをも、しばし詠る折ふしに、三かんの日のかげも、巳の時にならざるに、せい天俄にかきくもりヵ、ル風すさましく雲井にひゞく、いかつちはハヤ三重すさ

まじかりける次第なり、光りの内にふしぎやな、黒雲一むらうずまひて、庭上に落かゝり、さつとわれて中よりも、やしやのやうなる其姿カ、ル眼のひかりすさまじく、面をむくべきやうぞなき、魔取は太刀に手をかけて、やゝ汝はいか成る化生のめいこんぞや、正たいを顯すべしカ、ルさなくばかうべを切くだくぞ、いかに〳〵との給へば、けしやうから〳〵と打笑ひ、御身わうじやくの身を持て、通力自在の某を、かうべがよもやくだかれんカ、ルせめてさすりて見給へと、大聲上てぞ笑ひける、魔取大きにいかりをなし只一打と飛かゝり、みぢんになれとうつ太刀をカ、ルかいくゞつてめてへこす、かへつてはらへは弓手へこへ、かほどたへなる我身をば、いかではきやくし給はん、誠の道理を打捨て、はや〳〵邪道にいたり給へ、魔取聞てかしらをふり、我せいけんに背きつゝ、何とて邪魔をうくべきそ、外道聞ておろかなり、せいけんまことたつとくば、など手に入りし天下をば、カ、ルくるしめてはかり給ふぞ、我等が術をこなはゝ、百日はみてざる内、其きどくをゑせしめん、邪正一如、即佛へんまといんをきり、さつと吹かけ奉れば、まとり忽がんしよく替り、眼の光りすさまじく、あら嬉しやけふよりして、天下は只取たる物なりとカ、ルをどり上り飛上つて、悦び給ふけしきを見て、外道一部の經巻を、七寶の臺にのせ、是こそ我等が行法の、經文にて有けるなり、是を帝へ捧けつゝ、何とぞ魔道へゆういんあれ、其時われも顯れて、いよ〳〵力をそふべきなり、某は藤原のひろつぐがをんりやうの、こんはめいどに飛ゆけ共、はくは此土にとゞまつて、魔道神通の力にて、さいせんいぶき山のみかりにも、いかづちとなり顯れて、君にゆふゐをそへてありカ、ルいよ〳〵力をそふべきとて、のぼるも高きわしのみ山の雲や霞、嵐と共にうせにけり、魔取はきいの思ひをなし、もはや本望とげたりとカ、ル件の經巻取もたせ、だいりを三重さしてそ急かるゝ、だいりには諸卿あつまり、御ゆふゐんの折からに、かつらきの大君、ふ時にさんだいまし〳〵て、さく夜ふしぎの夢のつげ、たしか大内太政官と覺しきに、位官たゞしき人々の、かず〳〵なみ居給ひしに、われもばつざに侍りて、つゝしみ守り居たりしに、中にも上座に居給ふ、上郎のあらたな

る御聲にて、此度第六天の魔王共、わが日の本へ下り、まこ〳〵となさんとはかりつゝ、まとりのわうじに惡義をすゝめ、魔經をだいりに捧るゆへ、色々と評義なし、此大乘の妙經は、大君にゑさするなり、急ぎだいりへ持參して、此由そうもん申べしと仰あれば夢心に、あら有がたや是はそも、わがとをつ親あまてらす、をゝん神の神勅ぞと、おもふと則夢さめて、枕の上に妙經のみ、殘り是有候ゆへカ、ル則捧け候と、謹てそうもんある、君をはじめ諸卿皆、かほどふしぎの神勅は、是只事に有べからず、いか成事や出きたると、何もふしんはれやらず、かゝる所に魔取の王子、右の經卷持參あり、そうもん申されけるやうは、此御經と申は、末代ふしぎの一軸なり、然るにしやかと云邪僧出、さま〴〵方便をとき顯はし、正法をけがしつゝ、國土の民をまよはしめ誤り、千歲に及びたり、今某ふしぎに此經をもとめたりカカルと〳〵ゑ尊拜有べしと、そうもん有てぞ捧らる、天王よしをゑいぶん有、唯今かづらきの大君も、かやう〳〵の次第にて、妙經を捧らる、所詮邪正の勝劣の、惡成義を見ずしては、定めがたしとりんげん有る、魔取此由承り、其義にて候はゝ、雙方のほう經をひだり右に立わけて、火をかけゑいらん候はゝ、必きどくの候はんと、重てそうもん有ければ、さらばさやうに仕れと、妙經を左にをき、扨又邪經を右にをき、兩方一度に火をかくれは、正經はやけ失て、魔經は少もつゝがなし、上中下に至迄チクリ何もはつとぞかんじける、魔取いよ〳〵いきほひにのり給ひ、かほど目出度正經を、御うたがひの淺ましやと、あざ笑てのたまへば、大君いや〳〵それ正法にきどくなし、火に入たる經卷の、やけではいかで候べき、やけざる印候こそ、いよ〳〵邪經に候と、仰もいまだおはらぬに、有つる邪經の內よりも、ほのふ忽もへ出て、皆ちんはいと成失て、はじめなかりし妙經のカ、ルもとのごとくに顯れしは、有がたかりけるしだいなり、主上を始奉り、けいしやううんかく一同にカ、ルあつと頭を地に付て、かんるいしばしとゞまらず、天王げきりんはなはだ敷、汝皇孫の身を持て、還て魔道に落入り、剩王位まで掠めんとはかる條、こくぞくよりもはなはだし、つみにふすべきことなれ共、王子にめんじて只今より、參內無益とりん

げん有、魔取は聞て口をしや、何とぞ君をたぶらかさんとたくみし事もむに成しぞ、去ながら、今よりして我じんづうをふるまひつゝ、忽和國をしたがへんとふんじんのいかりをなし、大床みはし渡りどのヵカルふみたてけたてそれよりもハヤ三重やかたをさしてそ歸らるゝ、やかたになればみうちの者共召れつつ、かやう〳〵のしだいなり、時をうつさずかづらきの、王子のやかたへをしよせて、本望をとぐべしと、ぐんびやうをいんそつしヵ、ル王子のやかたをハヤ三重取廻し、時の聲をぞ上にける、去ほどに大君のこうしん、中納言みつのり、ついちの上に飛上り、何者なればらうがわしく、此所へはよせ來るぞ、名をなのれとのたまへば、まとりのわうじのみうちなる、右大辨つね高駒かけよせて高聲に、抑是はまとりのわうじ、天のめいずる國のうけ、帝位につかせ給ふ故、したがひ給はぬかた〳〵をは、せいばつのためりんかう有る、葛城の大君も、まとりにしたがひましまさばヵ、ル申なだめ候らはんと、さもにくさげにぞ申ける、みつのりは聞給ひ、ゑゝ淺ましや〳〵、王位にそむくおこのぞく、あれ追拂と宣へばヵ、ル御もんをひらき切て出ハヤ三重軍は花をそちらしける大君のみうちの者、隨分いどみたゝかへ共、多せいに無せい力なく、殘りすくなにうたれけりヵ、ルみつのり今は是迄と、大どのさしてはせ參り、御前にかしこまり、隨分防ぎ候へ共、せいすくなに候へは、過半手をひ或はうたれ、はか〳〵敷き防戰なりがたく候へは、ひとまづ何方へも御ひらきなされつゝ、時節を御待候へかし、某はふせぎ矢ぬて、跡より追付奉らんと、すゝめ申せば大君は、かみにおはする主上さへ、いかんとせさせ給ひがたし、はや王道はすたれなん、たゝ〳〵やかたを枕にと、御でうあれば光のりは、ゑゝ淺ましきみこゝろかな、文王ゆうりにとらはれて、九年のらうをなしてこそ、ぎさんにはたをあげ給ふ、とく〳〵おちさせ給ふべしと、いさめ申せは大君は、然らは跡をはからへと、御うらの小門よりヵ、ルいづち共なく落給ふ、みつのり御跡見送りて、門前にかけ出て、大君のこうしん中納言みつのりが、ぶゆうの程をみよやとて、ヵ、ル多勢が中へわつていり、はす切胴切こてをとし、あたる所を幸に、よせ手のハヤ三重大勢はらり〳〵と追ちら

し、鎧をみれはながれ矢は、しのをつくなるごとくにて、カヽルしばしこなたにやすらいて、いきをついてぞいたりける、かゝる所にまとりのみうち、下野の丁子丸、せゝのせんじはせ來り、左右よりむずとくむ、みつのりは見給ひて、扨々やさしきもの共かな、我等がめいどの友だちと、二人一度にかいこふで、まへなるから堀へカヽルうんといふてなげいるれば、そこのみくづと成にけり、我身も太刀を引ぬき、腹かき切てしゝたりける、つねたかかけより首打を、としかち時つくつて引たりける、かのみつのりのさいごのてい、目をおどろかすはたらきやと、きせん上下おしなべて、皆かんせぬ者こそなかりけれ

## 第三

其後、イロ地かづらきの大君は、魔取のわうじのほんぎやく故、御身あやうくましませばカヽルひとまづ帝都を御ひらき三重あづまの方へそ

## 道行

「落給ふ、八聲の鳥も、物すごく地今一ころに九重の地花の都の春のそら、地きらめくほしのかけさへも、うつるなみだの玉水に、わが身はいでの里もはや、こまにまかせてあさ霞、立こへ見こへ山しなや、音羽の川のさよ千鳥、よどむいせきにむれゐつゝ、あさる小うをの白なみに、しら〳〵あくるしのゝめの、ほかけかすかに、三井の寺、みろく出世の其あかつき、まつも久しき久かたの、うつる光りもはづかしや、旅のつかれと世をおもふ身は、老にけらしなやつれしと、さぞやわらはんわらはゞわらへ、我はまたゆたかなる世にあふみぢや、見し玉たれの雲の上、まくら屏風の物すきの、あゝ繪によくもにほのうみ、しほやかねども、たつけむり、たみのかまどのにぎはひを、地いとゞあつかれ〳〵と、おもふ心のおほけなく、うき世にそでを大津の浦、うら吹かへすくずのはの、身も手もつかれくずをれて、賤がしわざを、三かきが原、地むかしてんちのおゝん時、やまとのくによりうつされて、爰に都を、し賀唐崎の、松に千代ふるしら波も、立やあわづのはらからに、つらなるゑだをあらそひて、よくもうきめを情なく、見せ

もみせたの長橋を、とゝろ〳〵と駒のあし、いやあめのあし玉あられ、おつるなみだの村しぐれ、ふる里おもふそでぬれて、しほるか露を、のちのさと、しのびてわくるしの原を、見よとはにくやかゞみ山、かみのむかしを思ひでし、するがのふじを夜のうちに、はこびきつかせ給ひしが、今一かへりつちくれを、はこぶちまたに夜の明て、爰にすてさせ給ひつつ、ちりひぢ高し、くもまより三重そなたのかたにみかみやま、山かげうつすやす川も、いく瀬わたりのつらければ、身のくるしさにせきあまる、すそもたもともこほりつゝ、さむきあらしにあわゆきの、ちらりちら〳〵ふることを、おもひぞ出る山かげやヵカルともをたづねし人もあり、これはひきかへいつしかに、くはくしやうをきてはいくわひし、はらへどはらへどそのかひは、あられかさねのぎよゐひちぬ、めされし駒もやう〳〵に、地つかれはたてやありぬらん、みちのちまたのかたはらに、かつはとたふれしらあははみカ、ルいきたるこゝち見へざれは、いまはせんかたましまさず、おりたちたまひふるゆきを三重うちはらひひきかづく、なをしのつまにたるひとち、とけゆくひまもあらされは、あなたのくさむらこなたのかげ、くま〳〵もとめたまひしは、目も三重あてられぬハヤ三重次第なり、かゝる所に上なる山の谷あいより、ふりつむ雪にとぢられし、うさぎ一疋かけ來り、カ、ル王子の召たる下かさねの御たもとにぞ飛入ける、わうじ此由御らんじて、こはふしぎや去ながら、いきたる物懐中にとびいるは、運をひらかんさうにやはとカ、ルくるしき中にもたのもしく、なでさすりてぞおはします、かゝる所に、あいもすかさず狩人と、覺しきもの一さんにかけ來り、あらふしぎや是迄は見へたるがと、四方をきつと見廻し、扨こそ是に雪のあたらぬ水彩あり、定めて是にや居ぬらんと、矢をはげへうと放さんとしたりしが、引しほりたる手もすくみ、地跡へもさきへもうごかねばカ、ルとほうにくれて是はそも、いか成者のしよいやらんと、はげたる矢をおし直し、たとへいか成る者にもせよ、正たいあかさでをくべきやと、カ、ル立よりて見てあれば、はたち餘りの上郎の、雪をしのぎておわします、狩人は膽をけし、いかさま是はこらうやかんの某を、たぶらかさんためなるよな、其正た

いを顯すべし、さらずは松葉をかきよせてふすべるがいかにと云、わうじ此由聞召、いやとよわれようくはいのものならず、我は是かづらきのわうじなるが、魔取のわうじにおそはれて此所迄きたれりと、のたまひもはてぬに、狩人はつとかうべをたれ、扨はさやうにましますか、某は高村すくね兼道とて、其いにしへは此所の、郡司にて候が、父にて候正道、三とせいせんにかりに出、いぶき山にて猪に、ふりよに命を失はれ、某若年に候へ共、ぐんしの口宣を召下され、父か名跡さうぞく仕候、然るに近年此所は、魔取のわうじ御家臣、右大辨つね高の、鷹の飼料に押とられ候故、牢浪の身に罷成、みんかんに落下り、かやうのていには候へ共カ、ル大君のりんげんに、いかでか背き奉らん、いぶせげにては候へ共、先それがしが、はにふへ臨幸なし奉らん、肩に御召候へと、君をうしろにおひ參らせ、わがやをハヤ三重さしてぞ歸りける、はにふのこやのあさ夕につゆなれころもしほり戸に通ふ戀風しみ〳〵と地品よくたゝむなけしまだ、うたてやゆふもつらけれど、父母にわかれて其のちは、地たのむひとりの兄上の、垢つきたりし小袖をばすゝぐたらいに、たつなみの、ちどりかけなるたすきをばヲクリ習はぬしづのいとなみは、世にしほらしくぞ見へにける、かゝる所に兼道は、大君をおひ參らせ、芝の戸を音つるに、更科急ぎ立出て、などけふはいつよりも、をそく歸らせ給ふぞや、わらんず取てやすませ給へ、時にかね道やあ妹、某よりは此御かたよきにいたはり奉れ、さらしなはつと膽をけし、いか成る人にてましませば、是迄つれ立來らせ給ふぞ、兼道聞てこの君こそは、其方がこぞのみかりの御時に、をやに孝ある女とて、御ほうびを拜領せし、かづらきの大君樣魔取のわうじの横行故、都をひそかに出御有り、かやう〳〵のしだいにて、有かひなしの某を、御頼有間、是迄御供申せし事、恐れ多くも有かたし、まづ〳〵をくへりんかうなし申べしとカ、ル友なひ申せばさらしなは、はつと計に嬉しくも地なふ〳〵兄上あれこそは、わうじさまにてましますか、其みやさまにて侍ふかと、地くりかへしくりかへし、心にこめしかよひぢの、ゆめにのみやは人めよく三重つゝむ心そ

## しのひのだん

やるせなき、くれ行まゝに物すごく、あたりにちかきかねのこへ、かのいあゐじの草のいほ、ねざめもおぼしいでられて、をゝん枕も打つかず、ひとり詠る夕まぐれ、しのぶにつたふ地軒の玉水おとすごく、灯の影月のかげ、ひかりあらそふあばらやは、ひすいのふすまさむふして、誰と共にやかたりなん、ああだなりと御床を、おきいでさせまたひつゝ、地あいのしやうじをつきゆびし、ほのかに御らん有ければ詞兼道はいつしかにカ、ルけふのふぢきにくたびれて、せんごもしらずふしいたり、更科はかたはらに地いやしきひなのすまゐにも、昔わすれぬたしなみに、さす爪べにやますほかい、地ちひろにあまる黒髪も、櫛けづるさへまれにして、むかふかゞみもはつかしと、顔を見ふりを見姿を見、かこちわひたる有様に、わうじも戀のますかゞみ、しやうじをそつとあけ給ひカ、ルもたせ給へる扇にて、うしろをほとゝ打給へば、うつる鏡にわうじとしりフシノヶ何かうしろへおちしやとさらぬ體にて云ふせい、さすがわうじにましませ共、御身もちゞみ御こへも、ふるひながらにわれなるぞ、戀しきまゝにねもやらず、是迄忍ぶわれが身に、情をかはしるさせよと、仰あればさらしなは、霞がほらに咲花の、われらごときのいやしげなる、鳴子鳥をはとめ給はん、大君は聞召、くもゐに三重たかき月かげも、桂男の中空に、よな〳〵通ふ白露の、にごりにしまぬはちすはも、でいどよりこそおふるめれ、大宮人に、まじはる身は、しづに戀をばせぬ物かは、かやうにほに出染し身をカ、ルいかで其まゝあらるべし、心くすみし兼道が、かへりきかんも耻かしや詞我身のはても是迄と、立かへらんとし給へば、更科たもとにすがりつきカ、ルわらはも君を戀衣、かの岩橋と見置しも、るにしふれつつちぎる夜の三重あくるはわひしこなたへと、御手を取て諸共に、ふせやの内のいもせ川、ふかき契りと聞へけりカ、ル此人々の心のうち、うれしきとも中々申計りはなかりけり

## 第四

其後、まとりのわうじはからひにて、かづらきの大君を、尋ね申さん其爲に、五畿七道に新せきをすへカヽル國々へくはんざつしを、下し給ひてたづねらる、中にも江州は、右大辨つね高、承つて下向なし、國の守をまねきよせ、かやう〳〵の御せんぎなり、かづらきの大君の、ありかをしらする者あらば、ほうびはこうによるべしと、一々に口とひす、もり山の百姓共、すゝみ出て申やう、當里において、さいかうの前郡司、すくね、兼道のもとにこそ、何人かは存ぜね共、其さまけたかき上郎の、みへさせ給ひ候と、申上れば國の守、つね高にかくと云、右大辨聞よりも、それこそはいぶかしゝ、直に某むかはんとカヽル手勢すぐつて三重それよりも、もり山さしてぞむかひける、ひなのすまゐのいぶせきも、馴初ぬればいつしかに、たくしよのさんぜん是も又、わが古里の白雲と、高間の山を地よそにのみ、かづらきの大きみは、兼道兄弟が忠節にカヽルひとひふつかとおぼせしも、月をかさねしつまごめや、いづもやへがきいつとなく、妹のさらしなを、うねめ女官に召れつつ地くはしんげつせき時折の、御つれ〳〵の仇枕、かはすいもせの今ははや、淺からずとこそみへ給ふ、兄すくねかね道は、朝げ夕げのいとなみ、又我君を何とぞし、世に立申さんつてもやと、世の是ざたを聞んためカヽルあきなふわざのさま〳〵にヲクリ日ごとに市にぞ出にける、けふも又我君に、御いとま申うけカヽルあじかかたみも忰かふり、かふる小笠のおかしげに、市をさしてぞ出にける、其跡にて更科は、御まへにとぎなしてカヽル立かへり行年なみに、昔のくもの上ならば地あまたの公卿參內あり、御こと始ぞせちへぞと、御ことぶきをとり〳〵に、いつきかしづき申さんに、かゝる佗しきふせやの內、せめてはけふの七草を、御なぐさみにみづからがカヽルはやしてみかゆをすゝめんと三重取そろへつゝ

## 七草

はやしけれ、いまださむけき春の野に地袖ふりはへてつむわかな、まづはながめもいやたかき、ふし二ッ三重ならねどもねしろなる、すへなが〳〵とせりくさや、君のめぐみはつくばねの、かげよりしげきなづなくさ地また五ぎやう草たびらこや、すゞなくたち

とりませて、此七くさのみかゆをば、しんにそなへ君にさゝげ、身をいはへは地名やみをのぞきじや氣をさり、よはひをのぶるためしとかや、ことにあほはの御せち名地三七疋の馬どもを、みはしに引やもろたつな、ゆりかけ〳〵ゆるがぬ御代をわがきみの地つがせたまわんしるしにはか、りやうじゆじつかくませば歌やがてめでたきはつはるをまつもまつかや子の日の小松、ひくは千代ふるひめ小まつ、まこと千世ふるものならは一ツ三重神代のことを、かたれとう〳〵〳〵〳〵とうどのとりと、日本の鳥と、わたらぬさきに、なゝくさなづな、なづななゝくさなにごとも、君のめぐみをあふぐ身は、などあさからぬあさか山かげさへ見ゆる山の井の、あさくは人をおもふものかはと、君をなぐさめたてまつる、されば後代にいたりて、きのつらゆきがこきんのじよに、なにはづ、あさかやまの二歌をばカ、ルゐいかの父母とかゝれしもノリこれこのうたのことなりとや、うねめはみかゆをとゝのへて、大君にさゝげつゝ、御ことふきたてまつる、かゝる所に兼道、大いき切てはせかへり、畏て申やう、君此所に御座有る事、かたきの方にもれ聞へ、國司に下ぢして魔取より、大勢打て向ふよし、道にてつたへ承る、かくて此まゝ御座有ては、若も御けが覺束なし、更科を召つれられ、幸當國しがらき寺には、我君の御きるそう、行基僧正、十六丈のるしやな佛を、御こんりう候ひて、かしこにおはし候へば、あれへ御こし候べし、某は是にとゞまり、かたきをふせぎ申べし、はやとくとくと申上る、大君は聞し召、なんでうさる事あるべきや、汝もろともに兎も角も、生がいをとゞべきなり、時にさらしなすゝみ出、なふいかに兄上さま、爰にはひとつの手だて有、君は只ひとへに、御身を頼みてましますに、御身是にて果給はゞ、此後たれか御かいほう、なし奉る者あらん、又みづからは女の身カ、ル草の内なるはゝ木々の、ありてかひなきものなれは地死するも殘るもをなじ忠、御身は御供なされつゝ、敵を討取大君を、みよに立させ給ふべし、みづからは是にとゞまり、女成共ものゝふの、家に生れは弓矢の道カ、ル爭か男子におとるべき、早とく落させ給へと云、兼道聞てさすが汝は某が、妹ほど有けるよな、然らば跡をたのむぞと、君の御供仕り、

しがらき寺へと急きけるカ、ルさらしな御あと見送りて心安しと内に入り、兼道がたしなみし、鎧を著し太刀をはきカ、ル長刀小わきにかいこふで、よするかたきを待居たり、去程につね高は、土民共にあないさせ、大せい引ぐし來りつゝ、大音上て此屋の内に葛城の大君、おはしますと承り、右大辨つね高が、御迎の爲參りたりじんじやうに御出あれ、さなくは只今亂れいり、兼道もろ共生どるぞや、それ打いれと下ぢなせばかうがの藤太藤内、まつさきかけてかうもんを、打破つて飛で入、さらしなるたりと内よりもカ、ル長刀そばめまくり立ハヤ三重おもてをさして切出し、しばしたゝかひたりけるが、もとよりさらしな、長刀の上手にて、藤太かほそくび打をとし、藤内がまつかうから、竹わりにさつと切る、され共多せいの事なればカ、ル我もくと落かさなり、高手小手にぞいましむる、扨ぞう兵共亂入り、爰やかしこと尋れど、大君見へさせたまはねばせんかたなくもさらしなをカ、ル引立てそれよりもハヤ三重都をさしてぞ引にける、さればにや大友のまとりは、かつらきの大君を、都をさらせまいらせつ、心にかゝる雲もなく、をして太子に立給ひ、カ、ルごうあく無ざんにまします故、恐れぬ者こそなかりけれ、かゝる所へ右大辨つね高、御まへにしかうなし、此たび江州もり山にて、かづらきの大君を尋ね、生取申さん爲罷下り候處に、わうじ落させ給ひつゝ、すくね兼道が妹の、さらしなをカ、ル生取引ぐし候と、まとりのおまへに引すゆる、魔取はし近く出給ひ、さらしなに向はせ給ひ、大の眼をくはつと見ひらき、やあ汝はすくね兼道が妹にて有けるな、よくもをのれは大君を、いづくへをとして有けるぞ、ありかを只今まつすぐに、申せやいかにと座を打て、はつたとにらんでいからるゝ、時にさらしなから〳〵と打笑ひ、あらぎやう〳〵しき有樣かな、何それがしに大君の、行衞を申せと宣ふかや、女ながらも更科は、高村郡司が妹カ、ルもとものゝふの名も高き、其末葉にて候へば、忠節に落せし君、其葛城の御行衞、やゝいかで、あからさまにや申べき、それ德有て仁ふかく、めぐみもあつくましますを、是仁君と申なり、道に背きて王位を掠め、がいにまかせてふるまふを、ひつふどくふと名づけたり、どくふ世にあるためしな

し、淺ましきかなばんじやうの、其德もましまさず、親兄の禮に背き、人民をなやますは、追付け天の明鏡の、くもらぬ影にせめられて、めつぼうくびすをめぐらさじカ、ル其時こそは申さめと高笑ひしてぞいたりける、まとり大きにはがみをなし、やあらおのれは女の身の、小さかしげなる返答かな、よしよしいはせでをくべきや、やあもの共其女が、いしやうをはいであれ成し、松の梢につり上て、せめつけせめつけ拷問せよ、かしこまつていしやうをはぎ、あげつをろしつせめとひしはハヤ三重目もあてられぬしだいなり、むざんかなさらしなは、さむき嵐に身もこほり、はだへもふるひいきたへて、たへいる計に言葉なし、其時魔取近々と立より、汝がいらざる忠節故、思はぬうきめに逢ぞかし、落せし行衞を申なば、たすけかへさんはや申せと、大音上て宣へば、更科聞てやあ愚か成る仰かな、身をさき骨をくだかれても、中々行衞は申まじ、忠義の爲に命をすつるは、女ながらものぞむ所、きよく命を召れよと、さも高聲にあざむけば、魔取大きにせき給ひ、げにも汝は忠義をたてけんを顯す、それ賢人の胸中には、七つの穴あるとかや、今より後の世語りに、魔取がじつけんすべしとて、はかせ給へる御太刀をぬき持て、心もとさじ通さんとしたまふをカ、ル頸をちゝめてきつさきを、二三寸くわへたり、魔取いらつてこぢはなさん、いやはなさじせひはなさん、いやゝいやいやはなさじと、諍ふにこそくはへたるカ、ル切先はつきとくゐをつて、ほつと吹かけ奉る、まとりくぐつてよけ給へは、うしろに有ける右大辨、つね高のみつけんに、一ゆりゆつて立ければ、わつと計りをさいごにて、ついにむなしく成にけり、まとりも膽をけし給ひ、そらをそろしく身ふるひし、横手を打て、あつはれ汝は、扨さて女にまれなる者にてあり、縄ゆるめよと御でうあるカ、ル畏て引をろし、いしやうをきせて取かこむ、時に魔取宣ふは、傳へきくもろこしの、みけん尺はめいけんの切先を、口にふくみしんわうに吹かけカ、ルついに本望とげたりとや、汝は女の身なれ共、みけん尺には增りたり、ゆふきにめんじ命をは、たすけるさすると去ながら、我を討んと思ひなば、ふつうの劔は身にたゝず、只今切先をれたりしいかづち丸をあたふるぞ、此太刀

にて某を、何とぞ重てねらひつゝ、討て見よと件の太刀を下されて、いとま給り入給へば、さらしな跡を見送りて、命を助け給る共、目の前にある逆敵を、爭かでかもつて餘さんと、いかづち丸ぬき持てカヽル追かけいらんとしたりしが、いやまてしばし此所は、まつたふなして立歸り、兄かね道と諸共にうつこそ本意よ、ことに又、いかづち丸をゑたりし事、魔取のうんのつきしさう、時節はうつさじ此太刀にてカカル王子の首は地給るべし、かまへて忘れ給ふなと、高聲に呼わつて、君の御跡したひゆくカヽル天晴まれなる女とて、貴賤上下をしなべて、皆かんぜぬ者こそなかりけれ

## 第五

其後、葛城の大君は、兼道にいざなわれ、しがらき寺に御入あり、行基に對面まし〳〵て、御頼み有ければ、行基御請を申つゝ、御かいほうなしければ、カヽルしばらく是に御逗留、時を待てぞをはします、去程に、かね道は、君の御出世きぐはんのため、よなよなこすいに口すゝぎ、こりをかき身を清め、白ひげ大明神へさんろうし、ないげ清淨にほつせなす、今宵はことに一七日、まんずる夜にて有ければ、いよいよしん〳〵こらしめて、宮居にさんけい申つゝ、一心にがつしやうして、なむカヽルきめうてうらいそもそも、當社明神は、本地觀音大しにて、れいげんあらたなりけるとや、ねがはくはせいりやうの、月くらからぬかげをうけ、逆敵忽めつぼうし、あまつひつきのほがらかに、雲井をてらす大君の、御世となしてたび給へと、ふかくきせいをかけまくも、かしこによすがらつや申、きぬんなしてぞゐたりける、かゝる所にないぢんより、はくはつたる老翁、こつせんと顯れ出、さしもけだかきみこへにて、いかに兼道、汝ちうていを盡し、神明にかつがうなし、君の出世をいのる事、心安かれ本望を達しゑさせん、そのために姿をまみへて有けるぞ、汝が妹更科も、忠孝の者なれば、つきそひまほりのがれゑぬ、なんをすくふてゑさせたり、更科にも對面させ、諸共にごうあくの、魔取の王子をうたすべし、我に隨ひきたれよとカヽル宣ふみこへ諸共に、はくうんに打乘

て、都の方へとびたまふ、兼道きゐのをもひをなし、カヽルをしへにまかせ御跡を三重したふて都へいそきける、去程にまとりの王子は、御ゐせい日々につのらせ給ひ、まへには魚鳥八ちんをつらね、うしろにはかすをおかにし、酒を池にすと、古人のいへるもかくやらん、酒色におぼれけうをなしカヽルあかしくらせ給ひしは、よにあさましくぞみへにける、けふは殊更毎年の、かれいにまかせさぎてうを、はやさせゐいらん有べしと、ひがしをもてのみすちかく、御出有てゐいらんある、かねてしたくのことなれは、二もとのさぎてうをみて、いしやうにかざりたて、はやしの役をふれ渡す、いづる姿も三ヶ月の、弓取なれど時しある、君がためにとはらからはカヽルはやしの役に打まじはり三重をんどをこそは

## さぎてう

はやしけれ、うてやさぎてうとんとやおほんをさまる、御代の印には、ながき日かげも、うつろふや、まつと竹との、あいをいに、もろこし鳥の、尾をまなび、したのほすへをゆつりはや、つるすあふぎのきり〳〵てうと、ひらいてすほめてくはつとひらくや、よもの春、はるのぎしきを取そろへ、孫子にゆづれだい〳〵の、かほしばむ迄かいらうの、ひげながゝれとかゝまりし、こしにあづさのはや弓や、ゆみはふくろにおさまればみはこによゝの、たち花の、かほりあらそふ、とそのみき、くめやいづみの盃に、引しめなはにしろかねの、ゆきをいたゞくすみのへの、いそによるてふほだわらや地昔じんぐうこうぐはうの、いこくたいぢの御時に、はたう万里の舟のうち、馬かふ草のなかりしに、もちひ給ふときくからに、われも二ツ三重たぐゑん君が身を、世に田つくりとあがむらし、あかみがちなる初花や、すそのゝむめのうつりかに、いもせの山と名やたゝん、よしたゝばたてひとふしに、つのぐむあしのあだまくら地かはすちぎりを世の人に、見せばやけふのかゝみ草、八千やこのかず〳〵に、ふくじゆのきくのほたげをは、千世のためしに引いとの、糸にかゝれるかけたいよりも、をもふかたきをつりさほの、みさほすぐなる、みよをいつ、みどりもさすや、青柳の、

げにもかれたる木たり共、花さくら木のよそほひ、せいやうのかげのとかなる、空のけしきをもしろや、そも〳〵さぎてうのはしまりは、くはうていの御時、しうなん山のかたはらに、さんりやうと云悪鬼あり、かたちは人にて足ひとつ、とくはしる事世にすぐれ、峯をこへ谷をすぎァイノ手木ずへをかけり三重枝をつたひ、人民を、なやましぬ、くはうていあはれみおぼしめし、ていりやうのれいをなし、三つのぎてうを打たまへば、悪鬼はおそれて逃さりぬ、いまのさぎてう是なりとや、それはいにしへわれはまた、いまぞかたきをふたつ三つ、打かちくりと悦ぶはヵ、ル何よりめでたかりけると、まいをさめたりければ、王子御きげん淺からず、品々のたま物をめん〳〵に下さるゝ、いたゞくふせいに兄弟は、けいごのぶしを取てふせ、さいたる太刀をばい取て、首一〳〵に打をとし、かふりしふくめん取てすて、天上へかけのぼり、魔取の王子を引立て、ていしやうへ飛でをり、両方よりさし通し、首中に打をとす、有あふめんめんさはぎたち、らうぜき者のがさじと、さゆうより追取まく、時に兼道大音上、やあしばらくまてかた〳〵、かく申某は、高村すくね兼道、かづらきの大君の、御みかた仕り、はかりことをめぐらし、只今王子を討取たり、五逆の人にくみせんより、仁有る君にしたがひてヵ、ル天下をやすんじ給ふべし、いかにやいかにとよばはれは、有あふ公卿殿上人、北面下郎に至迄、一同に悦びて、もういに恐れ随ひしが、今よりしては大君の、御みかた申さんと、いづれもこぞつてきぶくなし、皆ばんぜいをとなふる時ヵ、ルきてうのかざりの内よりも、魔取の王子飛で出、兼てかやうに有べきと、ちりやくをなして有けるを、はかり事にのせられて、悦ぶけしきのをかしさよ、まことの魔取は我なるぞ、とあたりをにらんで立たるは、金剛りきしまけいしゆらヵ、ルあれたるけしきもかくやらんと、身のけもよだつ計りなり、兼道大きにはがみをなし、天にあがらば五逆の網、大地をふまばせきばつの繩、けんこんにみち〳〵たり、七尺の屏風は、しなをにあゆみ行とても、まとりの王子はあめが下、身を置給ふ地はなきぞ、いづれもかゝつて打とめよ、心得たりとさゆうより、追取まはし打てかゝる、魔取いかつて、物々しやおのれば

ら、一々につかみさき、鬼神をしたがへまこくにせん、かゝれやかゝれと大手をひろげ、ねぢころしふみくだき、あるひはつらぬき人つぶてカ、ル力まかせにあれたるはハヤ三重すさまじかりけるしだいなり、時にかね道、大音上てやあまとり、妹にけいやくのいかづち丸をへんしんせん、請て見給へ王子とて、兄弟諸共打てかゝる、魔取は是をことゝもせず、かいくゞり引はづし、二人を左右にかいつかみ、一々に取てふせ、くはんねんせよとふみつけて、首ねぢきらんとし給ふ時、ふしぎや大地めいどうし、白ひげの大明神出現まし〳〵うしろより、魔取のたぶさをかいつかみ、中に引立給ふにぞ、兼道さらしな力をゑ、をき上つてさゆうより、指通しさし通せば、よはる所をしんれい、かしこへかつはとなげ給ふ、カ、ル兼道すかさずまとりが首、水にたまらず打をとすカ、ル此首こくうにひぎやうして、くはゑんを吹かけ飛めぐる、され共しんれいかごあればカ、ルくもゐはるかにまひ上り、行方しらずにうせにけり、しんれい其時みこへをあげ、カ、ルなを〳〵ほうそをしゆごせんと、ひかりをはなちうせ給ふ、兼道御あとふしをがみ、逆てきをたいぢして、國あんせんの吉左右と、悦びいさんで立たりけり、かの兼道がはたらきを、きせん上下をしなべて、皆かんせぬ者こそなかりけれ

## 第六

其後、魔取の王子も自滅有、洛中のさうどうもしづまれば、天皇を都へ還幸なし申、かづらきの大君もカ、ル江州より歸洛あり、目出度御代とぞ成にける、此度のくんこうに、高村すくねかねみちを、近江の郡司にせんじ有、正五位ていゐにふくせらるゝ、まつた行基僧正にも、菩薩の號を給はりて、近江は都遠ければ、大和の國に地を見立、大がらんをこんりうし、十六丈のるしやな佛、あんち申せとりんげん有、則すゝねかね道に奉行けいご仕れと、ちよくでうあればかねみちカ、ル謹で承り、頓て三重用意をしたりける、かくて其日に成ぬれば、奈良のみなみに地を見たて、則行基かうじにて、四方に四天の柱をたて、あまたのばんじやう召あつめカ、ル奉行の兼道

さしづなし、作事初と聞へける、去程に都より、あまたの月卿雲客、御きぐはんのため參詣有カ、ルのうふしやうかくをもこちの、所せくまでさしつどひ、くんじゆなしける有樣はヲクリ花やか成けるしだいなり、かゝる所に、天地俄にめいどうして、雲中より魔取のかうべまひ下り、口よりほのふを吹出し、かいげんくやうの道場をカ、ルさまたげんと飛まはるは、すさまじかりける次第なり、兼道さはがす太刀をぬき、飛かゝつてはつしときればこなたへうせかげらういなづま石の火のカ、ル姿に見れ共手にとられず、かなたこなたとする所を、ぎやうぎしばしとをしとゝめ、かく惡靈のをんねんは、カ、ル打物わざにてかなふまじと、じゆずさら〳〵と押もんで、せめ付〳〵いのらるれば、いのりいのられあくれうはカ、ル大地に打ふせらるゝとみへしが、忽くだけて其內より、魔生のすがた顯れ出、ゑゝ口をしや、魔取がからだをわが物にし、日本をまこくになすべしと、かく迄しをふせたりけるを、又ものぞみをうしなへり、われ廣次が一念なり、今ははや是迄とカ、ル云かと見れば其まゝに、雲にまぎれて失にけり、先々あくまはさり行しと、こんりうのこと始め、つゝがなく打納む、千秋万歳めでたしと、貴賤上下をしなべて、皆あふがぬ者こそなかりけれ

和國女眉間尺終

# 通俗傾城三國志

## 第一

「偖も其後、駒もいさみてなるすゝの、馬子が歌にかしまたちあつまのそらに、かほむけて、朝日ににほふとを山やと山の、さくらはなかざる、からあやにしき、色ふとんしやんと三重のりかけかゝかさの、うちみゆかしきはなと花、ふたりばしやうによも山の、めいしよはなしにいつとなく、はや品川につきにけり、ともにおのこはやどをとる、ていしゆ立いで見るよりも、まだ山のはに日もたかし、是はいかなる上郎様、いづくへ伴ひたまふととふ、男聞てされば とよ、げせつがしゆんとたのふたる、新吉はら京町、三うらのほう順このたび、三がのつの色合、京の名色花月の君、なにはのゑん色むめがへ様、この御ふたりをよびくだし、もとよりてまへのわかむらさき、合て三がいまつの君、ひとめにおがむ三ふくじん、カゝルぜんせの世にいでの里、やへ山ぶきの花みして、さかへんすへのゑいぐはのほど、たのしみぞんし候也、その山ぶきはいわぬ色、カゝルくちなしそめのぶんにして、人にさたばししたまふな、いざ〳〵これへとそれよりも、地むめがへの君花月の君、馬よりおろしまいらせて、内にともなひかしつきて、たびのつかれを三重「やすめける、いろのみなとのふなかゝり、京大坂の松の君、あづまくだりとこよひしも、品川に一しゆくし、あす江戸入ときくやいな、むかひのためにわかむらさき、その比又世にたかき、なごやさん三としはるは、若むらさきにあひそめて、ともにむすびし江戸かのこ、いふにいはれぬなか也き、打つれきたり御一ざの、繕はずしてふうりうは、カゝル色のきつすいまれものと、上下さゝめきにぎはへり、ていしゆ盃もちいでゝ、三がの君の中におき、それおてうしとすゝむれば、嶋ばらの花月の君、むめかへ様へと有ければ、是はあづまのむらさき様、御はじめあれかしと、につことゑみて申さるれば、ていしゆこゝはさん三様、おさしづあれといひければ、山三につこと打わらひ、若むらさきは某が、あひかたなれば申されず、とゑ釋あればむめつのかもん、罷いでゝせつしやめが、憚ながら申すべし、兩

君様は都より、始ての御いで也、むらさき様はとうちの君、申せばていしゆこゝろみして、あげさせ給へしからばと、若むらさきは兩君に、カ、ルじぎして盃取上て、花月(ママ)さまへとさしければ、花月取上ケしづやかに、人々にゑしやくして、山三にこそはさしにけれ、山三盃取上て、江戸にゐながら久かたの、くもゐもとをき都の君の、御盃をいたゞく事、色みやうがあるくはほうもの、人々うらやみ申さんと、むめがへにじぎ有て、たんぶとうけて一口のみ、さしひかへ又取上ケ、むめがへにさし給へは、むめがへおさへてよそよりの、カ、ルひへたる盃せんもなし、ひとつあがりて給はれと、つきもどせはさん三は、さあらばていしゆあい致せ、むめがへいや〳〵その盃、かまひのあれば御あいはかなふまじいと云ければ、カ、ルていしゆはほうと計りにて、びんかきなでゝぞゐたりける、なごやさあらば給はらんと、又ひとつ引うけて、口付給へばむめがへは、さすまをおそしとよりそひて、その盃に口をそへ、いちどにのふでいきをつぎ、たがいにめと目を見あはせて、しつとわらふてうつぶけば、むめ津拍(はやし)ていよ見事、むめがへ様の御盃、むらさき様へと云ければ、あいとこたへてさしけるを、若むらさきは大やうに、扱もきみよき御酒ぶり、カ、ル一つたべんとうけほして、むめ津にこそはさしにけれ、かもん待かね候と、いたゞきて三ばいほし、山三にさせば一つうけ、ひかへ給ふをみてむめ津、進出て兩君様、せつしやねがひのござ候、三がの君のか程迄、御あつまりあるご一ざは、つゐにきゝも及ばねば、道中の御しかたちと計り御まなび、御みせあれやと云ければ、兩きみこれはいとやすし、むらさき様もそうあらは、御たちあれやとすゝむれば、じするにおよばず若むらさき、小つま取あげたちあがり、さきにすゝめば兩君もヲクリつゞいてせきをたゝれしは、めづらしかりけるしだいなり、色はちしほにおほけれど本地さすがにかけてたのむには、むさしのにおふいとすゝき、ほにでし色や若むらさき、みやこなにはづこの江戸を、三がの津とは申せども、そのだいいちの松の君、さも大やうに立いづる、やなぎのめもと花のくち、ちよつとさしくしあらひかみ、身ふりせいころとしのほど、たとへていはん花もなし、見るに心をくれな

ゐの、もへたつやうのかうりんずに、打かけたりしらきぬは、さくらかさねとうちみへて、三重ときもやよひの色なれや、つぎはみやこに名の高き、花のめいしよは多けれど、見てもみあかぬみよしのや、よしのゝさくらすまあかし、月と花とをくまもなく、ひとつに見たるこゝろとや、本地花月の君と申つゝ、ひなのはて迄せんせいを、きゝふれたりし色つかさ、ひじゆすのうへにきのこそで、はなやまぶきと云とかや、三つかうがいに二つくし、げに京ふうのかみかたち、あいきやうありしようがんは、ほかにたぐひもあらいその、なみのちひろにしづむ共、せめてひとよはこのきみと、心をかけぬはなかりけり、つづいていろもなをよしや、なにはづに、さく此花のいまもはるなるいろさかり、むめかへのきみはひとしほに、花もいろかもさきかけの本地よそにおとらぬようしよくに、ふたつかうがいひやうごわげ、みつさしぐしに八もんじ、山三がかほを目にかけて、ずんどでかけしよそほひは、月ゆき花の三つの君間ノ手小つまかいとりふりかけて、たかびにあとさき見あはせて、さしもにひろき大ざしき、二三と四五ど道中は、こゝろことばもおよはれず、かゝるところへそともより、しゆすのづきんにすげかさき、三重あさぎあはせの身せばつま、ひらり〳〵とけかへして、つか〳〵ときたりつゝ、おめずおくせず立たるは、おもひかけなうみへにけり、むめ津はいそき立むかひ、やゝそのほうは此所を、何と心へざしき迄、きたりては有けるぞ、くはんじんならばおもてへでよ、べいせんはいか程も、ゑさすべしと云ければ、いや私は小づるとて、カヽルはづかしながら少々は、人にもしられし身なれ共、さしつけ是へまいる事、承れば京嶋ばら、大坂のしんまちより、たゆふ様の御下り、しん吉はらより御むかひに、若紫様御いでにて、こよひ三がの色くらべ、世にもまれなる御一座を、ゆめ程成共見まほしく、つとめをかきて御ざしきへ、カヽルわざ〳〵まいり候ふと、につことゑみてぞ申る、山三此よし聞召、くるしかるまじこなたへと、カヽルおほせければさあらばとて、チクリかもんはともなひいれにけり、山三是へとのたまへば、すこしもおくせずまんなかに、カヽルむんずとなをればわかむらさき、さかづき取上ケさしければ、小つるとり

あげいたゝきて、みな樣すらりとゑしやくなし、むめがへにさす所を、山三おさへてまづかさを、ぬぎて盃いたされよと、てを取給へばふりはなち、是はわれらがだうぐ也、づきんはかみもおなし事、かさは上郎のかうがい也、くるしからじとかたふけて、しとゝよりそひむめがへ樣、イロ地御身をちらとみのぢより、カ、ル道すがらつきまとはり、はまなのとまりでくどきしに、つれなくよもあけ此程も、かなやのしゆくにてちそめのふみ、とかくのこたへもましまさず、御身にたよりかこたんため、やつすすがたの百年んめ、じつを見せんとみぎりのての、カ、ル小ゆびをふつゝとくひきつて、ちけふり立てふきつくる、むめがへ是はと立のくを、たもとを取て引とゝむ、山三こはしれものと、二人の中へわつて入、おしへだてつきのくれば、かのものかふりしかさづきん、カ、ル取てすつればすみまゆかみ、山三がかほをきつと見て、やあごへんはなごやさんざとしはるにてはあらさるや、山三きいてさいふはたそ、たれとはおろかすぎし比、御身にうたれしふはの、ばんざへもんがおとゝ、同名ばんさくてるひろ也、兄をうたせむねんと思ふ、一ねんこゝにてつつうし、たいめんなすこそうれしけれ、くはんねんせよとくはいけんぬき、たゞ一打とする所を、御供にひかへたる、かみなりくはん八、ふうでん長七、一もんじにとんでいで、さゆうより切付る、もとよりばんさく小たちの上手、カ、ルひじゆつをハヤ三重つくしわたしあひ、命かぎりに「たゝかひけり、大りきぶさうのくはん八長七、大がたなにて切まくれば、何かはもつてたまるべき、長七と切あふまに、くはん八はうしろよりむずと引くみ両人してカ、ルすかさず取てどうとふせ、くびをうたんとする所を、なごやおしとめやあ〳〵まて、某がちゝ同性、三郎ざへもんを、伴ざへもんにうたれし時、こつずいにてつしむねんさを、思へばかれもあにのあだ、うたんと思ふはぶしの道、もつともしごくのところ也、いまだびじやくのものなれば、放ちかへせ此なごやが、うんつきずんばうたるまじ、とく〳〵とのたまへば、両人きいてかたきをば、ねをたつてはをからす、せひにうたんと申せ共、所もあしく此たびは、ゆるせとしきつてとめ給ふ、ちからおよばず両人は、命みやうが

のしあはせものと、カヽル取て引たておひ出す、地ばんさくしゝのはがみをなし、山三がくびはあづけおく、かさねてほんもうたつせんと、ゆきがたしらずに成ゆきける、なごやかなさけふはがゆう、カヽル適じんぎのせい靈やと、きせん上下安詫皆かんぜぬ者社無鳧

## 第二

其後ふしうよつやのかたはらに、そのかみ四こくの住人とや、がまそがうカヽル大十ふゆとらとて、ふうきぶにようのらうにんあり、大なでつけのすみびたい、男じまんにはいくはいし、そがうびたいと世にたかく、すへの世にみな人の、カヽルそうがうといふ事は、そがうをあやまることばとかや、生得ねぢけ肝ふとく、力ふつうにこへければ、カヽルがいにまかするふるまひを、にくまぬものこそなかりけれ、したがふ所の郎等には、大どうぶつゑもんおにかげ、大竹とら八くろかぜ、だちぼく入道てつぎう、山あらしじやの助、カヽルいづれもぶさうのあぶれもの、人をおびやしたのしみて、ひるはくらして大さけに、よはおきあかすもの共也、時に大十なんぢらもしるごとく、われ三うらの若むらさきに、ひたすらといひいるれど、馬にわうごんうしのつの、はちのせゝるがごとくにて、些そつ共うけ付ず、いかゞはせんといひければ、だちぼく入道すゝみ出、こは御ことば共おぼへず、凡ちからわざ成共、又きん〳〵の事也とも、御ふそくなき御しんしやう、何とてさ程御心を、なやまされ候ぞや、若むらさきがいか程に、ぜんせいしゆみ迄のぼる共、なんでうつかへの候はん、此入道がはからはんに、たが取もちの入べきぞ、たゞいまに御吉さう、申上んとたつ所を、そがう笑ていやまづまて、それではゆかぬ所あり、なごやといふものさきだつて、きよねん中よりあげつめにて、當年中もらいねんも、かひ切たるよしきいて有、そがう程なるものなれ共、カヽル是にこまつてさしあたり、とうはくしたると申ける、大どう大竹申やう、さあらばひとつの手だて有、なごやが歸る道すじに、待伏してやみ打に、うつてすて候はんに、なんでうしさいの有べきと、カヽルてにとるやうにぞ申ける、

大十きいてげにそれも、よろしからんがさりながら、かれもゆゝしきものなれば、ごにちのろけんあらん時、このそがうがやみ打に、したるなんどゝいはれては、ながくかたきをもとむる也、そこをよくりやうけんせよ、いかに〳〵と有ければ、山あらしすゝみいで、あのなごやはせんねん、ふはのばんざへもんと、申す者を打たりしに、かれがおとゝ同名ばんさく、いろ〳〵ねらひ候よし承候也、かれがなをかり、敵討とかうしつゝ、よぶかにかへるをりからに、ばしよ能やうがい見さだめて、切て出兩方より、はさみ打にいたさんに、何のしさいか候はん、さすればおのづと若むらさき、御手に入候はん、是はいかがと申にぞ、十河をはじめ扨もよし、こよひつけんと夕まぐれ、たゝんとせしを大十は、さ程の事にかどいでを、先いはふべしそれ〳〵と、申付ればふつへもんずんと立ておくよりも、ギンノリまだ口ひらかぬさかだるに、カゝルひさくをそへ持いでゝ、カゝルそがうがまへにぞなをしける、大十ほゝゑみ立よりて、ひさくおつ取くみうけて、いきをもつがずつゝけさま、十四五しやくかいほして、さあなんぢらものめやとて、カゝルひさくをわたせば四人のもの、チクリさしうけ〳〵くみほして、今少し召上られ候へとて、差出すそがう引よせもろてをかけ、そろり〳〵とのむ程に、カゝルたちまちたるをかへほして、かしこへかつはとなげ出し、扨きびよしやいさぎよし、いざ門出を打ておけ、此勢におそらくは、てにたつものの有べきやと、おどり上つて一どうに、すでにようねをハヤ三重「したりける、さればにや、ふはのばんさくてるひろは、むめがへが色にめで、あにのかたきをわきへなし、なごや山三を打もらし、むねんの山はふじよりも、まだいとたかくもへまさり、しんねのほのほに身をこがし、やかたにかへり此事を、云ふもむねんにおもへ共、あまりの事にせひなくも、てごめにあひし事共をばんざへもんがこうしつ、柏木に語つゝ、是と申も某が、びじやくものにて候へば、かやうにおくれを取候、うでに力の有ならば、抓付てもほんもうをば、カゝルたつせん物をとせきつのり、なみだをながして申ける、柏木きいてそれは又、思ひのほかのふかくかな、ばんざへもんどのあれ程に、ぶだうはしかく在せば、つね〳〵に人にお

ぢられし、其弟ご其あらん人、さ程のふかくはあさましゝ、くさのかげ成せうれうも、さぞ口おしくおほされんと、おもへばなうばんさくどの、女ながらもむねんさは、こつずいしみてかなしやと、ざを打ちこゑをいらゝげて、おきつまろびつなきにけり、地ばんさく此一ごんに、はらかき切てもあきたらず、口をしく思ひしが、いや〳〵敵をうたずして、犬死したるといはれては、かはねのうへのちじよく也、是迄也とずんとたつ、柏木それは何事ぞと、ヵゝルとどむるそでを、ハヤ三重ふり切てゆきかたしらずに出にけり、さんぎさんげ六こんしやう〳〵、こんがうりきしのあいみんのうじゆ、なむきめうてうらい、ふはのばんさく、てるひろは、ヵゝルかしはぎが一ごんに、むねんをはらにすへかねて、金龍山しやうでんの、にわうはれいげんあらたなる、こぶつにて有ければ、さらばちからをいのらんと、よごとうしみつころおいに川にひたりて、こりをかき、あらなはにてはちまきしはだか身にこしみのあて、ふたへたつなでしつかとしめ、ばんざへもんがさいたりし、三尺八寸の大かたな、ヵゝルおつこうで一こしさし、て

に八かくのかしぼう、どう〳〵とつきならし、ヵゝルにわうのまへの石坂を、一そくせつなに百どのぐはん、ひとたびごとに、力かみ、かんで打付ゆきかへるは、げにぬきんづるたんせいやとチクゞ皆人ごとにぞかんじける、あらふしぎや、兩仁王、はうくはんよりけふりたち、しつほとあせ出あのにわう、ひらきしみ口の内よりも、じんつうふしきのこんがうそく、ヵゝルほつとふきかけ給ふにぞ、そうみしびれておぼへずも、大ぢにどうとふしけるが、かつはとおきてわが身を見れば、さうのうでさうのあし、むねのわたりの力こぶ、ヵゝル二三十づゝふつ〳〵と、地ふくれうごきてそのめんしよく、さもたくましくするどにして、ヵゝルしらきつくりの二わうより、なをすさまじくぞみへにける、ばんさくうれしさ限りなく、かしこに有してうづばち、さも大きなるみかげ石、かいつかんであげゝれば、ヵゝルその石かろくいにしへに、まくらなんどをとるこゝち、ゆびさきにてふりまはし、もとの所にすへおきて、扨有がたし有がたし、愈諸願成就と、おんどり上り飛上り、二わうをちたびらいはいし、こんりんふうりんすい

りんまで、くたけてひゝけと力足、どう〳〵ど、地ふみならし、此うへ敵山三めが鐵の城に入り、石の扉をふさぐ共、らくくはみぢんに打やぶり、本もうたつせんうれしやと、うしみつすぐる比おひに、ハヤ三重わかすむ、かたへぞかへりける、さればにや、なごや山三としはるは、カヽル若むらさきのうつりかも、まださめやらぬとこはなれ、ころしもはるの月たかく、地かすめる空のおもしろき、おぼろ月よにしくものは、なしとゑいせし歌よみも、かやうの時やゑいじけん、いかにくはん八此けしき、いとおもしろし、どての内、かちにでゆかんとおゝせける、官八しからば左右(とゝかく)も、おんそばに引そふて、心をくばりてあゆみける、かゝる所に、どてふちのさゆうより、怪き者す十人、顯れいでゝそれなるは、なごや山三とおぼへたり、ふはのばんさく是にあり、あにの敵のがさじと、云より早く切てかゝる、山三を始御供人、小せい成とは申せども、ことになれたる者共にて、カヽルぬき合切むすび、こゝをせんとぞ「たたかひける、かゝるおりふし、ばんさく、かへりがてらに行かゝり、此事をきくよりも、かれはなごやとおぼへたり、あいてはたれかはしらね共、山三にいしゆありばんさくと、いつはりなごやをうつたくみか、是幸にさんざを、うつは何よりやすけれど、一たん命助られ、其恩ほうぜず今うつては、侍の道たゝず、ことにわがみもいぎやうのてい、是でなのるもいかゞ也、こゝはなごやをすくはんと、山三をかこひおしへだて、何人かはぞんぜね共、だいじの御身と見うけたり、こゝはそれがし請取たり、かさねてやうすはしれ申さん、カヽルはや〳〵こゝを御かへりと、やにわに山三をおしもどし、十河に向てやあかた〳〵、敵にこそは人違も、むかしより有事也、打てににせはあたらしや、しやつ力のて始に、ちまつりせんとかしこなる、すぎの大ぼく飛かゝり、ゑいやつと引たふし、いざまへ立のばん作どの、正身のそんたいが、こゝにやうがう有けると、しんどうして打立る、そがう今はこらへずして、飛かゝりかの大木、かいつかんでむづと引、もとよりそがう大ちから、ふはゝみめうのじんづうりき、ゑいや〳〵とひく程に、さしもの大木まん中より、カヽルふつゝとねぢ切大十は、しりゐにどうとすはりける、ばん

さく些たぢろかず、ふり上てうつ所を、そがうさそくのきいたれは、カ、ルおき上りかいくゝり、行かたハヤ三重しらずににげてゆく、ばんさくさのみいしゆもなし、にげは其まゝにがさんと、いよ〳〵二王をらいはいなし、わがやをさしてぞかへりける、カ、ル遖ぶ双の働やと、貴賤上下安詫皆かんせぬ者社無

## 第三

其後蒲十河大十は、若紫になづみしが、ふと花月にあひ初て、ちひろのうみのふかまと成、カ、ルちかきにね引のさたきはまり、たがいのやうねひまもなし、郎等大どうぶつへもん、大竹とら八をよびいだし、こん日はふか川の、下やしきにて網ひかせ、それよりすぐに花月が方へ趣かん、カ、ルしたくいたせと云付て、やがてやういを「なしにけり、よしやなにはのうら浪に、さすがしやれたる梅がへも地なごや山三に打こみて、のぼるもくらきこひの山、地つもる思ひをこま〳〵と、かきておくりしちつかのふみ、地若むらさきにとがめられ、めんぼくなさにいつはりて、地びやうきとがうしつとめをひき、ひるはひめもす思ひわび、よるはよすがらなきあかし、むねにたく火の色はなを、地やしほのもみぢきり島の、つゝじよりけにもへまさり、とひくる人もうるさくて、地なごやの君の事計り、若紫があの色に、うばはるゝこそくやしけれ、しよせんうしなひそのゝちは、しやう〳〵世々も山三様、はなれはせじとさまさまに、カ、ル思ひせまりて今ははや、あらぬ事のみたくみつゝ、ひそかに一まを立いでゝ、人めをうかがふ折からに、山三様の御いでと、若むらさきへあげやより、しらせきたれば紫は、待儲たる身こしらへ、いでゆくすがたの妬しく、しばし見おくり梅がへは、地若紫がへやの内、ひそかに忍ひ入にける、チクリこゝろの内こそふてきなれ、かねてなごや紫に、おくりたる吉光の、守わきざし有けるを、尋ね求めて盗み取、是わが戀の媒と、カ、ルおしいたゞきて立かへり、さらぬていにてわがねやの、まくら引よせ打そべり、きせるにかたるむねの内、さはぐをしづめてゐたりける、かゝる所に、園助といふわか

いもの、梅がへに大なづみ、すつうのきしやう書つかはし、さま〴〵心をつくせ共、つれなく月日をすごす内、思ひにたへかね梅がへが、一まに忍びみてあれば、み山のおくのいはつゝし、花のすがたをみる人も、なきひとりねを幸と、しと〳〵よりて抱付、梅がへさはがずだん助か、こゝをはなせとてにもちし、きせるふり上けうつ所を、むづと取て梅がへさま、あまりつれなき御しなし、身に思ひのあるゆへに、あづまにくだる折ふし、道中にて御身をみそめ、品川のしゆくにつき、かたちをやつしゆびをきりそれよりかやうに下郎となる、身のねんぐはんはよそになり、か程に心をつくす事、ふびん也とはおぼさずやと、こへうちふるふてくどくにぞ、梅がへつくづくしあんして、是くつきやうの事也と、面よはげになう御身は、品川の宿にて敵打のさた有しが、その事はいかゞぞや、だん助きいてさればとよ、よい事計りはならぬ物、御身の事がおもとなり、敵も何もやめになる、とかくの事はぎよしだい、此身はずだ〴〵五ぶきざみ、車さきになるとても、ちつ共そつ共ひくきはなしと、身をもがいてそ申ける、しすましたりと梅がへは、さあらばわがみに自が、頼たき事のあり、あの花月がそのかたの、品川にての事共を、とくと知て侍へは、此うへ御身と自が、ゆゆしきあだは花月也、あれをさへ失ひなば、心安く念比せん、偸に失ひ其うへにて、かやう〳〵と聞て、かの守りわきざしをそとつかはせばだん助は、あの女獨をば、いかやうにも計はんと、せめくるこひのわりなくも、かならずたがへ給ふなと、ちかひをなしてはかりしは、三重むざんなりける「しだいなり、のめやうたへやはまゝつの、おとざゝんざの大一ざ、チクリもとよりなごや若むらさき、たにことなりし御中にて、あげや一けの者共に、しな〳〵を給はれば、カゝルあげやふうふはあさからず、よきにもてなし奉る、時に梅津それ〳〵と有ければ、承り大せいにて、嶋だいをかきいづる、上﨟たちの名よせして、しよこくめいしよの花たばこ、心をこめてかざりしは、いとめづらしくぞみへにける、かゝる折ふし花月の君、けふの客衆のおそきゆへ、さびしきまゝにまいりしと、いとしづやかにぞきたらるゝ、山三むらさき始とし、みな〳〵是へとしやうじつゝ、やゝ過け

れば花月の君、かぶろをよびて嶋だいに、品をつくせしたばこの名、よみきかせよと有ければ、カヽルあつとこたへてよみけるは、やさしかりける次第なり、花のめいしよはおほけれど、わけてよしのはいろもかも、地よそにかつ山からさきや、さかりはいまだわかくらの、その山からのほとゝぎす、やみのさつきになきわたる、三重こへもたかさきいはくらの、山なたてじやとはらびろに、うへみぬわしのをのながく、ながゝしよのひとりねに、君をまつらにすみのへや、地なきあかしたるむしたばこ、けふりはそらに立わかれ、しるもしらぬも白きくの、花のいくゑもよね澤の、かほりゆかしきそでのかを、したひてこゝに小まつとや、きよはらきよ川にごりなく、むすびし水もいさぎよき、ひかりにみがく玉の井の、くめどつきせぬ江川の水、ながれてはやきやはせかや、戀しき人をみやかはら、地わたろとすればはしとめの、はしのあるじかおそろしき、名もりうわうやはつとりの、とぶてふすへはくもにいる、カヽルあとこそみへね白たへに、ふるはつ雪はゑだごとに、花とさくらやさゆるよの、月のかつらのかつら川、しづがおやまだかりそめに、見そめしんでんいつのまに、そのにしきゝもかず〳〵に、つもりて君にごげんこや、あかぬこゝろはあかつちの、つきぬ名よせの品々を、おもしろうこそかたりけれ、わかむらさきと花月の、きみ立より名よせのふたをみて、若むらさきとふだをかき、からさきにつけたりし、心はいかにおゝそれは、ならふ色なき君なれば、ひとりのまつといふならん、花月の君をよしの、とはうへなき花といふ事か、地扨はつとりをはつねとは、それはかなにてかく時は、はつとりなれはうぐひすの、こへにたとへてはつねの君、歌のよきをやほめぬらん、それはさもあれお山だに、高をとつけしはいかならん、むらさきこたへてうつくしき、女をお山といふなれば、高をの君はお山じやと、いふ事ならん三しうを、小松と云は又いかに、わかむらさきは打わらひ、よのかた〳〵もなにはへの、よしとあしとをくみわけて、おゝせられよとありければ、なごや梅津一同に、若紫の才ちの辨、今色里のしよかつりやう、そのかうめいもおよばじと、きやうにしやうしての給へば、紫きいて三しうは、三重ならぶ色なきしんぞうゆへ、

やがてくらゐもまつのきみ、小松と是をいふかとよ、かうしうたてをきり山とは、それはきついといふ事か、みちしばをりうわうとは、色のずいわうなるとかや、みちのくをはつ雪とは、見る三重たひにめづらしいといふ事が、若むらをはしとめとは、こひわたられぬといふぎりか、せんよのかたをさくらとは、さくらははなのわうなれば、すがたを是になぞらへて、ほめしことばのおもしろく、色もんどうのやさしやと、ほめぬ人こそなかりけれ、紫はきせるにて、だいをはつしと打ければ、しまだい四方へばつとひらき、金銀のはくにてだみし百はのすゝめ、ばつととび出こゝやかしこととびめぐる、ﾁｸﾘ人々是はとおひめぐれど、とるてをくゞりそでをこへ、驚にぐるをのがさじと、ｶ、ﾙすみ〳〵おつかけ御さわぎは、めさましかりける次第也、若紫はおさへとり、袖をおほひて撫さすり、扨もかはゆきものかなと、ｶ、ﾙ山三と共に打つれてをくをさしてぞいりたまふ、花月の君の袂より、ｶ、ﾙひとつのすゞめとびいでゝゆきがたしらず成にけり、花月は是をきにかけて、ぼうせんとして立ゐたり、幸也とだん助はうしろよりかけよりて、口に手をあておつすくめ、むずとしむれば花月の、君こは何者とおどろくを、ｶ、ﾙ一かたなこゝろもとさしとをし、是こそはｶ、ﾙ若むらさきのたのみ也、我ばしうらみ給ふなと、つゞけさまに二かたな、ｶ、ﾙさし通しくりまはし、そのわきざしを捨置て、ｶ、ﾙさあらぬていにて梅がへが、ﾁｸﾘとこの内に入けるは、ぶたうなりける次第なり、かゝる所へがまそがうふか川にてひまをとり、もみにもふで亥のこく比、あげやにかくとあんないある、かねてまちへし事なれば、さあ御出とさはぎたち、休み在す花月様、おこし申せととてしよくをもち、女房かぶろもろ共に、はしり行て見てあれば、むざんや花月はあけにそみ、もはやこときれこはいかにと、わつと一どになきさけぶ、おどろきさはぎ大十も、ｶ、ﾙ立いり大きに肝をけし、あきれはてたる計也、ていしゆ是は客の内、上郎こゝろせしものあらん、大もんうつて此せんぎ、すまぬ内は一人もｶ、ﾙいざすまじ、ﾊﾔ三重いとふれまはし、うへをしたへそかへしける、なごや梅津は驚て、立出こらん有ければ、梅がへは走りきて、花月のしがいに取付て、ｶ、ﾙあ

らいたはしの花月樣、もはや事され給ふかと、さもけうとげにふしまろび、こへをあげてぞなきにける、大十は立よりて、むなしき顏をかきなでゝ、われ來やう遲ゆへ、むざんの死をいたさせたり、たゞ今にせんぎをとげ、敵を取てゑさすべしと、そばに有けるわきざしを、取てさしだし此内に、このわきざしを見しりたる、ものやあると云ければ、泣伏ゐたる梅がへは、なごや樣より過し比、若紫へおくらせ給ふ、わきざしといひもはてぬに、大十ゑゝすはしれたり、若紫色の妬に、なごやどの御はからひか、眞直にいひひらかれよ、のがさぬと、はたとにらんで申ける、梅津きいてやあらそこつの御口上、こゝにふたつのふしんあり、一つには梅がへ、其わきざしを見もせずに、若紫のわきざしと、知たるは心へず、ふたつには泣やうにしうるい有、かんるい有、今かれがなきこへはほかに僞り、内心に悦ぶおんのきこふるぞ、かれをとらへてごせんぎあれ、いかに〳〵といひければ、そがう聞て愷のせうこあるうへは、若紫にもせんぎあり、まづ梅がへをいましめよと、大どう大竹立かゝる、だん助つゝと走いで、梅がへにとがはなし、げしにんは此男、しかし敵をめのまへに、おいてまよふは戀のやみ、くらむあくうん今こそは、しにものくるひとわきざしぬき、山三にかゝるを梅津のかもん、なごやを伴ひ立かくるゝ、大十始あげやのもの、あはてふためきさうどうなす、そのひまに町のもの、カヽルてんでにぼうをふりハヤ三重たてて、うへを下へぞかへしける、され共だん助ひるまばこそ、つばなのごときす百のぼう、カヽル切落し切落しとうハヤ三重ざいへ、むら〳〵はつとおひちらし、にくゐる所のもんうてば、せんかたなさにかしこなる、みづためおけにとび入て、しばししのへば見うしなひ、ひやうしぎ打てさはぎたち、こゝよそこよと夕やみの、くらきにまぎれカヽルおちうせけり、あやうし共中々、申はかりはなかりけり

## 第四

其後、不破伴作照廣は、わかげのそこつしいだして、こかうをのがれ夫よりも、やきがねを顏にあて、めんさう引かへ名を改め、柴忠太とかうしつゝ、カヽル

其身いさうにつくりなし、うき世を忍ひねたりしが、花月をばむめがへが、殺たるに紛なく、もとなには の上郎ゆへ、大阪のおやかたへ、かへしつかはし見せしめに、おもきざいくはにふすべしと、三うらのほう順計ひしに、げしにんとして大十が、もらひうけて郎等、大どうぶつへもんおに景、大せい召ぐし請取て、けふくるわを引出す、何とぞ道にてばいとらんと、カ、ル心をくばりこゝかしこ、チクリしばし見あはせねたりけり、ゑいやゑいさらさきのつな三重よいこへかけていまひとつ、てうしをそろへてたのむそへ、チクリひけやはやせやよをうしの、めぐるくるまのはかどらぬ、力をいれて車力のもの、四五十人にてございもくを、カ、ルあまたのうしぢ車にてチクリ大あせながして引きたる、しば忠太傍より、ゆらり〳〵とあゆみ出、さて〳〵みればきりやうよき、わかいもの共何として、あつたらうでに力なく、片手にても振まはす、たゞ一本のざいもくを、うしの力をかりてさへ、あの大あせのふびんやと、カ、ルたつかたつかと罵て、かつらからとぞわらひける、才料のもの立むかひ、是は淺草くはん音へ、みどうむなぎのきしんなり、かたつきわきへより給へと、ていねいつくせば又ひとむれ、げんくはゑしよくの、車力共、大きにいかりこへ〳〵に、す六ほうめがでほうだい、本性か但は又、あくさけに呑酔たか、誤つたらば赦べしと、口々に罵たり、忠太さはがず兩うでくみ、かたなのつかに打かけて、きつと見かへりかしましし、何と又あのざいもく、片手にてふりまはさば、何とするぞと云ければ、車力の者共一同に、ヲ、片うでにてうごかさば、是に有あふす十人、てしたに成て順ん、まつたあげへぬ物ならば、しやつかうべを一足づゝ、みな〳〵ふむがかつてんか、早くあげよとつめかくる、忠太聞て、男の詞はきんてつより、かたきをもつてせうことす、さあせいもんをたてよといふ、皆一同にあたご山、冥り白山うそなしと、こへ〳〵にいふ其中に、又一むれに叫て、ぬくとみたならぶてと云、忠太いや〳〵己等に、刀を汚物にてなし、いでそこのけといふまゝに、あみかさ取てかばとすて、かのざいもくのはなを取て、する〳〵と引よすれば、人は物かはうし迄も、四方へばつとぞのいたりける、忠太笑てざいもくの、眞中取てす

つとさし、かろ〳〵と振まはす、もとよりじんべんてき一ばい、こんがうりきしのさづけたる、カ〻ルちからにて有ければ、物のかず共おもはゞこそ、さあ己等一人も、背がさいご打ひしぐと、カ〻ル大のまなこにかどをたて、はつたとにらめばひれふして、大きにおそれ此うへは、なんぶんにも御げちを請わが主と頼べしと、かうべをさげてゐたりける、忠太はざいもく、もとのごとくに直しつゝ、どうと居てやあなんぢら、其しんていならちと斗り、カ〻ルたのみたき事のあり、いかゞあらんと云ければ、何かはいぎに及んと、皆一同にぞ申ける、さあらばとて巧の程、かやう〳〵と云ければ、御心安かれと、カ〻ルてに取やうに申ける、忠太おほきによろこびて、まづ酒のめと懐中より、しやきんあまた取出し、まきちらせば車力共、悦びうけ取おしいたゞき血ささかんの若者共、いきほひあがりそれよりも、こゝやかしこにみへかくれ、今や〳〵とハヤ三重「まちゐたり、かくとはしらでおにかげは、梅がへをいましめて、馬に打のせはたをさし、カ〻ルくるわの内を引まはし、せんごきびしくけいごなし、人をはらひて取かごみ、どてへ出ればきしかげより、くだんの車力す十人、顯れいでゝ其女を、わたせと云ておつ取まく、もとより大どうぶつへもん、そのなをゑたるあらものにて、大切のざい人也、そこをのかぬか盗人共、めに物みせんと大刀、四五寸くつろげにらみつけ、おどしかくれば車力共、それ打殺せと云まゝに、とび口ふり上げ打てかゝる、カ〻ル大どうぜひハヤ三重なくわたしあひ、火花をちらして「たゝかひける、かゝる所へしば忠太、ざいもくを淺草の、もんないに引おくり、カ〻ル立かへつて此所へ、くるよりはやく梅がへを、引卸いましめの、カ〻ルなわおし切てかたにかけ、ハヤ三重行かたしらずにかけ出す、さすが名をゑしぶつへもん、大せいにてをおゝせ、その身もすか所疵をうけ、のこる者共おつちらし、カ〻ルはふ〳〵かしこを引けるは、てもちなうこそ「みへにけれ、里はめてたの、わかむらさきの、色もさかへてのんゑいこの、なみもしづかにこぎいだす、なごや山三としはるは、あらたに小ばやをしつらひて、若紫を召ぐして、かずの御供賑く、さゝめかしたるろびやうしは、チクヮいさましかりける次第なり、ころはぼしゆんの

日のかげも、のどかにかすみ風もなみ、地あさくさ川におしいだし、品川うらにこぎゆけば、若紫は一しほに、はるのみなとの夕なぎや、地かすみにむせぶなみの音、カヽルげにめつらしのふうけいと、チクリしばしながめておはします、やまとにあらぬとうあみの、さつと打てはさつとひき、とをあさを打ひくあみの、げにおも白き手わざやと、しばしあみをぞ打にける、山三紫此ていを、はるかにごらんじめづらしや、こなたへよべとおこせける、梅津は扇をさし上て、是へ〳〵と有ければ、カヽルぎよじんはかぢを取なをし、御ふねちかふぞまいりける、としはるは艫(ともづな)に、立出給ひて此所の、ぎよふにてあらばみへわたる、うら山をおしへよかし、さん候此所、品川うらに八けいあり、カヽル御物語申さんと、一々しだいにかたりけり、まんづむかひのうみつゞき、八ゑのしほあいきはもなく、なみによせたるあわのくに、かすみかくれにほのみゆる、ゑんほのばいせんなみにいり、波よりいでヽ春風に、にほひなけれどなみの花、地さつとあたりてちるふぜい、この下かげのこゝちして、しほひの比はかへるかり、ひかたにおりてはをやすめ、むれゐる人におどろきて、はつと立てははら〳〵、はらりとおるヽありさまは、しほひのらくかん是ならん、三重こなたにみゆるひとむらの、こたちにりよ人行くれて、ねざめに松の風すごく、さう〳〵たる雨の音、こきやうを忍ぶかんせいは、すヽのもりのよるのあめ、これらはなつのけしきにて、ひとよ〳〵にそらさへて、そこ共しらぬわだのはら、こがれ出たるなみのおも、是かいしやうの秋の月、つきのひかりも袖さむみ、チクリしくれもよほす山かぜの、もみちをそらにふきさそひ、にしきとぶかとうたがはる、是やつ山のせいらんなり、ひゞきておつるかねのこへ、しよぎやうむじやうとものさびし、ぞう上寺のばんしやうに、品川おもてゆくたび人、やどをもとめつやすらひて、はるかにうみを見わたせば、入日はなみにかヽやきて、もろこし迄もうみつづく、是品川のせきしやうと、ながめせしまにふゆふかく、ふりくる雪にうなばらも、そらのけしきも見る人も、皆白たへにせんちうの、ぼせつのきやうはおもしろや、此品川のしな〳〵はカヽルかたるにつきぬふうけいと、くはしくおしゑ奉る、時に漁客我は

是、たつの帝より御迎の、使にきたる白龜なり、此所のけしきにさへ、み心なぐさめ在は、われらが國のめでたさは、嘸めづらかにおぼされん、いざこなたへとうちわをあげ、まねくとひとしく波靜り、御舟しづむとみへければ、カヽル人々是はとのたまふまに、りうぐうかいにぞつき給ふ、す十でうのぎよくでんに、げつけいうんかくかむりをたれ、三千のれい三百の、いぎをたゞしてなみゐたり、時に大王人人を、是へ〳〵としやうじられ、汝らは此所、定て聞も及びなん、八龍王の都にて、りうぐうじやうとは此事なり、扨是迄まねく事べつぎにあらず、先なごやが前生は、いこくにてわが一ぞく、赤帝りう王が子、はい公とうまれ、三尺の劔をぬいてはくていりう王が子を切て、カヽルゐをかんこくにふるひつつ、ついに天下をしたがへて、かんのかうそとあほかれ、す百代さうぞくせり、然にはくてい龍王は、しゆくゐをふくんでかんのすへ、とうたくそう〳〵とうまれ、かんていをしいしたり、是に依て又赤てい、りうびとうまれかうめいといふ、ちしんを求てぎのそう〳〵、ごのそんけいとたゝかひ、天下を三つにわけて、カヽルしよくわうと成て、三こくはかなへのごとく、せめたゝかひ、つゐにはくていのすへにいたり、しばちうだつがために亡され、三ごくを一とうして、しんの代となり其後に、ほんてうにしやうらいして、今赤ていはなごやさん三、白ていはふはばんさく、かれは仁わうに力をゑて、百斤をおもしとせず、二わうは七千よ人力、かれをうたんと思ふには、くはん音妙ちの力にあり、こゝに正身の觀世音は、此りうぐうをけど有て、すいこのてうにむさしのくに淺くさ村にちんざある、カヽルなんぢがねんずる所ぞや、いつぎきせいをかくべきなり、天龜八部悉、皆くはん音のおうけにして、ねんびくはん音力、しゆをんしつたいさんかならずうたがふ事なかれ、しそんばん代ふゑきにして、さかゆくすへをまほらんため、此所へ呼入たり、急がらんへさんけいせよ、はやとく〳〵と宣ひて、もくぎよをとらへ打給へばカヽルないかいげかいにひゞきわたり、たいぎよ小魚むりやうのうろくす、かつがうなしてはせあつまり、波をひらいて人々を、もとのかいろにおくりしは、ふしぎなりける 〻ヤ三重」次第なり、いづる

と思へば忽に、もとのみふねにのりうつり、淺草川へぞかへられける、ヵヽルあつはれきたいの事共やと、きせん上下おしなべて、皆かんぜぬものこそなかりけれ

## 第五

其後、武州入間の郡、金龍山せんそうじのくはん世音、衆生利益の結緣に、三十三年めに斗帳(とちう)をあげ、いにしへよりはいさしむ、こんねん其ごに相當り、三月十八日よりかいてうあり、ヵヽルきせんなん女はそでをひき、きりをたつべきせきもなし、なごや山三利春は、りう王のめいにまかせ、此くはん音へさん詣あり、寶前に謹て丹せいをこらし、それよりもかしこを見れは、若紫あまた上郎打つれて、ヵヽルかず〳〵のさゝげ物、思ひ〳〵に「いでたつや、そめしゆかりのわすられぬ、ふかき色かの若むらさき、地ぎんのくはひんに松のしん、みさほの色のちぎりこそ、はなれぬ中となさけしる、しらふぢ小ふぢの、ゑだにかゝりてはる風に、さつとなびけるふうけいを、心にこめてさしたる花、車にのせてしんくのを、かぶろにひかせて出にける、あともときわの色つかさ、小紫は一しほに、大じ大ひの御せいぐはん、くさきのすへはも、もらさじと、おゝんめぐみにわが思ふ、君とちぎりし其中を、ちよよろづよとりうくばんし、つるかめのしよくだいに、かうろ花入取そろへ、かふろにひかせて出にける、つゞいてうねめの君なりき、かねてちかひしわがねがひ、見てさせ給ふうれしさに、さいしきこのむすがたゑを、のせて車の引つなも、しんくのいとのすへながく、むすぶゑにしをいのりつゝ、てづから引てまふでくる、わかてにその名高をの君、日ごとにまさるぜんせいも、めぐみのすへをみほとけの、ゑくはうかゝやく十二とう、とぼしつれつゝくるまにのせ、かぶろにつなをとらせつゝ、ふりよきさくらの色ざかり、花のあゆむかごとくなり、其外ゑまにつくり花、かず〳〵いろの名をよせし、大てうちんはひとしほに、ヵヽル天にかゝやきちにゑいじ、淺くさでらのにぎはひは、こゝろことばにのべかたし、なごやさん三は人々と、打つれ立てはいでんの、地さま〳〵なりしさゝけ物、

打なかめつゝさんけいの、らうにやくなん女のひはんして、たゞゝみ給へば上ろうたち、みやげ物など云付て調來るをまつおりから、比しもやよひの花くもり、いとみだしたるはるさめに、さんけいの人人も、あまやどりしてはいてんは、しよにんまばらに成にけり官八は用有て、表へ出れば長七は、若紫をみおくりて、かしこをさしてぞ出にける、山三はかこの來る內、ヵゝルはいでんにあまやどりヲクリしばし時をぞうつさるゝ、ふしぎやいつもはいでんの、かたはらにあるびんづるの、ざうかと思へばさはなくて、六尺ゆたかの大男、めんうす衣を取てすて躍出てそれなるは、なごや山三か珍らしや、汝を待て身をやつし、しば忠太と名をかへし、ふはのばんさくてるひろなり、遁はなしとつめかゝる、にはに有あふ供のぶし、おし隔おつ取まく、ばんさくみ妙の大力、引よせ〳〵かい抓み、人礫に打たてゝ、大にはさしてかけ出すは、ハヤ三重すさまじかりける次第なり、山三も今は是迄なり、遁ぬ所と思召、刀抜持わたしあひ、切てかゝればばんさくは、四尺餘の大刀、まつかうにさしかざし、たゝ一打と切付る、山三もとよりけん術しや、ヵゝルうけながしかいくゞり、ハヤ三重こゝをせんとぞたゝかひける、もとよりばんさくがう兵のなが刀、たゝみかけて切付る、山三てきゝと申せ共、腕つかれ今ははや、既にかうよとみへし時、きくはんにかけしかしからかさ、おのれとぬけて春さめの、そぼふるかせにさそはれて、ひらり〳〵とおちきたり、ふたりの中にどうとおち、忽大風頻に吹ヵゝル此かさに風をうけ、はんだん計おしてゆく、山三が形もみへわかねは、ばんさくたちにて此かさを、拂のけんとしけれ共、かなひがたくみへければ、しやめんどうなるしやうげかな、たちのすゝはのびたり、からかさかけてはつしときる、つばもとよりかたなはおれ、はつと見ればこはいかに、くめのへいないびやうへながもりが、せきぎやうにきりつけたり、ヲクリ山三はけがなくぼうせんと、てがさにあめをしのぎつゝ、かごをまちてぞ立たまふ、ばんさくいよ〳〵せき上つて、つかみさかんととびかゝる、中へ老そうわつていり、双方をおしとゞめ、いかにばんさく汝が兄ばんざへもん、なごやがちゝ三郎さへもんを打たるゆへ、其子山三に

うたれたり、是積惡のなす所、全なごやに恨なし、しかし汝兄の仇、ほうせんと思ふこゝろざし、力をいのるふびんさに、二王にめいじさづけたり、こんがうりきしはまろが分身、なんぢがちからはわがからぞ、此うへ心をひるがへし、地山三と水魚の結ひをなせ、汝今打果さば、ふはのいへをつぐものなし、われは南方ぐせだいし、とうじの本ぞん成けるぞと、カヽルくはん音さつたとあらはれ、しうんにじやうじておがまれ給ふ、なごやばんさくひれふして、しばしらいはいくはんきのなみだ、くはう大じひのくはうみやうに、うらみのくもをふきはらひ、たがひにむすぶゆうしのみち、げにいさぎよき次第なり、かくとはしらで梅がへは、長刀おつ取はちまきし、走り來つてばんさく殿、うはべは御身に順へ共、命をあげし山三樣の、助たち成ぞと切てかゝる、ばんさく呆れてゐる所に、こゝろくもおくり其内より、花月がおんれうあらはれ出、おもひしれやと梅がへが、くびふつゝと引ちぎつて、ほんもうとげしうれしやと、いふこへもろ共うせけるは、ハヤ三重おそろしなんどもおろかなり、かゝる所へがまそがう、大てうちんをけ破て、立顯れ汝らを、つけ出さん爲此所に、先達て忍たり、戀の敵のふはなごや、兩人共にのがさじと、カヽル打てかゝるを兩人は、心へたりと馳かかる、官八長七かけ來り、やうすを聞て打悅び、すは究竟の敵にあふ、君は御手を卸されまじ、我々に御任と、そがう郎等大せいを、カヽルあたるとうざいよるなんぼく、じうわう八めんすきもなく、打てまはれば叶はずし、カヽルかいふつてにげゆくを、ハヤ三重いづく迄もとおひかくる、山三せいし給ふ時、そがう大十引かへし、こゝはてせばとをりへ出、一き打にしやうぶせんカヽルなごやばんさくもつ共と、いさみをなしてそれよりも、大道さしてぞ出られけるカヽル適ゆうしやのしわざやと、きせん上下おしなへて、皆かんせぬ者社無けれ

## 第陸

其後、かくてその日もくれゆけば、兩方互に進みより、そがう大十大おんあげ、いしゆは互のむねにあり、あれ打とれと云ければ、てつぎうしやの助太刀、

まつかうにさしかざし、一もんじにはせ出る、なごやのいへのこ官八長七見るよりも、カヽルいれちがひ切むすび、ひじゆつをつくしてハヤ三重「たゞかひける、さすが名だかきあらものゝカヽルだちぼく入道山あらし、四つに成てぞしゝにける、大とう大竹兩人は、あまさじと打てかゝるカヽルばんさくすかさずわたしあひ、こゝをせんとぞたゝかひける、大どう大竹叶はずして、かいふつて逃んとす、そがう大十かけ出てカヽルちごしぬけめとたちふり上ケ、二人がくびを打おとし、ばんさくに切てかゝる、ねがふ所とわたしあひ、兩方てきゝのかうの者、カヽルしのぎをけづりくはへんをたて、ハヤ三重はんじ計ぞたゝかひける、もとよりゆうしのばんさくに、てすきをあらせず切付る、さすがのそがうしたてになり、既に危くみへし時、花月がおんれうあらはれて、ほのほをふきかけてつぢやうふり、思ひしれやとばんさくに、打てかゝればすいさんやと、はつしとうてばゆんでにくゞり、とびさつて、てうときればひらりと、かたにのりうつる、つけてめくれば、ちからをゑ、そがうはたちをふり上て、たゞ一打とする所に、なごや山三おしへだて、カヽル大十にわたしあひ、火花をちらして「たゞかへと、なにかはもつてたまるべき、すでにかうよとみへし時、なごやはんさくしん中に、ねんひくはん音めうちりき、とうじんだん〳〵ゑと、一しんにねんずれば、たいうくろくも風おこり、どうようするその中より、ふうてんらいでんしゆつげんあり、らいてんはおんれうをかいつかみ、おつふせ給へばふうてんは、大十がそくびをつかんでそくかにしき、兩そんにらんでたちたまふは、たうとくもまたおそろしゝ、ときにふうてん天をひゞかす大おん上げ、いかになごや、がまそがう大十に、ばんさへもんがあくねん、入かはつてなんぢをかく、がいせんとはかれ共、くはんおんのめうりきにて、たちまちばつする所なりと、のたまふみこへにばんさくは、かしらをふつてそのをゑず、あにばんさへもんしゝたり共、そのれいいかでおと〳〵を、がいせんとは心へず、その時らいてん大おん上ケ、ふしんをなすは理りなり、ばんさへもんしゆらのやつこ、なんぢはさつたのめぐみにあひ、心をてんずるそのうらみ、ことさら花月を打たるゆへ、かれと心

をあはせたり、され共くはんおんの御じげんに、したがふまことあるにより、ながくしそんをつがすべしと、ふう天らいてん一どうに、花月大十ふり上ケて、こんりんざいへなげ給ふ、いかになごや、なんぢがたねんしん〳〵ゆへ、三十三じんのそのふたり、ふうてんらいてんしゆごなしたり、いよ〳〵ゆくすへまほらんと、ふうてん長七、らいてんはくはん八と、すがたをかへてそうもんに、いるよと見ればふしぎやな、カ、ルありしにかはらぬうんけいの、正さくたりし二てんのざう、さゆうにかゝやくぎゝとして、たゝせ給ふぞありがたき、なごやばんさく三はいし、しゆくしよ〳〵にかへられけり、此人々のはんじやうは、カ、ル千しうばんざいめでたしと、きせん上下おしなべて、みなあほがぬものこそなかりけれ

通俗傾城三國志終

# 博多露左衞門色傳授

## 第一

「既に御船こう成て御母さまには、辨財天を勸請し、ほうらい丸とがくを打、詞こがねの箱や巻物るい、ゑうきく小弓能道具、茶の湯かうの御てうど、きやうをうのきざい迄、せんつくしびつくして、金銀の鉢盂、カヽル命ながゑの御てうしに、諸病悉除のせいやくのチクリ名酒を、たヽへてひかへけり、御せんに有し、小倉增ほの助、みやぎの萩之丞、今日の御乘初、浪風もなくうらやかに、いつれも恐悦仕る、ついては君此度の色ゑゆ行、思召立れしは、いか成ルゆへんに候やと、伺ひ申せばげに誠、さやうに思ふは理りなり、我九州において、はかた露左衞門の尉、光次と名のり、あめ若みこのゑそんとして、朝日長者とせうせられ、七珍萬寶世のたのしみ、一つとして不足なし、然共片いなか、外みぬ家に住くらし、犬かいゑらぬ井の蛙、やぶなる男と世の人に、笑れんこそ口をしけれ、諸國をめぐり色里に、あそびひなびし國詞、くもる心のかゞみをも、みがヽばやと思ひたつ、諸國に金銀まきちらさば、ゆヽしき所々のふくの神、いへとむかひにあらずやと、仰ければ皆一同、うはきにもれぬ若者共君は、千世ませいろ執行、われらも千秋御供せん、ばんせいらくと同音に、いわひことぶき御船を沖の、方へぞ「こぎいだす、あとより小舟三丁にて、押立〳〵ござ船へハヤ三重もみにもふでぞ「こぎよする、人〳〵あやしく、船とめて、みれば長崎丸山の、カヽルいこくわこくと申つヽ、をしもおされぬまつの君、光次御きゑつかぎりなく、是へ〳〵と宣へば、うれしくみふねにのりうつり、わけ御執行の、御ふなで、暇乞なき恨の程、ほのめかし宣へば、さへもんは聞召、さればけふは吉日ゆへ、ほうらい丸に乘初し、是迄出たる計りなり、旅たつならば爭かは、君にさたせぬ事あらんと、カヽル仰ければ兩君も、是で恨のむねはれしと、おちつきよき折來たり、さあらば共にいわヽんと、さいつされつ思ふが中、カヽルへだてぬ今の酒もりは、おもしろふこそみへにけれ、時にさへもん、鶴をまきへして、天の川とめい有し、大盃を取出し、是は此度

色執行、諸國の君とのまん爲、まふけたる盃なり、先の色のゝみ始め、君達取上給はれと、仰ければいこくはきゝ、ひろき浮世のわけの里、いろ成君とかのみ給はん、御まふけの盃を、カヽル色ありかほにけがさんも、なふわこく樣いかゞぞと、取上ざれば、光次は、又れいのいやなふり、某取上け申さんと、たんぶと請て兩君より、かほを指よせ給はれと、さしだしたまへば兩君は、につことゑみ、こはをもしろきお盃、さのみはいかゞと右左より、顏をさしよせ給ひしは、つぼみてひらく、くれないの、花の物云ふごとくなり、みるにたへかね、さへぎんも、おぼへずかほをさしよせて、三人一所にほし給ふ、是やびめんのみつどもへ、たぐいなかりしふぜいなり、時に兩君申やう、色執行の御船に、只よのつねのほぎぬにて、うつりのあゑに候はんと、忍んではかたの浦里に、宿を取て此間、よを日について綾錦、おりたて申候へ共、五十反のほぎぬゆへ、いまだできかね候也、其間は我〳〵が、旅宿へ御入まし〳〵て、はたおるていを御らん有り、それよりすぐに御舟を、出させ給へと申にぞ、さへもんは聞召、勤隙なき內にして、さやうのわざはいぶかしやと、尋ね給へば兩君は、はづかしながら我〳〵は、津の國くれはの生れにて、もとはたをるいとなみを、いたせし者にて候が、まづしきおやをすくはんと、こゝろつくしに、身をうりて、かくの通に候と、いとこまやかに申さるれば、光次かんじ思召、增ほの介を御召有、長崎の丸山へ、そう〳〵使を指こして、いこくわこくの兩君を、身請をなせと有ければ、畏て候と、申付ればさへもんは、來る十日は吉祥日、めん〳〵の旅宿より、出船をいたさんと、兩君を伴ひて、船よりあがり、はる〴〵と、はかたのうらへといそがる、こゝに又、四國九國にもてあつかふ、わにのばんこずいわうとて、白波の大將有、大力はやわざならびなく、あまたの手下を云たがへて、かいぞく山立ひるがんどう、人の寶をりふじんに、うばい取てくらにつみ、ゆたかにくらすあくとうなり、其らんしやうを尋るに、西國に名をふるひし、木戶狼の助が孫とかや、領分はことぐ〳〵く、てきの爲に打とられ、ろう〳〵の身と成て、一子わにの大八は、關東に住居なす、隨ふけんぞく、赤鬼ぢごく兵へ、大げ

さの無佛坊、引さばきのわし次郎、かみなりのはち
はちさへもん、かれら四人を伴ひて、折しもなれや
彌生の空、花見がてらに丸山の、色里ぞめきに、出
たりしが、ずいわう道にて云やうは、汝らつねに云
るごとく、我一念をかけぬれば、やえゆらが持たる
物にても、ぶつたくらずと云事なし、色はあやにく
まゝならず、長崎の丸山の、いこくといへるけいせ
いに、ふと心のちまよつて、そびきださんと千金を、
山につみて云入れど、むつくにはつくに聞入ず、き
けばはかたのつゆさへもん、こがねの鍍(くさり)でつなぎを
く、又わこくを引ぬかんと、思へばきやつをもはか
ためが、碇をおろしてうごかせず、所詮きやつめは
戀のあた、はかたが館に夜打して、つゆさへもんを
ふみけして、丸山の傾城を、手に入んと思ふなり、
いかに〳〵と云ければ、赤鬼はすゝみ出、きけば此
程つゆざへもん、京見物を思ひ立、出船をなす所を、
いこくわこくこがれきて、戀の碇をかけとめて、は
かたに逗留するとかや、かれらが旅宿へ下拙めが、
ふみこんで君の戀、わこくいこくを引立て、つれま
いらんと其詞、カ、ル手に取やうに申にぞ、ばんこ、
よろこびでかしたり、一人にてはおぼつかなし、む
佛坊と兩人して、うばい來れとげぢなせば、兩人た
やすく領承し、夫よりすぐに(げに)云たくしてハヤ三重かし
こをさしてぞいそぎける、實(げに)やおりぬふ賤のわざ、
昔神宮こう皇の、三かんたいぢ、ましまして、西北
の風ゑづまり、東南にくも晴て、尚てりまさる日の
本に、いてうはおそれみ心に、應神ていのおゝんと
き、ごゝくのみつぎをさゝげしに、くれはあやはと
申すなる、二人の女を奉る、はたをる者をくれはと
いひ、あせひく者をあやはと云、わが國のいふく、
皆吳國より始れば、小袖をごふくと申なり、この時
に織姫は、こんれうの御衣を織、帝へさゝげたりけ
れば、よゝの大君此御衣を、召るゝ事と成けらし、
きんしにおもふ詩をおりて、こたびかへりあふ事も、
是皆はたのとくさ糸、綾の手ぐりのうつくしき、か
らくれなひの、立田川、氷に閉しもみぢばを、くゝ
るひうをのひれかろく、あなたへちらり、こなたへ
ちらりうつおさの三重きり〳〵はたり、てうはたりァ
イノ手てう〳〵さら〳〵さつ〳〵の、風に立くる波な
らで、あせのつゆちるたまだすき、かひ〳〵しくも、

をる袖の、さほなぐるまもたゆみなく、ハヤ三重おり立おり立其かみの、ためしをこゝに、引糸の、たへぬ、ちぎりを猶深く三重むすびとめつゝ打おさめ、かたてほぎぬを、おりそろへ、さへもんにまいらすれば、御きげんなをも淺からず、あるじを召れ其方は、わがかへる迄兩君を、事ふじゆうになきやうにと、品品を下されて、兩君にうち向ひ、名殘はいつもつきぬ事、カヽル此度の心ざし、殘からざりし事共なり、るすの内さびしく共、所の賤の女召よせて、此手わざをおしへつゝ、慰み待せ給へやと、念比にいとまごひ、此時所の賤の女共、ならひおりだし今の世に、はかたをりと申せしも、是より始りけるとかや、既に出んとしたまふ時、さもたくましき大男、あみ笠まぶかに引かふで、カヽルあないをこへば人〳〵は、かたへに忍び入給ふ、ていしゆ出て、何方よりぞと尋れば、是は長崎丸山より、いこくはこくの兩君へ、飛脚の者ぞあはせてだべ、誠と思ひ内に入り、かくと申せば兩君は、里の便とうれしくて、立出みれば思ひの外、すさまじき大男、それとみるよりつゝとより、二人の君を引よせて、扨〳〵おのれは大たん者、大事の女郎己等が、よくもぬすみかくせしな、ていしゆをはじめかくごせよ、女はまづ〳〵つれ行と、左右にかいだき欠出れば、ていしゆを始めろうぜき者、あまさじと押取まく、すいさんなる奴原やと、赤鬼大たち引ぬいて、村〳〵はつと追ちらし、しすましたりとつれ行を、つゆさへもんの下部、とびらのくはん藏欠來ッて。先赤鬼をかいつかみ、取ておつふせ、右のかいなをねぢ上て、うんと引ぬきなげ出せば、む佛坊肝をけし、二人の女郎うしろへなげ、ごめんあれと逆行を、そくびをつかんでこんりんざい、大ぢもさけよとどうどなげ、すかさず上にのりかゝつて、扨もきみよやこゝちよし、われらが君の色しゆ行、御ふな出にまつかいな、御血まつりをいはゝんと、さはぎにすてし大かんなべ、是幸と押取て、む佛坊がかうべにあて、落花みぢんに打くだき、いこくわこくをいざないて、先おくへとぞ入にける、かのくはん藏が其はたらき、天晴きみよき若者よと、貴賤上下押なべて、皆かんせぬ、者社なかりけれ、

# 第二

「其後、おしてるやなにはつの國、大坂のかぶきの芝居時めきて、三重きせん男女のひざをしに、いどみあらそひみる程に、さしもの棧敷人たまり、糸をさぐべきせきもなく、奥にせうじてわらふこへ、なんばの浦の波風にひゞきを、そへておびたゞし、猶日に増るはんじやうや、切の太こと諸共に、我をとらじと、かへるさの、をしつおされつ出けるは、にぎはしかりける「ゑだいなり、そのおりふしに、つゆさへもん光次は、此程當所につき給ひ、未旅宿におはせしが、あまりゑばいのにぎはしさに、今日見物ましまして、カヽルきせんに交り珍らしく、こゝやかしことみ給ふに、深あみかさになほかくし、あやしげ成る男の、二三ど四五ど行かへり、さへもんのめてのかた、すり違ふまに御こしの、さげ物きれてあらざれば、こはいかにとみ給ふ時、御供に候ひける、團六、つゝとよりてあみかさを、かいつかんでかしこへなげ、むながらをむずと取、己は人を見そんじて、かゝるふるまひなしけるか、只今のさげ物を、出せや出せぬす人と、押ふせんとする所を、もろ手をかけてふりはなし、やあら是はお侍、我をさやうに宣ふは、慥のせうこ候か、團六聞て、せうこはこなたに見置たり、はや〳〵出せとせめければ、男聞て此方に、せうこがなくはいづれもは、何とかおさめ給ふと云、團六聞て、カヽルそれは互の首かけよと、むたいに袖に手を入るれば、ごめんあれと逃んとす、大せい折あひさうどうし、すは逃すなとおつ取まく、だん六すかさず取て押ふせ、さげ物を取かへし、ふみころさんとする所を、つゆざへもんごらんじて、思へばふびんの事共なり、命をたすけるさせよと、仰あればだん六、ゑゆくんのめいはそむかれず、己は命くはほうの者、すべきやう是有と、早繩を取出しゑたゝかにいましめて、刀をぬいてむね打に、たゝき立〳〵、さん〳〵に追はらへば、ころびたふれてハヤ三重「逃てゆく、去程に、露左衛門の旅宿には、侍下部あまたにて、けごを、守りていたりしに、おもてに謡のこへ聞ゆ、内よりみるに其ていの、昔はさもと、打みへて、あみ笠まぶかに引かふて、扨も

三條の吉次信高とて、こがねをあきなふ商人の、毎年すだの寶をつけをくへ下る、天晴是をとらばやと、與力の人數はたれ〳〵ぞ、扨國〳〵よりあつまりし、中に取てもたが有しぞ、河内のかくせう摺鉢太郎兄弟は、おもて内にはならびなし、扨又都の其内には、三條の衞門みぶの小猿、火とぼしの上手わけ切には、これらにうへはよもこさじ、扨北國には越前の、あさうのまつ若、三國の九郎、かゞの國には此、長はんを始としてと、謡うたふて指のぞき、一し半錢の御合力と、四方のあないをみまはすを、ぬす人のけごなりとは、夢にもさらにおらずして、鳥目をなげ出せば、おッを有がたし〳〵と、心の内の前いはひ、カ、ルこよひの寶の口あけと下チクリ押いたゞいてぞ通りける、かゝる所へさもあてやかなる女郎の、光次の御やかたへ、あはたゞしくかけ來り、門の番侍に申やう、わらはゝ少つゆ樣に、申度事侍らへば、此由仰給はれと、申ければ侍共、くはん藏にかくと云、貫藏立出みてあれば、光次のあい給ふ、高橋と云ふ女郎の、妹分のいはほなり、是は〳〵と内にいれ、扨光次に、かくと云、さへもん立出對面し、いかにしてかはき給ふぞ、いはほ聞て、御ふおんは御理り、されば水から參りし事、此程、わにのばんこずいわうとや、おそろしきひげ大じん、水からを思ひこみ、一ざを望み候へ共、さはるよしにて一圓に、あはぬにたへかね身請をし、はや明日引とると、云渡し候ゆへ、やう〳〵くるわを逃出て、かた樣を賴みつゝ、のがれたき計りにて、扨こそ只今まいりたり、それにつき侍ひて、先身の上より御爲に、もつての外の大事有、いづれも是は心へず、何事やらんとひければ、いはほされば自から、是へまいる道にして、謡をうたふて一日の、よすがをおくる袖乞と、みへつる者の通りしに、其ていをしれぬ侍の、行あひあたりを見廻して、つゆ左衞門がいたくのやう、あないをよつく見しやととふ、袖乞とつくと見屆たり、ぬれ手につかむあわのかね、先悦べよおていよ〳〵、ずいわう殿がさいせんに、定めしは八つのよせかときく、成程々々其時分、逢んと申て立別れぬ、推量いたし候に、自らをねびかんと、申候ずいわうが、ぬす人の大將にて、夜討の用意とみへ候、御用心あそばせと、申ければ增ほの助、いかに貫藏

畫程の、謠をうたひし袖乞めが、けご見と云らでのがせし事、口をしき次第なり、去ながら、御氣遣なくゆる〳〵と、御休おはしませ、秩之丞と某、圍六貫藏手をくだき、働き候物ならば、千や二千のぬす人ら、物の數にて數ならず、よ打の事は我々に、御まかせ候へと、人々をいれまいらせ、門戸をきびしく指かため、圍六貫藏兩人は、よすがら屋敷を打守り、なりをしづめて八十三重とうぞくを、今や〳〵と「待いたり、是をば云らで、わにのばんこずいわうは、はや打立と大せいにて、一時千里とらの時、露左衛門の屋敷によせ、門を破てせめ入と、大つちにてさんざんに、門のとびらを打破り、てんでにたい松なけこみなげこむいきほひは、やうやくじんも、かくやらん、手下のとうぞく一同に、ぬきつれて打て入る、貫藏圍六渡りあひ、云〳〵ふんじんこらんにう、ひてうのかけりの手をくだき、八十三重こゝを、せんとぞ「たゝかひける、とうぞく今は、きをのまれ、ねすみも命の有てこそ、あらしようやひかんとて、皆ちりぢりに逃ゆけば、ずいわういかつてゐゝおく病なる奴原は、足手の妨げ、まいり候と大長刀、水車にまはしつゝ、打てかゝれば圍六貫藏、ずいわうにわたりあひ、火花をちらして「たゝかひける、ずいわういらつて、鐵べきも通れとつく長刀を、はつしと打てゆんでへこす、追かけすかさずこむ長刀にひらりとのればはむきになし、云さつてはらへばめてへこし、押取直してていうときれば、中にてむすぶほどくてに、かゐつてはらへば飛上り、さしもの兩人今はや、せんかたなくもみへける所を、內よりいはほは走り出、あり共みへぬけんをぬき、打付給へばあやまたず、ずいわうがのどぶへに、つばもとせめてくつとたつ、きじんのごとくのずいわうも、眼くらみきも云いまり、はがみをなして手をにぎり、仁王立にぞ立すくむ、貫藏圍六欠よりて、さん〳〵にそ切たりける、光次はごらんじて、天晴こゝんの御手がらと、悅び給ふはかぎりなし、時にいはほは我は是、汝がせんぞ代々より、ふつきを守る辨財天、日比の云ん〳〵淺からず、此度も船玉に、祝ひこめたるゆへにより、つきそひなんぎをすくふたり、なを〳〵行末守らんと、光りを放ちみすがたは、寶の前に入給ふ、光次云ん〳〵肝にめいじ、有がたし〳〵と、

御跡三度ふしおがみ、悦びいさみ立給ふ、遖きたいの事共やと、貴せん上下押なべて皆かんせぬ、者社無けれ

## 第三

「三ゲのいろのその中に、いづれ、おろかはなけれども、京嶋原と申ハ又、わきていたりのやさ所、花の都の水からに、風俗、詞ひとゑほに、色まさりたる所とかや、去程に露左衛門、都に逗留ましまず内、今咲出し初菊の、色かをほのかに聞及び、何とぞきうにあはゞやと、ちゝに心をくだかるゝ、され共其比全盛にて、心のつよき君なれは、いか成るとみの大ゑんが、こがねの山をつくとても、中々さうなふあはざれば、さすが都の大じん共、手に入かねてもだせしと、世上にひろくさたあれば、はかたいよ〳〵戀なづみ、若松やを頼みつゝ、御しる人に成たまひ、けふ約束の日なりとて、思ふ心の深あみ笠、其風俗も當世に、若松やへとぞいそがるゝ、ていしゆは急ぎ出向ひ、はや道中と、夕日笠詞にたゆる下思ひ色には、いでの玉川とて、かほにあらはす全盛の、つよきをみせて八もんじ、風にこづまのひら〳〵と二ツ三重かほりゑならぬふうぞくや、雪のゑりもと月ひたい、みる人、戀をます〳〵も、ます世といへるつきだしの、ねよげにみゆる若草や、ゑげき引手の大やうに、ゆらり〳〵とゆりの花、露をきそふるふせいをば、たれかはいなと、いな舟や、こがれて渡り染川の、かたゆりかけてはこひ足、あたりをはらふゑこなしに、ついのかぶろやつれ男、わきてめにたつ有様に三重ゑばし詠めて「たちつどふ、竹のうちより光りを出す、ゑたいごらいかうは、大坂のゑだしでごんざるゑい、此ゑい今はあづまの、はて迄も、くはつとはやりて京九重や、あの君たちの手にふれて、笑ひのたねと成もよし、よしやいとはし此身をかろく、いとしかたをはさゝ船にのせて、つれて渡らん思ひ川、戀を嶋原忍びてくるは、〳〵くるはたれゆゑ、誰ゆへくるは、くるはたれゆゑ、君ゆへぞ、こちの思ひはそうかいも、淺くやならん、あさはかな、色にはあらぬ、くれないの、八ちしほ染のから衣、獨かたしくよな〳〵は、身をしる雨に水まさり、ねや

の枕もうく計り、枕うくとはなふ人なみぞ、身さへながると聞ならば、契りの末の松山に、波こゆる迄頼むべし、ゑんぞ此身は本よりも、色に打こむ、つぶてもじ、かいてくどいて見せさきに、立といまりて色いとに、あづまことばも珍らしく、うらばめせめせみた三ぞんの御來迎、めせいざやめさぬか三重「こゝに太夫の初ぎくは、其風俗も色をゑる、人にみせばの白小袖、昔男の色あそび、あづま下りをすみゑにかき、すそにこがるゝくれないを、けだせるはぎの白々と、ゆきをあざむくかほばせに、生れのままのひたいぎわ、見る人の身をうつせみの、もぬけのからとぞ成にける、本より情の色深き、めもとに一めちらとみて、はや只ならぬ商人と、心のつきてやそばにより、扨も替りし商人や、賤しからざる爪はづれ、ちとめきゝしてまいらせん、みたてた所が三つ有、情をゑらぬ女郎の、思ひの淵にはめられて、こうゑたゑよていかいゝや又、心にくい女郎を、引てみんとの御ゑんかや、それでもあらじ扨は又、及ばぬ戀かさあつゝまず、かたり給へととはれつゝ、いや拙者めは明くれと、ねてもさめても御來迎、おがむ計りを命にて、よに住わびしいやしき身の、おん詞に預る事、みやうがに叶ひ有がたし、初菊更に聞入ず、何程つゝみ給ひても、内にこがるゝ紅の、色をあかして仰あれ、身の上ならぬ君なりと、わしが逢せてまいらせん、こゝはとちう自らが、なじみの茶やへ伴ひて、やうすを聞んと袂を取り、引き行く袖を御らいかう、取ていたゞきもつたいなや、今せんせいの松様の、かくあか付しもめん袖、カヽル御手のけかれ候と、立のく袖を猶はなさず、其深き心のそこ、見るがめのあく女郎なれ、いか程いやしき者なり共、ゑつに此身を思ふならば、いかなる方にもみかへまし、くもる心の女郎の、情の鏡とおそらくは、ならんと思ふわしなるぞ、こよいは夜と共身上りし、心をとけてまいらせんと、カヽル宣ふ所へ若松や、走り來て約束の、はかたの大ゑん御待かね、はやはやと云ければ、初きく聞て、こゝにきうなる情有、是がすまねばたれさんの、寶の山をつかんしても、中々みかへす事にてなし、はて此上は此人と、あげやはおいてはしの茶や、むぐらの宿に、ねもゑなんひしき物には此袖と、ひしとすがれば御らいかう、

はつとかんじて、云やうは、扨〳〵こゝんのめい太夫、今は何をかつゝむべき、我こそ誠のつゆざへもん、若松やに有けるは、増はの助と云けらい、君は情を本として、いやしきにも身をまかせ、縦高家大ぢんにも、心にいらねば、なびかぬと聞及び、かくはからいて引見しと、申所へ松やより、はじめのさへもん欠來り、御ぢゆびよろしく珍重と、申もあへず御供人、あまた來ッてさへもんに、やがて小袖をきせかゆれば、いづれも驚きさりとては、今に始めぬ事ながら、初きく様の御めきゝ、とかう詞にのべがたしと、つゆ大じんをうやまへば、さへもん御きろつ限りなく、をくは中々きつまりなり、前のかうしを取拂ひ、そとを見はらし酒もりせん、女郎達を皆あげよ、はやとく〳〵と有ければ、ていしゆ、畏つたりとて、大せいかけて少のまに、まへなるかうしを引こはし、一めんに取拂ひ、女郎はらりといながれて、御盃をまいらせて三重既に酒ろんぞ「そじめける、大じんいよ〳〵興にじやうじ、ふくさにつゝみし大盃、取出させて初きくへ、是はわれらが國なじみ、道はる〳〵の長崎に、其名も高き丸山の、わこくに増るいこくと云、女郎が其御かた、聞及びて指こしたり、取上給へと出さるゝ、初菊是は珍らしやと、手に取みれば鵲の、渡せる橋をまきへして、天の川と銘有しは、いもせを渡せのおゆるしか、こは情ぢる御ぢんをば、一つ請んとたんぶとうけ、さらりとほしてさしければ、大じんも一つほし、かへし給ふを初きくは、あまりきうなり今少と、おさへ申せばさへもんは、ざ中を見まはし女郎達、おあいと云んがめづらしく、聞及びたる吉原の、色の名物小紫へ、此あいを頼むべしと、れうし引よせ文認め、盃共にふうじいれ、時つけにつかはせと、増ほの助に仰有、ていしゆへかくと云わたし、そくざに飛脚をたてられしは、聞しに増るたいきやと、おの〳〵かんじあひにけり、かくてさへもん時つけの、かへらん内はいつゝけせん、かやうの酒はよのつねにて、おもしろからず我こゝに、興あるあそびをもよをさん、近頃女中へにあはざる、望ながら女郎達、二つにわけて關せきわき、小むすびなどゝわけをたて、色すまひを催して、まけたる方には酒をぢい、かちたる方をば此里を、身まゝになしてまいらせん、い

かに、いかにと宣へば、數の女郎浮立て、たれかはまけんあらせうし、こゝははしちかをくへとて、大じん初きくさきとして、大せい足音どろ〳〵と、打つれのぼる箱はしご、たぐひ〳〵三重まれなる「ゑだひなり、そも〳〵こよひの色すまふ、大じんの御物すき、枕をならべ土俵とし、左右の女郎一同に、花やかなりし風俗の、小づまかいとりたすきかけ、かひかひゑくもちから足、ゑと〳〵とふみならし、ふとんのうへに入けるは三重げにも興ある「ふせいなり、時の行事は初ぎくなり、うちわたづさへ立いでゝ、それおすまいの始りは、天竺にては、あらかん達、大唐にてはじやまんがまん、我朝にてはあまてらす、おゝん神の、岩戸にこもらせ給ふ時、たぢからをの明神さま、やを萬の神達と取はじめ給ひ、たへまのけはやのみのすくね、きのなとらなど取傳へ、きん中さまにもすまひの、せちへと申事の候よし、それは男のあらすまひ、是は女郎のやさすまふ、かまへてあらき事なかれ、隨分花車になし給へ、爪取はそり大、わたし、車ぞやしかいなそり、かやうのるいはきんせいなり、惣じて女郎の取手くだ、四十八手を八十八手に取わけ、今はもゝてに取くだく、只何事も新ぞうは、姉女郎に隨ひて、指出たる事なきやうに、なづむてきをば先かけて、よき程あいにふりつけよ、くせつをするにならひ有、うかとしだしてさよ嵐、きくの花園ふくごとく、ちらしかねては手を取ぞ、是はいづれも女郎の、つねに有べきこゝろがけ、をくの手箱のそこふるひ、きを働て取むすび、ゑめてさげたるひとへをび、ゑどけなげなるふせいにて、たゝやさしきを、おもとする、身ぶり一ゑゆの花すまい、さあ出給へとこへかけて、うちわを上て合ける、道芝やつと手を上れば、花きくすかさずつゝとはり、兩の袂をむすととる、道芝かさより押付るを、花ぎく左りのひざをつき、うつぶきければ道芝は、あまりてかしこへたふれけり、いづゝ此由みるよりも、扨いさぎよし花きく樣、いざまいらんと立向ふ、花きくにつこと打笑ひ、手なみのゑれたる私に、かゝり給ふはつわものやと、いさみいさんで飛かゝるを、いづゝは小づまをかい取て、ひらりひらり〳〵とはづすにぞ、花きくせいて追めぐり三重ゑばし、あらそふ有樣は、ぼたんのかげよりからし

しが、小てうをとらんと爪をとぎ、はがみをなせしいきはひも、かくやとみへておも白し、兩方いかにとみる所に、すきをみて、いづくはうしろより花きくが、ほそこしをいだきあげ、そつとかしこへなげければ、扨も取たりお手つまと、ほめぬ人こそなかりけれ、かゝる所に中くらは、茶ゑゆすの小袖ぬぎさけて、紅白のくけ帶をなひ合、ゑつかとしめひさやの小袖にたすきかけ、はちまきながくむすびさげ、ゑつ〳〵と立むかへば、いづくもすかさず取合、くんづほぐれつすきもなく、互に大事とくみあひしが、中くらいづくをうしろにをひ、どこへ我共お望に、なげ申さんとはせまはり、ふとんのそとへなげたりしは、げにたくましくぞみへにける、みちのくはみるよりも、一もんじに飛かゝるを、あいさうもなくなげ出す、そめ川つゞいてかゝるをみて、中くらにつこと打笑ひ、後に打身をもたんして、わらはを恨み給ふなと、云ふ詞の下よりも、はやくすくつてなげ出せば、こへもんはつくと出、げにおとしまの關すまふ、めを驚かす次第なり、こなたの關にひけ付て、あまりとあれば云かひなし、いざまいらせんと宣へば、中くらのぞむ所ぞと、ひし〳〵と組合て、兩方更にはなさねば、初きく見るにたへかねて、こづまくりあげあいにいり、すまふの、外の手は法度、はなち給へと押のけて、つゆさへもんの手を取て、かはす枕の戀の山、こゝんまれなる遊興やと、貴賤上下おしなべて、みなゑたわぬ、者社なかりけれ

## 第四

其後、つゆさへもん光次は、嶋原の初きくに深くなじみて名にそめし、あづまの色の紫に、あいを頼て指こしたる、早打のかへるまを、御いつゞけのゆふ興は、おびたゞしくこそ聞えけれ、かゝる所へむさしへまいりし御使、あげやの男立かへり、御盃に文をそへ、指上ければ大ゑんは、取手も遲しとふうを切、急ぎ披て見給へば、おのゝおづうが風流に、いとうつくしき、筆の跡、文の詞も女にて、強からずよはからず、情をふくむすみ色の、くろみ過つゝ書なが し、一首の歌に我とても、うすくはあらじ小紫、染てほしたき君が盃と、色あるふくさ引重ね、柴船

と云名香を、御おさへとてまいらすとは、たかぬさきよりこがるゝとの、かけし詞か初きく殿、此よはあづまに下りさし届け、押付ヶ持てのぼりつゝ、ね引の松のちよかけて、あい盃をいたすべし、先それ迄はおいとまと、くつの嘉七を召れつゝ、先達て下るべし、跡より我も追つかんと、仰付られ嘉七は、そくざに都を立ければ、大ぜんはそれよりも、あげやの一家を召れつゝ、おいとま乞の品々を、數々給はりよもすがら、旅の御用ゐ御酒もり、取まじへたる御さはぎは、いそがしかりける「ぜだいなり、京とはいへど、ひなびたる、馬子の歌にのりかけの、戀ぢ執行のあづまの旅、今なり平と名やたゝん、つゐぬれぎぬの紫がおさへてもどす盃の、ふくさの筆にうつりきの、詠めあかざるはつきくを、見捨て行と恨てや、跡になくらんかも川の、すへぜら川の、あさきせを、渡る心のうたかたの、あはた口より、かへり見る、そなたのぼりかおりや今下ル、馬やかちゝの追分の、昔はこゝの關寺に、おのゝ小町が身をまんじ、あまりに心つよふして、かなたの玉づさなたの文、かいやりなげし中になを、わけて思ひの深草を、戀にぜなせし其恨、かはらで年をとをしみたる、色の姿のおとろへて、つらき、おふなのためしとなる、舊跡なりと見渡せば、大津八町はるゞゝと、ひろのみのりのくも晴て、根本中堂むね高く、坂本山王三千坊、たれ白ひげの明神迄、王城のきもんを守らせたまふなる、ふもとのこすいまんゝと、いく世へぬらんちくぶ嶋、むかしなからのぜがのうら、こゝより馬をおり給ひ、せたの長橋打わたり、人にまけじとますらをの、姿をみがく鏡山、くもればぞあれ朝がほの、みくばはづかし日にいたむ、草津の宿をあゆみ過、ぜばし休らひ腰かくる、石部の並木みへつゞき、梢にひゞく松風は、きんのねをやぜらふらん、おたの蛙のこへ迄も、心有げに水口や、馬子が歌も戀をぜる、みのにつま持おはりにすめば、あめはふらねどみのこひしやれみのこひし、既にいせぢの山おろし、駒もいさみてのぼるさかなるやすゐかの、宮いとや、實をそろしき鬼とても、色で身を打ためし有り、いはんや人のおはりをば、たれか三河の八橋も、田計有てかきつばは、たへていづくととう〳〵み、はなを過てそのかみは、こゝも極女

の池田の里、命なりけりさよの中山さりとては、かれを見是を聞につけ、たのしみ多し大井川、せ枕たてゝながるゝは、みつはのそやをいるごとし、殊に水上大雨にて、三せ口せひとつに成ければ、こしとゞまつてかなやの宿、御宿召れん所なし、大ぜん少もさはがずして、水の増るはおも白し、我にぜせんのめう有て、水にはきどく有間、苦しからずのりかけて、渡すべしとげぢをなし、たけも及ばぬあら波に、さつと打いれ一同に、向ふの嶋田へ渡せしは、めざましかりける「次第なり、いづれもきいの、思ひをなす、露大ぜんは打笑ひ、ふぜんに思ふは理りなり、我が家は、あめ若みこの子孫として、水にきどくはさま〴〵に、わけてさつきの入梅には、庭前に穴ひらけ、つゆおわるの日ふさがるゆへ、ゑいぶんに達しつゝ、綸言有ていへ代々、つゆにいる日をそうするゆへ、左衛門の尉にふせられ、世こぞつてはかたの、つゆさへもんと異名すと、語り給へばいづれも皆、ぜは〳〵かんじあいにけりかゝるなん所を行事も、思ひそめたる、紫が色を早口藤枝や、おかべに駒をうつのやま、つたの細道我も今、都へかへる執行者の、あらば便を初きくに、文してつげん戀しさを、いかにするがのふじの山、女郎はおかぬひたいきわ、三ほの松原たごの海、まきへやさしふ三嶋なる、遊女のてうど、はこね山、つらいにも又おも白き、こともさま〴〵大いその宿にぞいらせ「たまひける、道のかたへを見給ふに、遠近人のよりつどひ、清く詠めの丸石を、力を出しあげ試む、光次はいぶかしく、立よりてことのゆへ、問せ給へばかの旅人、されば候此石は、そがの祐成色深く、大磯の虎御前が、成けると云つたへ、とらが石と申つゝ、あしき男のあげぬれば、おもふ成てあがりかね、よき男の上るには、かるふあがると申により、皆旅人があげためす、皆様方にも打よりて、あげさせ給へと云すてゝ、おのがさま〴〵行過ぬ、戸びらの貫藏すゝみ出、是ていの小石分、小ゆびにても上ぬべし、なんでう器量によるべきかと、立よりてかきいだき、上んとせしに其おもさ、大ばんじやくの如くにて、ちつ共更にうごかねば、團六笑て御ぶんが器量、とらが氣にいらぬとみへしおことより、少ましれるだん六が、あげてごげんにいるべきと、近付むんずとか

きいだき、うんといへ共中々に、ちもはなれず、是に二十もます大石、たやすくあぐるに上らぬは、さりとはふえんとはがみをなす、小ぐら宮ぎのつゝと出、いかにおもたき石なり共、二人えてあぐるならば、などかはあげで有べきと、兩方より手をかけて、ゑいや〳〵とあぐれ共、ちつ共そつ共うごかばこそ、あきれてこそはえさりけれ、光次はごらんじて、とら女が氣にはいるまじきが、我うごかしてみせんとて、立より左つかとかきいだき、一生二世の力をはり、ゑいやつとあげ給へど、いつかな〳〵うごかねば、こは色えらずのとらが石、人の云とはかはりしと、あさけり笑てのき給へば三重うごくとみへしかば「ふしぎやな、此石くだけて內よりも、くものごとくのきのたちて、虎ごぜあらはれたはれめに、誠なしとおぼすとも、それは君によつてのこと、ひんなるそがに身をまかせ、鎌倉ぶしのさま〴〵に、引手にいらぬ心中の、かたきが成て虎が石、いかで男のよしあしに、あがるへだての口のさが、誠と思ひかたがたの、男じまんにあげ給へば、たれにもたやすくあがれども、わざとじつのかたき事、みせ參らせて候なり、かくていせつを守る德、天につうじてうたかたの、流のつみはあわときへ、仙女と成て此石中の、仙境にたのしみすんで年久し、我すむ色の世かいこそ、女仙のすみか色えゆ行、よく〳〵尋ねとひ給へ、いざ石中へ伴はん、いらせ給へとすゝむれば、さへもんは有がたし、えかしわづかの此石に、仙境有とは心へず、とらごぜ笑て、おろかの人の詞かな、ひてう坊と云仙は、こしにわづかのつぼをさけ、休む時には是に入ル、內にめでたき國土有、宮女百官かしづきて、無量のたのしみきはむとかや、商山の四かうは、猶もちいさき橘に、すみか有て身を休んず、わづかの蝸牛の角にさへ、王こう國を諍ふ物、ましてや是は大石なり、全く我をうたがはず、いらせ給へと立よりて、うちわをかざしすゝむれば、疑ひながら人々は、此石にのぞまれしに、大道ひらけて、やす〳〵と、一つの世界に出給ふは三重ふしぎなりける「えたいなり、よく〳〵みれば、前にはえすいの流川波二上りのばち音をえらべ、うしろにはまゆの山えめるめもとの月をみせ、十八公の松風は、ことの色ねをきんじつゝ、すいせう金銀のいさごちにみ

ち、みどりのこだちうつくしき、櫻色や、もゝのこび、ねぶれるすがたかいどうげ、ふやうのまなじりたんくわの口、びやうの柳風流の、品やかなりし、ふり迄も、誠に仙女のすみかやと心も、うはのそらたきの、ほのめく風にたなびきし、宮殿の其内に、こや天人のやうがうかと、思ふ計りにあて成人、あられたばしる白かねの、鉢に色よき桃をつみ、光次に打向ひ、自からは玄ろめとて、ながれ拙き身なりしが、源氏なじみのつくしがた、下り給ひしかなしさに、命だに心にかなふ物ならば、何か別れのかなしからましと、一首の歌をよみけるに、かたじけなくも延喜てい、貫之にみことのり、古今和歌集別れの部、第廿三首めに、入させ給ひたりければ、其悦びも身にあまり、一念はごどうして、今仙術の德をへて、西王母がでんにいる、術のふしぎを見給へと、うちわを取てざえたりし、左右をまねきたりければ、天井柱おばしきに、桃花一どに咲みだれ、其身は花の下かげに、かくるゝとみれば忽に、くも霧に紛れ失にけり、跡ふりかへり見あぐるに、こがねのかうざんがゝとして、五色に、おつるたきのいと、たへずとう〳〵打よする、波まをみれば、光りさし、こんじきのこいにのり、あてやかなりし女郎の三重顯れいでゝ打向ひ、自からは、宮木とて今仙、境にいたりつゝ、名もかゝやけるきんかうの、術を學びて明くれに、こいにじやうじて波まをわけ、みづにうかみてあそぶ事、是せいしんを清むるため、色と云事は、おうぎ有それ、傾城と云詞、かんのりゑんが妹、ふでいにつかへ有けるを、ほつほうにかじんのかほよき有、よにたへにして獨たてり、一たびかへりみれば、人の城を傾け、ふたゝびかへりみれば、人の國を傾くと、書し文よりことおこり、王かうの思ひ人、だつきほうじぐしせいし、きひのたぐひを云詞、我てうにては、一ばんの、島のせんさい、わかのまへ、白きすいかん立るばし、さやまきの太刀をさし、まひけるゆへに白拍子、男舞共云けらし、其後に室の君江口の、色の舟による、客をなぐさめたりけるを、流の君と申又、ながれを立ると云詞、此時よりぞ始まれり、さいぜんまみへし虎御前、頃ほひ名有ル少將や、きせ川のかめつるを、遊君となづけ今は又、ゆふ女となべて云ぞとよ、我たつさへし一くは

んは、男女のわけの品定め、是をつたへてまいらする、いとま申といふ波に、あそぶとみへしがくも霧や、まぼろしのごとく仙境の、かたちはきへて行こふる、おちこち人の大磯に、ぼうせんとして人々は、天晴きいの事共と、かの一巻を取持て、あづまをさしてぞ下られける、誠にきたいの次第やと、貴賤上下押なべて、みなかんせぬ、者社なかりけれ

## 第五

「露左衛門光次は、はる〳〵むさしに下りつゝ、遊里に行て紫に、一ざの事を云入しに、宿やのてい主立出て、紫は此間、勤を引てかめいどの、天神宮に閉こもり、色里源氏と云さうし、つゞり有由聞やいな、おぐら一人御供にて、カゝル人めを深く忍ぶ笠三重かめいどさしてぞ「まいらるゝ、名たかきあづまのわけの里、三浦が松の色つかさ、其名たかをのくれないの、あけをうばへるせんせいの、小むらさきと申せしは、たゞに風俗せんけんたるのみにあらず、情の道もゑんにして、わか文ゑやうのうるはしさ、濡にそみこむ、水ぐきや、糸竹茶のゆゑうきく迄、ふうがなりけるびくんにて、戀ゑたはぬはなかりけり、つたへきく式部の君、其名も高き石山の、觀世音にきせいして、佛前に閉こもり、般若のれうしを申請、天だいゑくわんをやはらげ、源氏一部に書つゞり、末代の地の色の、男女の情の手本となる、おゝけなけれど自らも、ゆかりといはん紫の、色里げんじと名づけつゝ、諸國の遊君大かたの、誠有けるもしほ草、書あつめつゝ行末の、流の女の鏡共、なさばやなどゝ思ひいれ、かぶんに尊きかめいどの、天神へきせいして、れんがざしきに引こもり、さうしの趣向あんじつゝ、硯の海にかげうかぶ、こゝにはかたのつゆざゑもん、此天神へさんけいし、紫とゑにしの事、深くちかひてこもりたる、ひとまの便を求んと、ゑばしたたずみくはいろうの、ゑまを詠めてめぐらるゝ、先正めんの右のゑは春のていかと、打みへて、やよいなかばの八ゑがすみ、吉のかめ山、あらしにも、增る上のゝ花さかり、このまかのまの紋つくし、色をみよとや小袖まく、戀と花とにうかれ人、ことさみせんに浮世ふし、びんがあさむく一こ

へは、山ぢのせきか行やらぬ、松原こへておどるふり、ゑのぶにあかぬ、色の笠、けにゑのはずのふうけいは、都も爭かゝる興、又なき春とぞ見えにける、扨正めんの、左りのゑは、夏のけしきとうちみへて、たへぬあつさに皆人の、數のゆふせんさほさして、夕べすゞしきあさくさの、ながれにごらぬすみだ川、芝の野飼の牛御前、つばなほにでしあさぢ原、里のかへりをまつち山、いそいで通るこまかたに、あそびてさがる舟もあり、はや夕鹽もみつまたや、兩國川のふねの火は、あまつ星共、みへつゞき、ふくるよわすれあかせしてい、四條のすゝみと申とも、かかる夏には、まさるべし共思はれず、又くはいらうの右のかた、秋の興かとうちみへて、大内やぢ里のほかの、むさしまで、月見のゆふのさま〴〵に、わきてけしきは色里の、折にひけこや金銀に、光りかゝやく盃の、だいにびけいのつくり物、なじみ〳〵のおくりとて、深きなさけをくみかはす、あげや宿やの大よせに、うつはつゆやらきやら岩ややら、こなたのひだりの、くはいろうは、よものけしきも冬かれて、あらしこがらし村時雨、棟ゑろ〳〵とあづまやに、おく霜月のかほみせと、貴賤くんじゆに境町、せいろうの山高く、都なにはの下り子の、紋のゑきせのはやしかた、はゝをみせばのふりだしは、かぶのぼざつの、やうかうも、外にはあらじ、江戸の四き、みな人色の、たのしみは、いこくにもなきやまとゑし、興をつくしてかいたるは、詠にあかぬけしきなり、深き硯の海山に、きつかれければ小紫、かたへのこきうさみせんを、二人のかぶろに、あやどらせ、其身はことのねもたへに、曲はさま〴〵をけれど、かいてが女郎を忍ぶかさ、女郎は客をまつよいの、まがきのゑゝと、云ふ曲をゑばしが程こそゑらべけれ、つゆは思ひもよらざりし、れんがざしきの内にして、いとやごとなきけんがのこへ、やうやうとしてみゝにたへ、是や尋る紫か、こもりしかたかとゆかしくて、きく程尚もかんにたへ、かく迄そろふ、みつの糸、竹のなきこそほいなけれ、何がし是にて、一よ切を合せんずに若もとがむる、物ならば、それを便にとひよるべしとおぼし召、右のたもとの内よりも、ひとよ切を、取出し中通しにて、つゆをとり、歌口ゑめしねもたへに、ゑばしが程こそ

ふかれけれ、紫つく〳〵是をきゝ、こは珍らしき一よ切、か程に色ねをふく人は、當時あづまに覺なし、聞ははる〳〵都より、盃さしゝ大臣の、下らせ給ふと云さた有り、いまだ御げんにいらざれば、さだかにそれとゑりがたし、御名を聞もぐちなれば、此程出し色げんじの、文にことよせあの君の、出立を見立つゝ、あまたの女郎の名によそへ、さはりてみんと思ひ寄、二人のかぶろにさゝやきて、かやうかやうと有ければ、こはおもしろしと手を打て、か程の女郎の名の内に、あのかた樣の逢給ふ、なじみの色の候はゞ、定てとがめ給ふべし、其時こそは便ぞと、二人のかぶろ立上り、ぞくをはなれし、ほめ詞、三すじの糸に引ゑらべ三重色ねやさしき三重「こへあけて、比はめでたきおゝんみよ、つゆの大ゑん光次とて、京大坂のわけの里、六十女郎なづませし、若大ゑんの御すがた、筆にかく共及ばし、ひすいのたてがみゑゆすのびん、したにはやしほのもみのむく、うへは、やまとのゑやれがきに、高をのもみぢ打ちらし、すそは三河の八橋の、澤べに匂ふかきつばた、色も一ゑほ小むらさき、いつもときわの松がへを、はゝ一はいにぬふたりし、かく山の大もんに、小ざつまをりのくけ帶を、ゑやんとむすんでしづ崎や、花崎若松ちらしたる、初花そめのあけのうら、敷嶋はをりに夕霧や、ほうわうぬふてくけ紐ゑめ、關の吉清が打たりし、岩ほくだきの細こしらへ、頭はくもいに名月の、うすぐもわけて出るてい、ふちはなるとにたつ波の、さつと打たる岩崎や、まづきに匂ふ初ぎくを、ゆふゑよがほりし細めぬき、いとしほらしき藤波打、ひしをやさしふまきにけり、うらおもてなき柏木に、わしをほりたるつばを打、さやは吉のゝさくら木の、いろうつくしき花ぬりに、かすみ立たるかすがのゝ、花むらさきの細さげを、戀をおもてに當世の、淺ぎどんすの紋はかま、けまわしゆふにきこなして、かりにきにしをふてう笠、かよふうき名も高橋や、君にあふよはくるゝまを、ちさとゝこゝろせきゑうの、あふぎのゑさゑ、わけすがた、色のゑいぐわの君なれば、光る源氏と申なりと、しばしが程こそかなでけれ、つゆ大臣は小倉を召、歌人はいながら名所をゑる、あづまに名をゑし紫が、某諸國のわけの里、逢し女郎趣向して、色里源

氏を書けるが、只今ふきける一よ切、我ぞと知てわざとかく、糸に合し一節は、疑ひもなき尋る方、是を持行色もかも、御知人をあないにて、是迄參候と、申入よと都迄、送りし名香渡さるゝ、小ぐら請取かしこに行、あないをこふてかぶろにあひ、右の次第を云聞せ、名香を渡しける、かぶろは内に立入て、かくと申せば紫は、是は自らおくりし香、扨はすいせしつゆ樣なり、それこなたへと、さへもんは頓てうちにそ「入給ひ、たがいに名をへし、色姿、あづまの、花とつくしの月、ゑばし詠てことばなし、かゝる所へ島原に、增りてふうの吉原や、三浦の松の名にしあふ、こうし尋ね打つれて、御見廻とて入ければ、小紫は驚き、こは思はざる御出の、いぶかしさよと有ければ、實御ふゑんは御理り、承れば鎌倉の、江の島の辨才天、開帳とて遠國や、江戸中こぞつて參詣なす、男女のゑんをむすぶの神、ふうきに守らせ給ふとかや、光次樣の御こしを、幸と願ひしに、芳順へ其よしを、仰られ候へば、芳順よりいとまたび、是迄參さふらふなり、紫樣にも打つれだち、御こしあれとすゝむれば、紫斜に悦びて、然らば我身も御供せん、ゑかしくるわの名殘の花、里へ御こしあれよりして、御立出と云詞に、それこそよろしいざさらば、かねて用意の色大名、其行列はいかゞぞや、先はてうしをはさみ箱、ついのどうぐはむすびふみ、鳥げのやりは、むさしのゝ、月を出せる三方に、金銀のつゆ付し、すゝきをはつとさしみだし、戀風になびかせて、御供揃の女郎達、大紋當世あづま出〻ヤ三重行れつそろへて「押いだす、よにもまれなる風流やと、貴賤女郎押なべて、皆かんぜぬ、者社なかりけれ、

## 第六

「其後、はかたのさへもん光次は、かめいどの天神にて、小紫に馴染て夫よりも、三浦が内に御入有、日々やゝの遊興に、とかく過させ給ふ内、初きくもむかへ取、又長崎へも飛脚をたて、いこくわこくを呼よせて、あそびつくしの古里に、伴ひ下りそのかみの、光ル源氏の榮花の色、よまちにわけし、四きのつぼ、まなんで我も局をたて、四方に、君をわけ置

て、樂を遊んと、芳順に暇を乞、思ひ立日を吉日に、あづまを立せ給はん由、其用意をなし給ふが、此程名にあふ鎌倉に、江の島の辨天の、御開帳と聞給ひ、いつく島竹生島、此江の島は日の本に、三たいいつちの辨才天、我ゑん〳〵の御神也、殊に此たびたいせつの、なんぎをたすけ給はりし、有がたきに參詣し、隨分力の及ぶ程、御きゑんをいたさんと、人々を伴ひて三重江の島さしてぞ「參らるゝ、まれなるときを江の島の、御かいてうと、聞やこの、おちこちとひのつとひきて、きせんくんじゆはをびたゞし、人々も參詣有、金銀卷物樣々を、御奉納あそばして、ゑん〳〵深くはいしつゝ、有しなんぎの御たすけ、有がたかりし事共を、申させ給ひ尙行末、守らせ給へときせいして、岩やを出て下向の道、よもを詠めて人々は、ゑはしやすらひたまひける、かゝる所に、さもすさまじき大男、三所閉のいぬき笠、大脇指の一つさし、くはんくはつ成〻出立にて、おとらぬつれもあみ笠にて、參詣の大せいを、つきのけはりわけ、傍若無人を振舞て、此所に來りしが、人々を見るよりも、先に立たる大男、天晴かゝる天の網、絕體絕命只今なり、やあ己等、定て我をは見ゑるまじと、あみ笠つかんでなけ捨、我こそ鰐の大八ぞ、かくごせよと云こへに、つれの者共一同に、刀に手を懸つめかくる、貫藏團六みるよりも、是は過にし盜人の、ずいわうが一子よな、推參なる奴原と、先人人をかこいつゝ、供の奴原追ちらし、大八に渡りあひゝヤ三重火花をちらして「戰ひける、大八もとより太刀の早わざにて、ことに太刀打達者なり、貫藏團六今ははや既に危くみへける時、けしたるれいじん顯れ出、飛かゝつて大八を引たふし、上につゝ立はたらかせず、せいざい〳〵光次、我は是、辨財天のけんぞく、此なんをすくへとの、神勅により顯れたり、いかに大八、己が親のずいわうは、大惡不道の曲者ゆへ、忝も辨天の、かごの鉾のやいばにふす、何條親の敵とは己も只今ばつせんが、つねに辨天ゑんずるゆへ、一先命はたすけおく、此後は野心を捨、光次につかへんや、いかに〳〵と押付れば、大ばんじやくのごとくにて、眼もぬくる計りなり、大八心をひるがへし、すは八まんも御ゑやうらん、やゑんを今よりひるがへし、つゆ大じんゑみやつかへ、申

べしと云ければ、れい神は聞召、能哉々々此上は、隨分忠功つくすべし、光次にも是よりは、深くめぐみてゐさすべし、尚々行末守らんと、云こへ波にひびき渡つて、光りを放ち失給ふ、人々はつと伏拜み、本國つくしにかへりつゝ、ふつきにさかへ給ひけり、千秋万歳めでたしと、貴賤上下押なべて、皆仰がぬ者社無けれ

博多露左衛門色傳授終

新群書類從第五終

黒川眞道
米光關月
校

明治三十九年十二月二十日印刷
明治三十九年十二月廿五日發行

非賣品

編輯兼發行者
東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
國書刊行會代表者
市島謙吉

印刷者
東京市京橋區新榮町五丁目三番地
本間季男

印刷所
東京市京橋區新榮町五丁目三番地
內外印刷株式會社分工場

岡本製